

吾輩は猫である

夏目漱石

【テキスト中に現れる記号について】

：ルビ

（例）吾輩わがはいは猫である

：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）一番どうあく癡悪な種族であつた

：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、 J I S X 0 2 1 3 の面区点番

号または U n i c o d e、底本のページと行数）

（例） 謹

□：アクセント分解された欧文をかこむ

（例）〔 Q u i d a l i u d e s t m u l i

ernisiamici tia e& in im
ica

アクセント分解についての詳細は下記URLを参照
してください

http://www.aozora.gr.jp
/accent_separation.html

吾輩^{わがはい}は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとうと見当^{けんとう}がつかぬ。何でも薄暗

いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番^{どうあく}寧惡な種族であつたそうだ。この書生というのは時々我々を^{つかま}捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の^{てのひら}掌に載せられてス

ーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあ
ったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の
顔を見たのがいわゆる人間というものの見始みはじめであろ
う。この時妙なものだと思つた感じが今でも残つて
いる。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつる
つるしてまるで薬缶やかんだ。その後猫こにもだいぶ逢あつた
がこんな片輪かたわには一度も出で会くわした事がない。のみ

ならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ふうふうと煙けむりを吹く。どうも咽むせぼくて実に弱った。これが人間の飲む煙草たばこというものである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の裏うちでしばらくはよい心持に坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが

無暗むやみに眼が廻る。胸が悪くなる。到底とうてい助からないと

思っている、どさりと音がして眼から火が出た。

それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら
考え出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんお

った兄弟が一疋びきも見えぬ。肝心かんじんの母親さえ姿を隠し

てしまった。その上いま今までの所とは違って無暗むやみに明

るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも
容子ようすがおかしいと、のそのそ這はい出して見ると非常
に痛い。吾輩は藁わらの上から急に笹原の中へ棄てられ
たのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな
池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよかろ
うと考えて見た。別にこれという分別ふんべつも出ない。し

ばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと
考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやって見たが
誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つ
て日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きた
くても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食^く
物の^{もの}ある所まであるこうと決心をしてそろりそろり
と池を^{ひだ}左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そ

こを我慢して無理やりに這^はつて行くとようやくの事

で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這^{はい}入ったら、

どうにかなると思つて竹垣の崩^{くず}れた穴から、とある

邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこ

の竹垣が破れていなかつたなら、吾輩はついに路傍^{ろぼう}

に餓^が死^ししたかも知れのである。一樹の蔭とはよく

云^いつたものだ。この垣根の穴は今日^{こんにち}に至るまで吾輩

が隣家となりの三毛を訪問する時の通路になっている。さ

やしき

て邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善い

か分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さ

は寒し、雨が降って来るといふ始末でもう一刻の猶ゆ

うよ

予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明る

くて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考

えるとその時はすでに家の内に這入っておつたのだ。

ここで吾輩は彼かの書生以外の人間を再び見るべき機そうぐう会に遭遇したのである。

第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋くびすじをつかんで表へ抛ほうり出した。

いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙すきを見て

台所へ這はい上あがった。すると間もなくまた投げ出され

た。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては

投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを

記憶している。その時におさんと云う者はつくづく

いやになった。この間おさんの三馬さんまを偷ぬすんでこの返

報をしてやってから、やっと胸の痞つかえが下りた。吾輩

が最後につまみ出されようとしたときに、この家うちの

主人が騒々しい何だといいいながら出て来た。下女は

吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの宿^{やど}なしの小

猫がいくら出しても出しても御台所^{おだいどころ}へ上^{あが}つて来て困

りますという。主人は鼻の下の黒い毛を撚^{ひね}りながら

吾輩の顔をしばらく眺^{なが}めておったが、やがてそんな

ら内へ置いてやれといったまま奥へ這^{はい}入^いってしまっ

た。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口^く

惜^やしそうに吾輩を台所へ抛^{ほう}り出した。かくして吾輩はついにこの家^{うち}を自分の住家^{すみか}と極^きめる事にしたのである。

吾輩の主人は滅^め多^{った}に吾輩と顔を合せる事がない。

職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家である

かのごとく見せている。しかし実際はうちのものが
いうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼
の書齋を覗のぞいて見るが、彼はよく昼寝ひるねをしている事
がある。時々読みかけてある本の上に涎よだれをたらして
いる。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色たんこうしよくを帯びて弾力の
ない不活澆ふかつぱつな徴候をあらわしている。その癖に大飯
を食う。大飯を食った後あとでタカジヤスターゼを飲む。

飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽らくなものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はないと。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはないそうで彼は友達が

来る度たびに何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のも
のにははなはだ不人望であつた。どこへ行つても跳は
ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに
珍重されなかつたかは、今日こんにちに至るまで名前さえつ
けてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、
出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍そばにいる事

をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝ひざ

の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその背せ中に

乗る。これはあながち主人が好きという訳ではない

が別に構い手がなかったからやむを得るのである。

その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃めしびつの上、夜は炬燵こたつ

の上、天気の良い昼は椽側えんがわへ寝る事とした。しかし

一番心持の好いのは夜よに入いつてここのうちの小供の

寢床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入はいつて一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己おのれを容いるべき余地を見出みいだしてどうにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒さますが最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質たちがわるい——猫が来た猫が来たといつて夜

中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだつてなどは物指ものさしで尻しりぺたをひどく叩たたかれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればするほど、彼等是我儘わがままなものだと断言せざるを得ないようになつた。ことに吾輩が時々同衾どうきんする小供のごときに至

つては言語同断である。自分の勝手な時は人を逆さ

にしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したたり、へ、

つついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で

少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追

い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を

磨いだら細君が非常に怒ってそれから容易に座敷へ

入れない。台所の板の間で他が顫えていても一向平

気なものである。吾輩の尊敬する筋向すじむこうの白君などは

逢あう度毎たびごとに人間ほど不人情なものはないと言ってお

らるる。白君は先日玉のような子猫を四足産うまれた

のである。ところがそこの家うちの書生が三日目にそい

つを裏の池へ持って行つて四足ながら棄てて来たそ

うだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、

どうしても我等猫族ねこぞくが親子の愛を完まったくして美しい家

族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつとももの議論と思う。また隣りの三毛君^{みけ}などは人間が所有権という事を解していないといつて大に憤慨^{おおい}している。元来我々同族間では目刺^{めざし}の頭でも鰯^{ぼら}の臍^{へそ}でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなっている。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善^よいく

らしいものだ。しかるに彼等人間は毫もこの觀念が

ないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のた

めに掠奪せらるるのである。彼等はその強力を頼ん

りやくだつ

で正当に吾人が食い得べきものを奪つてすましてい

うば

る。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持

っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こん

な事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただ

その日その日がどうにかこうにか送られればよい。

いくら人間だつて、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したからちよつと吾輩の家の主人が

わがまま

この我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といつて人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書

をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいいたり、時によると弓に凝こったり、謡うたいを習ったり、またあるときはヴァイオリンなどをブー
ブー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やり出すと胃弱の癖
にいやに熱心だ。後架こうかの中で謡をうたつて、近所で
後架先生と渾名あだなをつけられているにも関せず一向平いっこう

気なもので、やはりこれは平の宗盛たいらむねもりにて候そうろうを繰返し

ている。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいであ

る。この主人がどういう考になつたものか吾輩の住

み込んでから一月ばかり後ののちある月の月給日に、大

きな包みを提さげてあわただしく歸つて来た。何を買

つて来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマン

という紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心

と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書斎で昼寝もしないで絵ばかりかいている。

しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり甘くない

うま

と思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に下の^{しも}のような話をしてゐるのを聞いた。

「どうも甘くうまかけないものだね。人のを見ると何で

もないようだが自ら筆をとって見ると今更いまさらのように

むずかしく感ずる」これは主人の述懐じゅつかいである。なる

ほど詐いつわりのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡めがね越に主人

の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけない

さ、第一室内の想像ばかりで画えがかける訳のもので

はない。昔むかし以太利イタリーの大家アンドレア・デル・サル

トが言つた事がある。画をかくなら何でも自然その

物を写せ。天に星辰せいしんあり。地に露華ろかあり。飛ぶに禽とり

あり。走るに獸けものあり。池に金魚あり。枯木こぼくに寒鴉かんああ

り。自然はこれ一幅の大活画だいかつがなりと。どうだ君も画

らしい画をかこうと思ふならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつ

た事があるかい。ちつとも知らなかった。なるほど

こりやもつともだ。実にその通りだ」と主人は無暗^{むやみ}に感心している。金縁の裏には嘲^{あざ}けるような笑^{わらい}が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく椽側^{えんがわ}に出て心持善く昼^ひ寝^るをしていたら、主人が例になく書斎から出て来て
吾輩の後ろ^{うし}で何かしきりにやっている。ふと眼が覚^さ
めて何をしているかと一分^{いちぶ}ばかり細目に眼をあけて

見ると、彼は余念もなくアンドレア・デル・サルトを極^きめ込んでゐる。吾輩はこの有様を見て覚えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に擲^や擧^ゆせられたる結果としてまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。吾輩はすでに十分寝^{じゆうぶん}た。欠^{あく}伸^びがしたくてたまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を執^とつてゐるのを動いては氣の毒だと思つて、じつと辛^{しん}

ほう

棒しておった。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔の

あたりを色彩いろどっている。吾輩は白白する。吾輩は猫

として決して上乘の出来ではない。背といい毛並と

いい顔の造作といいあえて他の猫に勝るとは決してまさ

思っておらん。しかしいくら不器量の吾輩でも、今

吾輩の主人に描き出されつつあるような妙な姿とは、えが

どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は波斯ペルシヤ

産さんの猫のごとく黄を含める淡灰色に漆うるしのごとき斑入ふいりの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ褐色とびいろでもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。も

つともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから盲猫めくらだか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでもこれではしようがないと思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。なるべくなら動かずにおってやりた
いと思ったが、さつきから小便が催うみしている。

内うちの筋肉はむずむずする。最早もはや一分も猶予ゆうよが出来ぬ

仕儀しぎとなつたから、やむをえず失敬して両足を前へ

存分じぶんのして、首を低く押し出してあゝあと大だいなる欠

伸をした。さてこうなつて見ると、もうおとなしく

していても仕方がない。どうせ主人の予定は打ち壊ぶこ

わしたのだから、ついでに裏へ行つて用を足たそうと

思つてのそのそ這い出した。すると主人は失望と怒

りを搔き交ぜたような声をして、座敷の中から「こ

の馬鹿野郎」と怒鳴った。この主人は人を罵るとき

は必ず馬鹿野郎というのが癖である。ほかに悪口の

言いようを知らないのだから仕方がないが、今まで

辛棒した人の気も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼わ

りは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乗

る時に少しは好い顔でもするならこの漫罵も甘んじ

て受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快くしてくれ
た事もないのに、小便に立ったのを馬鹿野郎とは酷い。
ひど元来人間というものは自己の力量に慢じてみんな増長
している。少し人間より強いものが出て来て窘めてやらな
いじくてはこの先どこまで増長するか分らない。

わがまま我儘もこのくらいなら我慢するが吾輩は人間の不

徳についてこれよりも数倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの茶園ちやえんがある。広くは

ないが瀟洒さつぱりとした心持ち好く日の当る所あただ。うちの

小供があまり騒いで楽々昼寝の出来ない時や、あま

り退屈で腹加減のよくない折などは、吾輩はいつで

もここへ出て浩然こうぜんの気を養うのが例である。ある小

春の穏かな日の二時頃であつたが、吾輩は昼飯後快

ちゆうはんご

よく一睡した後、のち運動かたがたこの茶園へと歩ほを運

ばした。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の

杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に

大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づく

のも一向心付かざるごとく、いっこうまた心付くも無頓着な

るごとく、大きな鼾いびきをして長々と体を横よこたえて眠つて

いる。他の庭内に忍び入りたるものがかくまで平氣

ねむ

に睡られるものかと、吾輩は窃かにその大胆なる度

ひそ

胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黒猫である。

ご

わずかに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の

な

皮膚の上に抛げかけて、きらきらする柔毛の間より

にこげ

眼に見えぬ炎でも燃え出ずるように思われた。彼は

猫中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有し

ている。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞の念

と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立ちよりつして余念

もなく眺ながめていると、静かなる小春の風が、杉垣の

上から出たる梧桐ごとうの枝を軽く誘かろつてばらばらと二三

枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はかつとその真まん

丸まるの眼を開いた。今でも記憶している。その眼は人

間の珍重する琥珀こはくというものよりも遙はるかに美しく輝

いていた。彼は身動きもしない。双眸そうぼうの奥から射る

ごとき光を吾輩の矮小わいしょうなる額ひたいの上にあつめて、御め、

えは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑いや

しいと思つたが何しろその声の底に犬をも挫ひしぐべ

き力が籠こもつていたので吾輩は少なからず恐れを抱いだい

た。しかし挨拶あいさつをしないと險吞けんのんだと思つたから「吾

輩は猫である。名前はまだない」となるべく平氣を

装よそおつて冷然と答えた。しかしこの時吾輩の心臓はた

しかに平時よりも烈しく鼓動しておった。彼は大におおい

軽蔑けいべつせる調子で「何、猫だ？　猫が聞いてあきれら

あ。全ぜんてえどこに住んでるんだ」随分傍若無人ぼうじやくぶじんであ

る。「吾輩はここの教師の家うちにいるのだ」「どうせ

そんな事だろうと思つた。いやに瘠やせてるじゃねえ

か」と大王だけに気焰きえんを吹きかける。言葉付から察

するとどうも良家の猫とも思われない。しかしその

あぶらぎ

膏切あぶらぎつて肥満しているところを見ると御馳走を食っ

てるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は「そ

う云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかった。

「己おれあ車屋くるの黒くろよ」昂然こうぜんたるものだ。車屋の黒は

この近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋

だけに強いばかりでちつとも教育がないからあまり

誰も交際しない。同盟敬遠主義の^ま的になつてゐる奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々^{けいぶ}輕侮の念も生じたのである。吾輩はまず彼がどのくらい無学であるかを^{ため}試してみようと思つて左^さの問答をして見た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに^{きま}極つていらあな。御^ごめ^めえ^えの^うち^ち、

の主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに大分強^{だいぶ}そうだ。車屋にいと

御馳走^{ごちそう}が食えろと見えるね」

「何^なにおれ^あなんざ、どこの国へ行つたつて食い物に

不自由はしねえつもりだ。御めえ^{おれ}なんかも茶^ち畠^{やば}ばか

りぐるぐる廻^{まわ}つていねえで、ちつと己^{おれ}の後^{あと}へくつ付

いて来て見ねえ。一と月とたたねえうちに見違える

ように太れるぜ」

「追つてそう願う事にしよう。しかし家は教師の方
が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

べらぼう

「笹棒め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足し
になるもんか」

おおい

かんしやく

さわ

彼は、大に肝癰に障つた様子で、寒竹をそいだよう

かんちく

な耳をしきりとぴく付かせてあららかに立ち去つた。

吾輩が車屋の黒と知己ちぎになつたのはこれからである。

その後吾輩は度々たびたび黒と邂逅かいこうする。邂逅する毎ごとに彼

は車屋相当の気焰きえんを吐く。先に吾輩が耳にしたとい

う不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい茶壺ちやばたけの中で寝ね

転ころびながらいろいろ雑談をしていると、彼はいつも

じまんばな

の自慢話をさも新しそうに繰り返したあとで、吾

輩に向つて下しものごとく質問した。「御めえは今まで

に鼠を何匹とつた事がある」智識は黒よりも余程発

達しているつもりだが腕力と勇氣とに至つては到底とうてい

黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、こ

の問に接したる時は、さすがに極きまりが善よくはなかつ

た。けれども事實は事實で詐いつわる訳には行かないから、

吾輩は「実はとろうとろうと思つてまだ捕らない」

と答えた。黒は彼の鼻の先からぴんと突張^{つつぱ}っている

長い髭^{ひげ}をびりびりと震^{ふる}わせて非常に笑つた。元来黒

は自慢をする丈^{だけ}にどこか足りないところがあつて、

彼の気焰^{きえん}を感心したように咽喉^{のど}をころころ鳴らして

謹聴していればはなはだ御^{ぎよ}しやすい猫である。吾輩

は彼と近付になつてから直^{すぐ}にこの呼吸を飲み込んだ

からこの場合にもなまじい己おのれを弁護してますます

形勢をわるくするのも愚ぐである、いつその事彼に自

分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若しくはない

と思案を定めさだめた。そこでおとなしく「君などは年が

年であるから大分だいぶんとつたろう」とそそのかして見た。

果然彼は墻壁しょうへきの欠所けつしよに呐喊とっかんして来た。「たんとでも

ねえが三四十はとつたろう」とは得意気なる彼の答

であつた。彼はなお語をつづけて「鼠の百や二百は一人でも引き受けるがいたち、つてえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」

「へえなるほど」と相槌あいづちを打つ。黒は大きな眼をば

ちつかせて云う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭

主が石灰いしばいの袋を持つて椽えんの下へ這はい込んだら御めえ、

大きないたちの野郎が面喰めんくらつて飛び出したと思ひね

え」「ふん」と感心して見せる。「いたち、つてけど

も何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん畜生ちきしょうつて

気で追っかけてとうとう泥溝どぶの中へ追い込んだと思

いねえ」「うまくやったね」と喝采かつさいしてやる。「と

ころが御めえいざつてえ段になると奴め最後さいごつ屁ぺを

こきやがった。臭くせえの臭くねえのつてそれからつて

えものはい、たちを見ると胸が悪くならあ」「彼はここ

に至つてあたかも去年の臭気を今いまなお感ずるごとく

前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も

少々気の毒な感じがする。ちつと景気を付けてやろ

うと思つて「しかし鼠なら君に睨にらまれては百年目だ

ろう。君はあまり鼠を捕とるのが名人で鼠ばかり食う

ものだからそんなに肥つて色つやが善いのだろう」

黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対

の結果を呈出^{ていしゆつ}した。彼は喟然^{きぜん}として大息^{たいそく}していう。

「考^{かん}げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとった

って——一てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえ
ぜ。人のとった鼠をみんな取り上げやがって交番へ

持って行きやあがる。交番じや誰が捕^とったか分らね

えからそのたんびに五錢ずつくれるじゃねえか。う

ちの亭主なんか己^{おれ}の御蔭でもう壹円五十錢くらい儲^{もう}

けていやがる癖に、碌なものを食わせた事もありや

しねえ。おい人間てもものあ体の善い泥棒だぜ」さす

が無学の黒もこのくらいの理窟はわかると見えてす

こぶる怒った容子で背中の毛を逆立てている。吾輩

は少々気味が悪くなつたから善い加減にその場を胡

魔化して家へ歸った。この時から吾輩は決して鼠を

とるまいと決心した。しかし黒の子分になつて鼠以

外の御馳走を^{あさ}獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食うよりも寝ていた方が氣樂でいい。教師の家に^{うち}いると猫も教師のような性質になると見える。要心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といえは吾輩の主人も近頃に至つては到底^{とうてい}水彩画において望^{のぞみ}のない事を悟つたものと見えて十二

月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇と云う人に今日の会で始めて出逢^{であ}った。あの人

は大分放蕩^{だいぶほうとう}をした人だと云うがなるほど通人^{つうじん}らしい

風采^{ふうさい}をしている。こう云う質^{たち}の人は女に好かれるも

のだから〇〇が放蕩をしたと云うよりも放蕩をする
べく余儀なくせられたと云うのが適當であろう。あ

の人の妻君は芸者だそうだ、羨^{うらや}ましい事である。元

来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。また放蕩家をもつて自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやるのである。あたかも吾輩の水彩画に於けるがごときもので、到底卒業する気づかいはない。しかるにも関せず、

自分だけは通人だと思つて済すましている。料理屋の酒

を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るという

論が立つなら、吾輩も一廉ひとかどの水彩画家になり得る理り

窟くつだ。吾輩の水彩画のごときはかかない方がましで

あると同じように、愚昧ぐまいなる通人よりも山出しの大お

野暮おやぼの方が遙はるかに上等だ。

通人つうじんろん論はちよつと首肯しゅこうしかねる。また芸者の妻君

を羨しいなどというところは教師としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自己の水彩画における批評眼だけはたしかなものだ。主人はかくのごとく自知じちの明めいあるにも関せずその自惚うぬぼれ心はなかなか抜けない。中なか二日ふつか置いて十二月四日の日記にこんな事を書いている。

昨夜は僕が水彩画をかいて到底物にならんと思つて、

そこらに抛ほうつて置いたのを誰かが立派な額にして欄ら

間んまに懸かけてくれた夢を見た。さて額になつたところ

を見ると我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。

これなら立派なものだと独ひとりで眺め暮らしていると、

夜が明けて眼が覚さめてやはり元の通り下手である事

が朝日と共に明瞭になつてしまった。

主人は夢の裡^{うち}まで水彩画の未練を背負^{しよ}つてあるいていると見える。これでは水彩画家は無論夫子^{ふうし}の所^{いわ}謂^{ゆる}通人にもなれない質^{たち}だ。

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁眼鏡^{めがね}の美学者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈^{へき}頭^{とう}第一に「画^えはどうかね」と口を切った。主人は平

気な顔をして「君の忠告に従って写生を力^{つと}めているが、なるほど写生をすると今まで気のつかなかった物の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ。

西洋では昔^{むか}しから写生を主張した結果今日^{こんにち}のように

発達したものと思われる。さすがアンドレア・デル

・サルトだ」と日記の事はおく^くび^びにも出さないで、

またアンドレア・デル・サルトに感心する。美学者

は笑いながら「実は君、あれは出鱈目でたらめだよ」と頭を

搔かく。「何が」と主人はまだ謊いつわられた事に気がつ

かない。「何がって君のしきりに感服しているアン

ドレア・デル・サルトさ。あれは僕のちよつと捏造ねつぞう

した話だ。君がそんなに真面目まじめに信じようとは思わ

なかったハハハハ」と大喜悦ていの体である。吾輩は椽

側でこの対話を聞いて彼の今日の日記にはいかなる

事が記しるさるるであろうかと予め想像せざるを得なか

あらかじ

った。この美学者はこんな好いい加減な事を吹き散らし

て人を担かつぐのを唯一の楽たのしみにしている男である。彼は

アンドレア・デル・サルト事件が主人の情線じょうせんにいか

なる響を伝えたかを毫ごうも顧慮せざるもののごとく得

意しよになつて下のような事を饒舌しやべつた。「いや時々冗じよ

談うだんを言まうと人が真まに受けるので大に滑稽おおいこっけいてき的美感を挑ちよ

撥する^{うはつ}のは面白い。せんだつてある学生にニコラス

・ニツクルベーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言つたら、その学生がまた馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であつた。ところ

がその時の傍聴者は約百名ばかりであつたが、皆熱

心にそれを傾聴しておった。それからまだ面白い話がある。せんだって或る文学者のいる席でハリソンの歴史小説セオファーノの話はなしが出たから僕はあれは歴史小説うちの中で白眉はくびである。ことに女主人公が死ぬところは鬼気きき人を襲うようだと評したら、僕の向うに坐っている知らんと云った事のない先生が、そうそうあすこは実に名文だといった。それで僕はこ

の男もやはり僕同様この小説を読んでおらないとい
う事を知った」神経胃弱性の主人は眼を丸くして問
いかけた。「そんな出鱈目でたらめをいってもし相手が読ん
でいたらどうするつもりだ」あたかも人を欺くあざむのは
差支さしつかえない、ただ化ばけの皮かわがあらわれた時は困るじやな
いかと感じたもののごとくである。美学者は少しも
動じない。「なにその時ときや別の本と間違えたとか何

とか云うばかりさ」と云ってけらけら笑っている。

この美学者は金縁の眼鏡は掛けているがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云わんばかりの顔をしている。美学者はそれだから画えをかい

ても駄目だという目付で「しかし冗談じょうだんは冗談だが画

というものは実際むずかしいものだよ、レオナルド

・ダ・ヴィンチは門下生に寺院の壁のしみ、を写せと教えた事があるそうだ。なるほど雪隠せつゐんなどに這入はいつて雨の漏る壁を余念なく眺めていると、なかなかうまい模様画が自然に出来ているぜ。君注意して写生して見給えきつと面白いものが出来るから」「また欺すたまのだろう」「いえこれだけはたしかだよ。実際奇警な語じやないか、ダ・ヴィンチでもいいそうな

事だあね」 「なるほど奇警には相違ないな」と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で写生はせぬようだ。

車屋の黒はその後跛いびつゝいになつた。彼の光沢ある毛は

漸々色だんだんが褪さめて抜けて来る。吾輩が琥珀こはくよりも美し

いと評した彼の眼には眼脂めやにが一杯たまっている。こ

とに著るしく吾輩の注意を惹ひいたのは彼の元氣の消

沈とその体格の悪くなつた事である。吾輩が例の茶ちや

園えんで彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら

「いたちの最後屁と肴屋の天秤棒には懲々だ」とい
つた。

赤松の間に二三段の紅こうを綴つた紅葉こうようは昔むかしの夢の

ごとく散つてつくばいに近く代る代る花卉はなびらをこぼし

た紅白こうはくの山茶花さざんかも残りなく落ち尽した。三間半の南

向の椽側に冬の日脚が早く傾いて木枯こがらしの吹かない日はほとんど稀まれになつてから吾輩の昼寝の時間も狭めせばられたような気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て籠こもる。

人が来ると、教師が厭いやだ厭だという。水彩画も滅多にかかない。タカジヤスターゼも機能がなないといつてやめてしまった。小供は感心に休まないで幼稚園

へかよう。帰ると唱歌を歌つて、毬まりをついて、時々

吾輩を尻尾しっぽでぶら下げる。

吾輩は御馳走ごちそうも食わないから別段肥ふとりもしないが、

まずまず健康で跛びつゝにもならず、その日その日を暮し

ている。鼠は決して取らない。おさんは未いまだに嫌きらい

である。名前はまだつけてくれないが、欲をいって

も際限しょうがいがないから生涯この教師の家うちで無名の猫で終

るつもりだ。

二

吾輩は新年来多少有名になつたので、猫ながらちよつと鼻が高く感ぜらるるの_はありがたい。

元朝早々主人の許_{もと}へ一枚の絵_え端書_{はがき}が来た。これは

彼の交友某画家からの年始状であるが、上部を赤、

下部を深緑^{ふかみど}りで塗って、その真中に一の動物が蹲踞^{うずくま}

っているところをパステルで書いてある。主人は例

の書斎でこの絵を、横から見たり、^{たて} 豎から眺めたり

して、うまい色だなという。すでに一応感服したも

のだから、もうやめにするかと思うとやはり横から

見たり、^ね 豎から見たりしている。からだを拗^ねじ向け

さんぜそう

たり、手を延ばして年寄が三世相を見るようにしたり、または窓の方へむいて鼻の先まで持つて来たりして見ている。早くやめてくれないと膝が揺れて陰けん呑のんでたまらない。ようやくの事で動揺があまり劇はげしくなくなつたと思つたら、小さな声で一体何をかいたのだろうと云いう。主人は絵端書の色には感服したが、かいてある動物の正体が分らぬので、さつきか

ら苦心をしたものと見える。そんな分らぬ絵端書か
と思いながら、寝ていた眼を上品に半ば開いて、落
ちつき払って見ると紛れもない、自分の肖像だ。主
人のようにアンドレア・デル・サルトを極め込んだ
ものでもあるまいが、画家だけに形体も色彩もちや
んと整って出来ている。誰が見たって猫に相違ない。
少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫じやな

い吾輩である事が判然とわかるように立派に描^かいてある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると云う事はよし分らないにしても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。

しかし人間というものは到底吾輩猫^{ねこぞく}属^{とうい}の言語を解し

得るくらいに天の恵めぐみに浴しておらん動物であるから、
残念ながらそのままにしておいた。

ちよつと読者に断っておきたいが、元来人間が何
ぞという猫々と、事もなげに軽侮の口調をもつて
吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間
の糟かすから牛と馬が出来て、牛と馬の糞から猫が製造
されたごとく考えるのは、自分の無智に心付かんで

高慢な顔をする教師などにはありがちの事でもある
うが、はたから見てもあまり見つともいい者じゃない。
いくら猫だって、そう粗末簡便には出来ぬ。よそ目
には一列一体、平等無差別、どの猫も自家固有の特
色などはないようであるが、猫の社会に這入はいって見
るとなかなか複雑なもので十人十色といろという人間界の
語はことばそのままここにも応用が出来るのである。目付

でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違ふ。

^{ひげ}髯の張り具合から耳の立ち^{あんばい}按排、^{しっぽ}尻尾の垂れ加減に

至るまで同じものは一つもない。器量、不器量、好

き嫌い、^{すいぶすい}粹無粹の^{かず}数を^つ悉くして千差万別と云つても

差支えないくらいである。そのように判然たる區別

が存しているにもかかわらず、人間の眼はただ向上

とか何とかいって、空ばかり見ているものだから、

そうぼう

吾輩の性質は無論相貌の末を識別する事すら到底出

来ぬのは気の毒だ。

同類相求むとは昔

むか

しからある語

ことは

だそうだがその通り、

もちや

餅屋は餅屋、

猫は猫で、猫の

事ならやはり猫でなくては分らぬ。いくら人間が発

達したってこればかりは駄目である。いわんや實際

みずか

をいうと彼等が自ら信じているごとくえらくも何と

もないのだからなおさらむずかしい。またいわんや

同情に乏しい吾輩の主人のごときは、相互を残りなく解するというのが愛の第一義であるということすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の悪い牡^か蠣^きのごとく書斎に吸い付いて、かつて外界に向つて口を開いた事がない。^{ひら}それで自分だけはすこぶる達観したような面構^{つらがまえ}をしているのはちよつとおかしい。達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にある

のに少しも悟った様子もなく今年は征露の第二年目だから大方熊の画えだろうなどと気の知れぬことをいってすましているのでもわかる。

吾輩が主人の膝ひざの上で眼をねむりながらかく考え

ていると、やがて下女が第二の絵端書えはがきを持って来た。

見ると活版で舶来ひきの猫が四五疋ひきずらりと行列してペ

ンを握ったり書物を開いたり勉強をしている。その

内の一足は席を離れて机の角で西洋の猫じや猫じや

を躍おどっている。その上に日本の墨で「吾輩は猫であ

る」と黒々とかいて、右の側わきに書を読むや躍おどるや猫

の春はる一日ひとひという俳句さえ認めしたたられてある。これは主

人の旧門下生より来たので誰が見たつて一見して意

味がわかるはずであるのに、迂濶うかつな主人はまだ悟ら

ないと見えて不思議そうに首を捻ひねつて、はてな今年

は猫の年かなと独言ひとりごとを言つた。吾輩がこれほど有名になつたのを未だま気が着かずにいると見える。

ところへ下女がまた第三の端書を持ってくる。今

度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、傍らかたわに乍きよう

恐縮しゆくながらながらの猫へも宜よろしく御伝声奉願上候とある。いか

に迂遠うえんな主人でもこう明らさまに書いてあれば分る

ものと見えてようやく気が付いたようにフンと言ひ

ながら吾輩の顔を見た。その眼付が今までとは違つて多少尊敬の意を含んでゐるように思われた。今ま
で世間から存在を認められなかつた主人が急に一個
の新面目しんめんぽくを施こしたのも、全く吾輩の御蔭だと思え
ばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。

おりから門の格子こうしがチリン、チリン、チリリリリ
ンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下女が取次

さかなや

に出る。吾輩は肴屋の梅公がくる時のほかは出ない事に極^きめているのだから、平気で、もとのごとく主人の膝に坐っておった。すると主人は高利貸にでも飛び込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間もこのくらい偏屈^{へんくつ}になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのにそれ

ほどの勇氣も無い。いよいよ牡蠣の根性をあらわし

かんげつ

ている。しばらくすると下女が来て寒月さんがい

でになりましたという。この寒月という男はやはり

主人の旧門下生であつたそうだが、今では学校を卒

業して、何でも主人より立派になつてゐるといふ話

はな

しである。この男がどういふ訳か、よく主人の所へ

おも

遊びに来る。来ると自分を恋つてゐる女が有りそう

な、無さそうな、世の中が面白そうな、つまらなそうな、凄^{すご}いような艶^{つや}っぽいような文句ばかり並べては帰る。主人のようなしなびかけた人間を求めて、わざわざこんな話しをしに来るのからして合点^{がてん}が行かぬが、あの牡蠣^{かき}的主人^{てき}がそんな談話を聞いて時々相槌^{あいづち}を打つのはなお面白い。

「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮から

大に活動おおいしているものですから、出でよう出ようと思

つても、ついこの方角へ足が向かないので」と羽織

の紐ひもをひねくりながら謎なぞ見たような事をいう。「ど

っちの方角へ足が向くかね」と主人は真面目な顔を

して、黒木綿くろもめんの紋付羽織の袖口そでぐちを引張る。この羽織

は木綿でゆきが短かい、下からべんべら者が左右へ

五分くらいずつはみ出している。「エへへへ少し違

った方角で」と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が一枚欠けている。「君歯をどうかしたかね」と主人は問題を転じた。「ええ実はある所で椎茸しいたけを食いましてね」「何を食ったって?」「その、少し椎茸を食ったんで。椎茸の傘かさを前歯で噛み切ろうとしたらぼろりと歯が欠けましたよ」「椎茸で前歯がかけるなんざ、何だか爺々臭じじいくさいね。俳句にはなるかも知れ

ないが、恋にはならんようだな」と平手で吾輩の頭

を軽く叩く。^{かろ}「ああその猫が例のですか、なかなか

肥ってるじやありませんか、それなら車屋の黒にだ

って負けそうもありませんね、立派なものだ」と寒

月君は大に吾輩を賞^ほめる。^{おおい}「近頃大分^{だいぶん}大きくなつた

のさ」と自慢そうに頭をぽかぽかなぐる。賞められ

たのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよ

いと合奏会をやりましてね」と寒月君はまた話しをもとへ戻す。「どこで」「どこでもそりや御聞きにならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺ちようとピヤノの伴奏でなかなか面白かったです。ヴァイオリンも三挺くらいになると下手でも聞かれるものです。ね。二人は女で私わたしがその中へまじりましたが、自分でも善く弾ひけたと思ひました」「ふん、そしてその

女というのは何者かね」と主人は羨ましうらやそうに問い

かける。元来主人は平常枯木寒巖こぼくかんがんのような顔付はし

ているものの実のところは決して婦人に冷淡な方で

はない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中

にある一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必

ずちよつと惚ほれる。勘定をして見ると往来を通る婦

人の七割弱、には恋着れんちやくするという事が諷刺ふうしてき的に書いて

あつたのを見て、これは真理だと感心したくらいな男である。そんな浮気な男が何故^{なぜ}牡蠣^{なげ}的生涯を送っているかと云うのは吾輩猫などには到底^{とうてい}分らない。

或人は失恋のためだとも云うし、或人は胃弱のせいだとも云うし、また或人は金がなくて臆病な性質^{たち}だからだとも云う。どっちにしたって明治の歴史に係するほどの人物でもないのだから構わない。しか

し寒月君の女連れおんなづを羨ましげ気に尋ねた事だけは事実

である。寒月君は面白そうに口取くちとりの蒲鉾かまぼこを箸で挟ん

で半分前歯で食い切った。吾輩はまた欠けはせぬか

と心配したが今度は大丈夫であつた。「なに二人と

も去さる所の令嬢ですよ、御存じの方かたじやありません」

と余よ所余そ所よしい返事をする。「ナール」と主人は引

張ったが「ほど」を略して考えている。寒月君はも

う善いい加減な時分だと思つたものか「どうも好い天

気ですな、御閑おひまならごいっしよに散歩でもしましよ

うか、旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」

と促うながして見る。主人は旅順の陥落より女連おんなづれの身元

を聞きたいと云う顔で、しばらく考え込んでいたが

ようやく決心をしたものと見えて「それじゃ出ると

しよう」と思い切つて立つ。やはり黒木綿の紋付羽

織に、兄の紀念かたみとかいう二十年来着き古ふるるした結城紬ゆうきつむぎ

の綿入を着たままである。いくら結城紬が丈夫だつ

て、こう着つづけではたまらない。所々が薄くなつ

て日に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が

見える。主人の服装には師走しわすも正月もない。ふだん

着よそも余所ゆきもない。出るときは懷手ふところをしてぶらり

と出る。ほかに着る物がないからか、有つても面倒

だから着換えないのか、吾輩には分らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われぬ。

ふたり
兩人が出て行つたあとで、吾輩はちよつと失敬し

て寒月君の食い切つた蒲鉾かまぼこの残りを頂戴ちやうだいした。吾輩

もこの頃では普通一般の猫ではない。まず桃川如燕ももかわじょえん

以後の猫か、グレーの金魚を偷ぬすんだ猫くらいの資格

は充分あると思う。車屋の黒などは固もとより眼中にな

い。蒲鉾の一切ひときれくらい頂戴したって人からかれこれ

云われる事もなからう。それにこの人目を忍んで間かん

しょく

食をするという癖は、何も吾等猫族に限った事では

ない。うちの御三おさんなどはよく細君の留守中に餅菓子

などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している。

御三ばかりじゃない現に上品な仕付しつけを受けつつある

ふいちよう

こども

と細君から吹聴せられている小児ですらこの傾向が

ある。四五日前のことであつたが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の寝ている間^{むか}に^{むか}対い合^{むか}うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食^{パン}う麵^{パン}麴^{パン}の幾分に、砂糖をつけて食^{パン}うのが例であるが、この日はちようど砂糖壺^{さとうつぼ}が卓^{たく}の上に置かれて匙^{さじ}さえ添えてあつた。いつものように砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中か

ら一匙ひとさじの砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。少しばらく両人りょうにんは睨にらみ合っていたが、大きいのがまた匙をとって一杯をわが皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙をとってわが分量を姉と同一にした。すると姉がまた一杯すくった。

妹も負けずに一杯を附加した。姉がまた壺へ手を懸

ける、妹がまた匙をとる。見ている間に一杯一杯一

杯と重なって、ついには兩人ふたりの皿には山盛の砂糖が

堆うづたかくになって、壺の中には一匙の砂糖も余っておらん

ようになったとき、主人が寝ぼけ眼まなこを擦こすりながら寝

室を出て来てせつかくしやくい出した砂糖を元のご
とく壺の中へ入れてしまった。こんなところを見る

と、人間は利己主義から割り出した公平という念は

猫より優まさっているかも知れぬが、智慧ちえはかえって猫

より劣なっているようだ。そんなに山盛にしないうち

に早く嘗なめてしまえばいいに思つたが、例のごと

く、吾輩の言う事などは通じないのだから、氣の毒

ながら御櫃おはちの上から黙もくって見物けんぶつしていた。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩ある行ゆくいたもの

か、その晩遅く歸かへつて来て、翌日食卓しょくたくに就ついたのは

九時頃であつた。例の御櫃の上から拝見していると、

主人はだまつて雑煮ぞうにを食っている。代えては食い、

代えては食う。餅の切れは小さいが、何でも六切むきれか

ななきれ

七切食つて、最後の一切れを椀の中へ残して、もう

よそうと箸はしを置いた。他人がそんな我儘わがままをすると、

なかなか承知しないのであるが、主人の威光を振り

廻わして得意なる彼は、濁った汁の中に焦こげ爛ただれた

餅の死骸を見て平気ですましている。妻君が袋戸ふくろどの

奥からタカジヤスターゼを出して卓の上に置くと、

主人は「それは利きかないから飲まん」という。「で

もあなた澱粉でんぷん質のものには大變功能があるそうです

から、召し上ったらいいでしよう」と飲ませたがる。

「澱粉だろうが何だろうが駄目だよ」と頑固がんこに出る。

「あなたはほんとに厭あきつぽい」と細君ひとりごとが独言のよ

うにいう。「厭きつぽいのじゃない薬が利かんのだ」

「それだつてせんだつてじゆうは大変によく利くよく利くとおつしやつて毎日毎日上ったじやありませんか」「こないだうち以利いたのだよ、この頃は利かないのだよ」と対句ついくのような返事をする。「そんなに飲んだり止めやたりしちや、いくら功能のある薬でも利く気遣きづかいはありません、もう少し辛防しんぼうがよく

なくつちやあ胃弱なんぞはほかの病氣たあ違つて直らないわねえ」とお盆を持って控えた御三おさんを顧みる。

「それは本当のところでございます。もう少し召し

上つてご覧にならないと、とても善よい薬か悪い薬か

わかりますまい」と御三は一も二もなく細君の肩を

持つ。「何でもいい、飲まんのだから飲まんのだ、

女なんかは何がわかるものか、黙っている」「どう

せ女ですわ」と細君がタカジヤスターゼを主人の前

へ突き付けて是非詰腹つめばらを切らせようとする。主人は

何にも云わず立つて書齋へ這はい入る。細君と御三は顔

を見合せてにやにやと笑う。こんなときに後あとからく

っ付いて行つて膝ひざの上へ乗ると、大変な目に逢あわさ

れるから、そつと庭から廻つて書齋の椽側あがへ上つて

障子の隙すきから覗のぞいて見ると、主人はエピクテタスと

か云う人の本を披ひらいて見ておった。もしそれが平常いつもの通りわかるならちよつとえらいところがある。五六分するとその本を叩たたき付けるように机の上へ抛ほうり出す。大方そんな事だろうと思ひながらなお注意している、今度は日記帳を出して下しものような事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、いけはた神田辺を散歩。へん池の
端の待合の前で芸者が裾模様の春着をきて羽根をつ
いていた。いしやう衣装は美しいが顔はすこぶるまずい。何
となくうちの猫に似ていた。

何も顔のまずい例に特に吾輩を出さなくつても、
よさそうなものだ。きたどこ吾輩だつて喜多床へ行つて顔さ

え剃^すつて貰^{もら}やあ、そんなに人間と異^{ちが}つたところはありやしない。人間はこう自惚^{うぬぼ}れているから困る。

宝丹^{ほうたん}の角^{かど}を曲るとまた一人芸者が来た。これは背^{せい}の

すらりとした撫肩^{なでがた}の恰好^{かつこう}よく出来上った女で、着て

いる薄紫^{きもの}の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。

白い歯を出して笑いながら「源ちゃん^{ゆうべ}昨夕は——つ

い忙がしかつたもんだから」と云つた。ただしその

たびがらす

声は旅鴉のごとく皺しやが枯れておつたので、せつかくの

ふうさい おおい

風采も大に下落したように感ぜられたから、いわゆ

る源ちゃんなるもののいかなる人なるかを振り向い

て見るも面倒になつて、

ふところ

懐手のまま御成道へ出た。

おなりみち

寒月は何となくそわそわしているごとく見えた。

人間の心理ほど解し難いものはない。この主人の

今の心は怒おこっているのだか、浮かれていますのだか、

または哲人の遺書に一道いちどうの慰安を求めつつあるのか、

ちつとも分らない。世の中を冷笑しているのか、世

の中へ交まじりたいたのだか、くだらぬ事に肝癪かんしゃくを起して

いるのか、物外ぶつがいに超然ちょうぜんとしているのだかさっぱり見けん

当とうが付かぬ。猫などはそこへ行くと単純なものだ。

食いたければ食い、寝たければ寝る、怒るときは一

生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に泣く。第一日

記などという無用のものは決してつけない。つける

必要がないからである。主人のように裏表のある人

間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を

暗室内に発揮する必要があるかも知れないが、我等

猫属に至ると行住坐臥、行屎送尿ことごとく真正の

日記であるから、別段そんな面倒な手数てかずをして、己おの

しんめんもく

れの真面目を保存するには及ばぬと思う。日記をつ
けるひまがあるなら椽側に寝ているまでの事さ。

神田の某亭で晚餐ばんさんを食う。久し振りで正宗を二三杯

飲んだら、今朝は胃の具合が大変いい。胃弱には晩
酌が一番だと思う。タカジヤスターゼは無論いかん。

誰が何と云つても駄目だ。どうしたつて利^きかないものは利かないのだ。

無暗^{むやみ}にタカジヤスターゼを攻撃する。独りで喧嘩

をしているようだ。今朝の肝癰がちよつとここへ尾を出す。人間の日記の本色はこう云う辺^{へん}に存するの
かも知れない。

あさめし

せんだって○○は朝飯を廃すると胃がよくなると云

にさんち

うたから二三日朝飯をやめて見たが腹がぐうぐう鳴

るばかりで機能はない。△△は是非香こうの物ものを断たてと

忠告した。彼の説によるとすべて胃病の原因は漬物

にある。漬物さえ断てば胃病の源を涸からす訳だから

本復は疑なしという論法であつた。それから一週間

ばかり香の物に箸はしを触れなかったが別段の験げんも見え

なかったから近頃はまた食い出した。××に聞くと

それは按腹揉療治あんぷくもみりようじに限る。ただし普通のではゆかぬ。

みながわりゆう

皆川流という古流な揉もみ方で一二度やらせれば大抵

の胃病は根治出来る。安井息軒やすいそっけんも大変この按摩術あんまじゆつを

愛していた。さかもとりようま坂本竜馬のような豪傑でも時々は治療

をうけたと云うから、早速上根岸かみねぎしまで出掛けて揉もま

して見た。ところが骨を揉まなければ癒らぬとか、

臓腑の位置を一度顛倒てんとうしなければ根治がしにくいと

かいて、それはそれは残酷な揉み方をやる。後で

身体が綿のようになって昏睡病こんすいびょうにかかったような心

持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君

は是非固形体を食うなという。それから、一日牛乳

ばかり飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼ

りどぼりと音がして大水でも出たように思われて終

夜眠れなかった。B氏は横膈膜おうかくまくで呼吸して内臓を運

動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試

しにやって御覧という。これも多少やったが何とな

く腹中ふくちゅうが不安で困る。それに時々思い出したように

一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れて

しまう。忘れまいとすると横膈膜が気になって本を

読む事も文章をかく事も出来ぬ。美学者の迷亭めいていがこ

の体ていを見て、産気さんけのついた男じやあるまいし止よすが

いいと冷かしたからこの頃は廃よしてしまった。C先

生は蕎麦そばを食ったらよかろうと云うから、早速かけ、

と、もりをかわるがわる食ったが、これは腹くだが下るば

かりで何等の機能もなかった。余は年来の胃弱を直

すために出来得る限りの方法を講じて見たがすべて

駄目である。ただ昨夜ゆうべ寒月と傾けた三杯の正宗はた
しかに利目ききめがある。これから毎晩二三杯ずつ飲む
事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心は
吾輩の眼球めだまのように間断なく変化している。何をや
つても永持ながもちのしない男である。その上日記の上で胃

おおい

病をこんなに心配している癖に、表向は大に瘦我慢

なにがし

をするからおかしい。せんだってその友人で某とい

う学者が尋ねて来て、一種の見地から、すべての病

気は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果にほかならない

だいぶ

と云う議論をした。大分研究したものと見えて、条

めいせき

理が明晰で秩序が整然として立派な説であつた。気

はんばく

の毒ながらうちの主人などは到底これを反駁するほ

どの頭脳も學問もないのである。しかし自分が胃病で苦しんでゐる際ださいから、何とかかんとか弁解をして自己の面目を保とうと思つた者と見えて、「君の説は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」とあたかもカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名譽であると云つたような、見当違いの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人

が必ずカーライルにはなれないさ」と極め付けたのき

で主人は默然もくねんとしていた。かくのごとく虚栄心に富

んでいるものの実際はやはり胃弱でない方がいいと

見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのはちよ

つと滑稽だ。考えて見ると今朝雑煮をぞうにあんなにたく

さん食ったのも昨夜寒月君と正宗をひっくり返したゆうべ

影響かも知れない。吾輩もちよつと雑煮が食って見

たくなつた。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の黒

のように横丁の肴屋さかなやまで遠征をする氣力はないし、

しんみち にげんきん

新道の二絃琴しんみち にげんきんの師匠とこの所の三毛みけのように贅沢ぜいたくは無論

云える身分でない。従つて存外嫌きらいは少ない方だ。小

供の食いこぼした麵麩パンも食うし、餅菓子あんの餡あんもなめ

る。香こうの物ものはすこぶるまずいが経験のため沢庵たくあんを二

切ばかりやった事がある。食つて見ると妙なもので、大抵のものは食える。あれは嫌だ、これは嫌だいやと云うのは贅沢ぜいたくな我儘で到底教師の家うちにいる猫などの口にすべきところでない。主人の話によると仏蘭西フランスにバルザックという小説家があつたそうだ。この男が大の贅沢屋ぜいたくで——もつともこれは口の贅沢屋ではない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事で

ある。バルザックが或る日自分の書いている小説中の人間の名をつけようと思つていろいろつけて見たが、どうしても気に入らない。ところへ友人が遊びに来たのでいっしょに散歩に出掛けた。友人は固^{もと}より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼^かねて自分の苦心している名を目付^{めつけ}ようという考えだから往来へ出ると何もしないで店先の看板ば

かり見て歩^{ある}行^{ある}いている。ところがやはり気に入った

名がない。友人を連れて無暗^{むやみ}にあるく。友人は訳が

わからずにくっ付いて行く。彼等はずいに朝から晩

まで巴理^{パリ}を探険した。その帰りがけにバルザックは

ふとある裁縫屋の看板が目についた。見るとその看

板にマーカスという名がかいてある。バルザックは

手を拍^うって「これだこれだこれに限る。マーカスは

好い名じゃないか。マーカスの上へZという頭文字をつける、すると申し分ぶんのない名が出来る。Zでなくてはいかん。Z . M a r c u s は実にうまい。どうも自分で作った名はうまくつけたつもりでも何となく故意わざとらしいところがあつて面白くない。よ
うやくの事で気に入った名が出来た」と友人の迷惑
はまるで忘れて、一人嬉しがったというが、小説中

の人間の名前をつけるにいちんちパリ一日巴理を探険しなくては

ならぬようでは随分手数てすうのかかる話だ。贅沢もこの

くらい出来れば結構なものだが吾輩のように牡蠣かき的

主人を持つ身の上ではとてもそんな気は出ない。何

でもいい、食べさえすれば、という気になるのも境

遇のしからしむるところであろう。だから今雑煮ぞうにが

食いたくなくなったのも決して贅沢の結果ではない、何

でも食える時に食っておこうという考から、主人の
食い剩あました雑煮がもしや台所に残っていはいはすまいか
と思ひ出したからである。……台所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底
に膠着こうちやくしている。白状するが餅というものは今まで
一辺ぺんも口に入れた事がない。見るとうまさうにもあ
るし、また少しは気味きびがわるくもある。前足で上に

かかっている菜っ葉を搔かき寄せる。爪を見ると餅の

うわかわ

上皮が引き掛つてねばねばする。嗅かいで見ると釜の

おはち

底の飯を御櫃へ移す時のような香においがする。食おうか

な、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か

おさん

誰もいない。御三は暮も春も同じような顔をして羽

根をついている。小供は奥座敷で「何とおっしやる

兎さん」を歌っている。食うとすれば今だ。もしこ

の機をはずすと来年までは餅というものの味を知らず
に暮してしまわねばならぬ。吾輩はこの刹那に猫
ながら一の真理を感得した。「得難き機会はすべて
の動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は
実を云うとそんなに雑煮を食いたくはないのである。
否わんてい碗底の様子を熟視すればするほど気味きびが悪くなつ
て、食うのが厭になったのである。この時もし御三

でも勝手口を開けたなら、奥の小供の足音がこちら

へ近付くのを聞き得たなら、吾輩は惜気おしげもなく椀を

見棄てたろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮

ばなかったろう。ところが誰も来ない、いくら蹢躅ちゆうちよ

していても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催

促されるような心持がする。吾輩は椀の中を覗のぞき込

みながら、早く誰か来てくれればいいと念じた。や

はり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わなければならぬ。最後にからだ全体の重量を椀の底へ落すようにして、あぐりと餅の角を一寸いっすんばかり食い込んだ。このくらい力を込めて食い付いたのだから、大抵なものなら噛かみ切れる訳だが、驚いた！

もうよかろうと思つて歯を引こうとすると引けない。もう一辺ぺん噛み直そうとすると動きがとれない。餅は

魔物だなど瘡^{かん}づいた時はすでに遅かった。沼へでも

落ちた人が足を抜こうと焦^{あせ}慮るたびにぶくぶく深く

沈むように、噛めば噛むほど口が重くなる、歯が動

かなくなる。歯答えはあるが、歯答えがあるだけで

どうしても始末をつける事が出来ない。美学者迷亭

先生がかつて吾輩の主人を評して君は割り切れない

男だといった事があるが、なるほどどうまい事をいつ

たものだ。この餅も主人と同じようにどうしても割り切れない。噛んでも噛んでも、三で十を割るごとく

じんみらいざいかた

尽未来際方ごのつく期はあるまいと思われた。この

はんもん

煩悶はんもんの際吾輩は覚えず第二の真理に逢着ほうちやくした。「す

べての動物は直覺的に事物の適不適を予知す」真理

はすでに二つまで発明したが、餅がくっ付いている

ぞう

ので毫ぞうも愉快を感じない。齒が餅の肉に吸収されて、

抜けるように痛い。早く食い切つて逃げないと御三おさん

が来る。小供の唱歌もやんだようだ、きつと台所へ

馳かけ出して来るに相違ない。煩悶きよくしつぽの極尻尾をぐるぐ

る振つて見たが何等の機能もない、耳を立てたり寝

かしたりしたが駄目である。考えて見ると耳と尻尾しつぽ

は餅と何等の関係もない。要するに振り損の、立て

損の、寝かし損であると気が付いたからやめにした。

ようやくの事これは前足の助けを借りて餅を払い落
すに限ると考え付いた。まず右の方をあげて口の周
囲を撫なで廻す。撫なでたくらいで割り切れる訳のもの
ではない。今度は左ひだりの方を伸のびして口を中心として
急劇に円を劃かくして見る。そんな呪まじないで魔は落ちない。
辛防しんぼうが肝心かんじんだと思つて左右かわ交がわる交がわるに動かしたがや
はり依然として齒は餅の中にぶら下っている。ええ

面倒だと両足を一度に使う。すると不思議な事にこ

あとあし

の時だけは後足二本で立つ事が出来た。何だか猫で

ないような感じがする。猫であろうが、あるまいが

こうなつた日にやあ構うものか、何でも餅の魔が落

ちるまでやるべしという意気込みで無茶苦茶に顔中

引つ搔き廻す。か前足の運動が猛烈なのでややともす

ると中心を失って倒れかかる。倒れかかるたびに後

足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる
訳にも行かんのので、台所中あちら、こちらと飛んで
廻る。我ながらよくこんなに器用に起たつていられた
ものだと思う。第三の真理が驀ばくち地に現げんぜん前する。「危
きに臨のぞめば平常なし能あたわざるところのものを為なし能
う。之これを天祐てんゆうという」幸さいわいに天祐を享うけたる吾輩が一
生懸命餅の魔と戦っていると、何だか足音がして奥

より人が来るような気合けわいである。ここで人に来られ

ては大変だと思つて、いよいよ躍起やつきとなつて台所を

かけ廻る。足音はだんだん近付いてくる。ああ残念

だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見付けら

れた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊っている」

と大きな声をする。この声を第一に聞きつけたのが

御三である。羽根も羽子板も打ち遣やつて勝手から

「あらまあ」と飛込んで来る。細君は縮緬ちりめんの紋付で

「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さえ書斎から出て来て「この馬鹿野郎」といった。面白い面白いと云うのは小供ばかりである。そうしてみんな申し合せたようにげらげら笑っている。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳にゆかぬ、弱った。ようやく笑いがやみそうになったら、五つになる女の子が

「御かあ様、猫も随分ね」といったので狂瀾きょうらんを既倒きとうに何とかするという勢でまた大變笑われた。人間の同情に乏しい実行も大分だいぶん見聞けんもんしたが、この時ほど恨うらめしく感じた事はなかった。ついに天祐もどつかへ消え失うせて、在来の通り四よつ這ばいになつて、眼を白黒するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすが見殺しにするのも気の毒と見えて「まあ餅をとってやれ」

と主人が御三に命ずる。御三はもつと踊らせようじやありませんかという眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺してまで見る気はないのでだまつている。「取つてやらんと死んでしまふ、早くとつてやれ」と主人は再び下女を顧みる。かえり御三は御馳走をおさん半分食べかけて夢から起された時のように、気のな
い顔をして餅をつかんでぐいと引く。かんげつ寒月君じやな

いが前歯がみんな折れるかと思つた。どうも痛いのが痛くないのつて、餅の中へ堅く食い込んでゐる歯を情け容赦もなく引張るのだからたまらない。吾輩が

なさ

「すべての安樂は困苦を通過せざるべからず」と云う第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人はすでに奥座敷へ這入はいつてしまつておつた。

こんな失敗をした時には内において御三なんぞに顔
を見られるのも何となくばつが悪い。いつその事氣
を易^かえて新道の二絃琴^{にげんきん}の御師匠さんの所^{ところ}の三毛子^{みけこ}で
も訪問しようと台所から裏へ出た。三毛子はこの近
辺で有名な美貌家^{びぼうか}である。吾輩は猫には相違ないが
物の情け^{なさ}は一通り心得ている。うちで主人の苦^{にが}い顔
を見たり、御三の陰突^{けんつく}を食って気分が勝^{すぐ}れん時は必

ずこの異性の朋友ほうゆうの許もとを訪問していろいな話をす

る。すると、いつの間まにか心が晴々せいせいして今までの心

配も苦労も何もかも忘れて、生れ変ったような心持

になる。女性の影響というものは実に莫大ばくだいなものだ。

杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、三毛子

は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椽側えんがわに

坐っている。その背中の丸さ加減が言うに言われん

ほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾しっぽの曲がり

加減、足の折り具合、物憂ものうげに耳をちよいちよい振

る景色けしきなども到底とうてい形容が出来ん。ことによく日の当

る所に暖かそうに、品ひんよく控ひかえているものだから、

身体は静肅端正の態度を有するにも関らず、天鷲びろうど毛

を欺あざむくほどの滑なめらかな満身の毛は春の光りを反射し

て風なきにむらむらと微動するごとくに思われる。

吾輩はしばらく恍惚こうこつとして眺ながめていたが、やがて我

に帰ると同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」

といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」

と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやらちやら

と鳴る。おや正月になったら鈴までつけたな、どう

もいい音ねだと感心している間まに、吾輩の傍そばに来て

「あら先生、おめでとう」と尾を左ひだりへ振る。吾等

猫属間で御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。吾輩は前回断わった通りまだ名はないのであるが、教師の家うちにいるものだから三毛子だけは尊敬して先生先生といつてくれる。吾輩も先生と云われて満まんざら更悪い心持ちもしないから、はいはいと返事

をしている。「やあおめでとう、大層立派に御化粧

が出来ましたね」 「ええ去年の暮御師匠おししやうさんに買っ

て頂いたの、宜いいでしよう」とちやらちやら鳴らし

て見せる。「なるほど善い音ねですな、吾輩などは生

れてから、そんな立派なものは見た事がないですよ」

「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」とまたちや

らちやら鳴らす。「いい音ねでしよう、あたし嬉しい

わ」とちやらちやらちやら続け様に鳴らす。

「あなたのうちの御師匠さんは大変あなたを可愛がつていると見えますね」と吾身に引きくらべて暗にあん

欣羨きんせんの意を洩もらす。三毛子は無邪気なものである

「ほんとよ、まるで自分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だって笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑えるものが無いように思っている

のは間違いである。吾輩が笑うのは鼻の孔あなを三角に

のどぼとけ

して咽喉のど仏を震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。「一体あなたの所ところの御主人は何で

すか」「あら御主人だって、妙なね。御師匠おししやうさん

だわ。二絃琴にげんきんの御師匠さんよ」「それは吾輩も知っ

ていますがね。その御身分は何なんです。いずれ昔むか

しは立派な方なんでしょうな」「ええ」

君を待つ間の姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二絃琴を弾き出す。「宜

い声でしょう」と三毛子は自慢する。「宜いようだ

が、吾輩にはよくわからん。全体何というものです

か」「あれ？　あれは何とかつてもものよ。御師匠さ

んはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六

十二よ。随分丈夫だわね」六十二で生きているくら

いだから丈夫と云わねばなるまい。吾輩は「はあ」

と返事をした。少し間まが抜けたようだが別に名答も

出て来なかつたから仕方がない。「あれでも、もと

は身分が大変好かつたんだって。いつでもそうおつ

しやるの」「へえ元は何だつたんです」「何でも天てん

璋院様しょういんの御祐筆ごゆうひつの妹の御嫁に行つた先さきの御おつかさ

んの甥おいの娘なんだって」「何ですって?」「あの天

璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいった……」 「なるほ

ど。少し待って下さい。天璋院様の妹の御祐筆の：

……」 「あらそうじやないの、天璋院様の御祐筆の妹

の……」 「よろしい分りました天璋院様のでしょう」

「ええ」 「御祐筆のでしょう」 「そうよ」 「御嫁に

行つた」 「妹の御嫁に行つたですよ」 「そうそう間

違つた。妹の御嫁に入つた先きの」 「御つかさんの

甥の娘なんですとさ」「御つかさんの甥の娘なんですか」「ええ。分ったでしょう」「いいえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。詰つまるところ天璋院様の何になるんですか」「あなたもよっぽど分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行つた先きの御つかさんの甥の娘なんだって、先さつきっから言ってるんじゃないやありませんか」「それはすっかり

分っているんですがね」「それが分りさえすればいいんでしよう」「ええ」と仕方がないから降参をした。吾々は時とすると理詰の虚言うそを吐つかねばならぬ事がある。

障子の中うちで二絃琴の音ねがぱったりやむと、御師匠さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼ぶ。三毛子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらっし

やるから、私あたし帰るわ、よくって？」わるいと云つ

たつて仕方がない。「それじゃまた遊びにいらつし
やい」と鈴をちやらちやら鳴らして庭先までかけて
行つたが急に戻つて来て「あなた大変色が悪くつて
よ。どうかしやしなくつて」と心配そうに問いかけ
る。まさか雑煮ぞうにを食つて踊りを踊つたとも云われな
いから「何別段の事もありますせんが、少し考え事を

したら頭痛がしてね。あなたと話しでもしたら直る
だろうと思つて実は出掛けて来たのですよ」「そう。
御大事になさいまし。さようなら」少しは名残り惜
し氣に見えた。これで雑煮の元氣もさっぱりと回復
した。いい心持になつた。歸りに例の茶園ちやえんを通り抜
けようと思つて霜柱しもばしらの融けとかかったのを踏みつけな
がら建仁寺けんんにんじの崩れくずから顔を出すとまた車屋の黒が枯

菊の上に背^せを山にして欠伸^{あくび}をしている。近頃は黒を

見て恐怖するような吾輩ではないが、話しをされる
と面倒だから知らぬ顔をして行き過ぎようとした。

黒の性質として他^{ひと}が己^{おの}れを軽侮^{けいぶ}したと認むるや否や

決して黙っていない。「おい、名なしの権兵衛^{ごんべえ}、近

頃^{おつ}じゃ乙^{おつ}う高く留^{とど}つてるじゃあねえか。いくら教師

の飯を食^たつたつて、そんな高慢^{ごうまん}ちきな面^つらあするね

え。人^{ひと}つけ面白くもねえ」黒は吾輩の有名になつた

のを、まだ知らんと見える。説明してやりたいが到^{とう}

底^{てい}分る奴ではないから、まず一応の挨拶をして出来

得る限り早く御免蒙^{ごめんこうむ}るに若^しくはないと決心した。

「いや黒君おめでとう。不相^{あいかわらず}変元気がいいね」と尻^し

尾^{つぽ}を立てて左へくると廻わす。黒は尻尾を立てた

ぎり挨拶もしない。「何おめでてえ？ 正月でおめ

でたけりや、御めえなんざあ年が年中おめでてえ方
だろう。気をつけろい、この吹ふい子ごの向むう面づらめ」吹
い子の向むうづらという句は罵ば詈りの言語であるようだ
が、吾輩には了解が出来なかつた。「ちよつと伺うかが

うが吹い子の向むうづらと云うのはどう云う意味かね」

「へん、手めえが悪体あくたいをつかれてる癖に、その訳わけを

聞ききや世話あねえ、だから正月野郎だつて事よ」正

月野郎は詩的であるが、その意味に至ると吹い子の
何とかよりも一層不明瞭な文句である。参考のため
ちよつと聞いておきたいが、聞いたつて明瞭な答弁
は得られぬに極^きまっているから、面^{めん}と対^{むか}つたまま無
言で立つておつた。いささか手持無沙汰^{てい}の体である。
すると突然黒のうちの神^{かみ}さんが大きな声を張り揚げ
て「おや棚へ上げて置いた鮭^{しゃけ}がない。大變だ。また

ちきししょう

あの黒の畜生が取ったんだよ。ほんとに憎らしい猫

だっちやありやあしない。今に帰って来たら、どう

するか見ていやがれ」と怒鳴る。どな初春の長閑な空気はつはるのどか

を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代を大みよおおい

ぞくりよう

に俗了してしまふ。黒は怒鳴るなら、怒鳴りたいだ

け怒鳴っている」と云わぬばかりに横着な顔をして、

あこ

四角な顔を前へ出しながら、あれを聞いたかと合図

をする。今までは黒との応対で気がつかなかったが、
見ると彼の足の下には一切れ二錢三厘に相当する鮭
の骨が泥だらけになって転がっている。「君不相変あいかわらず
やってるな」と今までの行き掛りは忘れて、つい感
投詞を奉呈した。黒はそのくらいな事ではなかなか
機嫌を直さない。「何がやってるでえ、この野郎。
し、や、け、の、一、切、や、二、切、で、相、変、ら、ず、た、あ、何、だ、。人を見縊みく

びつた事をいうねえ。憚りながら車屋の黒だあ」はばか

腕まくりの代りに右の前足を逆かに肩の辺まで搔き

上げた。「君が黒君だと云う事は、始めから知って

るさ」「知ってるのに、相変らずやってるたあ何だ。

何だてえ事よ」と熱いのを頻りに吹き懸ける。しき人間

なら胸倉をとられて小突き廻されるところである。むなぐら

少々辟易して内心困った事になったなと思っへきえきている

と、再び例の神さんの大声が聞える。「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよこの人あ。牛肉を一斤きんすぐ持つて来るんだよ。いいかい、分ったかい、牛肉の堅くないところを一斤だよ」と牛肉注文の声が四隣しりんの寂寞せきばくを破る。「へん年に一遍牛肉を誂あつらえると思つて、いやに大きな声を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末

に終えねえ阿魔だ」あまと黒は嘲りながら四つ足を踏張ふんば

る。吾輩は挨拶のしようもないから黙って見ている。

「一斤くらいじゃあ、承知が出来ねえんだが、仕方がねえ、いいから取るときや、今に食ってやらあ」

と自分のために誂あつらえたもののごとくいう。「今度は

本当の御馳走だ。結構結構」と吾輩はなるべく彼を

帰そうとする。「御めっちの知った事じゃねえ。黙

っている。うるせえや」と云いながら突然後足で霜しも柱はしらの崩れた奴を吾輩の頭へばさりと浴あびせ掛ける。

吾輩が驚ろいて、からだの泥を払っている間に黒はま

垣根を潜くぐって、どこかへ姿を隠した。大方西川の牛ぎゆう

を覘ねらいに行つたものであろう。

家うちへ帰ると座敷の中が、いつになく春めいて主人

の笑い声さえ陽気に聞える。はてなと明け放した椽

側から上あがつて主人の傍そばへ寄つて見ると見馴れぬ客が

来ている。頭を奇麗に分けて、木綿もめんの紋付の羽織に

こくらはかま

小倉の袴はかまを着けて至極真面目しごくそうな書生しよせい体の男であ

る。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗しゅんけいぬりの巻煙草まきたばこ

入れと並んで越智東風君おちとうふうくんを紹介致候そろ水島寒月という

名刺があるので、この客の名前も、寒月君の友人で

あるという事も知れた。主客しゅかくの対話は途中からであ

るから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美学者迷亭君の事に関しているらしい。

「それで面白い趣向があるから是非いつしよに來いとおっしゃるので」と客は落ちついて云う。「何で

すか、その西洋料理へ行つて午飯ひるめしを食うのについて

趣向があるというのですか」と主人は茶を続つぎ足し

て客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、

その時は私にも分らなかつたんですが、いずれあの

方かたの事ですから、何か面白い種があるのだらうと思

いまして……」 「いっしょに行きましたか、なるほ

ど」 「ところが驚いたのです」 主人はそれ見たかと

云わぬばかりに、膝ひざの上に乗った吾輩の頭をぽかと

叩たたく。少し痛い。「また馬鹿な茶番見たような事な

んでしよう。あの男はあれが癖でね」と急にアンド

レア・デル・サルト事件を思い出す。「へへー。君何か変ったものを食おうじやないかとおっしやるの
で」「何を食いました」「まず献立こんだてを見ながらいろいろ料理についての御話がありました」「誂あつらえない前にですか」「ええ」「それから」「それから首を捻ひねってボーの方を御覧になって、どうも変ったものもないようだなとおっしやるとボーは負けぬ気

で鴨かものロースか小牛のチャップなどは如何いかですと云

うと、先生は、そんな月並つきなみを食いにわざわざここま

で来やしないとおっしゃるんで、ボイは月並という

意味が分らんものですから妙な顔をして黙っていま

したよ」「そうでしょう」「それから私の方を御向

きになって、君仏蘭西フランスや英吉利イギリスへ行くと随分天明調てんめいちよう

や万葉調まんようちようが食えるんだが、日本じゃどこへ行つたつ

て版で圧おしたようで、どうも西洋料理へ這はい入る気が

しないと云うような大気燄だいきえんで——全体あの方は洋行かた

なすった事があるのですかな」「何迷亭が洋行なん

かするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行

こうと思えばいつでも行かれるんですがね。大方こ

れから行くつもりのところを、過去に見立てた洒落しやれ

なんでしよう」と主人は自分ながらうまい事を言っ

たつもりで誘い出し笑をする。客はさまで感服した様子もない。「そうですか、私はまたいつの間に洋行なさったかと思つて、つい真面目に拝聴していました。それに見て来たようになめくじのソップの御話や蛙かえるのシチュの形容をなさるものですから」「そりや誰かに聞いたんでしよう、うそをつく事はなかなか名人ですからね」「どうもそうのようで」と花か

瓶びんの水仙を眺める。少しく残念の気色けしきにも取られる。

「じゃ趣向というのは、それなんですネ」と主人が
念を押す。「いえそれはほんの冒頭なので、本論は
これからなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感
投詞を挟はさむ。「それから、とてもなめくじや蛙は食
おうっても食べやしないから、まあトチメンボーク
らいなところで負けとく事にしようじゃないか君と

御相談なさるものですから、私はつい何の気なしに、それがいいでしょう、といってしまったので」「へー、とちめんぼうは妙ですな」「ええ全く妙なのですが、先生があまり真面目なものですから、つい気がつきませんでした」とあたかも主人に向ってそこつ鹿忽そこつを詫わびているように見える。「それからどうしました」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情

を表しておらん。「それからボーにおいトチメンボ、

にんまえ

ーを二人前持つて来いというト、ボーがメンチボ、

ですかと聞き直しましたが、先生はますます真面目まじめ

な貌かおでメンチボ、じゃないトチメンボ、だと訂正さ

れました」「なある。そのトチメンボ、という料理

は一体あるんですか」「さあ私も少しおかしいとは

思いましたがいかにも先生が沈着であるし、その上

あの通りの西洋通でいらっしやるし、ことにその時は洋行なすったものと信じ切っていたものですから、私も口を添えてトチメンボーだトチメンボーだとボイに教えてやりました」 「ボイはどうしました」

「ボイがね、今考えると実に滑稽こっけいなんですすがね、し

ばらく思案していましてね、はなはだ御気の毒様ですすが今日はトチメンボーは御生憎様おあいにくさまでメンチボーな

ら御二人前すぐに出来ますと云うと、先生は非常に

残念な様子で、それじゃせつかくここまで来た甲斐かい

がない。どうかトチメンボーを都合つごうして食わせても

らう訳わけには行くまいかと、ボーに二十銭銀貨をやら

れると、ボーはそれではともかくも料理番と相談し

て参りましようとお奥へ行きましたよ」「大変トチメ

ンボーが食いたかったと見えますね」「しばらくし

てボーが出て来て真に御生憎で、御誂ならこしらえ

まこと

おあつらえ

ますが少々時間がかかります、と云うと迷亭先生は
落ちついたもので、どうせ我々は正月でひまなんだ
から、少し待って食って行こうじやないかと云いな
がらポケットから葉巻を出してぷかりぷかり吹か
し始められたので、私わたくしも仕方がないから、懷ふところから
日本新聞を出して読み出しました、するとボーはま

た奥へ相談に行きましたよ」「いやに手数てすうが掛りま

すな」と主人は戦争の通信を読むくらいの意気込で

席を前すすめる。「するとボーがまた出て来て、近頃は

トチメンボの材料が払底で亀屋へ行っても横浜の

十五番へ行っても買われませんから当分の間は御生

憎様でと気の毒そうに云うと、先生はそりや困った

な、せつかく来たのになあと私の方を御覧になって

しきりに繰り返さるので、私も黙っている訳にも

参りませんから、どうも遺憾いかんですな、遺憾きわま極るです

など調子を合せたのです」「ごもつともで」と主人

が賛成する。何がごもつともだか吾輩にはわからん。

「するとボーも気の毒だと見えて、その内材料が参りましたら、どうか願いますってんでしよう。先生

が材料は何を使うかねと問われるとボーはへへへへ

と笑つて返事をしないんです。材料は日本派の俳人
だろうと先生が押し返して聞くとボーはへえさよう
で、それだものだから近頃は横浜へ行つても買われ
ませんので、まことにお気の毒様と云いましたよ」
「アハハハそれが落ちなんですか、こりや面白い」
と主人はいつになく大きな声で笑う。膝ひざが揺れて吾
輩は落ちかかる。主人はそれにも頓着とんじゃくなく笑う。ア

ンドレア・デル・サルトに雇^{かか}ったのは自分一人でな

いと云う事を知ったので急に愉快になったものと見

える。「それから二人で表へ出ると、どうだ君うま

く行つたらう、とちめんぼう橡面坊を種に使つたところが面白か

らうと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御

別れしたようなものの実は午飯ひるめしの時刻が延びたので

大変空腹になつて弱りましたよ」「それは御迷惑で

したろう」と主人は始めて同情を表する。これには吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の咽喉のどを鳴らす音が主客しゅかくの耳に入る。

東風君は冷めなくなつた茶をぐつと飲み干して

「実は今日参りましたのは、少々先生に御願があつて参つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と

主人も負けずに済すます。「御承知の通り、文学美術

が好きなものですから……」 「結構で」と油を注す。

「同志だけがよりましてせんだつてから朗読会というのを組織しまして、毎月一回会合してこの方面の研究をこれから続けたいつもりで、すでに第一回は去年の暮に開いたくらいであります」 「ちよつと伺つておきますが、朗読会と云うと何か節奏ふしでも附けて、詩歌しいか文章の類るいを読むように聞えますが、一体ど

んな風にやるんです」 「まあ初めは古人の作からは

じめて、追々おいおいは同人の創作なんかもあるつもりです」

「古人の作というと白楽天の琵琶行はくらくてん びわこうのようなもので

でもあるんですか」 「いいえ」 「蕪村ぶそんの春風馬堤曲しゅんふうばていきょく

の種類ですか」 「いいえ」 「それじゃ、どんなもの

をやったんです」 「せんだつては近松の心中物しんじゅうものをや

りました」 「近松？ あじょうるりの浄瑠璃の近松ですか」 近

松に二人はない。近松といえは戯曲家の近松に極きまつ

ている。それを聞き直す主人はよほど愚ぐだと思つて

いると、主人は何にも分らずに吾輩の頭を叮てい嚙ねいに撫な

でている。藪やぶ睨にらみから惚ほれられたと自認している人

間もある世の中だからこのくらいの誤ご謬びゅうは決して驚

くに足らんと撫でらるるがままにすましていた。

「ええ」と答えて東風子とうふうしは主人の顔色を窺うかがう。「そ

れじゃ一人で朗読するのですか、または役割を極め
てやるんですか」「役を極めて懸合かけあいでやって見まし
た。その主意はなるべく作中の人物に同情を持って
その性格を発揮するのを第一として、それに手真似
や身振りを添えます。せりふ白はなるべくその時代の人を
写し出すのが主で、御嬢さんでも丁稚でっちでも、その人
物が出てきたようにやるんです」「じゃ、まあ芝居

見たようなものじゃありませんか」「ええ衣装と書いしょうき

割わりがないくらいなものですな」「失礼ながらうまく

行きますか」「まあ第一回としては成功した方だと

思います」「それでこの前やったとおっしゃる心中

物というと」「その、船頭が御客を乗せて芳原よしわらへ行

く所ところなんで」「大変な幕をやりましたな」と教師だ

けにちよつと首を傾かたむける。鼻から吹き出した日の出、

の煙りが耳を掠^{かす}めて顔の横手へ廻る。「なあに、そ

んなに大変な事もないんです。登場の人物は御客と、

船頭と、花魁^{おいらん}と仲居^{なかい}と遣手^{やりて}と見番^{けんばん}だけですから」と

東風子は平気なものである。主人は花魁という名を

きいてちよつと苦^{にが}い顔をしたが、仲居、遣手、見番

という術語について明瞭の智識がなかったと見えて

まず質問を呈出した。「仲居というのは娼^{しょう}家^かの下婢^{かひ}

にあたるものですかな」「まだよく研究はして見ま

せんが仲居は茶屋の下女で、遣手というのが女部屋おんなべや

の助役じょやく見たようなものだろうと思います」「東風子は

さつき、その人物が出て来るように仮色こわいろを使うと云

った癖に遣手や仲居の性格をよく解しておらんらし

い。「なるほど仲居は茶屋に隷属れいぞくするもので、遣手

は娼家に起臥きがする者ですね。次に見番と云うのは人

間ですかまたは一定の場所を指すさのですか、もし人

間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の

人間だと思います」「何を司つかさどっているんですかな」

「さあそこまではまだ調べが届いておりません。そ

の内調べて見ましょう」これで懸合をやった日には

頓珍漢とんちんかんなものが出来るだろうと吾輩は主人の顔をち

よつと見上げた。主人は存外真面目である。「それ

で朗読家は君のほかになんか人が加わったんですか」

「いろいろおりました。花魁が法学士のK君でした

が、口髯くちひげを生やして、女の甘ったるいせりふを使つかか

うのですからちよつと妙でした。それにその花魁が

癩しやくを起すところがあるので……」 「朗読でも癩を起

さなくっちゃ、いけないんですか」と主人は心配そ

うに尋ねる。「ええとにかく表情が大事ですから」

と東風子はどこまでも文芸家の氣でいる。「うまく
癩が起りましたか」と主人は警句を吐く。「癩だけ
は第一回には、ちと無理でした」と東風子も警句を
吐く。「ところで君は何の役割でした」と主人が聞
く。「私^{わたく}しは船頭」「へー、君が船頭」君にして船
頭が務^{つと}まるものなら僕にも見番くらいはやれると云
ったような語氣を洩^もらす。やがて「船頭は無理でし

たか」と御世辞のないところを打ち明ける。東風子は別段癢に障った様子もない。やはり沈着な口調で「その船頭でせつかくの催しも竜頭蛇尾に終りましりゆうとうだびた。実は会場の隣りに女学生が四五人下宿してゐてね、それがどうして聞いたものか、その日は朗読会があるという事を、どこかで探知して会場の窓下へ来て傍聴していたものと見えます。わたく私しが船頭

こわいろ

の仮色を使つて、ようやく調子づいてこれなら大丈夫と思つて得意にやっていると、……つまり身振りがあまり過ぎたのでしよう、今まで耐^こらえていた女学生が一度にわつと笑いだしたものですから、驚ろいた事も驚ろいたし、極^{きま}りが悪^わるい事も悪^わるいし、それで腰を折られてから、どうしても後^{あと}がつづけられないので、とうとうそれ限^{きり}りで散会しました」第

一回としては成功だと称する朗読会がこれでは、失敗はどんなものだろうと想像すると笑わずにはいられない。覚えず咽喉のどぼとけ仏がごろごろ鳴る。主人はいよいよ柔かに頭を撫なでてくれる。人を笑って可愛がられるのはありがたいが、いささか無気味なところもある。「それは飛んだ事で」と主人は正月早々弔詞ちようじを述べている。「第二回からは、もっと奮発して盛

大にやるつもりなので、今日出ましたのも全くその
ためで、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎ
たいので」「僕にはとても癪なんか起せませんよ」

と消極的の主人はすぐに断わりかける。「いえ、癪
などは起していただかんでもよろしいので、ここに
賛助員の名簿が」と云いながら紫の風呂敷から大事
そうに小菊版こぎくばんの帳面を出す。「これへどうか御署名

の上御捺印ごなつしんを願いたいのので」と帳面を主人の膝ひざの前

へ開いたまま置く。見ると現今知名な文学博士、文

学士連中の名が行儀よく勢揃せいぞろいをしている。「はあ賛

成員にならん事ありませんが、どんな義務がある

のですか」と牡蠣かき先生は掛念けねんの体ていに見える。「義務

と申して別段是非願う事もないくらいで、ただ御名

前だけを御記入下さって賛成の意さえ御表おひょうし被下くだされ

ばそれで結構です」 「そんなら這入ります」 と義務のかからぬ事を知るや否や主人は急に気軽になる。

責任さえないと云う事が分つておれば謀叛むほんの連判状へでも名を書き入れますと云う顔付をする。加之のみならずこ

う知名の学者が名前を列ねつらている中に姓名だけでも入籍させるのは、今までこんな事に出合つた事のな

い主人にとっては無上の光栄であるから返事の勢の

あるのも無理はない。「ちよつと失敬」と主人は書齋へ印をとりに入る。吾輩はぼたりと畳の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頬張る。ほおばモゴモゴしばらくは苦しそうである。

吾輩は今朝の雑煮事件をちよつと思ひ出す。主人が書齋から印形いんぎようを持って出て来た時は、東風子の胃の中にカステラが落ちついた時であつた。主人は菓子

皿のカステラが一切足りなくなつた事には気が着かぬらしい。もし気がつくとすれば第一に疑われるものは吾輩であらう。

東風子が歸ってから、主人が書齋に入つて机の上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が来ている。

「新年の御慶目出度申納候^{ぎよけいめでたもうしおさめそろ}」

……

いつになく出が真面目だと主人が思う。迷亭先生

の手紙に真面目なのはほとんどないので、この間な

どは「其後^{そのご}別に恋着^{れんちやく}せる婦人も無之^{これなく}、いず方^{かた}より艶^{えん}

書^{しよ}も参らず、先^まず先^まず無事に消光^{まか}罷^まり在^そり候間、乍^{はばか}

憚^{りながら}御休心可被^{くださるべく}下候^そ」と云うのが来たくらいである。

それに較^{くら}べるとこの年始状は例外にも世間的である。

「一寸参堂仕り度^{たく}候えども、大兄の消極主義に反し

て、出来得る限り積極的方針を以^{もつ}て、此千古未^み曾^ぞ有

の新年を迎うる計画故、毎日毎日目の廻る程の多忙、

御推察願上候^{そろ}……」

なるほどあの男の事だから正月は遊び廻るのに忙
がしいに違いないと、主人は腹の中で迷亭君に同意
する。

「昨日は一刻のひまを偷^{ぬす}み、東風子にトチメンボ、
の御馳走^{ごちそう}を致さんと存^{ぞろ}じ候^{ところ}処、生憎^{あいにく}材料払底^たの為め

其意を果さず、遺憾^{いかん}千万^{ぞんじそろ}に存候。
……」

そろそろ例の通りになつて来たと主人は無言で微笑する。

「明日は某男爵の歌留^{かるた}多^た会、明後日は審美学協会の新年宴会、其明日は鳥部教授歓迎会、其又明日は：

…」

うるさいなど、主人は読みとばす。

「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、
会の連発にて当分の間は、のべつ幕無しに出勤致し

そろ候為め、やむをえず不得已賀状を以てはいすう拝趨の礼にか易えそろだんあしからず候段不悪

ごゆうじょくだされたくそろ
御宥恕被下度候。……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をす
る。

「今度御光来の節は久し振りにて晚餐でも供し度心
得に御座候。そろかんちゅう
寒厨何の珍味も無之候えども、せめて
これなくそうら
たき

はトチメンボーでもと只今より心掛居候。おりそろ……」

まだトチメンボーを振り廻している。失敬なと主人はちよつとむつとする。

「然ししかトチメンボーは近頃材料払底の為め、ことに依ると間に合い兼候も計りがたきにつき、其節は孔くじ

雀の舌でも御風味に入れ可申候。やくしたもうすべくそろ
……」

両天秤りようてんびんをかけたなと主人は、あとが読みたくなる。

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指
の半なかばにも足らぬ程故健啖けんたんなる大兄の胃囊いぶくろを充みたす

為には……」

うそをつけと主人は打ち遣やったようにいう。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる可べからずと存ぞん

候しそろ。然る所孔雀は動物園、浅草花屋敷等には、ちら

ほら見受け候えども、普通の鳥屋など杯いっこうには一向見当り

不申、苦心此事に御座候。……」

独りで勝手に苦心しているのじやないかと主人は
毫も感謝の意を表しない。

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌り、一時非
常に流行致し候ものにて、豪奢風流の極度と平生よ

りひそかに食指しよくしを動かし居候次第御諒察可被下候。

……」

何が御諒察だ、馬鹿なと主人はすこぶる冷淡である。

「降くだって十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴

席に欠くべからざる好味と相成居候。あいなりおりそろ レスター伯が

エリザベス女皇をじょこうケニルウォースに招待致し候節も

そろせつ

慥たしか孔雀を使用致し候様記憶致候。そろよう 有名なるレンブ

ラントが画えがき候饗宴の図にも孔雀が尾を広げたる儘まま

いたしそろ

卓上よこたに横わり居り候……」

孔雀の料理史をかくくらいなら、そんなに多忙で

もなさそうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、さすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成あいなるは必定……」
ひつじょう

大兄のごとくは余計だ。何も僕を胃弱の標準にし

なくても済むと主人はつぶやいた。

「歴史家の説によれば羅馬人ローマじんは日に二度三度も宴会

を開き候由。そろよし

日に二度も三度も方丈ほうじょうの食饌しょくせんに就き候

えば如何なる健胃の人にてても消化機能に不調を醸すかも

べく、従つて自然は大兄の如く……」

また大兄のごとくか、失敬な。

「然^{しか}るに贅^{ぜい}沢と衛^{たく}生とを両立せしめんと研究を尽し

たる彼等は不相当に多量の滋味を貪^{むさぼ}ると同時に胃腸

を常態に保持するの必要を認め、ここに一の秘法を

案出致し候^{そろ}……」

はてねと主人は急に熱心になる。

「彼等は食後必ず入浴致候。いたしそろ入浴後一種の方法によ

りて浴前に嚥下せるものを悉く嘔吐し、胃内を掃除

致し候。そろ胃内廓清の功を奏したる後又食卓に就き、

飽く迄珍味を風好し、風好し了れば又湯に入りて之

を吐出致候。としゆついたしそろかくの如くすれば好物は貪むさぼり次第貪

り候も毫も内臓の諸機関に障害を生ぜず、一挙両得
とは此等の事を可申かもうすべきと愚考致候いたしそろ……」

なるほど一挙両得に相違ない。主人は羨ましうらやそう
な顔をする。

「廿世紀の今日こんにち交通の頻繁ひんぱん、宴会の増加は申す迄も

なく、軍国多事征露の第二年とも相成候折柄、吾人

そろおりから

戦勝国の国民は、是非共羅馬人ローマに倣ならつて此入浴嘔吐

の術を研究せざるべからざる機会に到着致し候事そろと

自信致候。いたしそろ左もさなくば切角せつかくの大国民も近き将来に於

て悉く大兄ことごとの如く胃病患者と相成る事と窃ひそかに心痛

罷りまかあり候そろ……」

また大兄のごとくか、癩しやくに障さわる男だと主人が思う。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を考究

し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の社会に

応用致し候わば所謂禍いわを未萌みほうに防ぐの功德くどくにも相成

り平素逸楽いつらくを擅ほしいままに致し候御恩返も相立ち可申もうすべくと存候ぞんじそろ

……」

何だか妙だなと首を捻^{ひね}る。

「依^{よつ}て此間中^{じゅう}よりギボン、モンセン、スミス等諸家

の著述^{しやうりよう}を涉獵^{しやうりよう}致し居候^{おりそうら}えども未^{いま}だに発見^{たんしよ}の端緒^{たんしよ}をも

見^み出^{いだ}し得^えざるは残念^{ぞんじそろ}の至^きに存^{ぞんじそろ}候^{こう}。然^{しか}し御存^{ごぞん}じの如^{ごと}く

小生は一度思い立ち候事（そのこと）は成功するまでは決して中

つかまつ

絶仕らざる性質に候えば嘔吐方を再興致し候も遠か

おうとほう

（その）

らぬうちと信じ居り候次第（その）。右は発見次第御報道可

（つかま）

つるべく（その）

仕候につき、左様御承知可被下候。就てはさきに申

くださるべく（その）

（つい）

上候トチメンボ（その）ー及び孔雀の舌の御馳走も可相成は

（その）

あいなるべく

右発見後に致し度（たく）、左すれば小生の都合は勿論（もちろん）、既

（たく）

（さ）

（もちろん）

に胃弱に悩み居らるる大兄の為にも御便宜かと存候

（ごべんぎ）

（ぞんじその）

草々不備」

何だとうとう担かつがれたのか、あまり書き方が真面

目だものだからつい仕舞しまいまで本氣にして読んでいた。

新年匆々そうそうこんな悪戯いたずらをやる迷亭はよつぽどひま人だ

なあと主人は笑いながら云った。

それから四五日は別段の事もなく過ぎ去った。白は

磁くじの水仙がだんだん凋しぼんで、青軸あおじくの梅が瓶びんながらだ

んだん開きかかるのを眺め暮らしてばかりいてもつ

まらんと思つて、一両度三毛子を訪問して見たが逢あ

いちりょうど

われない。最初は留守だと思つたが、二返目へんめには病

気で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御

師匠さんと下女が話しをしているのを手水鉢ちょうずばちの葉蘭

の影に隠れて聞いているとこうであつた。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からまだ何にも食べません、あつたかにして御火燵おこたに寝かし
ておきました」何だか猫らしくない。まるで人間の
取扱を受けている。

一方では自分の境遇と比べて見て羨うらやましくもある
が、一方では己おのが愛している猫がかくまで厚遇を受
けていると思えば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、身体からだが疲れるばかりだからね」 「そうでございますとも、私共でさえ一日御饗ごぜんをいただかないと、明くる日はとても働けませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物であるような返事をする。実際この家では下女より猫の方が大切うちかも知れない。

「御医者様へ連れて行つたのかい」「ええ、あの御

医者はよつぽど妙でございますよ。私が三毛をだい

て診察場へ行くと、風邪かぜでも引いたのかつて私の脈みやく

をとろうとするんでしよう。いえ病人は私ではござ

いません。これですつて三毛を膝の上へ直したら、

にやにや笑いながら、猫の病氣はわしにも分らん、

抛ほうつておいたら今に癒なおるだろうつてんですもの、あ

んまり苛いじやございませんか。ひど腹が立つたから、

それじや見ていたただかなくつてもようございますこれでも大事の猫なんですつて、三毛を懷ふところへ入れてさ

つさと歸つて参りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は到底とうてい吾輩のうちなどで聞かれる言

葉ではない。やはり天璋院様てんしょういんの何とかの何とかでな

くては使えない、はなはだ雅がであると感じた。

「何だかしくしく云うようだが……」 「ええきつと

風邪を引いて咽喉のどが痛むんでございますよ。風邪を

引くと、どなたでも御咳おせきが出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女だけに馬鹿ていねい丁寧な言葉を使う。

「それに近頃は肺病とか云うものが出来てのう」

「ほんとにこの頃のように肺病だのペストだのって

新しい病氣ばかり殖ふえた日にや油断も隙もなりやしませんのでございますよ」「旧幕時代に無い者に碌ろく

な者はないから御前も氣をつけないといかんよ」
「そうでございましょうかねえ」

下女は大に感動おおいしている。

「風邪かぜを引くといつてもあまり出あるきもしないよ
うだったに……」「いえね、あなた、それが近頃は

悪い友達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意である。

「悪い友達？」 「ええあの表通りの教師の所とこにいる

薄ぎたない雄猫おねこでございますよ」 「教師と云うのは、

あの毎朝無作法な声を出す人かえ」 「ええ顔を洗う

たんびに鵜がちょう鳥が絞しめ殺されるような声を出す人でご

ざんす」

鵝鳥が絞め殺されるような声はうまい形容である。

吾輩の主人は毎朝風呂場で含嗽うがいをやる時、楊枝ようじで咽の

喉どをつつ突いて妙な声が無遠慮に出す癖がある。機

嫌の悪い時はやけにがあがやる、機嫌の好い時は

元気づいてなおがあがやる。つまり機嫌のいい時

も悪い時も休みなく勢よくがあがやる。細君の話

しではここへ引越す前まではこんな癖はなかったそ

きよう

うだが、ある時ふとやり出してから今日まで一日も

やめた事がないという。ちよつと厄介な癖であるが、

なぜこんな事を根気よく続けているのか吾等猫など

とうてい

には到底想像もつかん。それもまず善いとして「薄

ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだとなお耳を

立ててあとを聞く。

「あんな声を出して何の呪いまじなになるか知らん。御維ごいつ

しんまえ ちゅうげん

ぞうり

新前は中間でも草履取りでも相応の作法は心得たもので、屋敷町などで、あんな顔の洗い方をするものは一人もおらなかつたよ」「そうでございましょうともねえ」

むやみ

下女は無暗むやみに感服しては、無暗にねえを使用する。

「あんな主人を持っている猫だから、どうせ野良猫のらねこ

さ、今度来たら少し叩たたいておやり」 「叩いてやりま

すとも、三毛の病気になったのも全くあいつの御蔭
に相違ございませんもの、きつと讐かたきをとってやりま
す」

飛んだ冤罪えんざいを蒙こうむったものだ。こいつは滅多めったに近ちか

寄よれないと三毛子にはとうとう逢わずに帰った。

帰つて見ると主人は書斎のうち中で何か沈吟ちんぎんの体ていで筆

を執とっている。にげんきん二絃琴の御師匠さんの所ところで聞いた評

判を話したら、さぞ怒おこるだろうが、知らぬが仏とや

らで、うんうん云いながら神聖な詩人になりすましている。

ところへ当分多忙で行かれないと云つて、わざわざ

ざ年始状をよこした迷亭君が飄然ひょうぜんとやつて来る。

「何か新体詩でも作っているのかね。面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「うん、ちよつとうまい文章だと思ったから今翻訳して見ようと思つてね」と主人は重たそうに口を開く。「文章？　誰^だれの文章だい」「誰れのか分らんよ」「無名氏か、無名氏の作にも随分善いのあるからなかなか馬鹿に出来ない。全体どこにあつたのか」と問う。「第二読本」

と主人は落ちつきはらって答える。「第二読本？

第二読本がどうしたんだ」「僕の翻訳している名文

と云うのは第二読本の中うちにあると云う事さ」「冗談じょうだん

じゃない。孔雀の舌の髻かたきを際きわどいところで討とうと

云う寸法なんだろう」「僕は君のような法螺吹ほらふきと

は違くちひげうさ」と口髯ひねを捻る。泰然たるものだ。「昔むかし

ある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬかといっ

たら、山陽が馬子まごの書いた借金まごの催促状を示して近

来の名文はまずこれでしようと言ったという話があ

るから、君の審美眼も存外たしかかも知れん。どれ

読んで見給え、僕が批評してやるから」と迷亭先生

は審美眼の本家ほんけのような事を云う。主人は禪坊主が

大燈国師の遺誠たいとうこくし ゆいかいを読むような声を出して読み始める。

「巨人きよじん いんりよく、引力」 「何だいその巨人引力と云うのは」

「巨人引力と云う題さ」 「妙な題だな、僕には意味がわからんね」 「引力と云う名を持っている巨人と
いうつもりさ」 「少し無理なつもりだが表題だから
まず負けておくとしよう。それから早々^{そうそう}本文を読む
さ、君は声が善いからなかなか面白い」 「雑^まぜかえ
してはいかんよ」 と予^あじめ念を押してまた読み始め
る。

ケートは窓から外面そとを眺ながめる。小児しょうにが球たまを投げて遊

んでいる。彼等は高く球を空中に擲なげうつ。球は上へ上

へとのぼる。しばらくすると落ちて来る。彼等はま

た球を高く擲つ。再び三度。擲つたびに球は落ちて

くる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へとのみのぼら

ぬかとケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と

母が答える。「彼は巨人引力である。彼は強い。彼は万物を己おのれの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んでしまう。小児も飛んでしまう。葉が落ちるのを見たろう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落す事がある。巨人引力が来いというからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶと落ちてくる」

「それぎりかい」「むむ、甘いうまじやないか」「いや

これは恐れ入った。飛んだところでト、チ、メン、ボー、の

御返礼に預あずかった」「御返礼でもなんでもないさ、実

際うまいから訳して見たのさ、君はそう思わんかね」

と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚ろいたね。君

にしてこの伎倆ぎりょうあらんとは、全く此度こんどという今度こんどは

担かつがれたよ、降参降参」と一人で承知して一人で喋し

やべ

舌る。主人には一向いっこう通じない。「何も君を降参させ

る考えはないさ。ただ面白い文章だと思ったから訳

して見たばかりさ」「いや実に面白い。そう来なく

つちや本ものでない。凄すごいものだ。恐縮だ」「そん

なに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩画をやめ

たから、その代りに文章でもやろうと思つてね」

えんきんむさべつこくびやぶようどう

「どうして遠近無差別黑白平等の水彩画の比じやな

い。感服の至りだよ」「そうほめてくれると僕も乗

り気になる」と主人はあくまでも疳違かんちがいをしている。

ところへ寒月君かんげつが先日は失礼しましたと這入はいって

来る。「いや失敬。今大変な名文を拝聴してトチメ

ンボンボーの亡魂たいじを退治たいじられたところで」と迷亭先生は

訳のわからぬ事をほのめかす。「はあ、そうですか」

とこれも訳の分らぬ挨拶をする。主人だけは左さのみ

浮かれた気色けしきもない。「先日は君の紹介で越智おち東風

と云う人が来たよ」「ああ上あがりましたか、あの越智おち

東風こちと云う男は至って正直な男ですが少し変って

るところがあるので、あるいは御迷惑かと思いま

したが、是非紹介してくれというものですから……」

「別に迷惑の事もないがね……」 「こちらへ上あがつて

も自分の姓名のことについて何か弁じて行きやしませんか」 「いいえ、そんな話もなかったようだ」

「そうですか、どこへ行つても初対面の人には自分の名前の講釈こうしゃくをするのが癖くせでしてね」 「どんな講釈

をするんだい」と事あれかしと待ち構えた迷亭君は

口を入れる。「あの東風こちと云うのを音おんで読よまれると

大變氣にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐皮きんからかわ

たばこいれ

の煙草入から煙草をつまみ出す。「私わたくの名は越智おちと

うふう

東風ではありません、越智おちこちですと必ず断ります

よ」「妙だね」と雲井くもいを腹の底まで呑のみ込む。「そ

れが全く文学熱から来たので、こちと読むと遠近と

せいご

云う成語になる、のみならずその姓名が韻いんを踏んで

いると云うのが得意なんです。それだから東風こちを音おん

で読むと僕がせつかくの苦心を人が買ってくれない
と云うて不平を云うのです」「こりやなるほど變つ
てる」と迷亭先生は図に乗つて腹の底から雲井を鼻
の孔^{あな}まで吐き返す。途中で煙が戸迷^{とまど}いをして咽喉^{のど}の
出口へ引きかかる。先生は煙管^{きせる}を握つてごほんごほ
んと咽^{むせ}び返る。「先日来た時は朗読会で船頭になつ
て女学生に笑われたといつていたよ」と主人は笑い

ながら云う。「うむそれぞれ」と迷亭先生が煙管で

ひざがしら たた

膝頭を叩く。

吾輩は險吞けんのんになつたから少し傍そばを離れ

る。「その朗読会さ。せんだつてトチメンボ―を御

馳走した時にね。その話しが出たよ。何でも第二回

には知名の文士を招待して大会をやるつもりだから、

先生にも是非御臨席を願いたいつて。それから僕が

今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞くと、い

えこの次はずつと新しい者を撰えらんで金色夜叉こんじきやしやにしま

したと云うから、君にや何の役が当つてるかと聞い

たら私は御宮おみやですといったのさ。東風とうふうの御宮は面白

かろう。僕は是非出席して喝采かつさいしようと思つてるよ」

「面白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をする。

「しかしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところが
ないから好い。迷亭などとは大違いだ」と主人はア

ンドレア・デル・サルトと孔雀くじやくの舌とトチメンボ―

の復讐かたきを一度にとる。迷亭君は氣にも留めない様子

で「どうせ僕などは行徳ぎようとくの俎まなと云う格だからなあ」

と笑う。「まずそんなところだろう」と主人が云う。

実は行徳の俎と云う語を主人は解かいさないのであるが、

さすが永年教師をして胡魔化ごまかしつけているものだから

ら、こんな時には教場の経験を社交上にも応用する

のである。「行徳の俎というのは何の事ですか」と

寒月が真率しんそつに聞く。主人は床の方を見て「あの水仙

は暮に僕が風呂の歸りがけに買つて来て挿さしたのだ

が、よく持つじやないか」と行徳の俎を無理にねじ

伏せる。「暮といえは、去年の暮に僕は実に不思議

な経験をしたよ」と迷亭が煙管きせるを大神樂だいかぐらのごとく指

の尖やみで廻まわす。「どんな経験か、聞かし玉たまえ」と主

人は行徳の俎を遠く後に見捨てた気で、ほっと息をつく。迷亭先生の不思議な経験というのを聞くと左のごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の東風から参堂の上是非文芸上の御高話を伺いたいから御在宿を願うと云う先き触れがあつたので、朝から心待ちに待っていると先生なかなか来ないやね。昼

飯を食ってストーブの前でバリ・ペーの滑稽物こっけいもの

を読んでいるところへ静岡の母から手紙が来たから

見ると、年寄だけにいつまでも僕を小供のように思

ってね。寒中は夜間外出をするとか、冷水浴もい

いがストーブを焚たいて室へやを煖あたかにしてやらないと風か

邪ぜを引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど

親はありがたいものだ、他人ではとてもこうはいか

のんき

おおい

ないと、呑気な僕もその時だけは大に感動した。そ

もったい

れにつけても、こんなのにのらくらしていては勿体な

い。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならん。

母の生きているうちに天下をして明治の文壇に迷亭

先生あるを知らしめたいと云う氣になった。それか

らなお読んで行くと御前なんぞは実に仕合せ者だ。

ロシア

露西亞と戦争が始まって若い人達は大変な辛苦をし

しんく

て御国みくにのために働らいているのに節季師走せつきしわすでもお正

月のように気楽に遊んでいると書いてある。――僕

はこれでも母の思つてるように遊んじやいやね

――そのあとへもつ以て来て、僕の小学校時代の朋友ほうゆうで

今度の戦争に出て死んだり負傷したものの名前が列

挙してあるのさ。その名前を一々読んだ時には何だ

か世の中が味気あじきなくなつて人間もつまらないと云う

気が起つたよ。一番仕舞しまいにね。私わたししも取る年に候え

はつはる おぞうに

ば初春の御雑煮を祝い候も今度限りかと……何だか

心細い事が書いてあるんで、なおのこと気がくさく

とうふう

さしてしまつて早く東風が来れば好いと思つたが、

先生どうしても来ない。そのうちとうとう晩飯にな

つたから、母へ返事でも書こうと思つてちよいと十

二三行かいた。母の手紙は六尺以上もあるのだが僕

にはとてもそんな芸は出来んから、いつでも十行内外で御免蒙しょうむる事に極きめてあるのさ。すると一日動かずにおったものだから、胃の具合が妙で苦しい。東風が来たら待たせておけと云う氣になつて、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給え。いつになく富士見町の方へは足が向かないで土手三番町どてさんばんちょうの方へ我れ知らず出てしまった。ちようどその晩は少し曇

つて、から風が御濠おほりの向うむこから吹き付ける、非常に

寒い。神楽坂かぐらざかの方から汽車がヒューと鳴って土手下

を通り過ぎる。大変淋さみしい感じがする。暮、戦死、

老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる馳か

け廻めぐる。よく人が首を縊くると云うがこんな時にふと

誘われて死ぬ気になるのじゃないかと思ひ出す。ち

よいと首を上げて土手の上を見ると、いつの間まにか

例の松の真下ましたに来てゐるのさ」

「例の松た、何だい」と主人が断句だんくを投げ入れる。

「首懸くびかけの松さ」と迷亭は領えりを縮める。

「首懸の松は鴻こうの台だいでしょう」寒月が波紋はもんをひろげる。

「鴻こうの台だいのは鐘懸かねかけの松で、土手三番町のは首懸くびかけの松さ。なぜこう云う名が付いたかと云うと、昔むかしから

の言い伝えで誰でもこの松の下へ来ると首が縊くりた
くなる。土手の上に松は何十本となくあるが、そら
首縊くびくりだと来て見ると必ずこの松へぶら下がって
る。年に二三返べんはきつとぶら下がっている。どうし
ても他の松では死ぬ気にならん。見ると、うまい具
合に枝が往来の方へ横に出ている。ああ好い枝振り
だ。あのままにしておくのは惜しいものだ。どうか

してあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か来ない

かしらと、あたり四辺を見渡すと生憎あいにく誰も来ない。仕方が

ない、自分で下がろうか知らん。いやいや自分が下

がっては命がない、あぶ危ないからよそう。しかし昔の

希臘人ギリシヤじんは宴会の席で首くびくく縊りの真似をして余興を添え

たと云う話がある。一人が台の上へ登って縄の結

び目へ首を入れる途端に他ほかのものが台を蹴返す。首

を入れた当人は台を引かれると同時に縄をゆるめて

飛び下りるといふ趣向しゅこうである。果してそれが事実な

ら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思

手を懸けて見ると好い具合に撓しわる。撓り按排あんばいが実に

美的である。首がかかつてふわふわするところを想

像して見ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしよ

うと思つたが、もし東風とうふうが来て待っていると気の毒

だと考え出した。それではまず東風とうふうに逢あつて約束通り話しをして、それから出直そうと云う氣になつてついにうちへ歸つたのさ」

「それで市いちが栄えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにやにやしながら云う。

「うちへ歸つて見ると東風は来ていない。しかし今こん

にちにち よんどころなきさしつか
日は無抛むた処差支さしつかえがあつて出られぬ、いづれ永日えいじつ御ご

めんご
面晤を期すという端書はがきがあつたので、やつと安心して、これなら心置きなく首が縊くれる嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見てすましている。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦じれる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織ひもの紐を

ひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。たった一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考える
と何でもその時は死神しにがみに取り着かれたんだね。ゼー
ムスなどに云わせると副意識下の幽冥界ゆうめいかいと僕が存在
している現実界が一種の因果法によって互に感応かんのうし
たんだらう。実に不思議な事があるものじゃないか」

迷亭はすまし返っている。

主人はまたやられたと思いながら何も云わずに空^く
也餅^{うやもち}を頬張^{ほおば}って口をもごもご云わしている。

寒月は火鉢の灰を丁寧^{ていねい}に搔^かき馴^ならして、俯向^{うつむ}いて
にやにや笑っていたが、やがて口を開く。極めて静
かな調子である。

「なるほど伺って見ると不思議な事でちよつと有り

そうにも思われませんが、私などは自分でやはり似たような経験をつい近頃したものですから、少しも疑がう気になりません」

「おや君も首を縊くりたくなつたのかい」

「いえ私のは首じやないんで。これもちようど明ければ昨年の暮の事でしかも先生と同日同刻くらいに起つた出来事ですからなおさら不思議に思われます」

「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の家うちで忘年会兼合奏会けんがあり

まして、私もそれへヴァイオリンを携たづさえて行きました。

十五六人令嬢やら令夫人が集ってなかなか盛会

で、近來の快事と思うくらいに万事が整っていました。

た。晩餐ばんさんもすみ合奏もすんで四方よもの話しが出て時刻

も大分遅くなつたから、もう暇乞いいとまごをして歸ろうか

と思つていますと、某博士の夫人が私のそばへ来て

あなたは〇〇子さんの御病氣を御承知ですかと小声

で聞きますので、実はその両三日前に逢つた時は平

りょうさんにちまえ

常の通りどこも悪いようには見受けませんでしたか

ら、私も驚ろいて精くわしく様子を聞いて見ますと、私わたく

しの逢つたその晩から急に発熱して、いろいろな譫うわ

こと
語を絶間なく口走くちばしるそうで、それだけなら宜いいです
がその譚語のうちに私の名が時々出て来るとい
うの
です」

主人は無論、迷亭先生も「御安おやすくないね」などと
いう月並つきなみは云わず、静肅に謹聴している。

「医者を呼んで見てもらうと、何だか病名はわから
んが、何しろ熱が劇はげしいので脳を犯しているから、

すいみんざい

もし睡眠剤が思うように功を奏しないと危険である
と云う診断だそうではそれを聞くや否や一種いや
な感じが起つたのです。ちようと夢でうなされる時
のような重くるしい感じで周囲の空気が急に固形体
になつて四方から吾が身をしめつけるごとく思われ
ました。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあつて
苦しくてたまらない。あの奇麗な、あの快活なあの

健康な○○子さんが……」

「ちよつと失敬だが待ってくれ給え。さつきから伺

つていると○○子さんと云うのが二返へんばかり聞える

ようだが、もし差支さしつかえがなければ承うけたまわりたいね、君」

と主人を顧かえりみると、主人も「うむ」と生返なまへんじ事をする。

「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れません

から廃よしましう」

「すべて曖あいあいぜん々然まいまいぜんとして昧まいまいぜん々然たるかたで行くつもり

かね」

「冷笑なさつてはいけません、極真ごくまじめ面目な話しなん

ですから……とにかくあの婦人が急にそんな病氣に

なつた事を考えると、実に飛花ひからくよう落葉の感慨で胸が一

杯そうしんになつて、総身の活氣が一度にストライキを起し

たように元気がにわかめいに滅入めいってしまひまして、た

そうそう

ろうろう

かた

あずまばし

だ蹠々として踉々という形かたちで吾妻橋へきかかった

のです。欄干に倚よつて下を見ると満潮か干潮か分り

まんちよう かんちよう

ませんが、黒い水がかたまつてただ動いているよう

はなかわど

に見えます。花川戸はなかわどの方から人力車が一台馳かけて来

ちようちん

て橋の上を通りました。その提灯ちようちんの火を見送つてい

さっぽろ

ると、だんだん小くなつて札幌さっぽろビールの処で消えま

した。私はまた水を見る。すると遙はるかの川上の方で

私の名を呼ぶ声が聞えるのです。はてな今時分人に

呼ばれる訳はないが誰だろうと水の面をすかして見おもて

しましたが暗くて何にも分りません。気のせいに違い

ない早々そうそう帰ろうと思つて一足二足あるき出すと、ま

た微かすかな声で遠くから私の名を呼ぶのです。私はま

た立ち留つて耳を立てて聞きました。三度目に呼ば

れた時には欄干に捕ま^{つか}つていながら膝頭^{ひざがしら}ががくがく

^{ふる}

悸え出したのです。その声は遠くの方か、川の底か

ら出るようですが紛^{まぎ}れもない○○子の声なんでしょ

う。私は覚え^えず「はい」と返事をしたのです。そ

の返事が大きかったものですから静かな水に響いて、

自分で自分の声に驚かされて、はっと周囲を見渡し

ました。人も犬も月も何^{なん}にも見えません。その時に

私はこの「夜」^{よる}の中に巻き込まれて、あの声の出る

所へ行きたいと云う気がむらむらと起つたのです。

〇〇子の声がまた苦しそうに、訴えるように、救を

求めるように私の耳を刺し通したので、今度は「今

直^{すぐ}に行きます」と答えて欄干から半身を出して黒い

水を眺めました。どうも私を呼ぶ声が浪^{なみ}の下から無

理に洩^もれて来るように思われましてね。この水の下

だなと思ひながら私はとうとう欄干の上に乗りましたよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を見つめているとまた憐れな声が糸のように浮いて来る。

ここだと思つて力を込めて一反いったん飛び上がつておいて、そして小石か何ぞのように未練なく落ちてしまひました」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつ

かせて問う。

「そこまで行こうとは思わなかった」と迷亭が自分の鼻の頭をちよいとつまむ。

「飛び込んだ後はあと気が遠くなつて、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡ぬれた所ところも何もない、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議だ。

こりや変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きま
したね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、
つい間違つて橋の真中へ飛び下りたので、その時は
実に残念でした。前と後ろの間違うしだけであの声の出
る所へ行く事が出来なかつたのです」寒月はにやに
や笑いながら例のごとく羽織の紐ひもを荷厄介にやっかいにしてい
る。

「ハハハハこれは面白い。僕の経験と善く似ているところが奇だ。やはりゼームス教授の材料になるね。人間の感応と云う題で写生文にしたらきつと文壇を驚かすよ。……そしてその○○子さんの病気はどうなったかね」と迷亭先生が追窮する。

にさんちまえ

「二三日前年始に行きましたら、門の内で下女と羽根を突いていましたから病気は全快したものと見え

ます」

主人は最前から沈思の体であつたが、この時ようやく口を開いて、「僕にもある」と負けぬ気を出す。

「あるって、何があるんだい」迷亭の眼中に主人などは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合あんごうで妙ですな」と寒月が笑う。

欠けた前歯のうちに空也餅くうやもちが着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違うようだ。何でも二十日頃はつかだよ。細君

が御歳暮の代りに摂津大掾せつつだいじょうを聞かしてくれろと云う

から、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物

は何だと聞いたたら、細君が新聞を参考して鰻谷うなぎだにだと

云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそうとその日はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持って来て今日は堀川ほりかわだからいいでしょうと云う。堀川は三味線もので賑やかなばかりで実みがないからよそうと云うと、細君は不平な顔をして引き下がった。

その翌日になると細君が云うには今日は三十三間堂です、私は是非せつ摂津の三十三間堂が聞きたい。あな

たは三十三間堂も御嫌いか知らないが、私に聞かせ
るのだからいっしょに行つて下すつても宜い^いでしよ
うと手詰^{てづめ}の談判をする。御前がそんなに行きたいな
ら行つても宜^よろしい、しかし一世一代と云うので大
変な大入だから到底突懸^{とうていつつか}けに行つたつて這入^{はい}れる気^き
遣^{つか}いはない。元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云
うものが在^あつてそれと交渉して相当の席を予約する

のが正当の手続きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、残念だが今日はやめようと云うと、細君は凄^{すご}い眼付をして、私は女ですからそんなむずかしい手続きなんか知りませんが、大原のお母あさんも、鈴木^{鈴木}の君代さんも正当の手続きを踏まないで立派に聞いて来たんですから、いくらあな^てあなたが教師だからって、そう手^て数^{すう}のかかる見物

をしないでもすみましよう、あなたはあんまりだと泣くような声を出す。それじゃ駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくって電車で行こうと降参をする
と、行くなら四時までに向うへ着くようにしなくつちやいけません、そんなぐずぐずしてはいられませんと急に勢がいい。なぜ四時までに行かなくては駄目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行って場所

をとらなくちや這入れないからですと鈴木の君代さんから教えられた通りを述べる。それじや四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですともと答える。すると君不思議な事にはその時から急に悪寒おかんがし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴんぴんしていらいあね。僕がさ。何だ

か穴の明いた風船玉のように一度に萎縮いしゆくする感じが起ると思うと、もう眼がぐらぐらして動けなくなつた」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

「ああ困つた事になつた。細君が年に一度の願だから是非叶かなえてやりたい。平生いつも叱りつけたり、口を聞かなかつたり、身上しんしょうの苦勞をさせたり、小供の世話

をさせたりするばかりで何一つ洒掃薪水さいそうしんすいの労に酬むくい

た事はない。今日は幸い時間もある、囊中のうちゆうには四五

枚の堵物とぶつもある。連れて行けば行かれる。細君も行

きたいだろう、僕も連れて行ってやりたい。是非連

れて行ってやりたいがこう悪寒がして眼がくらんで

は電車へ乗るどころか、靴脱くつぬぎへ降りる事も出来ない。

ああ気の毒だ気の毒だと思うとなお悪寒がしてなお

眼がくらんでくる。早く医者に見てもらって服薬で

もしたら四時前には全快するだろうと、それから細

君と相談をして甘木医学士を迎いにやると生憎昨夜

あまき

あいにくゆうべ

が当番でまだ大学から帰らない。二時頃には御帰り

になりますから、帰り次第すぐ上げますと云う返事

である。困ったなあ、今杏仁水でも飲めば四時前に

きょうにんすい

はきつと癒るに極なつておいるんだが、運の悪い時には

限の感慨である。悪寒はますます劇はげしくなる、眼は

いよいよぐらぐらする。もしや四時までに全快して

約束を履行りこうする事が出来なかつたら、氣の狭い女の

事だから何をするかも知れない。情なさけない仕儀にな

つて来た。どうしたら善かろう。万一の事を考える

と今の内に有為ういてんぺん轉變の理、生者必滅しょうじやひつめつの道を説き聞か

して、もしもの変が起つた時取り乱さないくらいの

おっと つま

覚悟をさせるのも、夫の妻に対する義務ではあるま

いかと考え出した。

僕は速すみやかに細君を書斎へ呼んだ

よ。呼んで御前は女だけれども many a s

lip 'twixt the cup and

the lip と云う西洋の諺ことわざくらいは心得てい

るだろうと聞くと、そんな横文字なんか誰が知るも

んですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じ

の癖にわざと英語を使つて人にかうのだから、

宜^{よろ}しゅうございます、どうせ英語なんかは出来ない

んですから、そんなに英語が御好きなら、なぜ耶蘇^{ヤソ}が

学校の卒業生^{つこう}かなんかをお貰いなさらなかったんで

す。あなたくらい冷酷な人はいはしないと非常な

権幕^{けんまく}なんで、僕もせつかくの計画の腰を折られてし

まった。君等にも弁解するが僕の英語は決して悪意

で使った訳じゃない。全く妻を愛する至情から出た

ので、それを妻のように解釈されては僕も立つ瀬が

ない。それにさっきからの悪寒おかんと眩暈めまいで少し脳が乱

れていたところへもって来て、早く有為転変、生者

必滅の理を呑み込ませようと少し急せぎ込んだものだ

から、つい細君の英語を知らないと言う事を忘れて、

何の気も付かずに使ってしまった訳さ。考えるところ

れは僕が悪^{わる}い、全く手落ちであつた。この失敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐらぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場へ行つて両^{もろ}肌を脱いで御化粧をして、箆^{たんす}笥から着物を出して着換える。もういつでも出掛けられますと云う風情^{ふぜい}で待ち構えている。僕は気が気でない。早く甘木君が来てくれれば善いかと思つて時計を見るともう三時だ。四時

にはもう一時間しかない。「そろそろ出掛けましようか」と妻君が書斎の開き戸を明けて顔を出す。自分の妻を褒めるのはおかしいようであるが、僕はこの時ほど細君を美しいと思つた事はなかつた。もろ肌を脱いで石鹼で磨き上げた皮膚がぴかついて黒縮緬の羽織と反映している。その顔が石鹼と摂津大掾を聞こうと云う希望との二つで、有形無形の両方面

から輝やいて見える。どうしてもその希望を満足させて出掛けてやろうと云う氣になる。それじゃ奮発して行こうかな、と一ぶくふかしているとようやく甘木先生が来た。うまい注文通りに行つた。が容体をはなすと、甘木先生は僕の舌を眺^{なが}めて、手を握つて、胸を敲^{たた}いて背を撫^なでて、目縁^{まぶち}を引つ繰り返して、頭蓋^{ずがいこつ}骨をさすつて、しばらく考え込んでいる。「ど

うも少し險吞けんどんのような気がしまして」と僕が云うと、

先生は落ちついて、「いえ格別の事もございませんま

い」と云う。「あのちよつとくらい外出致しても差さ

支えはございますまいね」と細君が聞く。「さよう」

と先生はまた考え込む。「御気分さえ御悪くなけれ

ば……」「気分は悪いですよ」と僕がいう。「じゃ

ともかくも頓服とんぷくと水薬すいやくを上げますから」「へえどう

か、何だかちと、危あぶないようになりそうですな」

「いや決して御心配になるほどの事じゃございません
ん、神経を御起しになるといけませんよ」と先生が
帰る。三時は三十分過ぎた。下女を薬取りにやる。
細君の嚴命で馳かけ出して行って、馳かけ出して返って
くる。四時十五分前である。四時にはまだ十五分あ
る。すると四時十五分前頃から、今まで何とも無か

ったのに、急に嘔はきけ氣もよを催おして來た。細君は水すいやく藥やくを

茶碗へ注ついで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取

り上げて飲もうとすると、胃の中からげーと云う者

が唸とっかん喊かんして出てくる。やむをえず茶碗を下へ置く。

細君は「早く御お飲のみになつたら宜いいでしよう」と逼せま

る。早く飲んで早く出掛けなくては義理が悪い。思

い切つて飲んでしまおうとまた茶碗を唇へつけると

またゲーが執念深く妨害をする。飲もうとしては茶

しゅうねんぶか

碗を置き、飲もうとしては茶碗を置いていると茶の間の柱時計がチンチンチンと四時を打った。さ

あ四時だ愚図愚図してはおられんと茶碗をまた取り

上げると、不思議だねえ君、実に不思議とはこの事

だろう、四時の音と共に吐きは気がけすっかり留まっ

水薬が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃

になると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事が出来たんだが、背中がぞくぞくするのも、眼がぐらぐらするのも夢のように消えて、当分立つ事も出来まいと思つた病氣がたちまち全快したのは嬉しかった」

「それから歌舞伎座へいっしょに行つたのかい」と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞く。

「行きたかったが四時を過ぎちゃ、這入れないと云

う細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。

もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれたら僕の

義理も立つし、妻さいも満足したろうに、わずか十五分

の差でね、実に残念な事をした。考え出すとあぶな

いところだったと今でも思うのさ」

語り了おわった主人はようやく自分の義務をすました

ような風をする。これで兩人に対して顔が立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた齒を出して笑いながら

「それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとぼけた顔をして「君のような親切な夫をおっと

持った妻君は実に仕合せだな」と独り言ひとことのよう

う。障子の蔭でエヘンと云う細君の咳せき払いばらが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いていた
がおかしくも悲しくもなかった。人間というものは
時間を潰すために強いて口を運動させて、おかしく
もない事を笑ったり、面白くもない事を嬉しがった
りするほかに能もない者だと思った。吾輩の主人の
わがまま　へんきよう
我儘で偏狭な事は前から承知していたが、平常は言
ふだん

葉数を使わないので何だか了解しかねる点があるように思われていた。その了解しかねる点に少しは恐
しいと云う感じもあつたが、今の話を聞いてから急
に軽蔑けいべつしたくなつた。かれはなぜ兩人の話しを沈黙
して聞いていられないのだらう。負けぬ氣になつて
愚ぐにもつかぬ駄弁ろを弄すれば何の所得があるだらう。
エピクテタスにそんな事をしろと書いてあるのか知

らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、

へちま

彼等は糸瓜のごとく風に吹かれて超然と澄し切つて

すま

いるようなものの、その実はやはり娑婆しやば気もあり慾よ

気くけもある。競争の念、勝とう勝とうの心は彼等が日

常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一歩進めば

ばとう

ぞつこつども

彼等が平常罵倒している俗骨共と一つ穴の動物にな

るのは猫より見て気の毒の至りである。ただその言

語動作が普通の半可通はんかつうのごとく、文切り形もんきがたの厭味を

帯びてないのはいささかの取り得とえでもあろう。

こう考えると急に三人の談話が面白くなかった

ので、三毛子の様子でも見て来きようかと二絃琴にげんきんの御

師匠さんの庭口へ廻る。門松注目かどまつしめ飾りかざはすでに取り

払われて正月も早はや十日となつたが、うららかな春は

日るびは一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度

に照らして、十坪に足らぬ庭の面も元日の曙光しやこうを受

あざや

けた時より鮮かな活気を呈している。椽側ぎぶとんに座蒲団

が一つあつて人影も見えず、障子も立て切つてある

のは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師

匠さんは留守でも構わんが、三毛子は少しは宜いい方

か、それが気掛りである。ひっそりして人の気合けわいも

しないから、泥足のまま椽側えんがわへ上あがつて座蒲団の真中

へ寝^ね転^ころんで見るといい心持ちだ。ついうとうととして、三毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。

「御苦労だった。出来たかえ」御師匠さんはやはり留守ではなかったのだ。

「はい遅くなりましたて、仏^{ぶつ}師^し屋^やへ参りましたらちようど出来上ったところだと申しまして」「どれお見

せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かば
れましょう。金きんは剥はげる事はあるまいね」「ええ念
を押しましたら上等を使つたからこれなら人間の位い
牌はいよりも持つと申しておりました。……それから猫みよ
誉信女うよしんによの誉の字は崩くずした方が恰好かっこうがいいから少し劃かく
を易かえたと申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上
げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変わだ

と蒲団の上へ立ち上る。チーン南無猫誉信女、南無

なむみようよしんによ

なむ

阿弥陀仏南無阿弥陀仏と御師匠さんの声がする。

あみだぶつ

「御前も回向えこうをしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と

今度は下女の声がする。吾輩は急に動悸どうきがして来た。

座蒲団の上に立ったまま、木彫きぼりの猫のように眼も動

かさない。

「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちよいと風邪かぜを引いたんでございましょうがねえ」「甘木さんが薬でも下さると、よかったかも知れないよ」

「一体あの甘木さんが悪うございますよ、あんまり

三毛を馬鹿にし過ぎますあね」「そう人様ひとさまの事を悪

く云うものではない。これも寿命じゅみょうだから」

三毛子も甘木先生に診察して貰ったものと見える。

「つまるところ表通りの教師のうちの野良猫のらねこが無暗むやみ

に誘い出したからだと、わたしは思うよ」「ええあ

の畜生ちきしょうが三毛のかたきでございますよ」

少し弁解したかったが、ここが我慢のしどころと

唾つばを呑んで聞いている。話しはしばし途切とぎれる。

「世の中は自由にならん者でのう。三毛のような器

量よしは早死はやじにをするし。不器量な野良猫は達者でい

たずらをしているし……」 「その通りでございます

よ。三毛のような可愛らしい猫は鐘と太鼓で探して

あるいたって、二人ふたりとはおりませんからね」

二匹と云う代りに二ふたりといった。下女の考えで

は猫と人間とは同種族ものと思つているらしい。そ

う云えばこの下女の顔は吾等猫属ねこぞくとはなはだ類似している。

「出来るものなら三毛の代りに……」 「あの教師の所の野良のらが死ぬと御誂おあつらえ通りに参ったんでございませうがねえ」

御誂え通りになつては、ちと困る。死ぬと云う事はどんなものか、まだ経験した事がないから好きと

も嫌いとも云えないが、先日あまり寒いので火消壺ひけしつぼ

の中へもぐり込んでいたら、下女が吾輩がいるのも

知らんで上から蓋ふたをした事があつた。その時の苦し

さは考えても恐しくなるほどであつた。白君の説明

によるとあの苦しみが今少し続くと死ぬのであるそ

うだ。三毛子の身代りみがわになるのなら苦情もないが、

あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出来ないのなら、

誰のためでも死にたくはない。

「しかし猫でも坊さんの御経を読んでもらったり、

戒名をかいみようこしらえてもらったのだから心残りはあるま

い」「そうでございますとも、全く果報者でかほうものござい

ますよ。ただ慾を云うとあの坊さんの御経があまり

軽少だったようでございますね」「少し短か過ぎた

ようだったから、大変御早うございますねと御尋ね

をしたたら、月桂寺げっけいじさんは、ええ利目ききめのあるところを

ちよいとやっておきました、なに猫だからあのくらいで充分浄土へ行かれますとおっしゃったよ」「あらまあ……しかしあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だつ

て浮かばれる事はございませんよ」

吾輩はその後ご野良が何百遍繰り返されたかを知ら

ぬ。吾輩はこの際限なき談話を中途で聞き棄てて、

布団ふとんをすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八万八

千八百八十本の毛髪を一度にたてて身震みぶるいをした。

その後二絃琴ごにげんきんの御師匠さんの近所へは寄りついた事

がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽

少な御回向ごえこうを受けているだろう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵ものうく

感ぜらるる。主人に劣らぬほどの無性猫ぶしょうねことなつた。

主人が書齋にのみ閉じ籠こもっているのを人が失恋だ失

恋だと評するのも無理はないと思うようになった。

ねずみ

鼠はまだ取つた事がないので、一時は御三おさんから放ほう

ちくろん
ていしゅつ

逐論さえ呈出された事もあつたが、主人は吾輩の普

通一般の猫でないと云う事を知っているものだから
吾輩はやはりのらくらしてこの家やに起臥きがしている。

この点については深く主人の恩を感謝すると同時に

その活眼かつがんに対して敬服の意を表するに躊躇ちゅうちよしないつ

もりである。御三が吾輩を知らずして虐待をするの

は別に腹も立たない。今に左甚五郎ひだりじんごろうが出て来て、吾

輩の肖像を楼門ろうもんの柱きざに刻み、日本のスタンランが好

んで吾輩の似顔をカンヴァスの上に描くようになつたら、彼等鈍^{どん}瞎^{かつ}漢^{かん}は始めて自己の不明を恥^はずるであらう。

三

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか寂^{せき}寞^{ばく}

の感はあるが、幸い人間に知己ちぎが出来たのでさほど

退屈とも思わぬ。せんだつては主人の許もとへ吾輩の写

真を送ってくれと手紙で依頼した男がある。この間

は岡山の名産吉備きび団子だんごをわざわざ吾輩の名宛で届け

てくれた人がある。だんだん人間から同情を寄せら

るに従つて、己おのれが猫である事はようやく忘却して

くる。猫よりはいつの間まにか人間の方へ接近して来

たような心持になつて、同族を糾合して二本足の先

しゅう

生と雌雄を決しようなどと云う量見は昨今のところ

もうとう

毛頭ない。それのみか折々は吾輩もまた人間世界の

一人だと思ふ折さえあるくらいに進化したのはたの

けいべつ

もしい。あえて同族を軽蔑する次第ではない。ただ

いきおい

性情の近きところに向つて一身の安きを置くは勢の

しからしむるところで、これを変心とか、軽薄とか、

裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言

語を弄ろうして人を罵詈ばりするものに限つて融通の利きかぬ

貧乏性の男が多いようだ。こう猫の習癖を脱化して

見ると三毛子や黒の事ばかり荷厄介きぐらいにしている訳に

は行かん。やはり人間同等の氣位きぐらいで彼等の思想、言

行を評隲ひょうしつしたくなる。これも無理はあるまい。ただ

そのくらいな見識を有している吾輩をやはり一般猫びよ

児うじの毛の生はえたもののくらいに思つて、主人が吾輩に

一言いちごん

の挨拶もなく、吉備きびだんご団子をわが物顔に喰い尽し

たのは残念の次第である。写真もまだ撮とつて送らぬ

ようす

容子だ。これも不平と云えば不平だが、主人は主人、

吾輩は吾輩で、相互の見解が自然こと異なるのは致し方

もあるまい。吾輩はどこまでも人間になりすまして

いるのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしても

ちよいと筆に上りのぼにくい。迷亭、寒月諸先生の評判だけで御免蒙ごうむる事に致そう。

今日は上天氣の日曜なので、主人はのそのそ書齋

から出て来て、吾輩の傍そばへ筆硯ふですずりと原稿用紙を並べて

腹這はらばいになつて、しきりに何か唸うなっている。大方草稿

を書き卸おろす序開じよびらきとして妙な声を発するのだらうと

注目していると、ややしばらくして筆太ふでぶとに「香こう一いつ炷しゆ」

とかいた。はてな詩になるか、俳句になるか、香一

炷とは、主人にしては少し洒落過ぎしやれているがと思う

間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、新たに行ぎよう

を改めて「さつきから天然居士てんねんこじの事をかこうと考え

ている」と筆を走らせた。筆はそれだけではたと留

ったぎり動かない。主人は筆を持って首を捻ひねったが

別段名案もないものと見えて筆の穂を嘗なめだした。

唇が真黒になつたと見てゐると、今度はその下へちよいと丸をかいだ。丸の中へ点を二つうつて眼をつける。真中へ小鼻の開いた鼻をかいて、真一文字に口を横へ引張つた、これでは文章でも俳句でもない。主人も自分で愛想あいそが尽きたと見えて、そこそこに顔を塗り消してしまつた。主人はまた行ぎようを改める。彼の考によると行さえ改めれば詩か賛か語か録か何なんか

になるだろうとただ宛もなく考えているらしい。や

がて「天然居士は空間を研究し、論語を読み、焼芋やきいも

を食い、鼻汁はなを垂らす人である」と言文一致体で一

気呵成つきかせいに書き流した、何となくごたごたした文章で

ある。それから主人はこれを遠慮なく朗読して、い

つになく「ハハハハ面白い」と笑ったが「鼻汁はなを垂

らすのは、ちと酷こくだから消そう」とその句だけへ棒

を引く。一本ですむところを二本引き三本引き、奇

麗な併行線へいこうせんを描くか、線がほかの行まで食はみ出して

構わず引いている。線が八本並んでもあとの句が出

来ないと見えて、今度は筆を捨てて髭ひげを捻ひねって見る。

文章を髭から捻り出して御覧に入れますと云う見幕けんまく

で猛烈に捻ってはねじ上げ、ねじ下ろしているところ

ろへ、茶の間から妻君さいくんが出て来てぴたりと主人の鼻

の先へ坐すわる。「あなたちよつと」と呼ぶ。「なん

だ」と主人は水中で銅鑼どらを叩たたくような声を出す。返

事が氣に入らないと見えて妻君はまた「あなたちよ

つと」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親

指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと抜く。「今月は

ちつと足りませんが……」「足りんはずはない、医

者へも薬礼はすましたし、本屋へも先月払ったじや

ないか。今月は余らなければならん」とすまして抜き取った鼻毛を天下の奇観のごとく眺^{なが}めている。

「それでもあなたが御飯を召し上らんで麵^{パン}麩^をを御食^{おた}べになつたり、ジャムを御舐^{おな}めになるものですから」

「元来ジャムは幾^{いく}缶^{かん}舐めたのかい」「今月は八つ入^い

りましたよ」「八つ？　そんなに舐めた覚えはない」

「あなたばかりじゃありません、子供も舐めます」

「いくら舐めたって五六円くらいなものだ」と主人は平気な顔で鼻毛を一本一本丁寧に原稿紙の上へ植付ける。肉が付いているのでぴんと針を立てたごとく立つ。主人は思わぬ発見をして感じ入った体で、ふっと吹いて見る。ねんちやくりよく粘着力が強いので決して飛ばない。「いやに頑固がんこだな」と主人は一生懸命に吹く。「ジャムばかりじゃないんです、ほかに買わなけり

や、ならない物もあります」とおおいと妻君は大に不平な気け

しき色を両頬に漲みなぎらす。

「あるかも知れないさ」と主人

はまた指を突っ込んでぐいと鼻毛を抜く。赤いのや、

黒いのや、種々の色まじが交る中に一本真白なのがある。

大に驚いた様子で穴の開あくほど眺めていた主人は指

の股へ挟んだまま、その鼻毛を妻君の顔の前へ出す。

「あら、いやだ」と妻君は顔をしかめて、主人の手

を突き戻す。「ちよつと見ろ、鼻毛の白髪しらがだ」と主

人は大に感動した様子である。さすがの妻君も笑いながら茶の間へ這はい入る。経済問題は断念したらしい。

主人はまた天然居士てんねんこじに取り懸かる。

鼻毛で妻君を追払った主人は、まずこれで安心と

云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿をかこうと焦あせる

体ていであるがなかなか筆は動かない。「焼芋やきいもを食くうも

蛇足だ、割愛しよう」とついにこの句も抹殺する。だそくかつあいまっさつ

「香一炷もあまり唐突だから已めろ」と惜気もなくとうとつや

筆誅する。ひつちゅう余す所は「天然居士は空間を研究し論語

を読む人である」と云う一句になってしまった。主

人はこれでは何だか簡単過ぎるようだなと考えてい

たが、ええ面倒臭い、文章は御廃しにして、銘だけおはい

にしろと、筆を十文字に揮ふるつて原稿紙の上へ下手な

文人画の蘭を勢よくかく。せつかくの苦心も一字残らず落第となつた。それから裏を返して「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居てんねん士噫こしあゐ」と意味不明な語を連ねていところへ例のごとく迷亭が這入はいつて来る。迷亭は人の家うちも自分の家も同じものと心得ているのか案内も乞わず、ずかずか上ってくる、のみならず時には勝手口から飄然ひょうぜんと

舞い込む事もある、心配、遠慮、気兼きがね、苦勞、を生れる時どこかへ振り落した男である。

「また巨人引力かね」と立つたまま主人に聞く。

「そう、いつでも巨人引力ばかり書いてはおらんさ。

天然居士の墓銘を撰せんしているところなんだ」と大袈おお

袈けさな事を云う。「天然居士と云うなあやはり偶然童

子このような戒名かね」と迷亭は不相変出鱈目あいかわらずでたらめを云う。

「偶然童子と云うのもあるのかい」「なに有りやし

ないがまずその見当けんとうだろうと思つていらあね」「偶

然童子と云うのは僕の知つたものじゃないようだが

天然居士と云うのは、君の知つてる男だぜ」「一体

だれが天然居士なんて名を付けてすましているんだ

い」「例の曾呂崎そろさきの事だ。卒業して大学院へ這入つ

て空間論と云う題目で研究していたが、あまり勉強

し過ぎて腹膜炎で死んでしまった。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」「親友でもいいさ、決して悪いと云やしない。しかしその曾呂崎を天然居士に変化させたのは一体誰の所作しよさだい」「僕さ、僕がつけてやったんだ。元来坊主のつける戒名ほど俗なものはないからな」と天然居士はよほど雅がな名のように自慢する。迷亭は笑いながら「まあその墓碑銘ぼひめい

と云う奴を見せ給え」と原稿を取り上げて「何だ：

：空間に生れ、空間を究め^{きわ}、空間に死す。空たり間

たり天然居士噫^{あゐ}」と大きな声で読み上る^{あげ}。「なるほ

どこりやあ善^いい、天然居士相当のところだ」主人は

嬉しそうに「善いだろう」と云う。「この墓銘^{ぼめい}を沢^{たく}

庵石^{あんいし}へ彫^ほり付けて本堂の裏手^{ちからいし}へ力石のように抛^{ほう}り出

して置くんだね。雅^がでいいや、天然居士も浮かばれ

る訳だ」「僕もそうしようと思つてゐるのさ」と主人は至極真面目に答えたが「僕あちよつと失敬するよ、じき帰るから猫にでもからかつていてくれ給え」と迷亭の返事も待たず風然ふうぜんと出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想ぶあいそな顔もしてゐられないから、ニヤーニヤーと愛嬌あいぎょうを振り蒔まいて膝ひざの上へ這はい上あがつて見た。すると迷亭は

「イヨー大分肥たいぶふとったな、どれ」と無作法ぶさほうにも吾輩の

襟髪えりがみを攫つかんで宙へ釣るす。「あと足をこうぶら下げ

ては、鼠ねずみは取れそうもない、……どうです奥さんこ

の猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは不足だ

と見えて、隣りの室へやの妻君に話しかける。「鼠どこ

ろじゃございません。御雑煮おぞうにを食べて踊りをおどる

んですもの」と妻君は飛んだところで旧悪あばを暴く。

吾輩は宙乗りちゆうのりをしながらも少々極りが悪かった。迷

亭はまだ吾輩を卸おろしてくれない。「なるほど踊りで

もおどりそうな顔だ。奥さんこの猫は油断のならな

い相好そうごうですぜ。昔むかしの草双紙くさぞうしにある猫ねこ又またに似ていま

すよ」と勝手な事を言いながら、しきりに細君さいくんに話

しかける。細君は迷惑そうに針仕事の手をやめて座

敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と茶を注ぎ

易^かえて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね」

「どこへ参るにも断わつて行つた事の無い男ですか
ら分りかねますが、大方御医者へでも行つたんでし

よう」甘木さんですか、甘木さんもあんな病人に

捕^{つら}まっちゃ災難ですな」「へえ」と細君は挨拶のし

ようもないと見えて簡単な答えをする。迷亭は一向^{いっこう}

頓着しない。「近頃はどうです、少しは胃の加減が

能^いいんですか」「能^いいか悪いか頓^{とん}と分りません、い

くら甘木さんにかかったって、あんなにジャムばか

り嘗^なめては胃病の直る訳がないと思います」と細君

は先刻^{せんこく}の不平を暗^{あん}に迷亭に洩^もらす。「そんなにジャ

ムを嘗めるんですかまるで小供のようですね」「ジ

ヤムばかりじゃないんで、この頃は胃病の薬だとか

云つて大根卸しを無暗に嘗めますので……」 「驚ろ

だいこおろ

むやみ

いたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸の中に

だいこおろし

はジャスターゼが有るとか云う話しを新聞で読んで

からです」 「なるほどそれでジャムの損害を償おう

つぐな

と云う趣向ですな。なかなか考えていらあハハハハ」

と迷亭は細君の訴を聞いて大に愉快的な気色である。

うったえ

おおい

けしき

「この間などは赤ん坊にまで嘗めさせまして……」

「ジャムをですか」 「いいえ大根卸を……あなた。だいこおろし

坊や御父様がうまいものをやるからおいでてって、

——たまに小供を可愛がってくれるかと思うとそん

な馬鹿な事ばかりするんです。にさんちまえ 二三日前には中の娘

を抱いてたんす箆笥の上へあげましてね……」 「どう云う

趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向づく

めに解釈する。「なに趣向も何も有りやしません、

ただその上から飛び下りて見ろと云うんですわ、三

つや四つの女の子ですもの、そんな御転婆おてんばな事が出

来るはずがないです」「なるほどこりや趣向が無さ

過ぎましたね。しかしあれで腹の中は毒のない善人

ですよ」「あの上腹の中に毒があっちゃ、辛防しんぼうは出

来ませんわ」と細君はおおい大にきえん気焰を揚げる。「まあそ

んなに不平を云わんでも善いでさあ。こうやって不

足なくその日その日が暮らして行かれれば上の分じょうぶんで

すよ。苦沙弥君くしゃみくんなどは道楽はせず、服装にも構わず、

地味に世帯向しやたいむきに出来上った人でさあ」と迷亭は柄がら

にない説教を陽気な調子でやっている。「ところが

あなた大違いで……」何か内々でやりますかね。

油断のならない世の中だからね」と飄然ひようぜんとふわふわ

した返事をする。「ほかの道楽はないですが、無暗むやみ

に読みもしない本ばかり買いましてね。それも善い

加減に見計^{みはか}らって買ってくれと善いんですけれど、

勝手に丸善へ行っちゃ何冊でも取って来て、月末に

なると知らん顔をしているんですもの、去年の暮な

んか、月々のが溜^{たま}って大変困りました」「なあに書

物なんか取って来るだけ取って来て構わんですよ。

払いをとりに来たら今にやる今にやると云っていい

や歸つてしまいまさあ」「それでも、そういつまで

も引張る訳にも参りませんから」と妻君は懽然ぶぜんとし

ている。「それじゃ、訳を話して書籍費しよじやくひを削減させ

るさ」「どうして、そんな言ことを云つたって、なかなか

か聞くものですか、この間などは貴様は学者の妻さいに

も似合わん、毫べこうも書籍の価値を解しておらん、昔むかし

ローマローマにこう云う話がある。後学のため聞いておけ

と云うんです」「そりや面白い、どんな話ですか」

迷亭は乗気になる。細君に同情を表しているという

よりむしろ好奇心に駆かられている。「何んでも昔し

ローマローマに樽金たるきんとか云う王様があつて……」「樽金たるきん？

樽金はちと妙ですぜ」「私は唐人とうじんの名なんかむずか

しくて覚えられせんわ。何でも七代目なんだそう

です」「なるほど七代目樽金は妙ですな。ふんその

七代目樽金がどうかしましたかい」「あら、あなたまで冷かしては立つ瀬がありませんわ。知っていらっしゃるなら教えて下さればいいじゃないですか、人の悪い」と、細君は迷亭へ食って掛る。「何冷かすなんて、そんな人の悪い事をする僕じゃない。ただ七代目樽金は振ふるつてると思つてね……ええお待ちなさいよ羅馬ローマの七代目の王様ですね、こうつとたし

かには覚えていないがタークイン・ゼ・プラウドの
事でしょう。まあ誰でもいい、その王様がどうしま
した」「その王様の所へ一人の女が本を九冊持つて
来て買ってくれないかと云ったんだそうです」「な
るほど」「王様がいくらなら売るといつて聞いたら
大変な高い事を云うんですって、あまり高いもんだ
から少し負けないかと云うとその女がいきなり九冊

の内の三冊を火にくべて焚やいてしまったそうです」

「惜しい事をしましたな」「その本の内には予言か何かほかで見られない事が書いてあるんですって」

「へえー」「王様は九冊が六冊になったから少しは価ねも減ったろうと思つて六冊でいくらだと聞くと、

やはり元の通り一文も引かないそうです、それは乱暴だと云うと、その女はまた三冊をとつて火にくべ

たそうです。王様はまだ未練があつたと見えて、余
つた三冊をいくらで売ると聞くと、やはり九冊分の
ねだんをくれと云うそうです。九冊が六冊になり、
六冊が三冊になつても代価は、元の通り一厘も引か
ない、それを引かせようとすると、残つてる三冊も
火にくべるかも知れないので、王様はどうとう高い
御金を出して焚^やけ余^{あま}りの三冊を買つたんですって：

：どうだこの話で少しは書物のありがた味^みが分つたろう、どうだと力味^{りき}むのですけれど、私にや何があるがたいんだか、まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を促^{うな}がす。さすがの迷亭も少々窮したと見えて、袂^{たもと}からハンケチを出して吾輩をじやらしていたが「しかし奥さん」と急に何か考えついたように大きな声を出す。「あんなに本

を買って矢鱈やたらに詰め込むものだから人から少しは学

者だとか何とか云われるんですよ。この間ある文学

雑誌を見たら苦沙弥君くしゃみくんの評が出ていましたよ」「ほ

んとに？」と細君は向き直る。主人の評判が気にか

かるのは、やはり夫婦と見える。「何とかいてあつ

たんです」「なあに二三行ばかりですがね。苦沙弥

君の文は行雲流水こううんりゅうすいのごととありましたよ」「細君は

少しにこにこして「それぎりですか」「その次にね

たちま

——出ずるかと思えば忽ち消え、逝ゆいては長えとこしなに帰

るを忘るとありましたよ」細君は妙な顔をして「賞ほ

めたんでしうか」と心元ない調子である。「まあ

賞めた方でしうな」と迷亭は済ましてハンケチを

吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商買道具で仕

へんくつ

方もござんすまいが、よっぱど偏屈へんくつでしてねえ」迷

亭はまた別途の方面から来たなと思つて「偏屈は少々偏屈ですね、学問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような弁護をするような不即不離の妙答をする。「せんだつてなどは学校から歸つてすぐわきへ出るのに着物を着換えるのが面倒だものですから、あなたがいとう外套も脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。御膳おぜんを火燵こたつ櫓の上へ乗

せまして――私は御櫃おはちを抱かかえて坐っておりましたが

おかしくって……」 「何だかハイカラの首実検のよ

うですな。しかしそんなところが苦沙弥君の苦沙弥

君たるところで――とにかく月並つきなみでない」と切せつない

褒ほめ方をする。「月並か月並でないか女には分りま

せんが、なんぼ何でも、あまり乱暴ですわ」「しか

し月並より好いですよ」と無暗に加勢すると細君は

不満な様子で「一体、月並月並と皆さんが、よくお
つしやいますが、どんなのが月並なんです」と開き
直つて月並の定義を質問する、「月並ですか、月並
と云うと——さようちと説明しにくいのですが……」

「そんな曖昧あいまいなものなら月並だつて好さそうなもの

じゃありませんか」と細君は女人にょにん一流の論理法で詰

め寄せる。「曖昧じゃありませんよ、ちゃんと分つ

ています、ただ説明しにくいだけの事でさあ」「何でも自分の嫌いな事を月並と云うんでしよう」と細君は我^{われ}知らず穿^{うが}つた事を云う。迷亭もこうなると何とか月並の処置を付けなければならぬ仕儀となる。

「奥さん、月並と云うのはね、まず年は二八か二九からぬと言わず語らず物思いの間^{あいだ}に寝転んでいて、この日や天気晴朗とくると必ず一瓢を携えて墨堤に

遊ぶ連中、れんじゅうを云うんです」「そんな連中があるでしよ

うか」と細君は分らんものだから好加減いいな挨拶をす

る。「何だかごたごたして私には分りませんわ」と

ついに我がを折る。「それじゃ馬琴ばきんの胴へメジヨオ・

ペンデニスの首をつけて一二年欧州の空氣で包んで

おくんですね」「そうすると月並が出来るでしょう

か」「迷亭は返事をしないで笑っている。「何そんな

てすう
手数のかかる事をしないで出来ます。中学校の生

徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な月並が

出来上ります」 「そうでしようか」と細君は首を捻ひね

ったまま納得なっとくし兼ねたと云う風情ふぜいに見える。

「君まだいるのか」と主人はいつの間まにやら帰って

来て迷亭の傍そばへ坐すわる。「まだいるのかはちと酷こくだ

な、すぐ帰るから待ってい給えと言ったじゃないか」

「万事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧みる。かえり

「今君の留守中に君の逸話を残らず聞いてしまったぜ」女はとかく多弁でいかん、人間もこの猫くら

い沈黙を守るといいがな」と主人は吾輩の頭を撫でな

てくれる。「君は赤ん坊に大根卸しを嘗めさしたそだいこおろ
な

うだな」「ふむ」と主人は笑ったが「赤ん坊でも近

頃の赤ん坊はなかなか利口だぜ。それ以来、坊や辛から

いのはどこと聞くときつと舌を出すから妙だ」「ま

るで犬に芸を仕込む氣でいるから残酷だ。時に寒月かんげつ

はもう来そうなものだな」「寒月が来るのかい」と

主人は不審な顔をする。「来るんだ。午後一時まで

に苦沙弥くしゃみの家うちへ来いと端書はがきを出しておいたから」

「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を

呼んで何をするんだい」「なあに今日のはこっちの

趣向じやない寒月先生自身の要求さ。先生何でも理
学協会で演説をするとか云うのでね。その稽古をや
るから僕に聴いてくれと云うから、そりやちようど
いい苦沙弥にも聞かしてやろうと云うのでね。そこ
で君の家へ呼ぶ事にしておいたのさ——うちなあに君は
ひま人だからちようどいいやね——さしつか差支えなんぞあ
る男じやない、聞くがいいさ」と迷亭は独りひとで呑み

込んでいる。「物理学の演説なんか僕にや分らん」

と主人は少々迷亭の専断を憤ったもののごとくに云

せんだん いきどお

う。「ところがその問題がマグネ付けられたノツズ

ルについてなどと云う乾燥無味なものじゃないんだ。

首縊りの力学と云う脱俗超凡な演題なのだから傾聴

だつぞくちようぼん

する価値があるさ」「君は首を縊り損くなつた男だ

くく

そ

から傾聴するが好いが僕なんざあ……」「歌舞伎座

で悪寒おかんがするくらいの人間だから聞かれないと云う

結論は出そうもないぜ」と例のごとく軽口を叩く。

妻君はホホと笑って主人を顧かえりみながら次の間へ退く。

主人は無言のまま吾輩の頭を撫なでる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分くらいすると注文通り寒月君が来る。今日は晩に演舌えんぜつをするというので例になく立派

なフロックを着て、洗濯し立ての白襟カラーを聳そびやかして、

男振りを二割方上げて、「少し後おくれまして」と落ち

つき払って、挨拶をする。「さつきから二人で大待

ちに待ったところなんだ。早速願おう、なあ君」と

主人を見る。主人もやむを得ず「うむ」と生返事なまへんじを

する。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂

戴しましよう」と云う。「いよー本式にやるのか次

には拍手の請求とおいでなさるだろう」と迷亭は独りで騒ぎ立てる。寒月君は内隠うちかくしから草稿を取り出して徐ろおもむに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願います」と前置をして、いよいよ演舌の御浚おさらいを始める。

「罪人を絞罪こうざいの刑に処すると云う事は重おもにアングロサクソン民族間に行われた方法でありまして、それ

より古代に溯さかのぼつて考えますと首縊くびくりは重に自殺の方

法として行われた者であります。猶太人中ユダヤじんちゆうに在あつて

は罪人を石を抛なげつけて殺す習慣であつたそうでご

ざいます。旧約全書を研究して見ますといわゆるハ

ンギングなる語は罪人の死体を釣つるして野獸または

肉食鳥の餌食えじきとする意義と認められます。ヘロドタ

スの説に従つて見ますと猶太人ユダヤじんはエジプトを去る以

やちゆう

さら

い

前から夜中死骸を曝さらされることを痛く忌いみ嫌ったように思われます。エジプト人は罪人の首を斬って胴

くぎづ

だけを十字架に釘付けにして夜中曝し物にしたそう

ペルシャじん

で御座います。波斯人は……」寒月君首縊りと縁

がだんだん遠くなるようだが大丈夫かい」と迷亭が

はい

口を入れる。「これから本論に這はい入るところですか

ごしんぼう

ら、少々御辛防ごしんぼうを願います。……さて波斯人はどう

かと申しますとこれもやはり処刑には磔はりつけを用いたよ

うでございます。但し生きているうちに張付けはりつけに致

したもののか、死んでから釘を打ったもののかその辺へんは

ちと分りかねます……」 「そんな事は分らんでもい

いさ」と主人は退屈そうに欠伸あくびをする。「まだいろ

いろ御話し致したい事もございますが、御迷惑であ

らっしゃいましょうから……」 「あらっしゃいまし

ようより、いらつしやいましょうの方が聞きたいよ、

ねえくしやみくん苦沙弥君」とまた迷亭が咎とがめ立だてをすると主人は

「どっちでも同じ事だ」と氣のない返事をする。

「さていよいよ本題に入りまして弁へんじます」 「弁へんじ

ます、なんか講釈師の云い草だ。演舌家はもつと上品

な詞ことばを使つて貰いたいね」と迷亭先生また交まぜ返す。

「弁へんじます、が下品なら何と云つたらいいでしょう」

と寒月君は少々むっとした調子で問いかける。「迷亭のは聴いているのか、交まぜ返しているのか判然しない。寒月君そんな弥次馬やじうまに構わず、さっさとやるが好い」と主人はなるべく早く難関を切り抜けようとする。「むっとして弁じましたる柳かな、かね」と迷亭はあいかわらず飄然ひようぜんたる事を云う。寒月は思わず吹き出す。「真に処刑として絞殺を用いました

のは、私の調べました結果によりますると、オディ
セーの二十二巻目に出ております。すなわ即ち彼のかテレマ

カスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺するという

条くだりでございます。ギリシヤご希臘語で本文を朗読しても宜よろし

ゆうございますが、ちと銜てらうような気味にもなりま

すからやめに致します。四百六十五行から、四百七

十三行を御覧になると分ります」うんぬん「希臘語云々はよ

した方がいい、さも希臘語が出来ますと云わんばかりだ、ねえ苦沙弥君」 「それは僕も賛成だ、そんな物欲しそうな事は言わん方が奥床おくゆかしくて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加担する。両人りょうにんは毫ごうも希臘語が読めないのである。 「それではこの両三句は今晚抜く事に致しまして次を弁じ——ええ申し上げます。

この絞殺を今から想像して見ますと、これを執行するに二つの方法があります。第一は、彼の^かテレマカスがユーミアス及びフヒリーシャスの援を^{たすけ}藉^かりて縄の一端を柱へ括^{くく}りつけます。そしてその縄の所々へ結び目を穴に開けてこの穴へ女の頭を一つずつ入れておいて、片方の端を^{はじ}ぐいと引張って釣し上げたものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋のシャツの

ように女がぶら下つたと見れば好いんだろう」「その通りで、それから第二は縄の一端を前のごとく柱へ括り付けて他の一端も始めから天井へ高く釣るのです。そしてその高い縄から何本か別の縄を下げて、それに結び目の輪になつたのを付けて女の頸くびを入れ
ておいて、いざと云う時に女の足台を取りはずすと云う趣向なのです」「たとえて云うと縄なわのれん暖簾の先へ

提灯玉を釣したような景色と思えば間違はあるまい」

「提灯玉と云う玉は見た事がないから何とも申されませんが、もしあるとすればその辺へんのところかと思っています。——それでこれから力学的に第一の場合は到底成立すべきものでないと云う事を証拠立てて御覧に入れます」 「面白いな」と迷亭が云うと「うん面白い」と主人も一致する。

「まず女が同距離に釣られると仮定します。また一番地面に近い二人の女の首と首を繋いでいる繩は水平ゾンタルと仮定します。そこで $\alpha_1 \alpha_2 \cdots \alpha_6$ を繩が地平線と形づくる角度とし、 $T_1 T_2 \cdots T_6$ を繩の各部が受ける力と見做し、 $T_7 \parallel X$ は繩のもっとも低い部分の受ける力とします。 W は勿論女の体重と御承知下さい。どうです御分りになりました

たか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分つた」と云う。

但しこの大抵と云う度合は兩人が勝手りょうにんに作ったのだから他人の場合には応用が出来ないかも知れない。

「さて多角形に関する御存じの平均性理論によりまして、下しものごとく十二の方程式が立ちます。T1c

$$\cos \alpha_1 = T_2 \cos \alpha_2 : \dots : (1) \quad T_2 \cos$$

$$s \alpha 2 = T 3 \cos \alpha 3 \cdots \cdots (2) \cdots \cdots$$
」 「方

程式はそのくらいで沢山だろう」と主人は乱暴な事を云う。「実はこの式が演説の首脳なんですが」と寒月君ははなはだ残り惜し気に見える。「それじゃ首脳だけは逐^おつて伺^おう事にしようじゃないか」と迷亭も少々恐縮の体^{てい}に見受けられる。「この式を略してしまおうとせつかくの力学的研究がまるで駄目にな

るのですが……」 「何そんな遠慮はいらんから、ずんずん略すさ……」 と主人は平気で云う。 「それでは仰せに従つて、無理ですが略しましょう」 「それがよかろう」と迷亭が妙なところで手をぱちぱちと叩く。

「それから英国へ移つて論じますと、ベオウルフの中に絞首架即ちガルガこうしゆなすなわと申す字が見えますから絞罪

の刑はこの時代から行われたものに違ないと思われる
ます。ブラクストーンの説によるともし絞罪に処せ
られる罪人が、万一縄の具合で死に切れぬ時は再度ふたたび
同様の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙
な事にはピヤース・プローマンの中にはたとい仮令兇漢で
も二度絞しめる法はないと云う句があるのです。まあ
どっちが本当か知りませんが、悪くすると一度で死

ねない事が往々実例にあるので。千七百八十六年に有名なフヒツ・ゼラルドと云う悪漢を絞めた事がありました。ところが妙なはずみで一度目には台から飛び降りるときに縄が切れてしまったのです。またやり直すと今度は縄が長過ぎて足が地面へ着いたの
でやはり死ねなかつたのです。とうとう三返目に見
物人が手伝つて往生おうじょうさしたと云う話しです」「やれ

やれ」と迷亭はこんなところへくると急に元氣が出

る。「本当に死に損そこないだな」と主人まで浮かれ出す。

「まだ面白い事があります首を縊くると背せいが一寸いっすんばか

り延びるそうです。これはたしかに医者が計つて見

たのだから間違はありません」「それは新工夫だね、

どうだい苦沙弥くしやみなどはちと釣つて貰もらっちゃあ、一寸

延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主

人の方を向くと、主人は案外真面目で「寒月君、一寸くらい背が延びて生き返る事があるだろうか」と聞^きく。「それは駄目に極^{きま}っています。釣られて脊^{せき}髓^{ずい}が延びるからなんで、早く云うと背が延びると云うより壊^{こわ}れるんですからね」「それじゃ、まあ止^やめよう」と主人は断念する。

演説の続きは、まだなかなか長くあつて寒月君は

首縊りの生理作用にまで論及するはずでいたが、迷

ふうらいぼう

亭が無暗に風来坊のような珍語を挟むのと、主人が

はさ

あくび

時々遠慮なく欠伸をするので、ついに中途でやめて

帰ってしまった。その晩は寒月君がいかなる態度で、

ふる

いかなる雄弁を振ったか遠方で起った出来事の事だ

から吾輩には知れよう訳がない。

にさんち

二三日は事もなく過ぎたが、或る日の午後二時頃

くうくう

また迷亭先生は例のごとく空々として偶然童子のご

とく舞い込んで来た。座に着くと、いきなり「君、

おちとうふう

たかなわじけん

越智東風の「高輪事件を聞いたかい」と旅順陥落の号

外を知らせに来たほどの勢を示す。「知らん、近頃

あ

は合わんから」と主人は平生いっもの通り陰気である。

とうふうし

「きようはその東風子の失策物語を御報道に及ぼう

と思つて忙しいところをわざわざ来たんだよ」「ま

たそんな仰山ぎょうさんな事を云う、君は全体不埒ふらちな男だ」

「ハハハハ不埒と云わんよりむしろ無埒むらちの方だろ

う。それだけはちよつと區別しておいて貰わんと名

誉うそぶに關係するからな」 「おんなし事だ」と主人は嘯

いている。純然たる天然居士の再来だ。「この前の

日曜とうふうしに東風子たかなわせんがくじが高輪泉岳寺に行つたんだそうだ。こ

の寒いのによせばいいのに——第一いまどき今時泉岳寺など

へ参るのはさも東京を知らない、田舎者のようじや

いなかもの

ないか」「それは東風の勝手さ。君がそれを留める

権利はない」「なるほど権利は正まさにない。権利はど

うでもいいが、あの寺内に義士遺物保存会と云う見
世物があるだろう。君知ってるか」「うんにや」

「知らない？ だって泉岳寺へ行つた事はあるだろ

う」「いいや」「ない？ こりや驚ろいた。道理で

大變東風を弁護すると思つた。江戸っ子が泉岳寺を

知らないのは情け^{なさ}ない」「知らなくても教師は務^{つと}ま

るからな」と主人はいよいよ天然居士になる。「そ

りや好いが、その展覽場へ東風が這^{はい}入つて見物して

いると、そこへ独逸^{ドイツじん}人が夫婦連^{づれ}で來たんだつて。そ

れが最初は日本語で東風に何か質問したそうだ。と

ころが先生例の通り独逸語が使つて見たくてたまら

ん男だろう。そら二口三口べらべらやって見たとさ。

すると存外うまく出来たんだ——あとで考えるとそ

れが災の本わざわいさね」 「それからどうした」と主人はつ

いに釣り込まれる。「独逸人が大鷹源吾おおたかげんごの蒔絵まきえの印いん

籠ろうを見て、これを買いたいが売ってくれるだろうか

と聞くんたそうだ。その時東風の返事が面白いじや

ないか、日本人は清廉の君子くんしばかりだから到底駄目どうてい

だと云つたんだとさ。その辺は大分景気がよかつただいぶ

が、それから独逸人の方では恰好かつこうな通弁を得たつも

りでしきりに聞くそうだ」「何を？」「それがさ、

何だか分るくらいなら心配はないんだが、早口で無む

暗やみに問い掛けるものだから少しも要領を得ないのさ。

たまに分るかと思うと鳶口とびぐちや掛矢かやの事を聞かれる。

西洋の鳶口とびぐちや掛矢かやは先生何と翻訳して善いのか習つ

た事が無いんだから弱^よわらあね」「もつともだ」と

主人は教師の身の上に引き較^{くら}べて同情を表する。

「ところへ閑人^{ひまじん}が物珍しそうにぽつぽつ集^あってくる。

仕舞^{しまい}には東風と独逸人を四方から取り巻いて見物す

る。東風は顔を赤くしてへどもどする。初めの勢に

引き易^かえて先生大弱りの体^{てい}さ」「結局どうなったん

だい」「仕舞に東風が我慢出来なくなつたと見えて

さいならと日本語で云つてぐんぐん歸つて来たそう
だ、さいならは少し変だ君の国ではさよならをさい
ならと云うかつて聞いて見たら何やっぱりさよなら
ですが相手が西洋人だから調和を計るために、さい
ならにしたんだって、東風子は苦しい時でも調和を
忘れない男だと感心した」「さいならはいいが西洋
人はどうした」「西洋人はあっけに取られて茫然と

見ていたそうだハハハ面白くないか」「別段

面白い事もないようだ。それをわざわざしらせ報知に来る

君の方がよっぽど面白いぜ」と主人はまきたばこ巻煙草の灰を

ひおけ火桶の中へはたき落す。折柄おりから格子戸のベルが飛び上

るほど鳴って「御免なさい」と鋭どい女の声がする。

迷亭と主人は思わず顔を見合わせて沈黙する。

主人のうちへ女客は稀有けうだなど見ていると、かの

鋭どい声の所有主は縮緬ちりめんの二枚重ねを畳へ擦すり付け

ながら這入はいって来る。年は四十の上を少し超こしたく

らいだろう。抜け上った生え際はぎわから前髪が堤防工事

のように高く聳そびえて、少なくとも顔の長さの二分の

一だけ天に向ってせり出している。眼が切り通しの

坂くらいな勾配こうばいで、直線に釣るし上げられて左右に

対立する。直線とは鯨くじらより細いという形容である。

鼻だけは無暗に大きい。人の鼻を盗んで来て顔の真

中へ据え付けたように見える。三坪ほどの小庭へ招

魂社の石灯籠を移した時のごとく、独りで幅を利か

しているが、何となく落ちつかない。その鼻はいわ

ゆる鍵鼻で、ひと度は精一杯高くなつて見たが、こ

れではあんまりだと中途から謙遜して、先の方へ行

くと、初めの勢に似ず垂れかかつて、下にある唇を

のぞ

覗き込んでいる。かく著^{いちじ}るしい鼻だから、この女が

物を言うときは口が物を言うと言わんより、鼻が口をきいているとしか思われない。吾輩はこの偉大な

る鼻に敬意を表するため、以来はこの女を称して鼻^は

なこ

子鼻子と呼ぶつもりである。鼻子は先ず初対面の挨

拶を終って「どうも結構な御住居^{おすまい}ですこと」と座敷

中を睨^ねめ廻わす。主人は「嘘をつけ」と腹の中で言

つたまま、ふかふか煙草たばこをふかす。迷亭は天井を見

ながら「君、ありや雨洩あまもりか、板の木目もくめか、妙な模

様が出ているぜ」と暗に主人を促うながす。「無論雨の

洩りさ」と主人が答えると「結構だなあ」と迷亭が

すまして云う。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中

で憤いきどおる。しばらくは三人鼎坐ていざのまま無言である。

「ちと伺いたいたい事があつて、参つたんですが」と鼻

子は再び話の口を切る。「はあ」と主人が極めて冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は、「実は私はつい御近所で――あの向う横丁の角屋敷かどやしきなんですが」

「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理で

あすこには金田かねだと云う標札ひょうさつが出ていますな」と主人

はようやく金田の西洋館と、金田の倉を認識したよ

うだが金田夫人に対する尊敬の度合どあいは前と同様であ

る。「実は宿^{やど}が出まして、御話を伺うんですが会社

の方が大変忙がしいもんですから」と今度は少し利^きいたろうという眼付をする。主人は一向動^{いっこう}じない。

鼻子の先刻^{さつき}からの言葉遣いが初対面の女としてはあ

まり存在^{ぞんざい}過ぎるのですでに不平なのである。「会社

でも一つじゃ無いんです、二つも三つも兼ねている

んです。それにどの会社でも重役なんで——多分御

存知でしようが」これでも恐れ入らぬかと云う顔付をする。元来ここの主人は博士とか大学教授とかいうと非常に恐縮する男であるが、妙な事には実業家に対する尊敬の度は極めて低い。実業家よりも中学校の先生の方がえらいと信じている。よし信じておらんでも、融通の利かぬ性質として、到底実業家、金満家の恩顧を蒙る事は覚束ないと諦らめている。

ことうむ

おぼつか

あき

いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世話になる見込のないと思ひ切つた人の利害には極めて無頓着である。それだから学者社会を除いて他の方面の事には極めて迂濶うかつで、ことに実業界などでは、どこに、だれが何をしているか一向知らん。知つても尊敬畏服の念は毫ちひさく起らるのである。鼻子の方では天あめが下したの一隅にこんな変人がやはり日光に照らさ

れて生活していようとは夢にも知らない。今まで世

の中の人間にも大分だいぶん接して見たが、金田の妻さいですと

名乗って、急に取扱いの変らない場合はない、どこ

の会へ出ても、どんな身分の高い人の前でも立派に

金田夫人で通して行かれる、いわんやこんなくすぶ燻り返

った老書生においてをやで、私わたしの家は向う横丁の角か

屋敷どやしきですとさえ云えば職業などは聞かぬ先から驚く

だろうと予期していたのである。

「金田って人を知ってるか」と主人は無雑作むぞうさに迷亭

に聞く。「知ってるとも、金田さんは僕の伯父の友

達だ。この間なんざ園遊会へおいでになった」と迷

亭は真面目な返事をする。「へえ、君の伯父さんて

えな誰だい」まきやまだんしやく「牧山男爵さ」と迷亭はいよいよ真面

目である。主人が何か云おうとして云わぬ先に、鼻

子は急に向き直って迷亭の方を見る。迷亭は大島紬おおしまつむぎ

こわたりさらさ

に古渡更紗か何か重ねてすましている。「おや、あ

なたが牧山様の――何でいらっしやいますか、ちっ

とも存じませんで、はなはだ失礼を致しました。牧

山様には始終御世話になると、宿やどで毎々御噂おうわさを致し

ております」と急に叮嚀ていねいな言葉使をして、おまけに

御辞儀までする、迷亭は「へええ何、ハハハハ」と

笑っている。主人はあつけ気に取りられて無言で二人を見ている。「たしか娘の縁辺えんぺんの事につきましてもいろいろ牧山さまへ御心配を願いましたそうで……」

「へえー、そうですか」とこればかりは迷亭にもちとうとつと唐突過ぎたと見えてちよつと魂消たまげたような声を出す。

「実は方々からくれくれと申し込はございますが、こちらの身分もあるものでございますから、滅め

多^{った}な所^{ところ}へも片付けられませので……」 「ごもつと

もで」と迷亭はようやく安心する。「それについて、

あなたに伺おうと思つて上がつたんですがね」と鼻

子は主人の方を見て急に存在^{ぞんざい}な言葉に返る。「あな

たの所へ水島寒月^{みずしまかんげつ}という男が度々^{たびたび}上がるそうですが、

あの人は全体どんな風な人でしよう」「寒月の事を

聞いて、何^{なん}にするんです」と主人は苦々^{にくにく}しく云う。

「やはり御令嬢の御婚儀上の関係で、寒月君の性行せいこう

の一斑いっばんを御承知になりたいという訳でしょう」と迷

亭が気転を利きかす。「それが伺えれば大變都合が宜よろ

しいのでございますが……」 「それじゃ、御令嬢を

寒月におやりになりたいとおっしやるんで」 「やり

たいなんてえんじや無いんです」と鼻子は急に主人

を参らせる。「ほかにもだんだん口が有るんですか

ら、無理に貰っていたただかないだつて困りやしませ

ん」「それじゃ寒月の事なんか聞かんでも好いでし

よう」と主人も躍起やつきとなる。「しかし御隠しなさる

訳もないでしょう」と鼻子も少々喧嘩腰になる。迷

亭は双方の間に坐ぎんぎせるつて、銀煙管を軍配団扇ぐんぱいうちわのように

持つて、心の裡うちで八卦はっけよいやよいやと怒鳴っている。

「じゃあ寒月の方では是非貰いたいとでも云つたので

すか」と主人が正面から鉄砲を喰^{くら}わせる。「貰いた

いと云ったんじやないんですけれども……」 「貰い

たいだろうと思っていらっしゃるんですか」と主人

はこの婦人鉄砲に限ると覺^{さと}つたらしい。「話しはそ

んなに運んでるんじやありませんが——寒月さんだ

って満更^{まんざい}嬉しくない事もないでしょう」と土俵際で

持ち直す。「寒月が何かその御令嬢に恋着^{れんちやく}したとい

うような事でもありますか」あるなら云つて見ろと

けんまく

云う権幕で主人は反そり返る。「まあ、そんな見当けんとうで

しようね」今度は主人の鉄砲が少しも功を奏しない。

おもしろげ

ぎょうじ

今まで面白おもしろげ氣に行司氣取りで見物していた迷亭も鼻

いちごん

子の一言に好奇心を挑撥ちやうはつされたものと見えて、煙管きせる

を置いて前へ乗り出す。「寒月が御嬢さんに付つけ文ぶみ

でもしたんですか、こりや愉快だ、新年になつて逸

話がまた一つ殖ふえて話しの好材料になる」と一人で

喜んでゐる。「付け文じゃないんです、もっと烈し

いんでさあ、御二人とも御承知じやありませんか」

と鼻子は乙おつにからまって来る。「君知ってるか」と

主人は狐付きのような顔をして迷亭に聞く。迷亭も

馬鹿ばかげ気た調子で「僕は知らん、知っていいや君だ」

とつまらんとところで謙遜けんそんする。「いえ御おふたりとも両人共御存

じの事ですよ」と鼻子だけ大得意である。「へえー」

と御両人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私^{わた}

しから御話をしましょう。去年の暮向島の阿部さん

の御屋敷で演奏会があつて寒月さんも出掛けたじや

ありませんか、その晩帰りに吾妻橋で何かあつたで^{あずまばし}

しょう——詳しい事は言いますまい、当人の御迷惑

になるかも知れませんか——あれだけの証拠があ

りや充分だと思ひますが、どんなものでしよう」と

ダイヤモンドの指環の嵌はまった指を、膝の上へ併ならべて、

つんと居ずまいを直す。偉大なる鼻がますます異彩

を放つて、迷亭も主人も有れども無きがごとき有様である。

主人は無論、さすがの迷亭もこの不意撃ふいうちには胆きもを

抜かれたものと見えて、しばらくは呆然ぼうぜんとして瘡おこりの

落ちた病人のように坐っていたが、驚愕きょうがくの箍たががゆる

んでだんだん持前の本態に復すると共に、滑稽と云

う感じが一度に呐喊とっかんしてくる。兩人ふたりは申し合せたご

とく「ハハハハハ」と笑い崩れる。鼻子ばかりは少

し当てがはずれて、この際笑うのははなはだ失礼だ

と兩人を睨にらみつける。「あれが御嬢さんですか、な

るほどこりやいい、おっしやる通りだ、ねえ苦沙弥くしゃみ

君、全く寒月はお嬢さんを恋おもつてるに相違ないね：
：もう隠したってしようがないから白状しようじゃないか」「ウフン」と主人は云ったままである。

「本当に御隠しなさつてもいけませんよ、ちゃんと種は上ってるんですからね」と鼻子はまた得意になる。「こうなりや仕方がない。何でも寒月君に関する事實は御参考のために陳述するさ、おい苦沙弥君、

君が主人だのに、そう、にやにや笑っていては埒が

あかんじやないか、実に秘密というものは恐ろしい
ものだねえ。いくら隠しても、どこからか露見する

からな。——しかし不思議と云えば不思議ですねえ、

金田の奥さん、どうしてこの秘密を御探知になった

んです、実に驚ろきますな」と迷亭は一人で喋舌る。

「私わたしの方だつて、ぬかりはありませんやね」と鼻

子はしたり顔をする。「あんまり、ぬかりが無さ過ぎるようですぜ。一体誰に御聞きになつたんです」「じきこの裏にいる車屋の神さんかみからです」「あの黒猫のいる車屋ですか」と主人は眼を丸くする。

「ええ、寒月さんの事じゃ、よっぽど使いましたよ。寒月さんが、ここへ来る度に、どんな話しをするかと思つて車屋の神さんを頼んで一々知らせて貰うん

です」 「そりや苛い^{ひど}」と主人は大きな声を出す。

「なあに、あなたが何をなさろうとおっしやろうと、それに構ってるんじゃないんです。寒月さんの事だけですよ」 「寒月の事だって、誰の事だって——全体あの車屋の神さんは気に食わん奴だ」と主人は一人怒り出す。^{おこ}「しかしあなたの垣根のそとへ来て立っているのは向うの勝手じゃありませんか、話しが

聞えてわるけりやもつと小さい声でなさるか、もつ

と大きなうちへ御おはい這入んなさるがいいでしょう」と

鼻子は少しも赤面した様子がない。「車屋ばかりじ

やありません。新道しんみちの二絃琴にげんきんの師匠からも大分だいぶんいろ

いろな事を聞いています」「寒月の事をですか」

「寒月さんばかりの事じゃありません」と少し凄すごい

事を云う。主人は恐れ入るかと思うと「あの師匠は

いやに上品ぶって自分だけ人間らしい顔をしている、

馬鹿野郎です」 「憚り様はばかさ、女ですよ。野郎は御門違おかどちが

いです」 と鼻子の言葉使いはますます御里をあらわおさと

して来る。これではまるで喧嘩をしに来たようなも

のであるが、そこへ行くと迷亭はやはり迷亭でこの

談判を面白そうに聞いている。鉄柺てつかい仙人が軍鶏せんじんの蹴しゃもけ

合あいを見るような顔をして平気で聞いている。

悪口の交換では到底鼻子の敵でないと自覚した主

人は、しばらく沈黙を守るのやむを得ざるに至らしめられていたが、ようやく思い付いたか「あなたは寒月の方から御嬢さんに恋着したようにばかりおっしゃるが、私の聞いたんじや、少し違いますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救いを求める。「うん、あの時の話しじや御嬢さんの方が、始め病気になって――

何だか譫語をいっただように聞いたね」「なにそんな事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使いをする。「それでも寒月はたしかに〇〇博士の夫人から聞いたと云っていましたぜ」「それがこっちの手なんでさあ、〇〇博士の奥さんを頼んで寒月さんの気を引いて見たんでさあね」「〇〇の奥さんは、それを承知で引き受けたんですか」「ええ。

引き受けて貰うたって、ただじゃ出来ませんやね、

それやこれやでいろいろ物を使っているんですから」

「是非寒月君の事を根掘り葉掘り御聞きにならなく

つちや御帰りにならないと云う決心ですかね」と迷

亭も少し気持を悪くしたと見えて、いつになく手障てざわ

りのあらい言葉を使う。「いいや君、話したって損

の行く事じやなし、話そうじやないか苦沙弥君――

奥さん、私でも苦沙弥でも寒月君に関する事実で差さし

支えつかのない事は、みんな話しますからね、——そう、

順を立ててだんだん聞いて下さると都合がいいです

ね」

鼻子はようやく納得なっとくしてそろそろ質問を呈出する。

一時荒立てた言葉使いも迷亭に対してはまたもとのごとく丁寧になる。「寒月さんも理学士だそうですね」

が、全体どんな事を専門にしているのでございます」

「大学院では地球の磁気の研究をやっています」と

主人が真面目に答える。不幸にしてその意味が鼻子

には分らんものだから「へえー」とは云つたが怪訝けげん

な顔をしている。「それを勉強すると博士になれま

しょうか」と聞く。「博士にならなければやれない

とおっしゃるんですか」と主人は不愉快そうに尋ね

る。「ええ。ただの学士じゃね、いくらでもありま
すからね」と鼻子は平気で答える。主人は迷亭を見
ていよいよいやな顔をする。「博士になるかならん
かは僕等も保証する事が出来んから、ほかの事を聞
いていただく事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌
ではない。「近頃でもその地球の——何かを勉強し
ているんでございましょうか」「にさんちまえ二三日前は首縊り、

の力学と云う研究の結果を理学協会で演説しました」
と主人は何の気も付かずに云う。「おやいやだ、首、
縊りだなんて、よっぽど変人ですねえ。そんな首、縊、
りや何かやってたんじゃ、とても博士にはなれます
まいね」「本人が首を縊くつちやあむずかしいですが、
首、縊りの力学なら成れないとも限らんです」「そう
でしようか」と今度は主人の方を見て顔色を窺うかがう。

悲しい事に力学と云う意味がわからんので落ちつきかねている。しかしこれしきの事を尋ねては金田夫人の面目に關すると思つてか、ただ相手の顔色で八卦を立てて見る。主人の顔は渋い。「そのほかになにか、分り易いものを勉強しておりますまいか」

「そうですね、せんだって団栗のスタビリチーを論じて併せて天体の運行に及ぶと云う論文を書いた事

があります」 「団栗どんぐりなんぞでも大学校で勉強するも

のでしょうか」 「さあ僕も素人しろうとだからよく分らんが、

何しろ、寒月君がやるくらいなんだから、研究する

価値があると見えますな」 と迷亭はすまして冷かす。

鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念したものと

見えて、今度は話題を転ずる。 「御話は違いますが

——この御正月に椎茸しいたけを食べて前歯を二枚折ったそ

うじやございませんか」「ええその欠けたところに

くうやもち

空也餅がくっ付いていましてね」と迷亭はこの質問

なわばりうち

こそ吾縄張内だと急に浮かれ出す。「色気のない人

じやございませんか、何だつて楊子ようじを使わないんで

しょう」「今度逢あつたら注意しておきましょう」と

主人がくすくす笑う。「椎茸で歯がかけるくらいじ

しょう

や、よほど歯の性が悪いと思われませんが、如何いかなも

のでしょう」 「善いとは言われますまいな——ねえ

迷亭」 「善い事はないがちよつと愛嬌あいきょうがあるよ。あ

れぎり、まだ填つめないところが妙だ。今だに空也餅

ひっかけどころ

引掛所になつてゐるなあ奇観だぜ」 「齒を填める小遣こづかい

がないので欠けなりにしておくんですか、または物

好きで欠けなりにしておくんでしょうか」 「何も永

まえばかけなり

く前齒欠成を名乗る訳でもないでしょうから御安心

なさいよ」と迷亭の機嫌はだんだん回復してくる。

鼻子はまた問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ当人の書いたものでもございますならちよつと拝見したいもんでございますが」「端書はがきなら沢山あり

ます、御覧なさい」と主人は書斎から三四十枚持ってきて来る。「そんなに沢山拝見しないで——その内の二三枚だけ……」「どれどれ僕が好いのを撰よって

やろう」と迷亭先生は「これなぞあ面白いでしょう」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでございますか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましょう」と眺めていたが「あらいやだ、狸たぬきだよ。何だって撰りに撰って狸なんぞかくんでしようね——それでも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「その文句を読んで御覧なさい」と主人が笑いながら云

う。鼻子は下女が新聞を読むように読み出す。「旧

暦の歳としの夜よ、山の狸が園遊会をやさって盛さかんに舞踏しま

す。その歌に曰いわく、来こいさ、としの夜よで、御山おやま婦美ふみ

も来くまいぞ。スツポコポンノポン」「何ですこりや、

人を馬鹿ばかにしているじゃございませんか」と鼻子は

不平ていへいの体である。「この天女てんによは御氣に入りませんか」

と迷亭がまた一枚出す。見ると天女が羽衣はごろもを着はて琵琶び

琶^わを弾^ひいている。「この天女の鼻が少し小さ過ぎる

ようですが」「何、それが人並ですよ、鼻より文句

を読んで御覧なさい」文句にはこうある。「昔^{むか}しあ

る所に一人の天文学者がありました。ある夜^よいつも

のように高い台に登って、一心に星を見ていますと、

空に美しい天女が現われ、この世では聞かれぬほど

の微妙な音楽を奏し出したので、天文学者は身に沁^し

む寒さも忘れて聞き惚ほれてしまいました。朝見ると

その天文学者の死骸しがいに霜しもが真白に降っていました。

これは本当の噺はなしだと、あのうそつきの爺じいやが申しま

した」「何の事ですこりや、意味も何もないじやあ

りませんか、これでも理学士で通るんですかね。ち

っと文芸倶楽部でも読んだらよさそうなものですが

ねえ」と寒月君さんざんにやられる。迷亭は面白半

分に「こりやどうです」と三枚目を出す。今度は活

ほかけぶね

版で帆懸舟が印刷してあつて、例のごとくその下に

何か書き散らしてある。

「よべの泊りとまの十六小女郎、

じゅうろくこじよろ

親がないとて、

ありそ

荒磯の千鳥、さよの寢覚ねざめの千鳥に泣

いた、親は船乗り波の底」

「うまいのねえ、感心だ

事、話せるじやありませんか」「話せますかな」

「ええこれなら三味線に乗りますよ」「三味線に乗

りや本物だ。こりや如何いかです」と迷亭は無暗むやみに出す。

「いえ、もうこれだけ拝見すれば、ほかのは沢山で、そんなに野暮やぼでないんだと云う事は分りましたから」

と一人で合点している。鼻子はこれで寒月に関する

大抵の質問を卒おえたものと見えて、「これははなは

だ失礼を致しました。どうか私の参った事は寒月さ

んへは内々に願います」と得手勝手えてかってな要求をする。

寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云う方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と氣のない返事をすると「いずれその内御礼は致しますから」と念を入れて言いながら立つ。見送りに出た兩人が席へ返るや否や迷亭が「ありや何だい」と云うと主人も「ありや何だい」と双方から同じ問をかける。奥の

部屋で細君が慄え切れなかつたと見えてクツクツ笑う声が聞える。迷亭は大きな声を出して「奥さん奥さん、月並の標本が来ましたぜ。月並もあのくらいになるとなかなか振ふるつていますなあ。さあ遠慮はいらんから、存分御笑いなさい」

主人は不満な口こう気で「第一氣に喰わん顔だ」と悪にくらしそうに云うと、迷亭はすぐ引きうけて「鼻が顔

の中央に陣取つて乙おつに構えているなあ」とあとを付

ける。「しかも曲つていらあ」「少し猫背ねこぜだね。猫

背の鼻は、ちと奇抜きばつ過ぎる」と面白そうに笑う。

「夫おつとを剋こくする顔だ」と主人はなお口惜くやしそうである。

「十九世紀で売れ残つて、二十世紀で店曝たなざらしに逢う

と云う相そうだ」と迷亭は妙な事ばかり云う。ところへ

妻君が奥の間まから出て来て、女だけに「あんまり悪

口をおっしやると、また車屋の神かみさんにいつけられ

ますよ」と注意する。「少しいづける方が薬ですよ、

奥さん」「しかし顔の讒訴ざんそなどをなさるのは、あま

り下等ですわ、誰だって好んであんな鼻を持ってる

訳でもありませんから——それに相手が婦人ですか

らね、あんまり苛ひどいわ」と鼻子の鼻を弁護すると、

同時に自分の容貌ようぼうも間接に弁護しておく。「何ひど

いものか、あんなのは婦人じゃない、愚人だ、ねえ迷亭君」 「愚人かも知れんが、なかなかえら者だ、

大分^{だいぶん}引き搔^かかれたじやないか」 「全体教師を何と心

得ているんだろう」 「裏の車屋くらいに心得ている

のさ。ああ云う人物に尊敬されるには博士になるに

限るよ、一体博士になつておかんのが君の^{ふりようけん}不了見さ、

ねえ奥さん、そうでしょう」 と迷亭は笑いながら細

君を顧みる。^{かえり}「博士なんて到底駄目ですよ」と主人

は細君にまで見離される。「それでも今になるかも

知れん、^{けいべつ}軽蔑するな。貴様なぞは知るまいが昔^{むか}しア

イソクラチスと云う人は九十四歳で大著述をした。

ソフォクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、

ほとんど百歳の高齢だった。シモニジスは八十で妙

詩を作った。おれだって……」「馬鹿馬鹿しいわ、

あなたのような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予算している。――失敬な、――甘木さんへ行つて聞いて見ろ――

――元来御前がこんな皺しわくちや苦茶な黒木綿くろもめんの羽織や、つぎ

だらけの着物を着せておくから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着ているような奴を着るから出しておけ」「出しておけつて、あんな立

派な御召おめしはござんせんわ。金田の奥さんが迷亭さんに叮嚀ていれいになったのは、伯父さんの名前を聞いてからですよ。着物の咎とがじやございません」と細君うまく責任を逃のがれる。

主人は伯父さん、と云う言葉を聞いて急に思い出したように「君に伯父があると云う事は、今日始めて聞いた。今までついにうわさに噂うわさをした事がないじゃないか、

本当にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待つてた

と云わぬばかりに「うんその伯父さ、その伯父が馬

鹿に頑物がんぶつでねえ——やはりその十九世紀から連綿と

今日まで生き延びているんだがね」と主人夫婦を半

々に見る。「オホホホ面白い事ばかりおっしや

って、どこに生きていらっしやるんです」「静岡に

生きてますがね、それがただ生きてるんじや無いで

す。頭にちよん髷まげを頂いて生きてるんだから恐縮し

まさあ。帽子を被かぶれってえと、おれはこの年になる

が、まだ帽子を被るほど寒さを感じた事はないと威張はってるんです——寒いから、もっと寝ねていらっし

やいと云うと、人間は四時間寝れば充分だ。四時間

以上寝るのは贅ぜいたく沢の沙汰だって朝暗いうちから起き

てくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間

に縮めるには、永年修業をしたもんだ、若いうちは

どうしても眠^{ねむ}たくていかなんだが、近頃に至って始

めて随处任意の庶^{しよきよう}境に入^いってはなはだ嬉しいと自慢

するんです。六十七になつて寝られなくなるなあ当

り前でさあ。修業も糸瓜^{へちま}も入^いったものじゃないのに

当人は全く克己^{こつき}の力で成功したと思つてゐるんですか

らね。それで外出する時には、きつと鉄扇^{てっせん}をもつて

出るんですがね」「なににするんだい」「何にするんだか分らない、ただ持って出るんだね。まあステツキの代りくらいに考えてるかも知れんよ。ところがせんだって妙な事がありましたね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君が差し合さあいのなことしい返事をする。「此年の春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートを至急送れと云うんです。ち

よつと驚ろいたから、郵便で問い返したところが老人自身が着ると云う返事が来ました。二十三日に静岡で祝捷会しゆくしょうかいがあるからそれまでに間まに合うように、

至急調達しろと云う命令なんです。ところがおかし

いのは命令中にこうあるんです。帽子は好い加減な

大きさのを買ってくれ、洋服も寸法を見計らつて大だい

丸まるへ注文してくれ……」 「近頃は大丸でも洋服を仕

立てるのかい」「なあに、先生、白木屋しろきやと間違えた

んだあね」「寸法を見計ってくれたって無理じやな

いか」「そこが伯父の伯父たるところさ」「どうし

た？」「仕方がないから見計らって送ってやった」

「君も乱暴だな。それで間に合ったのかい」「まあ、

どうにか、こうにかおっついたんだろう。国の新聞

を見たら、当日牧山翁は珍らしくフロックコートに

て、例の鉄扇てっせんを持ち……」 「鉄扇だけは離さなかつ

たと見えるね」 「うん死んだら棺の中へ鉄扇だけは
入れてやろうと思つてゐるよ」 「それでも帽子も洋
服も、うまい具合に着られて善かった」 「ところが
大間違さ。僕も無事に行つてありがたいと思つてゐ
と、しばらくして国から小包が届いたから、何か礼
でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽子さ、

手紙が添えてあつてね、せつかく御求め被下候えどくだされそうら

も少々大きく候間、そろあいだ帽子屋へ御遣わしの上、御縮め

被下度候。くだされたくそろ縮め賃は小為替にて此方より御送可申上こがわせ

候とあるのさきそろ「なるほど迂濶だな」うかつと主人は己れおの

より迂濶なものの天下にある事を発見して大に満足おおい

の体ていに見える。やがて「それから、どうした」と聞

く。「どうするつたつて仕方がないから僕が頂戴し

て被^{かぶ}つていらあ」「あの帽子かあ」と主人がにやに

や笑う。「その方^{かた}が男爵でいらっしやるんですか」

と細君が不思議そうに尋ねる。「誰がです」「その

鉄扇の伯父さまが」「なあに漢学者でさあ、若い時

聖堂^{せいどう}で朱子学^{しゅしがく}か、何かにこり固まったものだから、

電気灯の下で恭^{うやうや}しくちよん髷^{まげ}を頂いているんです。

仕方がありません」ととやたらに頤^{あご}を撫^なで廻す。「そ

れでも君は、さっきの女に牧山男爵と云ったようだ
ぜ」「そうおっしやいましたよ、私も茶の間で聞い
ておりました」と細君もこれだけは主人の意見に同
意する。「そうでしたかなアハハハハ」と迷亭は
訳もなく笑う。^{わけ}「そりや嘘ですよ。^{うそ}僕に男爵の伯父
がありや、今頃は局長くらいになっていまさあ」と
平気なものである。「何だか変だと思った」と主人

は嬉しそうな、心配そうな顔付をする。「あらまあ、よく真面目であんな嘘が付けますねえ。あなたもよつぽど法螺ほらが御上手でいらつしやる事」と細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上うわ手てでさあ」「あなただつて御負けなさるきづか気遣いはありません」「しかし奥さん、僕の法螺は単なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂胆があつて、曰いわく付きの嘘で

すぜ。たちが悪いです。猿智慧さるぢえから割り出した術数

と、天来の滑稽趣味と混同されちや、コメディーの
神様も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる訳に立ち至
りますからな」主人は俯目ふしめになつて「どうだか」と
云う。妻君は笑いながら「同じ事ですわ」と云う。

吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。

かどやしき

角屋敷の金田とは、どんな構えか見た事は無論ない。

聞いた事さえ今が始めてである。主人の家で実業家

が話頭に上った事は一返もないので、主人の飯を食

う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみなら

ず、はなはだ冷淡であつた。しかるに先刻^{はか}図らずも

鼻子の訪問を受けて、余所^{よそ}ながらその談話を拝聴し、

その令嬢の艶美^{えんび}を想像し、またその富貴^{ふうき}、権勢を思

い浮べて見ると、猫ながら安閑として椽側^{えんがわ}に寝転ん

でいられなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君
に對してはなはだ同情の至りに堪えん。先方では博
士の奥さんやら、車屋の神さんかみやら、二絃琴にげんきんの天璋てんしよ
院ういんまで買収して知らぬ間まに、前齒の欠けたのさえ探
偵しているのに、寒月君の方ではただニヤニヤして
羽織の紐ばかり気にしているのは、いかに卒業した
ての理学士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言つ

て、ああ云う偉大な鼻を顔のうち中に安置している女の

事だから、滅多めったな者では寄り付ける訳の者ではない。

こう云う事件に関しては主人はむしろ無頓着でかつ

あまりに錢ぜにがなさ過ぎる。迷亭は錢に不自由はしな

いが、あんな偶然童子だから、寒月に援たすけを与える

便宜べんぎは尠すくなかろう。して見ると可哀相かわいそうなのは首縊りの

力学を演説する先生ばかりとなる。吾輩でも奮発し

て、敵城へ乗り込んでその動静を偵察してやらなく
ては、あまり不公平である。吾輩は猫だけれど、エ
ピクテタスを読んで机の上へ叩きつけるくらいな学
者の家うちに寄寓きぐうする猫で、世間一般の痴猫ちびよう、愚猫ぐびようとは
少しく撰せんを殊ことにしている。この冒険をあえてするく
らいの義侠心は固もとより尻尾しっぽの先に畳み込んである。
何も寒月君に恩になつたと云う訳もないが、これは

ただに個人のためにする血氣躁狂けつきそうきようの沙汰ではない。

大きく云えば公平を好み中庸を愛する天意を現實に

する天晴あっぱれな美挙だ。人の許諾を経へずして吾妻橋事件

などを至る処に振り廻わす以上は、人の軒下に犬を

忍ばして、その報道を得々として逢う人に吹聴ふいちようする

以上は、車夫、馬丁ばてい、無頼漢ぶらいかん、ごろつき書生、日雇ひやとい

婆ばあ、産婆、妖婆ようば、按摩あんま、頓馬とんまに至るまでを使用して

国家有用の材に煩はんを及ぼして顧かえりみざる以上は――猫

にも覚悟がある。幸い天気も好い、霜解しもどけは少々閉口

するが道のためには一命もすてる。足の裏へ泥が着

いて、椽側えんがわへ梅の花の印を押すくらいな事は、ただ

御三おさんの迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは申

されない。翌日あすとも云わずこれから出掛けようと勇ゆう

猛精進もうしょうじんの大決心を起して台所まで飛んで出たが「待

てよ」と考えた。吾輩は猫として進化の極度に達しているのみならず、脳力の発達においてはあえて中学の三年生に劣らざるつもりであるが、悲しいかな^{のど}咽喉の構造だけはどこまでも猫なので人間の言語が饒舌^{しゃべ}れない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充分敵の情勢を見届けたところで、^{かんじん}肝心の寒月君に教えてやる訳に行かない。主人にも迷亭先生にも話せ

ない。話せないとすれば土中にある金剛石の日を受
けて光らぬと同じ事で、せつかくの智識も無用の長
物となる。これは愚^ぐだ、やめようかしらんと上り口
で佇^{たたず}んで見た。

しかし一度思い立った事を中途でやめるのは、白^{ゆう}
雨^{たち}が来るかと待っている時黒雲共隣国^{とも}へ通り過ぎた
ように、何となく残り惜しい。それも非がこつちに

あれば格別だが、いわゆる正義のため、人道のため

なら、たとい無駄死むだじにをやるまでも進むのが、義務を

知る男児の本懐であろう。無駄骨を折り、無駄足を

汚よごすくらいは猫として適當のところである。猫と生

れた因果いんがで寒月、迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の舌頭ぜつとう

に相互の思想を交換する技倆ぎりょうはないが、猫だけに忍

びの術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事を

成就じょうじゆするのはそれ自身において愉快である。吾われ一箇

でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快である。人に告げられんでも人に知られているなど云う自覚を彼等に与うるだけが愉快である。こんな愉快が続々出て来ては行かずにはいられない。やはり行く事に致そう。

向う横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が角か

地面を吾物顔に占領している。この主人もこの西洋

どじめん わがものがお

館のごとく傲慢ごうまんに構えているんだろうと、門を這入はい

ってその建築を眺ながめて見たがただ人を威圧しようとして、

二階作りが無意味に突っ立っているほかに何等の能
もない構造であつた。迷亭のいわゆる月並つきなみとはこれ

であらうか。玄関を右に見て、植込の中を通り抜け
て、勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥先

生の台所の十倍はたしかにある。せんだって日本新

おおくまはく

聞に詳しく書いてあつた大隈伯の勝手にも劣るまい

と思うくらい整然とぴかぴかしている。「模範勝手

だな」と這はい入り込む。見ると漆喰しっくいで叩き上げた二坪

ほどの土間に、例の車屋の神かみさんが立ちながら、御ご

はんた

飯焚きと車夫を相手にしきりに何か弁じている。こ

けんのん

みずおけ

いつは劍呑けんだと水桶の裏へかくれる。「あの教師あ、

うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚めしたきが云う。

「知らねえ事があるもんか、この界限かいわいで金田さんの

御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪かたわだあな」こ

れは抱え車夫の声である。「なんとも云えないよ。

あの教師と来たら、本よりほかに何にも知らない変

人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知つてりや

恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の小供こどもの歳とし

さえ知らないんだもの」と神さんが云う。「金田さ

んでも恐れねえかな、厄介な唐変木だ。とうへんぼく構あ事あねかま こた

え、みんなで威嚇おどかしてやろうじゃねえか」「それ

が好いよ。奥様の鼻が大き過ぎるの、顔が気に喰わ

ないのって——そりやあ酷ひどい事を云うんだよ。自分

の面つらあ今戸焼いまどやきの狸見ためきたような癖に——あれで一人前いちにんまえ

だと思っているんだからやれ切れないじゃないか」

「顔ばかりじゃない、てぬぐい手拭さを提げて湯に行くところ

からして、いやに高慢ちきじゃないか。自分くらい

えらい者は無いつもりでいるんだよ」と苦沙弥先生

は飯焚にも大に不人望である。おおい「何でも大勢であい

つの垣根の傍そばへ行つて悪口をさんざんいつてやるん

だね」「そうしたらきつと恐れ入るよ」「しかしこ

っちの姿を見せちゃあ面白くねえから、声だけ聞か

して、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしてやれって、さつき奥様が言い付けておいでなすったぜ」 「そりや分っているよ」と神さんは悪口の三分の一を引き受けると云う意味を示す。なるほどこの手合が苦沙弥先生を冷やかしに来るなと三人の横を、そつと通り抜けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きがごとし、どこを歩いても

不器用な音のした試しがない。空を踏むがごとく、

雲を行くがごとく、水中に磬けいを打つがごとく、洞裏とうり

に瑟しつを鼓こするがごとく、醍醐だいごの妙味を嘗なめて言詮ごんせんの

ほかに冷暖れいだんを自知じちするがごとし。月並な西洋館もな

く、模範勝手もなく、車屋の神さんも、権助ごんすけも、飯

焚も、御嬢さまも、仲働なかばたらきも、鼻子夫人も、夫人の

旦那様もない。行きたいところへ行つて聞きたい話

を聞いて、舌を出し尻尾しっぽを掉ふつて、髭ひげをぴんと立て

ゆうゆう

て悠々と帰るのみである。ことに吾輩はこの道に掛

けては日本一の堪能かんのうである。草双紙くさそうしにある猫又ねこまたの血

脈を受けておりはせぬかと自ら疑みうくらいである。

がま　ひたい

蟄やこうの額めいしゆには夜光の明珠があると云うが、吾輩の尻尾

しんぎしやつきよういむじよう

には神祇釈教恋無常は無論の事、満天下の人間を馬

いっかそうでん

鹿にする一家相伝の妙薬が詰め込んである。金田家

の廊下を人の知らぬ間に横行するくらいは、仁王様

ところてん

が心太を踏み潰すよりも容易である。この時吾輩は

つぶ

我ながら、わが力量に感服して、これも普段大事に

する尻尾の御蔭だなと気が付いて見るとただ置かれ

ない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を礼拝してニヤン

らいはい

運長久を祈らばやと、ちよつと低頭して見たが、ど

けんとう

うも少し見当が違ふようである。なるべく尻尾の方

を見て三拝しなければならん。尻尾の方を見ようと
身体を廻すと尻尾も自然と廻る。追付こうと思つて
首をねじると、尻尾も同じ間隔をとつて、先へ馳^かけ
出す。なるほど天地玄黄を三寸裏^りに収めるほどの靈
物だけあつて、到底吾輩の手に合わない、尻尾を環^{めぐ}
る事七度^{ななた}び半にして草臥^{くたび}れたからやめにした。少々
眼がくらむ。どこににいるのだかちよつと方角が分ら

なくなる。構うものかと滅茶苦茶にあるき廻る。障

子の裏でうち鼻子の声がする。ここだと立ち留まっ

て、左右の耳をはすに切つて、息を凝こらす。「貧乏教師

の癖に生意氣じゃありませんか」と例の金切りかなき声ごえを

振り立てる。「うん、生意氣な奴だ、ちと懲こらしめ

のためにいじめてやろう。あの学校にや国のものも

いるからな」「誰がいろの?」「津木つきピン助すけや福地ふくち

キシヤゴがいるから、頼んでからかわしてやろう」

吾輩は金田君の生国しょうこくは分らんが、

妙な名前の人間ば

かり揃そろった所だと少々驚いた。金田君はなお語をつ

いで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、

車屋の神さんの話では英語のリードルか何か専門に

教えるんだって云います」「どうせ碌ろくな教師じゃあ

るめえ」あるめえにも尠すくなからず感心した。「この

間ピン助に遇あつたら、私わたしの学校にや妙な奴がおりま

す。生徒から先生番茶は英語で何と云いますと聞か

れて、番茶は S a v a g e t e a であると真

面目に答えたんで、教員間の物笑いとなっています、

どうもあんな教員があるから、ほかのものの、迷惑

になって困りますと云ったが、大方おおかたあいつの事だぜ」

「あいつに極きまっていまさあ、そんな事を云いそうな

面構つらがまえですよ、いやに髭ひげなんか生はやして」「怪けしか

らん奴だ」髭を生やして怪しからなければ猫などは一足だつて怪しかりようがない。「それにあの迷亭

とか、へべれけとか云う奴は、まあ何てえ、頓狂な

跳返はねつかえりなんでしよう、伯父の牧山男爵だなんて、あ

んな顔に男爵の伯父なんざ、有るはずがないと思つ

たんですもの」「御前がどこの馬の骨だか分らんも

のの言う事を真まに受けるのも悪い」「悪いって、あ

んまり人を馬鹿にし過ぎるじゃありませんか」と大

変残念そうである。不思議な事には寒月君の事は一い

言半句ちごんはんくも出ない。吾輩の忍んで来る前に評判記はす

んだものか、またはすでに落第と事が極きまつて念頭に

ないものか、その辺へんは懸念けねんもあるが仕方がない。し

ばらく佇たたずんでいると廊下を隔てて向うの座敷でベル

の音がする。そらあすこにも何か事がある。後れぬおく

先に、とその方角へ歩を向ける。

来て見ると女が独りひとで何か大声で話している。そ

の声が鼻子とよく似ているところをもつて推おすと、

これが即ち当家の令嬢寒月君をして未遂みすい入水をあえ

てせしめたる代物しろものだろう。惜哉障子おしいかな越しで玉の御姿おんすがた

を拝する事が出来ない。従つて顔の真中に大きな鼻

を祭り込んでいるか、どうだか受合えない。しかし

談話の模様から鼻息の荒いところなどを綜合そうごうして考

えて見ると、満更まんざら人の注意を惹ひかぬ獅鼻ししばなとも思われ

ない。女はしきりに喋舌しゃべっているが相手の声が少し

も聞えないのは、噂うわさにきく電話というものであるう。

「御前は大和やまとかい。明日あしたね、行くんだからね、鶉うずらの

三を取っておいておくれ、いいかえ——分ったかい

——なに分らない？　　おやいやだ。鶉の三を取るん

だよ。——なんだって、——取れない？　　取れない

はずはない、とるんだよ——へへへへ御冗談をだごじようだん

って——何が御冗談なんだよ——いやに人をおひや

らかすよ。全体御前は誰だい。ちようきち長吉だ？　　長吉なん

ぞじや訳が分らない。お神さんに電話口へ出ろって

御云いな——なに？　　私わたくしで何でも弁じます？——

お前は失敬だよ。妾^{あた}しを誰だか知ってるのかい。金

田だよ。——へへへへ善く存じておりますだつて。

ほんとに馬鹿だよこの人あ。——金田だつてえばさ。

——なに？——毎度御^ご鼻^ひ肩^いにあずかりましてありが

とうございます？——何がありがたいんだね。御礼

なんか聞きたかあないやね——おやまた笑ってるよ。

お前はよつぽど愚物^{ぐぶつ}だね。——仰^うせの通りだつて？

——あんまり人を馬鹿にすると電話を切つてしまふよ。いいのかい。困らないのかよ——黙つてちや分らないじゃないか、何とか御云いなさいな」電話は長吉の方から切つたものか何の返事もないらしい。

令嬢は癩癩かんしゃくを起してやけにベルをジャラジャラと廻

す。足元で狎ちんが驚ろいて急に吠え出す。これは迂濶うかつ

に出来ないと、急に飛び下りて椽えんの下へもぐり込む。

おりから

ちかづ

折柄廊下を近く足音がして障子を開ける音がする。

誰か来たなと一生懸命に聞いていると「御嬢様、旦

那樣と奥様が呼んでいらっしやいます」と小間使ら

しい声がする。「知らないよ」と令嬢は剣突けんつくを食わ

じよう

せる。「ちよつと用があるから嬢じようを呼んで来いとお

っしやいました」「うるさいね、知らないてば」と

令嬢は第二の剣突を食わせる。「……水島寒月さんの事で御用があるんだそうでございます」と小間使は気を利^きかして機嫌を直そうとする。「寒月でも、水月でも知らないんだよ——大嫌いだわ、糸瓜^{へちま}が戸^と迷^{まど}いをしたような顔をして」第三の剣突は、憐れなる寒月君が、留守中に頂戴する。「おや御前いつ束^{そく}髪^{はつ}に結^いったの」小間使はほっと一息ついて「今日^{こんにち}」

となるべく単簡たんかんな挨拶をする。「生意気だねえ、小

間使の癖に」と第四の剣突を別方面から食わす。

「そうして新しい半襟はんえりを掛けたじゃないか」「へえ、

せんだって御嬢様からいただきましたので、結構過

ぎて勿体もったいないと思つて行李こうりの中へしまつておきまし

たが、今までののがあまり汚よごれましたからかけ易かえま

した」「いつ、そんなものを上げた事があるの」

「この御正月、白木屋へいらつしやいまして、御求

め遊ばしたので――うぐいすちや鶯茶へ相撲すもうの番附ばんづけを染め出した

のでございます。あた妾しには地味過ぎていやだから御

前に上げようとおつしやつた、あれでございます」

「あらいやだ。善く似合うのね。にくらしいわ」

「恐れ入ります」ほ「褒めたんじやない。にくらしい

んだよ」「へえ」「そんなによく似合うものをなぜ

だまつて貰ったんだい」「へえ」「御前にさえ、そ

のくらい似合うなら、あた妾しにだつておかしい事あな

いだろうじやないか」「きつとよく御似合い遊ばし

ます」「似あうのが分つてゐる癖になぜ黙つてゐるん

だい。そうしてすまして掛けてゐるんだよ、人の悪

い」けんつく剣突は留めどもなく連発される。このさき、事

局はどう発展するかと謹聴している時、向うの座敷

で「富子や、富子や」と大きな声で金田君が令嬢を呼ぶ。令嬢はやむを得ず「はい」と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな狛ちんが顔の中心に眼と口を引き集めたような面かおをして付いて行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はまず十二分の成績せいせきである。

帰って見ると、奇麗な家うちから急に汚ない所へ移つ

たので、何だか日当りの善い山の上から薄黒い洞窟どうくつ

の中へ入り込んだような心持ちがする。はい探險中は、

ほかの事に気を奪われて部屋の装飾、襖ふすま、障子の具しょうじ

合などには眼も留らなかつたが、わが住居すまいの下等な

るを感ずると同時に彼かのいわゆる月並つきなみが恋しくなる。

教師よりもやはり実業家がえらいように思われる。

吾輩も少し変だと思つて、例の尻尾しっぽに伺いを立てて

見たら、その通りその通りと尻尾の先から御託宣ごたくせんが

あつた。座敷へ這入はいつて見ると驚いたのは迷亭先生

まだ帰らない、巻煙草まきたばこの吸い殻を蜂の巣のごとく火

鉢の中へ突き立てて、大胡坐おおあぐらで何か話し立てている。

いつの間にか寒月君さえ来ている。主人は手枕をし

て天井の雨洩あまもりを余念もなく眺めている。あいかわら

ず太平の逸民の会合である。

「寒月君、君の事を譚語にまで言つた婦人の名は、うわごと

当時秘密であつたようだが、もう話しても善かろう」

と迷亭がからかい出す。「御話しをしても、私だけ

に關する事なら差支さしつかえないんですが、先方の迷惑に

なる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに○○

博士夫人に約束をしてしまったもんですから」「他

言をしないと云う約束かね」「ええ」と寒月君は例

のごとく羽織の紐をひねくる。その紐は売品にある

まじき紫色である。「その紐の色は、ちと天保調だ

てんぽうちょう

な」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件などに

は無頓着である。「そうさ、到底日露戦争時代のも

とうてい

のではないな。陣笠に立葵の紋の付いたぶつ割き羽

じんがさ

たちあおい

さ

織でも着なくつつちや納まりの付かない紐だ。織田信

長が髻入をするとき頭の髪を茶筌に結ったと云うが

むこいり

ちやせん

い

その節用いたのは、たしかそんな紐だよ」と迷亭の文句はあいかわらず長い。「實際これは爺じいが長州征伐の時に用いたのです」と寒月君は真面目である。

「もういい加減に博物館へでも献納してはどうだ。

首縊りの力学の演者、理学士水島寒月君ともあろう

ものが、売れ残りの旗本のような出いで立たちをするのは

ちと体面に関する訳だから」「御忠告の通りに致し

てもいいのですが、この紐が大変よく似合うと云つてくれる人もありますので——」 「誰だい、そんな趣味のない事を云うのは」と主人は寝返りを打ちながら大きな声を出す。「それは御存じの方なんじゃないんで——」 「御存じでなくてもいいや、一体誰だい」 「去る女性によしやうなんです」 「ハハハハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やはり隅田川の底から

君の名を呼んだ女なんだろう、その羽織を着てもう

一返御駄おだぶつ仏を極きめ込んじやどうだい」と迷亭が横合

から飛び出す。「へへへへもう水底から呼んでは

おりません。ここから乾いぬいの方角にあたる清浄しょうじょうな世界

で……」「あんまり清浄でもなさそうだ、毒々しい

鼻だぜ」「へえ？」と寒月は不審な顔をする。「向

う横丁の鼻がさつき押しかけて来たんだよ、ここへ、

実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」「うむ」

と主人は寝ながら茶を飲む。「鼻って誰の事です」

「君の親愛なる久遠くおんの女性によしやうの御母堂様だ」「へえー」

「金田の妻さいという女が君の事を聞きに来たよ」と主

人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉しがるか、

恥ずかしがるかと寒月君の様子を窺うかがって見ると別段

の事もない。例の通り静かな調子で「どうか私に、

あの娘を貰つてくれと云う依頼なんでしょう」と、

また紫の紐をひねくる。「ところが大違さ。その御

母堂なるものが偉大なる鼻の所有主ぬしでね……」迷亭

が半なかば言い懸けると、主人が「おい君、僕はさつき

から、あの鼻について俳体詩はいたいしを考えているんだがね」

と木に竹を接ついだよな事を云う。隣の室へやで妻君が

くすくす笑い出す。「随分君も吞気のんきだなあ出来たの

かい」「少し出来た。第一句がこの顔に鼻祭りと云うのだ」「それから？」「次がこの鼻に神酒供えと云うのさ」「次の句は？」「まだそれぎりしか出来ておらん」「面白いですな」と寒月君がにやにや笑う。「次へ穴二つ、幽かなりと付けちやどうだ」と迷亭はすぐ出来る。すると寒月が「奥深く毛も見えず、はいけますまいか」と各々出鱈目おのおのでたらめを並べていると、

垣根に近く、往来で「今戸焼の狸いまどやき たぬき今戸焼の狸」と四

五人わいわい云う声がする。主人も迷亭もちよつと

驚ろいて表の方を、垣の隙すきからすかして見ると「ワ

ハハハハハ」と笑う声がして遠くへ散る足の音がす

る。「今戸焼の狸というな何だい」と迷亭が不思議

そうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答え

る。「なかなか振ふるつていますな」と寒月君が批評を

加える。迷亭は何を思い出したか急に立ち上って

「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究した事がございますから、その一斑を披瀝いっぽん ひれきして、御

両君の清聴を煩わづらわしたいと思ひます」と演舌の真似

をやる。主人はあまりの突然にぼんやりして無言の

まま迷亭を見ている。寒月は「是非承うけたまわりたいもので

す」と小声で云う。「いろいろ調べて見ましたが鼻

の起源はどうも確しかと分りません。第一の不審は、も

しこれを実用上の道具と仮定すれば穴が二つでたく

さんである。何もこんなに横風おうふうに真中から突き出し

て見る必用がないのである。ところがどうしてだん

だん御覧のごとく斯様かようにせり出して参ったか」と自

分の鼻を抓つまんで見せる。「あんまりせり出してもお

らんじやないか」と主人は御世辞のないところを云

う。「とにかく引っ込んではおりませんからな。た

だ二個の孔が併あなならんでいる状態と混同なすつては、誤

解を生ずるに至るかも計られませんか、あらかじめ予め御注

意をしておきます。――で愚見によりますと鼻の発

達は吾々人間が鼻汁はなをかむと申す微細なる行為の結

果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したも

のでございます」「いっわ佯りのない愚見だ」とまた主人

が寸評を挿入する。そうにゆう

「御承知の通り鼻汁はなをかむ時は、

是非鼻を抓みます、鼻を抓んで、ことにこの局部だ

けに刺激を与えますと、進化論の大原則によつて、

この局部はこの刺激に応ずるがため他に比例して不
相当な発達を致します。皮も自然堅くなります、肉

も次第に硬かたくなります。ついに凝こつて骨となります」

「それは少し——そう自由に肉が骨に一足飛に変化

は出来ますまい」と理学士だけあつて寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔で陳^のべ続ける。「いや御不審はごもつともですが論より証拠この通り骨があるから仕方がありません。すでに骨が出来る。

骨は出来ても鼻汁^{はな}は出ますな。出ればかまらずにはい

られません。この作用で骨の左右が削^{けず}り取られて細

い高い隆起と変化して参ります——実に恐ろしい作

用です。点滴てんてきの石を穿うつがごとく、賓頭びんずる顱おのずの頭が自

から光明を放つがごとく、不思議薰ふしぎくん不思議臭ふしぎしゅうの喩たとえの

ごとく、斯か様に鼻筋かようが通つて堅くなります」 「それ

でも君のなんぞ、ぶくぶくだぜ」 「演者自身の局部

は回護かいごの恐れがありますから、わざと論じません。

かの金田の御母堂の持たせらるる鼻のごときは、も

つとも発達せるもつとも偉大なる天下の珍品として

御両君に紹介しておきたいと思います」寒月君は思
わずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極度に達します

と偉観には相違ございませんが何となく怖おそろしくて近

づき難いものであります。あの鼻梁びりようなどは素晴らしい

には違いございませんが、少々峻嶮しゅんけん過ぎるかと思わ

れます。古人のうちにててもソクラチス、ゴールドス

ミスもしくはサツカレーの鼻などは構造の上から云

うと随分申し分はございましょうがその申し分のあ

あいきよう

るところに愛嬌がございます。鼻高きが故に貴から

たつと

ず、奇^きなるがために貴しとはこの故でもございまし

ようか。下世^{げせ}話にも鼻より団子と申しますれば美的

価値から申しますとまず迷亭くらいのところが適當

かと存じます」寒月と主人は「フフフフ」と笑い出

す。迷亭自身も愉快そうに笑う。「さてただ今^{いま}まで

弁じましたのは――」 「先生弁じましたは少し講釈

師のようで下品ですから、よしていただきましょう」

と寒月君は先日ふくしゅうの復讐をやる。「さようしからば顔

を洗って出直しましょうかな。――ええ――これか

ら鼻と顔の権衡けんこうに一言論いちごん及したいと思ひます。他に

関係なく単独に鼻論をやりますと、かの御母堂など

はどこへ出しても恥ずかしからぬ鼻――鞍馬山くらまやまで展

覧会があつても恐らく一等賞だろうと思われるくらいな鼻を所有していらせられますが、悲しいかなあれは眼、口、その他の諸先生と何等の相談もなく出来上つた鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したものに相違ございません。しかしシーザーの鼻を鋏でちよん切つて、はさみ当家の猫の顔へ安置したらどんな者でございましょうか。たと喩えにも猫の額とひたい

云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱が突兀^{とつこつ}として聳^{そび}え

たら、碁盤の上へ奈良の大仏を据^すえ付けたようなも

ので、少しく比例を失するの極、その美的価値を落

す事だろうと思います。御母堂の鼻はシーザーのそ

れのごとく、正^{まさ}しく英姿颯爽^{えいしさつそう}たる隆起に相違^{ちやう}ござい

ません。しかしその周囲^{いによう}を圍繞する顔面的条件は如^い

何^かな者でありましよう。無論当家の猫のごとく劣等

ではない。しかし癩癰病てんかんやみの御かめのごとく眉まゆの根

に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるるのは事

実であります。諸君、この顔にしてこの鼻ありと嘆

ぜざるを得んではありませんか」迷亭の言葉が少し

途切れる途端とたん、裏の方で「まだ鼻の話はなしをしている

んだよ。何てえ剛突ごうつく張はりだろう」と云う声が聞える。

「車屋の神さんだ」と主人が迷亭に教えてやる。迷

亭はまたやり初める。「計らざる裏手にあたって、

新たに異性の傍聴者のある事を発見したのは演者の

深く名誉と思うところであります。ことに宛転えんてんたる

嬌音きょうおんをもつて、乾燥なる講筵こうえんに一点の艶味えんみを添えら

れたのは実に望外の幸福であります。なるべく通俗

的に引き直して佳人淑女かじんしゆくじよの眷顧けんこに背かざらん事を期

する訳でありますが、これからは少々力学上の問題

に立ち入りますので、いきおい勢御婦人方には御分りにくい

かも知れません、どうか御辛防ごしんぼうを願います」寒月君

は力学と云う語を聞いてまたにやにやする。「私の

証拠立てようとするのは、この鼻とこの顔は到底調和しない。ツアイシングの黄金律を失していると云

う事なんで、それを厳格に力学上の公式から演繹えんえきし

て御覧に入れようと云うのであります。まずHを鼻

の高さとします。 α は鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」

「分るものか」と主人が云う。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困ったな。」

苦沙弥くしゃみはとにかく、君は理学士だから分るだろうと思つたのに。この式が演説の首脳なんだからこれを

略しては今までやった甲斐がないのだが——まあ仕方がない。公式は略して結論だけ話そう」「結論があるか」と主人が不思議そうに聞く。「当り前さ結論のない演舌は、デザートのない西洋料理のようなものだ、——いいか両君能く聞き給え、これからが結論だぜ。——さて以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の説を参酌して考えて見ますと、先天

的形体の遺伝は無論の事許さねばなりません。また

この形体に追陪ついはいして起る心意的状況は、たとい後天

性は遺伝するものにあらずとの有力なる説あるにも

関せず、ある程度までは必然の結果と認めねばなり

ません。従つてかくのごとく身分に不似合なる鼻の

持主の生んだ子には、その鼻にも何か異状がある事

と察せられます。寒月君などは、まだ年が御若いか

ら金田令嬢の鼻の構造において特別の異状を認められんかも知れませんが、かかる遺伝は潜伏期の長いものでありますから、いつ何時なんどき気候の劇変と共に、急に発達して御母堂のそれのごとく、咄嗟とつさの間に膨ぼう脹ちようするかも知れません、それ故にこの御婚儀は、迷亭の学理的論証によりますと、今の中御断念になつた方が安全かと思われます、これには当家の御主人

は無論の事、そこに寝ておらるる猫又殿にも御異存ねこまたどの

は無かろうと存じます」主人はようよう起き返つて

「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰うものか。

寒月君もらつちやいかんよ」と大變熱心に主張する。

吾輩もいささか賛成の意を表するためににやーにや

ーと二声ばかり鳴いて見せる。寒月君は別段騒いだ

様子もなく「先生方の御意向がそうなら、私は断念

してもいいんですが、もし当人がそれを気にして病
氣にでもなったら罪ですから——」「ハハハハハ艶えん
罪ざいと云う訳わけだ」主人だけは太おおいにむきになつて「そん
な馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌ろくな者でない
に極きまつてらあ。初めて人のうちへ来ておれをやり込
めに掛つた奴だ。傲慢ごうまんな奴だ」と独ひとりでぶんぶんす
る。するとまた垣根のそばで三四人が「ワハハハハ

ハ」と云う声がする。一人が「高慢ちきな唐変木だ」とうへんぼく

と云うと一人が「もっと大きな家へ這入りてえだろ」うちはい

う」と云う。また一人が「御気の毒だが、いくら威

張ったって蔭弁慶だ」かげべんけいと大きな声をする。主人は椽えん

側へ出て負けないような声で「やかましい、何だわ

ざわざそんな塀の下へ来て」と怒鳴る。どな「ワハハハ

ハハサヴェジ・チーだ、サヴェジ・チーだ」と口々

に罵ののしる。主人は大に逆鱗おおいげきりんの体で突然起たつてステツ

キを持って、往来へ飛び出す。迷亭は手を拍うつて

「面白い、やれやれ」と云う。寒月は羽織の紐を撚ひね

つてにやにやする。吾輩は主人のあとを付けて垣の

崩れから往来へ出て見たら、真中に主人が手持無沙

汰にステツキを突いて立っている。人通りは一人も

ない、ちよつと狐きつねに抓つままれた体ていである。

四

例によつて金田邸へ忍び込む。

例によつてとは今更いまやう解釈する必要もない。しばし

ばを自乗じじようしたほどの度合を示す語ことばである。一度やっ

た事は二度やりたいもので、二度試みた事は三度試

みたいのは人間にのみ限らるる好奇心ではない、猫といえどもこの心理的特権を有してこの世界に生れ出でたものと認定していただかねばならぬ。三度以上繰返す時始めて習慣なる語を冠せられて、この行為が生活上の必要と進化するのもまた人間と相違はない。何のために、かくまで足繁くあししげ金田邸へ通うのかと不審を起すならその前にちよつと人間に反問し

たい事がある。なぜ人間は口から煙を吸い込んで鼻から吐き出すのであるか、腹の足しにも血の道の薬にもならないものを、恥かし気もなく吐吞して憚からざる以上は、吾輩が金田に出入するのを、あまり大きな声で咎め立てをして貰いたくない。金田邸は吾輩の煙草である。

忍び込むと云うと語弊がある、何だか泥棒か間男

のようで聞き苦しい。吾輩が金田邸へ行くのは、招

待こそ受けないが、決して鰹かつおの切身きりみをちよろまかし

たり、眼鼻が顔の中心に痙攣けいれん的に密着てきしている狛君ちん

などと密談するためではない。——何探偵？——も

つてのほかの事である。およそ世の中に何が賤いやしい

家業かぎようだと云って探偵と高利貸ほど下等な職はないと

思っている。なるほど寒月君のために猫にあるまじ

きほどの義侠心ぎぎょうしんを起して、一度は金田家の動静を余よ

所そながら窺うかがった事はあるが、それはただの一遍で、

その後は決して猫の良心に恥はずるような陋劣ろうれつな振舞

を致した事はない。——そんなら、なぜ忍しのび込こむと

云いうような胡乱うろんな文字を使用した？——さあ、それ

がすこぶる意味のある事だて。元来吾輩の考による

と大空たいくうは万物を覆おおうため大地は万物を載のせるために

しつよう

出来ている——いかに執拗な議論を好む人間でもこの事実を否定する訳には行くまい。さてこの大空大

たいくうだ

地を製造するために彼等人類はどのくらいの労力を

ついで

費やしているかと云うと尺寸の手伝もしておらぬで

せきすん

はないか。自分が製造しておらぬものを自分の所有

き

と極める法はなからう。自分の所有と極めても差し

さ

つか

支えないが他の出入を禁ずる理由はあるまい。この

しゅつにゅう

茫々たる大地を、小賢しくも垣を囲らし棒杭を立て

て某々所有地などと劃し限るのはあたかもかの蒼天

に縄張して、この部分は我の天、あの部分は彼の天

と届け出るような者だ。もし土地を切り刻んで一坪

いくらの所有権を売買するなら我等が呼吸する空気を一尺立方に割って切売をしても善い訳である。空

気の切売が出来ず、空の縄張が不当なら地面の私有

も不合理ではないか。如是によぜかん觀によりて、如是によぜほう法を信

じている吾輩はそれだからどこへでも這はい入つて行く。

もつとも行きたくない処へは行かぬが、志す方角へ

は東西南北の差別は入らぬ、平氣な顔をして、のそのそと参る。金田ごときものに遠慮をする訳がない。

——しかし猫の悲しさは力づくでは到底人間には叶かな

わない。強勢は權利なりとの格言さえあるこの浮世

に存在する以上は、いかにこつちに道理があつても
猫の議論は通らない。無理に通そうとすると車屋の
黒のごとく不意に肴屋さかなやの天秤棒てんびんぼうを喰くらう恐れがある。

理はこつちにあるが権力は向うにあると云う場合に、
理を曲げて一も二もなく屈従するか、または権力の
目を掠かすめて我理を貫くかと云えば、吾輩は無論後者
を択えらぶのである。天秤棒は避けざるべからざるが故

に、忍ばざるべからず。人の邸内へは這入り込んで

さしつか

差支えなき故に、込まざるを得ず。この故に吾輩は金田邸へ忍び込むのである。

忍び込む度が重なるにつけ、探偵をする気はない

が自然金田君一家の事情が見たくもない吾輩の眼に

映じて覚えたくもない吾輩の脳裏のうりに印象を留とどむるに

至るのはやむを得ない。鼻子夫人が顔を洗うたんび

に念を入れて鼻だけ拭く事や、富子令嬢が阿倍川餅あべかわもち

むやみ

を無暗に召し上がらるる事や、それから金田君自身

が——金田君は妻君に似合わず鼻の低い男である。

単に鼻のみではない、顔全体が低い。小供の時分喧

嘩をして、がきだいしよう餓鬼大将のために頸筋くびすじを捉つらまえられて、

うんと精一杯に土塀どべいへ圧おし付けられた時の顔が四十

こんにち

年後の今日まで、因果いんがをなしておりはせぬかと怪あやしま

るるくらい平坦な顔である。至極穩かしごくで危険のない

顔には相違ないが、何となく變化に乏しい。いくら

怒おこつても平たいかな顔である。——その金田君が鮪まぐろの刺さ

身しみを食くつて自分で自分の禿頭はげあたまをぴちやぴちや叩たたく事

や、それから顔が低いばかりでなく背が低いので、

無暗に高い帽子と高い下駄はを穿く事や、それを車夫

がおかしがつて書生に話す事や、書生がなるほど君

の觀察は機敏だと感心する事や、——一々数え切れ
ない。

近頃は勝手口の横を庭へ通り抜けて、築山つきやまの陰か

ら向うを見渡して障子が立て切つて物静かであるな

と見極めがつくと、徐々そろそろ上り込む。もし人声にぎやが賑か

であるか、座敷から見透みすかさるる恐れがあると思え

ば池を東へ廻つて雪隠せつゐんの横から知らぬ間まに縁えんの下へ

出る。悪い事をした覚はないから何も隠れる事も、

恐れる事もないのだが、そこが人間と云う無法者に

あきら

逢つては不運と諦めるより仕方がないので、もし世

くまさかちようはん

間が熊坂長範ばかりになつたらいかなる盛徳の君子

もやはり吾輩のような態度に出ずるであらう。金田

もと

君は堂々たる実業家であるから固より熊坂長範のよ

きづかい

うに五尺三寸を振り廻す気遣はあるまいが、承る処

うけたまわ

によれば人を人と思わぬ病気があるそうである。人を人と思わないくらいなら猫を猫とも思うまい。して見れば猫たるものはいかなる盛徳の猫でも彼の邸内で決して油断は出来ぬ訳わけである。しかしその油断の出来ぬところが吾輩にはちよつと面白いので、吾輩がかくまでに金田家の門を出入しゅつにゅうするの、ただこの危険が冒おかして見たいばかりかも知れぬ。それは追

つて篤とくと考えた上、猫の脳裏のうりを残りなく解剖し得た

時改めて御吹聴ごふいちようかまつ仕ろう。

今日はどんな模様だなど、例の築山の芝生しばふの上に

顎あごを押しつけて前面を見渡すと十五畳の客間を弥生やよい

の春に明け放って、中には金田夫婦と一人の来客と

の御話最中である。おはなしさいちゆう生憎あいにく鼻子夫人の鼻がこつちを向

いて池越しに吾輩の額の上を正面から睨にらめ付けてい

る。鼻に睨まれたのは生れて今日が始めてである。

金田君は幸い横顔を向けて客と相對しているから例
の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、その代り鼻

の在所ありかが判然しない。ただ胡麻塩色ごましおの口髯くちひげが好い加

減な所から乱雑もせいに茂生もせいしているので、あの上に孔あなが

二つあるはずだと結論だけは苦もなく出来る。春風はるかぜ

もああ云う滑なめらかな顔ばかり吹いていたら定めて楽らくだ

ろうと、ついでながら想像を逞たくましゅうして見た。御

客さんは三人の中うちで一番普通の容貌ようぼうを有している。

ただし普通なだけに、これぞと取り立てて紹介する

に足るような雑作ぞうさくは一つもない。普通と云うと結構

なようだが、普通の極平凡きよくへんの堂のぼに上り、庸俗の室に

入いったのはむしろ憫然びんぜんの至りだ。かかる無意味な面つら

構がまえを有すべき宿命を帯びて明治の昭代しょうだいに生れて来た

のは誰だろう。例のごとく椽の下まで行つてその談話を承わらなくては分らぬ。

「……それで妻が^{さい}わざわざあの男の所まで出掛けて行つて容子^{ようす}を聞いたんだがね……」と金田君は例の

ごとく横風^{おうふう}な言葉使である。横風ではあるが毫^{ごう}も峻^{しゅ}

嶮^{んけん}なところがない。言語も彼の顔面のごとく平板^{へいばんぼう}尫

^{だい}大である。

「なるほどあの男が水島さんを教えた事がございまして——なるほど、よい御思い付きで——なるほど」となるほどずくめのは御客さんである。

「ところが何だか要領を得ないので」

「ええ苦沙弥^{くしやみ}じや要領を得ない訳^{わけ}で——あの男は私

がいつしよに下宿をしている時分から実に煮^にえ切らない——そりや御困りでございましたらう」と御客

さんは鼻子夫人の方を向く。

「困るの、困らないのってあなた、私わたししやこの年に

なるまで人のうちへ行つて、あんな不取扱ふとりあつかいを受けた

事はあるやしません」と鼻子は例によつて鼻嵐を吹く。

「何か無礼な事でも申しましたか、昔むかしから頑固がんこな

性分で——何しろ十年一日のごとくりードル専門の

教師をしているのでも大体御分りになりましたよう」

と御客さんは体ていよく調子を合せている。

「いや御話しにもならんくらいで、妻さいが何か聞くと

まるで剣もほろろの挨拶だそうで……」

「それは怪けしからん訳で——一体少し学問をしてい

るととかく慢心まごころが萌もすもので、その上貧乏きんぱをすると

負け惜しみが出ますから——いえ世の中には随分無

法な奴がおりますよ。自分の働きのないのにや気が付かないで、無暗^{むやみ}に財産のあるものに喰^くつて掛^かるな
んてえのが――まるで彼等の財産でも捲^まき上げたよ
うな気分ですから驚きますよ、あははは」と御客さ
んは大恐悦^{たいおつえき}の体である。

「いや、まことに言語同断^{ごんごどうだん}で、ああ云うのは必竟世^{ひつきよう}
間見^{まみ}ずの我儘^{わがまま}から起るのだから、ちつと懲^こらしめの

ためにいじめてやるが好かろうと思つて、少し当つてやったよ」

「なるほどそれでは大分答だいふえましたろう、全く本人

のためにもなる事ですから」と御客さんはいかなる

当り方うけたまわか承らぬ先からすでに金田君に同意している。

「ところが鈴木さん、まあなんて頑固な男なんでし

よう。学校へ出て福地^{ふくち}さんや、津木^{つぎ}さんには口も

利^きかないんだそうです。恐れ入って黙っているのか

と思つたらこの間は罪もない、宅^{たく}の書生をステツキ

を持って追つ懸けたつてんです——三十面^{づら}さげて、

よく、まあ、そんな馬鹿な真似が出来たもんじやあ

りませんか、全くや、け、で少し気が変になつてるんで

すよ」

「へえどうしてまたそんな乱暴な事をやっただけで……」とこれには、さすがの御客さんも少し不審を起したと見える。

「なあに、ただあの男の前を何とか云つて通つただけです、すると、いきなり、ステッキを持ってはだし
跣足で飛び出して来たんだそうです。よしんば、ち
つとやそつと、何か云つたつて小供じゃありません

か、ひげづら髯面おおぞうの大僧の癖にしかも教師じやありませんか」

「さよう教師ですからな」と御客さんが云うと、金

田君も「教師だからな」と云う。教師たる以上はい

かなる侮辱を受けても木像のようにおとなしくして

おらねばならぬとはこの三人の期せずして一致した

論点と見える。

「それに、あの迷亭って男はよっぽどな酔興人ですすいきようじん

ね。役にも立たない嘘うそ八百を並べ立てて。私わたししやあ

んな変へん挺ていな人にや初めて逢いましたよ」

「ああ迷亭ですか、あいかわらず法螺ほらを吹くと見え

ますね。やはり苦沙弥の所で御逢いになったんです

か。あれに掛っちやたまりません。あれも昔むかし自炊

の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするものですか

ら能く喧嘩をしましたよ」

「誰だって怒りまさあね、あんなじや。そりや嘘をつくのも宜うござんしようさ、ね、義理が悪るいとか、ばつを合せなくつちやあならないとか——そんな時には誰しも心にならない事を云うもんでさあ。しかしあの男のは吐かなかくってすむのに矢鱈に吐くんだから始末に了えないじゃありませんか。何が欲しく

つて、あんな出鱈目でたらめを——よくまあ、しらじらしく

云えると思いますよ」

「ごもつともで、全く道楽からくる嘘だから困ります」

「せっかくあなた真面目に聞きに行つた水島の事も

めちやめちや

滅茶滅茶になつてしまいました。わたし私や剛腹ごうはらで忌々しいまいま

くつて——それでも義理は義理でさあ、人のうちへ

物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりです

から、後あとで車夫にビールを一ダース持たせてやった

んです。ところがあなたどうでしょう。こんなもの

を受取る理由がない、持つて歸れつて云うんだそう

で。いえ御礼だから、どうか御取り下さいつて車夫

が云つたら——悪にくいじやありませんか、俺はジ

ヤムは毎日舐なめるがビールのような苦にがい者は飲んだ

事がないって、ふいと奥へ這入^{はい}ってしまつたって――
言い草に事を欠いて、まあどうでしょう、失礼じやありませんか」

「そりや、ひどい」と御客さんも今度は本気に苛^{ひど}いと感じたらしい。

「そこで今日わざわざ君を招いたのだがね」としばらく途切れて金田君の声が聞える。「そんな馬鹿者

は陰から、からかつてさえいればすむようなものの、

少々それでも困る事があるじやて……」と鮪まぐろの刺身

を食う時のごとく禿頭はげあたまをぴちやぴちや叩たたく。もつと

も吾輩は椽えんの下にいるから實際叩いたか叩かないか

見えようはずがないが、この禿頭の音は近来大分聞だいぶん

馴なれている。比丘尼びくにが木魚の音を聞き分けるごとく、

椽の下からでも音さえたしかであればすぐ禿頭だな

しゅっしょ

と出所を鑑定する事が出来る。「そこでちよつと君

わずら

を煩わしたいと思つてな……」

「私に出来ます事なら何でも御遠慮なくどうか――

今度東京勤務と云う事になりましたのも全くいろいろ御心配を掛けた結果にほかならん訳でありますから」と御客さんは快よく金田君の依頼を承諾する。

くちよう

この口調で見るとこの御客さんはやはり金田君の世

話になる人と見える。いやだんだん事件が面白く発
展してくるな、今日はあまり天氣が宜いので、来る
気もなしに來たのであるが、こう云う好材料を得よ
うとは全く思い掛がけなんだ。御彼岸おひがんにお寺詣てらまいりをし
て偶然方丈ほうじょうで牡丹餅ぼたんもちの御馳走になるような者だ。金
田君はどんな事を客人に依頼するかなと、椽の下か
ら耳を澄して聞いている。

「あの苦沙弥と云う変物へんぶつが、どう云う訳か水島に入

れ智慧ぢえをするので、あの金田の娘を貰もらつては行いかん

などとほのめかすそうだ——なあ鼻子そうだな」

「ほのめかすどころじゃないんです。あんな奴の娘

を貰もらう馬鹿がどこの国にあるものか、寒月君決して

貰もらつちやいかんよって云うんです」

「あんな奴とは何だ失敬な、そんな乱暴な事を云つ

たのか」

「云ったところじやありません、ちゃんと車屋の神さんが知らせに来てくれたんです」

「鈴木君どうだい、御聞の通りの次第さ、随分厄介だろうが？」

「困りますね、ほかの事と違って、こう云う事には
他人が妄りみだに容喙ようかいするべきはずの者ではありません

からな。そのくらいな事はいかな苦沙弥でも心得て
いるはずですが。一体どうした訳なんでしょう」

「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同宿をして
いて、今はとにかく、昔は親密な間柄であつたそう
だから御依頼するのだが、君当人に逢つてな、よく
利害を論^{さと}して見てくれんか。何か怒^{おこ}っているかも知
れんが、怒るのは向^{むこう}が悪^{わる}いからで、先方がおとな

しくしてさえいれば一身上の便宜も充分計つてやるし、氣に障さわるような事もやめてやる。しかし向が向ならこつちもこつちと云う氣になるからな——つまりそんな我がを張るのは当人の損だからな」

「ええ全くおつしやる通り愚ぐな抵抗をするのは本人の損になるばかりで何の益もない事ですから、善く申し聞けましょう」

「それから娘はいろいろと申し込もある事だから、必ず水島にやると極^きめる訳にも行かんが、だんだん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだから、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなったらあるいはもらう事が出来るかも知れんくらいはそれとなくほのめかしても構わん」

「そう云ってやったら当人も励^{はげ}みになつて勉強する

事でしよう。宜よろしゅうございます」

「それから、あの妙な事だが——水島にも似合わん
事だと思ふが、あの変物へんぶつの苦沙弥を先生先生と云つ

て苦沙弥の云う事は大抵聞く様子だから困る。なに

そりや何も水島に限る訳では無論ないのだから苦沙

弥が何と云つて邪魔をしようと、わしの方は別に差さし

支つかえもせんが……」

「水島さんが可哀そうですね」と鼻子夫人が口を出す。

「水島と云う人には逢った事もございませんが、とにかくこちらと御縁組が出来れば生涯しょうがいの幸福で、本人は無論異存はないのでしよう」

「ええ水島さんは貰いたがっているんですが、苦沙弥だの迷亭だのって変り者が何だとか、かんだとか

云うものですから」

「そりや、善くない事で、相当の教育のあるものにも似合わん所作しよさですな。よく私が苦沙弥の所へ参つて談じましょう」

「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番詳くわしいのだがせんだって妻さいが行つた時は今の始末で碌々ろくろく聞く事も出来

なかつた訳だから、君から今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたいて」

「かしこまりました。今日は土曜ですからこれから廻つたら、もう歸つておりましょう。近頃はどこに住んでおりますか知らん」

「ここの前を右へ突き当って、左へ一丁ばかり行くと崩れかかった黒塀のあるうちです」と鼻子が教え

る。

「それじゃ、つい近所ですな。訳はありません。歸りにちよつと寄つて見ましよう。なあに、大体分りましようひょうさつ標札を見れば」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名刺を御饌粒ごぜんつぶで門へ貼はり付けるのでしよう。雨がふると剥はがれてしまひましよう。すると御天氣の日にまた

貼り付けるのです。だから標札は当あてにやなりませんよ。あんな面倒臭い事をするよりせめて木札きふだでも懸けたらよさそうなもんですがねえ。ほんとうにどこまでも気の知れない人ですよ」

「どうも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちと聞いたら大概分るでしょう」

「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかないから、

すぐ分りますよ。あ、そうそうそれで分らなければ、
好事がある。何でも屋根に草が生え^はたうちを探し
て行けば間違っこありませんよ」

「よほど特色のある家^{いえ}ですなアハハハハ」

鈴木君が御光来になる前に帰らないと、少し都合
が悪い。談話もこれだけ聞けば大丈夫沢山である。

縁^{えん}の下を伝わって雪隠^{せつゐん}を西へ廻^{まわ}って築山^{つきやま}の陰から往

来へ出て、急ぎ足で屋根に草の生えているうちへ歸つて来て何喰わぬ顔をして座敷の椽へ廻る。

主人は椽側へ白毛布しろげつとを敷いて、腹這はらばいになつて麗うらちか

な春日はるびに甲羅こうらを干している。太陽の光線は存外公平

なもので屋根にペンペン草の目標のある陋屋ろうおくでも、

金田君の客間のごとく陽気に暖かそうであるが、氣の毒な事には毛布けつとだけが春らしくない。製造元では

白のつもりで織り出して、唐物屋とうぶつやでも白の気で売り

さば

捌いたのみならず、主人も白と云う注文で買って来

たのであるが――何しろ十二三年前の事だから白

の時代はとくに通り越してただ今は濃灰色のうかいしよくなる変色

の時期に遭遇そうぐうしつつある。この時期を経過して他の

暗黒色に化けるまで毛布の命が続くかどうかは、

疑問である。今でもすでに万遍なく擦すり切れて、豎たて

横よこの筋は明かに読まれるくらいだから、毛布と称す

せんじょう

るのはもはや僭せん上の沙汰であつて、毛の字は省はぶいて

単にツトとでも申すのが適當である。しかし主人の

考えでは一年持ち、二年持ち、五年持ち十年持った

以上は生涯しょうがい持たねばならぬと思つてゐるらしい。随

のんき

分呑気な事である。さてその因縁いんねんのある毛布けつとの上へ

ぜん

前申す通り腹這になつて何をしてゐるかと思つと両

手で出張った顚あごこを支えて、右手の指の股に巻煙草まきたばこを

挟んでいる。ただそれだけである。もつとも彼がフ、

ケだらけの頭の裏うちには宇宙の大真理が火の車のごと

く廻転しつつあるかも知れないが、外部から拝見し

たところでは、そんな事とは夢にも思えない。

煙草の火はだんだん吸口の方へ逼せまつて、一寸いっすんばかり

り燃え尽した灰の棒がぱたりと毛布の上に落つるの

も構わず主人は一生懸命に煙草から立ち上る煙の行のぼ末を見詰めている。その煙りは春風に浮きつ沈みつ、流れる輪を幾重いくえにも描いて、紫深き細君の洗髪あらいがみの根本へ吹き寄せつつある。——おや、細君の事を話しておくはずだった。忘れていた。

細君は主人に尻しりを向けて——なに失礼な細君だ？別に失礼な事はないさ。礼も非礼も相互の解釈次

第でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻のと

ほおづえ

ころへ頬杖を突き、細君は平気で主人の顔の先へ荘

そう

ごん

厳なる尻を据すえたまでの事で無礼も糸瓜へちまもないので

ある。御両人は結婚後一カ年も立たぬ間まに礼儀作法

などと窮屈な境遇を脱却せられた超然的夫婦である。

——さてかくのごとく主人に尻を向けた細君はどう

りょうけん

云う了見か、今日の天気に乗じて、尺に余る緑の黒

髪を、麩海苔ふのりと生卵でゴシゴシ洗濯せられた者と見

えて癖のない奴を、見よがしに肩から背へ振りかけて、無言のまま小供の袖なしを熱心に縫っている。

実はその洗髪を乾かすために唐縮緬とうちりめんの布団ふとんと針箱を

椽側えんがわへ出して、恭うやうやしく主人に尻を向けたのである。

あるいは主人の方で尻のある見当けんとうへ顔を持って来た

のかも知れない。そこで先刻御話たばこしをした煙草の煙

りが、豊かに靡くなび黒髪なびの間に流れ流れて、時ならぬ

かげろう

陽炎の燃えるところを主人は余念もなく眺めている。

しかしながら煙は固よりもと一所いっしょに停まるものではない、とど

その性質として上へ上へと立ち登るのだから主人の

眼もこの煙りの髪毛かみげと縋もつれ合う奇観を落ちなく見よ

うとすれば、是非共眼を動かさなければならぬ。

主人はまず腰の辺から観察を始めて徐々じょじょと背中を伝つた

つて、肩から頸筋くびすじに掛つたが、それを通り過ぎてよ

うよう脳天に達した時、覚えずあつと驚いた。――

主人が偕老同穴かいろうどうけつを契ちぎつた夫人の脳天の真中には真丸まんまる

な大きな禿はげがある。しかもその禿が暖かい日光を反

射して、今や時を得顔に輝いている。思わざる辺へんに

この不思議な大発見をなした時の主人の眼は眩まばゆい

中に充分の驚きを示して、烈しい光線で瞳孔どうこうの開く

のも構わず一心不乱に見つめている。主人がこの禿

を見た時、第一彼の脳裏のうりに浮んだのはかの家伝来いえの

仏壇に幾世となく飾り付けられたる御灯明皿おとうみようざらである。

彼の一家いっけは真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金

を掛けるのが古例である。主人は幼少の時その家の

倉の中に、薄暗く飾り付けられたる金箔厚き厨子きんぱくがずし

あって、その厨子の中にはいつでも真鍮しんちゆうの灯明皿が

ぶら下って、その灯明皿には昼でもぼんやりした灯ひがついていた事を記憶している。周囲が暗い中にこの灯明皿が比較的明瞭に輝やいていたので小供心こどもこころにこの灯を何遍となく見た時の印象が細君の禿かぶに喚よび起されて突然飛び出したものであろう。灯明皿は一分立たぬ間まに消えた。この度は観音様かんのんさまの鳩たびの事を思おもい出す。観音様の鳩と細君の禿とは何等の關係もな

いようであるが、主人の頭では二つの間に密接な聯想がある。同じく小供の時分に浅草へ行くと必ず鳩に豆を買ってやった。豆は一皿が文久二つで、赤いかわらけははい土器へ這入っていた。その土器が、色と云い大さとおおきかわらけ云いこの禿によく似ている。

「なるほど似ているな」と主人が、さも感心したらしく云うと「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だって、御前の頭にや大きな禿があるぜ。知ってるか」

「ええ」と細君は依然として仕事の手をやめずに答える。別段露見を恐れた様子もない。超然たる模範妻君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出来たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前から禿げてい

るなら欺だまされたのであると口へは出さないが心の中うちで思う。

「いつ出来たんだか覚えちゃいませんわ、禿なんざどうだって宜いいじやありませんか」と大おおに悟おつたものである。

「どうだって宜いって、自分の頭じやないか」と主人は少々怒気を帯びている。

「自分の頭だから、どうだって宜いんだわ」と云つたが、さすが少しは気になると見えて、右の手を頭に乗せて、くるくる禿を撫なでて見る。「おや大分だいぶん大きくなつた事、こんなじや無いと思つていた」と言つたところをもつて見ると、年に合わして禿があまり大き過ぎると云う事をようやく自覚したらしい。

「女は鬘まげに結ゆうと、ここが釣れますから誰でも禿まげげ

るんですわ」と少しく弁護しだす。

「そんな速度で、みんな禿げたら、四十くらいになれば、から薬缶やかんばかり出来なければならん。そりや病気に違いない。伝染するかも知れん、今のうち早く甘木さんに見て貰え」と主人はしきりに自分の頭を撫なで廻して見る。

「そんなに人の事をおっしやるが、あなただって鼻

の孔あなへ白髪しらがが生えてるじゃありませんか。禿はが伝染するなら白髪だって伝染しますわ」と細君少々ぷりぷりする。

「鼻の中の白髪は見えんから害はないが、脳天が――ことに若い女の脳天がそんなに禿げちゃ見苦しい。

かたわ
不具だ」

「不具かたわなら、なぜ御貰いになったのです。御自分が

好きで貰つておいて不具だなんて……」

「知らなかったからさ。全く今日まで知らなかつたんだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁に来る時頭を見せなかつたんだ」

「馬鹿な事を！　どこの国に頭の試験をして及第したら嫁にくるなんて、ものが在るもんですか」

「禿はまあ我慢もするが、御前は背せいが人並外はずれて

低い。はなはだ見苦しくていかん」

「背いは見ればすぐ分るじやありませんか、背せいの低いのは最初から承知で御貰いになつたんじやありませんか」

「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思つたから貰つたのさ」

「廿はたちにもなつて背せいが延びるなんて——あなたもよ

つぽど人を馬鹿になさるのね」と細君は袖なしを抛ほうり出して主人の方に捩ねじ向く。返答次第ではその分にはすまさんと云う権幕けんまくである。

「廿はたちになつたって背いが延びてならんと云う法はあ
るまい。嫁に来てから滋養分でも食わしたら、少し
は延びる見込みがあると思つたんだ」と真面目な顔
をして妙な理窟りくつを述べていると門口かどぐちのベルが勢いきおいよく

鳴り立てて頼むと云う大きな声がする。いよいよ鈴木君がペンペン草を目的にめあて苦沙弥先生の臥竜窟を尋ねあてたと見える。

細君は喧嘩を後日に譲って、倉皇針箱と袖なしをそうこう

抱えて茶の間へ逃げ込む。かか主人は鼠色の毛布を丸めけつと

て書斎へ投げ込む。やがて下女が持ってきた名刺を見て、主人はちよつと驚ろいたような顔付であつた

が、こちらへ御通し申してと言ひ棄てて、名刺を握
ったまま後架こうかへ這入はいった。何のために後架へ急に這
入ったか一向要領を得ん、何のために鈴木藤十郎君
の名刺を後架まで持つて行つたのかなおさら説明に
苦しむ。とにかく迷惑なのは臭い所へ随行を命ぜら
れた名刺君である。

下女が更紗さらさの座布団とこを床の前へ直して、どうぞこ

れへと引き下がった、跡あとで、鈴木君は一応室内を見

廻わす。床に掛けた花開万国春とある木菴もくあんの贗物にせものや、

京製の安青磁やすせいじに活いけた彼岸桜ひがんぎくらなどを一々順番に点検

したあとで、ふと下女の勧めた布団の上を見るとい

つの間まにか一疋びきの猫がすまして坐っている。申すま

でもなくそれはかく申す吾輩である。この時鈴木君

の胸のうちにちよつとの間顔色にも出ぬほどの風波

が起つた。この布団は疑いもなく鈴木君のために敷かれたものである。自分のために敷かれた布団の上に自分が乗らぬ先から、断りもなく妙な動物が平然と蹲踞そんきよしている。これが鈴木君の心の平均を破る第一の条件である。もしこの布団が勧められたまま、主ぬしなくして春風の吹くに任せてあつたなら、鈴木君はわざと謙遜けんそんの意を表して、主人がさあどうぞと云

うまでは堅い畳の上で我慢していたかも知れない。

しかし早晩自分の所有すべき布団の上に挨拶もなく乗ったものは誰であろう。人間なら譲る事もあるうが猫とは怪けしからん。乗り手が猫であると云うのが一段と不愉快を感じしめる。これが鈴木君の心の平均を破る第二の条件である。最後にその猫の態度がもつとも癪しやくに障る。少しは気の毒そうにでもしてい

る事か、乗る権利もない布団の上に、傲然ごうぜんと構えて、

ぶあいきよう

丸い無愛嬌な眼をぱちつかせて、御前は誰だいと云

わぬばかりに鈴木君の顔を見つめている。これが平

均を破壊する第三の条件である。これほど不平があ

るなら、吾輩の頸根くびねっこを捉とらえて引きずり卸したら

宜よさそうなものだが、鈴木君はだまって見ている。

堂々たる人間が猫に恐れて手出しをせぬと云う事は

有ろうはずがないのに、なぜ早く吾輩を処分して自分の不平を洩^もらさないかと云うと、これは全く鈴木君が一個の人間として自己の体面を維持する自重心の故であると察せらるる。もし腕力に訴えたなら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであろうが、体面を重んずる点より考えるといかに金田君の股肱^{ここう}たる鈴木藤十郎その人もこの二尺四方の真中に鎮座ま

します猫大明神を如何いかにともする事が出来ぬのである。

いかに人の見ていぬ場所でも、猫と座席争いをした

とあつてはいささか人間の威厳に関する。真面目に

猫を相手にして曲直きよくちよくを争うのはいかにも大人気おとなげない。

滑稽である。この不名誉を避けるためには多少の不

便は忍ばねばならぬ。しかし忍ばねばならぬだけそ

れだけ猫に対する憎悪ぞうおの念は増す訳であるから、鈴

木君は時々吾輩の顔を見ては苦い顔にがをする。吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白いから滑稽の念を抑おさえてなるべく何喰わぬ顔をしている。

吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行われつつある間に主人は衣紋えもんをつくろつて後架こうかから出て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名

刺の影さえ見えぬところをもって見ると、鈴木藤十

郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと思
見える。名刺こそ飛んだ厄運やくうんに際会したものだと思
う間まもなく、主人はこの野郎と吾輩の襟えりがみを攫つかん
でえいとばかりに椽側えんがわへ擲たたきつけた。

「さあ敷きたまえ。珍らしいな。いつ東京へ出て来
た」と主人は旧友に向つて布団を勧める。鈴木君は
ちよつとこれを裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙がしいものだから報知もしなかったが、
実はこの間から東京の本社の方へ帰るようになって
ね……」

「それは結構だ、大分長く逢わなかつたな。君が田^い
舎^{なか}へ行つてから、始めてじやないか」

「うん、もう十年近くになるね。なにその後時々東
京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いも

んだから、いつでも失敬するような訳さ。悪^{わる}く思
つてくれたもうな。会社の方は君の職業とは違つて
随分忙がしいんだから」

「十年立つうちには大分違ふもんだな」と主人は鈴
木君を見上げたり見下ろしたりしている。鈴木君は

頭を美^{きれい}麗に分けて、英国仕立のトウイードを着て、

派手な襟^{えり}飾^{かざり}りをして、胸に金鎖りさえピカつかせて

いる体裁、どうしても苦沙弥君くしやみの旧友とは思えない。

「うん、こんな物までぶら下げなくちゃ、ならんよ
うになつてね」と鈴木君はしきりに金鎖りを気にし
て見せる。

「そりや本ものかい」と主人は無作法ぶさほうな質問をかける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑いながら答えたが「君も大分年を取ったね。たしか小供があるはずだった
が一人かい」

「いいや」

「二人？」

「いいや」

「まだあるのか、じゃ三人か」

「うん三人ある。この先幾人出来るか分らん」

「相変らず気楽な事を云つてゐるぜ。一番大きいのはいくつになるかね、もうよつぽどだろう」

「うん、いくつか能く知らんが大方六つか、七つかだろう」

「ハハハ教師は呑氣のんきでいいな。僕も教員にでもなれば善かった」

「なつて見ろ、三日で嫌いやになるから」

「そうかな、何だか上品で、氣樂で、閑暇ひまがあつて、

すきな勉強が出来て、よさそうじゃないか。実業家

も悪くもないが我々のうちは駄目だ。実業家になる

ならずつと上にならなくっちゃいかん。下の方にな

るとやはりつまらん御世辞を振り撒まいたり、好かん

猪口ちよこをいただきに出たり随分愚ぐなもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さえ取れば何でもする、昔で云えば素町人すちやうにんだからな」と実業家を前に控ひかえて太平樂を並べる。

「まさか——そうばかりも云えんがね、少しは下品なところもあるのさ、とにかく金かねと情死しんじゆうをする覚悟でなければやり通せないから——ところがその金と云う奴が曲者くせもので、——今もある実業家の所へ行つて

聞いて来たんだが、金を作るにも三角術を使わなくちやいけないと云うのさ——義理をかく、人情をかく、恥をかく、これで三角になるそうだ面白いじゃないかアハハハハ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿じゃない、なかなか利口な男なんだよ、実業界でちよつと有名だがね、君知らんかしら、ついこ

の先の横丁にいるんだが」

「金田か？ 何^なんだあんな奴」

「大變怒ってるね。なあに、そりや、ほんの冗談だ^{じょうだん}

ろうがね、そのくらいにせんと金は溜らんと云う喩^{たとえ}

さ。君のようにそう真面目に解釈しちや困る」

「三角術は冗談でもいいが、あすこの女房の鼻はな
んだ。君行つたんなら見て来たろう、あの鼻を」

「細君か、細君はなかなかさばけた人だ」

「鼻だよ、大きな鼻の事を云つてゐるんだ。せんだつ

て僕はあの鼻について俳体詩はいたいしを作つたがね」

「何だい俳体詩と云うのは」

「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗いな」

「ああ僕のように忙がしいと文学などは到底駄目さ。とうてい

それに以前からあまり数奇すきでない方だから」

「君シャーレマンの鼻の恰好かつこうを知ってるか」

「アハハハ随分気楽だな。知らんよ」

「エルリントンは部下のものから鼻々と異名いみようをつけ

られていた。君知ってるか」

「鼻の事ばかり気にして、どうしたんだい。好いじ

やないか鼻なんか丸くても尖とんがってても」

「決してそうでない。君パスカルの事を知ってるか」

「また知ってるかか、まるで試験を受けに来たようなものだ。パスカルがどうしたんだい」

「パスカルがこんな事を云っている」

「どんな事を」

「もしクレオパトラの鼻が少し短かかったならば世界の表面に大変化を来した^{きた}らうと」

「なるほど」

「それだから君のようにそう無雑作むぞうさに鼻を馬鹿に
してはいかん」

「まあいいさ、これから大事にするから。そりやそ
うとして、今日来たのは、少し君に用事があつて来
たんだがね——あの元君もとの教えたとか云う、水島——
——ええ水島ええちよつと思ひ出せない。——そら君

の所へ始終来ると云うじゃないか」

かんげつ

「寒月か」

「そうそう寒月寒月。あの人の事についてちよつと聞きたい事があつて来たんだがね」

「結婚事件じゃないか」

「まあ多少それに類似の事さ。今日金田へ行ったら

……」

「この間鼻が自分で来た」

「そうか。そうだって、細君もそう云っていたよ。

苦沙弥さんに、よく伺おうと思つて上ったら、生憎あいにく

迷亭が来ていて茶々を入れて何が何だか分らなくしてしまつたって」

「あんな鼻をつけて来るから悪るいや」

「いえ君の事を云うんじゃないよ。あの迷亭君がお

ったもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行
かなかったので残念だったから、もう一遍僕に行つ
てよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだか
らね。僕も今までこんな世話^{まじ}はした事はないが、も
し当人同士が嫌^{いと}やでないなら中へ立って纏めるのも、
決して悪い事はないからね——それでやって来たの

「御苦勞様」と主人は冷淡に答えたが、腹の内では

当人同士と云う語を聞いて、ことばどう云う訳か分らんが、

ちよつと心を動かしたのである。蒸むし熱い夏の夜に

一縷いちるの冷風れいふうが袖口そでぐちを潜くぐったような気分になる。元来

この主人はぶつ切ら棒の、頑固がんこつや光沢消しを旨むねとして

製造された男であるが、さればと云つて冷酷不人情

な文明の産物とは自おのずからその撰せんを異ことにしている。彼

が何ぞ^{なん}と云うと、むかつ腹をたててぷんぷんするの

^{しやり}

でも這裏の消息は会得^{えとく}できる。先日鼻と喧嘩をした

のは鼻が気に食わぬからで鼻の娘には何の罪もない

話しである。実業家は嫌いだから、実業家の片割れ

^{きらい}

なる金田某も嫌に相違ないがこれも娘その人とは没

交渉の沙汰と云わねばならぬ。娘には恩も恨み^{うら}もな

くて、寒月は自分が実の弟よりも愛している門下生

である。もし鈴木君の云うごとく、
当人同志が好いた仲間なら、
間接にもこれを妨害するのは君子のなすべき所作しよさでない。――
苦沙弥先生はこれでも自分を君子と思つてゐる。――
もし当人同志が好いてゐるなら――
しかしそれが問題である。この事件に対し
て自己の態度を改めるには、
まずその真相から確かめなければならん。

「君その娘は寒月の所へ来たがつてるのか。金田や鼻はどうでも構わんが、娘自身の意向はどうなんだ」

「そりや、その——何だね——何でも——え、来たがつてるんだろうじやないか」鈴木君の挨拶は少々

曖昧である。あいまい実は寒月君の事だけ聞いて復命さえす

ればいいつもりで、御嬢さんの意向までは確かめて

来なかつたのである。従つて円転滑脱かつたつの鈴木君もち

よつと狼狽ろうばいの気味に見える。

「だろ、うた判然しない言葉だ」と主人は何事によらず、正面から、どやし付けないと気がすまない。

「いや、これやちよつと僕の云いようがわるかつた。

令嬢の方でもたしかに意いがあるんだよ。いえ全くだ

よ——え？——細君が僕にそう云つたよ。何でも時

々は寒月君の悪口を云う事もあるそうだがね」

「あの娘がか」

「ああ」

「怪^けしからん奴だ、悪口を云うなんて。第一それじや寒月に意^いがないんじやないか」

「そこがさ、世の中は妙なもので、自分の好いてい
る人の悪口などは殊^{ことごと}更云^{やう}って見る事もあるからね」

「そんな愚^ぐな奴がどこの国にいるものか」と主人は
かよう
斯様な人情の機微に立ち入った事を云われても頓^{とん}と
感じがない。

「その愚な奴が随分世の中にやあるから仕方がない。
現に金田の妻君もそう解釈しているのさ。戸惑^{とまど}いを

した糸瓜^{へちま}のようだなんて、時々寒月さんの悪口を云
いますから、よっぽど心^{うち}の中では思ってるに相違あ

りませんと」

主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思い掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせず、

鈴木君の顔を、だいどうえきしや大道易者のように昵じつと見つめている。

鈴木君はこいつ、この様子では、ことによるとやり損なうなと瘡かんづいたと見えて、主人にも判断の出来
そんな方面へと話頭を移す。

「君考えても分るじやないか、あれだけの財産があつてあれだけの器量なら、どこへだつて相応の家へうちやれるだろうじやないか。寒月だつてえらいかも知れんが身分から云や——いや身分と云つちや失礼かも知れない。——財産と云う点から云や、まあ、だれが見たつて釣り合わんのだからね。それを僕がわざわざ出張するくらい両親が氣を揉もんでるのは本人

が寒月君に意があるからの事じゃあないか」と鈴木君はなかなかうまい理窟をつけて説明を与える。今度は主人にも納得が出来たらしいのでようやく安心したが、こんなところにまごまごしているとまた^{とっ}臆^{かん}を喰う危険があるから、早く話しの歩を進めて、一刻も早く使命を完^{まっ}うする方が万全の策と心付いた。

「それでね。今云う通りの訳であるから、先方で云うには何も金銭や財産はいらんからその代り当人に附属した資格が欲しい——資格と云うと、まあ肩書だね、——博士になつたらやつてもいいなんて威張つてる次第じゃない——誤解しちやいかん。せんだつて細君の来た時は迷亭君がいて妙な事ばかり云うものだから——いえ君が悪いのじゃない。細君も君

の事を御世辞のない正直ない方かただと賞ほめていたよ。

全く迷亭君がわるかったんだろう。——それでさ本

人が博士にでもなってくれば先方でも世間へ対し

て肩身が広い、面目めんぼくがあると云うんだがね、どうだ

ろう、近々きんきんの内水島君は博士論文でも呈出して、博

士の学位を受けるような運びには行くまいか。なあ

に——金田だけなら博士も学士もいらんのさ、ただ

世間と云う者があるとね、そう手輕にも行かんからな」

こう云われて見ると、先方で博士を請求するのも、あながち無理でもないように思われて来る。無理ではないように思われて来れば、鈴木君の依頼通りにしてやりたくなる。主人を活^いかすのも殺すのも鈴木君の意のままである。なるほど主人は單純で正直な

男だ。

「それじゃ、今度寒月が来たら、博士論文をかくように僕から勧めて見よう。しかし当人が金田の娘を貰うつもりかどうか、それからまず問い正して見なくちやいかんからな」

「問い正すなんて、君そんな角張かどばった事をして物が纏まとまるものじゃない。やっぱり普通の談話の際にそ

れとなく氣を引いて見るのが一番近道だよ」

「氣を引いて見る？」

「うん、氣を引くと云うと語弊があるかも知れん。

——なに氣を引かんでもね。話しをしていると自然分るもんだよ」

「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりや、まあ好いさ。しかし迷亭君見たように余計な茶々を入れて打ち壊ぶわすのは善くないと思う。仮令たとい勧めないまでも、こんな事は本人の随意にすべきはずのものだからね。今度寒月君が来たらなるべくどうか邪魔をしないようにしてくれ給え。

——いえ君の事じゃない、あの迷亭君の事さ。あの男の口にかかると到底助かりっこないんだから」と

主人の代理に迷亭の悪口をきいていると、噂うわさをすれ

ば陰たとえの喩もに洩れず迷亭先生例のごとく勝手口から飄ひよ

然うぜんしゅんぷうと春風に乗じて舞い込んで来る。

「いやー珍客だね。僕のような狎客こうかくになると苦沙弥くしやみ

はとかく粗略にしたがつていかん。何でも苦沙弥の

うちへは十年に一遍くらいくるに限る。この菓子

いつもより上等じゃないか」と藤村ふじむらの羊羹ようかんを無雑作むぞうさ

に頼張る。ほおば

鈴木君はもじもじしている。主人はにやにやしている。迷亭は口をもがもがさしている。吾

輩はこの瞬時の光景を椽側えんがわから拝見して無言劇と云

うものは優に成立し得ると思った。禅家ぜんけで無言の問

答をやるのが以心伝心であるなら、この無言の芝居

も明かに以心伝心の幕である。すこぶる短かいけれ

どもすこぶる鋭どい幕である。

たびがらす

「君は一生旅鳥かと思つてたら、いつの間にか舞い

ながいき

戻つたね。長生はしたいもんだな。どんな僥倖ぎようこうに廻めぐ

り合わんとも限らんからね」と迷亭は鈴木君に対し

ごう

ても主人に対するごとく毫も遠慮と云う事を知らぬ。

いかに自炊の仲間でも十年も逢わなければ、何とな

そぶり

く気のおけるものだが迷亭君に限つて、そんな素振

も見えぬのは、えらいのだから馬鹿なのかちよつと見

当がつかぬ。

「可哀そうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」

と鈴木君は当らず障さわらずの返事はしたが、何となく

落ちつきかねて、例の金鎖を神経的にいじっている。

「君電気鉄道へ乗ったか」と主人は突然鈴木君に対して奇問を発する。

「今日は諸君からひやかされに来たようなものだ。

なんぼ田舎者だつて——これでも街鉄がいてつを六十株持つ

てるよ」

「そりや馬鹿に出来ないな。僕は八百八十八株半持

っていたが、惜しい事に大方虫おおかたが喰つてしまつて、

今じゃ半株ばかりしかない。もう少し早く君が東京

へ出てくれば、虫の喰わないところを十株ばかりや

るところだったが惜しい事をした」

「相変らず口が悪るい。しかし冗談は冗談として、

ああ云う株は持ってて損はないよ、年々ねんねん高くなるば

かりだから」

「そうだたとい仮令半株だつて千年も持ってるうちにや倉

が三つくらい建つからな。君も僕もその辺にぬかり

はない当世の才子だが、そこへ行くと苦沙弥などは

憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟分くらいに考
えているんだから」とまた羊羹ようかんをつまんで主人の方
を見ると、主人も迷亭の食くい気けが伝染して自おのずから
菓子皿の方へ手が出る。世の中では万事積極的のも
のが人から真似らるる権利を有している。

「株などはどうでも構わんが、僕は曾呂崎そろさきに一度で
いいから電車へ乗らしてやりたかった」と主人は喰

い欠けた羊羹の齒痕はあとを撫然ぶぜんとして眺める。

「曾呂崎が電車へ乗ったら、乗るたんびに品川まで行ってしまうは、それよりやっぱり天然居士てんねんこじで沢庵たくあん石いしへ彫ほり付けられてる方が無事でいい」

「曾呂崎と云えば死んだそうだな。気の毒だねえ、いい頭の男だったが惜しい事をした」と鈴木君が云うと、迷亭は直ただちに引き受けて

「頭は善かったが、飯を焚く事は一番下手だったぜ。曾呂崎の当番の時には、僕あいつでも外出をして蕎麦で凌いでいた」

「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は焦げくさくって心があつて僕も弱った。御負けに御菜に必ず豆腐をなまで食わせるんだから、冷たくて食われやせん」と鈴木君も十年前の不平を記憶の底から喚び起す。

「苦沙弥はあの時代から曾呂崎の親友で毎晩いっしょに汁粉を食しるこいに出たが、その崇たたりで今じや慢性胃弱になつて苦しんでゐるんだ。実を云うと苦沙弥の方が汁粉の数を余計食つてゐるから曾呂崎より先へ死んで宜いい訳なんだ」

「そんな論理がどこの国にあるものか。俺の汁粉より君は運動と号して、毎晩竹刀しな刀ないを持って裏の卵塔婆らんとうば

へ出て、石塔を叩たたいてるところを坊主に見つかつて

剣突けんつくを食つたじやないか」と主人も負けぬ氣になつ

て迷亭の旧惡あばを曝く。

「アハハハそうそう坊主が仏様の頭を叩いては安眠の妨害になるからよしてくれって言つたつけ。しか

し僕のは竹刀だが、この鈴木將軍のは手暴てあらだぜ。石

塔と相撲をとつて大小三個ばかり転がしてしまつた

んだから」

「あの時の坊主の怒り方は実に烈しかった。是非元のように起せと云うから人足を傭やとうまで待ってくれないと云ったら人足じやいかん懺悔ざんげの意を表するためにあなたが自身で起さなくては仏の意に背そむくと云うんだからね」

「その時の君の風采ふうさいはなかつたぜ、金巾かなきんのしやつに

越中^{えっちゅうふんどし}禪で雨上りの水溜りの中でうんうん^{うな}唸^{うな}って……」

「それを君がすました顔で写生するんだから^{ひど}苛い。

僕はあまり腹を立てた事のない男だが、あの時ばかりは失敬だと心^{しん}から思ったよ。あの時の君の言草をまだ覚えているが君は知ってるか」

「十年前の言草なんか誰が覚えているものか、しか

きせんいんでんこうかくだいこじ

たつ

しあの石塔に帰泉院殿黄鶴大居士安永五年辰正月と

彫^ほつてあつただけはいまだに記憶している。あの

石塔は古雅に出来ていたよ。引き越す時に盗んで行

きたかつたくらいだ。実に美学上の原理に叶^{かな}つて、

ゴシック趣味な石塔だった」と迷亭はまた好い加減

な美学を振り廻す。

「そりやいいが、君の言草がさ。こうだぜ——吾輩

は美学を専攻するつもりだから天地間の面白い出来

事はなるべく写生しておいて将来の参考に供さなけ

ればならん、気の毒だの、可哀相だのと云う私情は

かわいそう

学問に忠実なる吾輩ごときものの口にすべきところ

でないと平気で云うのだろう。僕もあんまりな不人

情な男だと思ったから泥だらけの手で君の写生帖を

引き裂いてしまった」

「僕の有望な画才が頓挫とんざして一向振いっこうわなくなつたの

も全くあの時からだ。君に機鋒きほうを折られたのだね。

僕は君に恨うらみがある」

「馬鹿にしちやいけない。こつちが恨めしいくらいだ」

「迷亭はあの時分から法螺吹ほらふきだつたな」と主人は羊よう

羹かんを食おいわ了つて再び二人の話の中に割り込んで来る。

「約束なんか履行りこうした事がない。それで詰問を受け

ると決して詫わびた事がない何とか蚊かとか云う。あの

寺の境内に百日紅さるすべりが咲いていた時分、この百日紅が

散るまでに美学原論と云う著述をすると云うから、

駄目だ、到底出来る気遣きづかいはないと云ったのさ。する

と迷亭の答えに僕はこう見えても見掛けに寄らぬ意

志の強い男である、そんなに疑うなら賭かけをしようと

云うから僕は真面目に受けて何でも神田の西洋料理
を奢おごりっこかなにかに極きめた。きつと書物なんか書

く気遣はないと思つたから賭をしたようなものの内

心は少々恐ろしかつた。僕に西洋料理なんか奢る金

はないんだからな。ところが先生いっそう一向稿いっこうを起す景色けしき

がない。七日なぬか立つても二十日はつか立つても一枚も書かな

い。いよいよ百日紅が散って一輪の花もなくなつても当人平気でいるから、いよいよ西洋料理に有りついたなと思つて契約履行をせま逼ると迷亭すまして取り合わない」

「また何とか理窟りくつをつけたのかね」と鈴木君が相の手を入れる。

「うん、実にずうずうしい男だ。吾輩はほかに能は

ないが意志だけは決して君方に負けはせんと剛情を張るのさ」

「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする。

「無論さ、その時君はこう云ったぜ。吾輩は意志の一点においてはあえて何人にもなんびと一步も譲らん。しかし残念な事には記憶が人一倍無い。美学原論を著わ

そうとする意志は充分あつたのだがその意志を君に
発表した翌日から忘れてしまった。それだから百日
紅の散るまでに著書が出来なかつたのは記憶の罪で
意志の罪ではない。意志の罪でない以上は西洋料理
などを奢る理由がないと威張っているのさ」

「なるほど迷亭君一流の特色を發揮して面白い」と
鈴木君はなぜだか面白がっている。迷亭のおらぬ時

の語気とはよほど違っている。これが利口な人の特色かも知れない。

「何が面白いものか」と主人は今でも怒おこっている様子である。

「それは御気の毒様、それだからその埋うめ合あせをするために孔雀くじやくの舌なんかを金と太鼓で探しているじゃないか。まあそう怒おこらずに待っているさ。しかし著

書と云えば君、今日は一大珍報を齎もたらして来たんだ
よ」

「君はくるたびに珍報を齎らす男だから油断が出来
ん」

「ところが今日の珍報は真の珍報さ。正札付一厘も
引けなしの珍報さ。君寒月が博士論文の稿を起した
のを知っているか。寒月はあるな妙に見識張った男

だから博士論文なんて無趣味な労力はやるまいと思
つたら、あれでやっぱり色気があるからおかしいじ
やないか。君あの鼻に是非通知してやるがいい、こ
の頃はどんぐりはかせ団栗博士の夢でも見ているかも知れない」

鈴木君は寒月の名を聞いて、話してはいけぬ話し
てはいけぬとあこ顚と眼で主人に合図する。主人には一いっ
向意味こうが通じない。さつき鈴木君に逢つて説法を受

けた時は金田の娘の事ばかりが気の毒になつたが、
今迷亭から鼻々と云われるとまた先日喧嘩をした事
を思い出す。思い出すと滑稽でもあり、また少々は
悪^{にく}らしくもなる。しかし寒月が博士論文を草しかけ
たのは何よりの御見^{おみ}やげで、こればかりは迷亭先生
自賛のごとくまずまず近来の珍報である。啻^{ただ}に珍報
のみならず、嬉しい快よい珍報である。金田の娘を

貰おうが貰うまいがそんな事はまずどうでもよい。

とにかく寒月の博士になるのは結構である。自分のように出来損いの木像は仏師屋の隅で虫が喰うまで
しらき
白木のまま燻くすぶつていても遺憾いかんはないが、これは旨うまく
仕上がったと思う彫刻には一日も早く箔はくを塗ってやり
たい。

「本当に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合図は

そつち除のけにして、熱心に聞く。

「よく人の云う事を疑ぐる男だ。——もつとも問題

は団栗どんぐりだか首縊くびくりの力学だか確しかと分らんがね。とに

かく寒月の事だから鼻の恐縮するようなものに違いない」

さつきから迷亭が鼻々と無遠慮に云うのを聞きたんびに鈴木君は不安の様子をする。迷亭は少しも気

が付かないから平気なものである。

「その後鼻についてまた研究をしたが、この頃トリ
ストラム・シャンデーの中に鼻論はなろんがあるのを発見し

た。金田の鼻などもスターンに見せたら善い材料に
なつたろうに残念な事だ。鼻名びめいを千載せんざいに垂れる資格

は充分ありながら、あのままで朽くち果つるとは不憫ふびん

千万せんぼんだ。今度ここへ来たら美学上の参考のために写

生してやろう」と相変らず口から出でまか任せに喋しゃべ舌り立
てる。

「しかしあの娘は寒月の所へ来たいのだそうだ」と
主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君
はこれは迷惑だと云う顔付をしてしきりに主人に目
くばせをするが、主人は不導体のごとく一向電氣に
感染しない。いっこう

「ちよつと乙おつだな、あんな者の子でも恋をす
るところが、しかし大した恋じやなかろう、大方鼻恋はなごいくら
いなところだぜ」

「鼻恋でも寒月が貰えばいいが」

「貰えばいいがって、君は先日大反対だつたじやな
いか。今日はいやに軟化しているぜ」

「軟化はせん、僕は決して軟化はせんしかし……」

「しかしどう、かしたんだろう。ねえ鈴木、君も実業

ばっせき

けが

家の末席を汚す一人だから参考のために言つて聞か

せるがね。あの金田某なる者さ。あの某なるものの

息女などを天下の秀才水島寒月の令夫人と崇め奉る

あが

のは、少々提灯と釣鐘と云う次第で、我々朋友たる

ちようちん

ほうゆう

れいれい

者が冷々黙過する訳に行かん事だと思ふんだが、た

とい実業家の君でもこれには異存はあるまい」

「相変らず元氣がいいね。結構だ。君は十年前と容^よ

子^{うす}が少しも変っていないからえらい」と鈴木君は柳に受けて、胡麻^{ごま}化^かそうとする。

「えらいと褒^ほめるなら、もう少し博学なところを御目にかけるがね。昔^{むか}しの希臘^{ギリシヤ}人^{じん}は非常に体育を重ん

じたものであらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百方奨励の策を講じたものだ。しかるに不思議な事に

は学者の智識ちしきに対してのみは何等の褒美ほうびも与えたと言ふ記録がなかつたので、今日こんにちまで実は大おおに怪しんでいたところさ」

「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子を合せる。

「しかるについ両三日前に至つて、美学研究の際ふとその理由を発見したので多年の疑団ぎだんは一度に氷解。

しつづ

漆桶を抜くがごとく痛快なる悟りを得て歡天喜地かんでんきちの

至境に達したのさ」

あまり迷亭の言葉が仰山ぎょうさんなので、さすが御上手者おじょうずもの

の鈴木君も、こりや手に合わないと云う顔付をする。

主人はまた始まったなと云わぬばかりに、象牙ぞうげの箸はし

で菓子皿の縁ふちをかんかん叩いて俯うつ向むいている。迷

亭だけは得意で弁じつづける。

「そこでこの矛盾なる現象の説明を明記して、暗黒

の淵ふちから吾人の疑を千載せんざいの下もとに救い出してくれた者

は誰だと思う。学問あつて以来の学者と称せらるる

彼かの希臘ギリシヤの哲人、逍遙派しょうようはの元祖アリストートルその

人である。彼の説明に曰いわくさ——おい菓子皿などを

叩かんで謹聴していなくちやいかん。——彼等希臘

人が競技において得るところの賞与は彼等が演ずる

技芸その物より貴重なものである。それ故に褒美にほうび

もなり、奨励の具ともなる。しかし智識その物に至
つてはどうである。もし智識に対する報酬として何
物をか与えんとするならば智識以上の価値あるもの
を与えざるべからず。しかし智識以上の珍宝が世の
中にあるか。無論あるはずがない。下手なものを
やれば智識の威厳を損する訳になるばかりだ。彼等

は智識、
に対して千両箱をオリムパスの山ほど積み、

クリーサスの富を傾け^{かたむ}尽^{つく}しても相当の報酬を与えん

としたのであるが、いかに考^{こう}えても到底^{とうてい}釣り合^あうは

ずがないと云う事を観破^{かんぱ}して、それより以来と云う

ものは奇麗さっぱり何にもやらない事にしてしまつ

た。
黄白青銭^{こうはくせいせん}が智識^{ひつてき}の匹敵でない事はこれで十分理

解出来るだろう。さてこの原理を服膺^{ふくよう}した上で時事

問題に臨のぞんで見るがいい。金田某は何だい紙幣さつに眼

鼻をつけただけの人間じゃないか、奇警なる語をも

って形容するならば彼は一個の活動紙幣かつどうしへいに過ぎんの

である。活動紙幣の娘なら活動切手くらいなところ

だろう。ひるがえ翻ひるがえって寒月君は如何いかにと見ればどうだ。辱かたじけ

なくも学問最高の府を第一位に卒業して毫ごうも倦怠けんたいの

念なく長州征伐時代の羽織の紐をぶら下げて、日夜

団栗のスタビリチーを研究し、それでもなお満足す

る様子もなく、きんきん近々の中ロード・ケルヴィンを圧倒

するほどな大論文を発表しようとしつつあるではな

いか。あずまばしたまたま吾妻橋を通り掛って身投げの芸を仕

損じた事はあるが、これも熱誠なる青年に有りがち

の発作的所為でほっさてきしよい毫も彼が智識ごうの問屋とんやたるにわずら煩いを及

ぼすほどの出来事ではない。迷亭一流のたとえ喩をもつて

寒月君を評すれば彼は活動図書館である。智識をも

って捏こね上げたる二十八珊サンチの弾丸である。この弾丸

が一たび時機を得て学界に爆発するなら、——もし

爆発して見給え——爆発するだろう——」迷亭はこ

こに至って迷亭一流と自称する形容詞が思うように

出て来ないので俗に云う竜頭蛇尾りゅうとうだびの感に多少ひるん

で見えたがたちまち「活動切手などは何千万枚あつ

たつて粉な微塵こみじんになつてしまふさ。それだから寒月

には、あんな釣り合わない女性によしやうは駄目だ。僕が不承

知だ、百獸の中うちでもつとも聡明なる大象と、もつと

も貪婪たんらんなる小豚と結婚するやうなものだ。そうだろ

う苦沙弥君」と云つて退のけると、主人はまた黙つて

菓子皿を叩き出す。鈴木君は少し凹へこんだ気味で

「そんな事も無かろう」と術じゆつなげに答える。さつき

まで迷亭の悪口を随分ついた揚句ここで無暗むやみな事を

云うと、主人のような無法者はどんな事を素すつ破は抜ぬ

くか知れない。なるべくここは好い加減に迷亭の鋭鋒

をあしらって無事に切り抜けるのが上分別なのであ

る。鈴木君は利口者である。いらざる抵抗は避けら

るだけ避けるのが当世で、無要の口論は封建時代

の遺物と心得ている。人生の目的は口舌こうぜつではない実

行にある。自己の思い通りに着々事件が進捗しんちよくすれば、

それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と心

配と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の目的は

ごくらくりゆう

極樂流に達せられるのである。鈴木君は卒業後この

極樂主義によつて成功し、この極樂主義によつて金

時計をぶら下げ、この極樂主義で金田夫婦の依頼を

うけ、同じくこの極樂主義でまんまと首尾よく苦沙

弥君を説き落して当該事件が十中八九まで成就したじょうじゆ

ところへ、迷亭なる常規をもつて律すべからざる、

普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まるる風ふう

来坊らいぼうが飛び込んで来たので少々その突然なるに面喰めんくら

っているところである。極楽主義を発明したものは

明治の紳士で、極楽主義を実行するものは鈴木藤十

郎君で、今この極楽主義で困却しつつあるものもま

た鈴木藤十郎君である。

「君は何にも知らんからそうでもな、かろうなど澄
し返って、例になく言葉寡ことばすくなに上品に控ひかえ込むが、

せんだってあの鼻の主が来た時の容ようす子を見たらいか

に実業家鼻負びいきの尊公でも辟易へきえきするに極きまってるよ、ね

え苦沙弥君、君大おおに奮闘したじゃないか」

「それでも君より僕の方が評判がいいそうだ」

「アハハハなかなか自信が強い男だ。それでなくてはサヴェジ・チーなんて生徒や教師にからかわれてすまして学校へ出ちやいられん訳だ。僕も意志は決して人に劣らんつもりだが、そんなに凶太くは出来ん敬服の至りだ」

「生徒や教師が少々愚図愚図言ったって何が恐ろしいものか、サントブルーヴは古今独歩の評論家である

が巴里^{パリ}大学で講義をした時は非常に不評判で、彼は

学生の攻撃に応ずるため外出の際必ず^{あいくち}匕首を^{そで}袖の下

に持つて^{ぼうぎよ}防禦の具となした事がある。ブルヌチエル

がやはり巴里の大学でゾラの小説を攻撃した時は：

：

「だって君や大学の教師でも何でもないじゃないか。

高がリードルの先生でそんな大家を例に引くのは雑^ざ

魚が鯨くじらをもつて自らみづか喩たとえるようなもんだ、そんな事を云うとなおからかわれるぜ」

「黙っている。サントブルーヴだって俺だって同じくらいな学者だ」

「大変な見識だな。しかし懐剣をもつて歩ある行くだけ
はあぶないから真ま似ねない方がいいよ。大学の教師が
懐剣ならリードルの教師はまあ小刀こがたなくらいなところ

だな。しかしそれにしても刃物は劍呑けんのもんだから仲見世なみせ

へ行つておもちやの空氣銃を買つて来て背負しよつてあ

るくがよからう。愛嬌あいぎようがあつていい。ねえ鈴木君」

と云うと鈴木君はようやく話が金田事件を離れたの
でほっと一息つきながら

「相変らず無邪気で愉快だ。十年振りで始めて君等
に逢つたんで何だか窮屈くつきな路次ろじから広い野原へ出た

ような気持がする。どうも我々仲間の談話は少しも油断がなくなくてね。何を云うにも気をおかなくちやならんから心配で窮屈で実に苦しいよ。話は罪がないのがいいね。そして昔しの書生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくなつていい。ああ今日ははか図らず迷亭君に遇あつて愉快だった。僕はちと用事があるからこれで失敬する」と鈴木君が立ち懸かけると、迷亭

も「僕もいこう、僕はこれから日本橋の演芸矯風会えんげいきょうふうかいに行かなくっちゃならんから、そこまでいっしよに行こう」「そりやちようどいい久し振りでいっしよに散歩しよう」と両君は手を携たずさえて帰る。

二十四時間の出来事を洩れなく書いて、洩れなく

読むには少なくとも二十四時間かかるだろう、いくら

写生文を鼓吹こすいする吾輩でもこれは到底猫の企くわだて及ぶ

べからざる芸当と自白せざるを得ない。従っていか

に吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇

言奇行を弄ろうするにも関かわらず逐一これを読者に報知す

るの能力と根氣のないのははなはだ遺憾いかんである。遺

憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必

要である。鈴木君と迷亭君の歸つたあとは木枯しこがらの

はたと吹き息やんで、しんしんと降る雪の夜のごとく

静かになつた。主人は例のごとく書齋へ引き籠こもる。

小供は六畳の間まへ枕をならべて寝る。一間半の襖ふすまを

隔へて南向の室へやには細君が数え年三つになる、めん

子さんと添乳そえちして横になる。花曇りに暮れを急いだ

日は疾く^と落ちて、表を通る駒下駄の音さえ手に取る

ように茶の間へ響く。隣町の^{となりちよう}下宿で^{みんな}明笛を吹くのが

絶えたり続いたりして眠い^{じてい}耳底に折々鈍い刺激を与

える。外面は^{そと}大方^{おぼろ}朧であろう。晚餐に^{はん}半ぺんの^{だし}煮汁

で^{あわびがい}鮑貝を^{あわびがい}からにした腹ではどうしても休養が必要で

ある。

ほのかに^{うけたま}承われれば世間には猫の恋とか称する^{はいかい}俳諧

趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安からぬまで浮かれ歩あるく夜もあるとか云うが、吾輩はまだかかる心的變化に遭逢そうほうした事はない。そもそも恋は宇宙的の活力である。上かみは在天の神ジュピターより下しもは土中に鳴く蚯蚓みみず、おけらに至るまでこの道にかけて浮身やっを窶すのが万物の習いであるから、吾輩どもが朧おぼろうれしと、物騒な風流氣を出すのも無

理のない話しである。回顧すればかく云う吾輩も三

毛子に思い焦がれた事もある。三角主義の張本金田

君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋慕したと云う

噂である。それだから千金の春宵を心も空に満天下

の雌猫雄猫が狂い廻るのを煩惱の迷のと輕蔑する念

は毛頭ないのであるが、いかんせん誘われてもそん

な心が出ないから仕方がない。吾輩目下の状態はた

だ休養を欲するのみである。こう眠くては恋も出来ぬ。のそのそと小供の布団ふとんの裾すそへ廻つて心地ここちよ快く眠る。……

ふと眼を開あいて見ると主人はいつの間まにか書斎から寢室へ来て細君の隣に延べてある布団ふとんの中にいつの間にか潜もぐり込んでいる。主人の癖として寝る時は

必ず横文字の小本こほんを書斎から携たずさえて来る。しかし横

になつてこの本を二頁と続けて読んだ事はない。あ
る時は持つて来て枕元へ置いたなり、まるで手を触
れぬ事さえある。一行も読まぬくらいならわざわざ
提^さげてくる必要もなさそうなものだが、そこが主人
の主人たるところでいくら細君が笑つても、止せと
云つても、決して承知しない。毎夜読まない本をこ
苦勞千万にも寢室まで運んでくる。ある時は慾張つ

て三四冊も抱えて来る。せんだってじゅうは毎晩ウ
エブスターの大字典さえ抱えて来たくらいである。

思うにこれは主人の病気で贅沢ぜいたくな人が竜文堂りゅうぶんどうに鳴る

松風の音を聞かないと寝つかれないごとく、主人も
書物を枕元に置かないと眠れないのであろう、して
見ると主人に取っては書物は読む者ではない眠を誘
う器械である。活版の睡眠剤である。

今夜も何か有るだろうと覗のぞいて見ると、赤い薄い

くちひげ

本が主人の口髯の先につかえるくらいな地位に半分

開かれて転がっている。主人の左の手の拇指おやゆびが本の

はさ

間に挟はさまったままであるところから推おすと奇特にも

今夜は五行読んだものらしい。赤い本と並んで例

たもとどけい

のごとくニツケルの袂時計が春に似合わぬ寒き色を

放っている。

細君は乳呑児をちのみご一尺ばかり先へ放り出して口を開あ

いていびきをかいて枕を外はずしている。およそ人間に

おいて何が見苦しいと云つて口を開けて寝るほどの

不体裁はあるまいと思う。猫などは生涯しょうがいこんな恥を

かいた事がない。元来口は音を出すため鼻は空気を

吐吞とどんするための道具である。もつとも北の方へ行く

と人間が無精になつてなるべく口をあくまいと儉約

をする結果鼻で言語を使うようなズーズーもあるが、鼻を閉塞へいそくして口ばかりで呼吸の用を弁じているのはズーズーよりも見ともないと思う。第一天井から鼠ねずみの糞ふんでも落ちた時危険である。

小供の方はと見るとこれも親に劣らぬ体ていたらくで寝そべっている。姉のトン子は、姉の権利はこんなものだと云わぬばかりにうんと右の手を延ばして妹

の耳の上へのせている。妹のすん子はその復讐ふくしゅうに姉の腹の上に片足をあげて踏反ふんぞり返っている。双方共寝た時の姿勢より九十度はたしかに廻転している。

しかもこの不自然なる姿勢を維持しつつつ兩人とも不平も云わずおとなしく熟睡している。

さすがに春の灯火ともしびは格別である。天真爛漫らんまんながら

無風流極まるこの光景うちの裏に良夜を惜しめとばかり

床しげに輝やいて見える。もう何時なんじだろうと室へやの中

を見廻すと四隣はしんとしたただ聞えるものは柱時

計と細君のいびきと遠方で下女の齒軋はぎしりをする音の

みである。この下女は人から齒軋りをすると云われ

るといつでもこれを否定する女である。私は生れて

から今日こんにちに至るまで齒軋おぼえりをした覚はございません

と強情を張って決して直しようとも御氣の毒で

ございますとも云わず、ただそんな覚はございませ
んと主張する。なるほど寝ていてする芸だから覚は
ないに違ない。しかし事實は覚がなくても存在する
事があるから困る。世の中には悪い事をしておりな
がら、自分はどこまでも善人だと考えているものが
ある。これは自分が罪がないと自信しているのだけ
に無邪気で結構ではあるが、人の困る事實はいかに

無邪気でも滅却する訳には行かぬ。こう云う紳士淑女はこの下女の系統に属するのだと思う。——夜はよ大分だいぶん更けたようだ。

台所の雨戸にトントンと二返ばかり軽く中あたつた者がある。はてな今頃人の来るはずがない。大方例の鼠だろう、鼠なら捕とらん事に極めているから勝手にあばれるが宜よろしい。——またトントンと中あたる。どう

も鼠らしくない。鼠としても大變用心深い鼠である。

主人の内の鼠は、主人の出る学校の生徒のごとく日にっ

中ちゅうでも夜中やちゅうでも乱暴狼藉ろうぜきの練修に余念なく、憫然びんぜんな

る主人の夢を驚破きょうはするのを天職のごとく心得ている

連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今の

はたしかに鼠ではない。せんだってなどは主人の寝

室にまで闖入ちんにゅうして高からぬ主人の鼻の頭を嚙かんで凱が

歌を奏して引き上げたくらいの鼠にしてはあまり臆

病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を

下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出

来るだけ緩やかに、溝に添うて滑らせる。いよいよ

鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞わ

ず戸締を外ずして御光来になるとすれば迷亭先生や

鈴木君ではないに極きまっている。御高名だけはかねて

承わつてうけたまいる泥棒陰士どろぼういんしではないか知らん。いよいよ

陰士とすれば早く尊顔そんがんを拝したいものだ。陰士は今

や勝手の上に大いなる泥足を上げて二足ふたあしばかり進ん

だ模様である。三足目と思う頃揚板あげいたに蹶つまずいてか、ガ

タリと夜よるに響くような音を立てた。吾輩の背中せなかの毛

が靴刷毛くつばけで逆に擦こすられたような心持がする。しば

らくは足音もしない。細君を見ると未まだ口をあいて

太平の空気を夢中に吐吞とどんしている。主人は赤い本に

おやゆびはさ

拇指を挟まれた夢でも見ているのだらう。やがて台

所でマチを擦する音が聞える。陰士でも吾輩ほど夜陰

に眼は利きかぬと見える。勝手がわるくて定めし不都

合だらう。

この時吾輩は蹲踞うずくまりながら考えた。陰士は勝手

から茶の間の方面へ向けて出現するのであらうか、

または左へ折れ玄関を通過して書齋へと抜けるであ
ろうか。――足音は襖ふすまの音と共に椽側えんがわへ出た。陰土
はいよいよ書齋へ這入はいった。それぎり音も沙汰もな
い。

吾輩はこの間まに早く主人夫婦を起してやりたいも
のだとうやく気が付いたが、さてどうしたら起き
るやら、一向いっこう要領を得ん考のみが頭の中に水車みずぐるまの勢

で廻転するのみで、何等の分別も出ない。布団ふとんの裾すそ

を啣くわえて振って見たらと思つて、二三度やつて見た

が少しも効用がない。冷たい鼻を頬に擦すり付けたら

と思つて、主人の顔の先へ持つて行つたら、主人は

眠つたまま、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを

否いやと云うほど突き飛ばした。鼻は猫にとつても急

所である。痛む事おびただしい。此度こんどは仕方がない

からにやーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとしたが、どう云うものかこの時ばかりは咽喉^{のど}に物が痞^{つか}えて思うような声が出ない。やつとの思いで洩りながら低い奴を少々出すと驚いた。肝心^{かんじん}の主人は覚め^さる気色^{けしき}もないのに突然陰士の足音がし出した。ミチリミチリと椽側^{つた}を伝って近づいて来る。いよいよ来たな、こうなつてはもう駄目だと諦^{あきら}め、襖^{ふすま}と柳^{やな}

行李ぎこうりの間にしばしの間身を忍ばせて動静を窺うかがう。

陰士の足音は寢室の障子の前へ来てぴたりと已やむ。

吾輩は息を凝こらして、この次は何をするだろうと一

生懸命になる。あとで考えたが鼠を捕とる時は、こん

な気分になれば訳はないのだ、魂たましいが両方の眼から飛

び出しそうな勢いきおいである。陰士の御蔭で二度とない悟さとり

を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の棧さんの

三つ目が雨に濡れたように真中だけ色が変わる。それ

を透すかして薄紅なものがだんだん濃く写ったと思うと、

紙はいつか破れて、赤い舌がぺろりと見えた。舌は

しばしの間まに暗い中に消える。入れ代って何だか恐

しく光るものが一つ、破れた孔あなの向側にあらわれる。

疑いもなく陰士の眼である。妙な事にはその眼が、

部屋の中にある何物をも見ないで、ただ柳行李の後うしろ

に隠れていた吾輩のみを見つめているように感ぜられた。一分にも足らぬ間ではあつたが、こう睨にらまれては寿命が縮まると思つたくらいである。もう我慢出来んから行李の影から飛出そうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。

吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰

士その人をこの際諸君に御紹介するの榮譽を有する

わけ

訳であるが、その前ちよつと卑見を開陳かいちんしてご高慮

わずら

を煩わしたい事がある。古代の神は全智全能と崇めあが

ヤソきよう

られている。ことに耶蘇教の神は二十世紀の今日まこんにち

めん かぶ

でもこの全智全能の面を被かぶっている。しかし俗人の

考うる全智全能は、時によると無智無能とも解釈が

出来る。こう云うのは明かにパラドックスである。

しかるにこのパラドックスを道破した者は天地開闢どうは てんちかいびやく

以来吾輩のみであらうと考えると、自分ながら満更まんざら

な猫でもないと言う虚栄心も出るから、是非共ここ

にその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないと言

う事を、高慢なる人間諸君の脳裏のうりに叩き込みたいと

考える。天地万有は神が作ったそうなの、して見れば

人間も神の御製作であらう。現に聖書とか云うもの

にはその通りと明記してあるそうだ。さてこの人間について、人間自身が数千年来の観察を積んで、大おおに玄妙不思議がると同時に、ますます神の全智全能を承認するように傾いた事実がある。それは外ほかでもない、人間もかようにうじやうじやいるが同じ顔をしている者は世界中に一人もない。顔の道具は無な論極きまっている、大おおさも大概は似たり寄ったりである。

換言すれば彼等は皆同じ材料から作り上げられてい
る、同じ材料で出来ているにも関らず一人も同じ結
果に出来上っておらん。よくまああれだけの簡単な
材料でかくまで異様な顔を思いついた者だと思つと、
製造家の伎倆ぎりょうに感服せざるを得ない。よほど独創的
な想像力がないとこんな変化は出来ないのである。一
代の画工が精力を消耗しょうしょうして変化を求めた顔でも十二

三種以外に出る事が出来んのもって推せば、人間

の製造を一手で受負った神の手際は格別な者だと驚

嘆せざるを得ない。到底人間社会において目撃し得

ざる底の伎倆であるから、これを全能的伎倆と云つ

ても差し支えないだろう。人間はこの点において大

に神に恐れ入っているようである、なるほど人間の

観察点から云えばもつともな恐れ入り方である。し

かし猫の立場から云うと同一の事実がかえって神の無能力を証明しているとも解釈が出来る。もし全然無能でなくとも人間以上の能力は決してない者であると断定が出来るだろうと思う。神が人間の数だけそれだけ多くの顔を製造したと云うが、当初から胸中に成算があつてかほどの変化を示したもののか、または猫も杓子しゃくしも同じ顔に造ろうと思つてやりかけて

うま

見たが、とうてい旨く行かなくて出来るのも出来る

そこ

おちい

のも作り損ねてこの乱雑な状態に陥ったものか、分

らんではないか。彼等顔面の構造は神の成功の紀念

こんせき

と見らると同時に失敗の痕迹とも判ぜらるるでは

ないか。全能とも云えようが、無能と評したって差

し支えはない。彼等人間の眼は平面の上に二つ並ん

いちじ

でいるので左右を一時に見る事が出来んから事物の

半面だけしか視線内に這入^{はい}らんのは気の毒な次第で

ある。立場を換^かえて見ればこのくらい単純な事実

は彼等の社会に日夜間断なく起りつつあるのだが、本

人逆^{のぼ}せ上がって、神に吞^のまれているから悟りようが

ない。製作の上に変化をあらわすのが困難であるな

らば、その上に徹頭徹尾の模倣^{もこう}を示すのも同様に困

難である。ラファエルに寸分違わぬ聖母の像を二枚

かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを双幅そうふく

見せろと逼せまると同じく、ラファエルにとってには迷惑

であろう、否同じ物を二枚かく方がかえって困難か

も知れぬ。弘法大師に向つて昨日書いた通りの筆法きのう

で空海と願いますと云う方がまるで書体を換かえてと

注文されるよりも苦しいかも知らん。人間の用うる

国語は全然模倣もこうしゆぎ主義で伝習するものである。彼等人

間が母から、乳母うばから、他人から実用上の言語を習

う時には、ただ聞いた通りを繰り返すよりほかに毛頭の野心はないのである。出来るだけの能力で人真似をするのである。かように人真似から成立する言語が十年二十年と立つうち、発音に自然と変化を生じてくるのは、彼等に完全なる模倣もこうの能力がないと云う事を証明している。純粹もこうの模倣はかくのごとく

至難なものである。従つて神が彼等人間を區別の出

来ぬよう、しっかい悉皆焼印の御かめのごとく作り得たなら

ばますます神の全能を表明し得るもので、同時に今こん

日のごとく勝手次第な顔を天日てんぴに曝さらさして、目ま

ぐるしきまでに変化を生ぜしめたのはかえつてその

無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があつてこんな議論をしたか忘れ

てしまった。本を忘却するのは人間にさえありがち

もと

の事であるから猫には当然の事さと大目に見て貰いたい。とにかく吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にぬっと現われた泥棒陰士を瞥見した時、以上の感想が自然と胸中に湧き出でたのである。なぜ湧いた？——なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならん。——ええと、その訳はこうであ

る。

吾輩の眼前に悠然ゆうぜんとあらわれた陰士の顔を見ると

その顔が——平常ふだん神の製作についてその出来栄できばえをあ

るいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、

それを一時に打ち消すに足るほどの特徴を有してい

たからである。特徴とはほかではない。彼の眉目びもくが

わが親愛なる好男子水島寒月君うりに瓜二つであると云

う事実である。吾輩は無論泥棒に多くの知己ちぎは持た

ぬが、その行為の乱暴なところから平常ふだん想像して私ひそ

かに胸中に描えがいていた顔はないでもない。小鼻の左

右に展開した、一錢銅貨くらいの眼をつけた、毬栗いがり

頭あたまにきまつていると自分で勝手に極きめたのであるが、

見ると考えるとは天地の相違、想像は決して逞たくましくす

るものではない。この陰士せいは背のすらりとした、色

の浅黒い一の字眉の、意気で立派な泥棒である。年は二十六七歳でもあろう、それすら寒月君の写生である。神もこんな似た顔を二個製造し得る手際が^{てぎわ}あるとすれば、決して無能をもつて目する訳には行かぬ。いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変になつて深夜に飛び出して来たのではあるまいかと、はつと思つたくらいよく似ている。ただ鼻の下に薄黒

く髯ひげの芽生めえが植え付けてないのでさては別人だと

気が付いた。寒月君は苦味にがみばしった好男子で、活動

小切手と迷亭から称せられたる、金田富子嬢を優に

吸収するに足るほどの念入れの製作物である。しか

しこの陰士も人相から観察するとその婦人に対する

引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らな

い。もし金田の令嬢が寒月君の眼付や口先に迷った

のなら、同等の熱度をもつてこの泥棒君にも惚れ込
まなくては義理が悪い。義理はとにかく、論理に合
わない。ああ云う才気のある、何でも早分りのする
性質だからこのくらいの事は人から聞かんでもきつ
と分るであらう。して見ると寒月君の代りにこの泥
棒を差し出しても必ず満身の愛を捧げて琴瑟調和の
実を挙げらるるに相違ない。万一寒月君が迷亭など

の説法に動かされて、この千古の良縁が破れるとしても、この陰士が健在であるうちは大丈夫である。

吾輩は未来の事件の発展をここまで予想して、富子嬢のために、やっと安心した。この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる一大要件である。

陰士は小脇になにか抱えている。見ると先刻主人さつき

が書斎へ放り込んだ古毛布である。ふるげつと唐棧とうざんの半纏はんてんに、

おなんど御納戸はかたの博多の帯を尻の上にむすんで、

生白なましろい脛すねは

ひざ

膝から下むき出しのまま今や片足を挙げて畳の上へ

入れる。さつき先刻から赤い本に指を噛かまれた夢を見てい

た、主人はこの時寝返りを堂どうと打ちながら「寒月だ」

と大きな声を出す。陰士は毛布けつとを落して、出した足

を急に引き込みます。障子の影に細長い向脛むこうすねが二本立

つたまま微かすかに動くのが見える。主人はうーん、む

にやむにやと云いながら例の赤本を突き飛ばして、

黒い腕を皮癬病ひぜんやみのようにぼりぼり搔かく。そのあと

は静まり返って、枕をはずしたなり寝てしまふ。寒

月だと云ったのは全く我知らずの寝言と見える。陰

士はしばらく椽側えんがわに立ったまま室内の動静をうかが

っていたが、主人夫婦の熟睡しているのを見済みすまして

また片足を畳の上に入れる。今度は寒月だと云う声も聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。一穂の春灯いっすい しゅんとうで豊かに照らされていた六畳の間は、ま陰土の影に鋭どく二分せられて柳行李の辺やなぎごうり へんから吾輩の頭の上を越えて壁の半なかばが真黒になる。振り向いて見ると陰土の顔の影がちょうど壁の高さの三分の二の所に漠然ばくぜんと動いている。好男子も影だけ見ると、八つ頭や がしらの化ば

け物の^{もの}のごとくまことに妙な^{かっこう}恰好である。陰士は細君

の寝顔を上から^{のぞ}覗き込んで見たが何のためかにやに

やと笑った。笑い方までが寒月君の模写であるには
吾輩も驚いた。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの釘^{くぎ}付

けにした箱が大事そうに置いてある。これは肥前の

国は唐津^{からつ}の住人^{たたらさん}多々良三平君が先日帰省した時^{おみ}御土

産^{やげ}に持つて来た山の芋^{いも}である。山の芋を枕元へ飾つ

て寝るのはあまり例のない話しではあるがこの細君

は煮物に使う三盆^{さんぽん}を用簞笥^{ようだんす}へ入れるくらい場所の適

不適と云う觀念に乏しい女であるから、細君にとれ

ば、山の芋は愚か^{おろ}、沢庵^{たくあん}が寢室に在^あつても平気かも

知れん。しかし神ならぬ陰士はそんな女と知ろうは

ずがない。かくまで鄭重^{ていちょう}に肌身に近く置いてある以

上は大切な品物であろうと鑑定するのも無理はない。
陰士はちよつと山の芋の箱を上げて見たがその重さ
が陰士の予期と合して大分目方が懸りかかそうなのです
こぶる満足の体ていである。いよいよ山の芋を盗むなと
思ったら、しかもこの好男子にして山の芋を盗むな
と思ったら急におかしくなつた。しかし滅多めったに声を
立てると危険であるからじつと忪こらえている。

やがて陰士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ

うやうや

ふるげつと

初めた。なにかからげるものはないかとあたりを見

廻す。と、幸い主人が寝る時に解きすてた縮緬の兵

ちりめん

へ

古帯がある。陰士は山の芋の箱をこの帯でしつかり

こおび

括くくつて、苦もなく背中へしよう。あまり女が好すく体

裁ではない。それから小供のちゃんちゃんを二枚、

主人のめり安やすの股引ももひきの中へ押し込むと、股のあたり

が丸く膨ふくれて青大将が蛙を飲んだような――あるい

あおだいしようかえる

は青大将の臨月りんげつと云う方がよく形容し得るかも知れ

ん。とにかく変な恰好かっこうになつた。嘘だと思ふなら試

しにやつて見るがよろしい。陰士はめり安をぐるぐ

る首くびつ環たまへ捲まきつけた。その次はどうするかと思ふ

つむぎ

と主人の紬つむぎの上着を大風呂敷のように拡ひろげてこれに

細君の帯と主人の羽織じゅばんと繻絆じゅばんとその他あらゆる雑物ぞうもつ

を奇麗に畳んでくるみ込む。その熟練と器用なやり口にもちよつと感心した。それから細君の帯上げとしごきとを続つぎ合わせてこの包みを括くつて片手にさげる。まだ頂戴ちやうだいするものは無いかなと、あたりを見廻していたが、主人の頭の先に「朝日」の袋があるのを見付けて、ちよつと袂たもとへ投げ込む。またその袋の中から一本出してランプに翳かざして火を点つける。旨う

まそうに深く吸って吐き出した煙りが、乳色のホヤを繞めぐってまだ消えぬ間まに、陰士の足音は椽側えんがわを次第に遠のいて聞えなくなつた。主人夫婦は依然として熟睡している。人間も存外迂濶うかつなものである。

吾輩はまた暫時ざんじの休養を要する。のべつに喋舌しゃべつていては身体が続かない。ぐつと寝込んで眼が覚めさた時は弥生やよいの空が朗らかに晴れ渡って勝手口に主人

夫婦が巡査と対談をしている時であつた。

「それでは、ここから這入はいつて寢室の方へ廻つたんですな。あなた方は睡眠中いっそうで一向気がつかなくつたのですな」

「ええ」と主人は少し極きまりがわるそうである。

「それで盗難に罹かかつたのは何時頃なんじですか」と巡査は無理な事を聞く。時間が分るくらいなら何なにも盗ま

れる必要はないのである。それに気が付かぬ主人夫婦はしきりにこの質問に対して相談をしている。

「何時頃かな」

「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると思つてゐるらしい。

「あなたは夕べ何時に御休ゆうみになつたんですか」

「俺の寝たのは御前よりあとだ」

「ええ私^{わたくし}の伏せったのは、あなたより前です」

「眼が覚めたのは何時だったかな」

「七時半でしたろう」

「すると盗賊の這入^{はい}ったのは、何時頃になるかな」

「なんでも夜なかでしょう」

「夜中^{よなか}は分りきっているが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考えて見ないと分りません

わ」と細君はまだ考えるつもりでいる。巡査はただ形式的に聞いたのであるから、いつ這入ったところが一向痛痒を感じないのである。嘘でも何でも、いい加減な事を答えてくれれば宜いと思つてゐるのに主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから少々焦れなくなつたと見えて

「それじゃ盗難の時刻は不明なんですな」と云うと、

主人は例のごとき調子で

「まあ、そうですね」と答える。巡査は笑いもせず
に

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝
たところが盗賊が、どこそこの雨戸を外してどこそ

こに忍び込んで品物を何点盗んで行つたから右告訴
おまびろうなり
及候也という書面をお出しなさい。届ではない告訴

です。なあって名宛はない方がいい」

「品物は一々かくんですか」

「ええ羽織何点代価いくらと云う風に表にして出すんです。——いや這はい入って見たって仕方がない。盗とられたあとなんだから」と平気な事を云って帰って行く。

主人は筆硯ふですずりを座敷の真中へ持ち出して、細君を前

に呼びつけて「これから盗難告訴をかくから、盗られたものを一々云え。さあ云え」とあたかも喧嘩でもするような口調で云う。

「あら厭^{いや}だ、さあ云えだなんて、そんな権柄^{けんぺい}ずくで誰が云うもんですか」と細帯を巻き付けたままどつかと腰を据^すえる。

「その風はなんだ、宿場女郎の出来損^{できそこな}い見たようだ。

なぜ帯をしめて出て来ん」

「これで悪るければ買って下さい。宿場女郎でも何でも盗られりや仕方がないじやありませんか」

「帯までとって行つたのか、苛い奴だ。ひどそれじや帯から書き付けてやろう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯って、そんなに何本もあるもんですか、

くろじゆす黒襦子とちりめん縮緬の腹合せの帯です」

「黒繻子と縮緬の腹合せの帯一筋——あたい価はいくらくらいだ」

「六円くらいでしょう」

「生意気に高い帯をしめてるな。今度から一円五十銭くらいのにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは不人情だと云うんです。女房などは、どんな汚な

い風をしていても、自分さい宜^よけりや、構わないう
でしよう」

「まあいいや、それから何だ」

「糸織^{いとおり}の羽織です、あれは河野^{こうの}の叔母さんの形身^{かたみ}に

もらつたんで、同じ糸織でも今の糸織とは、たちが
違います」

「そんな講釈は聞かんでもいい。値段はいくらだ」

「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて身分不相当だ」

「いいじゃありませんか、あなたに買っていただき
やあしまいし」

「その次は何だ」

「黒足袋が一足」

「御前のか」

「あなたんでさあね。代価が二十七銭」

「それから？」

「山の芋が一箱」

「山の芋まで持って行つたのか。煮て食うつもりか、とろろ汁にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行つて聞いていらつしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

「馬鹿馬鹿しいじやありませんか、いくら唐津からつから

掘って来たって山の芋が十二円五十銭してたまるも

んですか」

「しかし御前は知らんと云うじやないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。

まるで論理に合わん。それだから貴様はオタンチン・パレオロガスだと云うんだ」

「何ですって」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのオタンチン・パレオログスって云うのは」

「何でもいい。それからあとは――俺の着物は一向いっこう出て来んじやないか」

「あとは何でも宜ようござんす。オタンチン・パレオログスの意味を聞かして頂戴ちようだい」

「意味も何なにもあるもんか」

「教えて下すつてもいいじゃないですか、あなたはよっぽど私を馬鹿にしていらっしゃるのね。きっと人が英語を知らないと思つて悪口をおっしゃつたんだよ」

「愚^ぐな事を言わんで、早くあとを云うが好い。早く告訴をせんと品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたつて間に合ひやしません。」

それよりか、オタンチン・パレオロガスを教えて頂戴」

「うるさい女だな、意味も何にも無いと云うに」

「そんなら、品物の方もあります」

「頑愚^{がんぐ}だな。それでは勝手にするがいい。俺はもう

盗難告訴を書いてやらんから」

「私も品数^{しなかず}を教えて上げません。告訴はあなたが御

自分でなさるんですから、私は書いていただかないでも困りません」

「それじゃ廃よそう」と主人は例のごとくふいと立つて書斎へ這はい入る。細君は茶の間へ引き下がって針箱の前へ坐る。兩人共十分間ばかりは何にもせず黙ふたりつて障子を睨にらめ付けている。

ところへ威勢よく玄関をあけて、山の芋の寄贈者

多々良三平君が上^{あが}つてくる。多々良三平君はもとこ

の家の書生であつたが今では法科大学を卒業してあ

る会社の鉱山部に雇われている。これも実業家の芽^め

生^{ばえ}で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前

の関係から時々旧先生の草廬^{そうろう}を訪問して日曜などに

は一日遊んで帰るくらい、この家族とは遠慮のない

間柄である。

「奥さん。よか天気でござります」と唐津訛りからつなまか何かで細君の前にズボンのまま立て膝をつく。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすったか」

「いいえ書齋にいます」

「奥さん、先生のごと勉強しなされると毒ですばい。

たまの日曜なもの、あなた」

「わたしに言つても駄目だから、あなたが先生にそうおっしゃい」

「そればつてんが……」と言ひ掛けた三平君は座敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見えんな」と半分妻君に聞いているや否や次の間まからとん子とすん子が馳け出して来る。

「多々良さん、今日は御お寿す司しを持って来て？」と姉

の、とん子は先日の約束を覚えていて、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を掻きながら「よう覚えているのう、この次はきつと持って来ます。今日は忘れた」と白状する。

「いやーだ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いやーだ」とつける。細君はようやく御機嫌が直って少々笑顔になる。

「寿司は持って来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰べなさったか」

「山の芋ってなあに？」と姉がきくと妹が今度もまた真似をして「山の芋ってなあに？」と三平君に尋ねる。

「まだ食いなさらんか、早く御母^{おか}あさんに煮て御貰い。唐津^{からつ}の山の芋は東京のとは違ってうまかあ」と

三平君が国自慢をすると、細君はようやく気が付いて

「多々良さんせんだつては御親切に沢山ありがとう」

「どうです、喰べて見なすつたか、折れんように箱を誂あつらえて堅くつめて来たから、長いままであります

したろう」

「ところがせつかく下すった山の芋を夕べ泥棒に取られてしまつて」

「ぬす盗とが？　馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋の好きな男がおりますか？」と三平君大に感心おおいしている。

「御母おかあさま、夕べ泥棒が這入はいったの？」と姉が尋ねる。

「ええ」と細君は軽く答える。

「泥棒が這入って——そうして——泥棒が這入って——どんな顔をして這入ったの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか分らんの
で

「恐い顔こわをして這入りました」と返事をして多々良君の方を見る。

「恐い顔って多々良さん見たような顔なの」と姉が
気の毒そうにもなく、押し返して聞く。

「何ですね。そんな失礼な事を」

「ハハハハ私の顔わたしはそんなに恐いですか。困ったな」

と頭を搔かく。多々良君の頭の後部には直径一寸ばかり

の禿はげがある。一カ月前から出来だして医者に見て

貰ったが、まだ容易に癒なおりそうもない。この禿を第

一番に見付けたのは姉のどん子である。

「あら多々良さんの頭は御母おかあさまのように光ひかつて
よ」

「だまっていらっしゃいと云うのに」

「御母あさま夕べの泥棒の頭も光かつて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君とは思わず吹き出したが、あまり煩わづらわしくて話も何も出来ぬので

「さあさあ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子を上げるから」と細君はようやく子供を追いやって

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目に聞いて見る。

「虫が食いました。なかなか癒りません。奥さんも有んなさるか」

「やだわ、虫が食うなんて、そりや齧まげで釣るところは女だから少しは禿げますさ」

「禿はみんなバクテリアですばい」

「わたしのはバクテリアじゃありません」

「そりや奥さん意地張りたい」

「何でもバクテリアじゃありません。しかし英語で禿の事を何とか云うでしょう」

「禿はボードとか云います」

「いいえ、それじゃないの、もっと長い名があるでしょう」

「先生に聞いたら、すぐわかりましょう」

「先生はどうしても教えて下さらないから、あなたに聞くんです」

「私はわたしボードより知りませんが。長かって、どげ

んですか」

「オタンチン・パレオロガスと云うんです。オタンチンと云うのが禿と云う字で、パレオロガスが頭なんでしょう」

「そうかも知れませんか。今に先生の書齋へ行つてウェブスターを引いて調べて上げましょう。しかし先生もよほど変っていないなさいますな。この天氣の

好いのに、うちにじつとして——奥さん、あれじゃ胃病は癒りませんな。ちと上野へでも花見に出掛けなさるごと勧めなさい」

「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云う事は決して聞かない人ですから」

「この頃でもジャムを舐^なめなさるか」

「ええ相変らずです」

「せんだって、先生こぼしていなさいました。どうも妻が俺のジャムの舐め方が烈しいと云って困るが、俺はそんなに舐めるつもりはない。何か勘定違いだろうと云いなさるから、そりや御嬢さんや奥さんがいっしよに舐めなさるに違ない——」

「いやな多々良さんだ、何だってそんな事を云うんです」

「しかし奥さんだって舐めそうな顔をしていなさる
ばい」

「顔でそんな事がどうして分ります」

「分らんばってんが——それじゃ奥さん少しも舐め
なさらんか」

「そりや少しは舐めますさ。舐めたって好いじゃあ
りませんか。うちのものだもの」

「ハハハハそうだろうと思った——しかし本の事、ほんこと泥棒は飛んだ災難でしたな。山の芋ばかり持って行いたのですか」

「山の芋ばかりなら困りやしません、不断着をみんな取って行きました」

「早速困りますか。また借金をしなければならんですか。この猫が犬ならよかったに——惜しい事をし

たなあ。奥さん犬の大か奴ふとを是非一丁飼いなさい。

——猫は駄目ですばい、飯を食うばかりで——ちつ
とは鼠でも捕とりますか」

「一匹もとつた事はありません。本当に横着な凶ず々
凶ず々しい猫ですよ」

「いやそりや、どうもこうもならん。早々棄てなさい。
私が貰わたしって行つて煮て食おうか知らん」

「あら、多々良さんは猫を食べるの」

「食いました。猫は旨うもうござります」

「随分豪傑ね」

下等な書生のうちには猫を食うような野蛮人があ

る由よしはかねて伝聞したが、吾輩が平生眷顧けんこを辱かたじけうす

る多々良君その人もまたこの同類ならんとは今が今

まで夢にも知らなかった。いわんや同君はすでに書

生ではない、卒業の日は浅きにも係かわらず堂々たる

一個の法学士で、六むつ井い物産会社の役員であるのだ

から吾輩の驚愕きょうがくもまた一と通りではない。人を見た

ら泥棒と思えと云う格言は寒月第二世の行為によつ

てすでに証拠立てられたが、人を見たら猫食いと思

えとは吾輩も多々良君の御蔭によって始めて感得し

た真理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉

しいが日に日に危険が多くて、日に日に油断がならなくなる。こうかつ狡猾になるのも卑劣になるのも表裏二枚

合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であつて、事を知るのは年を取るの罪である。老人に碌ろくな

ものがないのはこの理だな、吾輩などもあるいは

今のうちに多々良君の鍋なべの中で玉葱たまねぎと共に成仏じょうぶつする

方が得策かも知れんと考えて隅すみの方に小さくなつて

いると、さいぜん最前細君と喧嘩をして一反書齋へ引き上げ
いったんた主人は、多々良君の声を聞きつけて、のそのそ茶
の間へ出てくる。

「先生泥棒に逢いなさったそうですね。なんちゆ愚ぐ
な事です」と劈頭へきとう一番にやり込める。

「這はい入る奴が愚ぐなんだ」と主人はどこまでも賢人を
もって自任している。

「這入る方も愚だばってんが、取られた方もあまり賢かしこくはなかごたる」

「何にも取られるものの無い多々良さんのようなのが一番賢こいでしよう」と細君が此度こんどは良人おつとの肩を持つ。

「しかし一番愚なのはこの猫ですばい。ほんにまあ、どう云う了見じやろう。鼠は捕とらず泥棒が来ても知

らん顔をしている。――先生この猫を私にくんなさ
らんか。こうしておいたっちや何の役にも立ちませ
んばい」

「やっても好い。何にするんだ」

「煮て喰べます」

主人は猛烈なるこの一言いちごんを聞いて、うふと気味の

悪い胃弱性の笑を洩もらしたが、別段の返事もしない

ので、多々良君も是非食いたいたとも云わなかつたのは吾輩にとって望外の幸福である。主人はやがて話頭を転じて、

「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くて

いかん」と大に銷沈おおいしやうちんの体ていである。なるほど寒いはず

である。昨日きのうまでは綿入を二枚重ねていたのに今日

はあわせ衾はんそでに半袖のシャツだけで、朝から運動もせずこぎ枯坐

したぎりであるから、不十分な血液はことごとく胃のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。

「先生教師などをしておったちやとうていあかんで
すばい。ちよつと泥棒に逢つても、すぐ困る——」いっ

丁ちよう今から考を換かえて実業家にでもなんなさらんか」

「先生は実業家は嫌きらだから、そんな事を言つたつて

駄目よ」

と細君が傍そばから多々良君に返事をする。細君は無論実業家になつて貰いたいのである。

「先生学校を卒業して何年になんなさるか」

「今年で九年目でしよう」と細君は主人を顧かえりみる。

主人はそうだとも、そうで無いとも云わない。

「九年立つても月給は上がらず。いくら勉強しても

人は褒めちやくれず、ほ郎君独寂寞ろうくみひとりせきばくですたい」と中学

時代で覚えた詩の句を細君のために朗吟すると、細君はちよつと分りかねたものだから返事をしない。

「教師は無論嫌きらいだが、実業家はなお嫌いだ」と主人は何が好きだか心の裏うちで考えているらしい。

「先生は何でも嫌なんだから……」

「嫌でないのは奥さんだけですか」と多々良君がら柄に

似合わぬ冗談じょうだんを云う。

「一番嫌だ」主人の返事はもつとも簡明である。細君は横を向いてちよつと澄すましたが再び主人の方を見て、

「生きていらつしやるのも御嫌おきらいなんでしょう」と充分主人を凹へこましたつもりで云う。

「あまり好いてはおらん」と存外のんき呑気な返事をする。

これでは手のつけようがない。

「先生ちつと活潑かつぱつに散歩でもしなさんと、からだ

を壊こわしてしまえますばい。——そうして実業家にな

んなさい。金なんか儲もうけるのは、ほんに造作ぞうさもない

事でござります」

「少しも儲けもせん癖に」

「まだあなた、去年やつと会社へ這はい入ったばかりで

すもの。それでも先生より貯蓄があります」

「どのくらい貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。

「もう五十円になります」

「一体あなたの月給はどのくらいなの」これも細君の質問である。

「三十円ですたい。その内を毎月五円宛^{ずつ}会社の方で預って積んでおいて、いざと云う時にやります。――

そとぼりせん

「奥さん小遣錢で外濠線の株を少し買いなさらんか、
今から三四個月すると倍になります。ほんに少し金
さえあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります」

「そんな御金があれば泥棒に逢ったって困りやしな
いわ」

「それだから実業家に限ると云うんです。先生も法
科でもやって会社か銀行へでも出なされば、今頃は

月に三四百円の収入はありますのに、惜しい事でござんしたな。——先生あの鈴木藤十郎と云う工学士を知つてなさるか」

「うんきのう昨日来た」

「そうでござんすか、せんだつてある宴会で逢いまして時先生の御話をしたら、そうか君は苦沙弥君くしやみのところの書生をしていたのか、僕も苦沙弥君とは昔むか

し小石川の寺でいっしょに自炊をしておった事がある、今度行ったら宜よろしく云うてくれ、僕もその内尋ねるからと云っていました」

「近頃東京へ来たそうだな」

「ええ今まで九州の炭坑におりましたが、こないだ東京詰づめになりました。なかなか旨うまいです。私わたしなぞにでも朋友のように話します。——先生あの男がいく

ら貰つてると思いなさる」

「知らん」

「月給が二百五十円で盆暮に配当がつきますから、何でも平均四五百円になりますばい。あげな男が、

よかしこ取っておるのに、先生はリーダー専門で十

年一狐裘いちこきゆうじや馬鹿氣ておりますなあ」

「實際馬鹿氣ているな」と主人のような超然主義の

人でも金銭の観念は普通の人間と異なる^{こと}ところはない。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかも知れない。多々良君は充分実業家の利益を吹聴^{ふいちよう}してもう云う事が無くなつたものだから

「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う人^{じん}が来ますか」

「ええ、善くいらいっしやいます」

「どげんな人物ですか」

「大變學問の出来る方だそうです」

「好男子ですか」

「ホホホ多々良さんくらいなものでしょう」

「そうですか、わたし私くらいなものですか」と多々良君

真面目である。

「どうして寒月の名を知っているのかい」と主人が

聞く。

「せんだって或る人から頼まれました。そんな事を聞くだけの価値のある人物でしょうか」多々良君は聞かぬ先からすでに寒月以上に構えている。

「君よりよほどえらい男だ」

「そうでございますか、私わたしよりえらいですか」と笑

いもせず怒おこりもせぬ。これが多々良君の特色である。

「近々博士になりますか」
きんきん

「今論文を書いてるそうだ」

「やっぱり馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、もう少し話せる人物かと思ったら」

「相変らず、えらい見識ですね」と細君が笑いながら云う。

「博士になったら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うていましたから、そんな馬鹿があるうか、娘を貰うために博士になるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方がよほどましだと云ってやりました」

「だれに」

「私に^{わたし}水島の事を聞いてくれと頼んだ男です」

「鈴木じゃないか」

「いいえ、あの人にや、まだそんな事は云い切りません。向うは大頭ですから」

「多々良さんはかげべんけい蔭弁慶ね。うちへなんぞ来ちや大變

威張つても鈴木さんなどの前へ出ると小さくなつて
るんでしょう」

「ええ。そうせんと、あぶないです」

「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云う。先さ

つき
あわせ

刻から拾一枚であまり寒いので少し運動でもしたら
暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のな
い動議を呈出したのである。行き当りばったりの多
々良君は無論逡巡しゅんじゅんする訳がない。

「行きましょう。上野にしますか。芋坂いもざかへ行つて団

子を食べいましょうか。先生あすこの団子を食べた事

がありますか。奥さん一返行つて食つて御覧。柔ら
かくて安いです。酒も飲ませます」と例によつて秩
序のない駄弁を揮ふるつてゐるうちに主人はもう帽子を被
つて沓脱くつぬぎへ下りる。

吾輩はまた少々休養を要する。主人と多々良君が
上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食
つたかその辺の逸事は探偵の必要もなし、また尾行びこう

する勇氣もないからずっと略してその間休養せんけ

ればならん。休養は万物の旻天びんでんから要求してしかる

べき權利である。この世に生息すべき義務を有して

しゅんどう

蠢動する者は、生息の義務を果すために休養を得ね

なんじ

ばならぬ。もし神ありて汝は働くために生れたり寝

るために生れたるに非ずと云わば吾輩はこれに答え

て云わん、吾輩は仰せのごとく働くために生れたり

故に働くために休養を乞うと。主人のごとく器械に

不平を吹き込んだまでの木強漢ぼくきやうかんですら、時々は日曜

以外に自弁休養をやるではないか。多感多恨にして

日夜心神を労する吾輩たといごとき者は仮令猫といえども

主人以上に休養を要するは勿論の事である。ただ先さ

つき

刻多々良君が吾輩を目して休養以外に何等の能もな

ののし

い贅物ぜいぶつのごとくに罵ったのは少々気掛りである。と

ぶっしょう

かく物象にのみ使役せらるる俗人は、五感の刺激以外に何等の活動もないので、他を評価するのでも形骸以外に渉^{わた}らんのは厄介である。何でも尻でも端折^{はしよ}って、汗でも出さないと働らいていないように考えている。達磨^{だるま}と云う坊さんは足の腐るまで座禅をして澄ましていたと云うが、仮令^{たと}壁の隙^{すき}から蔦^{つた}が這い込んで大師の眼口^{ふさ}を塞ぐまで動かないにしろ、寝て

いるんでも死んでゐるんでもない。頭の中は常に活

動して、廓然無聖などと乙な理窟を考へ込んでゐる。
かくねんむしよう

儒家にも静坐の工夫と云うのがあゝるそうだ。これだ

つて一室の中に閉居して安閑と壁いざりの修行をするので

はない。脳中の活力は人一倍熾さかんに燃えてゐる。ただ

外見上は至極沈静端肅の態ていであるから、天下の凡眼

はこれらの知識巨匠をもつて昏睡仮死こんすいかしの庸人ようじんと見倣みな

して無用の長物とか穀潰しとか入らざる誹謗ひぼうの声を

立てるのである。これらの凡眼は皆形を見て心を見

ざる不具なる視覚を有して生れついた者で、――し

かも彼の多々良三平君のごときは形を見て心を見ざ

る第一流の人物であるから、この三平君が吾輩を目

して乾屎橛かんしけつ同等に心得るのももつともだが、恨むら

くは少しく古今の書籍を読んで、やや事物の真相を

解し得たる主人までが、浅薄なる三平君に一も二も

なく同意して、猫鍋ねこなべに故障を挟む景色さしはさけしきのない事であ

る。しかし一步退いて考えて見ると、かくまでに彼

等が吾輩を輕蔑けいべつするの、あながち無理ではない。

大声は俚耳りじに入らず、陽春白雪の詩には和するもの

少なしの喩たとえも古い昔からある事だ。形体以外の活動

を見る能あたわざる者に向つて己靈これいの光輝を見よと強しゆ

るは、坊主に髪を結えと逼るせまがごとく、鮪まぐろに演説を

して見ろと云うがごとく、電鉄に脱線を要求するが

ごとく、主人に辞職を勧告するごとく、三平に金の

事を考えるなと云うがときものである。ひつきょう必竟無理

な注文に過ぎん。しかしながら猫といえども社会的

動物である。社会的動物である以上はいかに高く自みずか

ら標置するとも、或る程度までは社会と調和して行

かねばならん。主人や細君や乃至御さん、三平連が

吾輩を吾輩相当に評価してくれんのは残念ながら致

し方がないとして、不明の結果皮を剥いで三味線屋

に売り飛ばし、肉を刻んで多々良君の膳に上すよう

な無分別をやられては由々しき大事である。吾輩は

頭をもって活動すべき天命を受けてこの娑婆に出現

したほどの古今来の猫であれば、非常に大事な身体

である。千金の子は堂陞どうせいに坐せずとの諺ことわざもある事な

れば、好んで超邁ちょうまいを宗そうとして、徒らいたずに吾身の危険を

求むるのは単に自己の災わざわいなるのみならず、また大い

に天意に背くそむ訳である。猛虎も動物園に入れば糞豚ふんとん

の隣りに居を占め、鴻雁こうがんも鳥屋に生擒いけどらるれば雛鷄すうけい

と俎まないたを同じゆうす。庸人ようじんと相互あいごする以上は下くだつて庸よう

猫びようと化せざるべからず。庸猫たらんとすれば鼠とを捕

らざるべからず。――吾輩はとうとう鼠をとる事に
極^きめた。

せんだってじゅうから日本は露西亞^{ロシア}と大戦争をし

ているそうだ。吾輩は日本の猫だから無論日本^{びいき}負

である。出来得べくんば混成^{こんせい}猫旅団^{ねこりょだん}を組織して露西

亜兵を引つ搔^かいてやりたいと思うくらいである。か

くまでに元氣旺盛^{おうせい}な吾輩の事であるから鼠の一疋や

二疋はとろうとする意志さえあれば、寝ていても訳

なく捕とれる。昔むかしある人當時有名な禪師に向つて、

どうしたら悟れましようと聞いたら、猫が鼠をねらう

ようにさしやれと答えたそうだ。猫が鼠をとるよう

にとは、かくさえすれば外はずれっこはござらぬと云

う意味である。女賢さかしゆうしてと云う諺はあるが猫

賢さかしゆうして鼠捕とり損そこなうと云う格言はまだ無いはず

だ。して見ればいかに賢かしこい吾輩のごときものでも

鼠の捕れんはずはあるまい。とれんはずはあるまい

どころか捕り損うはずはあるまい。今まで捕らんの

は、捕りたくないからの事さ。春の日はきのうのご

とく暮れて、折々の風に誘わるる花吹雪はなふぶきが台所の腰

障子の破れから飛び込んで手桶ておけの中に浮ぶ影が、薄

暗き勝手用のランプの光りに白く見える。今夜こそ

大手柄をして、うちじゅう驚かしてやろうと決心した吾輩は、あらかじめ戦場を見廻って地形を飲み込んでおく必要がある。戦鬪線は勿論もちろんあまり広かろうはずがない。畳数にしたら四畳敷もあろうか、その一畳を仕切って半分は流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。へつついは貧乏勝手に似合わぬ立派な者で赤の銅壺どうこがぴかぴかして、後ろうしは羽目

板の間を二尺遺して吾輩の鮑貝あわびがいの所在地である。茶

の間に近き六尺は膳碗皿小鉢ぜんわんさらこばちを入れる戸棚となつて

狭き台所せまをいとど狭く仕切つて、横に差し出すむき

出しの棚とすれすれの高さになっている。その下に

摺鉢すりばちが仰向けあおむに置かれて、摺鉢の中には小桶の尻が

吾輩の方を向いている。大根卸し、摺小木すりこぎが並んで

懸かけてある傍かたわらに火消壺だけが悄然しょうぜんと控ひかえている。

真黒になつた樽木たるきの交叉した真中から一本の自在じざいを

下ろして、先へは平たい大きな籠かごをかける。その籠

が時々風に揺れて鷹揚おうように動いている。この籠は何の

ために釣るすのか、この家うちへ来たてには一向いっこう要領を

得なかつたが、猫の手の届かぬためわざと食物をこ

こへ入れると云う事を知ってから、人間の意地の悪

い事をしみじみ感じた。

これから作戦計画だ。どこで鼠と戦争するかと云
えば無論鼠の出る所でなければならぬ。いかにこつ
ちべんぎに便宜な地形だからと云つて一人で待ち構えてい
てはてんで戦争にならん。ここにおいてか鼠の出口
を研究する必要が生ずる。どの方面から来るかなと
台所の真中に立つて四方を見廻わす。何だか東郷大
将のような心持がする。下女はさつき湯に行つて戻

つて来ん。こ小供はとくに寝ている。主人は芋坂いもざかの団

子を喰つて歸つて来て相変らず書斎に引き籠こもつてい

る。細君は——細君は何をしているか知らない。大

方居眠りをして山芋の夢でも見ているのだらう。時

々門前を人力じんりきが通るが、通り過ぎた後あとは一段と淋し

い。わが決心と云い、わが意氣と云い台所の光景と

云い、四辺しへんの寂寞せきばくと云い、全体ことごとの感じが悉く悲壯で

ねこちゆう

ある。どうしても猫中の東郷大将としか思われない。

きようがい

ものすご

こう云う境界に入ると物凄い内に一種の愉快を覚え

るのは誰しも同じ事であるが、吾輩はこの愉快の底

よこた

に一大心配が横わっているのを発見した。鼠と戦争

こわ

をするのは覚悟の前だから何足来ても恐くはないが、

出てくる方面が明瞭でないのは不都合である。周密

そうごう

そぞく

いっしゅつ

なる観察から得た材料を綜合して見ると鼠賊の逸出

するのには三つの行路がある。彼れらがもしどぶ鼠であるならば土管を沿うて流しから、へつついの裏手へ廻るに相違ない。その時は火消壺の影に隠れて、帰り道を絶つてやる。あるいは溝へ湯を抜く漆喰の穴より風呂場を迂回して勝手へ不意に飛び出すかも知れない。そうしたら釜の蓋の上に陣取って眼の下に來た時上から飛び下りて一攫ひとつかみにする。それから

とまたあたりを見廻すと戸棚の戸の右の下隅が半月

はんげつ

形に喰い破られて、彼等の出入に便なるかの疑があ

けい

しゅつにゆう

る。鼻を付けて臭いで見ると少々鼠臭い。もしここ

か

くさ

から呐喊して出たら、柱を楯にやり過ごしておいて、

とっかん

たて

横合からあつと爪をかける。もし天井から来たらと

上を仰ぐと真黒な煤がランプの光で輝やいて、地獄

すす

を裏返しに釣るしたごとくちよつと吾輩の手際では

てぎわ

上る事も、下る事も出来ん。まさかあんな高い処か

ら落ちてくる事もなからとこの方面だけは警

戒を解く事にする。それにしても三方から攻撃され

る懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる。

二口ならどうか、こうにかやってのける自信があ

る。しかし三口となるといかに本能的に鼠を捕るべ

く予期せらるる吾輩も手の付けようがない。されば

と云つて車屋の黒ごときものを助勢に頼んでくるのも吾輩の威厳に関する。どうしたら好かろう。どうしたら好かろうと考へて好い智慧ちえが出ない時は、そんな事は起る氣遣きづかいはないと決めるのが一番安心を得る近道である。また法のつかない者は起らないと考へたくなるものである。まず世間を見渡して見給え。きのう貰つた花嫁も今日死ななとも限らぬではない

か、しかし聶殿は玉椿千代も八千代もなど、おめでたい事を並べて心配らしい顔もせんではないか。心配せんのは、心配する価値がないからではない。いくら心配したって法が付かんからである。吾輩の場合でも三面攻撃は必ず起らぬと断言すべき相当の論拠はないのであるが、起らぬとする方が安心を得るに便利である。安心は万物に必要である。吾輩も安

心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極^きめる。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云うものかとだんだん考えて見るとようやく分つた。三個の計略のうちいずれを選んだのがもつとも得策であるかの問題に對して、自^{みづか}ら明瞭なる答弁を得るに苦しむからの煩悶^{はんもん}である。戸棚から出るときには吾輩これに應ずる策がある、風呂場から現われる時はこれに

はかりごと

対する計がある、また流しから這い上るときはこれ

を迎うる成算もあるが、そのうちどれか一つに極めき

おおい

ねばならぬとなると大に当惑する。東郷大將はバル

つしまかいきよう

チック艦隊が対馬海峡を通るか、津軽海峡へ出るか、

つがるかいきよう

そうやかいきよう

おおい

あるいは遠く宗谷海峡を廻るかについて大に心配さ

れたそうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から想像し

て見て、ご困却の段実に御察し申す。吾輩は全体の

状況において東郷閣下に似ているのみならず、この格段なる地位においてもまた東郷閣下とよく苦心を同じゅうする者である。

吾輩がかく夢中になつて智謀をめぐらしていると、突然破れた腰障子が開あいて御三おさんの顔がぬうと出る。

顔だけ出ると云うのは、手足がないと云う訳ではない。ほかの部分よめは夜目でよく見えんのに、顔だけが

著るしく強い色をして判然眸底ぼうていに落つるからである。

御三はその平常より赤き頬をますます赤くして洗湯

から歸ったついでに、昨夜ゆうべに懲こりてか、早くから勝

手の戸締とじまりをする。書齋で主人が俺のステッキを枕元

へ出しておけと云う声が聞える。何のために枕頭に

ステッキを飾るのか吾輩には分らなかつた。まさか

易水えきすいの壮士を気取つて、竜鳴りゅうめいを聞こうと云う酔狂で

もあるまい。きのうは山の芋、今日きょうはステツキ、明あ日すは何になるだろう。

夜はまだ浅い鼠はなかなか出そうにない。吾輩は大戦の前に一と休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら欄間らんまと云う

ような所が幅一尺ほど切り抜かれて夏冬吹き通しに引窓の代理を勤めている。惜し気もなく散る彼岸桜ひがんざくら

を誘うて、颯と吹き込む風に驚ろいて眼を覚ますと、

おぼろづき

朧月さえいつの間に差してか、竈の影は斜めに揚板

あげいた

の上にかかる。寝過ごしはせぬかと二三度耳を振つ

て家内の容子を窺うと、しんとして昨夜のごとく柱

ようす

うかが

時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。どこか
ら出るだろう。

戸棚の中でことごとと音がしだす。小皿の縁を足

ふち

で抑えて、中をあらしているらしい。ここから出る
わいと穴の横へすくんで待っている。なかなか出て
来る景色けしきはない。皿の音はやがてやんだが今度はど
んぶりか何かに掛ったらしい、重い音が時々ごとごと
とする。しかも戸を隔ててすぐ向う側でやってい
る、吾輩の鼻づらと距離にしたら三寸も離れておら
ん。時々はこちらよろと穴の口まで足音が近寄る

が、また遠のいて一匹も顔を出すものはない。戸一

枚向うに現在敵が暴行を逞たくましくしているのに、吾輩

はじつと穴の出口で待っておらねばならん随分気の

長い話だ。鼠は旅順りょじゆんわん腕の中で盛に舞踏会を催うして

いる。せめて吾輩の這はい入れるだけ御三がこの戸を開

けておけば善いのに、気の利かぬ山出しだ。

今度はへつついの影で吾輩の鮑貝あわびがいがことりと鳴る。

敵はこの方面へも来たなと、そーつと忍び足で近寄

ておけ

ると手桶の間から尻尾しっぽがちらと見えたぎり流しの下

へ隠れてしまった。しばらくすると風呂場でうがい

かなだら

茶碗が金盥にかちりと当る。今度は後方うしろだと振りむ

おおき

く途端に、五寸近くある大な奴がひらりと齒磨の袋

えん

を落して椽の下へ馳かけ込む。逃がすものかと続いて

飛び下りたらもう影も姿も見えぬ。鼠を捕とるのは思

ったよりむずかしい者である。吾輩は先天的鼠を捕る能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳け出し、

戸棚を警戒すると流しから飛び上り、台所の真中に

頑張がんばっていると三方面共少々ずつ騒ぎ立てる。小癩こしやく

ひきよう

と云おうか、卑怯ひきようと云おうかとうてい彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと気を

疲らし心を勞^{しん}らして奔走努力して見たがついに一度

も成功しない。残念ではあるがかかる小人^{しょうじん}を敵にし

てはいかなる東郷大将も施^{ほど}こすべき策がない。始め

は勇氣もあり敵愾^{てきが いしん}心もあり悲壯と云う崇高な美感さ

えあつたがついには面倒と馬鹿氣ているのと眠いの

と疲れたので台所の真中へ坐つたなり動かない事に

なつた。しかし動かんでも八方睨^{はっほうにら}みを極^きめ込んでい

れば敵は小人だから大した事は出来ないのである。目
ざす敵と思つた奴が、存外けちな野郎だと、戦争が
名誉だと云う感じが消えて悪にくいと云う念だけ残る。
悪にくいと云う念を通り過すと張り合が抜けてぼーと
する。ぼーとしたあとは勝手にしろ、どうせ気の利き
いた事は出来ないのだからと輕蔑けいべつの極眠きよくねむたくなる。
吾輩は以上の徑路をたどつて、ついに眠くなつた。

吾輩は眠る。休養は敵中に在^あつても必要である。

横向に底^{ひさし}を向いて開いた引窓から、また花吹雪を

一塊^{ひとかたま}りなげ込んで、烈しき風の吾を遶^{めぐ}ると思えば、

戸棚の口から弾丸のごとく飛び出した者が、避くる

間^まもあらばこそ、風を切つて吾輩の左の耳へ喰いつ

く。これに続く黒い影は後^{うし}ろに廻るかと思ふ間もな

く吾輩の尻尾^{しっぽ}へぶら下がる。瞬^{またた}く間の出来事である。

吾輩は何の目的もなく器械的に跳上る。はねあが満身の力を

毛穴に込めてこの怪物を振り落とそうとする。耳に

喰い下がったのは中心を失ってだらりと吾が横顔に

懸る。護謨管ゴムかんのごとき柔かき尻尾の先が思い掛なく

吾輩の口に這入る。くつきよう屈竟の手懸りに、砕けよとばか

り尾を啣くわえながら左右にふると、尾のみは前歯の間

に残って胴体は古新聞で張った壁に当って、揚板の

上に跳ね返る。起き上がるところを隙間なく乗し掛

れば、毬を蹴たるごとく、吾輩の鼻づらを掠めて釣

り段の縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩を

見おろす、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。距離は

五尺。その中に月の光りが、大幅の帯を空に張るご

とく横に差し込む。吾輩は前足に力を込めて、やつ

とばかり棚の上に飛び上がろうとした。前足だけは

首尾よく棚の縁にかかったが後足は宙にもがいてい

る。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじ

き勢で喰い下っている。吾輩は危うい。前足を懸け

易えて足懸りを深くしようとする。懸け易える度に

尻尾の重みで浅くなる。二三分滑れば落ちねばなら

ぬ。吾輩はいよいよ危うい。棚板を爪で搔きむしる

音ががりがりと聞える。これではならぬと左の前足

を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損じたので吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った。自分と尻尾に喰いつくものの重みで吾輩のからだだがぎりぎりと廻わる。この時まで身動きもせずねらに覘いをつけていた棚の上の怪物は、ここぞと吾輩の額を目懸けて棚の上から石を投ぐるがごとく飛び下りる。吾輩の爪は一縷いちるのかかりを失う。三つの塊かたまりが一つとなつて

月の光を豎たてに切つて下へ落ちる。次の段に乘せてあ

すりばち

つた摺鉢と、摺鉢の中の小桶こおけとジャムの空缶あきかんが同じ

ひとかたまり

く一塊となつて、下にある火消壺を誘つて、半分は

みずがめ

水甕の中、半分は板の間の上へ転がり出す。すべて

が深夜にただならぬ物音を立てて死物狂いの吾輩の
魂をさえ寒からしめた。

どうまごえ

「泥棒！」と主人は胴間どうまごえ声を張り上げて寢室から飛

び出して来る。見ると片手にはランプを提さげ、片手

にはステッキを持って、寝ぼけ眼まなこよりは身分相応の

炯々けいけいたる光を放っている。吾輩は鮑貝あわびがいの傍そばにおとな

しくして蹲踞うずくまる。二足の怪物は戸棚の中へ姿をかく

す。主人は手持無沙汰に「何だ誰だ、大きな音をさ

せたのは」と怒気を帯びて相手もいないのに聞いて

いる。月が西に傾いたので、白い光りの一帯は半切はんきれ

ほどに細くなつた。

六

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を脱

いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだイギリスと英吉利

のシドニー・スミスとか云う人が苦しがつたと云う

話があるが、たとい骨だけにならなくとも好いから、

せめてこの淡灰色の斑入ふいりの毛衣けごろもだけはちよつと洗い

張りでもするか、もしくは当分の中質うちにでも入れた

いような気がする。人間から見たら猫などは年が年

中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至

って単純な無事な銭ぜにのかからない生涯しょうがいを送っている

ように思われるかも知れないが、いくら猫だって相

応に暑さ寒さの感じはある。たまには行水ぎょうずいの一度く

らいあびたくない事もないが、何しろこの毛衣の上から湯を使った日には乾かすのが容易な事でないか

ら汗臭いのを我慢してこの年になるまで洗湯のれんの暖簾

を潜くぐった事はない。折々は団扇うちわでも使つて見ようと

云う気も起らんでもないが、とにかく握る事が出来

ないのだから仕方がない。それを思うと人間は贅沢ぜいたく

なものだ。なまで食つてしかるべきものをわざわざ煮て見たり、焼いて見たり、酢^すに漬^つけて見たり、味^み噌^そをつけて見たり好んで余計な手数^{てすう}を懸けて御互に恐悦している。着物だつてそうだ。猫のように一年中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れついた彼等にとって、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ載^のせて暮さなくてももの

事だ。羊の御厄介になつたり、蚕かいこの御世話になつた

おなさ

り、綿畠の御情けさえ受けるに至つては贅沢ぜいたくは無能

の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はまず大

目に見て勘弁するとしたところで、生存上直接の利

害もないところまでこの調子で押して行くのは毫ちようも

かてん

合点が行かぬ。第一頭の毛などと云うものは自然に

ほう

生えるものだから、放ほうっておく方がもつとも簡便で

当人のためになるだろうと思うのに、彼等に入らぬ

算段をして種々雑多な恰好かつこうをこしらえて得意である。

坊主とか自称するものはいつ見ても頭を青くしてい

る。暑いとその上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾ずきんで包

む。これでは何のために青い物を出しているのか主

意が立たんではないか。そうかと思うと櫛くしとか称す

る無意味な鋸のこぎり様の道具を用いて頭の毛を左右に等分

して嬉しがつてるのもある。等分にしないと七分三

分の割合で頭蓋骨ずがいこつの上へ人為的くかくの区劃を立てる。中

にはこの仕切りがつむじを通り過して後ろうしまで食はみ

出しているのがある。まるで贗造がんぞうの芭蕉葉ばしょうはのようだ。

その次には脳天を平らに刈つて左右は真直に切り落

す。丸い頭へ四角な枰わくをはめているから、植木屋を

入れた杉垣根の写生としか受け取れない。このほか

五分刈、三分刈、一分刈さえあると云う話だから、
しまいには頭の裏まで刈り込んでマイナス一分刈、
マイナス三分刈などと云う新奇な奴が流行するかも
知れない。とにかくそんなに憂身うきみを窶やつしてどうする
つもりか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか
使わないと云うのから贅沢だ。四本であるけばそれ
だけはかも行く訳なのに、いつでも二本ですまして、

残る二本は到来の棒鱈ぼうだらのように手持無沙汰にぶら下

げているのは馬鹿馬鹿しい。これで見ると人間はよ

ほど猫より閑ひまなもので退屈のあまりかようないたず

らを考案して楽しんでゐるものと察せられる。ただお

かしいのはこの閑人ひまじんがよると障さわると多忙だ多忙だ

と触れ廻るのみならず、その顔色がいかにも多忙

らしい、わるくすると多忙に食い殺されはしまいか

と思われるほどこせつ、いつている。彼等のあるものは
吾輩を見て時々あんなになつたら氣樂でよからうな
どと云うが、氣樂でよければなるが好い。そんなに
こせこせしてくれと誰も頼んだ訳でもなからう。自
分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦
しいと云うのは自分で火をかんかん起して暑い暑い
と云うようなものだ。猫だつて頭の刈り方を二十通

りも考え出す日には、こう気楽にしてはおられんさ。
気楽になりたければ吾輩のように夏でも毛衣けごろもを着て
通されるだけの修業をするがよろしい。――とは云
うものの少々熱い。毛衣では全く熱あつ過ぎる。

これでは一手専売の昼寝も出来ない。何かないか

な、永らく人間社会の観察を怠おこたったから、今日は久

し振りで彼等が酔興あくせくに齷齪する様子を拝見しようか

と考へて見たが、あいにく生憎主人はこの点に關してすこぶ

る猫に近い性分である。しょうぶん昼寢は吾輩に劣らぬくらい

やるし、ことに暑中休暇後になつてからは何一つ人

間らしい仕事をせんので、いくら觀察をしても一向いっこう

觀察する張合がない。こんな時に迷亭でも来ると胃

弱性の皮膚も幾分か反応を呈して、しばらくでも猫

に遠ざかるだろうに、先生もう来ても好い時だと思

つていると、誰とも知らず風呂場でざあざあ水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな声で相の手を入れている。「いや結構」

「どうも良い心持ちだ」「もう一杯」などと家中に

うちじゅう

響き渡るような声を出す。主人のうちへ来てこんな

大きな声と、こんな無作法な真似をやるものはほか

ぶさほう

にはない。迷亭に極きまっている。

いよいよ来たな、これで今日半日は潰つぶせると思っ

ていると、先生汗を拭ふいて肩を入れて例のごとく座

敷までずかずか上つて来て「奥さん、苦沙弥君はど

うしました」と呼ばわりながら帽子を畳の上へ抛ほうり

出す。細君は隣座敷で針箱の側そばへ突っ伏して好い心

持ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答え

るほどの響がしたのではっと驚ろいて、醒さめぬ眼を

わざと睜みはつて座敷へ出て来ると迷亭が薩摩上布を着

て勝手な所へ陣取つてしきりに扇使いをしている。

「おやいらしやいまし」と云つたが少々狼狽ろうばいの気味

で「ちつとも存じませんでした」と鼻の頭へ汗をか

いたまま御辞儀をする。「いえ、今来たばかりなん

ですよ。今風呂場で御三おさんに水を掛けて貰つてね。よ

うやく生き帰つたところで——どうも暑いじやあり

ませんか」「この両三日は、ただじつとしておりまして汗が出るくらいで、大変御暑うございます。

——でも御変りもございませんで」と細君は依然として鼻の汗をとらない。「ええありがとうございます。なに暑いくらいでそんなに変りやしませんや。しかしこの暑さは別物ですよ。どうも体がだるくってね」「私わたくしなども、ついに昼寝などを致した事がないんでご

ざいますが、こう暑いとつい――」 「やりますかね。

好いですよ。 昼寝られて、夜寝られりや、こんな結

構な事はないでさあ」とあいかわらず呑気のんきな事を並

べて見たがそれだけでは不足と見えて 「私わたしなんぞ、

寝たくない、質たちでね。 苦沙弥君などのように来るた

んびに寝ている人を見ると羨うらやましいですよ。 もつとも

胃弱にこの暑さは答えるからね。 丈夫な人でも今日

なんかは首を肩の上に載^のせてるのが退儀でさあ。さればと云つて載つてゐる以上はもぎとる訳にも行かずね」と迷亭君いつになく首の処置に窮している。

「奥さんなんざ首の上へまだ載つけておくものがあるんだから、坐つちやいられないはずだ。鬚^{まげ}の重み

だけでも横になりたくありませんよ」と云うと細君は

今まで寝ていたのが鬚^{かっこう}の恰好から露見したと思つて

「ホホホ口の悪い」と云いながら頭をいじって見る。

迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨日はね、きのう

屋根の上で王子のフライをして見ましたよ」と妙な事を云う。「フライをどうなさったんでございます」

「屋根の瓦があまり見事に焼けていましたから、ただ置くのも勿体ないと思ってね。バタを溶かして玉

子を落したんでさあ」「あらまあ」「ところがやつ

てんぴ

ぱり天日は思うように行きませんや。なかなか半熟

にならないから、下へおりて新聞を読んでいると客

が来たもんだからつい忘れてしまつて、今朝になつ

て急に思い出して、もう大丈夫だろうと上つて見た

らね」「どうなっております」「半熟どころか、

すっかり流れてしまいました」「おやおや」と細君

は八の字を寄せながら感嘆した。

「しかし土用中あんなに涼しくって、今頃から暑くなるのは不思議ですね」「ほんとでございますよ。

せんだってじゆうは単衣ひとえでは寒いくらいでございま

したのに、一昨日おとといから急に暑くなりましたね」「蟹かに

なら横に這はうところだが今年の気候はあ、と、び、さ、り、を

するんですよ。倒行とうこうして逆施げきしすまた可ならずやと云

うような事を言っているかも知れない」「なんでござんす、それは」「いえ、何でもないのです。どうもこの気候の逆戻りをするところはまるでハーキュリスの牛ですよ」と図に乗っていよいよ変ちきりんな事を言うと、果せるかな細君は分らない。しかし最前の倒行して逆施すで少々懲りこっているから、今度はただ「へえー」と云ったのみで問い返さなかった。

これを問い返されないと迷亭はせつかく持ち出した

甲斐かいがない。「奥さん、ハーキュリスの牛を御存じ

ですか」「そんな牛は存じませんわ」「御存じない

ですか、ちよつと講釈をしましうか」と云うと細

君もそれには及びませんとも言ひ兼ねたものだから

「ええ」と云つた。「昔むかしハーキュリスが牛を引つ

張つて来たんです」「そのハーキュリスと云うのは

牛飼でもござんすか」「牛飼じゃありませんよ。

牛飼やいろはの亭主じゃありません。その節は希臘ギリシヤにまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」

「あら希臘のお話しなの？　そんなら、そうおっし

ゃればいいのに」と細君は希臘と云う国名だけは心

得ている。「だってハーキュリスじゃありませんか」

「ハーキュリスなら希臘なんですか」「ええハーキ

ユリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らない
と思いました。それでその男がどうしたんで――」

「その男がね奥さん見たように眠くなつてぐうぐう
寝ている――」「あらいやだ」「寝ている間に、ヴ

アルカンの子が来ましてね」「ヴアルカンて何です」

「ヴアルカンは鍛冶屋かじやですよ。この鍛冶屋のせがれ

がその牛を盗んだんでさあ。ところがね。牛の尻尾しっぽ

を持ってぐいぐい引いて行つたもんだからハーキュリスが眼を覚^さまして牛やーい牛やーいと尋ねてある
いても分らないんです。分らないはずでさあ。牛の
足跡をつけたつて前の方へあるかして連れて行つた
んじやありませんもの、後ろ^{うし}へ後ろ^{うし}へと引きずつて
行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては大出
来ですよ」と迷亭先生はすでに天気の話は忘れてい

る。

「時に御主人はどうしました。相変らず午睡ひるねですか

ね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙

弥君のように日課としてやるのは少々俗気がありま

すね。何の事もない毎日少しずつ死んで見るような

ものですぜ、奥さん御手数おてすうだがちよつと起してい

つしやい」と催促すると細君は同感と見えて「ええ、

ほんとにあれでは困ります。第一あなた、からだが悪くなるばかりですから。今御飯をいただいたばかりなのに」と立ちかけると迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯をいただかないんですかね」と平気な顔をして聞きもせぬ事を吹聴する。ふいちよう

「おやまあ、時分どきだのにちつとも気が付きませんで——それじゃ何もございませんが御茶漬でも」

「いえ御茶漬なんか頂戴しなくつても好いですよ」

「それでも、あなた、どうせ御口に合うようなものはございませんが」と細君少々厭味を並べる。迷亭

は悟ったもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙

るんです。今途中で御馳走をあつ誂らえて来ましたから、

そいつを一つここでいただきますよ」ととうてい素しろ

人ひとには出来そうもない事を述べる。細君はたった一ひと

言「まあ！」と云つたがそのまあの中うちには驚ろいた
まあと、気を悪くしたまあと、手てすう数が省けてあり
がたいと云うまあが合併している。

ところへ主人が、いつになくあまりやかましいの
で、寝つき掛つた眠をさかに扱こかれたような心持で、
ふらふらと書斎から出て来る。「相変らずやかまし
い男だ。せっかく好い心持に寝ようとしたところを」

と欠伸交りに仏頂面をする。あくびまじぶつちようづら「いや御目覚かね。おめざまめ鳳ほう

眠を驚かし奉みんつてはなはだ相済まん。しかしたまに

は好かろう。さあ坐りたまえ」とどつちが客だか分

らぬ挨拶をする。主人は無言のまま座に着いて寄木よせぎ

細工ざいくの巻煙草入まきたばこから「朝日」を一本出してすばすば

吸い始めたが、ふと向むこうの隅すみに転がっている迷亭の帽

子に眼をつけて「君帽子を買ったね」と云った。迷

亭はすぐさま「どうだい」と白慢らしく主人と細君の前に差し出す。「まあ奇麗だ事。大変目が細かく

って柔らかいんですね」と細君はしきりに撫で廻わ

す。「奥さんこの帽子は重宝ちようほうですよ、どうでも言う

事を聞きますからね」と拳骨げんこつをかためてパナマの横

ッ腹をぽかりと張り付けると、なるほど意のごとく

拳こぶしほどな穴があいた。細君が「へえ」と驚く間まもな

く、この度は^{たび}拳骨を裏側へ入れてうんと突ツ張ると

釜^{かま}の頭がばかりと^と尖^とんがる。次には帽子を取つて^{つば}鰐

と鰐とを両側から^お圧^{つぶ}し潰^{つぶ}して見せる。潰れた帽子は

麵棒^{めんぼう}で延^のした蕎麦^{そば}のように平たくなる。それを片端

から^{むしろ}蓆でも巻くごとくぐるぐる^{むしろ}畳む。「どうですこ

の通り」と丸めた帽子を懷中へ入れて見せる。「不

思議です事ねえ」と細君は^{きてんさいしやういち}帰天斎正一の手品でも見

物しているように感嘆すると、迷亭もその気になつ

たものと見えて、右から懷中に収めた帽子をわざと

左の袖口から引^{そでぐち}つ張り出して「どこにも傷はありま

せん」と元のごとくに直して、人さし指の先へ釜の

底を載^のせてくるくると廻す。もう休^やめるかと思つた

ら最後にぽんと後^{うし}ろへ放^なげてその上へ堂^どつさりと尻

餅を突いた。「君大丈夫かい」と主人さえ懸^{けねん}念らし

い顔をする。細君は無論の事心配そうに「せつかく見事な帽子をもし壊こわしでもしちやあ大変ですから、もう好い加減になすったら宜ようござんしよう」と注意をする。得意なのは持主だけで「ところが壊われないから妙でしょう」と、くちやくちやになつたのを尻の下から取り出してそのまま頭へ載せると、不思議な事には、頭の恰好かっこうにたちまち回復する。「実

に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでしよう」と細君がいよいよ感心すると「なにどうもしたんじやありません、元からこう云う帽子なんです」と迷亭は帽子を被ったまま細君に返事をしている。

「あなたも、あんな帽子を御買になつたら、いいでしょう」としばらくして細君は主人に勧めかけた。

「だって苦沙弥君は立派な麦藁むぎわらの奴を持つてゐるじや

ありませんか」「ところがあなた、せんだって小供
があれを踏み潰^{つぶ}してしまひまして」「おやおやそり
や惜しい事をしましたね」「だから今度はあなたの
ような丈夫で奇麗なのを買つたら善かろうと思いま
すんで」と細君はパナマの価段^{ねだん}を知らないものだか
ら「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主
人に勧告している。

迷亭君は今度は右の袂たもとの中から赤いケース入りの

はさみ

鋏はさみを取り出して細君に見せる。「奥さん、帽子はそ

のくらいにしてこの鋏を御覧なさい。これがまたす

ちようほう

こぶる重宝な奴で、これで十四通りに使えるんです」

この鋏が出ないと主人は細君のためにパナマ責めになる
ところであつたが、幸に細君が女として持つて

生れた好奇心のために、この厄運やくうんを免まぬかれたのは迷

亭の機転と云わんよりむしろ僥倖きんぎょの仕合せだと吾輩は看破した。「その鋏がどうして十四通りに使えます」と聞くや否や迷亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いていらっしやい。いいですか。

みかづきがた

ここに三日月形の欠け目がありましたよう、ここへ葉巻を入れてぷつりと口を切るんです。それからこの根にちよと細工がありましたよう、これで針金をぽつ

ぽつやりますね。次には平たくして紙の上へ横に置

じょうぎ

くと定規の用をする。また刃はの裏には度盛どもりがしてあ

ものさし

るから物指の代用も出来る。こちらの表にはヤスリ、

が付いているこれで爪を磨すりまさあ。ようがすか。

さ

らせんびよう

この先きを螺旋鋌の頭へ刺し込んでぎりぎり廻すと

かなづち

金槌にも使える。うんと突き込んでこじ開けると大

くぎづけ

抵の釘付の箱なんざあ苦もなく蓋ふたがとれる。まった、

こちらの刃の先は錐きりに出来ている。ここん所ところは書き

損いの字を削けずる場所で、ばらばらに離すと、ナイフ

となる。一番しまいに――さあ奥さん、この一番し

まいが大変面白いんです、ここに蠅はえの眼玉くらいな

大きさの球たまがありましたよう、ちよつと、覗のぞいて御覧

なさい」「いやですわまたきつと馬鹿になさるんだ

から」「そう信用がなくつちや困ったね。だが欺だまさ

れたと思つて、ちよいと覗いて御覧なさいな。え？

厭いやですか、ちよつとでいいから」と鋏はさみを細君に渡

す。細君は覚束おぼつかなげに鋏を取りあげて、例の蠅の眼

玉の所へ自分の眼玉を付けてしきりに覗ねらいをつけてい

る。「どうです」「何だか真黒ですわ」「真黒じゃ

いけませんね。もう少し障子の方へ向いて、そう鋏を

寝かさずに——そうそうそれなら見えるでしょう」

「おやまあ写真ですねえ。どうしてこんな小さな写真を張り付けたんでしょう」「そこが面白いところでさあ」と細君と迷亭はしきりに問答をしている。

最前から黙っていた主人はこの時急に写真が見たくなつたものと見えて「おい俺にもちよつと覽^みせろ」

と云うと細君は鋏を顔へ押し付けたまま「実に奇麗です事、裸体の美人ですね」と云つてなかなか離さ

ない。「おいちよつと御見せと云うのに」「まあ待

っていらつしやいよ。美くしい髪ですね。腰まであ

りますよ。少し仰向あおむいて恐ろしい背せいの高い女だ事、

しかし美人ですね」「おい御見せと云ったら、大抵

にして見せるがいい」と主人は大に急おおいき込せんで細君

に食って掛る。「へえ御待遠さま、たんと御覧遊ば

せ」と細君が鉢を主人に渡す時に、勝手から御三おさんが

御客さまの御誂おあつらえが参りましたと、二個の筈蕎麦ざるそばを座敷へ持つて来る。

「奥さんこれが僕の自弁じべんの御馳走ですよ。ちよつと

御免蒙つて、ここでばくつく事に致しますから」と

叮嚀ていねいに御辞儀をする。真面目なような巫山ふざけ戯たよう

な動作だから細君も応対に窮したと見えて「さあどうぞ」と軽く返事をしたぎり拝見している。主人は

ようやく写真から眼を放して「君この暑いのに蕎麦そば

は毒だぜ」と云った。「なあに大丈夫、好きなもの

は滅多めったに中あたるもんじやない」と蒸籠せいろうの蓋ふたをとる。

「打ち立てはありがたいな。蕎麦そばの延びたのと、人

間の間まが抜けたのは由来たのもしくはないもんだよ」

と薬味やくみをツユの中へ入れて無茶苦茶に掻かき廻まわす。

「君そんなに山葵わさびを入れると辛からいぜ」と主人は心

配そうに注意した。「蕎麦はツユと山葵で食うもん

だあね。君は蕎麦が嫌いなんだろう」「僕は饅頭うどんが

好きだ」「饅頭は馬子まごが食うもんだ。蕎麦の味を解

しない人ほど気の毒な事はない」と云いながら杉箸すぎばし

をむざと突き込んで出来るだけ多くの分量を二寸ば

かりの高さにしやくい上げた。「奥さん蕎麦を食う

にもいろいろ流儀がありますかね。初心しよしんの者に限つ

て、無暗むやみにツユを着けて、そうして口の内うちでくちや

くちややっていますね。あれじゃ蕎麦の味はないで

すよ。何でも、こう、一ひとしやくいに引つ掛けてね」

と云いつつ箸を上げると、長い奴が勢揃せいぞろいをして一

尺ばかり空中に釣るし上げられる。迷亭先生もう善

かろうと思つて下を見ると、まだ十二三本の尾が蒸

籠かごの底を離れないで簀す垂だれの上に纏綿てんめんしている。

「こいつは長いな、どうです奥さん、この長さ加減は」とまた奥さんに相の手を要求する。奥さんは

「長いものでございますね」とさも感心したらしい

返事をする。「この長い奴へツユを三分一つけて、

一口に飲んでしまうんだね。噛かんじやいけない。噛

んじや蕎麦の味がなくなる。つるつると咽喉のどを滑すべり

込むところがねうちだよ」と思い切って箸はしを高く上

げると蕎麦はようやくの事で地を離れた。左手ゆんでに受

ける茶碗の中へ、箸を少しずつ落して、尻尾の先か

らだんだんに浸ひたすと、アーキミジスの理論によつて、

蕎麦の浸つかつた分量だけツユの嵩かさが増してくる。とこ

ろが茶碗の中には元からツユが八分目這入はいっている

から、迷亭の箸にかかった蕎麦の四半分しはんぶんも浸つからない

先に茶碗はツユで一杯になつてしまつた。迷亭の箸

は茶碗を去る五寸の上に至つてぴたりと留まつたき

りしばらく動かない。動かないのも無理はない。少

しでも卸せばツユが溢れるばかりである。迷亭もこ

こに至つて少し踟躇の体であつたが、たちまち脱兎

の勢を以て、口を箸の方へ持つて行つたなと思う間

もなく、つるつるちゅうと音がして咽喉笛が一二度

上下へ無理に動いたら箸の先の蕎麦は消えてなくな

つておつた。見ると迷亭君の両眼から涙のようなも

のが一二滴眼尻めじりから頬へ流れ出した。山葵わさびが利きいた

ものか、飲み込むのに骨が折れたものかこれはいま
だに判然しない。「感心だなあ。よくそんなに一ど

きに飲み込めたものだ」と主人が敬服すると「御見

事です事ねえ」と細君も迷亭の手際てぎわを激賞した。迷

亭は何にも云わないで箸を置いて胸を二三度たた敲いた

が「奥さん^{ぎん} 笹は大抵三口半か四口で食うんですね。

それより^{てすう} 手数を掛けちや^{うま} 旨く食えませんよ」とハン

ケチで口を拭いてちよつと一息入れている。

ところへ寒月君が、どう云う^{りようけん} 了見かこの暑いのに

御苦勞にも冬帽を被^{かぶ}つて両足を埃^{ほこり}だらけにしてやつ

てくる。「いや好男子の御入来^{ごにゆうらい}だが、喰い掛けたも

のだからちよつと失敬しますよ」と迷亭君は衆人環^{しゅうじんか}

座んざの裏うちにあつて臆面おくめんもなく残つた蒸籠せいろうを平たいげる。今

さつき

めざま

度は先刻さつきのように目覚めしい食方もしなかつた代りに、

ハンケチを使つて、中途で息を入れると云う不体裁

もなく、蒸籠せいろう二つを安々とやつてのけたのは結構だ

つた。

「寒月君博士論文はもう脱稿するのかね」と主人が

あと

聞くと迷亭もその後から「金田令嬢がお待ちかねだ

そうそうていしゆつ

から早々呈出したまえ」と云う。寒月君は例のごと

く薄気味の悪い笑を洩^もらして「罪ですからなるべく

早く出して安心させてやりたいのですが、何しろ問

題が問題で、よほど労力の入^いる研究を要するのです

から」と本気の沙汰とも思われない事を本気の沙汰

らしく云う。「そうさ問題が問題だから、そう鼻の

言う通りにもならないね。もつともあの鼻なら充分

鼻息をうかがうだけの価値はあるがね」と迷亭も寒月流な挨拶をする。比較的眞面目なのは主人である。「君の論文の問題は何とか云ったつけな」「蛙の眼球めだまの電動作用に対する紫外光線しがいこうせんの影響と云うのです」「そりや奇だね。さすがは寒月先生だ、蛙の眼球は振ふるってるよ。どうだろう苦沙弥君、論文脱稿前にその問題だけでも金田家へ報知しておいては」

主人は迷亭の云う事には取り合わないで「君そんな事が骨の折れる研究かね」と寒月君に聞く。「ええ、なかなか複雑な問題です、第一蛙の眼球のレンズの構造がそんな単簡たんかんなものでありませんからね。それでいろいろ実験もしなくちやなりません。がまず丸い硝子ガラスの球をこしらえてそれからやろうと思つています」「硝子の球なんかガラス屋へ行けば訳ないじゃ

ないか」「どうして——どうして」と寒月先生少々

そりみ

反身になる。「元来えん円とか直線とか云うのは幾何学

的のもので、あの定義に合ったような理想的な円や

直線は現実世界にはないもんです」「ないもんなら、

よ

廃したらよかろう」と迷亭が口を出す。「それでま

さ
つか

ず実験上差し支えないくらいな球を作って見ようと

思いましたね。せんだってからやり始めたのです」

「出来たかい」と主人が訳のないようにきく。「出

来るものですか」と寒月君が云ったが、これでは少

々矛盾だと気が付いたと見えて「どうもむずかしい

です。だんだん磨^すって少しこっち側の半径が長過ぎ

るからと思つてそっちを心持落すと、さあ大変今度

は向側^{むこうがわ}が長くなる。そいつを骨を折つてようやく磨^す

り潰^{つぶ}したかと思つたと全体の形がいびつになるんです。

やっとの思いでこのいびつを取るとまた直径に狂い
が出来ます。始めは林檎りんごほどな大きさのものがだん
だん小さくなつて苺いちごほどになります。それでも根気
よくやっていると大豆だいずほどになります。大豆ほどに
なつてもまだ完全な円は出来ませんよ。私も随分熱
心に磨りましたが——この正月からガラス玉を大小
六個磨り潰しましたよ」と嘘だか本当だか見当のつ

かぬところを喋々と述べる。「どこでそんなに磨つ

ているんだい」「やっぱり学校の実験室です、朝磨

り始めて、昼飯のときちよつと休んでそれから暗く

なるまで磨るんですが、なかなか楽じゃありません」

「それじゃ君が近頃忙がしい忙がしいと云って毎日

日曜でも学校へ行くのはその珠を磨りに行くんだね」

「全く目下のところは朝から晩まで珠ばかり磨って

います」 「珠作りの博士となつて入り込みしは――
と云うところだね。しかしその熱心を聞かせたら、
いかな鼻でも少しはありがたがるだろう。実は先日
僕がある用事があつて図書館へ行つて歸りに門を出
ようとしたら偶然老梅君ろうばいに出逢つたのさ。あの男が
卒業後図書館に足が向くとはよほど不思議な事だと
思つて感心に勉強するねと云つたら先生妙な顔をし

て、なに本を読みに来たんじやない、今門前を通り

掛ったらちよつと小用がしたくなつたから拝借に立

こよう

ち寄つたんだと云つたんで大笑をしたが、老梅君と

君とは反対の好例として新撰蒙求しんせんもうぎゅうに是非入れたいよ」

と迷亭君例のごとく長たらしい註釈をつける。主人

は少し真面目になつて「君そう毎日毎日珠ばかり磨
つてゐるのもよからうが、元来いつ頃出来上るつもり

かね」と聞く。「まあこの容子ようすじゃ十年くらいかか

りそうです」と寒月君は主人より吞氣のんきに見受けられ

る。「十年じゃ——もう少し早く磨り上げたらよか

ろう」「十年じゃ早い方です、事によると廿年くら

いがかかります」「そいつは大変だ、それじゃ容易に

博士にやなれないじゃないか」「ええ一日も早くな

って安心さしてやりたいのですがとにかく珠を磨り

上げなくっちゃ肝心の実験が出来ませんから……」

寒月君はちよつと句を切つて「何、そんなにご心

配には及びませんよ。金田でも私の珠ばかり磨つて

る事はよく承知しています。実は二三日前にさんち行つた時

にもよく事情を話して来ました」としたり顔に述べ

立てる。すると今まで三人の談話を分らぬながら傾

聴していた細君が「それでも金田さんは家族中残ら

ず、先月から大磯へ行つていらつしやるじやありませんか」と不審そうに尋ねる。寒月君もこれには少し辟易へきえきの体であつたが「そりや妙ですな、どうしたんだろう」ととぼけている。こう云う時に重宝なのは迷亭君で、話の途切れとぎた時、極きまりの悪い時、眠くなつた時、困つた時、どんな時でも必ず横合から飛び出してくる。「先月大磯へ行つたものに兩三日りょうさんち前

東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる霊の交換だね。相思の情の切な時にはよくそう云う現象が起るものだ。ちよつと聞くと夢のようだが、夢にしても現実よりたしかな夢だ。奥さんのように別に思いも思われもしない苦沙弥君の所へ片付いて生涯恋のしょうがい何物たるを御解しにならん方には、御不審ももつともだが……」「あら何を証拠にそんな事をおつしや

けいべつ

るの。随分輕蔑なさるのね」と細君は中途から不意

こいわずら

に迷亭に切り付ける。「君だつて恋煩いなんかした

事はなさそうじゃないか」と主人も正面から細君に

えんぶん

助太刀をする。「そりや僕の艶聞などは、いくら有

きみがた

つてもみんな七十五日以上経過しているから、君方

の記憶には残っていないかも知れないが——実はこ

れでも失恋の結果、この歳になるまで独身で暮らし

ているんだよ」と一順列座の顔を公平に見廻わす。

「ホホホ面白い事」と云ったのは細君で、「馬鹿にしていらあ」と庭の方を向いたのは主人である。

ただ寒月君だけは「どうかその懐旧談を後学のためこうがくに伺いたいもので」と相変らずにやにやする。

「僕のも大分だいぶん神秘的で、故小泉八雲先生に話したら

非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠された

から、実のところ話す張合もないんだが、せつかく
だから打ち開けるよ。その代りしまいまで謹聴しな
くっちゃいけないよ」と念を押していよいよ本文に
取り掛る。「回顧すると今を去る事——ええと——
何年前だったかな——面倒だからほぼ十五六年前と
しておこう」じょうだん「冗談じゃない」と主人は鼻からフン
と息をした。「大変物覚えが御悪いのね」と細君が

ひやかした。寒月君だけは約束を守つて一言も云わ

いちごん

ずに、早くあとが聴きたいと云う風をする。「何で

もある年の冬の事だが、僕が越後の国は蒲原郡筍谷

かんばらごおけのこだに

を通つて、蛸壺峠へかかつて、これからいよいよ会

たこつぽとうげ

あい

津領へ出ようとするところだ」「妙なところだな」

づりよう

と主人がまた邪魔をする。「だまって聴いていらつ

しやいよ。面白いから」と細君が制する。「ところ

が日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がない

から峠の真中にある一軒屋をたた敲いて、これこれかよ

うかようしかじかの次第だから、どうか留めてくれ

と云うと、御安い御用です、さあ御上がんなさいと

はだかろうそく

裸蠟燭を僕の顔に差しつけた娘の顔を見て僕はぶる

ふる

ぶると悸えたがね。僕はその時から恋と云う曲者の

くせもの

魔力を切実に自覚したね」「おやいやだ。そんな山

の中にも美しい人があるんでしうか」「山だつて海だつて、奥さん、その娘を一目あなたに見せたいと思うくらいですよ、文金ぶんきんの高島田たかしまだに髪を結いいまし
てね」「へえー」と細君はあつけに取られている。

「這はい入つて見ると八畳の真中に大きな囲い炉裏ろりが切つてあつて、その周まわりに娘と娘の爺じいさんと婆ばあさんと僕と四人坐つたんですがね。さぞ御腹おなかが御減おへりでしよ

うと云いますから、何でも善いから早く食わせ給えと請求したんです。すると爺さんがせつかくの御客さまだから蛇飯へびめしでも炊たいて上げようと云うんです。

さあこれからがいよいよ失恋に取り掛るところだからしつかりして聴きたまえ」「先生しつかりして聴く事は聴きますが、なんぼ越後の国だって冬、蛇がいやしますまい」「うん、そりや一応もつともな質

問だよ。しかしこんな詩的な話になるとそう理窟りくつにばかり拘泥こうでいしてはいられないからね。鏡花の小説にや雪の中から蟹かにが出てくるじゃないか」と云った。寒月君は「なるほど」と云ったきりまた謹聴の態度に復した。

「その時分の僕は随分悪あくものの食いの隊長で、蝗いなづま、なめくじ、赤蛙などは食あい厭あきていたくらいなところ

だから、蛇飯は乙^{おつ}だ。早速御馳走になろうと爺さん

に返事をした。そこで爺さん囲炉裏の上へ鍋^{なべ}をかけ

て、その中へ米を入れてぐずぐず煮出したものだね。

不思議な事にはその鍋^{なべ}の蓋^{ふた}を見ると大小十個ばかり

の穴があいている。その穴から湯気がぷうぷう吹く

から、旨^{うま}い工夫をしたものだ、田舎^{いなか}にしては感心だ

と見ていると、爺さんふと立って、どこかへ出て行

ったがしばらくすると、大きな箆ざるを小脇こわきに抱い込ん

で帰って来た。何気なくこれを囲炉裏いろりの傍そばへ置いた

から、その中を覗のぞいて見ると――いたね。長い奴が、

寒いもんだから御互にとぐろの捲まきくらをやって塊かた

まっていましたね」「もうそんな御話しは廃よしにな

さいよ。厭いとらしい」と細君は眉に八の字を寄せる。

「どうしてこれが失恋の大原因になるんだからなか

なか廃せませんや。爺さんはやがて左手に鍋の蓋を

とつて、右手に例の塊まった長い奴を無雑作むぞうさにつか

まえて、いきなり鍋の中へ放り込ほうんで、すぐ上から

蓋をしたが、さすがの僕もその時ばかりははつと息

の穴が塞ふさがったかと思つたよ」「もう御やめになさい

よ。気味きびの悪るい」と細君しきりに怖こわがつている。

「もう少しで失恋になるからしばらく辛抱しんぼうしてい

つしやい。すると一分立つか立たないうちに蓋の穴

かまくび

から鎌首がひよいと一つ出ましたのには驚ろきまし

たよ。やあ出たなと思うと、隣の穴からもまたひよ

いと顔を出した。また出たよと云ううち、あちらか

らも出る。こちらからも出る。とうとう鍋中蛇なべじゅうの面つら

だらけになってしまった」「なんで、そんなに首を

出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這

い出そうとするのさ。やがて爺さんは、もうよかろう、引っ張らっしとか何とか云うと、婆さんははあーと答える、娘はあいと挨拶をして、名々に蛇の頭めいめいを持ってぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨だけは奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白いように抜け出してくる」「蛇の骨抜きですね」と寒月君が笑いながら聞くと「全くの事骨抜きだ、器用な事

をやるじゃないか。それから蓋を取って、杓子しゃくしでも

って飯と肉を矢鱈やたらに掻き交まぜて、さあ召し上がれと

来た」「食ったのかい」と主人が冷淡に尋ねると、

細君は苦にがい顔をして「もう廃よしになさいよ、胸が悪

くって御飯も何もたべられやしない」と愚痴をこ

ぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな

事をおっしやるが、まあ一遍たべてご覧なさい、あ

の味ばかりは生涯しょうがい忘れられませんぜ」「おお、いや

だ、誰が食べるもんですか」「そこで充分御饌ごぜんも頂

戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、

もう思いおく事はないと考えていると、御休みなさ

いまして云うので、旅の労れつかもある事だから、仰おおせに

従つて、ごろりと横になると、すまん訳だが前後を

忘却して寝てしまった」「それからどうなさいまし

た」と今度は細君の方から催促する。「それから明あく

るあさ

さま

朝になつて眼を覺してからが失恋でさあ」「どうか

なさつたんですか」「いえ別にどうもしやしません

まきたばこ

がね。朝起きて巻煙草をふかしながら裏の窓から見

かけひ

そば

ていると、向うの笥の傍で、

やかんあたま

薬缶頭が顔を洗つてい

るんでさあ」「爺さんか婆さんか」と主人が聞く。

「それがさ、僕にも識別しにくかったから、しばらく

く拝見して、その薬缶がこちらを向く段になつて驚ろいたね。それが僕の初恋をした昨夜の娘なんだもの」「だって娘は島田に結いっているとさつき云ったじゃないか」「前夜は島田さ、しかも見事な島田さ。ところが翌朝は丸薬缶さ」「人を馬鹿にしていらあ」と主人は例によつて天井の方へ視線をそらす。「僕も不思議の極きよく内心少々怖こわくなつたから、な

お余所よそながら容子ようすを窺うかがっていると、薬缶はようやく

顔を洗おわい了わつて、傍かたえの石の上に置いてあつた高島

田かづらの鬘かづらを無雑作かぶに被かぶつて、すましてうちへ這はい入いつた

んでなるほども思おもつた。なるほどとは思おもつたような

もののその時から、とうとう失恋の果敢はかなき運命を

かこつ身となつてしまつた」 「くだらない失恋もあ

つたもんだ。ねえ、寒月君、それだから、失恋でも、

こんなに陽気で元気がいいんだよ」と主人が寒月君に向つて迷亭君の失恋を評すると、寒月君は「しかしその娘が丸薬缶でなくつてめでたく東京へでも連れて御歸りになつたら、先生はなお元気かも知れませんよ、とにかくせつかくの娘が禿はげであつたのは千せん秋の恨事しゅうこんじですねえ。それにしても、そんな若い女がどうして、毛が抜けてしまったんでしよう」「僕も

それについてはだんだん考えたんだが全く蛇飯を食
い過ぎたせいに相違ないと思う。蛇飯てえ奴はのぼ
せるからね」「しかしあなたは、どこも何ともなく
て結構でございましたね」「僕は禿にはならずです
んだが、その代りにこの通りその時から近眼きんがんになり
ました」と金縁の眼鏡をとってハンケチで叮嚀ていねいに拭ふ
いている。しばらくして主人は思い出したように

「全体どこが神秘的なんだい」と念のために聞いて見る。「あの鬘はどこで買ったのか、拾ったのかどう考えても未だに分からないからそこが神秘さ」と迷亭君はまた眼鏡を元のごとく鼻の上へかける。「まるで噺^{はな}し家^かの話を書くようでござんすね」とは細君の批評であつた。

迷亭の駄弁もこれで一段落を告げたから、もうや

めるかと思いのほか、先生は猿轡さるぐつわでも嵌はめられない
うちはとうてい黙っている事が出来ぬ性たちと見えて、
また次のような事をしやべり出した。

「僕の失恋も苦にがい経験だが、あの時あの薬缶やかんを知ら
ずに貰ったが最後生涯の目障めざわりになるんだから、よ
く考えないと険吞けんどんだよ。結婚なんかは、いざと云う

間際になって、飛んだところに傷口が隠れているの

を見出す事がある者だから。寒月君などもそんなに

みいだ
しょうけい

しょうきよう

ひと

憧憬したり恟忼したり独りでむずかしがらないで、

とく

篤と気を落ちつけて珠を磨るがいいよ」といやに異

たま

す

見めいた事を述べると、寒月君は「ええなるべく珠

ばかり磨っていたいんですが、向うでそうさせない

んだから弱り切ります」とわざと辟易したような顔

へきえき

付をする。「そうさ、君などは先方が騒ぎ立てるん

だが、中には滑稽なのがあるよ。あの図書館へ小便

をしに来た老梅君などになるとすこぶる奇だからね」
ろうばい

「どんな事をしたんだい」と主人が調子づいて承わ
うけたま

る。「なあに、こう云う訳さ。先生その昔静岡の東

西館へ泊った事があるのさ。——たった一と晩だぜ

——それでその晩すぐにそこの下女に結婚を申し込

んだのさ。僕も随分呑気だのんきが、まだあれほどには進

化しない。もつともその時分には、あの宿屋に御夏おなつ

さんと云う有名な別嬪べっぴんがいて老梅君の座敷へ出たの

がちようどその御夏さんなのだから無理はないがね」

「無理がないどころか君の何とか峠とまるで同じじやないか」「少し似ているね、実を云うと僕と老梅

とはそんなに差異はないからな。とにかく、その御

夏さんに結婚を申し込んで、まだ返事を聞かないう

ちに水瓜すいかが食いたくなつたんだがね」「何だつて？」

と主人が不思議な顔をする。主人ばかりではない、細君も寒月も申し合せたように首をひねつてちよつと考えて見る。迷亭は構わずどんどん話を進行させる。「御夏さんと呼んで静岡に水瓜はあるまいかと聞くと、御夏さんが、なんぼ静岡だって水瓜くらいはありますよと、御盆に水瓜を山盛りにして持って

くる。そこで老梅君食ったそうだ。山盛りの水瓜を
ことごとく平らげて、御夏さんの返事を待っている
と、返事の来ないうちに腹が痛み出してね、うーん
うーんと唸^{うな}ったが少しも利^き目^{きめ}がないからまた御夏さ
んを呼んで今度は静岡に医者はあるまいかと聞いた
ら、御夏さんがまた、なんぼ静岡だつて医者くらい
はありますよと云つて、てんちげんこう天地玄黄とかい^{せんじもん}う千字文を

盗んだような名前のドクトルを連れて来た。翌朝に

あくるあさ

なつて、腹の痛みも御蔭でとれてありがたいと、出

立する十五分前に御夏さんと呼んで、昨日申し込ん

きのう

だ結婚事件の諾否を尋ねると、御夏さんは笑いなが

ら静岡には水瓜もあります、御医者もありますが一

夜作りの御嫁はありませんと出て行つたきり顔を

見せなかつたそうだ。それから老梅君も僕同様失恋

になつて、図書館へは小便をするほか来なくなつたんだつて、考えると女は罪な者だよ」と云うと主人がいつになく引き受けて「本当にそうだ。せんだつてミュッセの脚本を読んだらそのうちの人物が羅馬の詩人を引用してこんな事を云つていた。——羽より軽い者は塵ちりである。塵より軽いものは風である。風より軽い者は女である。女より軽いものは無むであ

る。――よく穿うがつてゐるだろう。女なんか仕方がない」

と妙なところで力味りきんで見せる。これを承うけたまわつた細君

は承知しない。「女の軽いのがいけないとおつしや

るけれども、男の重いんだって好い事はないでしよ

う」「重いた、どんな事だ」「重いと云うな重い事

ですわ、あなたのようなんです」「俺がなんで重い」

「重いじゃありませんか」と妙な議論が始まる。迷

亭は面白そうに聞いていたが、やがて口を開いて

「そう赤くなつて互に弁難攻撃をするところが夫婦の真相と云うものかな。どうも昔の夫婦なんてものはまるで無意味なものだったに違いない」とひやかすのだから賞^ほめるのだから曖^{あい}昧^{まい}な事を言つたが、それではやめておいても好い事をまた例の調子で布^ふ衍^{えん}して、下^{しも}のごとく述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかつ

たんだって云うが、それなら唾おしを女房にしていると

同じ事で僕などは一向いっこうありがたくない。やっぱり奥

さんのようにあなたは重いじゃありませんかとか何

とか云われて見たいね。同じ女房を持つくらいなら、

たまには喧嘩の一つ二つしなくっちゃ退屈でしょう

がないからな。僕の母などと来たら、おやじの前へ

出てはいとへいで持ち切っていたものだ。そうして二十年もいっしょになつてゐるうちに寺参りよりほかに外へ出た事がないと云うんだから情けないじやないか。もつとも御蔭で先祖代々の戒名かいみょうはことごとく暗記している。男女間の交際だつてそうさ、僕の小供の時分などは寒月君のように意中の人と合奏をしたり、もうろうたい霊の交換をやつて朦朧体で出合つて見たり

する事はとうてい出来なかつた」「御氣の毒様で」

と寒月君が頭を下げる。「実に御氣の毒さ。しかも

その時分の女が必ずしも今の女より品行がいいと限

かなら

らんからね。奥さん近頃は女学生が墮落したの何だ

のとやかましく云いますがね。なに昔はこれより烈

はげ

しかつたんですよ」「そうでしょうか」と細君は真

面目である。「そうですとも、出鱈目じやない、ち

でたらめ

やんと証拠があるから仕方がありませんや。苦沙弥

君、君も覚えているかも知れんが僕等の五六歳の時

までは女の子を唐茄子とうなすのように籠かごへ入れて天秤棒てんびんぼうで

担かついで売ってあるいたもんだ、ねえ君」「僕はそん

な事は覚えておらん」「君の国じゃどうだか知らな

いが、静岡じゃたしかにそうだった」「まさか」と

細君が小さい声を出すと、「本当ですか」と寒月君

が本当らしからぬ様子で聞く。

「本当さ。現に僕のおやじが価ねを付けた事がある。

その時僕は何でも六つくらいだったろう。おやじと

いっしよに油町あぶらまちから通町とおうちょうへ散歩に出ると、向うから

大きな声をして女の子はよしかな、女の子はよし

かなと怒鳴どなってくる。僕等がちようど二丁目の角へ来

ると、伊勢源いせげんと云う呉服屋の前でその男に出っ食わ

した。伊勢源と云うのは間口が十間で蔵が五つ戸前くら い とまえ

あつて静岡第一の呉服屋だ。今度行つたら見て来給

え。今でも歴然と残っている。立派なうちだ。その

番頭が甚兵衛と云つてね。いつでも御袋が三日前におふくろ

亡なくなりましたと云うような顔をして帳場の所へ控ひか

えている。甚兵衛君の隣りには初さんといふ二十四はつ

五の若い衆しゅが坐っているが、この初さんがまた雲照うんしよ

律師に歸依して三七二十一日の間蕎麦湯だけで通し

たと云うような青い顔をしている。初さんの隣りが

ちょう

長どんでこれは昨日火事で焚き出されたかのごとく

しゅうぜん そろばん

愁然と算盤に身を凭している。長どんと併んで……」

もた

なら

「君は呉服屋の話をするのか、人売りの話をするのか」「そうそう人売りの話をやっていたんだっけ。

実はこの伊勢源についてもすこぶる奇譚があるんだ

きだん

が、それは割愛かつあいして今日は人売りだけにしておこう」

「人売りもついでにやめるがいい」「どうしてこれ

が二十世紀の今日こんにちと明治初年頃の女子の品性の比較

について大なる参考だいになる材料だから、そんなに容た

易やすくやめられるものか——それで僕がおやじと伊勢

源の前までくると、例の人売りがおやじを見て旦那

女の子の仕舞物しまいものはどうです、安く負けておくから買

てんびんぼう

っておくんなさいと云いながら天秤棒をおろして汗を拭ふいているのさ。見ると籠の中には前に一人後ろうしに一人両方とも二歳ばかりの女の子が入れてある。

おやじはこの男に向つて安ければ買つてもいいが、

もうこれぎりかいと聞くと、へえ生憎あいにく今日はみんな

売り尽つくしてたった二つになつちまいしました。どっち

でも好いから取つとくんなさいなと女の子を両手で

持つて唐茄子とうなすか何ぞのようにおやじの鼻の先へ出す

と、おやじはぽんぽんと頭を叩たたいて見て、ははあか

なりな音だと云った。それからいよいよ談判が始ま

って散々さんざね価値切きった末おやじが、買っても好いが品は

たしかだろうなと聞くと、ええ前の奴は始終見てい

るから間違はありませんがね後うしろに担かついでる方は、

何しろ眼がないんですから、ことによるとひびが入

つてるかも知れません。こいつの方なら受け合えな

い代りにねだん価段を引いておきますと云った。僕はこの

問答を未だに記憶いましているんだがその時小供心に女

と云うものはなるほど油断のならないものだと思つ

たよ。――しかし明治三十八年の今日こんにちこんな馬鹿な

真似をして女の子を売つてあるくものもなし、眼を

放して後ろうしへ担かついだ方はけんのん陰呑だなどと云う事も聞か

ないようだ。だから、僕の考ではやはり泰西文明の
御蔭で女の品行もよほど進歩したものだろうと断定
するのだが、どうだろう寒月君」

寒月君は返事をする前にまず鷹揚な咳払を一つし

おうよう

せきばらい

て見せたが、それからわざと落ちついた低い声で、
こんな観察を述べられた。「この頃の女は学校の行
き帰りや、合奏会や、慈善会や、園遊会で、ちよい

と買つて頂戴な、あらおいや？　などと自分で自分

を売りにあるいていますから、そんな八百屋やおやのお余

りを雇つて、女の子はよしか、なんて下品な依托販いたくはん

売ばいをやる必要はないですよ。人間に独立心が発達し

てくると自然こんな風になるものです。老人なんぞ

はいらぬ取越苦勞をして何とかかとか云いますが、

實際を云うとこれが文明の趨勢すうせいですから、私などは

大に喜ばしい現象だと、ひそかに慶賀の意を表して
いるのです。買う方だつて頭を敲たたいて品物は確かか
なんて聞くような野暮やぼは一人もいないんですからそ
の辺は安心なものでさあ。またこの複雑な世の中に、
そんな手数てすうをする日にやあ、際限がありませんから
ね。五十になつたつて六十になつたつて亭主を持つ

事も嫁に行く事も出来やしません」寒月君は二十世

紀の青年だけあって、大に当世流の考を開陳かいちんしてお

いて、敷島しきしまの煙をふうーと迷亭先生の顔の方へ吹き

付けた。迷亭は敷島の煙くらいで辟易へきえきする男ではな

い。「仰せの通り方今ほうこんの女生徒、令嬢などは自尊自

信の念から骨も肉も皮まで出来ていて、何でも男子

に負けないところが敬服の至りだ。僕の近所の女学

校の生徒などと来たらえらいものだぜ。筒袖つつそでを穿はい

かなぼう

て鉄棒へぶら下がるから感心だ。僕は二階の窓から

彼等の体操を目撃するたんびに古代希臘ギリシヤの婦人を追

懐するよ」「また希臘か」と主人が冷笑するように

云い放つと「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を発しているから仕方がない。美学者と希臘

とはとうてい離れられないやね。——ことにあの色

の黒い女学生が一心不乱に体操をしているところを

拝見すると、僕はいつでも Agnodice の

逸話を思い出すのさ」と物知り顔にしゃべり立てる。

「またむずかしい名前が出て来ましたね」と寒月君

は依然としてにやにやする。「Agnodice

はえらい女だよ、僕は実に感心したね。当時アテン亜典の

法律で女が産婆を営業する事を禁じてあつた。不便

な事さ。Agnodice だってその不便を感じず

るだろうじゃないか」「何だい、その――何とか云うのは」「女さ、女の名前だよ。この女がつらつら考えるには、どうも女が産婆になれないのは情けない、不便極まる。どうかして産婆になりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまいかと三日三晩手を拱こまぬいて考え込んだね。ちようと三日目の暁方あけがたに、隣の家で赤ん坊がおぎやあと泣いた声を聞いて、うんそうだ

と豁然^{かつぜんたいご}大悟して、それから早速長い髪を切つて男の

着物をきて Hierophilus の講義をき

きに行つた。首尾よく講義をきき終^おせて、もう大丈

夫と云うところでもつて、いよいよ産婆を開業した。

ところが、奥さん流行^{はや}りましたね。あちらでもおぎ、

やあと生れるこちらでもおぎやあと生れる。それが

みんな Agnoidice の世話なんだから大変

儲もうかつた。ところが人間万事塞翁さいおうの馬、七転ななころび八起やお

き、弱り目に祟たたり目で、ついこの秘密が露見に及ん

でついに御上おかみの御法度ごはつとを破つたと云うところで、重

き御仕置しおきに仰せつけられそうになりました」「まる

で講釈見たようです事」「なかなか旨うまいでしよう。

ところが亞典アテンの女連が一同連署して嘆願に及んだか

ら、時の御奉行もそう木で鼻くを括くくつたような挨拶も

出来ず、ついに当人は無罪放免、これからとはたとい
女たりとも産婆営業勝手たるべき事と云う御布令おふれさ
え出てめでたく落着を告げました」「よくいろいろ
な事を知っていらつしやるのね、感心ねえ」「ええ
大概の事は知っていますよ。知らないのは自分の馬
鹿な事くらいなものです。しかしそれも薄々は知っ
てます」「ホホホ面白い事ばかり……」と細君そう相

形を崩して笑つていると、格子戸こうしどのベルが相変らず

着けた時と同じような音を出して鳴る。「おやまた

御客様だ」と細君は茶の間へ引き下がる。細君と入

れ違いに座敷へ這入はいつて来たものは誰かと思つたら

ご存じの越智おちとうふう東風君であつた。

ここへ東風君さえくれば、主人の家へ出入うちでいりする変

人はことごとく網羅し尽つくしたとまで行かずとも、少

なくとも吾輩の無聊ぶりようを慰むるに足るほどの頭数あたまかずは御おそ

揃ろいになつたと云わねばならぬ。これで不足を云つて

は勿もつたい体ない。運悪るくほかの家へ飼われたが最後、

生涯人間中にかかる先生方が一人でもあろうとさえ

気が付かずに死んでしまふかも知れない。幸さいわいにして

苦沙弥先生門下の猫児びようじとなつて朝夕虎皮ちようせきこの前に侍はんべ

るので先生は無論の事迷亭、寒月ななし乃至東風などと云

う広い東京にさえあまり例のない一騎当千の豪傑連
の挙止動作を寝ながら拝見するのは吾輩にとって千
載一遇の光栄である。御蔭様でこの暑いのに毛袋で
つつまれていると云う難儀も忘れて、面白く半日を
消光する事が出来るのは感謝の至りである。どうせ
これだけ集まれば只事ではただごとはすまない。何か持ち上が
るだろうと襖ふすまの陰から謹つつしんで拝見する。

「どうもご無沙汰を致しました。しばらく」と御辞

儀をする東風君の顔を見ると、先日のごとくやはり

奇麗に光っている。頭だけで評すると何か緞帳役者どんちようやくしや

のようにも見えるが、白い小倉こくらの袴はかまのゴワゴワする

のを御苦勞にも鹿爪しかつめらしく穿はいているところは榊原さかきば

健吉けんきちの内弟子としか思えない。従つて東風君の身体

で普通の人間らしいところは肩から腰までの間だけ

である。「いや暑いのに、よく御出掛だね。さあず

っと、こつちへ通りたまえ」と迷亭先生は自分の家うち

らしい挨拶をする。「先生には大分だいぶん久しく御目にか

かりません」「そうさ、たしかこの春の朗読会ぎり

だったね。朗読会と云えば近頃はやはり御盛おさかんかね。

その後御宮ごおみやにやなりませんか。あれは旨うまかったよ。

僕はおおい大に拍手したぜ、君気が付いてたかい」「ええ

御蔭で大きに勇氣が出まして、とうとうしまいまで

漕こぎつけました」「今度はいつ御催しがありますか」

と主人が口を出す。「七八ふたつき月つきは休んで九月には何

か賑にぎやかにやりたいと思っております。何か面白い

趣向はございますまいか」「さよう」と主人が気の

ない返事をする。「東風君僕の創作を一つやらない

か」と今度は寒月君が相手になる。「君の創作なら

面白いものだろうが、一体何かね」「脚本さ」と寒

月君がなるべく押しを強く出ると、案のごとく、三人はちよつと毒気をぬかれて、申し合せたように本人の顔を見る。「脚本はえらい。喜劇かい悲劇かい」

と東風君が歩を進めると、寒月先生なお澄し返って「なに喜劇でも悲劇でもないさ。近頃は旧劇とか新

劇とか大部だいぶやかましいから、僕も一つ新機軸を出し

はいげき

て俳劇と云うのを作って見たのさ」「俳劇たどんな

ものだい」「俳句趣味の劇と云うのを詰めて俳劇の

二字にしたのさ」と云うと主人も迷亭も多少煙に捲けむま

かれて控ひかえている。「それでその趣向と云うのは？」

と聞き出したのはやはり東風君である。「根が俳句

趣味からくるのだから、あまり長たらしくって、毒

悪なのはよくないと思って一幕物にしておいた」

「なるほど」 「まず道具立てから話すが、これも極

簡単なのがいい。舞台の真中へ大きな柳を一本植え

付けてね。それからその柳の幹から一本の枝を右の

方へヌツと出させて、その枝へ鳥をからす一羽とまらせる」

「鳥がじつとしていればいいが」と主人が独り言のひとごと

ように心配した。「何わけは有りません、鳥の足を

糸で枝へ縛りしば付けておくんです。でその下へ行水盥ぎようずいだらい

を出しましてね。美人が横向きになつて手拭を使つてゐるんです」「そいつは少しデカダンだね。第一誰がその女になるんだい」と迷亭が聞く。「何これもすぐ出来ます。美術学校のモデルを雇つてくるんです」「そりや警視庁がやかましく云いそうだな」と主人はまた心配している。「だって興行さえしなければ構わんじやありませんか。そんな事をとやか

く云った日にや学校で裸体画の写生なんざ出来っこ
ありません」「しかしあれは稽古のためだから、た
だ見ているのとは少し違うよ」「先生方がそんな事
を云った日には日本もまだ駄目です。絵画だって、

演劇だって、おんなじ芸術です」と寒月君大いに氣き
焰えんを吹く。「まあ議論はいいが、それからどうする

のだい」と東風君、ことによると、やるりょうけん了見と見え

て筋を聞きたがる。「ところへ花道から俳人高浜虚

たかはまき

子^{よし}がステツキを持って、白い灯心^{とうしん}入りの帽子を被^{かぶ}つ

て、透綾^{すきや}の羽織に、薩摩飛白^{さつまがすり}の尻端^{しりつばし}折りの半靴と云

うこしらえて出てくる。着付けは陸軍の御用達^{ごようたし}見た

ようだけれども俳人だからなるべく悠々^{ゆうゆう}として腹の

中では句案に余念のない体^{てい}であるかなくつつちやいけ

ない。それで虚子が花道を行き切つていよいよ本舞

台に懸った時、ふと句案の眼をあげて前面を見ると、
大きな柳があつて、柳の影で白い女が湯を浴びてい
る、はつと思つて上を見ると長い柳の枝に鳥が一羽
とまつて女の行水を見下ろしている。そこで虚子先

おおい

生大に俳味に感動したと云う思い入れが五十秒ばか
りあつて、行水の女に惚れる鳥かなと大きな声で一

句朗吟するのを合図に、ひょうしぎ拍子木を入れて幕を引く。

——どうだろう、こう云う趣向は。御氣に入リませ

んかね。君御宮おみやになるより虚子になる方がよほどい

いぜ」東風君は何だか物足らぬと云う顔付で「あん

まり、あっけないようだ。もう少し人情を加味した

事件が欲しいようだ」と真面目に答える。今まで比

較的おとなしくしていた迷亭はそういつまでもだま

っているような男ではない。「たったそれだけで俳

劇はすさまじいね。上田敏君うえだびんの説によると俳味とか

滑稽とか云うものは消極的で亡国の音いんだそうだが、

敏君だけあつてうまい事を云ったよ。そんなつまら

ない物をやって見給え。それこそ上田君から笑われ

るばかりだ。第一劇だか茶番だか何だかあまり消極

的で分らないじゃないか。失礼だが寒月君はやはり

実験室で珠たまを磨いてる方がいい。俳劇なんぞ百作っ

たつて二百作つたつて、亡国の音^{いん}じや駄目だ」寒月

君は少々憤^{むっ}として、「そんなに消極的でしょうか。

私はなかなか積極的なつもりなのですが」どつちでも構わん事を弁解しかける。「虚子がですね。虚子

先生が女に惚^ほれる烏かなと烏を捕^{とら}えて女に惚れさし

たところが大^{おお}に積極的だろうと思います」「こりや

新説だね。是非御講釈を伺がいきましょう」「理学士

として考えて見ると烏が女に惚れるなどと云うのは不合理でしょう」「ごもつとも」「その不合理な事を無雑作に言い放つて少しも無理に聞えません」

むぞうさ

「そうかしら」と主人が疑つた調子で割り込んだが寒月は一向頓着しない。「なぜ無理に聞えないかと云うと、これは心理的に説明するとよく分ります。

実を云うと惚れるとか惚れないとか云うのは俳人そ

の人に存する感情で鳥とは没交渉の沙汰であります。

しかるところあの鳥は惚れてるなと感じるのは、つ

まり鳥がどうのこうのと云う訳じやない、ひっきよう必竟自分

が惚れているんでさあ。虚子自身が美しい女の行水ぎようずい

しているところを見てはっと思う途端にずっと惚れ

込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた眼で鳥が

枝の上で動きもしないで下を見つめているのを見た

かんちが

ものだから、ははあ、あいつも俺と同じく参つてると癩違かんちがいをしたのです。癩違かんちがいには相違ないですがそこが文学的でかつ積極的なところなんです。自分だけ感じた事を、断りもなく烏の上に拡張して知らん顔をしてすましているところなんぞは、よほど積極主義じゃありませんか。どうです先生」「なるほど御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違いない。

説明だけは積極だが、實際あの劇をやられた日には、見物人はたしかに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどうも消極過ぎるように思います」と真面目な顔をして答えた。

主人は少々談話の局面を展開して見たくなつたと見えて、「どうです、東風さん、近頃は傑作もありませんか」と聞くと東風君は「いえ、別段これと云

つて御目にかけるほどのものも出来ませんが、近日

詩集を出して見ようと思ひまして——稿本こうほんを幸い持

つて参りましたから御批評を願ひましょう」と懐か

ら紫の袱紗ふくさづつみ包を出して、その中から五六十枚ほどの

原稿紙の帳面を取り出して、主人の前に置く。主人

はもつともらしい顔をして拝見と云つて見ると第一

頁に

世の人に似ずあえかに見え給う

富子嬢に捧ぐ

と二行にかいてある。主人はちよつと神秘的な顔を
してしばらく一頁を無言のまま眺^{なが}めているので、迷
亭は横合から「何だい新体詩かね」と云いながら覗^{のぞ}

き込んで「やあ、捧げたね。東風君、思い切って富子嬢に捧げたのはえらい」としきりに賞^ほめる。主人はなお不思議そうに「東風さん、この富子と云うのは本当に存在している婦人なのですか」と聞く。

「へえ、この前迷亭先生とごいっしょに朗読会へ招待した婦人の一人です。ついこの御近所に住んでおります。実はただ今詩集を見せようと思つてちよっ

と寄つて参りましたが、生憎^{あいにく}先月から大磯へ避暑に

行つて留守でした」と真面目くさつて述べる。「苦

沙弥君、これが二十世紀なんだよ。そんな顔をしな

いで、早く傑作でも朗読するさ。しかし東風君この

捧げ方は少しまずかったね。このあえかにと云う雅^が

言^{げん}は全体何と言う意味だと思つてるかね」「蚊弱^{かよわ}い

とかたよわくと云う字だと思ひます」「なるほどそ

うも取れん事はないが本来の字義を云うと危う、氣にと云う事だぜ。だから僕ならこうは書かないね」

「どう書いたらもつと詩的になりましたよ」 「僕ならこうさ。世の人に似ずあえかに見え給う富子嬢の鼻の下に捧ぐとするね。わずかに三字のゆきさつだが鼻の下があるのとないのとは大變感じに相違があるよ」 「なるほど」と東風君は解げしかねたところ

を無理に納得した体にもてなす。

主人は無言のままようやく一頁をはぐつていいよいよ巻頭第一章を読み出す。

倦んじて薫ずる香裏に君の

霊か相思の煙のたなびき

おお我、ああ我、辛きこの世に

あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎてる」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云つて東風君に返す。

「先生御分りにならないのはごもつともで、十年前の

詩界と今日の詩界とは見違えるほど発達しておりますから。この頃の詩は寝転んで読んだり、停車場で読んではとうてい分りようがないので、作った本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピレーションで書くので詩人はその他には何等の責任もないのです。註釈や訓義は学究くんぎのやる事で私共の方では頓とんと構いません。せんだつ

そうせき

ても私の友人で送籍と云う男が一夜という短篇をか

もうろう

きました、誰が読んでも朦朧として取り留めが^とつ

とく

かないので、当人に逢つて篤と主意のあるところを

ただ

糺して見たのですが、当人もそんな事は知らないよ

と云つて取り合わないのです。全くその辺が詩人の

特色かと思ひます」「詩人かも知れないが随分妙な

男ですね」と主人が云うと、迷亭が「馬鹿だよ」と

単簡に送籍君を打ち留めた。東風君はこれだけでは

まだ弁じ足りない。「送籍は吾々仲間のうちでも取

除けですが、私の詩もどうか心持ちその気で読ん

ただきたいので。ことに御注意を願いたいのはか

らきこの世と、あまき口づけと対をとったところが

私の苦心です」「よほど苦心をなすった痕迹が見え

ます」「あまいとからいと反照するところなんか十

七味調唐辛子調で面白い。全く東風君独特の伎倆で敬々服々の至りだ」としきりに正直な人をまぜ返して喜んでゐる。

主人は何と思つたか、ふいと立つて書斎の方へ行つたがやがて一枚の半紙を持って出てくる。「東風君の御作も拝見したから、今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」といささか本気の沙汰であ

る。^{てんねんこじ}「天然居士の墓碑銘ならもう二三遍拝聴したよ」^{ぼひめい}

「まあ、だまっていなさい。東風さん、これは決して得意のものではありませんが、ほんの座興ですから聴いて下さい」「是非伺がいきましょう」「寒月君もついでに聞き給え」「ついででなくても聴きますよ。長い物じゃないでしょう」「僅々六十余字さ」と苦沙弥先生いよいよ手製の名文を読み始める。

「大和魂！」と叫んで日本人が肺病やみのような咳せき

をした」

「起し得て突兀とつこつですね」と寒月君がほめる。

「大和魂！」と新聞屋が云う。大和魂！と掏摸すりが

云う。大和魂が一躍して海を渡った。英国で大和魂

の演説をする。独逸ドイツで大和魂の芝居をする」

「なるほどこりや天然居士てんねんこじ以上の作だ」と今度は迷

亭先生がそり返つて見せる。

「東郷大將が大和魂を有^もっている。肴屋^{さかなや}の銀さんも

大和魂を有っている。詐偽師^{さぎし}、山師^{やまし}、人殺しも大和

魂を有っている」

「先生そこへ寒月も有っているとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答えて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云う声

が聞こえた」

「その一句は大出来だ。君はなかなか文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。

大和魂は名前の示すごとく魂である。魂であるから常にふらふらしている」

「先生だいたい面白うございますが、ちと大和魂が多

過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「賛成」と云つたのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。

誰も聞いた事はあるが、誰も遇あつた者がない。大和

魂はそれ天狗てんぐの類たぐいか」

主人は一結杳然いっけつようぜんと云うつもりで読み終つたが、さ

すがの名文もあまり短か過ぎるのと、主意がどこに

あるのか分りかねるので、三人はまだあとがある事
と思つて待っている。いくら待つていても、うんと
も、すんとも、云わないので、最後に寒月が「それ
ぎりですか」と聞くと主人は軽くかろ「うん」と答えた。
うんは少し氣樂過ぎる。

不思議な事に迷亭はこの名文に対して、いつもの
ようにあまり駄弁を振わなかつたが、やがて向き直

つて、「君も短篇を集めて一卷として、そうして誰かに捧げてはどうだ」と聞いた。主人は事もなげに「君に捧げてやろうか」と聴くと迷亭は「真平だ」まっぴらと答えたぎり、先刻細君に見せびらかした鋏はさみをちよきちよき云わして爪をとっている。寒月君は東風君に向つて「君はあの金田の令嬢を知ってるのかい」と尋ねる。「この春朗読会へ招待してから、懇意に

なつてそれから始終交際をしている。僕はあの令嬢の前へ出ると、何となく一種の感に打たれて、自分のうちは詩を作つても歌を詠よんでも愉快に興が乗つて出て来る。この集中にも恋の詩が多いのは全くああ云う異性の朋友ほうゆうからインスピレーションを受けらるからだろうと思う。それで僕はあの令嬢に対しては切実に感謝の意を表しなければならんからこの機

を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ。昔むかしか

ら婦人に親友のないもので立派な詩をかいいたものはないそうだ」「そうかなあ」と寒月君は顔の奥で笑

いながら答えた。いくら駄弁家の寄合でもそう長く

は続かんものと見えて、談話の火の手は大分だいぶん下火に

なつた。吾輩も彼等の変化なき雑談を終日聞かねば

ならぬ義務もないから、失敬して庭へかまきり蟬螂を探しに

出た。^{あおぎり}梧桐の緑を綴^{つづ}る間から西に傾く日が斑^{まだ}らに洩^もれて、幹にはつくつく法師^{ほうし}が懸命にないている。晩はことによると一雨かかるかも知れない。

七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利^き

いた風だと一概に冷罵れいばし去る手合てあいにちよつと申し聞

けるが、そう云いう人間だつてつい近年までは運動の

何者たるを解せず、食つて寝るのを天職のように

心得ていたではないか。無事ぶじ是貴人これきにんとか称となえて、懐ふと

手ころでをして座布団ざぶとんから腐れかかった尻を離さざるをも

つて旦那の名誉と脂下やにさがつて暮したのは覚えてゐるは

ずだ。運動をしろの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、

海の中へ飛び込めの、夏になったら山の中へ籠こもって

当分霞を食くらえのとくだらぬ注文を連発するようにな

ったのは、西洋から神国へ伝染しした輓ばん近きんの病気で、

やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていい

くらいだ。もつとも吾輩は去年生れたばかりで、当

年とって一歳だから人間がこんな病気に罹かり出した

当時の有様は記憶に存しておらん、のみならずその

砌りみぎは浮世の風中かざなかにふわついておらなかつたに相違

ないが、猫の一年は人間の十年に懸かけ合うと云つて

もよろしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短

いに係からず、その短日月の間に猫一疋の発達かかわは十分

仕つかまつるところをもつて推論すると、人間の年月と猫の

星霜せいそうを同じ割合に打算するのははなはだしき誤謬ごびゅうで

ある。第一、一歳何カ月に足らぬ吾輩がこのくらい

の見識を有しているのでも分るだろう。主人の第三女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から云うと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかに何にも知らない。世を憂い時を憤^{いきどお}る吾輩などに較^{くら}べると、からたわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海水浴、転地療養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたって

毫も驚くに足りない。これしきの事をもし驚ろく者

があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない

野呂間のろまきまに極っている。人間は昔から野呂間である。

であるから近頃に至つて漸々運動の機能を吹聴ふいちようした

り、海水浴の利益を喋々ちようちようして大発明のように考える

のである。吾輩などは生れない前からそのくらいな

事はちゃんと心得ている。第一海水がなぜ薬になる

かと云えばちよつと海岸へ行けばすぐ分る事じやな

いか。あんな広い所に魚が何疋びきおるか分らないが、

あの魚が一疋も病氣をして医者にかかった試ためしがな

い。みんな健全に泳いでいる。病氣をすれば、から

だが利きかなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚

の往生をあがると云つて、鳥の薨去こうきよを、落おちると唱とな

え、人間の寂滅じやくめつをごねると号ごうしている。洋行をして

印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事
がありますかと聞いて見るがいい、誰でもいいえと
答えるに極っている。それはそう答える訳だ。いく
ら往復したって一匹も波の上に今呼吸いきを引き取った
——呼吸いきではいかん、魚の事だから潮しおを引き取った
と云わなければならん——潮を引き取って浮いてい
るのを見た者はないからだ。あの渺々びようびようたる、あの漫まん

々^{まん}たる、大海^{たいかい}を日となく夜となく続けざまに石炭を

焚^たいて探^さがしてあるいても古往今来^{こんらい}一匹も魚が上[、]が

つておらんとところをもつて推論すれば、魚はよほど

丈夫なものに違ないと云う断案はすぐに下す事が出

来る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云え

ばこれまた人間を待つてしかる後^{のち}に知らざるなりで、

訳^{わけ}はない。すぐ分る。全く潮水^{しおみず}を呑んで始終海水浴

をやっているからだ。海水浴の機能はしかく魚に取

けんちよ

って顕著である。魚に取って顕著である以上は人間

に取っても顕著でなくてはならん。一七五〇年にド

クトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水

そくせき

に飛込めば四百四病即席全快と大袈裟な広告を出し

おおげさ

たのは遅い遅いと笑ってもよろしい。猫といえども

相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛

けるつもりでいる。但し今はいけない。物には時機

がある。御維新前ごいつしんまえの日本人が海水浴の機能を味わう

事が出来ずに死んだごとく、今日こんにちの猫はいまだ裸体

で海の中へ飛び込むべき機会に遭遇そうぐうしておらん。せ

いては事を仕損しそんずる、今日のように築地つきじへ打っち

やられに行つた猫が無事に帰宅せん間は無暗むやみに飛び

込む訳には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が

狂瀾怒濤に対して適當の抵抗力を生ずるに至るまでは――換言すれば猫が死んだと云う代りに猫が上がつたと云う語が一般に使用せらるるまでは――容易に海水浴は出来ん。

海水浴は追つて実行する事にして、運動だけは取りあえずやる事に取り極めた。きどうも二十世紀のこんにち
日運動せんのはいかにも貧民のようで人間きがわる

い。運動をせんと、運動せんのではない。運動が出来るのである、運動をする時間がないのである、余裕がないのだと鑑定される。昔は運動したものが折^{おり}助^{すけ}と笑われたごとく、今では運動をせぬ者が下等と見^み做^なされている。吾人の評価は時と場合に応じ吾輩の眼玉のごとく変化する。吾輩の眼玉はただ小さくなったり大きくなったりするばかりだが、人間の品^{ひん}

騰しつとくると真逆まっさかさまにひっくり返る。ひっくり返

つても差さし支つかえはない。物には両面がある、両端りようたんが

ある。両端を叩たたいて黒白こくびやくの変化を同一物の上に起こ

すところが人間の融通のきくところである。方寸ほうすんを

逆さかさまにして見ると寸方すんぽうとなるとところに愛嬌あいきようがあ

る。天あまの橋立はしだてを股倉またぐらから覗のぞいて見るとまた格別おもむきな趣

が出る。セクスピアも千古万古セクスピアではつま

らない。偶たまには股倉からハムレットを見て、君こり

や駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。だから運動をわるく云った連中が急に運動がしなくなつて、女までがラケットを持つて往來をあるき廻いっこうつたつて一向不思議はない。ただ猫が運動するのを利きいた風などと笑いさえしなければよい。さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不

審を抱く^{いだ}者があゑるかも知れんから一応説明しよう

思ふ。御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出

来ん。だからボールもバツトも取り扱ひ方に困窮す

る。次には金がないから買^{わけ}う訳に行かない。この二

つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文^{いちもん}いらず器

械なしと名づくべき種類に属する者と思ふ。そんな

ら、のそのそ歩^{まぐろ}くか、あるいは鮪^{くわ}の切身を啣^かえて馳

け出す事と考えるかも知れんが、ただ四本の足を力

学的に運動させて、地球の引力に順したがつて、大地を横

行するのは、あまり単簡たんかんで興味がない。いくら運動

と名がついても、主人の時々実行するような、読ん

で字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚けがす者だ

ろうと思う。勿論もちろんただの運動でもある刺激の下もとには

やらんとは限らん。鰹節競争、鮭探かつぶしきょうそう しやけさがしなどは結構だ

がこれは肝心かんじんの対象物があつての上の事で、この刺

激を取り去ると索然さくぜんとして没趣味なものになつてし

まう。懸賞的興奮剤がないとすれば何か芸のある運

動がして見たい。吾輩はいろいろ考えた。台所の廂ひさし

から家根やねに飛び上がる方、家根の天辺てっぺんにある梅花形ばいかがた

の瓦かわらの上に四本足で立つ術、物干竿ものほしざおを渡る事——こ

れはどうてい成功しない、竹がつるつる滑すべつて爪

が立たない。後ろうしろから不意に小供に飛びつく事、――

――これはすこぶる興味のある運動のひとつ一だが滅多めったにや

るとひどい目に逢うから、高々たかだか月に三度くらいしか

試みない。紙袋かんぶくろを頭へかぶせらるる事――これは苦

しいばかりではなはだ興味の乏とぼしい方法である。こ

とに人間の相手がおらんと成功しないから駄目。次

には書物の表紙を爪で引き搔かく事、――これは主人

に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで総身の筋肉が働かない。

これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる者である。新

式のうちにはなかなか興味の深いのである。第一に

どうろうが

蟪蛄狩り。

——蟪蛄狩りは鼠狩りねずみほどの大運動でな

い代りにそれほど危険がない。夏の半なかばから秋の始

めへかけてやる遊戯としてはもっとも上乘のものだ。

その方法を云うとまず庭へ出て、一匹の蝸螂かまきりをさが

し出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出すのは雑ぞ

作うさもない。さて見付け出した蝸螂君の傍そばへはつと風

を切つて馳かけて行く。するとすわこそと云う身構みがまえを

して鎌首をふり上げる。蝸螂でもなかなか健気けなげなも

ので、相手の力量を知らんうちは抵抗するつもりで

いるから面白い。振り上げた鎌首を右の前足でちよ

つと参る。振り上げた首は軟かいからぐにやり横へ
曲る。この時の螭螂君の表情がすこぶる興味を添え
る。おやと云う思い入れが充分ある。ところを一足
飛びに君きみの後ろうしへ廻つて今度は背面から君の羽根を
軽く引き搔かく。あの羽根は平生大事に畳たたんであるが、
引き搔き方が烈はげしいと、ぱつと乱れて中から吉野紙
のような薄色の下着があらわれる。君は夏でも御苦

労千万に二枚重ねで乙おつに極きまっている。この時君の

長い首は必ず後ろに向き直る。ある時は向ってくるが、大概の場合には首だけぬつと立てて立っている。こつちから手出しをするのを待ち構えて見える。

先方がいつまでもこの態度でいては運動にならんから、あまり長くなるとまたちよいと一本参る。これだけ参ると眼識のある螭螂なら必ず逃げ出す。それ

を我無洒落がむしやうに向つてくるのはよほど無教育な野蛮的

蟪蛄である。もし相手がこの野蛮な振舞をやると、

向つて来たところをねらひすまして、いやと云うほど

張り付けてやる。大概は二三尺飛ばされる者である

。しかし敵がおとなしく背面に前進すると、こつち

は気の毒だから庭の立木を二三度飛鳥のごとく廻つ

てくる。かまきりくん蟪蛄君はまだ五六寸しか逃げ延びておらん

もう吾輩の力量を知ったから手向いをする勇氣は

ない。ただ右往左往へ逃げ惑^{まど}うのみである。しかし

吾輩も右往左往へ追っかけるから、君はしまいには
苦しがつて羽根を振^{ふる}つて一大活躍を試みる事がある

。元来螭螂の羽根は彼の首と調和して、すこぶる細

長く出来上がったものだが、聞いて見ると全く装飾

用だそうで、人間の英語、仏語、独逸語^{ドイツ語}のごとく毫^{ちよう}

も実用にはならん。だから無用の長物を利用して一大活躍を試みたところが吾輩に対してあまり功能のありよう訳がない。名前は活躍だが事實は地面の上を引きずつてあるくと云うに過ぎん。こうなると少

々気の毒な感はあるが運動のためだから仕方がない

。御免蒙^{ごめんこうむ}つてたちまち前面へ馳^かけ抜ける。君は惰性

で急廻転が出来ないからやはりやむを得ず前進して

くる。その鼻をなぐりつける。この時螭螂君は必ず

羽根を広げたままたお仆れる。その上をうんと前足で抑おさ

えて少しく休息する。それからまた放す。放してお

いてまた抑える。七擒七縱孔明の軍略で攻めつけるしちきんしちしようめい

。約三十分この順序を繰り返して、身動きも出来な

くなつたところを見すましてちよつと口へ啣くわえて振

つて見る。それからまた吐き出す。今度は地面の上

へ寝たぎり動かないから、こっちの手で突っ付いて、その勢で飛び上がるところをまた抑えつける。これもいいやになってから、最後の手段としてむしやむしや食ってしまう。ついでだから螻蛄を食った事のない人に話しておくが、螻蛄はあまり旨い物ではない。そうして滋養分も存外少ないようである。螻蛄狩りに次いで蝉取りと云う運動をやる。単に蝉と云

ったところが同じ物ばかりではない。人間にも油野あぶらや

郎ろう、みんな野郎、おしいつくつく野郎があるごと

く、蟬にも油蟬、みんな、おしいつくつくがある

。油蟬はしつこくで行いかん。みんなは横風おうふうで困る

。ただ取って面白いのはおしいつくつくである。こ

れは夏の末にならないと出て来ない。八やつ口くちの綻ほころび

から秋風あきかぜが断はわりなしに膚はだを撫なでてはつくしよ風邪かぜ

を引いたと云う頃熾さかんに尾を掉ふり立ててなく。善よく鳴

く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるより

ほかに天職がないと思われるくらいだ。秋の初はこ

いつを取る。これを称して蟬取り運動と云う。ちよ

つと諸君に話しておくがいやしくも蟬と名のつく以

上は、地面の上に転ころがつてはおらん。地面の上に落

ちているものには必ず蟻ありがついている。吾輩の取る

のはこの蟻の領分に寝転んでいる奴ではない。高い木の枝にとまって、おしいつくつくと鳴いている連中を捕とらえるのである。これもついでだから博学なる人間に聞きたいがあればおしいつくつくと鳴くのか、つくつくおしいと鳴くのか、その解釈次第によつては蟬の研究上少なからざる関係があると思う。人間の猫に優まさるところはこんなところに存するので、

人間の自ら誇る点もまたかような点にあるのだから、今即答が出来ないならよく考えておいたらよからう。もつとも蟬取り運動上はどっちにしても差し支^さつか^{つか}えはない。ただ声をしるべに木を上^{のぼ}って行つて、先方が夢中になつて鳴いているところをうんと捕えるばかりだ。これはもつとも簡略な運動に見えてなかなか骨の折れる運動である。吾輩は四本の足を有し

ているから大地を行く事においてはあえて他の動物には劣るとは思わない。少なくとも二本と四本の数学的智識から判断して見て人間には負けないつもりである。しかし木登りに至ってはだいぶ大分吾輩より巧者な奴がいる。本職の猿は別物として、猿の末孫ばっそんたる人間にもなかなか侮るべからざる手合てあいがいる。元来が引力に逆らつての無理な事業だから出来なくても

ちじよく

別段の恥辱とは思わんけれども、蟬取り運動上には
少なからざる不便を与える。幸に爪と云う利器があ
るので、どうかこうか登りはするものの、はたで見
るほど楽ではござらん。のみならず蟬は飛ぶもので
ある。螭螂君かまきりくんと違って一たび飛んでしまったが最後
、せつかくの木登りも、木登らずと何の択むところえら
なしと云う悲運に際会する事がないとも限らん。最

後に時々蟬から小便をかけられる危険がある。あの
小便がややともすると眼をねら覗つてしよぐつてくるよ
うだ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便ばか
りは垂れんように致したい。飛ぶ間際まぎわに溺いばりを仕つかまつる
のは一体どう云う心理的狀態の生理的器械に及ぼす
影響だろう。やはりせつなさのあまりかしらん。あ
るいは敵の不意に出でて、ちよつと逃げ出す余裕を

作るための方便か知らん。そうすると烏賊いかの墨を吐

き、ベランメーの刺物ほりものを見せ、主人が羅甸語ラテンゴを弄す

る類たぐいと同じ綱目こうもくに入るべき事項となる。これも蟬学

上忽ゆるかせにすべからざる問題である。充分研究すれ

ばこれだけでたしかに博士論文の価値はある。それは余事だから、そのくらいにしてまた本題に帰る。

蟬のもっとも集注するのは——集注がおかしければ

集合だが、集合は陳腐ちんぷだからやはり集注にする。――

――蟬のもつとも集注するのは青桐あおぎりである。漢名を梧ご

桐とうと号するそうだ。ところがこの青桐は葉が非常に

多い、しかもその葉は皆团扇うちわくらいな大さであるか

ら、彼等が生い重おなると枝がまるで見えないくらい

茂っている。これがはなはだ蟬取り運動の妨害にな

る。声はすれども姿は見えずと云う俗謡ぞくようはとくに吾

輩のために作った者ではなからうかと怪しまれるく
らいである。吾輩は仕方がないからただ声を知るべ
に行く。下から一間ばかりのところで梧桐は注文通
り二又ふたまたになっているから、ここで一休息ひとやすみして葉裏か
ら蟬の所在地を探偵する。もつともここまで来るう
ちに、がさがさと音を立てて、飛び出す気早な連中
がいる。一羽飛ぶともういけない。真似をする点に

おいて蟬は人間に劣らぬくらい馬鹿である。あとか

ら続々飛び出す。

ようようふたまた

漸々二又に到着する時分には満樹

せき

へんせい

寂として片声をとどめざる事がある。かつてここま

で登って来て、どこをどう見廻わしても、耳をどう

振つても

せみけ

蟬氣がないので、出直すのも面倒だからし

ばらく休息しようと、

また

又の上に陣取つて第二の機会

を待ち合せていたら、

ま

いつの間にか眠くなつて、つ

こくてんきょうり
い黒甜郷裡に遊んだ。おやと思つて眼が醒めたら、

こくてんきょうり

二又の黒甜郷裡から庭の敷石の上へどたりと落ちて

いた。しかし大概は登る度に一つは取つて来る。た

だ興味の薄い事には樹の上で口に啣くわえてしまわなく

てはならん。だから下へ持つて来て吐き出す時は大おお

かた

方死んでゐる。いくらじやらしても引つ搔かいても確

然たる手答がない。蟬取りの妙味はじつと忍んで行

つておしい君くんが一生懸命に尻尾しっぽを延ばしたり縮ましちぢ

たりしているところを、わっと前足で抑おさえる時にあ

る。この時つくつく君くんは悲鳴を揚げて、薄い透明な

羽根を縦横無尽に振う。その早い事、美事なる事は

言語道断、実に蟬世界の一偉観である。余はつくつ

く君を抑たひえる度にいつでも、つくつく君に請求して

この美術的演芸を見せてもらおう。それがいやになる

とご免を蒙^{こうむ}つて口の内へ頬張^{ほおば}つてしまふ。蟬による

と口の内へ這^{はい}入つてまで演芸をつづけているのがあ

る。蟬取りの次にやる運動は松滑^{まつすべ}りである。これは

長くかく必要もないから、ちよつと述べておく。松

滑りと云うと松を滑るように思ふかも知れんが、そ

うではないやはり木登りの一種である。ただ蟬取り

は蟬を取るために登り、松滑りは、登る事を目的と

して登る。これが両者の差である。元来松は常磐にときわ

さいみょうじ

ごちそう

て最明寺の御馳走をしてから以来今日こんにちに至るまで、

いやにごつごつしている。従つて松の幹ほど滑らな

いものはない。手懸りのいいものはない。足懸りの

いいものはない。——換言すれば爪懸りつまがのいいもの

はない。その爪懸りのいい幹へいっきかせい一気呵成に馳かけ上あがる

。馳け上つておいて馳け下がる。馳け下がるには二

法ある。一はさかさになつて頭を地面へ向けて下り

てくる。一は上のぼったままの姿勢をくずさずに尾を下

にして降りる。人間に問うがどつちがむずかしいか

知ってるか。人間のあさはかなりょうけん了見では、どうせ降

りるのだから下向したむきに馳け下りる方が楽だと思ふだろ

う。それが間違つてる。君等は義経が鶉越ひよどりこえを落とし

たことだけを心得て、義経でさえ下を向いて下りる

のだから猫なんぞは無論下^した向きでたくさんだと思
うのだろう。そう輕蔑^{けいべつ}するものではない。猫の爪は
どっちへ向いて生^はえていると思う。みんな後ろ^{うし}へ折
れている。それだから鳶口^{とびぐち}のように物をかけて引き
寄せる事は出来るが、逆に押し出す力はない。今吾
輩が松の木を勢よく馳け登ったとする。すると吾輩
は元来地上の者であるから、自然の傾向から云えば

吾輩が長く松樹の巔いただきとどに留まるを許さんに相違ない、

ただおけば必ず落ちる。しかし手放しで落ちては、

あまり早過ぎる。だから何等かの手段をもつてこの

自然の傾向を幾分かゆるめなければならん。これ即すなわ

ち降りるのである。落ちるのと降りるのは大變な違

いようだが、その実思ったほどの事ではない。落ち

るのを遅くすると降りるので、降りるのを早くする

と落ちる事になる。落ちると降りるのは、ちとりの
差である。吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだ
から、落ちるのを緩めて降りなければならぬ。即
ちあるものをもって落ちる速度に抵抗しなければな
らん。吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きであるから
もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く
落ちる勢に逆つて利用出来る訳である。従つて落

ゆる

ぜん

うし

ことごと

すなわ

さから

ちるが變じて降りるになる。實に見易き道理である

みやす

。しかるにまた身を逆さかにして義経流に松の木越まこえをや

つて見給え。爪はあつても役には立たん。ずるずる

滑つて、どこにも自分の体量を持ち答える事は出来
なくなる。ここにおいてかせつかく降りようと企て

くわだ

た者が變化して落ちる事になる。この通り鶉越ひよどりごえはむ

ずかしい。猫のうちでこの芸が出来る者は恐らく吾

輩のみであろう。それだから吾輩はこの運動を称し

て松滑りと云うのである。最後に垣巡りかきめぐについて一いち

言げんする。主人の庭は竹垣をもつて四角にしきられて

いる。椽側えんがわと平行している一片いっぺんは八九間もあろう。

左右は双方共四間に過ぎん。今吾輩の云った垣巡り

と云う運動はこの垣の上を落ちないように一周する

のである。これはやり損そこなう事もままあるが、首尾よ

く行くとお慰なぐさになる。ことに所々に根を焼いた丸太が立っているから、ちよつと休息に便宜べんぎがある。今日は出来がよかつたので朝から昼までに三返べんやつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなる度たびに面白くなる。とうとう四返繰り返したが、四返目に半分ほど巡まわりかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向うに列を正してとまった。これ

は推参な奴だ。人の運動の妨さまたげをする、ことにどこの

鳥だか籍せきもない分ぶんざい在で、人の塀へとまるといふ法が

あるもんかと思つたから、通るんだおい除のきたまえ

と声をかけた。真先の鳥はこつちを見てにやにや笑

っている。次のは主人の庭を眺ながめている。三羽目は

嘴くちばしを垣根の竹で拭ふいている。何か食つて来たに違な

い。吾輩は返答を待つために、彼等に三分間の猶ゆう予

を与えて、垣の上に立っていた。鳥は通称を勘左衛門と云うそうだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいくら待ってても挨拶もしなければ、飛びもしない。

吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を広げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるなと思ったら、右向から左向に姿勢をかえただけである。この野郎！ 地面の

上ならその分に捨ておくのではないが、いかんせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしている余裕がない。といってまた立留まつて三羽が立ち退^のくのを待つのもいやだ。第一そう待つていては足がつづかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけている。従つて気に入ればいつまでも逗留^{とまりゆう}するだろう。こっちはこれ

で四返目だたださえ大分^{だいぶん}劳れている。いわんや綱渡

りにも劣らざる芸当兼運動をやるのだ。何等の障害

物がなくてさえ落ちんとは保証が出来んのに、こん

^{くろしようにぞく}

な黒装束が、三個も前途を遮^{さえぎ}つては容易ならざる不

都合だ。いよいよとなれば自ら運動を中止して垣根^{みづか}

を下りるより仕方がない。面倒だから、いっそさよ

う仕ろうか、敵は大勢の事ではあるし、ことにはあ

まりこの辺には見馴れぬ人体である。口嘴が乙に尖

にんてい

くちばし

おつ

とん

がつて何だか天狗の啓し子のようだ。どうせ質のい

てんぐ

もう

ご

たち

い奴でないには極きまっている。退却が安全だろう、あ

まり深入りをして万一落ちでもしたらなおさら恥辱

だ。と思つていると左向ひだりむけをした鳥が阿呆あほうと云つた。

次のも真似をして阿呆と云つた。最後の奴は御鄭寧ごていねい

にも阿呆阿呆と二声叫んだ。いかに温厚なる吾輩で

もこれは看過^{かんか}出来ない。第一自己の邸内^{からすはい}で烏輩に侮

辱されたとあつては、吾輩の名前にかかわる。名前

はまだないから係わりようがなろうと云うなら体

面に係わる。決して退却は出来ない。諺^{ことわざ}にも烏合^{うごう}の

衆と云うから三羽だつて存外弱いかも知れない。進

めるだけ進めと度胸を据^すえて、のそのそ歩き出す。

烏は知らん顔をして何か御互に話をしている様子だ

いよいよ肝癰かんしやくに障さわる。垣根の幅がもう五六寸もあ

ったらひどい目に合せてやるんだが、残念な事には

いくら怒おこつても、のそのそとしかあるかれない。よ

うやくの事先鋒せんぽうを去る事約五六寸の距離まで来ても

う一息だと思つと、勘左衛門は申し合せたように、

いきなり羽搏はばたきをして一二尺飛び上がった。その風が

突然余の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏み

外^はずして、すんと落ちた。これはしくじったと垣

根の下から見上げると、三羽共元の所にとまって上

から嘴^{くちばし}を揃^{そろ}えて吾輩の顔を見下している。凶太い奴

だ。睨^{にら}めつけてやったが一向利^{いっこう}かない。背を丸くし

て、少々唸^{うな}ったが、ますます駄目だ。俗人に靈妙な

る象徴詩がわからぬごとく、吾輩が彼等に向って示

す怒りの記号も何等の反応を呈出しない。考えて見

ると無理のないところだ。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱っていた。それが悪るい。猫ならこのくらいやればたしかに応^{こた}えるのだが生憎^{あいにく}相手は烏だ。

烏の勘公とあつて見れば致し方がない。実業家が主

人^{くしやみ}苦沙弥先生を圧倒しようとおせるごとく、西行^{さいぎよう}に

銀製の吾輩を進呈するがごとく、西郷隆盛君の銅像

に勘公^{ふん}が糞^{ふん}をひるようなものである。機を見るに敏

なる吾輩はとうてい駄目と見て取ったから、奇麗さ
っぱりと椽側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運
動もいいが度を過ぎすと行かぬ者で、からだ全体が
何となく緊りしまがない、ぐたぐたの感がある。のみな
らずまだ秋の取り付きで運動中に照り付けられた毛
ごろもは、西日を思う存分吸収したと見えて、ほて
ってたまらない。毛穴から染しみ出す汗が、流れれば

と思うのに毛の根に膏あぶらのようにねばり付く。背中せなかが

むずむずする。汗でむずむずするのと蚤のみが這はつてむ

ずむずするのは判然と区別が出来る。口の届く所な

ら噛かむ事も出来る、足の達する領分は引き搔かく事も

心得にあるが、脊髄せきずいの縦に通う真中と来たら自分の

及ぶ限かぎりでない。こう云う時には人間を見懸けて矢鱈やたら

にこすり付けるか、松の木の皮で充分摩擦術を行う

か、二者その一を択えらばんと不愉快で安眠も出来兼ね

る。人間は愚ぐなものであるから、猫なで声で——猫

なで声は人間の吾輩に対して出す声だ。吾輩を目安めやす

にして考えれば猫なで声ではない、なでられ声であ

る——よろしい、とにかく人間は愚なものであるか

ら撫なでられ声で膝の傍そばへ寄って行くと、大抵の場合

において彼もしくは彼女は彼女を愛するものと誤解して、

わが為^なすままに任せるのみか折々は頭さえ撫^なでてく

れるものだ。しかるに近来吾輩^{もうちゅう}の毛中にのみと号す

る一種の寄生虫が繁殖したので滅^め多^{った}に寄り添うと、

必ず頸^{くびすじ}筋を持つて向うへ抛^{ほう}り出される。わずかに眼

に入^いるか入^いらぬか、取るにも足らぬ虫のために愛^{あい}想^そ

をつかしたと見える。手を翻^{ひるがえ}せば雨、手を覆^{くつがえ}せば雲

とはこの事だ。高がのみの千^{びき}疋や二千疋でよくまあ

こんなに現金な真似が出来たものだ。人間世界を通

じて行われる愛の法則の第一条にはこうあるそうだ

。——自己の利益になる間は、すべからく人を愛す

べし。——人間の取り扱が俄然豹変がぜんひょうへんしたので、いく

ら痒かゆくても人力を利用する事は出来ん。だから第

しょうひまさつほう

二の方法によつて松皮摩擦法をやるよりほかに分別

はない。しからばちよつとこすつて参ろうかとまた

椽側えんがわから降りかけたが、いやこれも利害相償わぬ愚

策だと心付いた。と云うのはほかでもない。松には

脂やにがある。この脂やにたるすこぶる執着心の強い者で、

もし一たび、毛の先へくっ付けようものなら、雷が

鳴ってもバルチック艦隊が全滅しても決して離れな

い。しかのみならず五本の毛へこびりつくが早いか

、十本に蔓延まんえんする。十本やられたなと気が付くと、

もう三十本引つ懸つてゐる。吾輩は淡泊^{たんぱく}を愛する茶^{ちや}

じんてきねこ

人的猫である。こんな、しつこい、毒悪な、ねちね

しゅうねんぶか

ちした、執念深い奴は大嫌だ。たとい天下の美猫と

まつやに

いえどもご免蒙る。いわんや松脂^{まつやに}においてをやだ。

えら

車屋の黒の両眼から北風に乗じて流れる目糞と拭^{えら}ぶ

たんかいしよく

けごろも

だい

ところなき身分をもつて、この淡灰色の毛衣を大な

け

しにすると怪^けしからん。少しは考えて見るがいい

。といったところできやつなかなか考える氣遣きづかいはな

い。あの皮のあたりへ行つて背中をつけるが早いか

必ずべたりとおいでになるに極きまっている。こんな無

分別な頓痴奇とんちきを相手にしては吾輩の顔に係わるのみ

ならず、引いて吾輩の毛並に関する訳だ。いくら、

むずむずしたって我慢するよりほかに致し方はある

まい。しかしこの二方法共実行出来んとなるとはな

はだ心細い。今において一工夫しておかんとしまいに
はむずむず、ねちねちの結果病氣に罹^かるかも知れ
ない。何か分別はあるまいかなと、後^あと足^{あし}を折って
思案したが、ふと思ひ出した事がある。うちの主人
は時々手拭と石鹼^{シヤボン}をもつて飄然^{ひようぜん}といずれへか出て行
く事がある、三四十分して歸つたところを見ると彼
の朦朧^{もうろう}たる顔色^{がんしよく}が少しは活気を帯びて、晴れやかに

見える。主人のような汚苦むさくるしい男にこのくらいな影

響を与えるなら吾輩にはもう少し利目ききめがあるに相違

ない。吾輩はただでさえこのくらいな器量だから、

これより色男になる必要はないようなものの、万一

病気に罹かかつて一歳何なんが月げつで夭折ようせつするような事があつ

ては天下の蒼生そうせいに対して申し訳がない。聞いて見る

とこれも人間のひま潰つぶしに案出した洗湯せんとうなるものだ

そうだ。どうせ人間の作ったものだから碌ろくなもので

ないには極きまっているがこの際の事だから試しに這入はい

って見るのもよからう。やって見て功験がなければ

よすまでの事だ。しかし人間が自己のために設備し

た浴場へ異類の猫を入れるだけの洪量こうりょうがあるだろう

か。これが疑問である。主人がすまして這入はいるくら

いのところだから、よもや吾輩を断わる事もなかる

うけれども万一お気の毒様を食うような事があつては外聞がわるい。これは一先^{ひとま}ず容子^{ようす}を見に行くに越した事はない。見た上でこれならよいと当りが付いたら、手拭を啣^{くわ}えて飛び込んで見よう。とここまで思案を定めた上でのそのそと洗湯へ出掛けた。

横町を左へ折れると向うに高いとよ竹のようなものが屹立^{きつりつ}して先から薄い煙を吐いている。これ即ち^{すなわ}

洗湯である。吾輩はそつと裏口から忍び込んだ。裏

口から忍び込むのを卑怯ひきようとか未練とか云うが、あれ

は表からでなくては訪問する事が出来ぬものが嫉妬しつと

半分に囃はやし立てる繰くり言ごとである。昔から利口な人は

裏口から不意を襲う事にきまっている。紳士養成方ほう

の第二巻第一章の五ページにそう出ているそうだ。

その次のページには裏口は紳士の遺書にして自身徳

を得るの門なりとあるくらいだ。吾輩は二十世紀の猫だからこのくらいの教育はある。あんまり軽蔑しけいべつてはいけない。さて忍び込んで見ると、左の方に松を割って八寸くらいにしたのが山のように積んであって、その隣りには石炭が岡のように盛つてある。なぜ松薪が山まつまきのようで、石炭が岡のようかと聞く人があるかも知れないが、別に意味も何もない、ただ

ちよつと山と岡を使い分けただけである。人間も米

を食つたり、鳥を食つたり、肴さかなを食つたり、獣けものを食

つたりいろいろの悪あくもの食いをしつくしたあげくつ

いに石炭まで食うように墮落したのは不憫ふびんである。

行き当りを見ると一間ほどの入口が明け放しになつ

て、中を覗のぞくとがんがらがんのがあんと物静かであ

る。その向側むこうがわで何かしきりに人間の声がする。いわ

ゆる洗湯はこの声の発する辺へんに相違ないと断定した

から、松薪と石炭の間に出て来る谷あいを通り抜け

て左へ廻つて、前進すると右手に硝子窓ガラスまどがあつて、

そのそとに丸い小桶こおけが三角形即ちピラミッドのごとすなわ

く積みかさねてある。丸いものが三角に積まれるの

は不本意千万だろうと、ひそかに小桶諸君の意を諒りよう

とした。小桶の南側は四五尺の間板あいだが余つて、あた

かも吾輩を迎うるもののごとく見える。板の高さは地面を去る約一メートルだから飛び上がるには御詔おあつらえの上等である。よろしいと云いながらひらりと身を躍おどらすといわゆる洗湯は鼻の先、眼の下、顔の前にぶらついている。天下に何が面白いと云って、未いまだ食わざるものを食い、未だ見ざるものを見るほどの愉快はない。諸君もうちの主人のごとく一週三度

くらい、この洗湯界に三十分乃至四十分を暮すなら
いいが、もし吾輩のごとく風呂と云うものを見た事
がないなら、早く見るがいい。親の死目しにめに逢あわなく
てもいいから、これだけは是非見物するがいい。世
界広しといえどもこんな奇観きかんはまたとあるまい。

何が奇観だ？　何が奇観だつて吾輩はこれを口に

するを憚はばかるほどの奇観だ。この硝子窓ガラスまどの中にうじ

やうじや、があがあ騒いでいる人間はことごとく裸

体である。台湾の生蕃せいばんである。二十世紀のアダムで

ある。そもそも衣装いしょうの歴史を繙ひもとけば——長い事だか

らこれはトイフェルスドレック君に譲って、繙くだ

けはやめてやるが、——人間は全く服装で持つてる

のだ。十八世紀の頃大英国バスの温泉場においてボ

ー・ナツシが嚴重な規則を制定した時などは浴場内

で男女共肩から足まで着物でかくしたくらいである

。今を去る事六十年前^{ぜん}これも英国の去る都で图案学

校を設立した事がある。图案学校の事であるから、

裸体画、裸体像の模写、模型を買い込んで、ここ、

かしここに陳列したのはよかつたが、いざ開校式を挙

行する一段になって当局者を初め学校の職員が大困

却をした事がある。開校式をやるとすれば、市の淑

女を招待しなければならん。ところが当時の貴婦人
方の考によると人間は服装の動物である。皮を着た
猿の子分ではないと思っていた。人間として着物を
つけないのは象の鼻なきがごとく、学校の生徒なき
がごとく、兵隊の勇気なきがごとく全くその本体を
失ししている。いやしくも本体を失している以上は人
間としては通用しない、獸類である。たとい仮令模写模型

にせよ獸類の人間と伍するのは貴女の品位を害する

訳である。でありますから妾等しょうらは出席御断わり申す

と云われた。そこで職員共は話せない連中だとは思

ったが、何しろ女は東西両国を通じて一種の装飾品

である。米春こめつきにもなれん志願兵にもなれないが、開

校式には欠くべからざる化粧道具けしょうどうぐである。と云うと

ころから仕方がない、呉服屋へ行つて黒布くろぬのを三十五

反八分七買つて来て例の獸類の人間にことごとく着物
物をきせた。失礼があつてはならんと念に念を入れ
て顔まで着物をきせた。かようにしてようやくの事
とどこお
滞りなく式をすましたと云う話がある。そのくらい
衣服は人間にとって大切なものである。近頃は裸体
画裸体画と云つてしきりに裸体を主張する先生もあ
るがあれはあやまつている。生れてから今日に至る
こんにち

まで一日も裸体になつた事がない吾輩から見ると、

どうしても間違っている。裸体は希臘ギリシヤ、羅馬ローマの遺風

が文芸復興時代の淫靡いんぴの風ふうに誘われてから流行はやりだ

したもので、希臘人や、羅馬人は平常ふだんから裸体を見み

做なれていたのだから、これをもつて風教上の利害の

関係があるなどとは毫ちようも思い及ばなかつたのだらう

が北歐は寒い所だ。日本でさえ裸で道中になるもの

かと云うくらいだから独逸ドイツや英吉利イギリスで裸になつてお

れば死んでしまふ。死んでしまつてはつまらないか

ら着物をきる。みんなが着物をきれば人間は服装の

動物になる。一たび服装の動物となつた後のちに、突然

裸体動物に出逢えば人間とは認めない、けだもの獣と思う。

それだから歐洲人ことに北方の歐洲人は裸体画、裸
体像をもつて獣として取り扱つていいのである。猫

に劣る獣と認定していいのである。美しい？　美し

くても構わんから、美しい獣と見^{みな}做せばいいのである

る。こう云うと西洋婦人の礼服を見たかと云うもの

もあるかも知れないが、猫の事だから西洋婦人の礼

服を拝見した事はない。聞くとところによると彼等は

胸をあらわし、肩をあらわし、腕をあらわしてこれ

を礼服と称しているそうだ。怪^けしからん事だ。十四

世紀頃までは彼等の出で立ち^{いた}はしかく滑稽ではなかつた、やはり普通の人間の着るものを着ておつた。

それがなぜこんな下等な軽術師流^{かるわざし}に転化してきたか

は面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知らぬもの

は知らん顔をしておればよろしかろう。歴史はとに

かく彼等とはかかる異様な風態をして夜間だけは得々^{とくとく}

たるにも係わらず内心は少々人間らしいところもある

ると見えて、日が出ると、肩をすぼめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくしてしまふのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考えている。これで考えても彼等の礼服なるものは一種の頓珍漢的作用とんちんかんできさようによつて、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだと言ふ事が分る。それが口惜くやしければ日中にっちゅうでも肩と胸と腕を出して

いて見るがいい。裸体信者だってその通りだ。それほど裸体がいいものなら娘を裸体にして、ついでに自分も裸になつて上野公園を散歩でもするがいい、できない？　出来ないのではない、西洋人がやらないから、自分もやらないのだらう。現にこの不合理極まる礼服を着て威張つて帝国ホテルなどへ出懸^{でか}けるではないか。その因縁^{いんねん}を尋ねると何にもない。た

だ西洋人がきるから、着ると云うまでの事だろう。

西洋人は強いから無理でも馬鹿氣ていても真似なければやり切れないのだろう。長いものには捲まかれろ

、強いものには折れろ、重いものには圧おされろと、

そうれろ、尽しでは氣が利きかんではないか。氣が利きか

んでも仕方がないと云うなら勘弁するから、あまり

日本人をえらい者と思つてはいけない。学問といえ

どもその通りだがこれは服装に關係がない事だから
以下略とする。

衣服はかくのごとく人間にも大事なものである。

人間が衣服か、衣服が人間かと云うくらい重要な条件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、単に衣服の歴史であると申したいくらいだ。だから衣服を着けない人

間を見ると人間らしい感じがしない。まるで化物にばけもの

かいこう

邂逅したようだ。化物でも全体が申し合せて化物に

なれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だから構

わんが、それでは人間自身が大に困却おおいする事になる

ばかりだ。その昔むかし自然は人間を平等なるものに製

ほう

造して世の中に抛り出した。だからどんな人間でも

あかはだか

生れるときは必ず赤裸である。もし人間の本性ほんせいが平

等に安んずるものならば、よろしくこの赤裸のまま
で生長してしかるべきだろう。しかるに赤裸の一人
が云うにはこう誰も彼も同じでは勉強する甲斐^{かい}がな
い。骨を折った結果が見えぬ。どうかして、おれは
おれだ誰が見てもおれだと云うところが目につくよ
うにしたい。それについては何か人が見てあつと魂^{たま}
消^{まげ}る物をからだにつけて見たい。何か工夫はあるま

いかと十年間考えてようやく猿股さるまたを発明してすぐさ

まこれを穿はいて、どうだ恐れ入ったろうと威張って

そこいらを歩いた。これが今日こんにちの車夫の先祖である

。単簡たんかんなる猿股を発明するのに十年の長日月を費ついや

したのはいささか異いな感もあるが、それは今日から

古代に溯さかのぼって身を蒙昧もうまいの世界に置いて断定した結論

と云うもので、その当時にこれくらいな大発明はな

かつたのである。デカルトは「余は思考す、故に余は存在す」という三つ子^{みご}にでも分るような真理を考え出すのに十何年か懸ったそうだ。すべて考え出す時には骨の折れるものであるから猿股の発明に十年を費やしたって車夫の智慧^{ちえ}には出来過ぎると云わねばなるまい。さあ猿股が出来ると世の中で幅のきくのは車夫ばかりである。あまり車夫が猿股をつけて

天下の大道を我物顔に横行濶歩かつぽするのを憎らしいと

思つて負けん気の化物が六年間工夫して羽織と云う

無用の長物を発明した。すると猿股の勢力は頓とみに衰

えて、羽織全盛の時代となつた。八百屋、生薬屋きぐすりや、

呉服屋は皆この大発明家の末流ぼつりゆうである。猿股期、羽

織期あとの後に来るのが袴期はかまきである。これは、何だ羽織

の癖かんしやくにと癩癩かんしやくを起した化物の考案になつたもので、

昔の武士今の官員などは皆この種属である。かように化物共がわれもわれもと異いを銜てらい新しんを競きそつて、ついに燕つばめの尾にかたどつた畸形きけいまで出現したが、退いてその由来を案ずると、何も無理矢理に、出鱈目でたらめに、偶然に、漫然に持ち上がった事実では決してない。皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝こつてさまざまのしんがた新形となつたもので、おれは手前じゃないぞと振

れてあるく代りに被^{かぶ}つていのである。して見ると

この心理からして一大発見が出来る。それはほかで

もない。自然は真空を忌^いむごとく、人間は平等を嫌

うと云う事だ。すでに平等を嫌ってやむを得ず衣服

を骨肉のごとくかようにつけ纏^{まと}う今日において、こ

の本質の一部分たる、これ等を打ちやって、元の奎^も

阿弥^{くあみ}の公平時代に帰るのは狂人の沙汰である。よし

狂人の名称を甘んじても歸る事は到底出来ない。歸

った連中をかいめいじん開明人の目から見れば化物である。仮令たとい

世界何億万の人口を挙あげて化物の域に引ずりおろし

てこれなら平等だろう、みんなが化物だから恥ずか

しい事はないと安心してもしやっぱり駄目である。世

界が化物になった翌日からまた化物の競争が始まる

。着物をつけて競争が出来なければ化物なりで競争

をやる。あかはだか赤裸は赤裸でどこまでも差別を立ててくる

。この点から見ても衣服はとうてい脱ぐ事は出来な
いものになっている。

しかるに今吾輩が眼下がんかに見下みおろした人間の一団体は

、この脱ぐべからざる猿股も羽織も乃至袴ないしはかまもことごと

とく棚の上に上げて、無遠慮にも本来の狂態を衆目しゅうも

環視くかんしの裡うちに露出して平々然へいへいぜんと談笑を縦ほしいままにしている

吾輩が先刻さつき一大奇観と云つたのはこの事である。

吾輩は文明の諸君子のためにここに謹つつしんでその一般を紹介するの榮を有する。

何だかごちやごちやして何なにから記述してい

いか分らない。化物のやる事には規律がないから秩

序立った証明をするのに骨が折れる。まず湯槽ゆぶねから

述べよう。湯槽だか何だか分らないが、おおかた大方湯槽と

いうものだろうと思うばかりである。幅が三尺くら

ながさ

い、長は一間半もあるか、それを二つに仕切って一

つには白い湯が這入はいっている。何でも薬湯くすりゆとか号す

るのだそうで、石灰いしばいを溶かし込んだような色に濁っ

ている。もっともただ濁っているのではない。膏あぶらぎ

って、重たげ気に濁っている。よく聞くと腐って見え

るのも不思議はない、一週間に一度しか水を易かえな

いのだそうだ。その隣りは普通一般の湯の由だがこ

れまたもって透明、瑩徹えいてつなどとは誓って申されない

。天水桶を攪かき混ぜまたくらいの価値はその色の上に

おいて充分あらわれている。これからが化物の記述

だ。大分骨だいぶが折れる。天水桶の方に、突っ立ってい

る若造わかぞうが二人いる。立ったまま、向い合って湯をざ

ぶざぶ腹の上へかけている。いい慰なぐさみだ。双方共色

の黒い点において間然かんぜんするところなきまでに発達し

ている。この化物は大分だいぶん逞ましいなと見ていると、

やがて一人が手拭で胸のあたりを撫なで廻しながら

「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえが何だろ

う」と聞くと金さんは「そりや胃さ、胃て云う奴は

命をとるからね。用心しねえとあぶないよ」と熱心

に忠告を加える。「だってこの左の方だぜ」た左肺さはい

の方を指す。「そこが胃だあな。左が胃で、右が肺

だよ」「そうかな、おらあまた胃はここいらかと思

った」と今度は腰の辺を叩いて見せると、金さんは

「そりや疝気だあね」と云った。ところへ二十五六

の薄い髯を生やした男がどぶんと飛び込んだ。する

と、からだに付いていた石鹼が垢と共に浮きあがる

。鉄気のある水を透かして見た時のようにきらきら

と光る。その隣りに頭の禿はげた爺さんが五分刈とらを捕とらえて何か弁じている。双方共頭だけ浮かしているのみだ。「いやこう年をとっては駄目さね。人間もやきが廻まわつちや若い者には叶かなわないよ。しかし湯だけは今でも熱いのではないと心持が悪くてね」「旦那なにか丈夫なものですぜ。そのくらい元気がありや結構だ」「元気もないのさ。ただ病気をしないだけさ

。人間は悪い事さえしなけりやあ百二十までは生きるもんだからね」「へえ、そんなに生きるもんですか」「生きるとも百二十までは受け合う。ごいつしんまえ御維新前

牛込に曲淵まがりぶちと云う旗本はたもとがあつて、そこにいた下男は

百三十だったよ」「そいつは、よく生きたもんです

ね」「ああ、あんまり生き過ぎてつい自分の年を忘れてね。百までは覚えていましたがそれから忘れて

しまいましたと云つてたよ。それでわしの知つていたのが百三十の時だったが、それで死んだんじやない。それからどうなつたか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と云いながら槽ふねから上あがる。髯ひげを生はやしている男は雲母きららのようなものを自分の廻まりに蒔まき散らしながら独ひとりでにやにや笑つていた。入れ代つて飛び込んで来たのは普通一般の化物と

は違つて背中に模様画をほり付けている。岩見重太

ろう だいとう

郎が大刀を振り翳して蟒を退治るところのようだが

かざ うわばみ たいじ

惜しい事に未だ竣功の期に達せんので、蟒はどこ

ま しゅんこう

にも見えない。従つて重太郎先生いささか拍子抜け

の気味に見える。飛び込みながら「篋棒に温るいや

べらぼう ぬ

」と云つた。するとまた一人続いて乗り込んだのが

「こりやどうも……もう少し熱くなくっちゃあ」と

顔をしかめながら熱いのを我慢する気色けしきとも見えた

が、重太郎先生と顔を見合せて「やあ親方」と挨拶あいさつ

をする。重太郎は「やあ」と云ったが、やがて「民

さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、じゃん

じやんが好きだからね」「じゃんじやんばかりじや

ねえ……」「そうかい、あの男も腹のよくねえ男だ

からね。——どう云うもんか人に好かれねえ、——

どう云うものだか、——どうも人が信用しねえ。職人てえものは、あんなもんじやねえが」「そうよ。

民さんなんざあ腰が低いんじやねえ、頭ずが高たけえん

だ。それだからどうも信用されねえんだね」「本当によ。あれで一いっぱし腕があるつもりだから、——

つまり自分の損だあな」「白銀町しろかねちょうにも古い人が亡なく

なつてね、今じや桶屋おけやの元さんと煉瓦屋れんがやの大将と親

方ぐれえな者だあな。こちとらあこうしてここで生れたもんだが、民さんなんざあ、どこから来たんだか分りやしねえ」「そうよ。しかしよくあれだけになったよ」「うん。どう云うもんか人に好かれねえ。人が交際つきあわねえからね」と徹頭徹尾民さんを攻撃する。

天水桶はこのくらいにして、白い湯の方を見ると

これはまた非常な大入で、湯の中に人が這入はいつてゐる

と云わんより人の中に湯が這入つてると云う方が適

当である。しかも彼等はすこぶる悠々閑々ゆうゆうかんかんたる物で

先刻さつきから這入るものはあるが出る物は一人もない

。こう這入った上に、一週間もとめておいたら湯も

よごれるはずだと感心してなおよく槽おけの中を見渡す

と、左の隅にお圧しつけられて苦沙弥先生が真赤まっかにな

ってすくんでいる。可哀かわいそうに誰か路をあけて出し

てやればいいのに思うのに誰も動きそうにもしなければ、主人も出ようとする気色けしきも見せない。ただ

じつとして赤くなっているばかりである。これはご

苦勞な事だ。なるべく二錢五厘の湯錢を活用しよう

と云う精神からして、かように赤くなるのだろうが

、早く上がらんと湯氣ゆけにあがるがと主思しゅうおもいの吾輩は

窓の棚たなから少なからず心配した。すると主人の一軒

置いて隣りに浮いてる男が八の字を寄せながら「こ

れはちと利きき過ぎるようだ、どうも背中せなかの方から熱

い奴がじりじり湧わいてくる」と暗に列席の化物に同

情を求めた。「なあにこれがちようどいい加減です

。薬湯はこのくらいでないと利ききません。わたしの

国なぞではこの倍も熱い湯へ這入ります」と自慢ら

しく説き立てるものがある。「一体この湯は何に利

くんでしよう」と手拭をたた畳んで凸凹頭をかくした男

が一同に聞いて見る。「いろいろなものに利きます

よ。何でもいいてえんだからね。豪気だごうぎあね」と云

ったのは瘠やせた黄瓜きゅうりのような色と形とを兼ね得たる

顔の所有者である。そんなに利く湯なら、もう少し

は丈夫そうになれそうなものだ。「薬を入れ立てよ

り、三日目か四日目がちようどいいようです。今日きょう

等などは這入り頃ですよ」と物知り顔に述べたのを見る

と、膨ふくれ返った男である。これは多分垢肥あかぶとりだろう

。「飲んでも利きましようか」とどこからか知らな

いが黄色い声を出す者がある。「冷ひえた後あとなどは一

杯飲んで寝ると、奇きた体たいに小便に起きないから、まあ

やって御覧なさい」と答えたのは、どの顔から出た

声か分らない。

湯槽ゆぶねの方はこれぐらいにして板間いたまを見渡すと、い

るわいるわ絵にもならないアダムがずらりと並んで

各勝手次第おのおのな姿勢で、勝手次第なところを洗ってい

る。その中にもつとも驚ろくべきのは仰向けあおもむに寝て

、高い明かり取あとりを眺ながめているのと、腹這はらばいになつて

、溝みぞの中を覗のぞき込んでいる両アダムである。これは

よほど閑なアダムと見える。ひま坊主が石壁を向いてし

やがんでいると後ろうしから、小坊主がしきりに肩を叩たた

いている。これは師弟の關係上三介さんすけの代理を務つとめる

のである。本当の三介もいる。風邪かぜを引いたと見

えて、このあついのにちゃんちゃんを着て、小判形こばんなり

の桶おけからざあと旦那の肩へ湯をあびせる。右の足を

見ると親指の股に呉ごろ紹あかすの垢はさ擦りを挟んでいる。こち

こおけ

らの方では小桶を慾張つて三つ抱え込んだ男が、隣

シャボン

りの人に石鹼を使え使えと云いながらしきりに長談

議をしている。何だろうと聞いて見るとこんな事を

言っていた。「鉄砲は外国から渡つたもんだね。昔

は斬り合いばかりさ。外国は卑怯だからね、それで

あんなものが出来たんだ。どうも支那じゃねえよう

だ、やっぱり外国のようだ。和唐内わとうないの時にや無かつ

たね。和唐内はやはり清和源氏さ。なんでも義経が

えぞ

蝦夷から満洲へ渡った時に、蝦夷の男で大変学がくので

きる人がくっ付いて行つたてえ話しだね。それでそ

たいみん

の義経のむすこが大明を攻めたんだが大明じゃ困る

から、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借かし

さんだいさま

てくれると云うと、三代様がそいつを留めておいて

歸さねえ。――何とか云つたつけ。――何でも何と

か云う使だ。――それでその使を二年とめておいて

しまいじょうろに長崎で女郎を見せたんだがね。その女郎に

出来た子が和唐内さ。それから国へ帰って見ると大

明は国賊に亡ぼされていた。……」何を云うのかさ

っぱり分らない。その後ろうしに二十五六の陰気な顔を

した男が、ぼんやりして股の所を白い湯でしきりに

たでている。腫物はれものか何かで苦しんでいると見える。

その横に年の頃は十七八で君とか僕とか生意気な事をべらべら喋舌しゃべつてるのはこの近所の書生だろう。

そのまた次に妙な背中せなかが見える。尻の中から寒竹かんちくを

押し込んだように背骨せぼねの節が歴々ありありと出ている。そう

してその左右に十六むさしに似たる形が四個ずつ行

儀よく並んでいる。その十六むさしが赤く爛ただれて周ま

囲わりに膿うみをもっているのもある。こう順々に書いてく

ると、書く事が多過ぎて到底吾輩の手際にはその一てぎわいっ

斑ばんさえ形容する事が出来ん。これは厄介な事をやり

始めた者だと少々辟易へきえきしていると入口の方に浅黄木あさぎも

綿めんの着物をきた七十ばかりの坊主がぬつと見われたあら

坊主は恭うやうやしくこれらの裸体の化物に一礼して「へ

い、どなた様も、毎日相変らずありがとうございます存じます

。今日は少々御寒うございますから、どうぞ御ごゆっ緩く

り——どうぞ白い湯へ出たり這入^{はい}ったりして、ゆる

りと御あつたまり下さい。——番頭さんや、どうか

湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく述べ立て

た。番頭さんは「おーい」と答えた。和唐内は「愛^{あい}

嬌^{きよう}ものだね。あれでなくては商買^{しょうばい}は出来ないよ」と

おおい

大に爺さんを激賞した。吾輩は突然この異^いな爺さん

に逢つてちよつと驚ろいたからこつちの記述はその

ままにして、しばらく爺さんを専門に観察する事にした。爺さんはやがて今上り^{あが}立て^たの四つばかりの男の子を見て「坊ちゃん、こちらへおいで」と手を出す。小供は大福を踏み付けたような爺さんを見て大変だと思つたか、わーっと悲鳴を揚げ^あてなき出す。爺さんは少しく不本意の気味で「いや、御泣きか、なに？　爺さん^{こわ}が恐い？　いや、これはこれは」と

感嘆した。仕方がないものだからたちまち機鋒きほうを転

じて、小供の親に向つた。「や、これは源さん。今

日は少し寒いな。ゆうべ、近江屋おうみやへ這入つた泥棒は

何と云う馬鹿な奴じやの。あの戸の潜くぐりの所を四角

に切り破つての。そうしてお前の。何も取らずに行い

んだげな。御巡りおまわりさんか夜番でも見えたものであるろ

う」と大に泥棒の無謀を憫笑おおいしたがまた一人を捉つら

まえて「はいはい御寒う。あなた方は、御若いから、あまりお感じにならんかの」と老人だけにただ一人寒がっている。

しばらくは爺さんの方へ氣を取られて他の化物の事は全く忘れていたのみならず、苦しそうにすくんでいた主人さえ記憶の中から消え去った時突然流しうちと板の間の間で大きな声を出すものがある。見る

まぎ

と紛れもなき苦沙弥先生である。主人の声の図抜け

て大いなるのと、その濁って聴き苦しいのは今日に

始まった事ではないが場所が場所だけに吾輩は少か

らず驚ろいた。これは正しく熱湯の中に長時間のあ

まぎ

うち

いだ我慢をして浸つておつたため逆上したに相違な

つか

ぎやくじょう

いと咄嗟の際に吾輩は鑑定をつけた。それも単に病

とっさ

気の所為なら咎むる事もないが、彼は逆上しながら

せい

とが

も充分本心を有しているに相違ない事は、何のため

にこの法外のどうまごえ胴間声を出したかを話せばすぐわかる

。彼は取るにも足らぬなまいき生意氣書生を相手におとなげ大人気も

ない喧嘩を始めたのである。「もつと下がれ、おれ

の小桶に湯が這はい入っていかん」と怒鳴るのは無論主

人である。物は見ようでもなるものだから、

この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要は

たかやまひこくろう

ない。万人のうちに一人くらいは高山彦九郎が山賊

を叱しつしたようだからに解釈してくれるかも知れん

。当人自身もそのつもりでやった芝居かも知らんが

、相手が山賊をもつて自みづからおらん以上は予期する結

果は出て来ないに極きまっている。書生は後うしろを振り返

って「僕はもとからここにいたのです」とおとなし

く答えた。これは尋常の答で、ただその地を去らぬ

事を示しただけが主人の思い通りにならなかったので、その態度と云い言語と云い、山賊として罵^{のの}り返すべきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分っているはずだ。しかし主人の怒号は書生の席そのものが不平なのではない、先刻^{さつき}からこの兩人は少年に似合わず、いやに高慢^{きま}ちきな、利^きいた風の事ばかり併^{なら}べていたので、始終それを聞かされた主人

は、全くこの点に立腹したものと見える。だから先方でおとなしい挨拶をしても黙って板の間へ上がりはせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の桶おけへ汚ない水をびちやびちや跳はねかす奴があるか」と喝かつし去った

。吾輩もこの小僧を少々心憎く思っていたから、この時心中にはちよつと快哉かいさいを呼んだが、学校教員たる主人の言動としては穩おだやかならぬ事と思つた。元来

主人はあまり堅過ぎていかん。石炭のたき殻見たよ

うにかさかさしてしかもいやに硬い。むかしハンニ

バルがアルプス山を超^こえる時に、路の真中に当って

大きな岩があつて、どうしても軍隊が通行上の不便

邪魔をする。そこでハンニバルはこの大きな岩へ醋^す

をかけて火を焚^たいて、柔かにしておいて、それから

鋸^{のこぎり}でこの大岩を蒲鉾^{かまぼこ}のように切つて滞^{とど}りなく通行を

したそうだ。主人のごとくこんな利^き目^{きめ}のある薬湯へ

煮^うだるほど這^{はい}入^いっても少しも機能のない男はやはり

醋^ひをかけて火炙^{あぶ}りにするに限ると思う。しからずん

ば、こんな書生が何百人出て来て、何十年かかった

って主人の頑^{がん}固^こは癒^{なお}りっこない。この湯槽^{ゆぶね}に浮いて

いるもの、この流しにごろごろしているものは文明

の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体である

から、無論常規常道をもつて律する訳にはいかん。

何をしたって構わない。肺の所に胃が陣取って、和唐内が清和源氏になつて、民さんが不信用でもよからう。しかし一たび流しを出て板の間に上がれば、

もう化物ではない。普通の人類の生息^{せいそく}する娑婆^{しゃば}へ出

たのだ、文明に必要なる着物をきるのだ。従つて人間らしい行動をとらなければならんはずである。今

主人が踏んでいるところは敷居である。流しと板の

間の境にある敷居の上であつて、当人はこれから歎かん

言愉色、げんゆしよく円えん転滑脱の世界に逆戻りをしようと言まう間

際ぎわである。その間際ですらかくのごとく頑固がんこである

なら、この頑固は本人にとって牢ろうとして抜くべから

ざる病気に相違ない。病気なら容易に矯正きようせいする事は

出来まい。この病気を癒なおす方法は愚考によるとただ

一つある。校長に依頼して免職して貰う事即ちこれ

すなわ

なり。免職になれば融通の利きかぬ主人の事だからき

つと路頭に迷うに極きまつてる。路頭に迷う結果はのた

れ死にをしなければならぬ。換言すると免職は主

人にとって死の遠因になるのである。主人は好んで

病氣をして喜こんでいるけれど、死ぬのは大嫌だいきらであ

る。死なない程度において病氣と云う一種の贅ぜい沢たくが

していたいのである。それだからそんなに病気をし
ていると殺すぞと嚇おどかせば臆病なる主人の事だから
びりびりと慄ふるえ上がるに相違ない。この慄え上がる
時に病気は奇麗に落ちるだろうと思う。それでも落
ちなければそれまでの事さ。

いかに馬鹿でも病気でも主人に变りはない。一飯いっばん
君恩を重んずと云う詩人もある事だから猫だって主

人の身の上を思わない事はあるまい。気の毒だと云う念が胸一杯になったため、ついそちらに気が取られて、流しの方の觀察を怠^{おこ}たっていると、突然白い湯槽^{ゆぶね}の方面に向つて口々に罵^{のの}る声が聞える。ここに
も喧嘩が起つたのかと振り向くと、狭い柘榴口^{ざくろぐち}に一^{いっ}
寸^{すん}の余地もないくらいに化物が取りついて、毛のあ
る脛と、毛のない股と入り乱れて動いている。折か

はつあき

ら初秋の日は暮るるになんなんとして流しの上は天

井まで一面の湯気が立て籠める。かの化物の犇く様ひしめさま

がその間から朦朧もうろうと見える。熱い熱いと云う声が吾

輩の耳を貫ぬつらいて左右へ抜けるように頭の中で乱れ

合う。その声には黄なものも、青いものも、赤いものも、

黒いものもあるが互に畳かさなりかかつて一種名状すべか

らざる音響を浴場内に漲みなぎらす。ただ混雑と迷乱とを

形容するに適した声と云うのみで、ほかには何の役

にも立たない声である。吾輩は茫然^{ぼうぜん}としてこの光景

に魅^み入^いられたばかり立ちすくんでいた。やがてわー

わーと云う声が混乱の極度に達して、これよりはも

う一步も進めぬと云う点まで張り詰められた時、突

然無茶苦茶に押し寄せ押し返している群^{むれ}の中から一

大長漢がぬっと立ち上がった。彼の身^みの丈^{たけ}を見ると

ほか

他の先生方よりはたしかに三寸くらいは高い。のみ

ならず顔から髯ひげが生はえているのか髯の中に顔が同居

しているのか分らない赤つらを反そり返して、日盛り

に破われ鐘かねをつくような声を出して「うめろうめろ、

熱い熱い」と叫ぶ。この声とこの顔ばかりは、かの

ふんぶん

もつ

紛々と纏もつれ合う群衆の上に高く傑出して、その瞬間

には浴場全体がこの男一人になったと思わるるほど

である。超人だ。ニーチエのいわゆる超人だ。魔中

の大王だ。化物の頭梁だ。とうりよう。と思つて見ていると湯槽ゆぶね

の後ろでうしおーいと答えたものがある。おやとまたも

そちらに眸をひとみそらすと、暗憺あんたんとして物色も出来ぬ中

に、例のちゃんちゃん姿の三介が砕けよと一塊りひとかたまの

石炭を竈かまどの中に投げ入れるのが見えた。竈の蓋ふたをく

ぐつて、この塊りがぱちぱちと鳴るときに、三介の

半面がぱつと明るくなる。同時に三介の後ろうしろにある

れんが

煉瓦の壁が暗やみを通して燃えるごとく光った。吾輩は

ものすこ

少々物凄くなつたから早々窓から飛び下りて家いえに帰

そうそう

る。帰りながらも考えた。羽織を脱ぎ、猿股を脱ぎ

はかま

袴はかまを脱いで平等になろうと力つとめる赤裸々の中には

また赤裸々の豪傑が出て来て他の群小を圧倒して

しまう。平等はいくらはだかになつたつて得られる

ものではない。

歸つて見ると天下は太平なもので、主人は湯上が

りの顔をテラテラ光らして晚餐ばんさんを食っている。吾輩

が椽側えんがわから上がるのを見て、のんきな猫だなあ、今

頃どこをあるいているんだろうと云つた。膳の上を

見ると、錢ぜにのない癖に二三品御菜おかずをならべている。

そのうちに着さかなの焼いたのが一疋びきある。これは何と称

する肴か知らんが、何でも昨日^{きのう}あたり御台場^{おだいば}近辺で

やられたに相違ない。肴は丈夫なものだと説明して

おいたが、いくら丈夫でもこう焼かれたり煮られた

りしてはたまらん。多病にして残喘^{ざんぜん}を保つ^{たも}方がよほ

ど結構だ。こう考えて膳^{そば}の傍に坐つて、隙^{すき}があつた

ら何か頂戴しようと、見るごとく見ざるごとく装^{よそお}つ

ていた。こんな装い方を知らないものはとうていう

あきら

まい肴は食えないと諦めなければいけない。主人は肴をちよつと突つついたが、うまくなないと云う顔付をして箸を置いた。はし正面に控ひかえたる妻君はこれまた無言のまま箸の上下に運動する様子、主人の両顎りょうがくの離合開闔の具合を熱心に研究している。

りごうかいごう

「おい、その猫の頭をちよつと撲ぶつて見ろ」と主人は突然細君に請求した。

「撲てば、どうするんですか」

「どうしてもいいからちよつと撲つて見ろ」

こうですかと細君は平手ひらてで吾輩の頭をちよつと敲たた

く。痛くも何ともない。

「鳴かんじやないか」

「ええ」

「もう一返ぺんやつて見ろ」

「何返やっただって同じ事じゃありませんか」と細君

また平手でほかと参る。^{まい}やはり何ともないから、じ

つとしていた。しかしその何のためたるやは智慮深

き吾輩には頓と^{とん}了解し難い。これが了解出来れば、

どうかこうか方法もあろうがただ撲つて見ろだから

、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。主人は

二度まで思い通りにならるので、少々焦れ^じ気味^{ぎみ}で

「おい、ちよつと鳴くようにぶつて見ろ」と云つた。

細君は面倒な顔付で「鳴かして何になさるんです

か」と問いながら、またぴしやりとおいでになつた

。こう先方の目的がわかれば訳はない、鳴いてさえ

やれば主人を満足させる事は出来るのだ。主人はか

くのごとく愚物ぐぶつだから厭いやになる。鳴かせるためなら

ためと早く云えば二返も三返も余計な手数てすうはしな

くてもすむし、吾輩も一度で放免になる事を二度も

三度も繰り返えされる必要はないのだ。ただ打ぶつて

見ろと云う命令は、打つ事それ自身を目的とする場

合のほかには用うべきものでない。打つのは向うの事

、鳴くのはこっちの事だ。鳴く事を始めから予期し

て懸って、ただ打つと云う命令のうちに、こっちの

随意たるべき鳴く事さえ含まつてるように考えるのは失敬千万だ。他人の人格を重んぜんと云うものだ。猫を馬鹿にしている。主人の蛇蝎だかつのごとく嫌う金田君ならやりそうな事だが、赤裸々をもつて誇る主人としてはすこぶる卑劣である。しかし実のところ主人はこれほどけちな男ではないのである。だから主人のこの命令は狡猾こうかつの極ぎよくに出いでたのではない。つ

まり智慧ちえの足りないところから湧わいた子子ぼうふらのような

ものと思惟しする。飯を食えば腹が張るに極きまってい

る。切れば血が出るに極きまっている。殺せば死ぬに極

まっている。それだから打ぶてば鳴くに極きまっていると

速断をやったんだろう。しかしそれはお気の毒だが

少し論理に合わない。その格で行くと川へ落ちれば

必ず死ぬ事になる。天麩羅てんぷらを食えば必ず下痢げりする事

になる。月給をもらえば必ず出勤する事になる。書物を読めば必ずえらくなる事になる。必ずそうなたては少し困る人が出来てくる。打てば必ずなかなかければならんとなると吾輩は迷惑である。目白の時の鐘と同一に見^{みな}儼されては猫と生れた甲斐^{かい}がない。ま^へず腹の中でこれだけ主人を凹^{へこ}ましておいて、しかる後にやゝと注文通り鳴いてやった。

すると主人は細君に向つて「今鳴いた、にやあと云う声は感投詞か、副詞か何だか知つてるか」と聞いた。

細君はあまり突然な問なので、何にも云わない。

実を云うと吾輩もこれは洗湯の逆上がまださめないためだろうと思つたくらいだ。元来この主人は近所

合壁有名な変人で現にある人はたしかに神経病だと

がっぺき

きんじよ

まで断言したくらいである。ところが主人の自信は
えらいもので、おれが神経病じゃない、世の中の奴
が神経病だと頑張がんばっている。近辺のものが主人を犬
々と呼ぶと、主人は公平を維持するため必要だとか
号して彼等を豚々ぶたぶたと呼ぶ。実際主人はどこまでも公
平を維持するつもりらしい。困ったものだ。こう云
う男だからこんな奇問を細君むかに対つて呈出するの

主人に取つては朝食前あさめしまえの小事件かも知れないが、

聞く方から云わせるとちよつと神経病に近い人の云
いそうな事だ。だから細君は煙けむに捲まかれた気味で何
とも云わない。吾輩は無論何とも答えようがない。
すると主人はたちまち大きな声で

「おい」と呼びかけた。

細君は吃驚びっくりして「はい」と答えた。

「そのはいは感投詞か副詞か、どっちだ」

「どっちですか、そんな馬鹿氣た事はどうでもいい
じゃありませんか」

「いいものか、これが現に国語家の頭脳を支配して
いる大問題だ」

「あらまあ、猫の鳴き声ですか、いやな事ねえ。

だって、猫の鳴き声は日本語じゃあないじゃありません

せんか」

「それだからさ。それがむずかしい問題なんだよ。

比較研究と云うんだ」

「そう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。「それで、どっちだか分ったんですか」

「重要な問題だからそう急には分らんさ」と例の肴さかな

をむしやむしや食う。ついでにその隣にある豚と芋いも

のにころばしを食う。「これは豚だな」「ええ豚で

ござんす」「ふん」と大だい軽蔑けいべつの調子をもつて飲み込

んだ。「酒をもう一杯飲もう」と杯さかずきを出す。

「今夜はなかなかあがるのね。もう大分だいぶん赤くなつて

いらつしやいますよ」

「飲むとも——御前世界で一番長い字を知ってるか

「ええ、前のさき関白太政大臣でしょう」

「それは名前だ。長い字を知ってるか」

「字って横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、——御酒はもういいでしょう、これで御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教えてやろうか」

「ええ。そうしたら御飯ですよ」

「A r c h a i o m e l e s i d o n o p h r u n

i c h e r a t a と云う字だ」

「出鱈目でたらめでしょう」

「出鱈目なものか、ギリシヤ語希臘語だ」

「何という字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。ただ綴り^{つづ}だけ知ってるんだ。長く書くとは六寸三分くらいにかける」

他人なら酒の上で云うべき事を、正気で云っているところがすこぶる奇観である。もつとも今夜に限って酒を無暗^{むやみ}にのむ。平生なら猪口^{ちよこ}に二杯ときめているのを、もう四杯飲んだ。二杯でも随分赤くなるところを倍飲んだのだから顔が焼火箸^{やけひばし}のようにはて

つて、さも苦しそうだ。それでもまだやめない。

「もう一杯」と出す。細君はあまりの事に

「もう御よしになつたら、いいでしょう。苦しいば

かりですわ」と苦々しい顔をにがにがする。

「なに苦しくつてもこれから少し稽古するんだ。大おお

町桂月まちけいげつが飲めと云った」

「桂月って何です」さすがの桂月も細君に逢つては

一文の価値いちもんもない。

「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云うのだからいいに極きまっているさ」

「馬鹿をおっしやい。桂月だって、梅月だって、苦しい思をして酒を飲めなんて、余計な事ですわ」

「酒ばかりじゃない。交際をして、道楽をして、旅行をしろといった」

「なおわるいじやありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道楽をすすめるなんて……」

「道楽もいいさ。桂月が勧めなくつても金さえあればやるかも知れない」

「なくつて仕合せだわ。今から道楽なんぞ始められちやあ大変ですよ」

「大變だと云うならよしてやるから、その代りもう
少^{おつと}し夫を大事にして、そうして晩に、もつと御馳走
を食わせろ」

「これが精一杯のところですよ」

「そうかしらん。それじゃ道楽は追つて金が這^{はい}入り
次第やる事にして、今夜はこれでやめよう」と飯茶
碗を出す。何でも茶漬を三ぜん食ったようだ。吾輩

はその夜豚肉三片よみきれと塩焼の頭を頂戴した。

八

垣巡かきめぐりと云いう運動を説明した時に、主人の庭を結ゆ

い繞めぐらしてある竹垣の事をちよつと述べたつもりで

あるが、この竹垣の外がすぐ隣家、即ち南隣みなみとなりの次郎じろ

ちゃんと思つては誤解である。家賃は安いがそ

こは苦沙弥先生である。与よつちちゃんや次郎ちゃんな

どと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄っ片ぺら

な垣一重を隔てて御隣り同志の親密なる交際は結ん

でおらぬ。この垣の外は五六間の空地あきちであつて、そ

の尽くるところに檜ひのきが蓊然こんもりと五六本併ならんでいる。椽えん

側がわから拝見すると、向うは茂った森で、ここに往む

先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月を

じつげつ

こうこ

しよし

送る江湖の処士であるかのごとき感がある。但し檜

ただ

ふいちよう

の枝は吹聴するごとく密生しておらんで、その間

あいだ

ぐんかくかん

から群鶴館という、名前だけ立派な安下宿の安屋根

が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するのに

はよほど骨の折れるのは無論である。しかしこの下

きよ

がりようくつ

宿が群鶴館なら先生の居はたしかに臥竜窟くらいな

価値はある。名前に税はかからんから御互にえらそうな奴を勝手次第に付ける事として、この幅五六間の空地が竹垣を添うて東西に走る事約十間、それから、たちまち鉤かぎの手に屈曲して、臥竜窟の北面を取り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来なら空地を行き尽してまたあき地、とか何とか威張つてもいいくらいに家の二側ふたがわを包んでいるのだが、臥が

ようくつ

れいびよう

竜窟の主人は無論窟内の靈猫たる吾輩すらこのあき
地には手こずっている。南側に檜ひのきが幅を利きかしてい
るごとく、北側には桐きりの木が七八本行列している。

もう周囲一尺くらいにのびているから下駄屋さえ連
れてくればいい価ねになるんだが、借家しゃくやの悲しさには
、いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対して
も気の毒である。せんだって学校の小使が来て枝を

一本切つて行つたが、そのつぎに來た時は新らしい

まないたげた

は

桐の俎下駄を穿いて、この間の枝でこしらえました

ふいちよう

と、聞きもせんのに吹聴していた。ずるい奴だ。桐

はあるが吾輩及び主人家族にとつては一文にもなら

いだ

ない桐である。玉を抱いて罪ありと云う古語がある

は

ぜに

そうだが、これは桐を生やして錢なしと云つてもし

ぐさ

かるべきもので、いわゆる宝の持ち腐れである。愚

ぐ

なるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主やぬしの伝

兵衛である。いないかな、いないかな、下駄屋はい

ないかなと桐の方で催促しているのに知らん面かおをし

て屋賃やちんばかり取り立てにくる。吾輩は別に伝兵衛に

恨うらみもないから彼の悪口あっこうをこのくらいにして、本題に

戻ってこの空地あきちが騒動の種であると云う珍譚ちんだんを紹介

仕つかまつるが、決して主人にいつてはいけない。これぎり

の話しである。そもそもこの空地に関して第一の不都合なる事は垣根のない事である。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地である。

あると云うと嘘をつくようではない。実を云うとあつたのである。しかし話しは過去へ溯さかのぼらんと

原因が分からない。原因が分からないと、医者でも

処方しよほうに迷惑する。だからここへ引き越して来た当時

からゆつくりと話し始める。吹き通しも夏はせいせいして心持ちがいいものだ、不用心だつて金のないところに盗難のあるはずはない。だから主人の家に、あらゆる塀^{へい}、垣^{ないし}、乃至は乱杭^{らんぐい}、逆茂木^{さかもぎ}の類は全く不要である。しかしながらこれは空地の向うに住居^{すまい}する人間もしくは動物の種類如何^{いかに}によつて決せらるる問題であらうと思う。従つてこの問題を決するた

めには勢い向う側に陣取っている君子の性質を明かにせんければならん。人間だか動物だか分らない先に君子と称するのははなはだ早計のようではあるが大抵君子で間違はない。りようじよう梁上の君子などと云つて泥棒さえ君子と云う世の中である。但しただこの場合における君子は決して警察の厄介になるような君子ではない。警察の厄介にならない代りに、数でこなした

者と見えて沢山いる。うじやうじやいる。落雲館と

らくうんかん

称する私立の中学校——八百の君子をいやが上に君子に養成するために毎月二円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だから風流な君子ばかりかと思ふと、それがそもそもの間違になる。その信用すべからざる事は群鶴館ぐんかくかんに鶴の下りざるごとく、臥竜窟に猫がいるようなものである。学士とか教師とか

号するものに主人苦沙弥君のごとき氣違のある事を
知った以上は落雲館の君子が風流漢ばかりでないとい
云う事がわかる訳だ。わけそれがわからんと主張するな
らまず三日ばかり主人のうちへ宿りとまに来て見るがい
い。

前申ぜんすごとく、ここへ引き越しの当時は、例の空あ
地きちに垣がないので、落雲館の君子は車屋の黒のごと

く、のそのそと桐畠きりばたけに這入り込んできて、話をする

、弁当を食う、笹ささの上に寝転ぶ——いろいろの事を

やったものだ。それから**は**弁当の死骸すなわ即ち竹の皮、

古新聞、あるいは古草履ふるぞうり、古下駄、ふると云う名の

つくものを大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる主

人は存外平気に構えて、別段抗議も申し込まずに打

ち過ぎたのは、知らなかったのか、知っても咎とがめん

つもりであつたのか分らない。ところが彼等諸君子は学校で教育を受くるに従つて、だんだん君子らしくなつたものと見えて、次第に北側から南側の方面へ向けて蚕食を企だてて来た。蚕食と云う語が君子さんしょくに不似合ならやめてもよろしい。但しただほかに言葉がすいそうないのである。彼等は水草を追うて居を變ずる沙漠さばくの住民のごとく、桐きりの木を去つて檜ひのきの方に進んで来

た。檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆な
る君子でなければこれほどの行動は取れんはずであ
る。一兩日の後彼等のちの大胆はさらに一層の大を加え
て大々胆だいたいたんとなつた。教育の結果ほど恐しいものはな
い。彼等は単に座敷の正面に逼せまるのみならず、この
正面において歌をうたいだした。何と云う歌か忘れ
てしまつたが、決して三十一文字みそひともしの類たぐいではない、も

かつぱつ

つと活澆で、もつと俗耳ぞくじに入り易やすい歌であつた。驚

ろいたのは主人ばかりではない、吾輩までも彼等君

たんぷく

子の才芸に嘆服して覚えず耳を傾けたくらいである

。しかし読者もご案内であろうが、嘆服と云う事と

邪魔と云う事は時として両立する場合がある。この

はか

両者がこの際はか図らずも合して一となつたのは、今か

ら考えて見ても返す返す残念である。主人も残念で

あつたろうが、やむを得ず書齋から飛び出して行つて、ここは君等の這入る所ではない、出給えと云つて、二三度追い出したようだ。ところが教育のある君子の事だから、こんな事でおとなしく聞く訳がない。追い出されればすぐ這入る。這入れば活潑なる歌をうたう。高声こうせいに談話をする。しかも君子の談話だから一風違いっふうつて、おめえだの知らねえのと云う。

そんな言葉は御維新前ごいつしんまえは折助おりすけと雲助くもすけと三助さんすけの専門的

知識に属していたそうだが、二十世紀になつてから

教育ある君子の学ぶ唯一の言語であるそうだ。一般

から軽蔑けいべつせられたる運動が、かくのごとく今日こんにち歓迎

せらるるようになったのと同じの現象だと説明した

人がある。主人はまた書斎から飛び出してこの君子

流の言葉にもっとも堪能かんのうなる一人を捉つかまえて、なぜ

ここへ這入るかと詰問したら、君子はたちまち「おめえ、知らねえ」の上品な言葉を忘れて「ここは学校の植物園かと思いました」とすこぶる下品な言葉で答えた。主人は将来を戒めて^{いまし}放してやった。放してやるのは亀の子のようでおかしいが、実際彼は君子の袖を^{そで}捉えて^{とら}談判したのである。このくらいやかましく云ったらもうよかろうと主人は思っていたそ

うだ。ところが實際は女媧氏じよかしの時代から予期と違ふ

もので、主人はまた失敗した。今度は北側から邸内を横断して表門から抜ける、表門をがらりとあけるから御客かと思うと桐畠の方で笑う声がする。形勢はますます不穩である。教育の功果はいよいよ顕著になってくる。気の毒な主人はこいつは手に合わんと、それから書齋へ立て籠こもつて、恭うやうやしく一書を落雲

館校長に奉つて、少々御取締をと哀願した。校長も

ていちょう

鄭重なる返書を主人に送つて、垣をするから待つて

くれと云つた。しばらくすると二三人の職人が来て

半日ばかりの間に主人の屋敷と、落雲館の境に、高

さ三尺ばかりの四つ目垣が出来上がった。これでよ

うよう安心だと主人は喜こんだ。主人は愚物である

。このくらいの事で君子の挙動の変化する訳がない

全体人にからかうのは面白いものである。吾輩の
ような猫ですら、時々は当家の令嬢にからかって遊
ぶくらいだから、落雲館の君子が、氣の利きかない苦
沙弥先生にからかうのは至極しごくもつともなところで、
これに不平なのは恐らく、からかわれる当人だけで
あろう。からかうと云う心理を解剖して見ると二つ

の要素がある。第一からかわれる当人が平気ですましていてはならん。第二からかう者が勢力において人数において相手より強くなくてはいかん。この間主人が動物園から帰って来てしきりに感心して話した事がある。聞いて見ると駱駝らくだと小犬の喧嘩を見たのだそうだ。小犬が駱駝の周囲を疾風のごとく廻転して吠え立ほてると、駱駝は何の気もつかずに、依然

として背^せ中^{なか}へ瘤^{こぶ}をこしらえて突つ立つたままである

そうだ。いくら吠えても狂つても相手にせんので、

しまいには犬も愛^{あい}想^{そう}をつかしてやめる、実に駱駝は

無神経だと笑つていたが、それがこの場合の適例で

ある。いくらからかうものが上手でも相手が駱駝と

来ては成立しない。さればと云つて獅^し子^しや虎^{とら}のよう

に先方が強過ぎてても者にならん。からかいかけるや

否や八つ裂きにされてしまふ。からかうと齒をむき

出して怒る、怒る事は怒るが、こつちをどうする事

も出来ないと云う安心のある時に愉快は非常に多い

ものである。なぜこんな事が面白いと云うとその理

由はいろいろある。まずひまつぶしに適している。

退屈な時には髯ひげの数さえ勘定して見たくなる者だ。

昔むかし獄に投ぜられた囚人の一人は無聊ぶりようのあまり、房へや

の壁に三角形を重ねて画かいてその日をくらしたと云う話がある。世の中に退屈ほど我慢の出来にくいものはない、何か活気を刺激する事件がないと生きていくのがつらいものだ。からかうと云うのもつまりこの刺激を作つて遊ぶ一種の娯楽である。但ただし多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかしくはなく、では刺激にならんから、昔しからかうと云う娯

樂に耽^{ふけ}るものは人の氣を知らない馬鹿大名のような

退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は考う

るに暇^{いとま}なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活氣の使

い道に窮する少年かに限っている。次には自己の優

勢な事を實地に証明するものにはもつとも簡便な方

法である。人を殺したり、人を傷^{きず}けたり、または人

を陥^{おとし}れたりしても自己の優勢な事は証明出来る訳で

あるが、これらはむしろ殺したり、傷けたり、陥れ
たりするのが目的のときによるべき手段で、自己の
優勢なる事はこの手段を遂行した後に必然の結果と
して起る現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力
が示したくって、しかもそんなに人に害を与えたく
ないと云う場合には、からかうのが一番御恰好であ
る。多少人を傷けなければ自己のえらい事は事実の
すいこう
のち
おかっこう

上に証拠だてられない。事実になつて出て来ないと、頭のうちで安心していても存外快樂のうすいものである。人間は自己を恃たのむものである。否恃み難い場合でも恃みたいものである。それだから自己はこれだけ恃める者だ、これなら安心だと云う事を、人に対して実地に応用して見ないと気がすまない。しかも理窟りくつのわからない俗物や、あまり自己が恃みに

なりそうもなくて落ちつきのない者は、あらゆる機会を利用して、この証券を握ろうとする。柔術使が時々人を投げて見たくなるのと同じ事である。柔術の怪しいものは、どうか自分より弱い奴に、ただの一返^{ぺん}でいいから出逢つて見たい、素人^{しろうと}でも構わないから抛^なげて見たいと至極危険な了見^{いだ}を抱いて町内をあるくのもこれがためである。その他にも理由はい

ろいろあるが、あまり長くなるから略する事に致す

。聞きたければ鰹節かつぶしの一折ひとりおりも持って習いにくるがい

い、いつでも教えてやる。以上に説くところを参考

して推論して見ると、吾輩かんがえの考おくやまでは奥山の猿さると、学

校の教師がからかうには一番手頃である。学校の教

師をもつて、奥山の猿に比較しては勿体もったいない。――

猿に対して勿体ないのではない、教師に対して勿体

ないのである。しかしよく似ているから仕方がない

、御承知の通り奥山の猿は鎖くさりで繋つながれている。いく

ら歯をむき出しても、きやつきやつ騒いでも引き搔か

かれる気遣きづかいはない。教師は鎖で繋がれておらない代

りに月給で縛られている。いくらからかったって大

丈夫、辞職して生徒をぶんなぐる事はない。辞職を

する勇氣のあるようなものなら最初から教師などを

して生徒の御守りおもは勤めないはずである。主人は教

師である。落雲館の教師ではないが、やはり教師に

相違ない。からかうには至極しごく適當で、至極安直あんちよくで、

至極無事な男である。落雲館の生徒は少年である。

からかう事は自己の鼻を高くする所以ゆえんで、教育の功

果として至当に要求してしかるべき権利とまで心得

ている。のみならずからかいでもしなければ、活気

に充^みちた五体と頭脳を、いかに使用してしかるべき

じっぶん

か十分の休暇中持^もてあまして困っている連中である

おのず

。これらの条件が備われれば主人は自^{おの}からから、かわれ、

生徒は自^{おの}からから、かう、誰から云わしても毫^{ごう}も無

理のないところである。それを怒^{おこ}る主人は野^や暮^ぼの極

、間拔の骨頂でしょう。これから落雲館の生徒がい

かに主人にからかったか、これに対して主人がいかに

に野暮を極めたかを逐一かいてご覧に入れる。

諸君は四つ目垣とはいかなる者であるか御承知であらう。風通しのいい、簡便な垣である。吾輩などは目の間から自由自在に往来する事が出来る。こしらえたって、こしらえなくたって同じ事だ。然し落雲館の校長は猫のために四つ目垣を作ったのではない、自分が養成する君子が潜くぐられんために、わざわざ

ざ職人を入れて結いゆめぐ繞らせたのである。なるほどいくら風通しがよく出来ていても、人間には潜くぐれそうにない。この竹をもつて組み合せたる四寸角の穴をぬける事は、清国しんこくの奇術師張世尊ちようせいそんその人といえどもむずかしい。だから人間に対しては充分垣の機能をつくしているに相違ない。主人がその出来上ったのを見て、これならよかろうと喜んだのも無理はない

。しかし主人の論理には大なる穴がある。この垣よ

おおい
どんしゅう

りも大いなる穴がある。呑舟の魚をも洩らすべき大

穴がある。彼は垣は踰ゆべきものにあらずとの仮定

から出立している。いやしくも学校の生徒たる以上

はいかに粗末の垣でも、垣と云う名がついて、分界

線の区域さえ判然すれば決して乱入される氣遣はな

いと仮定したのである。次に彼はその仮定をしばらく

く打ち崩^{くず}して、よし乱入する者があつても大丈夫と

論断したのである。四つ目垣の穴を潜^{くぐ}り得る事は、

いかなる小僧といえどもとうてい出来る氣遣はない

から乱入の虞^{おそれ}は決してないと速定^{そくてい}してしまつたので

ある。なるほど彼等が猫でない限りはこの四角の目

をぬけてくる事はしまい、したくても出来まいが、

乗り踰^こえる事、飛び越える事は何の事もない。かえ

つて運動になつて面白いくらいである。

垣の出来た翌日から、垣の出来ぬ前と同様に彼等は北側の空地へぽかりぽかりと飛び込む。但し座敷

の正面までは深入りをしない。もし追ひ懸けられた

ら逃げるのに、少々ひまがいるから、あらかじめ予め逃げる時

間を勘定に入れて、い捕えらるる危険のない所で遊弋ゆうよく

をしている。彼等が何をしているか東の離れにいる

主人には無論目に入らない。い北側の空地あきちに彼等が遊

弋かぎしている状態は、木戸をあけて反対の方角から鉤

の手に曲つて見るか、または後架こうかの窓から垣根越し

に眺ながめるよりほかに仕方がない。窓から眺める時は

どこに何がいちもくいるか、一目明瞭に見渡す事が出来るが

よしや敵を幾人見出したからと云つて捕える訳に

は行かぬ。こうしただ窓の格子の中から叱りつけるばかり

である。もし木戸から迂回^{うかい}して敵地を突こうとすれ

ば、足音を聞きつけて、ぽかりぽかりと捉^{つら}まる前に

向う側へ下りてしまふ。膾^{おと}膾^と膾^{せい}がひなたぼっこをし

ているところへ密猟船が向ったような者だ。主人は

無論後架で張り番をしている訳ではない。と云つて

木戸を開いて、音がしたら直ぐ飛び出す用意もない

。もしそんな事をやる日には教師を辞職して、その

方専門にならなければ追いつかない。主人方の不利を云うと書斎からは敵の声だけ聞えて姿が見えないのと、窓からは姿が見えるだけで手が出せない事である。この不利を看破したる敵はこんな軍略を講じた。主人が書斎に立て籠こもっていると探偵した時にはなるべく大きな声を出してわあわあ云う。その中には主人をひやかすような事を聞こえよがしに述べ

る。しかもその声の出所を極めて不分明にする。ちよつと聞くと垣の内で騒いでいるのか、あるいは向う側であばれているのか判定しにくいようにする。

もし主人が出懸けて来たら、逃げ出すか、または始めから向う側にいて知らん顔をする。また主人が後架へ——吾輩は最前からしきりに後架後架ときたない字を使用するのを別段の光栄とも思っておらん、

実は迷惑千万であるが、この戦争を記述する上において必要であるからやむを得ない。——即ち主人が

すなわ

後架へまかり越したと見て取るときは、必ず桐の木の附近を徘徊はいかいしてわざと主人の眼につくようにする

。主人がもし後架から四隣しりんに響く大音を揚げて怒鳴

りつければ敵は周章あわてる気色けしきもなく悠然ゆうぜんと根拠地へ

引きあげる。この軍略を用いられると主人ははなは

だ困却する。たしかに這入^{はい}っているなと思つてステ

ツキを持って出懸けると寂然^{せきぜん}として誰もいない。い

ないかと思つて窓からのぞくと必ず一二人這入つて

いる。主人は裏へ廻つて見たり、後架から覗^{のぞ}いて見

たり、後架から覗いて見たり、裏へ廻つて見たり、

何度言つても同じ事だが、何度云つても同じ事を繰

り返している。^{ほんめい}奔命に疲れるとはこの事である。教

師が職業であるか、戦争が本務であるかちよつと分らないくらいぎやくじよう逆上して来た。この逆上の頂点に達した時に下しもの事件が起つたのである。

事件は大概逆上から出る者だ。逆上とは読んで字のごとく逆さかさのぼに上るのである、この点に関してはゲーレンもパラセルサスも旧弊なる扁鵲へんじやくも異議とを唱となうる者は一人もない。ただどこへ逆さかさのぼに上るかが

問題である。また何が逆かさに上るかが議論のあるところである。古来歐洲人の伝説によると、吾人の体内には四種の液が循環しておつたそうだ。第一に怒液どえきと云う奴やつがある。これが逆かさに上ると怒り出おこす。第二に鈍液どんえきと名づくるのがある。これが逆かさに上ると神経が鈍にぶくなる。次には憂液ゆうえき、これは人間を陰気にする。最後が血液けつえき、これは四肢ししを壮さかんにす

る。その後^ご人文が進むに従つて鈍液、怒液、憂液は
いつの間^まにかなくなって、現今に至つては血液だけ
が昔のように循環していると云う話しだ。だからも
し逆上する者があらば血液よりほかにはあるまいと
思われる。しかるにこの血液の分量は個人によつて
ちやんと極^きまっている。性分によつて多少の増減は
あるが、まず大抵一人前に付五升五合の割合である

。だによつて、この五升五合が逆かさに上ると、上
つたところだけは熾さかんに活動するが、その他の局部
は欠乏を感じて冷たくなる。ちようど交番焼打の当
時巡査がことごとく警察署へ集つて、町内には一人
もなくなつたようなものだ。あれも医学上から診断
をすると警察の逆上と云う者である。でこの逆上を
癒いやすには血液を従前のごとく体内の各部へ平均に

分配しなければならん。そうするには逆かさに上つ

た奴を下へ降おろさなくてはならん。その方にはいろいろ

ろある。今は故人となられたが主人の先君などは濡ぬ

れ手拭てぬぐいを頭にあてて炬燵こたつにあたつておられたそうだ

。頭寒足熱は延命息災の徴と傷寒論しょうかんろんにも出ている通

り、濡れ手拭は長寿法において一日も欠くべからざる者である。それでなければ坊主の慣用する手段を

試みるがよい。いっしょふじゆう一所不住の沙門雲水行脚しゃもんうんすいあんぎやの衲僧のうそうは必

ず樹下石上を宿やどとすとある。樹下石上とは難行苦行

のためではない。全くのぼせ、を下さげるために六祖ろくそが

米を舂つきながら考え出した秘法である。試みに石の

上に坐ってご覧、尻が冷えるのは当り前だろう。尻

が冷える、のぼせが下がる、これまた自然の順序に

して毫ごうも疑ぎを挟さむべき余地はない。かようにいろいろ

ろな方法を用いてのぼせを下げる工夫は大分発明されたが、まだのぼせを引き起す良方が案出されないのは残念である。一概に考えるとのぼせは損あつて益なき現象であるが、そうばかり速断してならん場合がある。職業によると逆上はよほど大切な者で、逆上せんと何にも出来ない事がある。その中^{うち}でもつとも逆上を重んずるのは詩人である。詩人に逆上が

必要なる事は汽船に石炭が欠くべからざるような者
で、この供給が一日でも途切れると彼れ等は手を拱こまぬ
いて飯を食うよりほかに何等の能もない凡人になつ
てしまふ。もつとも逆上は氣違いみようの異名で、氣違にな
らないと家業かぎようが立ち行かんとあつては世間体せけんていが悪い
から、彼等の仲間では逆上を呼ぶに逆上の名をもつ
てしない。申し合せてインスピレーション、インス

プレーションとさも勿体^{もったい}そうに称^{とな}えている。これは

まんぢやく

彼等が世間を瞞着^{まんぢやく}するために製造した名でその実は正に逆上である。プレートーは彼等の肩を持つてこの種の逆上を神聖なる狂気と号したが、いくら神聖でも狂気では人が相手にしない。やはりインスピレーションと云う新発明の売薬のような名を付けておく方が彼等のためによからうと思う。しかし蒲鉾^{かまぼこ}の

種が山芋やまいもであるごとく、観音かんのんの像が一寸八分の朽木くちき

であるごとく、鴨南蛮かもなんばんの材料が烏であるごとく、下

宿屋の牛鍋ぎゅうなべが馬肉であるごとくインスピレーション

も実は逆上である。逆上であって見れば臨時の気違

である。巢鴨へ入院せずに済むのは単に臨時、気違で

あるからだ。ところがこの臨時の気違を製造する事

が困難なのである。いっしょうがい一生涯の狂人はかえって出来安

いが、筆を執とつて紙に向う間あいだだけ氣違にするのは、

こうしや

いかに巧者な神様でもよほど骨が折れると見えて、

こしら

なかなか拵こしらえて見せない。神が作つくつてくれん以上は

自力で拵こしらえなければならん。そこで昔こから今日こんにちまで

おおい

逆上術もまた逆上とりのけ術と同じく大に学者の頭

脳を悩ました。ある人はインスピレーションを得る

ために毎日渋柿を十二個ずつ食った。これは渋柿を

食えば便秘する、便秘すれば逆上は必ず起るとい
理論から来たものだ。またある人はかん徳利を持
て鉄砲風呂へ飛び込んだ。湯の中で酒を飲んだら逆
上するに極きまつていると考えたのである。その人の説
によるとこれで成功しなければ葡萄酒ぶどうしゅの湯をわか
しはいて這入れば一返ぺんで功能があると信じ切っている。し
かし金がないのでついに実行する事が出来なくて死

んでしまったのは気の毒である。最後に古人の真似をしたらインスピレーションが起るだろうと思いついた者がある。これはある人の態度動作を真似ると心的状態もその人に似てくると云う学説を応用したのである。酔っぱらいのように管くだを捲まいていると、いつの間まにか酒飲みのような心持になる、坐禅をして線香一本の間我慢しているとどこことなく坊主らし

い気分になれる。だから昔からインスピレーション

を受けた有名の大家の所作しよさを真似れば必ず逆上する

に相違ない。聞くとところによればユーゴーは快走船ヨット

の上へ寝転ねころんで文章の趣向を考えたそうだから、船

へ乗って青空を見つめていれば必ず逆上受合うけあいである

。スチーヴンソンは腹這はらばいに寝て小説を書いたそうだ

から、打うつ伏ふしになって筆を持てばきつと血が逆さか

さに上のぼつてくる。かようにいろいろな人がいろいろ

の事を考え出したが、まだ誰も成功しない。まず今こん

日にちのところでは人為的逆上は不可能の事となつてい

る。残念だが致し方がない。早晚随意にインスピレ

ーションを起し得る時機の到来するは疑うたがいもない事で

、吾輩は人文のためにこの時機の一日も早く来らん

事を切望するのである。

逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思うから、これよりいよいよ事件に取りかかる。しかしすべての大事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事件のみを述べて、小事件を逸するのは古来から歴史家の常に陥る弊竇である。おちいへいとう主人の逆上も小事件に逢う度に一層の劇甚げきじんを加えて、ついに大事件を引き起したのであるからして、幾分かその発達を順序立て

て述べないと主人がいかに逆上しているか分りにくい。分りにくいと主人の逆上は空名に歸して、世間からはよもやそれほどもなかろうと見くびられるかも知れない。せつかく逆上しても人から天晴な逆上と謡うたわれなくては張り合がないだろう。これから述べる事件は大小に係かかわらず主人に取って名誉な者ではない。事件その物が不名誉であるならば、責せめて

しょうめい

逆上なりとも、正銘の逆上であつて、決して人に劣るものでないと云う事を明かにしておきたい。主人は他に対して別にこれと云つて誇るに足る性質を有しておらん。逆上でも自慢しなくてはほかに骨を折つて書き立ててやる種がない。

落雲館に群がる敵軍は近日に至つて一種のダムダム弾を發明して、じっぶん十分の休暇、もしくは放課後に至

つて熾さかんに北側の空地あきちに向つて砲火を浴びせかける。

このダムダム弾は通称をボールと称となえて、擂粉木すりこぎの

大きな奴をもつて任意これを敵中に発射する仕掛で

ある。いくらダムダムだつて落雲館の運動場から発

射するのだから、書齋に立て籠こもつてる主人に中あたる気きづ

遣かいはない。敵といえども弾道のあまり遠過ぎるのを

自覚せん事はないのだけれど、そこが軍略である。

旅順の戦争にも海軍から間接射撃を行つて偉大な功
を奏したと云う話であれば、空地へころがり落つる
ボールといえども相当の効果を収め得ぬ事はない。

いわんや一発を送る度^{たび}に総軍力を合せてわーと威嚇^{いかく}

性大音声^{せいたいおんじょう}を出す^{いだ}ににおいてをやである。主人は恐縮の

結果として手足に通う血管が収縮せざるを得ない。

煩悶^{はんもん}の極^{きよく}そこいらを迷付^{まごつ}いている血が逆^{さか}さに上^{のぼ}るは

ずである。敵の計はなかなか巧妙と云うてよろしい

はかりごと

。昔し希臘むかギリシヤにイスキラスと云う作家があつたそうだ

。この男は学者作家に共通なる頭を有していたと云

う。吾輩のいわゆる学者作家に共通なる頭とは禿はげと

云う意味である。なぜ頭が禿げるかと云えば頭の営

養不足で毛が生長するほど活気がないからに相違な

い。学者作家はもつとも多く頭を使うものであつて

大概是貧乏に極きまっている。だから学者作家の頭はみんな營養不足でみんな禿はげげている。さてイスキラスも作家であるから自然の勢いきおい禿はげげなくてはならん。彼は

きんかんあたま

はつるつる然たる金柑頭きんかんあたまを有しておった。ところが

よそゆき

ふだんぎ

ある日の事、先生例の頭——頭に外行も普段よそゆき着ふだんぎもな

いから例の頭に極きまってるが——その例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往来をあるいてい

た。これが間違いのもとである。禿げ頭を日にあてて遠方から見ると、大變よく光るものだ。高い木には風があたる、光かる頭にも何かあたらなくてはならん。この時イスキラスの頭の上に一羽の鷺わしが舞っていたが、見るとどこかで生捕いけどった一疋びきの亀を爪の先に攫つかんだままである。亀、スツポンなどは美味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅こうらをつけている。

いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出来ん。

えび おにがらやき

海老の鬼殻焼はあるが亀の子の甲羅煮は今でさえな

いくらいだから、当時は無論なかったに極っている

。さすがの鷺わしも少々持て余した折柄おりから、遥はるかの下界に

ぴかと光った者がある。その時鷺はしめたと思った

。あの光ったものの上へ亀の子を落したなら、甲羅

は正ただしく砕けるに極きわまった。砕けたあとから舞い

下りて中味なかみを頂戴ちやうだいすれば訳はない。そうだそうだと

ねらい

覗ねを定めて、かの亀の子を高い所から挨拶も無く頭

の上へ落した。生憎あいにく作家の頭の方が亀の甲より軟ら

かであつたものだから、禿はめちやめちやに碎けて

有名なるイスキラスはここに無惨むざんの最後を遂げた。

それはそうと、解げしかねるのは驚の了見である。例

の頭を、作家の頭と知って落したのか、または禿岩

と間違えて落したもののか、解決しよう次第で、落雲館の敵とこの鷲とを比較する事も出来るし、また出来なくもなる。主人の頭はイスキラスのそれのごとく、また御歴々おれきれきの学者のごとくぴかぴか光ってはおらん。しかし六畳敷にせよいやしくも書斎と号する一室を控ひかえて、居眠りをしながらも、むずかしい書物の上へ顔を翳かざす以上は、学者作家の同類と見倣みなさ

なければならん。そうすると主人の頭の禿げておらんのは、まだ禿げるべき資格がないからで、その内に禿げるだろうとは近々きんきんこの頭の上に落ちかかるべき運命であろう。して見れば落雲館の生徒がこの頭を目懸けて例のダムダム丸がんを集注するのは策のもつとも時宜じぎに適したものと云わねばならん。もし敵がこの行動を二週間継続するならば、主人の頭は畏怖いふ

と煩悶はんもんのため必ず營養の不足を訴えて、金柑きんかんとも薬や

缶かんとも銅壺どうことも變化するだろう。なお二週間の砲撃

を食くらえば金柑は潰つぶれるに相違ない。薬缶は洩もるに相

違ない。銅壺ならひびが入るにきまつている。この

睹易みやすき結果を予想せんで、あくまでも敵と戦鬪を繼

続しようとして苦心するのは、ただ本人たる苦沙弥先生

のみである。

ある日の午後、吾輩は例のごとく椽側へ出て午睡えんがわ ひるね

をして虎になつた夢を見ていた。主人に鶏肉けいにくを持つ

て来いと云うと、主人がへえと恐る恐る鶏肉を持つ

て出る。迷亭が来たから、迷亭に雁がんが食いたい、雁がん

鍋なべへ行つて誂あつらえて来いと云うと、蕪かぶの香こうの物ものと、

塩煎餅しおせんべいといつしよに召し上がりますと雁の味が致し

ますと例のごとく茶羅ちやらツ鉾ぼこを云うから、大きな口を

あいて、うーと唸うなって嚇おどしてやったら、迷亭は蒼あおく

なつて山下やましたの雁鍋は廃業致しましたがいかが取り計はから

いましょうかと云った。それなら牛肉で勘弁するか

ら早く西川へ行つてロースを一斤取つて来い、早く

せんと貴様から食い殺すぞと云ったら、迷亭は尻を

端折はしよつて馳かけ出した。吾輩は急にからだが大きくな

つたので、椽側一杯に寝そべつて、迷亭の歸るのを

うちじゅう

待ち受けていると、たちまち家中に響く大きな声が

ぎゅう

ま

してせつかくの牛も食わぬ間に夢がさめて吾に帰つ

た。すると今まで恐る恐る吾輩の前に平伏していた

こうか

と思いのほかの主人が、いきなり後架から飛び出し

け

て来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴たから、お

やと思ううち、たちまち庭下駄をつっかけて木戸か
ら廻って、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から

急に猫と収縮したのだから何となく極きまりが悪くもあり、おかしくもあつたが、主人のこの権幕と横腹を蹴られた痛さとで、虎の事はすぐ忘れてしまった。

同時に主人がいよいよ出馬して敵と交戦するな面白いわいと、痛いのを我慢して、後あとを慕つて裏口へ出

た。同時に主人がぬすつ、とうと怒鳴る声が聞える、

見ると制帽をつけた十八九になる倔強くつきような奴が一人、

四ツ目垣を向うへ乗り越えつつある。やあ遅かった

と思ううち、彼の制帽は馳け足の姿勢をとって根拠

地の方へ韋駄天のごとく逃げて行く。主人はぬすつ、

とうが^{おい}大に成功したので、またもぬすつ、とうと高く

叫びながら追いかけて行く。しかしかの敵に追いつ

くためには主人の方で垣を越さなければならん。深

入りをすれば主人^{みずか}自らが泥棒になるはずである。前^{ぜん}

申す通り主人は立派なる逆上家である。こう勢いきおいに乗

じてぬすつとうを追ひ懸ける以上は、夫子ふうし自身がぬ

すつとうに成つても追ひ懸けるつもりと見えて、引

き返す気色けしきもなく垣の根元まで進んだ。今一步で彼

はぬすつとうの領分はいに入らなければならんと云う間ま

際きわに、敵軍の中から、薄い髯ひげを勢なく生はやした将官

がのこのこと出馬して来た。両人ふたりは垣を境に何か談

判している。聞いて見るとこんなつまらない議論である。

「あれは本校の生徒です」

「生徒たるべきものが、何で他の邸内へ侵入するのですか」

「いやボールがつい飛んだものですから」

「なぜ断って、取りに来ないのですか」

「これから善く注意します」

「そんなら、よろしい」

りゅうとうことう

竜騰虎鬪の壯觀があるだろうと予期した交渉はか

くのごとく散文的なる談判をもつて無事に迅速に結

了した。主人の壯さかんなるはただ意気込みだけである

いざとなると、いつでもこれでおしまいだ。あた

かも吾輩が虎の夢から急に猫に返ったような觀があ

る。吾輩の小事件と云うのは即ちこれである。すなわ小事
件を記述したあとには、順序として是非大事件を話
さなければならん。

主人は座敷の障子を開いて腹這はらばいになつて、何か思

案している。恐らく敵に対して防禦策ぼうぎよさくを講じている

のだらう。落雲館は授業中と見えて、運動場は存外
静かである。ただ校舎の一室で、倫理の講義をして

いるのが手に取るように聞える。朗々たる音声でなかなかうまく述べ立てているのを聴くと、全く昨日きのう敵中から出馬して談判の衝に当しょうつた將軍である。

「……で公德と云うものは大切な事で、あちらへ行つて見ると、仏蘭西フランスでも独逸ドイツでも英吉利イギリスでも、どこへ行つても、この公德の行われておらん国はない。

またどんな下等な者でもこの公德を重んぜぬ者はな

い。悲しいかな、我が日本に在^あつては、未^まだこの点

において外国と拮^{きつ}抗する事が出来るのである。で公

徳と申すと何か新しく外国から輸入して来たように

考える諸君もあるかも知れんが、そう思うのは大^{だい}な

る誤^ごりで、昔^{せき}人も夫子^{ふうし}の道^{みち}一^{いつ}以^いて之^{これ}を貫^{つらぬ}く、忠恕^{ちゅうじょ}の

み^い矣と云われた事がある。この恕^{じょ}と申すのが取りも

直^しさず公德^{しゅつしよ}の出所である。私も人間であるから時に

は大きな声をして歌などうたつて見たくなる事がある。しかし私が勉強している時に隣室のものなどが放歌するのを聴くと、どうしても書物の読めぬのが私の性分である。であるからして自分が唐詩選とうしせんでもこうせい高声に吟じたら気分が晴々せいせいしてよかろうと思う時ですら、もし自分のように迷惑がる人が隣家に住んでおつて、知らず知らずその人の邪魔をするような事

があつてはすまんと思つて、そう云う時はいつでも
控^{ひか}えるのである。こう云う訳だから諸君もなるべく
公德を守つて、いやしくも人の妨害になると思ふ事
は決してやつてはならぬのである。……」

主人は耳を傾けて、この講話を謹聴していたが、
ここに至つてにやりと笑つた。ちよつとこのにやり、
の意味を説明する必要がある。皮肉家がこれをよん

だらこのにやりの裏うちには冷評的分子が交っていると
思うだろう。しかし主人は決して、そんな人の悪い
男ではない。悪いと云うよりそんなに智慧ちえの発達し
た男ではない。主人はなぜ笑ったかと云うと全く嬉
しくって笑ったのである。倫理の教師たる者がかよ
うに痛切なる訓戒を与えるからはこの後のちは永久ダム
ダム弾の乱射を免まぬがれるに相違ない。当分のうち頭

も禿げずにすむ、逆上は一時に直らんでも時機さえ
くれば漸次回復するだろう、濡れ手拭を頂いて、炬
燵にあたらなくとも、樹下石上を宿としなくとも大
丈夫だろうと鑑定したから、にやにやと笑ったので
ある。借金は必ず返す者と二十世紀の今日にもやは
り正直に考えるほどの主人がこの講話を真面目に聞
くのは当然であろう。

やがて時間が来たと見えて、講話はぱたりとやん

だ。他の教室の課業も皆一度に終った。すると今ま

で室内に密封された八百の同勢はとき鬨の声をあげて、

建物を飛び出した。その勢と云うものは、一尺ほど

な蜂はちの巣をたた敲き落したごとくである。ぶんぶん、わ

んわん云うて窓から、戸口から、開きから、いやし

くも穴の開あいている所なら何の容赦もなく我勝ちに

飛び出した。これが大事件の発端である。

まず蜂の陣立てから説明する。こんな戦争に陣立ても何もあるものかと云うのは間違っている。普通

の人は戦争とさえ云えば沙河しやかとか奉天ほうてんとかまた旅順りょじゆん

とかそのほかに戦争はないもののごとくに考えてい

る。少し詩がかった野蛮人になると、アキリスがヘ

クトーの死骸を引きずって、トロイの城壁を三匝さんそうし

たとか、燕えんびと張飛ちようはんが長坂橋に丈八じようはちの蛇矛だぼうを横よこえて

そうそう

曹操の軍百万人を睨にらめ返したとか大袈裟おおげさな事ばか

り連想する。連想は当人の随意だがそれ以外の戦争

はないものと心得るのは不都合だ。

たいこもうまい
太古蒙昧の時代

に在あつてこそ、そんな馬鹿氣た戦争も行われたかも

こんにち

知れん、しかし太平の今日、大日本国帝都の中心に

おいてかくのごとき野蛮的行動はあり得べからざる

奇蹟に属している。いかに騒動が持ち上がったても交番の焼打以上に出る氣遣きづかいはない。して見ると臥竜窟がりようくつ主人の苦沙弥先生と落雲館裏り八百の健児との戦争は、まず東京市あつて以来の大戦争の一として数えてもしかるべきものだ。左氏さしが鄢陵えんりようの戦たたかいを記するに当つてもまず敵の陣勢から述べている。古来から叙述に巧みなるものは皆この筆法を用いるのが通則にな

っている。だによつて吾輩が蜂の陣立てを話すのも

仔細しさいなからう。それでまず蜂の陣立ていかんと見て

あると、四つ目垣の外側に縦列を形かたちづくつた一隊

がある。これは主人を戦鬪線内に誘致する職務を帯

びた者と見える。「降参しねえか」「しねえしねえ

」「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」「落ちねえかな

」「落ちねえはずはねえ」「吠えて見ろ」「わんわ

ん」「わんわん」「わんわんわんわん」これから先

は縦隊総がかりとなつて呐喊とっかんの声を揚げる。縦隊を

少し右へ離れて運動場の方面には砲隊が形勝の地を

占めて陣地を布しいている。臥竜窟がりようくつに面して一人の将

官が搗粉木すりこぎの大きな奴を持つて控ひかえる。これと相對

して五六間の間隔をとつてまた一人立つ、搗粉木の

あとにまた一人、これは臥竜窟に顔をむけて突つ立

っている。かくのごとく一直線にならんで向い合っているのが砲手である。ある人の説によるとこれはベースボールの練習であつて、決して戦鬪準備ではないそうだ。吾輩はベースボールの何物たるを解せぬ文盲漢である。もんもうかんしかし聞くとところによればこれは米国から輸入された遊戯で、こんにち今日中学程度以上の学校に行わるる運動のうちでもっとも流行するものだ

そうだ。米国は突飛とっぴな事ばかり考え出す国柄である

から、砲隊と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊
戲を日本人に教うべくだけそれだけ親切であつたか
も知れない。また米国人はこれをもつて真に一種の
運動遊戯と心得ているのだらう。しかし純粹の遊戯
でもかように四隣を驚かすに足る能力を有している
以上は使いようで砲撃の用には充分立つ。吾輩の眼

をもつて觀察したところでは、彼等はこの運動術を利用して砲火の功を収めんと企てつつあるとしか思われぬ。物は云いようでもなるものだ。慈善の名を借りて詐偽さぎを働らき、インスピレーションと号して逆上をうれしがする者がある以上はベースボールなる遊戯の下もとに戦争をなさんとも限らない。或る人の説明は世間一般のベースボールの事であろう

。今吾輩が記述するベースボールはこの特別の場合

に限らるるベースボールすなわ即ち攻城的砲術である。こ

れからダムダム弾を発射する方法を紹介する。直線

に布しかれたる砲列の中の一人が、ダムダム弾を右の

手に握って搗粉木の所有者に抛ほうりつける。ダムダム

弾は何で製造したか局外者には分らない。堅い丸い

石の団子のようなものを御鄭寧ごていねいに皮でくるんで縫い

合せたものである。前申す通りこの弾丸が砲手の一

人の手中を離れて、風を切つて飛んで行くと、向う

に立つた一人が例の搗粉木をやつと振り上げて、こ

れを敲き返す。たまには敲き損なつた弾丸が流れて

しまふ事もあるが、大概はポカンと大きな音を立て

て弾^はね返る。その勢は非常に猛烈なものである。神

経性胃弱なる主人の頭を潰^{つぶ}すくらいは容易に出来る

。砲手はこれだけで事足るのだが、その周囲附近に

やじうま

は弥次馬兼援兵が雲霞うんかのごとく付き添うている。ポ

あた

カーンと擂粉木が団子に中るや否やわー、ぱちぱち

う

ぱちと、わめく、手を拍つ、やれやれと云う。中つ

あた

たろうと云う。それでも利きかねえかと云う。恐れ入

らねえかと云う。降参かと云う。これだけならまだ

たた

しもであるが、敲たたき返された弾丸は三度に一度必ず

臥竜窟邸内へころがり込む。これがころがり込まなければ攻撃の目的は達せられのである。ダムダム弾は近來諸所で製造するが随分高価なものであるから、いかに戦争でもそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。大抵一隊の砲手に一つもしくは二つの割である。ボンと鳴る度にこの貴重な弾丸を消費する訳には行かん。そこで彼等はたま拾ひろいと称する一部隊を設け

て落弾おちだまを拾ってくる。落ち場所がよければ拾うのに

骨も折れないが、草原とか人の邸内へ飛び込むとそ

う容易たやすくは戻って来ない。だから平生ならなるべく

労力を避けるため、拾い易やすい所へ打ち落すはずであ

るが、この際は反対に出る。目的が遊戯にあるので

はない、戦争に存するのだから、わざとダムダム弾

を主人の邸内に降らせる。邸内に降らせる以上は、

邸内へ這入^{はい}つて拾わなければならん。邸内に這入るもつとも簡便な方法は四つ目垣を越えるにある。四つ目垣のうちで騒動すれば主人が怒^{おこ}り出さなければならん。しからずんば兜^{かぶと}を脱いで降参しなければならん。苦心のあまり頭がだんだん禿げて来なければならん。

今しも敵軍から打ち出した一弾は、^{しょうじゆあやま}照準誤らず、

四つ目垣を通り越して桐の下葉を振り落して、第二

の城壁即ち竹垣に命中した。すなわ随分大きな音である。

ニュートンの運動律第一に曰くもし他の力を加うる

にあらざれば、ひとつた一度び動き出したる物体は均一の速

度をもつて直線に動くものとす。もしこの律のみに

よつて物体の運動が支配せらるるならば主人の頭は

この時にイスキラスと運命を同じくしたのである。

幸^{さいわい}にしてニュートンは第一則を定むると同時に第二

則も製造してくれたので主人の頭は危うきうちに一

命を取りとめた。運動の第二則に曰く運動の変化は

、加えられたる力に比例す、しかしてその力の働く

直線の方角において起るものとす。これは何の事だ

か少しくわかり兼ねるが、かのダムダム弾が竹垣を

突き通して、障子^{しょうじ}を裂き破つて主人の頭を破壊しな

かつたところをもつて見ると、ニユートンの御蔭に

おかげ

相違ない。しばらくすると案のごとく敵は邸内に乗

り込んで来たものと覺しく、「ここか」「もつと左

の方か」などと棒でもつて笹ささの葉を敲き廻わる音が

する。すべて敵が主人の邸内へ乗り込んでダムダム

弾を拾う場合には必ず特別な大きな声を出す。こつ

そり這入って、こつそり拾つては肝心かんじんの目的が達せ

られん。ダムダム弾は貴重かも知れないが、主人に
からかうのはダムダム弾以上に大事である。この時
のごときは遠くから弾の所在地は判然している。竹
垣に中^{あた}った音も知っている。中った場所も分ってい
る、しかしてその落ちた地面も心得ている。だから
おとなしくして拾えば、いくらでもおとなしく拾え
る。ライプニッツの定義によると空間は出来得べき

同在現象の秩序である。いろはにほへとはいつでも

同じ順にあらわれてくる。柳の下には必ず鰯どじょうがいる

。蝙蝠こうもりに夕月はつきものである。垣根にボールは不

似合かも知れぬ。しかし毎日毎日ボールを人の邸内

に抛ほうり込む者の眼に映ずる空間はたしかにこの排列

に慣なれている。一眼見ればすぐ分る訳だ。それをか

くのごとく騒ぎ立てるのは必竟ひっきようずるに主人に戦争を

挑む策略である。^{いど}

こうなつてはいかに消極的な主人といえども応戦しなければならん。さつき座敷のうちから倫理の講義をきいてにやにやしていた主人は奮然として立ち上がった。猛然として馳^かけ出した。驀^{ばくぜん}然として敵の一人を生捕^{いけど}った。主人にしては大出来である。大出来には相違ないが、見ると十四五の小供である。

髯ひげの生はえてゐる主人の敵として少し不似合だ。けれ

ども主人はこれで沢山だと思つたのだらう。詫わび入

るのを無理に引つ張つて椽側えんがわの前まで連れて來た。

ここにちよつと敵の策略について一言いちげんする必要がある

る、敵は主人が昨日きのうの権幕けんまくを見てこの様子では今日

も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。その時

万一逃げ損じて大僧おおぞうがつらまつては事面倒になる。

ここは一年生か二年生くらいな小供を玉拾いにやつて危険を避けるに越した事はない。よし主人が小供をつらまえて愚^ぐ図^ず愚^ぐ図^ず理窟^{りくつ}を捏^こね廻したって、落雲館の名誉には関係しない、こんなものを大人^{おとな}気もな^げく相手にする主人の恥辱^{ちじよく}になるばかりだ。敵の考はこうであつた。これが普通の人間の考で至極^{しごく}もつともなところである。ただ敵は相手が普通の人間でな

いと云う事を勘定のうちに入れるのを忘れたばかりである。主人にこれくらいの常識があれば昨日だつて飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の人間の程度以上に釣るし上げて、常識のあるものに、非常識を与える者である。女だの、小供だの、車引きだの、馬子だのと、そんな見境みさかいのあるうちは、まだ逆上を以て人に誇るに足らん。主人のごとく

相手にならぬ中学一年生を生捕いけどつて戦争の人質とす

るほどの了見でなくては逆上家の仲間入りは出来な

いのである。可哀かわいそうなのは捕虜である。単に上級

生の命令によつて玉拾いなる雑兵ぞうひようの役を勤めたと

ころ、運わるく非常識の敵将、逆上の天才に追い詰

められて、垣越える間まもあらばこそ、庭前に引き据す

えられた。こうなると敵軍は安閑と味方の恥辱を見

ている訳に行かない。我も我もと四つ目垣を乗りこ
して木戸口から庭中に乱れ入る。その数は約一ダ
スばかり、ずらりと主人の前に並んだ。大抵は上うわぎ衣
もちよきつ着もつけておらん。白シャツの腕をまくつ
て、腕組をしたのがある。綿めんネルの洗いざらしを申
し訳に背中だけへ乗せているのがある。そうかと思
うと白の帆木綿ほもめんに黒い縁ふちをとって胸の真中に花文字

を、同じ色に縫いつけた洒落者しやれものもある。いずれも一

騎当千の猛将と見えて、丹波たんばの国は笹山から昨夜着

し立てでござると云わぬばかりに、黒く逞たくましく筋肉

が発達している。中学などへ入れて学問をさせるの

は惜しいものだ。漁師りょうしか船頭にしたら定めし国家の

ためになるだろうと思われるくらいである。彼等は

申し合せたごとく、素足ももひきに股引を高くまくって、近

火の手伝にでも行きそうな風体ふうていに見える。彼等は主

人の前にならんだぎり默然もくねんとして一言も発しない。いちごん

主人も口を開ひらかない。しばらくの間双方共睨にらめくら

をしているなかにちよつと殺気がある。

「貴様等はぬすつとうか」と主人は尋問した。大気だいき

燄えんである。奥歯で嚙かみ潰つぶした癰癰玉かんしやくだまが炎となつて鼻

の穴から抜けるので、小鼻が、いちじるしく怒いかつて

見える。越後獅子えちごじしの鼻は人間が怒おこった時の恰好かっこうを形かたどって作つたものであろう。それでなくてはあんなに恐しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に侵入する奴があるか」

「しかしこの通りちゃんと学校の徽章きしやうのついている

帽子を被かぶっています」

「にせものだろう。落雲館の生徒ならなぜむやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものですから」

「なぜボールを飛び込ました」

「つい飛び込んだんです」

「怪けしからん奴だ」

「以後注意しますから、今度だけ許して下さい」

「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内にちんにゆう闖入

するのを、そう容易たやすく許されると思うか」

「それでも落雲館の生徒に違いないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」

「三年生です」

「きつとそうか」

「ええ」

主人は奥の方をかえり顧みながら、おいこらこらと云う

。

埼玉生れの御三が襖をおさん ぶすまあけて、へえと顔を出す。

「落雲館へ行つて誰か連れてこい」

「誰を連れて参ります」

「誰でもいいから連れてこい」

下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が妙

なのと、使の趣おもむきが判然しないのと、さつきからの事

件の発展が馬鹿馬鹿しいので、立ちもせず、坐りも

せずにやにや笑っている。主人はこれでも大戦争を

しているつもりである。逆上の敏腕を大に振おおいふるつてい

るつもりである。しかるところ自分の召し使たる当

然こっちの肩を持つべきものが、真面目な態度をも

つて事に臨まんのみか、用を言いつけるのを聞きながらにやにや笑っている。ますます逆上せざるを得ない。

「誰でも構わんから呼んで来いと云うのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」

「あの校長さんを……」下女は校長と云う言葉だけしか知らないのである。

「校長でも、幹事でも教頭でもと云っているのにわからんか」

「誰もおりませんでしたら小使でもよろしゅうございますか」

「馬鹿を云え。小使などに何が分かるものか」

ここに至つて下女もやむを得んと心得たものか、

「へえ」と云つて出て行つた。使の主意はやはり飲

み込めのである。小使でも引張つて来はせんかと心配していると、あに計らんや例の倫理の先生が表門から乗り込んで来た。平然と座に就くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかかる。

「ただ今邸内にこの者共が乱入致して……」と忠臣蔵のような古風な言葉を使つたが「本当に御校おんこうの生徒でしうか」と少々皮肉に語尾を切つた。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平気で庭前
にならんでいる勇士を一通り見廻わした上、もとの
ごとく瞳を主人の方にかえして、下の^{しも}ごとく答えた。
。

「さようみんな学校の生徒であります。こんな事の
ないように始終訓戒を加えておきますが……どうも
困ったもので……なぜ君等は垣などを乗り越すのか

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向つては一言もいちごんないと見えて何とも云うものはない。おとなしく庭の隅にかたまつて羊の群むれが雪に逢つたように控ひかえている。

「丸たまが這はい入るのも仕方がないでしょう。こうして学校の隣りに住んでいる以上は、時々ボールも飛ん

で来ましょう。しかし……あまり乱暴ですからな。

たとい仮令垣を乗り越えるにしても知れないように、

そつと拾って行くなら、まだ勘弁のしようもあります

すが……」

「ごもつともで、よく注意は致しますが何分多人数たにんず

の事で……よくこれから注意をせんといかんぜ。も

しボールが飛んだら表から廻って、御断りをして取

らなければいかん。いいか。――広い学校の事です
からどうも世話ばかりやけて仕方がないです。で運
動は教育上必要なものでありますから、どうもこれ
を禁ずる訳には参りかねるので。これを許すとつい
御迷惑になるような事が出来ますが、これは是非御
容赦を願いたいと思います。その代り向後^{こうご}はきつと
表門から廻って御断りを致した上で取らせますから

「いや、そう事が分かれればよろしいです。球たまはいく

ら御投げになつても差さしつか支えはないです。表からきて

ちよつと断わつて下されば構いません。ではこの生

徒はあなたに御引き渡し申しますからお連れ歸りを

願います。いやわざわざ御呼び立て申して恐縮です

」と主人は例によつて例のごとく竜頭蛇尾りゅうとうだびの挨拶を

する。倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落
雲館へ引き上げる。吾輩のいわゆる大事件はこれ
一とまず落着を告げた。何のそれが大事件かと笑う
なら、笑うがいい。そんな人には大事件でないまで
だ。吾輩は主人の大事件を写したので、そんな人の
大事件を記した^{しる}のではない。尻が切れて強弩^{きやうど}の末勢^{ぼつせい}
だなどと悪口するものがあるなら、これが主人の特

色である事を記憶して貰いたい。主人が滑稽文の材料になるのもまたこの特色に存する事を記憶して貰いたい。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云うなら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。だから大町桂月は主人をつらまえて未だ稚氣いまちぎを免がれずと云うている。

吾輩はすでに小事件を叙しおわ了り、今また大事件を

述べ了ったから、これより大事件の後に起る余瀾を

えが

描き出だして、全篇の結びを付けるつもりである。

すべて吾輩のかく事は、口から出任せのいい加減と

でまか

思う読者もあるかも知れないが決してそんな軽率な

猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含

うち

するは無論の事、その一字一句が層々連続すると首

そうそう

尾相応じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうつか

さだんせんわ

りと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる法

語となるんだから、決して寝ころんだり、足を出し

て五行ごとに一度に読むのだなどと云う無礼を演じ

てはいけない。柳宗元は韓退之の文を読むごとに薺

薇の水で手を清めたと云うくらいだから、吾輩の文

に対してもせめて自腹で雑誌を買って来て、友人の

御余りを借りて間に合わすと云う不始末だけはない

事に致したい。これから述べるのは、吾輩みづか自ら余瀾

と号するのだけれど、余瀾ならどうせつまらんに極きま

っている、読まんでもよからうなどと思うと飛んだ

後悔をする。是非しまいまで精読しなくてはいかん

。

大事件のあつた翌日、吾輩はちよつと散歩がした

くなつたから表へ出た。すると向う横町へ曲がろう

と云う角で金田の旦那と鈴木とうの藤さんがしきりに立

ちながら話をしている。金田君は車で自宅うちへ帰ると

ころ、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途

中で兩人ふたりがばったりと出逢ったのである。近来は金

田の邸内も珍らしくなくなつたから、滅多めったにあちら

の方角へは足が向かなかつたが、こう御目に懸つて

見ると、何となく御懐おなつかしい。鈴木にも久々ひさびさだから

余所^{よそ}ながら拝顔の栄を得ておこう。こう決心しての

そのそ御両君の佇立^{ちよりつ}しておらるる傍^{そば}近く歩み寄って

見ると、自然両君の談話が耳に入る^い。これは吾輩の

罪ではない。先方が話しているのがわるいのだ。金

田君は探偵さえ付けて主人の動静を窺^{うか}がうくらいの

程度の良心を有している男だから、吾輩が偶然君の

談話を拝聴したって怒^{おこ}らるる氣遣^{きづかい}はあるまい。もし

怒られたら君は公平と云う意味を御承知ないのである。とにかく吾輩は両君の談話を聞いたのである。

聞きたくて聴いたのではない。聞きたくもないのに談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺いましたところで、ちようどよい所で御目にかかりました」と藤^{とう}さんは鄭^{てい}寧^{ねい}に頭をぴよ

こつかせる。

「うむ、そうかえ。実はこないだから、君にちよつと逢いたいと思つていたがね。それはよかった」

「へえ、それは好都合でございました。何かご用で

」

「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいいんだが、君でないと出来ない事なんだ」

「私に出来る事なら何でもやりましょう。どんな事で」

「ええ、そう……」と考えている。

「何なら、御都合のとき出直して伺いましょう。い
つが宜^{よろ}しゅう、ございますか」

「なあに、そんな大した事じゃ無いのさ。——それ
じゃせっかくだから頼もうか」

「どうか御遠慮なく……」

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙弥とか何とか云うじゃないか」

「ええ苦沙弥がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以来胸糞むなくそがわるくってね」

「ごもつともで、全く苦沙弥は剛慢ですから……少

しは自分の社会上の地位を考えているといいのですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、実業家なんぞ——とか何とか、いろいろ小生意気な事を云うから、そんなら実業家の腕前を見せてやろう、と思つてね。こないだから大分弱^{だいぶ}らしているんだが、やつぱり頑張^{がんば}っているんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろいたよ」

「どうも損得と云う觀念の乏^{とぼ}しい奴ですから無暗^{むやみ}に
瘦我慢を張るんでしよう。昔からああ云う癖のある
男で、つまり自分の損になる事に気が付かないんで
すから度^どし難^{がた}いです」

「あはははほんとに度^どし難^{がた}い。いろいろ手を易^かえ品
を易^かえてやって見るんだがね。とうとうしまい学

校の生徒にやらした」

「そいつは妙案ですな。利目ききめがございましたか」

「これにやあ、奴も大分だいぶん困ったようだ。もう遠から

ず落城するに極きまっている」

「そりや結構です。いくら威張つても多勢たぜいに無勢ぶぜいで

すからな」

「そうさ、一人じやあ仕方がねえ。それで大分だいぶん弱っ

たようだが、まあどんな様子か君に行つて見て来て

もらおうと云うのさ」

「はあ、そうですか。なに訳はありません。すぐ行
つて見ましょう。容子ようすは帰りがけに御報知を致す事

にして。面白いでしょう、あの頑固がんこなのが意気銷沈いきしょうちん
しているところは、きつと見物みものですよ」

「ああ、それじゃ歸りに御寄り、待っているから」

「それでは御免蒙ごめんこうむります」

おや今度もまた魂胆だ、こんたんなるほど実業家の勢力は

えらいものだ、石炭の燃殻もえがらのような主人を逆上させ

るのも、苦悶くもんの結果主人の頭が蠅滑りはえすべの難所となる

のも、その頭がイスキラスと同様の運命に陥るおちいのも

皆実業家の勢力である。地球が地軸を廻転するのは

何の作用かわからないが、世の中を動かすものはた

しかに金である。くりきこの金の功力を心得て、この金の

威光を自由に發揮するものは実業家諸君をおいてほかに一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に西へ入るのも全く実業家の御蔭である。今まではわからずやの窮措大きゆうそだいの家に養なわれて実業家の御利益ごりやくを知らなかったのは、我ながら不覚である。それにしては冥頑不靈めいがんふれいの主人も今度は少し悟らばなるまい。これでも冥頑不靈で押し通す了見あふだと危ない。

主人のもつとも貴重する命があぶない。彼は鈴木君

に逢つてどんな挨拶をするのか知らん。その模様で

彼の悟り具合も自おのずから分明ぶんみようになる。愚図愚図しては

おられん、猫だつて主人の事だから大おおに心配になる

。早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

鈴木君はあいかわらず調子のいい男である。今日

は金田の事などはおくびにも出さない、しきりに当

り障りさわのない世間話を面白そうにしている。

「君少し顔色が悪いようだぜ、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼あおいぜ、用心せんといかんよ。時候がわるい

からね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありやしないか、僕に出来る事なら

何でもするぜ。遠慮なく云い給え」

「心配って、何を？」

「いえ、なければいいが、もしあればと云う事さ。

心配が一番毒だからな。世の中は笑って面白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰気過ぎるようだ」

「笑うのも毒だからな。無暗に笑うと死ぬ事がある

ぜ」

「冗談云じょうだんつちやいけない。笑う門かどには福来きたるさ」

「昔むかし希臘ギリシヤにクリシツパスと云う哲学者があつたが

君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑い過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね、しかしそりや昔の

事だから……」

「昔しだつて今だつて変りがあるものか。驢馬ろばが銀

どんぶり

いちじゆく

の井いから無花果を食うのを見て、おかしくつてたま

むやみ

らなくつて無暗むやみに笑つたんだ。ところがどうしても

笑いがとまらない。とうとう笑い死にに死んだんだ

あね」

とど

「はははしかしそんなに留め度とどもなく笑わなくつて

てきぎ

もいいさ。少し笑う——適宜てきぎに、——そうするとい

い心持ちだ」

鈴木君がしきりに主人の動静を研究していると、表の門ががらがらとあく、きやくらい客来かと思うとそうでない。

「ちよつとボールが這はい入りましたから、取らして下さい」

下女は台所から「はい」と答える。書生は裏手へ

廻る。鈴木は妙な顔をして何だいと聞く。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？　裏に書生がいるのかい」

「落雲館と云う学校さ」

「ああそうか、学校か。随分騒々しいだろうね」

「騒々しいの何のって。碌々ろくろく勉強も出来やしない。

僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「ハハハ大分怒ったね。何か癩しやくに障さわる事でも有るのかい」

「あるのなのって、朝から晩まで癩に障り続けだ」

「そんなに癩に障るなら越せばいいじゃないか」

「誰が越すもんか、失敬千万な」

「僕に怒ったって仕方がない。なあに小供だあね、

打ちやっうっておけばいいさ」

「君はよからうが僕はよくない。昨日きのうは教師を呼び

つけて談判してやった」

「それは面白かったね。恐れ入ったろう」

「うん」

この時また門口かどぐちをあけて「ちよつとボールが這入はい

りましたから取らして下さい」と云う声がする。

「いや大分だいぶん来るじゃないか、またボールだぜ君」

「うん、表から来るように契約したんだ」

「なるほどそれであんなにくるんだね。そうーか、分った」

「何が分ったんだい」

「なに、ボールを取りにくる原因がさ」

「今日はこれで十六返目だ」

「君うるさくないか。来ないようにしたらいいじゃないか」

「来ないようにするったって、来るから仕方がないさ」

「仕方がないと云えばそれまでだが、そう頑固がんこにしていなくてもよからう。人間は角かどがあると世の中を転ころがって行くのが骨が折れて損だよ。丸いものはご

ろごろどこへでも苦^くなしに行けるが四角なものはこ
ろがるに骨が折れるばかりじゃない、転がるたびに
角がすれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中じ
やなし、そう自分の思うように人はならないさ。ま
あ何だね。どうしても金のあるものに、たてを突い
ちや損だね。ただ神経ばかり痛めて、からだは悪く
なる、人は褒^ほめてくれず。向うは平気なものさ。坐

つて人を使いさえすればすむんだから。多勢たぜいに無勢ぶぜい

どうせ、叶かなわないのは知れているさ。頑固もいいが

、立て通すつもりでいるうちに、自分の勉強に障つ

たり、毎日の業務に煩はんを及ぼしたり、とどのつまり

が骨折り損の草臥くたびれもう儲けだからね」

「ご免なさい。今ちよつとボールが飛びましたから

、裏口へ廻つて、取つてもいいですか」

「そろまた来たぜ」と鈴木君は笑っている。

「失敬な」と主人は真赤まっかになっている。

鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思ったから、それじゃ失敬ちと来たきまえと帰って行く。

入れ代ってやって来たのが甘木あまき先生である。逆上

家が自分で逆上家だと名乗る者は昔むかしから例が少な

い、これは少々変だなと覚さとつた時は逆上の峠とうげはもう

越している。主人の逆上は昨日きのうの大事件の際に最高

度に達したのであるが、談判も竜頭蛇尾たるに係らかかわ

ず、どうかこうか始末がついたのでその晩書斎でつ

くづく考えて見ると少し変だと気が付いた。もつと

も落雲館が変なのか、自分が変なのか疑うたがいを存する余

地は充分あるが、何しろ変に違ない。いくら中学校

の隣に居を構えたって、かくのごとく年が年中肝癪かんしゃく

を起しつづけはちと変だと気が付いた。変であつて

見ればどうかしなければならん。どうするつたつて

仕方がない、やはり医者かんしやくみなもとの薬でも飲んで肝癰かんしやくの源に

賄賂わいろでも使つて慰撫いぶするよりほかに道はない。こう

覺さとつたから平生かかりつけの甘木先生を迎えて診察

を受けて見ようと云う量見を起したのである。賢か

愚か、その辺は別問題として、とにかく自分の逆上

に気が付いただけは殊勝しゆしょうの志、奇特きどくの心得と云わな

ければならん。甘木先生は例のごとくにこにこと落ちつき払って、「どうです」と云う。医者は大抵どうですと云うに極きまつてる。吾輩は「どうです」と云わない医者はどうも信用をおく気にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一体医者の薬は利きくものでしょうか」

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の長者ちやうじやだから

、別段激した様子もなく、

「利かん事もないです」と穩おだやかに答えた。

「私わたしの胃病なんか、いくら薬を飲んでも同じ事です

ぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですか。少しは善くなりますかな」と自分の胃の事を人に聞いて見る。

「そう急には、癒なおりません、だんだん利きます。今

でももとより大分だいぶんよくなっています」

「そうですかな」

「やはり肝癰かんしやくが起りますか」

「起りますとも、夢にまで肝癰を起します」

「運動でも、少しなさったらいいでしよう」

「運動すると、なお肝癰が起ります」

甘木先生もあきれ返ったものと見えて、

「どれ一つ拝見しましょうか」と診察を始める。診

察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな声を出して、

「先生、せんだって催眠術のかいてある本を読んだ

ら、催眠術を応用して手癖のわるいんだの、いろいろな病気だのを直す事が出来ると書いてあつたですが、本当でしょうか」と聞く。

「ええ、そう云う療法もあります」

「今でもやるんですか」

「ええ」

「催眠術をかけるのはむずかしいものでしょうか」

「なに訳はありません、私^{わたし}などもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「ええ、一つやって見ましょうか。誰でも懸^からなけ

ればならん理窟^{りくつ}のものです。あなたさえ善^よければ懸

けて見ましょう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。私^{わたし}もどうか

ら懸かつて見たいと思ったんです。しかし懸かりき

りで眼が覚めないと困るな」

「なに大丈夫です。それじややりましょう」

相談はたちまち一決して、主人はいよいよ催眠術を懸けらるる事となつた。吾輩は今までこんな事を

見た事がないから心ひそかに喜んでその結果を座敷の隅から拝見する。先生はまず、主人の眼からかけ

始めた。その方法を見てみると、りょうがん うわまぶた両眼の上瞼を上か

ら下へと撫なでて、主人がすでに眼を眠ねむっているにも

かかわ

係らず、しきりに同じ方向へくせを付けたがつてい

る。しばらくすると先生は主人に向つて「こうやつ

まぶた

て、まぶた瞼を撫でていると、だんだん眼が重たくなるで

しょう」と聞いた。主人は「なるほど重くなります

な」と答える。先生はなお同じように撫でおろし、

撫でおろし「だんだん重くなりますよ、ようござん

すか」と云う。主人もその気になったものか、何とも云わずに黙っている。同じ摩擦法はまた三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さあもう開きませんぜ」と云われた。可哀想に主人の眼はとうとう潰つぶれてしまった。「もう開かんですか」「ええもうあきません」主人は默然もくねんとして目を眠っている。吾輩は主人がもう盲目めくらになったものと思い込んでしま

った。しばらくして先生は「あけるなら開いて御覧なさい。とうていあけないから」と云われる。「そ

うですか」と云うが早いか主人は普通の通り両眼を

りようがん

開いていた。主人はにやにや笑いながら「懸かりま

せんな」と云うと甘木先生も同じく笑いながら「え

え、懸りません」と云う。催眠術はついに不成功に

了る。おわ甘木先生も帰る。

その次に来たのが――主人のうちへこのくらい客の来た事はない。交際の少ない主人の家にしてはまるで嘘うそのようである。しかし来たに相違ない。しかも珍客が来た。吾輩がこの珍客の事を一言いちごんでも記述するのは単に珍客であるがためではない。吾輩は先刻申す通り大事件の余瀾よらんを描きえがつつある。しかしてこの珍客はこの余瀾を描くあに方あたつて逸すべからざる

材料である。何と云う名前か知らん、ただ顔の長い上に、山羊やぎのような髯ひげを生はやしている四十前後の男と云えばよからう。迷亭の美学者たるに對して、吾輩はこの男を哲學者と呼ぶつもりである。なぜ哲學者と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らすからではない、ただ主人と對話する時の様子を拝見しているといかにも哲學者らしく思われるからである

。これも昔むかしの同窓と見えて兩人共ふたりとも応対振りは至極しごく打ち解うけた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚きんぎょ麩ふのように

ふわふわしているね。せんだって友人を連れて一面

識もない華族の門前を通行した時、ちよつと寄つて

茶でも飲んで行こうと云つて引つ張り込んだそうだ

が随分吞のん気きだね」

「それでどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかったが、——そうさ、

まあ天稟てんぴんの奇人だろう、その代り考も何もない全く

金魚麴だ。鈴木か、——あれがくるのかい、へえー

、あれは理窟りくつはわからんが世間的には利口な男だ。

金時計は下げられるたちだ。しかし奥行きがないか

ら落ちつきがなくって駄目だ。えんかつ円滑円滑と云うが、

円滑の意味も何もわかりはせんよ。迷亭が金魚麩な
らあれは藁わらで括くくった蒟蒻こんにやくだね。ただわるく滑なめらかでぶ
るぶる振ふるえているばかりだ」

主人はこの奇警きけいな比喻ひゆを聞いて、大おおに感心したも
のらしく、久し振りでハハハと笑った。

「そんなら君は何だい」

「僕か、そうさな僕なんかは——まあ自然じねん薯じよくらい

なところだろう。長くなつて泥の中に埋うまつてるさ」

「君は始終泰然として気楽なようだが、羨うらやましいな

」

「なに普通の人間と同じようにしているばかりさ。

別に羨まれるに足るほどの事もない。ただありがた
い事に人を羨む気も起らんから、それだけいいね」

「会計は近頃豊かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。しかし食うているから大丈夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、肝癰かんしゃくが起つてたまらん。どつちを向いても不平ばかりだ」

「不平もいいさ。不平が起つたら起してしまえば当分はいい心持ちになれる。人間はいろいろだから、そう自分のように人にもなれと勧めたって、なれる

ものではない。箸^{はし}は人と同じように持たんと飯が食

いにくいが、自分の麵^{パン}麴は自分の勝手に切るのが一

番都合がいいようだ。上手^{じょうず}な仕立屋で着物をこしら

えれば、着たてから、からだに合ったのを持ってく

るが、下手^{へた}の裁縫屋^{したてや}に誂^{あつら}えたら当分は我慢しないと

駄目さ。しかし世の中はうまくしたもので、着てい

るうちには洋服の方で、こちらの骨格に合わしてく

れるから。今の世に合うように上等な両親が手際よ

てぎわ

く生んでくれれば、それが幸福なのさ。しかし出来

でき

損^そこなったら世の中に合わないで我慢するか、また

は世の中で合わせるまで辛抱するよりほかに道はな
かろう」

「しかし僕なんか、いつまで立っても合いそうにな
いぜ、心細いね」

「あまり合わない背^せ広^{びろ}を無理にきると綻^ほびる。喧嘩^{けんか}。

をしたり、自殺をしたり騒動が起るんだね。しかし君なんかただ面白くないと云うだけで自殺は無論しやせず、喧嘩だつてやった事はあるまい。まあまあいい方だよ」

「ところが毎日喧嘩ばかりしているさ。相手が出て来なくつても怒つておれば喧嘩だろう」

「なるほど一人喧嘩だ。ひとりげんか面白いや、いくらでもやる
がいい」

「それがいやになつた」

「そんならよすさ」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものじやない」

「まあ全体何がそんなに不平なんだい」

主人はここにおいて落雲館事件を始めとして、今

まどやき たぬき

戸焼の狸から、ぴん助、きしやごそのほかあらゆる

とうとう

不平を挙げて滔々と哲学者の前に述べ立てた。哲学

者先生はだまって聞いていたが、ようやく口を開い

ひら

て、かように主人に説き出した。

「ぴん助やきしやごが何を云ったって知らん顔をしておればいいじゃないか。どうせ下らんのだから。」

中学の生徒なんか構う価値があるものか。なに妨害になる。だって談判しても、喧嘩をしてもその妨害はとれんのじゃないか。僕はそう云う点になると西洋人より昔むかしの日本人の方がよほどえらいと思う。

西洋人のやり方は積極的積極的と云って近頃大分流だいぶん行やるが、あれは大だいなる欠点を持っているよ。第一積極的と云ったって際限がない話しだ。いつまで積極

的にやり通したって、満足と云う域とか完全と云う

さかい

境にいけるものじゃない。向に檜むこう ひのきがあるだろう。あ

めざわ

れが目障りになるから取り払う。とその向うの下宿

屋がまた邪魔になる。下宿屋を退去させると、その

しゃく

次の家が癩しゃくに触る。どこまで行っても際限のない話

や ぐち

しさ。西洋人の遣り口や ぐちはみんなこれさ。ナポレオン

でも、アレキサンダーでも勝って満足したものは一

人もないんだよ。人が気に喰わん、喧嘩をする、先

方が閉口しない、ほうてい法庭へ訴える、法庭で勝つ、それ

で落着と思うのは間違さ。心の落着は死ぬまで焦あせつ

たつて片付く事があるものか。寡人政治かじんせいじがいかなか

ら、だいきせいいたい代議政体にする。代議政体がいかなから、また

何かにしたくなる。川が生意気だつて橋をかける、

山が気に喰わんと云つてトンネル隧道を掘る。交通が面倒だ

と云つて鉄道を布く。^しそれで永久満足が出来るもの
じゃない。さればと云つて人間だものどこまで積極
的に我意を通す事が出来るものか。西洋の文明は積
極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生を
くらす人の作つた文明さ。日本の文明は自分以外の
状態を変化させて満足を求めるのじゃない。西洋と
大に違^{おおい}うところは、根本的に周囲の境遇は動かすべ

からざるものと云う一大仮定の下に^{もと}發達しているの

だ。親子の關係が面白くないと云つて歐洲人のよう
にこの關係を改良して落ちつきをとろうとするので
はない。親子の關係は在來のままであつて動かす
事が出来んものとして、その關係の下に^{もと}安心を求む
る手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄もその通り

、武士町人の區別もその通り、自然その物を^み觀るの

もその通り。——山があつて隣国へ行かれなければ、山を崩すと云う考を起す代りに隣国へ行かんでも困らないと云う工夫をする。山を越さなくとも満足だと云う心持ちを養成するのだ。それだから君見給え。禅家^{ぜんけ}でも儒家^{じゆか}でもきつと根本的にこの問題をつらまえる。いくら自分がえらくても世の中はとうてい意のごとくなるものではない、落日^{らくじつ}を回^{めぐ}らす事も

加茂川を逆さかに流す事も出来ない。ただ出来るもの

は自分の心だけだからね。心さえ自由にする修業を

したら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平気なもの

ではないか、今戸焼の狸でも構わんでおられそうな

ものだ。ぴん助なんか愚ぐな事を云つたらこの馬鹿野

郎とすましておれば仔細しさいなからう。何でも昔しの坊

主は人に斬きり付けられた時電光影裏でんこうえいりに春風しゅんぷうを斬ると

か、何とか洒落しやれた事を云つたと云う話だぜ。心の

修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用
が出来るのじゃないかしらん。僕なんか、そんなむ
ずかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極
主義ばかりがいいと思うのは少々誤まっているよう
だ。現に君がいくら積極主義に働いたって、生徒が
君をひやかしくくるのをどうする事も出来ないじゃ

ないか。君の権力であの学校を閉鎖するか、または先方が警察に訴えるだけのわるい事をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積極的に出たつたて勝てつこないよ。もし積極的に出るとすれば金の問題になる。多勢たぜいに無勢ぶぜいの問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云う事になる。

衆を恃たのむ小供に恐れ入らなければならんと云う事に

なる。君のような貧乏人でしかもたつた一人で積極的に喧嘩をしようと云うのがそもそも君の不平の種さ。どうだい分つたかい」

主人は分つたとも、分らないとも言わずに聞いていた。珍客が帰つたあとで書齋へ這入はいつて書物も読まずに何か考えていた。

鈴木とうの藤さんは金と衆とに従えと主人に教えたの

である。甘木先生は催眠術で神経を沈めろと助言じょごんしたのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ろと説法したのである。主人がいずれをえら択ぶかは主人の随意である。ただこのままでは通されないに極きまっている。

主人は痘痕面である。あばたづら 御維新前はあばた、ごいつしんまえ 大分流だいぶは

行やつたものだそうだが日英同盟の今日こんにちから見ると、

こんな顔はいささか時候後おくれの感がある。あばたの

衰退は人口の増殖と反比例して近き将来には全くそ

の迹あとを絶つに至るだろうとは医学上の統計から精密

に割り出されたる結論であつて、吾輩のごとき猫と

いえども毫ごうも疑ぎを挟さむ余地さしはさのないほどの名論である

。現今地球上にあばたつ面つらを有して生息している人

間は何人くらいあるか知らんが、吾輩が交際の区域
内において打算して見ると、猫には一匹もない。人

間にはたった一人ある。しかしてその一人が即ち主すなわ
人である。はなはだ気の毒である。

吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因果

でこんな妙な顔をして臆面おくめんなく二十世紀の空気を呼

吸しているのだろう。昔なら少しは幅も利きいたか知

らんが、あらゆるあばたが二の腕へ立ち退のきを命ぜ

られた昨今、依然として鼻の頭や頬の上へ陣取つて

頑がんとして動かないのは自慢にならんのみか、かえつ

てあばたの体面に関する訳だ。出来る事なら今のう

ち取り払ったらよさそうなものだ。あばた自身だつ

て心細いに違いない。それとも党勢不振の際、誓つ

て落日を中天に挽回ちゆうてん ばんかいせずんばやまずと云う意気込み

で、あんなに横風おうふうに顔一面を占領しているのか知ら

ん。そうするとこのあばたは決して輕蔑けいべつの意をもつ

て視みるべきものでない。滔々とうとうたる流俗に抗する万古ばん

不磨こふまの穴の集合体であつて、大おおに吾人の尊敬に値す

る凸凹でこぼこと云つて宜よろしい。ただきたならしいのが欠点

である。

あさだそうはく

主人の小供のときに牛込の山伏町に浅田宗伯と云う漢法の名医があつたが、この老人が病家を見舞うときには必ずかごに乗ってそろりそろりと参られたそうだ。ところが宗伯老が亡くなられてその養子の代になつたら、かごがたちまち人力車に變じた。だから養子が死んでそのまた養子が跡を続ついだら葛根かっこん

湯がアンチピリンに化けるかも知れない。かごに乗

って東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですら

あまり見つともいいものでは無かった。こんな真似

をして澄すましていたものは旧弊な亡者もうじやと、汽車へ積み

込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。

主人のあばたもその振わざる事においては宗伯老

のかごと一般で、はたから見ると気の毒なくらいだ

が、漢法医にも劣らざる頑固がんこな主人は依然として孤城落日のあばたを天下に曝露ばくろしつつ毎日登校してリドルを教えている。

かくのごとき前世紀の紀念を満面に刻こくして教壇に立つ彼は、その生徒に対して授業以外に大だいなる訓戒を垂れつつあるに相違ない。彼は「猿が手を持つ」を反覆するよりも「あばたの顔面に及ぼす影響」と

云う大問題を造作ぞうさもなく解釈して、不言ふげんの間にその

答案を生徒に与えつつある。もし主人のような人間

が教師として存在しなくなつた暁あかつきには彼等生徒はこ

の問題を研究するために図書館もしくは博物館へ馳

けつけて、吾人がミイラによつて埃及人エジプトじんを髣髴ほうふつする

と同程度の労力を費ついやさねばならぬ。この点てんから見

ると主人の痘痕あばたも冥々めいめいの裡うちに妙な功德くどくを施くこしてい

る。

もつとも主人はこの功德を施こすために顔一面に
疱瘡を種ほうそうえ付けたのではない。それでも実は種え疱
瘡をしたのである。不幸にして腕に種えたと思つた
のが、いつの間まにか顔へ伝染していたのである。そ
の頃は小供の事で今のように色いろけ気もなにもなかった
ものだから、痒かゆい痒いと云いながら無暗むやみに顔中引き

搔^かいたのだそうだ。ちようど噴火山が破裂してラヴ

アが顔の上を流れたようなもので、親が生んでくれた顔を台なしにしてしまった。主人は折々細君に向

って疱瘡をせぬうちは玉のような男子であつたと云

っている。浅草の観音様で西洋人が振り反^{かえ}つて見た

くらい奇麗だつたなどと自慢する事さえある。なる

ほどそうかも知れない。ただ誰も保証人のいないの

が残念である。

いくら功德になつても訓戒になつても、きたない

者はやっぱりきたないものだから、物心ものごころがついて以

来と云うもの主人はおおい大にあばたについて心配し出し

て、あらゆる手段を尽してこの醜態を揉み潰つぶそうと

した。ところが宗伯老のかごと違って、いやになつ

たからと云うてそう急に打ちやられるものではない

。今だに歴然と残っている。この歴然が多少気にか
かると見えて、主人は往来をあるく度毎にあばた面
を勘定してあるくそうだ。今日何人あばたに出逢つ
て、その主は男ぬしか女か、その場所は小川町の勧工場かんこうば
であるか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日
記につけ込んである。彼はあばたに関する智識にお
いては決して誰にも譲るまいと確信している。せん

だつてある洋行歸りの友人が來た折なぞは、「君西洋人にはあ、ば、たがあるかな」と聞いたくらいだ。するとその友人が「そうだな」と首を曲げながらよほど考えたあとで「まあ滅多めったにないね」と云つたら、主人は「滅多になくつても、少しはあるかい」と念を入れて聞き返した。友人は氣のない顔で「あつても乞食たちが立ぽうん坊だよ。教育のある人にはないよう

だ」と答えたら、主人は「そうかなあ、日本とは少し違うね」と云った。

哲学者の意見によつて落雲館との喧嘩を思い留つ

た主人はその後書斎に立て籠こもつてしきりに何か考え

ている。彼の忠告を容いれて静坐の裡うちに靈活なる精神

を消極的に修養するつもりかも知れないが、元來が

氣の小さな人間の癖に、ああ陰氣な懷手ふところばかりして

いては碌ろくな結果の出ようはずがない。それより英書でも質に入れて芸者から喇叭らっぱ節でも習った方が遙はるかにましだとまでは気が付いたが、あんな偏屈へんくつな男はどうてい猫の忠告などを聴く氣遣きづかいはないから、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせずにも暮した。

今日はあれからちょうど七日目なぬかめである。禪家など

では一七日を限つて大悟して見せるなどと凄じい勢すさまい きおい

で結跏けっかする連中もある事だから、うちの主人もどう

かなつたらう、死ぬか生きるか何とか片付いたらう

と、のそのそ椽側えんがわから書斎の入口まで来て室内の動

静を偵察ていさつに及んだ。

書斎は南向きの六畳で、日当りのいい所に大きな

机が据すえてある。ただ大きな机ではわかるまい。長

さ六尺、幅三尺八寸高さこれにかなうと云う大きな
机である。無論出来合のものではない。近所の建具
屋に談判して寝台兼机けんとして製造せしめたる稀代きたいの
品物である。何の故にこんな大きな机を新調して、
また何の故にその上に寝て見ようなどという了見りようけんを
起したもののか、本人に聞いて見ない事だから頓とんとわ
からない。ほんの一時の出来心で、かかる難物を担かつ

ぎ込んだのかも知れず、あるいはことによると一種

の精神病者において吾人がしばしば見出すみいだごとく、

縁もゆかりもない二個の觀念を連想して、机と寢台

を勝手に結び付けたものかも知れない。とにかく奇

抜な考えである。ただ奇抜だけで役に立たないのが

欠点である。吾輩はかつて主人がこの机の上へ昼寢

をして寢返りをする拍子ひょうしに椽側へ転げ落ちたのを見

た事がある。それ以来この机は決して寝台に転用されないようである。

机の前には薄っぺらなメリンスの座布団ざぶとんがあつて

、煙草たばこの火で焼けた穴が三つほどかたまつてゐる。中

から見える綿は薄黒い。この座布団の上に後ろうし向きにかしこまつているのが主人である。鼠色によこれ

へこおび

た兵児帯をこま結びにむすんだ左右がだらりと足の

裏へ垂れかかっている。この帯へじやれ付いて、いきなり頭を張られたのはこないだの事である。滅多めったに寄り付くべき帯ではない。

まだ考えているのか下手へたの考と云う喩たとえもあるのに

と後ろうしから覗のぞき込んで見ると、机の上でいやにぴか

ぴかと光ったものがある。吾輩は思わず、続け様に

二三度瞬まばたきをしたが、こいつは変だとまぶしいのを我

慢してじつと光るものを見つめてやった。するとこの光りは机の上で動いている鏡から出るものだと言う事が分った。しかし主人は何のために書斎で鏡などを振り舞わしているのであろう。鏡と云えば風呂場にあるに極^きまっている。現に吾輩は今朝風呂場でこの鏡を見たのだ。この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。主人

が毎朝顔を洗つたあとで髪を分けるときにもこの鏡を用いる。——主人のような男が髪を分けるのかと聞く人もあるかも知れぬが、實際彼は他ほかの事に無精ぶしようなるだけそれだけ頭を叮嚀ていねいにする。吾輩が当家に参つてから今に至るまで主人はいかなる炎熱の日といえども五分刈に刈り込んだ事はない。必ずかならず二寸くらいごたいの長さにして、それを御大ごたいそうに左の方で分ける

のみか、右の端^{はじ}をちよつと跳ね返^はして澄^{すま}している。

これも精神病の徴候かも知れない。こんな氣取つた
分け方はこの机と一向調和^{いっこう}しないと思うが、あえて

他人に害を及ぼすほどの事でないから、誰も何とも
云わない。本人も得意である。分け方のハイカラな
のはさておいて、なぜあんなに髪を長くするのかと
思つたら実はこう云う訳^{わけ}である。彼のあ^あば^ばた^たは単に

彼の顔を侵蝕しんしょくせるのみならず、とくの昔むかしに脳天ま

で食い込んでいるのだそうだ。だからもし普通の人

のように五分刈や三分刈にすると、短かい毛の根本

から何十となくあばたがあらわれてくる。いくら撫な

でても、さすつてもぼつぽつがとれない。枯野に螢ほたる

を放ったようなもので風流かも知れないが、細君の

御意ぎよに入らんのは勿論もちろんの事である。髪さえ長くして

おけば露見しないですむところを、好んで自己の非

あば

を曝くにも当らぬ訳だ。なろう事なら顔まで毛を生

やして、こっちのあば、たも内済ないさいにしたいくらいなと

ころだから、ただで生はえる毛を銭ぜにを出して刈り込ま

ずがいこつ

せて、私は頭蓋骨の上まで天然痘てんねんとうにやられましたよ

ふいちよう

と吹聴する必要はあるまい。——これが主人の髪を

長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわけ

る原因で、その原因が鏡を見る訳で、その鏡が風呂場にある所以ゆえんで、しこうしてその鏡が一つしかない
と云う事実である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が
書齋に來ている以上は鏡が離魂病りこんびょうに罹かかったのかまた
は主人が風呂場から持つて來たに相違ない。持つて
來たとすれば何のために持つて來たのだらう。ある

いは例の消極的修養に必要な道具かも知れない。昔むか

し或る学者が何とかいう智識を訪とうたら、和尚おしょう両肌

を抜いで瓢かわらを磨ましておられた。何をこしらえなさる

と質問をしたら、なにさ今鏡を造ろうと思うて一生

懸命にやっておるところじやと答えた。そこで学者

は驚ろいて、なんぼ名僧でも瓢を磨して鏡とする事

は出来まいと云うたら、和尚からからと笑いながら

そうか、それじややめよ、いくら書物を読んでも道
はわからぬのもそんなものじやろと罵ののしつたと云うか
ら、主人もそんな事を聞き噉かじつて風呂場から鏡でも
持つて来て、したり顔に振り廻しているのかも知れ
ない。大分物騒だいぶになつて来たなと、そつと窺うかがつてい
る。

かくとも知らぬ主人ははなはだ熱心なる容子ようすをも

いっちょやうかい

つて一張来の鏡を見つめている。元来鏡というもの

は気味の悪いものである。深夜蠟燭ろうそくを立てて、広い

部屋のなかで一人鏡を覗のぞき込むにはよほどの勇氣が

いるそうだ。吾輩などは始めて当家の令嬢から鏡を

顔の前へ押し付けられた時に、はっと仰天ぎょうてんして屋敷

のまわりを三度馳かけ回ったくらいである。いかに白

昼といえども、主人のようにかく一生懸命に見つめ

ている以上は自分で自分の顔が怖こわくなるに相違ない

。ただ見てさえあまり気味のいい顔じゃない。やや

あつて主人は「なるほどきたない顔だ」と独ひとり言ことを

云つた。自己の醜を自白するのはなかなか見上げた

ものだ。様子から云うとたしかに気違しよさの所作だが言

うことは真理である。これがもう一歩進むと、己おのれ

の醜惡な事が怖こわくなる。人間は吾身が怖ろしい悪党

であると云う事実を徹骨徹髓に感じた者でないと苦
労人とは云えない。苦労人でないとどうてい解脱げだつは
出来ない。主人もここまで来たらついでに「おお怖こわ
い」とでも云いそうなものであるがなかなか云わな
い。「なるほどきたない顔だ」と云ったあとで、何
を考え出したか、ぷうつと頬ほっぺたを膨ふくらました。
そうしてふくれた頬っぺたを平手ひらてで二三度叩たたいて見

る。何のまじないだか分らない。この時吾輩は何だかこの顔に似たものがあるらしいと云う感じがした。よくよく考えて見るとそれは御三おさんの顔である。つ

いでだから御三の顔をちよつと紹介するが、それは

それはふくれたものである。この間さる人が穴守稲あなもりい

荷なりから河豚ふぐの提灯ちようちんをみやげに持って来てくれたが、

ちようどあの河豚提灯ふぐちようちんのようにふくれている。あま

りふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失している。

もつとも河豚のふくれるのは万遍なく真丸まんまるにふくれ

るのだが、お三とくると、元来の骨格が多角性であ

って、その骨格通りにふくれ上がるのだから、まる

で水気すいきになやんでいる六角時計のようなものだ。御

三が聞いたらさぞ怒おこるだろうから、御三はこのくら

いにしてまた主人の方に帰るが、かくのごとくあら

ん限りの空気をもつて頬ほつぺたをふくらませたる彼は前申ぜんす通り手のひらで頬ほぺたを叩きながら「このくらい皮膚が緊張するとあばたも眼につかん」とまたひとり語ひとごとをいった。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「こうして見ると大変目立つ。

やっぱりまともに日の向いてる方が平たいらに見える。奇

体な物だなあ」と大分感心だいぶんした様子であつた。それ

から右の手をうんと伸のばして、出来るだけ鏡を遠距離

に持つて行つて静かに熟視している。「このくらい

離れるとそんなでもない。やはり近過ぎるといかに

。――顔ばかりじゃない何でもそんなものだ」と悟

つたようなことを云う。次に鏡を急に横にした。そ

うして鼻の根を中心にして眼や額や眉まゆを一度にこの

中心に向つてくしやくしやとあつめた。見るからに

不愉快な容貌ようぼうが出来上つたと思つたら「いやこれは

駄目だ」と当人も気がついたと見えて早々そうそうやめてし

まった。「なぜこんなに毒々しい顔だろう」と少々

不審の体ていで鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ引き寄せ

る。右の人指しゆびで小鼻を撫なでて、撫でた指の頭

を机の上にあつた吸すい取り紙がみの上へ、うんと押しつけ

る。吸い取られた鼻の膏あぶらが丸まるく紙の上へ浮き出し

た。いろいろな芸をやるものだ。それから主人は鼻

の膏を塗抹とまつした指頭しとうを転じてぐいと右眼うがんの下瞼したまぶたを裏

返して、俗に云うべっかんこうを見事にやって退のけ

た。あばたを研究しているのか、鏡と睨にらめ競くらをして

いるのかその辺は少々不明である。気の多い主人の

事だから見ているうちにいろいろになると見える。

それどころではない。もし善意をもつて蒟蒻問答的こんにやくもんどうてき

に解釈してやれば主人は見性自覚けんしょうじかくの方便ほうべんとしてかよ

うに鏡を相手にいろいろな仕草しぐさを演じているのかも

知れない。すべて人間の研究と云うものは自己を研

究するのである。天地と云い山川さんせんと云い日月じつげつと云い

星辰せいしんと云うも皆自己の異名いみょうに過ぎぬ。自己おを措いて

他に研究すべき事項は誰人たれびとにも見出し得ぬ訳だ。も

し人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、飛び出す途端に自己はなくなってしまう。しかも自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない。いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出来ない相談である。それだから古来の豪傑はみんな自力で豪傑になった。人のお蔭で自己が分るくらいなら、自分の代りに牛肉を喰わして、堅いか柔かいか判断の出来る

訳だ。^{あした}朝に法を聴き、^{ゆうべ}夕に道を聴き、^{ござんとうか}梧前灯下に書

卷を手にするのは皆この自証^{じしよう}を挑撥^{ちようはつ}するの方便^{ほうべん}の具^ぐ

に過ぎぬ。人の説く法のうち、他の弁ずる道のうち

、乃至^{ないし}は五車^{ごしや}にあまる蠹紙^{としたいり}堆裏に自己が存在する所^ゆ

以^{えん}がない。あれば自己の幽霊である。もつともある

場合において幽霊は無^{むれい}霊より優るかも知れない。影

を追えば本体に逢着^{ほうちやく}する時がないとも限らぬ。多く

の影は大抵本体を離れぬものだ。この意味で主人が鏡をひねくっているなら大分話せる男だ。エピクテタスなどを鵜呑うのみにして学者ぶるよりも遥はるかにましだ
と思う。

鏡は己惚うぬぼれの醸造器であるごとく、同時に自慢の消

毒器である。もし浮華虚栄の念をもつてこれに対する時はこれほど愚物を煽動せんどうする道具はない。昔から

増上慢をもつて己を害し他を戕うた事蹟の三分の二

ぞうじょうまん

おのれ

そのこ

じせき

はたしかに鏡の所作である。仏国革命の当時物好き

しよさ

な御医者さんが改良首きり器械を発明して飛んだ罪

をつくったように、始めて鏡をこしらえた人も定め

し寢覚ねざめのわるい事だろう。しかし自分に愛想あいその尽き

かけた時、自我の萎縮した折は鏡を見るほど薬にな

る事はない。けんしゅうりようぜん妍醜瞭然だ。こんな顔でよくまあ人で

そうろうそ

こんにち

候と反りかえって今日まで暮らされたものだと気が

つくにきまっている。そこへ気がついた時が人間の

しょうがい

生涯中もつともありがたい期節である。自分で自分

の馬鹿を承知しているほど尊たつとく見える事はない。

じかくせい
ばか

この自覚性馬鹿の前にはあらゆるえらがり屋がこと

ごとく頭を下げて恐れ入らねばならぬ。当人は昂然こうぜん

けいふ
しょうしょう

として吾を軽侮嘲笑けいふしょうしょうしているつもりでも、こちらか

ら見るとその昂然たところが恐れ入って頭を下げ
ている事になる。主人は鏡を見て己おのれの愚を悟るほ
どの賢者ではあるまい。しかし吾が顔に印せられる
痘痕とうこんの銘めいくらいは公平に読み得る男である。顔の醜
いのを自認するのは心の賤いやしきを会得えとくする楷梯かいていにも
なろう。たのもしい男だ。これも哲学者からやり込
められた結果かも知れぬ。

玉のごとく腐爛ふらんするにきまつてる。やがて眼ひらを開い

て鏡に向つたところを見ると、果せるかなどんより

として北国の冬空のように曇つていた。もつとも平ふ

常だんからあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形容

詞を用いると混沌こんとんとして黒眼と白眼が剖判ほうはんしないく

らい漠然ばくぜんとしている。彼の精神が朦朧もうろうとして不得要

領底ていに一貫いしているごとく、彼の眼も曖々然あいあいぜんまいまいぜん昧々然

として長えに眼窩がんかの奥に漂ただようている。これは胎毒たいどくの

ほうそう

ためだとも云うし、あるいは疱瘡ほうそうの余波だとも解釈

されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介に
なつた事もあるそうだが、せつかく母親の丹精も、

あるにその甲斐かいあらばこそ、今日こんにちまで生れた当時の

ままでぼんやりしている。吾輩ひそかに思うにこの

状態は決して胎毒や疱瘡のためではない。彼の眼玉

かいじゅうこんだく

ほうこう

がかように晦渋溷濁の悲境に彷徨しているのは、と

ふとうふめい

りも直さず彼の頭脳が不透不明の實質から構成され

あんたんめいもう

ていて、その作用が暗憺溟濛の極に達しているから

、自然とこれが形体の上にあらわれて、知らぬ母親

にいらぬ心配を掛けたんだらう。煙たつて火あるを

ぐ

知り、まなこ濁つて愚なるを証す。して見ると彼の

てんぽうせん

眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保銭のごとく穴が

あいているから、彼の眼もまた天保銭と同じく、大きな割合に通用しないに違ない。

今度は髯ひげをねじり始めた。元来から行儀のよくな

い髯でみんな思い思いの姿勢をとって生はえている。

いくら個人主義が流行はやる世の中だって、こう町々まちまちに

我儘わがままを尽くされては持主の迷惑はさこそと思いやら

れる、主人もここに鑑かんがみるところあつて近頃はおおい大に

訓練を与えて、出来る限り系統的に安排あんばいするよう

尽力している。その熱心の功果こうかは空むなしからずして昨

今ようやく歩調が少しととのうようになつて来た。

今までは髯はが生えておつたのであるが、この頃は髯
を生やしているのだと自慢するくらいになつた。熱

心は成効の度に応じて鼓舞こぶせられるものであるから

、吾が髯の前途有望なりと見てとつて主人は朝な夕

な、手がすいておれば必ず髯ひげに向つて鞭撻べんたつを加える

。彼のアムビションは独逸ドイツ皇帝陛下のように、向上

の念さかんの熾たくわな髯を蓄えるにある。それだから毛孔けあなが横

向であらうとも、下向であらうとも聊いさやか頓着じなく十

把つぱひ一にぎとからげに握にぎつては、上の方へ引つ張り上げる

。髯もさぞかし難儀であらう、所有主たる主人すら

時々いは痛い事もある。がそこが訓練である。否いやでも

応でもさかに扱こき上げる。門外漢から見ると気の知れない道楽のようであるが、当局者だけは至当の事と心得ている。教育者がいたずらに生徒の本性ほんせいを撓ためて、僕の手柄を見給えと誇るようなもので毫ごうも非難すべき理由はない。

主人が満腔まんこうの熱誠をもつて髯を調練していると、台所から多角性の御三おさんが郵便が参りましたと、例の

ごとく赤い手をぬつと書斎の中へ出した。右手に髯

をつかみ、左手に鏡を持った主人は、そのまま入口

の方を振りかえる。八の字の尾に逆か立ちを命じた

ような髯を見るや否や御多角はいきなり台所へ引き

戻して、ハハハハと御釜の蓋へ身をもたして笑った

。主人は平気なものである。悠々と鏡をおろして郵

便を取り上げた。第一信は活版ずりで何だかいかめ

しい文字が並べてある。読んで見ると

拝啓いよいよ愈御多祥奉賀候回顧すれば日露の戦役は連戦連

勝の勢いきおいに乗じて平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士

は今や過半万歳声裡りに凱歌を奏し国民の歡喜何もの

か之これに若しかん曩さきに宣戦の大詔煥発たいしやうかんぱつせらるるや義勇公

に奉じたる将士は久しく万里の異境に在ありて克よく寒

暑の苦難を忍び一意戦鬪に従事し命めいを国家に捧げた

るの至誠は永く銘して忘るべからざる所なり而してしこう

軍隊の凱旋は本月を以て殆ほとんど終了を告げんとす依

つて本会は来る二十五日を期し本区内一千有余の出

征将校下士卒に対し本区民一般を代表し以て一大凱

旋祝賀会を開催し兼て軍人遺族を慰藉いしやせんが為め熱

誠これ之を迎え聊いささか感謝の微衷びちゆうを表し度就たくついては各位の御協

賛を仰ぎ此盛典を挙行するの幸を得ば本会の面目不これ

にすぎず

そろ

なにとぞ

ふる

ぎえん

ひた

過之と存候間何卒御賛成奮ふるつて義捐あらんことを只

すら

た

そろ

管希望の至に堪えず候敬具

とあつて差し出し人は華族様である。主人は黙読一

のち

過の後直ちに封の中へ巻き納めて知らん顔をしてい

る。義捐などは恐らくしそうにない。せんだつて東

北凶作の義捐金を二円とか三円とか出してから、逢

ごと

う人毎に義捐をとられた、とられたと吹聴ふいちようしている

くらいである。義捐とある以上は差し出すもので、

とられるものでないには極きまっている。泥棒にあつた

のではあるまいし、とられたとは不穩当である。し

かるにも関せず、盜難にでも罹かかったかのごとくに思

つてゐるらしい主人がいかに軍隊の歡迎だと云つて、

いかに華族様の勧誘だと云つて、強談ごうだんで持ちかけた

らいざ知らず、活版の手紙くらいで金銭を出すよう

な人間とは思われない。主人から云えば軍隊を歓迎

する前にまず自分を歓迎したいのである。自分を歓

迎した後あとなら大抵のものは歓迎しそうであるが、自

分が朝夕ちようせきに差し支さえる間は、歓迎は華族様にまか任せて

おく了見らしい。主人は第二信を取り上げたが「ヤ

、これも活版だ」と云つた。

時下秋冷の候こうに候そろ処貴家益々御隆盛の段奉賀上候陳がしあげたてまつりそのふ

れば本校儀も御承知の通り一昨々年以来二三野心家

の為に妨げられ一時其極に達し候得共是れ皆不肖そうらえども
ふしよう

しんさく

針作が足らざる所に起因すと存じ深く自ら警むる所みづか
いまし

がしんしやうたん

あり臥薪嘗胆其の苦辛くしんの結果漸く茲ようやに独力以て我が
ここ

理想に適するだけの校舎新築費を得るの途を講じ候そろ

其そは別義にも御座なく別冊裁縫秘術綱要と命名せる

書冊出版の義に御座候そろ本書は不肖針作しんさくが多年苦心研

究せる工芸上の原理原則に法のつとり真に肉を裂き血を

絞るの思を為なして著述せるものに御座候そろ因よつて本書

あまね

を普く一般の家庭へ製本実費に些少さしやうの利潤を附して

ごこうぎゆう

御購求を願ひ一面斯道しどう発達の一助となすと同時に又

きんしょう

一面には僅少の利潤を蓄積して校舎建築費に当つる

つもり

そろ

なんとも

心算に御座候依つては近頃何共恐縮の至りに存じ候

なしくださる

おぼしめ

ここ

えども本校建築費中へ御寄附被成下と御思召し茲に

そろ

呈供仕候秘術綱要一部を御購求の上御侍女の方へな

なしくだされそろ

なしくだされ

りとも御分与被成下候て御賛同の意を御表章被成下

たく
そろそろそう

度伏して懇願仕候勿々敬具

大日本女子裁縫最高等大学院

校長

縫田針作ぬいだしんさく

九拜

とある。主人はこの鄭重ていちょうなる書面を、冷淡に丸めて

ぽんと屑籠くずかごの中へ抛ほうり込んだ。せつかくの針作君の

九拜も臥薪嘗胆も何の役にも立たなかったのは気の

毒である。第三信にかかる。第三信はすこぶる風変

りの光彩を放っている。状袋が紅白のだんだらで、

飴^{あめ}ん棒^{ぼう}の看板のごとくはなやかなる真中に珍^{ちん}野^の苦^く沙^し
弥^や先生^み虎^こ皮^ひ下^かと八^は分^っ体^{ぶんたい}で肉^{にく}太^たに認^{した}めてある。中^なから
お太^たさんが出るかどうか受け合^あわ^わないが表^{おも}だけ^ては
すこぶる立派なものだ。

若^もし我^{われ}を以^{もつ}て天^{てん}地^ちを律^{りつ}すれば一^{ひと}口^{くち}にして西^{せい}江^{こう}の水^{みづ}を
吸^すい^いつ^つく^くす^すべ^べく、若^もし天^{てん}地^ちを以^{もつ}て我^{われ}を律^{りつ}すれば我^{われ}は

すなわはくじよう

則ち陌上の塵のみ。すべからく道え、天地と我と什

んも

麼の交渉がある。……始めて海鼠を食い出せる人は

なまこ

いだ

其胆力に於て敬すべく、始めて河豚を喫せる漢は其

ふぐ

きつ

おとこ

勇氣に於て重んずべし。海鼠を食えるものは親鸞の

おい

くら

しんらん

再来にして、河豚を喫せるものは日蓮の分身なり。

ふぐ

にちれん

苦沙弥先生の如きに至っては只干瓢の酢味噌を知る

ただかんぴよう

すみそ

のみ。干瓢の酢味噌を食って天下の士たるものは、

くら

われ未だ之を見ず。……

親友も汝を売るべし。なんじ
父母も汝に私あるべし。わたくし
愛人

も汝を棄つべし。富貴は固より頼みがたかるべし。ふっき
もと

しやくろくいつちよう

爵禄は一朝にして失うべし。汝の頭中に秘蔵する学

問には讞が生えるべし。かび
は
汝何を恃まんとするか。たの
天

地の裡に何をたのまんとするか。うち
神？ 神は人間の

苦しまぎれに捏造せる土偶のみ。でつぞう
どぐう
人間のせつな糞のぐそ

凝結せる臭骸のみ。恃^{たの}むまじきを恃んで安しと云う

。咄々^{とつとつ}、酔漢漫^{みだ}りに胡乱^{うるん}の言辞を弄して、蹣跚^{まんさん}とし

て墓に向う。油尽きて灯自^{とのおのずか}ら滅す。業尽きて何物を

か遺^{のこ}す。苦沙弥先生よろしく御茶でも上がれ。……

人を人と思わざれば畏^{おそ}るる所なし。人を人と思わざ

るものが、吾を吾と思わざる世を憤^{いきどお}るは如何^{いかに}。権貴

栄達の士は人を人と思わざるに於て得たるが如し。

只他の吾を吾と思わぬ時に於て怫然ふっぜんとして色を作なす

。任意に色を作し来れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思うとき、他ひとの吾を吾と思わぬ時、不

平家は発作的ほっさてきに天降あまくだる。此発作的活動を名づけて革

命という。革命は不平家の所為にあらず。権貴栄達

の士が好んで産する所なり。朝鮮に人參多にんじんし先生何

が故に服せざる。

在巢鴨

天道公平

てんどうこうへい

再拝

針作君は九拝であつたが、この男は単に再拝だけである。寄附金の依頼でないだけに七拝ほど横風おうふうに構えている。寄附金の依頼ではないがその代りすこぶる分りにくいものだ。どこの雑誌へ出しても没書になる価値は充分あるのだから、頭脳の不透明をも

って鳴る主人は必ず寸断寸断に引き裂いてしまおうだ

ろうと思のおもいのほか、打ち返し打ち返し読み直している

。こんな手紙に意味があると考えて、あくまでその

意味を究めきわめようという決心かも知れない。およそ天

地の間にかんにわからんものは沢山あるが意味をつけてつ

かないものは一つもない。どんなむずかしい文章で

も解釈しようとするれば容易に解釈の出来るものだ。

人間は馬鹿であると云おうが、人間は利口であると云おうが手もなくわかる事だ。それどころではない

。人間は犬であると云つても豚であると云つても別に苦しむほどの命題ではない。山は低いと云つても

構わん、宇宙は狭いと云つても差^さし支^{つか}えはない。烏

が白くて小町が醜婦で苦沙弥先生が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙でも何とか蚊^か

とか理窟りくつさえつけなければどうとも意味はとれる。こと

に主人のように知らぬ英語を無理矢理にこじ附けて

説明し通して来た男はなおさら意味をつけたがるの

である。天氣の悪るいになぜグード・モーニング

ですかと生徒に問われて七日間なぬかかん考えたり、コロンバ

スと云う名は日本語で何と云いますかと聞かれて三

日三晩かかって答を工夫するくらいな男には、干瓢かんぴょう

の酢味すみそ噌が天下の士であらうと、朝鮮の仁参にんじんを食つ

て革命を起そうと随意的意味は随処に湧わき出る訳で

ある。主人はしばらくしてグード・モーニング流に

この難解な言句ごんくを呑み込んだと見えて「なかなか意

味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違ない

。天晴あっぱれな見識だ」と大變賞賛した。この一言いちごんでも主

人の愚ぐなところはよく分るが、翻ひるがえって考えて見ると

いささかもつともな点もある。主人は何に寄らずわ
からぬものをありがたがる癖を有している。これは
あながち主人に限った事でもなかろう。分らぬところ
には馬鹿に出来ないものが潜伏して、測るべから
ざる辺には何だかけだか気高い心持が起るものだ。それだ
から俗人はわからぬ事をわかつたように吹聴するに
ふいちよう
も係らず、かかわ学者はわかつた事をわからぬように講釈

する。大学の講義でもわからん事を喋舌しゃべる人は評判

がよくってわかる事を説明する者は人望がないので

もよく知れる。主人がこの手紙に敬服したのも意義

が明瞭であるからではない。その主旨が那邊なへんに存す

るかほとんど捕え難いとらからである。急に海鼠なまこが出て

来たり、せつな糞ぐそが出てくるからである。だから主

人がこの文章を尊敬する唯一の理由は、道家どうけで道德

経を尊敬し、じゆか えききよう儒家で易经を尊敬し、ぜんけ りんざいろく禅家で臨済録を

尊敬すると一般で全く分らんからである。但しただ全然

分らんでは気がすまんから勝手な註釈をつけてわかつた顔だけはする。わからんものをわかつたつもり

で尊敬するのは昔から愉快なものである。——主人

は恭うやうやしく八分はっぶんたい体の名筆を巻き納めて、これを机上に

置いたまま懷手ふところをして冥想めいそうに沈んでいる。

ところへ「頼む頼む」と玄関から大きな声で案内を乞う者がある。声は迷亭のようだが、迷亭に似合わずしきりに案内を頼んでいる。主人は先から書斎のうちでその声を聞いているのだが懐手のまま毫も動こうとしない。取次に出るのは主人の役目でないという主義か、この主人は決して書斎から挨拶をしなかった事がない。下女は先刻洗濯石鹼さつきせんたくシャボンを買いに出た。細

はばか

君は憚りである。すると取次に出べきものは吾輩だ
けになる。吾輩だつて出るのはいやだ。すると客人
は沓脱くつぬぎから敷台へ飛び上がつて障子を開け放つてつ
かつか上り込んで来た。主人も主人だが客も客だ。

ふすま

座敷の方へ行つたなと思うと襖を二三度あけたり閉
てたりして、今度は書斎の方へやつてくる。

じょうだん

「おい冗談じゃない。何をしているんだ、御客さん

だよ」

「おや君か」

「おや君かもしれないもんだ。そこにいるなら何とか云え
ばいいのに、まるで空家あきやのようじゃないか」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考えていたって通れくらいは云えるだろう」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだってから精神の修養を力めてつといるんだもの

」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくなっ

た日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれちゃ

困るんだぜ。実は僕一人来たんじやないよ。大変な

御客さんを連れて来たんだよ。ちよつと出て逢つて

くれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちよつと出て逢つてくれたまえ。

是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

主人は懷手ふところのままぬつと立ちながら「また人を担かつ

ぐつもりだろう」と椽側えんがわへ出て何の気もつかずに客

間へ這入はいり込んだ。すると六尺の床を正面に一個の

老人が肅然しゆくぜんと端坐たんざして控ひかえている。主人は思わず懷

から両手を出してぺたりと唐紙からかみの傍そばへ尻を片づけて

しまった。これでは老人と同じく西向きであるから

双方共挨拶のしようがない。昔堅氣むかしかたぎの人は礼義はや

かましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を

うな

促がす。主人は両三年前までは座敷はどこへ坐つて

も構わんものと心得ていたのだが、その後ある人か

ら床の間の講釈を聞いて、あれは上段の間の^ま変化し

たもので、上使^{じょうし}が坐わる所だと悟つて以来決して床

の間へは寄りつかない男である。ことに見ず知らず

の年長者が頑^{がん}と構えているのだから上座^{じょうざ}どころでは

ない。挨拶さえ碌ろくには出来ない。一応頭をさげて
「さあどうぞあれへ」と向うの云う通りを繰り返し
た。

「いやそれでは御挨拶が出来かねますから、どうぞ
あれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人はいい
加減に先方の口上を真似ている。

「どうもそう、御謙遜ごけんそんでは恐れ入る。かえって手前

が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は

真赤まっかになつて口をもごもご云わせている。精神修養

もあまり効果がないようである。迷亭君は襖ふすまの影か

ら笑いながら立見をしていたが、もういい時分だと

思つて、後うしろから主人の尻を押しやりながら

「まあ出たまえ。そう唐紙からかみへくつついては僕が坐る

所がない。遠慮せず前へ出たまえ」と無理に割り込んでくる。主人はやむを得ず前の方へすり出る。

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すそうで、いつか参上の上御高話を拝聴致

そうと存じておりましたところ、幸い今日は御近所

を通行致したもので、御礼かたがた旁伺った訳で、どうぞ御

見知りおかれまして今後共宜よろしく」と昔むかし風な口上

を淀よどみなく述べたてる。主人は交際の狭い、無口な

人間である上に、こんな古風な爺じいさんとはほとんど

出会った事がないのだから、最初から多少場ばうての

気味で辟易へきえきしていたところへ、滔とう々と浴びせかけら

れたのだから、朝鮮仁参も飴^{あめ}ん棒の状袋もすっかり

忘れてしまつてただ苦しまぎれに妙な返事をする。

「私も……私も……ちよつと伺がうはずでありまし

たところ……何分よろしく」と云い終つて頭を少々

畳から上げて見ると老人は未だに平伏^{いま}しているので

はつと恐縮してまた頭をぴたりと着けた。

老人は呼吸を計つて首をあげながら「私ももとは

こちらに屋敷も在^あつて、永らく御膝元でくらししたも

のですが、瓦解^{がかい}の折にあちらへ参つてからとんと

出てこんのでな。今来て見るとまるで方角も分らん

くらいで、——迷亭にでも伴^つれてあるいてもらわん

と、とても用達^{ようたし}も出来ません。滄桑^{そうそう}の変^{へん}とは申しな

がら、御入国^{ごにゆうこく}以来三百年も、あの通り將軍家の……

「と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが、明治の代よも結構ですぜ。昔は赤十字なんてものもなかったでしょう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う事は明治の御み代よでなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭

でこの通り今日こんにちの総会にも出席するし、宮殿下の御

声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の総会があるの。でわざわざ静岡から出て来てね、今日いっしょに上野へ出掛けたんだが今その帰りがけなんだよ。それだからこの通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着ているのさ」と注意する。なるほどフロ

ツクコートを着ている。フロックコートは着ている

がすこしもからだに合わない。袖そでが長過ぎて、襟えりが

おっ開ひらいて、背中せなかへ池が出来て、腋わきの下が釣るし上

がっている。いくら不恰好ぶかつこうに作ろうと云ったって、

こうまで念を入れて形を崩くずす訳にはゆかないだろう

。その上白シャツと白襟しろえりが離れ離れになって、仰あおむ

くと間のどぼとけから咽喉仏が見える。第一黒い襟飾りが襟に

属しているのか、シャツに属しているのか判然しな

はんぜん

い。フロックはまだ我慢が出来るが白髪しらがのチョン髷まげ

ははなはだ奇観である。評判の鉄扇てっせんはどうかと目を

注つけると膝の横にちゃんと引きつけている。主人は

この時ようやく本心に立ち返って、精神修養の結果

を存分に老人の服装に応用して少々驚いた。まさか

迷亭の話ほどではなかろうと思っていたが、逢って

見ると話以上である。もし自分のあばたが歴史的研究の材料になるならば、この老人のチョンまげ鬚や鉄扇はたしかにそれ以上の価値がある。主人はどうかしてこの鉄扇の由来を聞いて見たいと思ったが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云って話を途切らすのも礼に欠けると思つて

「だいぶ人が出ましたろう」と極きわめて尋常な問をか

けた。

「いや非常な人で、それでその人が皆わしをじろじろ見るので——どうも近来は人間が物見高くなつたようだがすな。昔むかしはあんなではなかつたが」

「ええ、さよう、昔はそんなではなかつたですな」

と老人らしい事を云う。これはあながち主人が知しつ

高たか振かりをした訳ではない。ただ朦朧もうろうたる頭脳から好

い加減に流れ出す言語と見れば差し支えない。

「それにな。皆この甲割りへ目を着けるので」

「その鉄扇は大分重だいぶいものでございましょう」

「苦沙弥君、ちよつと持つて見たまえ。なかなか重

いよ。伯父さん持たして御覧なさい」

老人は重たそうに取り上げて「失礼ですが」と

主人に渡す。京都の黒谷くろだにで参詣人さんけいにんが蓮生坊れんしょうぼうの太刀たちを

戴いたくようなかたで、苦沙弥先生しばらく持っていた

が「なるほど」と云ったまま老人に返却した。

「みんながこれを鉄扇鉄扇と云うが、これは甲割と

称となえて鉄扇とはまるで別物で……」

「へえ、何にしたものでございましょう」

「兜を割るので、——敵の目がくらむ所を撃うちとつ

たものでがす。くすのきまさしげ楠正成時代から用いたようで……」

「伯父さん、そりや正成の甲割ですかね」

「いえ、これは誰のかわからん。しかし時代は古い。
建武時代けんむじだいの作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱ってしましたぜ。苦沙弥君、今日歸りにちようどいい機会だから大学を通り抜けるついでに理科へ寄って、物理の実験室を見せて貰ったところがね。この甲割が鉄だ

ものだから、磁力の器械が狂って大騒ぎさ」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で、しょう性のいい鉄だから決してそんな虞おそれはない」

「いくら性のいい鉄だってそうはいきませんよ。現に寒月がそう云ったから仕方がないです」

「寒月というのは、あのガラス球を磨だまつてすいる男かい。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何かやる事

がありそうなものだ」

かわいそう

「可愛想に、あれだって研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

「玉を磨^すりあげて立派な学者になれるなら、誰にで

も出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人に

でも出来る。ああ云う事をする者を漢土^{かんど}では玉人^{きゆうじん}と

称したもので至って身分の軽いものだ」と云いなが

ら主人の方を向いて暗に賛成を求める。

「なるほど」と主人はかしこまっている。

「すべて今の世の学問は皆形而下けいじかの学でちよつと結

構なようだが、いざとなるとすこしも役には立ちま

せてな。昔はそれと違って侍は皆命懸けいのちがの商買しょうばいだ

から、いざと云う時に狼狽ろうばいせぬように心の修業を致

したもので、御承知でもあらつしやろうがなかなか

玉を磨ったり針金を縋よったりするような容易たやすいもの
ではなかったのがすよ」

「なるほど」とやはりかしこまっている。

「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代りに懷ふと
手ころでをして坐り込んでるんでしよう」

「それだから困る。決してそんな造作ぞうさのないもので
はない。孟子もうし きゆうほうしんは求放心と云われたくらいだ。邵康節しょうこうせつ

は心要放しんようほうと説いた事もある。また仏家ぶつかでは中峯和尚ちゅうほうおしょう

と云うのが具不退ぐふたいてん転と云う事を教えている。なかなか

か容易には分らん」

「とうてい分りっこありませんね。全体どうすれば

いいんです」

「御前は沢菴たくあんぜんじ禪師ふどうちしんみようろくの不動智神妙録ふどうちしんみようろくというものを読ん

だ事があるかい」

「いいえ、聞いた事ありません」

「心をどこに置こうぞ。敵の身の働はたらきに心を置けば、

敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀たちに心を置

けば、敵の太刀に心を取らるるなり。敵を切らんと

思うところに心を置けば、敵を切らんと

に心を取らるるなり。わが太刀に心を置けば、我太

刀に心を取らるるなり。われ切られじと思うところ

に心を置けば、切られじと思うところに心を取らるるなり。人の構かまえに心を置けば、人の構に心を取らるるなり。とかく心の置きどころはないとある」

「よく忘れずに暗誦あんしょうしたものです。伯父さんもなかなか記憶がいい。長いじやありませんか。苦沙弥君分ったかい」

「なるほど」と今度もなるほどですましてしまった

。「なあ、あなた、そうでござりましょう。心をどこに置こうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば……」

「伯父さん苦沙弥君はそんな事は、よく心得ているですよ。近頃は毎日書斎で精神の修養ばかりして
いるんですから。客があつても取次に出ないくらい

心を置き去りにしているんだから大丈夫ですよ」

「や、それは御奇特ごきどくな事で——御前などもちとごい
つしよにやったらよかろう」

「へへへそんな暇はありませんよ。伯父さんは自分
が楽なからだだもんだから、人も遊んでると思って
いらつしやるんでしよう」

「實際遊んでるじゃないかの」

「ところが閑中かんちゅう自おのから忙ぼうありでね」

「そう、粗忽そこつだから修業をせんといかないと云うの

よ、忙中おのずか自かんら閑ありと云う成句せいくはあるが、閑中自ら

忙ありと云うのは聞いた事がない。なあ苦沙弥さん

」

「ええ、どうも聞きませんようで」

「ハハハハそうなたちやあ敵かなわない。時に伯父さん

どうです。久し振りで東京の鰻うなぎでも食っちゃあ。竹ちく

葉ようでも奢おごりましょう。これから電車で行くとすぐで

す」

「鰻も結構だが、今日はこれからす、い原はらへ行く約束があるから、わしはこれで御免ごうむを蒙ろう」

「ああ杉原すぎはらですか、あの爺じいさんも達者ですね」

「杉原すぎはらではない、す、い原はらさ。御前はよく間違ばかり

云つて困る。他人の姓名を取り違えるのは失礼だ。

よく氣をつけんといけない」

「だって杉原すぎはらとかいてあるじやありませんか」

「杉原すぎはらと書いてすい原はらと読むのさ」

「妙ですね」

「なに妙な事があるものか。名目みょうもく読みと云つて昔か

らある事さ。蚯蚓きゅういんを和名わみょうでみみずと云う。あれは目、

見ずの名目よみで。蝦蟆がまの事をかいると云うのと同

じ事さ」

「へえ、驚ろいたな」

「蝦蟆を打ち殺すと仰向あおもむきにかえる。それを名目読

みにかいると云う。透垣すきがきをすい垣がき、莖立くきたちをくく立、

皆同じ事だ。杉原すいはらをすぎ原などと云うのは田舎いなかもの

の言葉さ。少し気を付けないと人に笑われる」

「じゃ、その、すい、原へこれから行くんですか。困ったな」

「なに厭いやなら御前は行かんでもいい。わし一人で行くから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車を雇って頂いて、ここから乗って行こう」

主人は畏まかしこつて直ちに御三おさんを車屋へ走らせる。老

人は長々と挨拶をしてチヨンまげあたま髻頭へ山高帽をいただ
いて帰って行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

「なるほど」と再び座蒲団ざぶとんの上に坐つたなり懷手ふところを

して考え込んでいる。

「ハハハ豪傑だろう。僕もああ云う伯父さんを持つて仕合せなものさ。どこへ連れて行ってもあの通りなんだぜ。君驚ろいたろう」と迷亭君は主人を驚ろかしたつもりで大に喜おおんでいる。

「なにそんなに驚きやしない」

「あれで驚かなけりや、胆力の据すわったもんだ」

「しかしあの伯父さんはなかなかえらいところがあ

るようだ。精神の修養を主張するところなぞは^{おお}大に敬服していい」

「敬服していいかね。君も今に六十くらいになるとやっぱりあの伯父見たように、時候おくれになるかも知れないぜ。しつかりしてくれたまえ。時候おくれの廻り持ちなんか気が利^きかないよ」

「君はしきりに時候おくれを気にするが、時と場合

によると、時候おくれの方がえらいんだぜ。第一今の学問と云うものは先へ先へと行くだけで、どこまで行つたつて際限はありやしない。とうてい満足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の学問は消極的で大に味あじわいがある。心そのものの修業をするのだから」とせんだつて哲学者から承わつた通りを自説のように述べ立てる。

「えらい事になつて来たぜ。何だか八木独仙君やぎどくせんのよ
うな事を云つてゐるね」

八木独仙と云う名を聞いて主人ははつと驚ろいた

。実はせんだつて臥が竜窟りようくつを訪問して主人を説服に及

んで悠然ゆうぜんと立ち歸つた哲学者と云うのが取も直さず

この八木独仙君であつて、今主人が鹿爪しかづめらしく述べ

立てている議論は全くこの八木独仙君の受売なので

あるから、知らんと思つた迷亭がこの先生の名を間か

んふようはつ

不容髪の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの

かりばな

仮鼻を挫くじいた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は劍けん

呑のんだから念を推おして見る。

「聞いたの、聞かないのって、あの男の説ときたら

こんにち

十年前学校にいた時分と今日と少しも変りやしな

い」

「真理はそう変るものじゃないから、変らないところ
がたのもしいかも知れない」

「まあそんな^{ひいき}鼻負があるから独仙もあれで立ち行く

んだね。第一八木と云う名からして、よく出来てる

よ。あの髯^{ひげ}が君全く山羊^{やぎ}だからね。そうしてあれも

寄宿舎時代からあの通り^{かっこう}の恰好で生えていたんだ。

名前の独仙なども振ふるったものさ。昔むかし僕のところへ

泊りがけに来て例の通り消極的の修養と云う議論を
してね。いつまで立っても同じ事を繰り返してやめ
ないから、僕が君もう寝ねようじやないかと云うと、
先生気楽なものさ、いや僕は眠くないとすまし切っ
て、やっぱり消極論をやるには迷惑したね。仕方が
ないから君は眠くなかろうけれども、僕の方は大変

眠いのだから、どうか寝てくれたまえと頼むように
して寝かしたまではよかったが——その晩鼠ねずみが出て
独仙君の鼻のあたまを噛かじつてね。夜なかに大騒ぎさ
。先生悟つたような事を云うけれども命は依然とし
て惜しかったと見えて、非常に心配するのさ。鼠の
毒が総身そうしんにまわると大変だ、君どうかしてくれと責
めるには閉口したね。それから仕方がないから台所

へ行つて紙片かみぎれへ飯粒を貼はつてごまかしてやったあね

「どうして」

「これは舶来こうやくの膏藥で、近来独逸ドイツの名医が發明した

ので、印度人インドじんなどの毒蛇に噛かまれた時に用いると即

効があるんだから、これさえ貼っておけば大丈夫だ

と云つてね」

「君はその時分からごまかす事に妙を得ていたんだね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全くだと思つて安心してぐうぐう寝てしまったのさ。あ

くる日起きて見ると膏藥の下から糸屑いとくずがぶらさがつ

て例の山羊髯やぎひげに引つかかっていたのは滑稽こっけいだったよ

「しかしあの時分より大分えらくなつたようだよ」
だいぶん

「君近頃逢つたのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い間話しをして行つた

」

「どうりで独仙流の消極説を振り舞わすと思つた」

「実はその時大おおに感心してしまつたから、僕も大に

奮発して修養をやるうと思つてるところなんだ」

「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を真まに受けるゝと馬鹿を見るぜ。一体君は人の言う事を何でもかでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは立派なものだがね、いざとなると御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知ってるだろう。あの時寄宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな」

「あれには当人大分説だいぶんがあるようじやないか」

「そうさ、当人に云わせるとすこぶるありがたいも

のさ。禪の機鋒きほうは峻峭しゅんしょうなもので、いわゆる石火せつかの機き

となると怖こわいくらい早く物に応ずる事が出来る。ほ

かのものが地震だと云って狼狽うろたえているところを自

分だけは二階の窓から飛び下りたところに修業の効

があらわれて嬉しいと云って、跛びっこを引きながらうれ

しがっていた。負惜みの強い男だ。一体禪ぜんとか仏ぶつとか云って騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはないぜ」
「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

「この間来た時禪宗坊主の寝言ねご見たような事を何か云ってったろう」

「うん電光影裏でんこうえいりに春風しゅんぷうをきるとか云う句を教えて行つたよ」

「その電光さ。あれが十年前からの御箱おはこなんだから

おかしいよ。無覚むかくぜんじ禪師の電光ときたら寄宿舍中誰も

知らないものはないくらいだった。それに先生時々

せき込むと間違えて電光影裏を逆さかさまに春風影裏に

電光をきると云うから面白い。今度ためして見たま

え。向むこうで落ちつき払って述べたてているところを、

こっちでいろいろ反対するんだね。するとすぐ顛倒てんとう

して妙な事を云うよ」

「君のようないたずらものに逢つちや叶かなわない」

「どつちがいたずら者だか分りやしない。僕は禅坊

主だの、悟つたのは大嫌だ。僕の近所に南蔵院なんぞういんと云

う寺があるが、あすここに八十ばかりの隠居がいる。

それでこの間の白雨ゆうだちの時寺内じないへ雷らいが落ちて隠居のい

る庭先の松の木を割さいてしまった。ところが和尚おしょう泰

然として平氣だと云うから、よく聞き合わせて見る

とからつんぽ聾なんだね。それじゃ泰然たる訳さ。大概そ

んなものさ。独仙も一人で悟っていればいいのだが

、ややともすると人を誘い出すから悪い。現に独仙

の御蔭で二人ばかりきちがい氣狂にされているからな」

「誰が」

「誰がつて。一人は理野りのとうぜん陶然さ。独仙の御蔭で大におおい

禅学に凝り固まつて鎌倉へ出掛けて行つて、とうと

う出先で氣狂になつてしまった。円覚寺えんがくじの前に汽車

の踏切りがあるだろう、あの踏切り内うちへ飛び込んで

レールの上で座禅をするんだね。それで向うから来

る汽車をとめて見せると云う大気焰だいきえんさ。もつとも汽

車の方で留つてくれたから一命だけはとりとめたが

、その代り今度は火に入いつて焼けず、水に入いつて溺おぼ

れぬ金剛不壞こんごうふえのからだだと号して寺内じないの蓮池はすいけへ這入はいつてぶくぶくあるき廻まわったもんだ」

「死んだかい」

「その時も幸さいわい、道場の坊主が通りかかって助けてく

れたが、その後東京ごへ帰かえってから、とうとう腹膜炎

で死んでしまった。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎

になった原因は僧堂で麦飯や万年漬まんねんづけを食たったせいだ

から、つまるところは間接に独仙が殺したようなもののさ」

「むやみに熱中するのも善^よし悪^あししだね」と主人はちよつと気味のわるいという顔付をする。

「本当にさ。独仙にやられたものがもう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰だい」

たちまちらうばいくん

「立町老梅君さ。あの男も全く独仙にそそのかされ

うなぎ

て鰻が天上するような事ばかり言っていたが、とう

とう君本物になってしまった」

「本物たあ何だい」

「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になったのさ」

「何の事だい、それは」

「八木が独仙なら、立町は豚ぶた仙せんさ、あのくらい食い

意地のきたない男はなかったが、あの食意地と禅坊

主のわる意地が併発へいはつしたのだから助からない。始め

は僕らも気がつかなかったが今から考えると妙な事

ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松

の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の国

では蒲鉾かまぼこが板へ乗って泳いでいますのって、しきり

に警句を吐いたものさ。ただ吐いているうちはよか

つたが君表のどぶへ金きんとんを掘りに行きましたように

うな

促うながすに至つては僕も降参したね。それから二三日にさんち

するとついに豚仙になつて巢鴨へ収容されてしまつ

た。元来豚なんぞが氣狂になる資格はないんだが、

全く独仙の御蔭であすこまで漕ぎ付けたんだね。独

仙の勢力もなかなかえらいよ」

「へえ、今でも巢鴨にいるのかい」

「いるだんじやない。自大狂じだいきやうで大気焰だいきえんを吐いている

。近頃は立町老梅なんて名はつまらないと云うので

みずか てんどうこうへい

、自ら天道公平と号して、天道の権化ごんげをもつて任じ

ている。すさまじいものだよ。まあちよつと行つて

見たまえ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。氣狂の癖にうまい名をつけたもの

だね。時々は孔平こうへいとも書く事がある。それで何でも

世人が迷つてゐるからぜひ救つてやりたいと云うので、
むやみに友人や何かへ手紙を出すんだね。僕も四五通貰つたが、中にはなかなか長い奴があつて不足税を二度ばかりとられたよ」

「それじゃ僕の所ところへ来たのも老梅から来たんだ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やつぱり赤

い状袋だろう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変った状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在^あって赤しと云う豚仙の格言を示したんだって：

：」

「なかなか因縁いんねんのある状袋だね」

「氣狂だけに大おおに凝こったものさ。そうして氣狂にな

つても食意地だけは依然として存しているものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。

君の所へも何とか云つて来たろう」

「うん、海鼠なまこの事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もつともだ。そ

れから？」

「それから河豚ふぐと朝鮮仁参ちようせんになじんか何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁参の取り合せは旨うまいね。おおかた河

豚を食って中あたつたら朝鮮仁参を煎せんじて飲めとでも云

うつもりなんだろう」

「そうでもないようだ」

「そうでなくても構わないさ。どうせ気狂だもの。」

それつきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

「アハハハ御茶でも上がれはきびし過ぎる。それで大に君をやり込め^{おおい}たつもりに違ない。大出来だ。天道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がつて、大に笑い出す。主人は少からざる尊敬をもつて反覆^{どくしやう}読誦し

た書翰しょかんの差出人が金箔きんぱくつきの狂人であると知ってか

ら、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨のような気が

して腹立たしくもあり、また瘋癲ふうてん病者の文章をさほ

ど心勞して翫味がんみしたかと思うと恥ずかしくもあり、

最後に狂人の作にこれほど感服する以上は自分も多

少神経に異状がありはせぬかとの疑念もあるので、

立腹と、慚愧ざんきと、心配の合併した状態で何だか落ち

つかない顔付をして控ひかえている。

折から表格子をあららかに開けて、重い靴の音が

二た足ほど沓脱くつぬぎに響いたと思つたら「ちよつと頼み

ます、ちよつと頼みます」と大きな声がする。主人

の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶる気軽な男で

あるから、御三おさんの取次に出るのも待たず、通れと云

いながら隔ての中の間まを二た足ばかりに飛び越えて

玄関に躍り出した。おど人のうちへ案内も乞わずにつか

つか這入はいり込むところは迷惑のようだが、人のうち

へ這入った以上は書生同様取次を務つとめるからはなは

だ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違な

い、その御客さんが玄関へ出張するのに主人たる苦

沙弥先生が座敷へ構え込んで動かん法はない。普通

の男ならあとから引き続いて出陣すべきはずである

が、そこが苦沙弥先生である。平氣に座布団の上へ尻を落ちつけている。但し落ちつけているのと、落ちついてゐるのとは、その趣は大分だいぶん似ているが、その實質はよほど違ふ。

玄関へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主人ちよつと御足労だが出てくれたまえ。君でなくっちゃ、間に合

わない」と大きな声を出す。主人はやむを得ずふところ懐手のままのそりのそりと出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握ったまましやがんで挨拶をしている。

すこぶる威厳のない腰つきである。その名刺には警

よしだとらぞう

視庁刑事巡查吉田虎蔵とある。虎蔵君と並んで立つ

ているのは二十五六の背せいの高い、いなせなとうざん唐棧ざんずく

めの男である。妙な事にこの男は主人と同じく懐手

をしたまま、無言で突立^{つった}っている。何だか見たよう

な顔だと思つてよくよく観察すると、見たようなど

ころじゃない。この間深夜御来訪になつて山の芋^{やま いも}を

持つて行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公然
と玄関からおいでになつたな。

「おいこの方^{かた}は刑事巡查でせんだつての泥棒をつら

まえたから、君に出頭しろと云うんで、わざわざお

いでになつたんだよ」

主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて鄭寧ていねいに御辞儀をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので、こつちが刑事だと早合点はやがてんをしたのだらう。泥棒も驚ろいたに相違ないが、まさか私わたしが泥棒ですよと断わる訳にも行かなかつたと見えて、すまして立ってい

る。やはり懐手のままである。もつとも手錠てじょうをはめ

ているのだから、出そうと云つても出る氣遣きづかいはない

。通例のものならこの様子でたいいはわかるはず

だが、この主人は当世の人間に似合わず、むやみに役人や警察をありがたがる癖がある。御上おかみの御威光

となると非常に恐しいものと心得ている。もつとも

理論上から云うと、巡査なぞは自分達が金を出して

番人に雇っておくのだくらいの事は心得ているのだが、実際に臨むといやにへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名主であつたから、上の者にぴよこぴよこ頭を下げて暮した習慣が、因果となつてかように子に酬むくつたのかも知れない。まことに氣の毒な至りである。

巡査はおかしかったと見えて、にやにや笑いなが

ら「あしたね、午前九時までに日本堤にほんづつみの分署まで来て下さい。——盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生た
いがい忘れている。ただ覚えているのは多々良三平たたらさんぺい
の山の芋だけである。山の芋などはどうでも構わん
と思つたが、盗難品は……と云いかけてあとが出な
いのはいかにも与太郎よたろうのようで体裁ていさいがわるい。人が

盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきながら、明瞭の答が出来んのは一人前ではない証拠だと、思い切って「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒はこの時よほどおかしかったと見えて、下を向いて着物の襟へあごえりを入れた。迷亭はアハハと笑いながら「山の芋がよほど惜しかったと見えるね

」と云った。巡查だけは存外真面目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻ったようです。――まあ来て見たら分るでしょう。

それでね、下げ渡したら請書うけしょが入るから、印形いんぎようを忘

れずに持つておいでなさい。――九時までに来なく

ってはいかん。にほんづつみぶんしよ日本堤分署です。――浅草警察署の

かんかつない管轄内の日本堤分署です。――それじゃ、さような

ら」^{ひと}と独りで弁じて歸つて行く。泥棒君も続いて門を出る。手が出せないのので、門をしめる事が出来な
いから開け放しのまま行つてしまった。恐れ入りな
がらも不平と見えて、主人は頬をふくらし、びし
やりと立て切つた。

「アハハハ君は刑事を大變尊敬するね。つねにああ
云う恭謙^{きょうけん}な態度を持つてるといい男だが、君は巡査

だけに鄭寧ていねいなんだから困る」

「だってせつかく知らせて来てくれたんじゃないか」

「知らせに来るったって、先は商売だよ。当り前にあしらってりや沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすかな

い商売さ。あたり前の商売より下等だね」

「君そんな事を云うと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハハそれじゃ刑事の悪口はやめわるくちにしよう。しか

し刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬
するに至っては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかって君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「たった今平身低頭したじゃないか」
へいしんていとう

「馬鹿あ云ってら、あれは刑事だね」

「刑事があんななり、をするものか」

「刑事だからあんななり、をするんじゃないか」

「頑固がんこだな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなにふところ懐手なにかして、突立つったっているものかね」

「刑事だつて懐手をしないとは限るまい」

「そう猛烈にやって来ては恐れ入るがね。君がお辞

儀をする間あいつは始終あのまま立っていたのだ
ぜ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れんさ」

「どうも自信家だな。いくら云つても聞かないね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと云
つてるだけで、その泥棒がはいるところを見届けた

訳じゃないんだから。ただそう思つて独りひとで強情を

張つてゐるんだ」

迷亭もここにおいてとうてい濟度さいどすべからざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙つてしまった。主人は久し振りで迷亭を凹へこましたと思つて大得意である。迷亭から見ると主人の価値は強情を張つただけ下落したつもりであるが、主人から云うと強情を張つただけ迷亭よりえらくなつたのである。世の

中にはこんな頓珍漢な事はまゝある。強情さえ張り

通せば勝った気でいるうちに、当人の人物としての

相場は遥かに下落してしまふ。不思議な事に頑固の

本人は死ぬまで自分は面目を施こしたつもりかなに

かで、その時以後人が輕蔑して相手にしてくれない

のだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こ

んな幸福を豚的幸福と名づけるのだそうだ。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云うから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか」と擲たきつけるように云った

のは壮さかんなものだった。

「えらい勢いきおいだね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引かれる気きづ

遣かいはない、大丈夫だ」と真直に白状してしまった。

ずるい事もずるいが、単純なことも単純なものだ。

「君、行くのはいいが路を知ってるかい」

「知るものか。車に乗って行けば訳はないだろう」とぶんぶんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいい」

「ハハハ日本堤分署と云うのはね、君ただの所じや

ないよ。よしわら吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そうさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね

。どうだ、行つて見る氣かい」と迷亭君またからか
いかける。

主人は吉原と聞いて、そい、つはと少々しゅんじゅん逡巡の体で
あつたが、たちまち思い返して「吉原だろうが、遊
廓だろうが、いったん行くと云つた以上はきつと行
く」と入らざるところに力味りきんで見せた。愚人は得て
こんなところに意地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白からう、見て来たまえ」と云

ったのみである。一波瀾ひとはらんを生じた刑事事件はこれで

一先ひとまず落着らくちやくを告げた。迷亭はそれから相変らず駄弁

を弄ろうして日暮れ方、あまり遅くなると伯父おこに怒られ

ると云って帰って行つた。

迷亭が帰ってから、そこそこに晩飯をすまして、

また書齋へ引き揚げた主人は再び拱手きようしゆして下しものよう

に考え始めた。

「自分が感服して、大おおに見習おうとした八木独仙君

も迷亭の話しによつて見ると、別段見習うにも及ば

ない人間のようなのである。のみならず彼の唱道すると

ころの説は何だか非常識で、迷亭の云う通り多少瘋ふう

癲てん的系統てんてきに属してもおりそうだ。いわんや彼は歴れ乎つき

とした二人の氣狂きちがいの子分を有している。はなはだ危

険である。滅多めったに近寄ると同系統内に引き摺ずり込ま

れそうである。自分が文章の上において驚嘆の余よ、

これこそ大見識を有している偉人に相違ないと思い

込んだ天道公平事实名立町老梅は純然たる狂人であ

てんどうこうへいことじつみようちまちろうばい

って、現に巢鴨の病院に起居している。迷亭の記述

が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院中ふうてんいんに盛名を擅ほしい

ままにして天道の主宰をもつて自みづから任ずるは恐らく

事実であろう。こう云う自分もことによると少々ござっているかも知れない。同気相求め、同類相集まると云うから、気狂の説に感服する以上は——少なくともその文章言辞に同情を表する以上は——自分もまた気狂に縁の近い者であるだろう。よし同型中ちゅうかに鑄化せられんでも軒を比ならべて狂人と隣り合きよせに居ぼくをトするとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつの

間にか同室内に膝を突き合せて談笑する事がないと

も限らん。こいつは大変だ。なるほど考えて見ると

このほどじゅうから自分の腦の作用は我ながら驚く

くらい奇上きじょうに妙みょうを点じ變傍へんぼうに珍ちんを添えている。腦漿のうしよ

一勺ういつせきの化学的變化はとにかく意志の動いて行為とな

るところ、発して言辞と化する辺あたりには不思議にも中

庸を失した点が多い。舌上ぜつじょうに竜泉りゅうせんなく、腋下えきかに清風せいふう

を^{しょう}生ぜざるも、^{しこん}齒根に^{きようしゆう}狂臭あり、^{きんとう}筋頭に^{ふうみ}瘋味あるを

いかんせん。いよいよ大變だ。ことによるともうす

でに立派な患者になつてゐるのではないかしらん。

まだ^{さいわい}幸に人を^{きずつ}傷けたり、世間の邪魔になる事をし出

かさんからやはり町内を追払われずに、東京市民と

して存在してゐるのではなからうか。こいつは消極

の積極のと云う段じやない。まず^{みやくはく}脈搏からして検査

しなくてはならん。しかし脈には変りはないようだ。
頭は熱いかしらん。これも別に逆上の気味でもない。
しかしどうも心配だ。」

「こう自分と気狂きちがいばかりを比較して類似の点ばかり
勘定しては、どうしても気狂の領分を脱する事
は出来そうにもない。これは方法がわるかった。気
狂を標準にして自分をそっちへ引きつけて解釈する

からこんな結論が出るのである。もし健康な人を本

位にしてその傍へ自分そばを置いて考えて見たらあるい

は反対の結果が出るかも知れない。それにはまず手

近から始めなくてはいいかん。第一に今日来たフロツ

クコートコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置こうぞ

……あれも少々怪しいようだ。第二に寒月はどうだ

。朝から晩まで弁当持参で球たまばかり磨いている。こ

れも棒組だ。ぼうぐみ 第三にと……迷亭？ あれはふざけ廻

るのを天職のように心得ている。全く陽性の氣狂に

相違ない。第四はと……金田の妻君。あの毒惡な根こん

性しょうは全く常識をはずれている。純然たる氣じるしに

極きまつてゐる。第五は金田君の番だ。金田君には御目に

懸った事はないが、まずあの細君を恭うやうやしくおっ立て

て、きんしつ琴瑟調和しているところを見ると非凡の人間と

見立てて差支えさしつかあるまい。非凡は氣狂いみようの異名である

から、まずこれも同類にしておいて構わない。それ

からと、——まだあるある。落雲館の諸君子だ、年

齢から云うとまだ芽生えだが、躁狂そうきようの点においては

一世を空むなしゆうするに足る天晴あっぱれな豪ごうのものである。

こう数え立てて見ると大抵のものは同類のようであ

る。案外心丈夫になつて来た。ことによると社会は

みんな気狂の寄り合かも知れない。気狂が集合して

しのぎ けず

鎬を削ってつかみ合い、いがみ合い、罵り合い、奪

ののし

い合って、その全体が団体として細胞のように崩れ

くず

たり、持ち上ったり、持ち上ったり、崩れたりして

暮して行くのを社会と云うのではないか知らん。そ

の中で多少理窟りくつがわかって、分別のある奴はかえっ

て邪魔になるから、ふうてんいん瘋癲院というものを作って、こ

こへ押し込めて出られないようにするのではないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されているものは普通の人で、院外にあばれているものはかえって気狂である。気狂も孤立している間はどこまでも気狂にされてしまいが、団体となつて勢力が出ると、健全の人間になつてしまふのかも知れない。大きな気狂が金力や威力を濫用して多くの小気狂しょうきちがいを使役して乱暴しえき

を働いて、人から立派な男だと云われている例は少ない。何が何だか分らなくなつた」

以上は主人が当夜^{けいけい}瑩々たる孤灯の下で^{もと}沈思熟慮し

た時の心的作用をありのままに描き出した^{えが}ものである。彼の頭脳の不透明なる事はここにも著るしくあら

われている。彼はカイゼルに似た^{はちじひげ}八字髯を蓄^{たくわ}うる

にもかかわらず狂人と常人の差別さえなし得ぬくら

いの凡倉^{ぼんくら}である。のみならず彼はせつかくこの問題

を提供して自己の思索力に訴えながら、ついに何等の結論に達せずしてやめてしまった。何事によらず

彼は徹底的に考える脳力のない男である。彼の結論

の茫漠^{ぼうばく}として、彼の鼻孔から迸出^{ほうしゅつ}する朝日の煙のご

とく、捕捉^{ほそく}しがたきは、彼の議論における唯一の特

色として記憶すべき事実である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、このくらいな事は猫にとって何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。ともかくも心得ている。人間の膝ひざの上へ乗って眠っているうちに、吾輩は吾輩の柔かな毛衣けごろもをそっと人間の腹にこす

り付ける。すると一道の電気が起つて彼の腹の中の
いきさつが手にとるように吾輩の心眼に映ずる。せ
んだってなどは主人がやさしく吾輩の頭を撫なで廻し
ながら、突然この猫の皮を剥はいでちや、んちや、んにし
たらさぞあたたかであらうと飛んでもない了見りようけんを
むらむらと起したのを即座に気取けどつて覚えずひやつ
とした事さえある。怖こわい事だ。当夜主人の頭のなか

に起つた以上の思想もそんな訳合わけあいで幸にも諸君にごさいわい

報道する事が出来るように相成つたのは吾輩の大おおにおい

榮譽とするところである。但ただし主人は「何が何だか

分らなくなつた」まで考えてそのあとはぐうぐう寝

てしまつたのである、あすになれば何をどこまで考

えたかまるで忘れてしまふに違ない。向後こうごもし主人

が氣狂きちがいについて考える事があるとすれば、もう一返ぺん

出直して頭から考え始めなければならぬ。そうする

と果してこんな^{けいろ}径路を取って、こんな風に「何が何

だか分らなくなる」かどうか保証出来ない。しか

し何返考え直しても、何条の^{なんじよう}径路をとって進もうと

も、ついに「何が何だか分らなくなる」だけはたし

かである。

「あなた、もう七時ですよ」と襖越ふすまごししに細君が声を

掛けた。主人は眼がさめているのだから、寝ているのだから、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのはこの男の癖である。ぜひ何とか口を切らなければならぬ時はうん、と云う。このうんも容易

な事では出てこない。人間も返事がうるさくなるく

ぶしよう

らい無精になると、どことなく趣おもむきがあるが、こんな

人に限って女に好かれた試しがない。現在連れ添う

細君ですら、あまり珍重しておらんようだから、そ

お

の他は推して知るべしと云つても大した間違はなか

けいせい

ろう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城に、可

愛がらりようはずがない、とある以上は、細君にさ

え持てない主人が、世間一般の淑女に気に入るはずがない。何も異性間に不人望な主人をこの際ことさらに暴露する必要もないのだが、本人において存外ばくろな考え違をして、全く年廻りのせいで細君に好かれ
ないのだなどと理窟をつけていると、迷まよひの種であるから、自覚の一助にもなろうかと親切心からちよつと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても

先方がその注意を無にする以上は、向をむいてう、

ん、さえ発せざる以上は、その曲は夫にきよくあつて、妻に

あらずと論定したる細君は、遅くなつても知りませ

んよと云う姿勢で箒とはたきほうきを担かついで書斎の方へ行

つてしまった。やがてぱたぱた書斎中を叩たたき散らす

音がするのは例によつて例のごとき掃除を始めたの

である。一体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでないから、知らん顔をしていれば差し支^さえな^{つか}いようなもの、ここの細君の掃除法のごときに至つてはすこぶる無意義のものと云わざるを得ない。何が無意義であるかと云うと、この細君は単に掃除のため
に掃除をしているからである。は、た、き、を一通り障子^{しょうじ}

へかけて、箒を一応畳の上へ滑^{すべ}らせる。それで掃除

は完成した者と解釈している。掃除の原因及び結果

に至つては微塵^{みじん}の責任だに背負つておらん。かるが

故に奇麗な所は毎日奇麗だが、ごみのある所、ほこ

りの積っている所はいつでもごみが溜^{たま}つてほこりが

積っている。告朔^{こくさく}の餼羊^{きよう}と云う故事^{こじ}もある事だから

、これでもやらんよりはましかも知れない。しかし

やつても別段主人のためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦勞にもやるところが細君のえらいところである。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくって頑がんとして結びつけられているにもかかわらず、掃除の實じつに至っては、妻君がいまだ生れざる以前のごとく、はたきと箒が發明せられざる昔のごとく、毫ごうも挙あげておらん。思うに

この両者の関係は形式論理学の命題における名辞のごとくその内容のいかんにかかわらず結合せられたものである。

吾輩は主人と違って、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になって参った。とうていうちのもののさえ膳ぜんに向わぬさきから、猫の身分をもつて朝めしに有りつける訳のものではないが、そこが猫の浅

ましさに、もしや煙の立つた汁の香が鮑貝にいいあわびがいの中から

、うまそうに立ち上っておりはすまいかと思うと、

じつとしていられなくなった。はかない事を、はか

ないと知りながら頼みにするときには、ただその頼み

だけを頭の中に描いて、動かずに落ちついている方

が得策であるが、さてそうは行かぬ者で、心の願と

實際が、合うか合わぬか是非とも試験して見たくな

る。試験して見れば必ず失望するにきまつてる事で

すら、最後の失望を自ら^{みずか}事実の上に受取るまでは承

知出来んものである。吾輩はたまらなくなつて台所

へ^{はいだ}這出した。まずへっ、つ、いの影にある鮑貝^{あわびがい}の中を覗^{のぞ}

いて見ると案に^{たが}違わず、夕べ^{ゆう}舐^なめ尽したまま、闐然^{げきぜん}

として、怪しき光が引窓を洩^もる初秋の日影にかがや

いている。御三^{おさん}はすでに炊^たき立^{たて}の飯を、御櫃^{おはち}に移し

て、今や七輪しちりんにかけた鍋なべの中をかきまぜつつある。

釜かまの周囲には沸わき上がって流れだした米の汁が、か

さかさいくすじに幾条となくこびりついて、あるものは吉野

紙を貼はりつけたごとくに見える。もう飯も汁も出来

ているのだから食わせてもよさそうなものだと思っ

た。こんな時に遠慮するのはつまらない話だ、よし

んば自分の望通りにならなくたって元々で損は行

かないのだから、思い切つて朝飯の催促をしてやろ

う、いくら居候いそうろうの身分だつてひもじいに変りはない

。と考え定めた吾輩はにやあにやあと甘えるごとく

、訴うるがごとく、あるいはまた怨えんずるがごとく泣

いて見た。御三はいつこう顧みる景色けしきがない。生れ

ついてのお多角たかくだから人情に疎うといのはとうから承知

の上だが、そこをうまく泣き立てて同情を起させる

のが、こつちの手際てぎわである。今度はにやごにやごと

やって見た。その泣き声は吾ながら悲壯おんの音を帯び

て天涯てんがいの遊子ゆうしをして断腸の思あらしむるに足ると信

ずる。御三は恬てんとして顧みかえりない。この女は聾つんぼなのか

も知れない。聾では下女が勤まる訳わけがないが、こと

によると猫の声だけには聾なのだろう。世の中には

しきもう

色盲しきもうというのがあって、当人は完全な視力を具えて

いるつもりでも、医者から云わせると片輪かたわだそうだ

が、この御三は声盲せいもうなのだろう。声盲だつて片輪に

違ちがひない。片輪のくせにいやに横風おうふうなものだ。夜中

なぞでも、いくらこつちが用があるから開けてくれ
ろと云つても決して開けてくれた事がない。たまに

出してくれたと思うと今度はどうしても入れてくれ
ない。夏だつて夜露は毒だ。いわんや霜しもにおいてを

やで、軒下に立ち明かして、日の出を待つのは、どんなに辛いつらかとうてい想像が出来るものではない。

この間しめ出しを食った時なぞは野良犬の襲撃を蒙こうむ

って、すでに危うく見えたところを、ようやくの事

で物置の家根やねへかけ上あがって、終夜顫ふるえつづけた事さ

えある。これ等は皆御三の不人情から胚胎はいたいした不都

合である。こんなものを相手にして鳴いて見せたつ

て、感応かんのうのあるはずはないのだが、そこが、ひもじ

い時の神頼み、貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たいていの事ならやる気になる。にやごおうにやごおうと三度目には、注意を喚起するため

ことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分ではべ

トヴェンのシンフォニーにも劣らざる美妙の音おんと確

信しているのだが御三には何等の影響も生じないよ

うだ。御三は突然膝をついて、揚げ板を一枚はね除のけて、中から堅炭の四寸ばかり長いのを一本つかみ出した。それからその長い奴を七輪しちりんの角でぽんぽんと敲たたいたら、長いのが三つほどに砕けて近所は炭の粉で真黒くなった。少々は汁の中へも這入はいったらしい。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけたる三個の炭を鍋なべの尻から七輪の中へ押し込

んだ。とうてい吾輩のシンフォニーには耳を傾けそ

うにもない。仕方がないから悄然しょうぜんと茶の間の方へ引

きかえそうとして風呂場の横を通り過ぎると、ここ

は今女の子が三人で顔を洗つてゐる最中で、なかなか

繁昌はんじょうしている。

顔を洗うと云ったところで、上の二人が幼稚園の

生徒で、三番目は姉の尻についてさえ行かれないく

らい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器用に御化粧が出来るはずがない。一番小さいのがバケツの中から濡れ雑巾ぬぞうきんを引きずり出してしきりに顔中撫なで廻わしている。雑巾で顔を洗うのは定めし心持ちがわるかろうけれども、地震がゆるたびにおも、ちろい、わと云う子だからこのくらいの事はあつても驚ろくに足らん。ことによると八木独仙君より悟っている

かも知れない。さすがに長女は長女だけに、姉をも

みずか

って自ら任じているから、うがい茶碗をからからか

ほうりだ

んと抛出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑巾

をとりにかかる。坊やちゃんもなかなか自信家だか

ら容易に姉の云う事なんか聞きそうにしない。「い

やーよ、ばぶ」と云いながら雑巾を引っ張り返した

。このばぶなる語はいかなる意義で、いかなる語源

を有しているか、誰も知ってるものがない。ただこ

の坊やちゃんがかんしゃく癇癪を起した時に折々ご使用になる

ばかりだ。雑巾はこの時姉の手と、坊やちゃんの手

で左右に引っ張られるから、水を含んだ真中からぽ

たぽたしずく雫が垂たれて、容赦なく坊やの足にかかる、足

だけなら我慢するが膝のあたりがしたたか濡れる。

坊やはこれでも元げんろく禄を着ているのである。元禄とは

ちゆうがた

何の事だとだんだん聞いて見ると、中形の模様なら何でも元禄だそうだ。一体だれに教わって来たものか分らない。「坊やちゃん、元禄が濡れるから御よしなさい、ね」と姉が洒落しやれた事を云う。その癖くせこの姉はついこの間まで元禄と双六すごろくとを間違えていた物識ものしりである。

元禄で思い出したからついでに喋舌しやべってしまうが

この子供の言葉ちがいをやる事は夥おびただしいもので、

折々人を馬鹿にしたような間違を云つてゐる。火事で

茸きのこが飛んで来たり、御茶おちやの味噌みその女学校へ行つたり

恵比寿えびす、台所だいどころと並べたり、或る時などは「わたし

や藁店わらだなの子じやないわ」と云うから、よくよく聞き

糺ただして見ると裏店うらだなと藁店を混同していたりする。主

人はこんな間違を聞きたびに笑っているが、自分が

学校へ出て英語を教える時などは、これよりも滑稽

ごびゆう

な誤謬を真面目になつて、生徒に聞かせるのだらう

。

坊やは——当人は坊やとは云わない。いつでも坊

ばと云う——元禄が濡れたのを見て「元げんどこがべた

い」と云つて泣き出した。元禄が冷たくては大変だ

から、御三が台所から飛び出して来て、雑巾を取上

げて着物を拭ふいてやる。この騒動中比較的静かであ
ったのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向う
むきになつて棚の上からころがり落ちた、お白粉しろいの
瓶びんをあけて、しきりに御化粧ほどこしを施ほどこしている。第一に
突っ込んだ指をもつて鼻の頭をキューと撫なでたから
豎たてに一本白い筋が通つて、鼻のありかがいささか分ぶん
明みょうになつて来た。次に塗りつけた指を転じて頬の上

を摩擦したから、そこへもつてきて、これまた白いかたまりが出来上った。これだけ装飾がととのつたところへ、下女がはいって来て坊ばの着物を拭いたついでに、すん子の顔もふいてしまった。すん子は少々不満の体^{てい}に見えた。

吾輩はこの光景を横に見て、茶の間から主人の寢室まで来てもう起きたかとひそかに様子をうかがつ

て見ると、主人の頭がどこにも見えない。その代り

ともんはん

十文半の甲の高い足が、夜具の裾すそから一本食はみ出し

ている。頭が出ていては起こされる時に迷惑だと思

って、かくもぐり込んだのであろう。亀の子のよう

な男である。ところへ書斎の掃除をしてしまった妻

ほうき

君がまた箒ほうきとはたきを担かついでやってくる。最前さいぜんのよ

ふすま

うに襖ふすまの入口から

「まだお起きにならないのですか」と声をかけたまま、しばらく立って、首の出ない夜具を見つめていた。今度も返事がない。細君は入口から二歩ふたあしばかり進んで、箒をとんと突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承わる。この時主人はすでに目が覚さめている。覚さめているから、細君の襲撃にそなうるため、あらかじめ夜具の中に首もろとも立

てこも寵つたのである。首さえ出さなければ、見逃みのがして

くれる事もあるうかと、詰まらない事を頼みにして
寝ていたところ、なかなか許しそうもない。しかし
第一回の声は敷居の上で、少くとも一間の間隔があ
ったから、まず安心と腹のうちで思っていると、と
んと突いた筈が何でも三尺くらいの距離に追ってい
たにはちよつと驚ろいた。のみならず第二の「まだ

なんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えたから、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな声でうんと返事をした。

「九時までにはいらっしやるのでしよう。早くなさらないと間に合いませんよ」

「そんなに言わなくても今起きる」と夜着よぎの袖口そでぐちか

ら答えたのは奇観である。妻君はいつでもこの手を食つて、起きるかと思つて安心してゐると、また寝込まれつけてゐるから、油断は出来ないと「さあお起きなさい」とせめ立てる。起きると云うのに、なお起きろと責めるのは氣に食わんものだ。主人のごとき我儘者にはわがままものなお氣に食わん。ここにおいてか主人は今まで頭から被かぶつていた夜着を一度に跳はねのけ

た。見ると大きな眼を二つとも開あいている。

「何だ騒々しい。起きると云えば起きるのだ」

「起きるとおっしゃっててもお起きなさらんじやあり

ませんか」

「誰がいつ、そんな嘘うそをついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云え」

「どっちが馬鹿だか分りやしない」と妻君ぷんとして箒を突いて枕元に立っているところは勇ましかつた。この時裏の車屋の子供、八っちゃんが急に大きな声をしてワーと泣き出す。八っちゃんは主人が怒り出しさえすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたんびに八っちゃんを泣かして小遣こづかいになるかも知れ

んが、八っちゃんこそいい迷惑だ。こんな御袋おふくろを持

ったが最後朝から晩まで泣き通しに泣いていなくて

はならない。少しはこの辺の事情を察して主人も少

々怒るのを差し控ひかえてやったら、八っちゃんの寿命

が少しは延びるだろうに、いくら金田君から頼まれ

たって、こんな愚ぐな事をするのは、天道公平君より

もはげしくおいでになっている方だと鑑定してもよ

かろう。怒るたんびに泣かせられるだけなら、まだ

余裕もあるけれども、金田君が近所のゴロツキを傭やと

つて今戸焼いまどやきをきめ込むたびに、八っちゃんは泣かね

ばならんのである。主人が怒るか怒らぬか、まだ判

然しないうちから、必ず怒るべきものと予想して、

早手廻しに八っちゃんは泣いているのである。こう

なると主人が八っちゃんだか、八っちゃんが主人だ

か判然しなくなる。主人にあてつけるに手数料は掛ら

てすう

ない、ちよつと八っちゃんに剣突^{けんつく}を食わせれば何の

苦もなく、主人の横^{よこ}つ面^{つら}を張った訳になる。昔^{むか}し西

洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が国境外に逃亡

して、捕^{とら}えられん時は、偶像をつくつて人間の代り

に火^ひあぶりにしたと云うが、彼等のうちにも西洋の

故事に通曉^{つうぎょう}する軍師があると見えて、うまい計略を

授けたものである。落雲館と云い、八っちゃんの御袋と云い、腕のきかぬ主人にとっては定めし苦手にがてであらう。そのほか苦手はいろいろある。あるいは町内中ことごとく苦手かも知れんが、ただいまは関係がないから、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。

八っちゃんの泣き声を聞いた主人は、朝っばらか

らよほど癩癧かんしゃくが起つたと見えて、たちまちがばと布ふ

団とんの上に起き直つた。こうなると精神修養も八木独

仙も何もあつたものじゃない。起き直りながら両方

の手でゴシゴシゴシと表皮のむけるほど、頭中引き

掻かき廻す。一カ月も溜かつてゐるフケは遠慮なく、頸くび

筋すじやら、寝卷すじの襟えりへ飛んでくる。非常な壯觀である

。髯ひげはどうだを見るとこれはまた驚ろくべく、ぴん

然とおっ立っている。持主が怒おこっているのに髯だけ

落ちついていてはすまないとでも心得たものか、一

本一本に癰癰かんしやくを起して、勝手次第の方角へ猛烈なる

勢をもつて突進している。これとてもなかなかの見み

物ものである。昨日きのうは鏡の手前もある事だから、おとな

しく独ドイツ乙皇帝陛下の真似をして整列したのであるが

、一晩寝れば訓練も何もあつた者ではない、直ちに

本来の面目に歸つて思い思いの出で立いにたち戻るのであ

る。あたかも主人の一夜作りの精神修養が、あくる

日になると拭ぬぐうがごとく奇麗に消え去つて、生れつ

いての野猪やちよてき的本領が直ちに全面を暴露し来るきたのと一

般である。こんな乱暴な髯をもっている、こんな乱

暴な男が、よくまあ今まで免職にもならずに教師が

勤まつたものだと思つと、始めて日本の広い事がわ

かる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用しているのもあろう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信しているらしい。いざとなれば巢鴨へ端書はがきを飛ばして天道公平君に聞き合せて見れば、すぐ分る事だ。

この時主人は、昨日きのう紹介した混沌こんとんたる太古の眼を精一杯に見張って、向うの戸棚をきつと見た。これ

は高さ一間を横に仕切つて上下共各二枚の袋戸をは
めたものである。下の方の戸棚は、布団ふとんの裾すそとすれ
すれの距離にあるから、起き直つた主人が眼をあき
さえすれば、天然自然ここに視線がむくように出来
ている。見ると模様を置いた紙がところどころ破れ
て妙な腸はらわたがあからさまに見える。腸にはいろいろな
のがある。あるものは活版摺かっぱんずりで、あるものは肉筆で

ある。あるものは裏返しで、あるものは逆さまである。主人はこの腸を見ると同時に、何がかいてあるか読みたくなつた。今までは車屋のかみさんでも捕つらまえて、鼻づらを松の木へこすりつけてやろうくらいにまで怒つていた主人が、突然この反古紙ほごがみを読んで見たくなるのは不思議のようであるが、こう云う陽性の癩癩持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くと

きに最中もなかの一つもあてがえばすぐ笑うと一般である

。主人が昔むかし去る所の御寺に下宿していた時、襖ふすま一

と重えを隔てて尼が五六人いた。尼などと云うものは

元来意地のわるい女のうちでもつとも意地のわるい

ものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたもの

と見えて自炊の鍋なべをたたきながら、今泣いた鳥がも

う笑った、今泣いた鳥がもう笑ったと拍子を取って

歌ったそうだ、主人が尼が大嫌になつたのはこの時からだと云うが、尼は嫌きらいにせよ全くそれに違ない。

主人は泣いたり、笑ったり、嬉しがったり、悲しがったり人一倍もする代りにいずれも長く続いた事がない。よく云えば執着がなくて、心機しんきがむやみに転

ずるのだろうが、これを俗語に翻訳してやさしく云えば奥行のない、薄うすっ片ぺらの、鼻はなっ張ぱりだけ強いだだっ

子である。すでにだだっ子である以上は、喧嘩をす

る勢で、むつくと刎^はね起きた主人が急に気をかえて

^{ふくろど}

袋戸の腸を読みにかかるのももつともと云わねばな

るまい。第一に眼にとまったのが伊藤博文の逆^さか立^だ

ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある

^{かんこくとうかん}

。韓国統監もこの時代から御布令^{おふれ}の尻尾^{しっぽ}を追っ懸け

てあるいていたと見える。大将この時分は何をして

いたんだらうと、読めそうにないところを無理によ

おおくらきよう

むと大蔵卿とある。なるほどれいものだ、いくら

逆か立ちしても大蔵卿である。少し左の方を見ると

今度は大蔵卿横になつて昼寝をしている。もつとも

だ。逆か立ちではそう長く続くきづかい氣遣はない。下の方

もくばん

に大きな木板で汝はと二字だけ見える、あとが見た

いがあいにく露出しておらん。次の行には早くの二

字だけ出ている。こいつも読みたいがそれぎれで手掛りがない。もし主人が警視庁の探偵であつたら、人のものでも構わずに引ッペがすかも知れない。探偵と云うものには高等な教育を受けたものがないから事実を挙げるためには何でもする。あれは始末に行かないものだ。願くばねがわもう少し遠慮をしてもらいたい。遠慮をしなければ事實は決して挙げさせない

事にしたらよからう。聞くところによると彼等は羅

しききよこう

織虚構をもつて良民を罪におとし陥れる事さえあるそうだ

。良民が金を出して雇つておく者が、雇主を罪にす

るなどときてはこれまた立派なきちがい氣狂である。次に眼

を転じて真中を見ると真中には大分県がおおいたけん宙返りをし

ている。伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだか

ら、大分県が宙返りをするのは当然である。主人は

ここまで読んで来て、双方へ握り拳をこしらえて、これを高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

このあくびがまた鯨くじらの遠吠とおぼえのようにすこぶる変調を極きわめた者であつたが、それが一段落を告げると、

主人はのそのそと着物をきかえて顔を洗いに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細君はいきなり布団ふとん

をまくつて夜着よぎを疊んで、例の通り掃除をはじめ

掃除が例の通りであるごとく、主人の顔の洗い方
も十年一日のごとく例の通りである。先日紹介をし

たごとく依然としてがーがー、げーげーを持続して

いる。やがて頭を分け終つて、西洋手拭てぬぐいを肩へかけ

て、茶の間へ出御しゅつぎよになると、超然として長火鉢の横

に座を占めた。長火鉢と云うと櫂けやきの如輪木じよりんもくか、銅あかの

総落しで、洗髪あらいがみの姉御が立膝で、長煙管ながぎせるを黒柿くろがきの縁ふち

へ叩きつける様を想見する諸君もないとも限らない

が、わが苦沙弥くしゃみ先生の長火鉢に至つては決して、そ

んな意気なものではない、何で造つたものか素人しろうとに

は見当けんとうのつかんくらい古雅なものである。長火鉢は

拭き込んでてらてら光るところが身上しんしょうなのだが、こ

の代物しろものは櫨きりか桜か桐か元来不明瞭な上に、ほとんど

ふきん

布巾をかけた事がないのだから陰気で引き立たざる

おびただ

事夥しい。こんなものをどこから買つて来たかと云

おぼえ

うと、決して買った覚えはない。そんなら貰つたかと

聞くと、誰もくれた人はないそうだ。しからは盗ん

ただ

だのかと糺して見ると、何だかその辺が曖昧である

あいまい

。昔し親類に隠居がおつて、その隠居が死んだ時、

当分留守番を頼まれた事がある。ところがその後一

戸を構えて、隠居所を引き払う際に、そこで自分のもののように使っていた火鉢を何の気もなく、つい持って来てしまったのだそうだ。少々たちが悪いようだ。考えるとたちが悪いようだがこんな事は世間うだ。銀行家などは毎日人の金に往々ある事だと思う。銀行家などは毎日人の金にあつかいつけているうちに人の金が、自分の金のよ
うに見えてくるそうだ。役人は人民の召使である。

用事を弁じさせるために、ある権限を委托した代理人のようなものだ。ところが委任された権力を笠にかさに
着て毎日事務を処理していると、これは自分が所有
している権力で、人民などはこれについて何らの喙くちばし
を容いる理由がないものだなどと狂ってくる。こんな
人が世の中に充満している以上は長火鉢事件をも
って主人に泥棒根性があると断定する訳には行かぬ

もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人に
はみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍そばに陣取つて、食卓を前に控ひかえたる主人

の三面には、先刻さつきぞうきん雑巾で顔を洗つた坊ぼばと御茶おちやの味、

噌そうの学校へ行くとん子と、お白粉しろいびん鑊おに指を突き込ん

だすん子が、すでに勢揃せいぞろいをして朝飯を食っている。

主人は一応この三女子の顔を公平に見渡した。とん

子の顔は南蛮鉄なんばんてつの刀の鰐つばのような輪廓りんかくを有している

。すん子も妹だけに多少姉おもかげの面影を存して琉球塗りゅうきゅうぬりの

朱盆しゅぼんくらいな資格はある。ただ坊ぼくばに至いたっては独ひとり

異彩を放はなつて、面長おもながに出来上あがりっている。但ただし豎たてに長

いのなら世間にその例もすくなくないが、この子の

は横に長いのである。いかに流行が変化し易やすくつた

つて、横に長い顔がはやる事はなからう。主人は自

分の子ながらも、つくづく考える事がある。これでも生長しなければならぬ。生長するところではない、その生長の速すみやかなる事はぜんでら禪寺の筍がたけのこ若竹に変化する勢で大きくなる。主人はまた大きくなつたなと思うたんびに、後ろうしから追手おってにせまられるような気がしてひやひやする。いかに空漠くうばくなる主人でもこの三令嬢が女であるくらいは心得ている。女である以上

はどうにか片付けなくてはならんくらいも承知して
いる。承知しているだけで片付ける手腕のない事も
自覚している。そこで自分の子ながらも少しく持て
余しているところである。持て余すくらいなら製造
しなければいいのだが、そこが人間である。人間の
定義を云うとほかに何にもない。ただ入^いらざる事を
捏^ね造^{ぞう}して自^みら苦^ずしんでいる者だと云えば、それで充

分だ。

さすがに子供はえらい。これほどおやじが処置に窮しているとは夢にも知らず、楽しそうにご飯をたべる。ところが始末におえないのは坊ばである。坊ばは当年とって三歳であるから、細君が気を利かしきて、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をはしあてがうのだが、坊ばは決して承知しない。必ず姉

の茶碗を奪い、姉の箸を引ったくつて、持ちあつか
い悪い奴を無理に持ちあつかっている。世の中を見
渡すと無能無才の小人ほど、いやにのさばり出て柄
にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全
くこの坊ば時代から萌芽ほうがしているのである。その因よ
つて来るところはかくのごとく深いのだから、決し
て教育や薰陶くんとうで癒なおせる者ではないと、早くあきらめ

てしまふのがいい。

坊ばは隣りから分捕ぶんどった偉大なる茶碗と、長大な

箸を専有して、しきりに暴威ほしいままを擅しにしている。使

いこなせない者をむやみに使おうとするのだから、

勢いきおい暴威たくまを逞たくましくせざるを得ない。坊ばはまず箸の根

元を二本いっしよに握ったままうんと茶碗の底へ突

込んだ。茶碗の中は飯が八分通り盛り込まれて、そ

の上に味噌汁が一面に漲みなぎっている。箸の力が茶碗へ

伝わるやいなや、今までどうか、どうか、平均を保

っていたのが、急に襲撃を受けたので三十度ばかり

傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだらだらと胸のあ

たりへこぼれだす。坊ばはそのくらいな事で辟易へきえきす

る訳がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ

箸を、うんと力一杯茶碗の底から刎はね上げた。同時

に小さな口を縁^{ふち}まで持つて行つて、刎^はね上げられた

米粒を這^{はい}入るだけ口の中へ受納した。打ち洩^もらされ

た米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと頬^ほつぺた

と顚^{あぐさ}とへ、やつと掛声をして飛びついた。飛びつき

損じて畳の上へこぼれたものは打算^{ださん}の限りでない。

随分無分別な飯の食い方である。吾輩は謹^{つつし}んで有名

なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公等^{こうら}の他

をあつかう事、坊ばの茶碗と箸をあつかうがごとく

んば、公等こうらの口へ飛び込む米粒は極めて僅少きんしょうのもの

である。必然の勢をもつて飛び込むにあらず、戸迷とまどい

をして飛び込むのである。どうか御再考わざらを煩わした

い。世故せこにたけた敏腕家にも似合しからぬ事だ。

姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊ばに掠奪りやくだつされ

て、不相応に小さな奴をもつてさつきから我慢して

いたが、もともと小さ過ぎるのだから、一杯にもつた積りでも、あんとあけると三口ほどで食ってしまふ。したがって頻^{ひんぱん}に御はちの方へ手が出る。もう四膳かえて、今度は五杯目である。とん子は御はちの蓋^{ふた}をあけて大きなしやもじを取り上げて、しばらく眺^{なが}めていた。これは食おうか、よそうかと迷っていたものらしいが、ついに決心したものと見えて、

焦^こげのなさそうなところを見計^{ひとしやく}つて一掬いしやもじ

の上へ乗せたまでは無難^{ぶなん}であつたが、それを裏返し

て、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に^{はい}入りきらん

飯は塊^{かた}まつたまま畳の上へ^{ころ}転がり出した。とん子は

驚^{けしき}ろく景色もなく、こぼれた飯を^{ていねい}鄭寧に拾い始めた

。拾^ひつて何にするかと思つたら、みんな御はちの中

へ入れてしまった。少しきたないようだ。

坊ばが一大活躍を試みて箸を刎はね上げた時は、ち

ようどとん子が飯をよそいおわ了った時である。さすが

に姉は姉だけで、坊ばの顔のいかにも乱雑なのを見

かねて「あら坊ばちゃん、大変よ、顔が御ごぜん粒だ

らけよ」と云いながら、早速さっそく坊ばの顔の掃除にとり

かかる。第一に鼻のあたみに寄寓きぐうしていたのを取払

う。取払って捨てると思のほか、すぐ自分の口のな

かへ入れてしまったのには驚ろいた。それから頼ほつ

ぺたにかかる。ここには大分群だいぶぐんをなして数かずにしたら

、両方を合せて約二十粒もあつたろう。姉は丹念に

一粒ずつ取つては食い、取つては食い、とうとう妹

の顔中にある奴を一つ残らず食つてしまった。この

時ただ今まではおとなしく沢庵たくあんをかじっていたすん

子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋さつまいものくず

れたのをしやくい出して、勢よく口の内へ抛り込ほうん

だ。諸君も御承知であろうが、汁にした薩摩芋の熱

したのほど口こう中ちゆうにこたえる者はない。大人おとなですら注

意しないと火傷やけどをしたような心持ちがする。まして

すん子のごとき、薩摩芋に経験とほの乏しい者は無論狼ろう

狽はいする訳である。すん子はワツと云いながら口こう中ちゆうの

芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片ぺんがどう云う

拍子か、坊ばの前まですべって来て、ちようどいい加減な距離でとまる。坊ばは固^{もと}より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を抛^{ほう}り出して、手攫^{てづか}みにしてむしやむしや食ってしまった。

先刻^{さつき}からこの体^{てい}たらくを目撃していた主人は、一^{いち}言^{ごん}も云わずに、専心自分の飯を食い、自分の汁を飲

んで、この時はすでに楊枝ようじを使っている最中であつ

た。主人は娘の教育に関して絶体的放任主義を執とる

つもりと見える。今に三人が海老茶式部えびちやしきぶか鼠式部ねずみしきぶか

になつて、三人とも申し合せたように情夫じょうふをこしら

えて出奔しゅっぱんしても、やはり自分の飯を食つて、自分の

汁を飲んで澄まして見ているだろう。働きのない事

だ。しかし今の世の働きのあると云う人を拝見する

と、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張つて人をおどかさ事と、鎌かまをかけて人を陥おとしれる事よりほかに何も知らないようだ。中学などの少年輩までが見様見真似みようみまねに、こうしたくは幅が利きかないと心得違ちがいをして、本来なら赤面してしかるべきのを得々とくとくと履行りこうして未来の紳士だと思つてゐる。これは働き手と云うのではない。ご

ろつき手と云うのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。こんな働き手を見るたびに撲なぐつてやりたくなる。こんなものが一人でも殖ふえれば国家はそれだけ衰える訳である。こんな生徒のいる学校は、学校の恥辱であつて、こんな人民のいる国家は国家の恥辱である。恥辱であるにも関らず、ごろごろ世間にごろついているのは心得がたいと思う。

日本の人間は猫ほどの気概もないと見える。情ない

なさけ

事だ。こんなごろつき手に比べると主人などは遙か

はる

に上等な人間と云わなくてはならん。意気地のない

ところが上等なのである。無能なところが上等なの

である。猪口才ちよこざいでないとところが上等なのである。

かくのごとく働きのない食い方をもつて、無事に

あさめし

朝食を済ましたる主人は、やがて洋服を着て、車へ

乗って、日本堤分署へ出頭に及んだ。格子こうしをあけた

時、車夫に日本堤という所を知ってるかと聞いたら

、車夫はへへへと笑った。あの遊廓のある吉原の近

辺の日本堤だぜと念を押したのは少々滑稽こっけいであつた

。

主人が珍らしく車で玄関から出掛けたあとで、妻

君は例のごとく食事を済ませて「さあ学校へおいで

。遅くなりますよ」と催促すると、小供は平気なも

ので「あら、でも今日は御休みよ」と支度したくをする景け

色しきがない。「御休みなものですか、早くなさい」と

叱しかるように言つて聞かせると「それでも昨日きのう、先生

が御休だつて、おつしやつてよ」と姉はなかなか動

じない。妻君もここに至つて多少変に思つたものか

、戸棚から曆としよみを出して繰り返して見ると、赤い字で

ちゃんと御祭日と出ている。主人は祭日とも知らずに学校へ欠勤届を出したのだらう。細君も知らずに郵便箱へ抛り込んだのだらう。ただし迷亭に至っては實際知らなかったのか、知って知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。この発明におやと驚ろいた妻君はそれじゃ、みんなでおとなしく御遊びなさいと平生いっもの通り針箱を出して仕事に取りかかる。

その後三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になるような事件も起らなかったが、突然妙な人が御客に來た。十七八の女学生である。踵かかとのまがつた靴を履はいて、紫色の袴はかまを引きずつて、髪を算盤珠そろばんだまのよう
にふくらまして勝手口から案内も乞こわずに上あつて來た。これは主人の姪めいである。学校の生徒だそうだが、折々日曜にやつて來て、よく叔父さんと喧嘩をし

て歸つて行く雪江ゆきえとか云う奇麗な名のお嬢さんであ

る。もつとも顔は名前ほどでもない、ちよつと表へ出て一二町あるけば必ず逢える人相である。

「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか這入はいつて来て、針箱の横へ尻をおろした。

「おや、よく早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちにちよつと上が

ろうと思つて、八時半頃から家を出て急いで来たの

」

「そう、何か用があるの？」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、ちよつと上がったの」

「ちよつとでなくつていいから、緩ゆっくり遊んでいらつしやい。今に叔父さんが歸つて来ますから」

「叔父さんは、もう、どこへかいらしたの。珍らしいのね」

「ええ今日はね、妙な所へ行つたのよ。……警察へ行つたの、妙でしょう」

「あら、何で？」

「この春這入はいった泥棒がつらまはったんだって」

「それで引き合に出されるの？　いい迷惑ね」

「なあに品物が戻るのよ。取られたものが出たから取りに來いって、昨日きのう巡査がわざわざ來たもんですから」

「おや、そう、それでなくっちゃ、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね。いつもなら今時分はまだ寝ていらっしやるんだわ」

「叔父さんほど、寝坊はないんですから……そうし

て起こすとぷんぷん怒る^{おこ}のよ。今朝なんかも七時ま

でに是非おこせと云うから、起こしたんでしよう。

すると夜具の中へ潜^{もぐ}つて返事もしないんですもの。

こっちは心配だから二度目にまたおこすと、夜着^{よぎ}の

袖^{そで}から何か云うのよ。本当にあきれ返ってしまふの

「

なぜそんなに眠いんでしよう。きっと神経衰弱な

んでしよう」

「何ですか」

「本当にむやみに怒る方かたね。あれでよく学校が勤ま

るのね」

「なに学校じゃおとなしいんですって」

「じやなお悪るいわ。まるで蒟蒻こんにやくえんま閻魔ね」

「なぜ？」

「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だって蒟蒻閻魔のようじやありませんか」

「ただ怒るばかりじゃないのよ。人が右と云えば左、左と云えば右で、何でも人の言う通りにした事がない、——そりや強情ですよ」

あまのじやく

「天探女でしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ。」

だから何かさせようと思ったら、うら、を云うと、こ

「うちの思い通りになるのよ。こないだ蝙蝠傘こうもりを買つてもらう時にも、いらない、いらないって、わざと云ったら、いらない事があるものかって、すぐ買つて下すつたの」

「ホホホ旨いうまのね。わたしもこれからそうしよう

」
「そうなさいよ。それではなくっちや損だわ」

「こないだ保険会社の人に来て、是非御這入おはいんなさ

いって、勧めているんでしよう、——いろいろ訳わけを

言って、こう云う利益があるの、ああ云う利益があるのって、何でも一時間も話をしたんですが、どうしても這入らないの。うちだって貯蓄はなし、こうして小供は三人もあるし、せめて保険へでも這入っ

てくれるとよっぽど心丈夫なんですけれども、そん

な事は少しも構わないんですもの」

「そうね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に似合しからん世帯染しよたいじみたことを云う。

「その談判を蔭で聞いていると、本当に面白いのよ。なるほど保険の必要も認めないではない。必要なものだから会社も存在しているのだらう。しかし死なない以上は保険に這はい入る必要はないじゃないかつ

て強情を張っているんです」

「叔父さんが？」

「ええ、すると会社の男が、それは死ななければ無
論保険会社はいりません。しかし人間の命と云うも
のは丈夫なように脆いもろもので、知らないうちに、い
つ危険が逼せまっているか分りませんと云うとね、叔父
さんは、大丈夫僕は死なない事に決心をしているっ

て、まあ無法な事を云うんですよ」

「決心したって、死ぬわねえ。わたしなんか是非及^{きゆ}第^{うだい}するつもりだったけれども、とうとう落第してしまつたわ」

「保険社員もそう云うのよ。寿命は自分の自由にはなりません。決心で長^なが生^いきが出来るものなら、誰も死ぬものはございませんって」

「保険会社の方が至当しとうですわ」

「至当でしょう。それがわからないの。いえ決して死なない。誓って死なないって威張るの」

「妙ね」

「妙ですとも、大妙おおみようですわ。保険の掛金を出すくら

いなら銀行へ貯金する方が遥はるかにましだってすまし

切っているんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちつとも構う考なんかないんですよ」

「本当に心配ね。なぜ、あんななんでしょう、ここへいらっしやる方^{かた}だって、叔父さんのようなのは一人もいないわね」

「いるものですか。無類ですよ」

「ちつと鈴木さんにでも頼んで意見でもして貰うといいんですよ。ああ云う穏おだやかな人だとよっぽど楽らくですがねえ」

「ところが鈴木さんは、うちじや評判がわるいのよ」

「みんな逆さかなのね。それじや、あの方がいいでしょかたう——ほらあの落ちついてる——」

「八木さん？」

「ええ」

「八木さんには大分だいぶん閉口へいこうしているんですがね。昨日きのう

迷亭さんが来て悪口あくぐちをいったものだから、思ったほ

ど利きかないかも知れない」

「だっていいじゃないですか。あんな風に鷹揚おうように

落ちついていれば、——こないだ学校で演説をなす

ったわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

「いいえ、先生じゃないけども、しゆくとかふじんかい淑徳婦人会のとき

に招待して、演説をして頂いたの」

「面白かった？」

「そうね、そんなに面白くもなかったわ。だけでもあの先生が、あんな長い顔なんでしょう。そうして天神様のような髯ひげを生やしているもんだから、みんな感心して聞いていてよ」

「御話しって、どんな御話なの？」と妻君が聞きかけていると椽側えんがわの方から、雪江さんの話し声をききつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ乱入して来

た。今までは竹垣の外の空地あきちへ出て遊んでいたものである。

「あら雪江さんが来た」と二人の姉さんは嬉しそうに大きな声を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐わりなさい。雪江さんが今面白い話をなさるところだから」と仕事を隅へ片付ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云ったのはとん子で「やっぱりかちかち山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち

」と云い出した三女は姉と姉の間から膝を前の方に出す。ただしこれは御話を承うけたまわると云うのではない

、坊ばもまた御話を仕つかまつると云う意味である。「あら

、また坊ばちゃんの話だ」と姉さんが笑うと、妻君

は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話がすんでから」と賺^すかして見る。坊ばはなかなか聞きそうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな声を出す。「お、よしよし坊ばちゃんからなさい。何と云うの？

」と雪江さんは謙遜^{けんそん}した。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのって」

「面白いのね。それから？」

「わたちは田圃^{たんぼ}へ稲刈いに」

「そう、よく知ってる事」

「御前がくうと邪魔^{だま}になる」

「あら、くうとじゃないわ、くるとだわね」ととん

子が口を出す。坊ばは相変らず「ばぶ」と一喝^{いっかつ}して

へきえき

直ちに姉を辟易^{へきえき}させる。しかし途中で口を出された

ものだから、続きを忘れてしまって、あとが出て来

ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

「あのね。あとでおならは御免ごめんだよ。ぷう、ぷうぷうって」

「ホホホホ、いやだ事、誰にそんな事を、教わったの？」

「御三おたんに」

「わるい御三おさんね、そんな事を教えて」と妻君は苦笑

をしていたが「さあ今度は雪江さんの番だ。坊やおとなしく聞いているのですよ」と云うと、さすがの暴君も納得なつとくしたと見えて、それぎり当分の間は沈黙した。

「八木先生の演説はこんなだよ」と雪江さんがとうとう口を切った。「昔ある辻つじの真中に大きな石地藏

があつたんですつてね。ところがそこがあいにく馬
や車が通る大變賑にぎやかな場所だもんだから邪魔にな
つて仕様がなないんでね、町内のものが大勢寄つて、
相談をして、どうしてこの石地蔵を隅の方へ片づけ
たらよかろうつて考えたんですつて」

「そりや本当にあつた話なの？」

「どうですか、そんな事は何ともおっしやらなくつ

てよ。――でみんながいろいろ相談をしたら、その町内で一番強い男が、そりや訳はありません、わたしがきつと片づけて見せますって、一人でその辻へ行つて、もろはだ両肌を抜いで汗を流して引っ張ったけれど、も、どうしても動かないんですって」

「よっぽど重い石地藏なのね」

「ええ、それでその男が疲れてしまつて、うちへ歸

って寝てしまったから、町内のものはまた相談をし

たんですね。すると今度は町内で一番利口な男が、

私に任せて御覧なさい、一番やつて見ますからって

わたし

、重箱のなかへ牡丹餅ぼたもちを一杯入れて、地蔵の前へ来

て、『ここまでおいで』と云いながら牡丹餅を見せ

びらかしたんだって、地蔵だって食意くいじ地が張ってる

から牡丹餅で釣れるだろうと思つたら、少しも動か

ないんだって。利口な男はこれではいけないと思っ

てね。今度は瓢箪へお酒を入れて、その瓢箪を片手

ひょうたん

へぶら下げて、片手へ猪口ちよこを持ってまた地蔵さんの

前へ来て、さあ飲みたくはないかね、飲みたければ
ここまでおいでと三時間ばかり、からかつて見たが
やはり動かないんですって」

「雪江さん、地蔵様は御腹おなかが減へらないの」ととん子

がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が云った。
。

「利口な人は二度共しくじったから、その次には贗にせ

札を沢山さつこしらえて、さあ欲しいだろう、欲しけれ

ば取りにおいでと札を出したり引っ込ましたりした

がこれもまるで益やくに立たないんですって。よっぽど

頑固がんこな地藏様なのよ」

「そうね。すこし叔父さんに似ているわ」

「ええまるで叔父さんよ、しまいに利口な人も愛想あいそ

をつかしてやめてしまったんですとさ。それでその

あとからね、大きな法螺ほらを吹く人が出て、私わたしならき

つと片づけて見せますからご安心なさいとさも容易たやす

い事のように受合ったそうです」

「その法螺を吹く人は何をしたんです」

「それが面白いのよ。最初にはね巡査の服をきて、

付け髯ひげをして、地蔵様の前へきて、こらこら、動か

んとその方のためにならんぞ、警察で棄てておかん

ぞと威張って見せたんですとさ。今の世に警察の仮こわ

声いろなんか使ったって誰も聞きやしないわね」

「本当ね、それで地蔵様は動いたの？」

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大變恐れ入っているのよ

」

「あらそう、あんな顔をして？　それじゃ、そんな

に怖こわい事はないわね。けれども地藏様は動かないん

ですって、平氣でいるんですとさ。それで法螺吹は

大變怒おこって、巡査の服を脱いで、付け髯かみくずを紙屑籠かごへ

抛ほうり込んで、今度は大金持ちの服装なりをして出て来た

そうです。今の世で云うと岩崎男爵のような顔をするんですとさ。おかしいわね」

「岩崎のような顔ってどんな顔なの？」

「ただ大きな顔をするんでしょう。そうして何もしないで、また何も云わないで地蔵の周りまわりを、大きな

巻煙草をふかしながら歩行あるしているんですとさ」

「それが何になるの？」

「地蔵様を煙けむに捲まくんです」

「まるで噺はなし家かの洒落しやれのようね。首尾よく煙けむに捲まい

たの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。ごまかしもたい
ていにすればいいのに、今度は殿下さまに化けて来
たんだって。馬鹿ね」

「へえ、その時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでしよう。八木先生はそうおっしゃってよ。
たしかに殿下様に化けたんだって、恐れ多い事だ
が化けて来たって——第一不敬じゃありませんか、
法螺吹きの分際ほらふぶんざいで」

「殿下って、どの殿下さまなの」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだって不敬で
すわ」

「そうね」

「殿下さまでも利きかないでしょう。法螺吹きもしようがないから、とても私わたしの手際てぎわでは、あの地蔵はど
うする事も出来ませんと降参をしたそうです」

「いい気味ね」

「ええ、ついでに懲役ちようえきにやればいいのに。――でも
町内のものは大層も気を揉もんで、また相談を開いたん

ですが、もう誰も引き受けるものがないんで弱った
そうです」

「それでおしまい？」

「まだあるのよ。一番しまいに車屋とゴロツキを大
勢雇って、地蔵様の周りまわをわいわい騒いであるいた
んです。ただ地蔵様をいじめて、いたたまれないよ
うにすればいいと云って、夜昼交替こうたいで騒ぐんだって

「御苦労様ですこと」

「それでも取り合わないんですとさ。地蔵様の方も随分強情ね」

「それから、どうして？」と、とん子が熱心に聞く。

「それからね、いくら毎日毎日騒いでも、げん騷が見えな
いので、だいぶ大分みんなが厭いやになつて来たんですが、車

夫やゴロツキは幾日いくんちでも日当にっとうになる事だから喜んで

騒いでいましたとさ」

「雪江さん、日当ってなに？」とすん子が質問をす
る。

「日当と云うのはね、御金の事なの」

「御金をもらって何にするの？」

「御金を貰ってね。……ホホホいやなすん子さん

だ。――それで叔母さん、毎日毎晩から騒ぎをして

いますとね。その時町内に馬鹿竹と云つて、何も知

ばかたけ

なんに

らない、誰も相手にしない馬鹿がいたんですつてね

。その馬鹿がこの騒ぎを見て御前方はおまえがた何でそんなに

騒ぐんだ、何年かかっても地蔵一つ動かす事が出来

ないのか、かわいそう可哀想なものだ、と云つたそうですつて

「馬鹿の癖にえらいのね」

「なかなかえらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹ばかたけの云

う事を聞いて、物はためしだ、どうせ駄目だろうが

、まあ竹にやらして見ようじゃないかとそれから竹

に頼むと、竹は一も二もなく引き受けたが、そんな

邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やゴロ

ツキを引き込ましてひょうぜん飄然と地藏様の前へ出て来まし

た」

「雪江さん飄然て、馬鹿竹のお友達？」ととん子が
肝心なところかんじんで奇問を放ったので、細君と雪江さん
はどつと笑い出した。

「いいえお友達じゃないのよ」

「じゃ、なに？」

「飄然と云うのはね。——云いようがないわ」

「飄然て、云いようがないの？」

「そうじゃないのよ、飄然と云うのはね——」

「ええ」

「そら多々良三平さんたたらさんを知ってるでしょう」

「ええ、山の芋をくれてよ」

「あの多々良さん見たようなを云うのよ」

「多々良さんは飄然なの？」

「ええ、まあそうよ。――それで馬鹿竹が地蔵様の

ふところで

前へ来て懷手をして、地蔵様、町内のものが、あなたに動いてくれと云うから動いてやんなさいと云つたら、地蔵様はたちまちそうか、そんなら早くそう云えばいいのに、とのこのこ動き出したそうです」

「妙な地蔵様ね」

「それからが演説よ」

「まだあるの？」

「ええ、それから八木先生がね、今日こんにちは御婦人の会

であります。私がかような御話をわざわざ致したのは少々考があるので、こう申すと失礼かも知れませんが、婦人というものはとにかく物をするのに正面から近道を通って行かないで、かえって遠方から廻りくどい手段をとる弊へいがある。もつともこれは御婦

人に限った事でない。明治の代は男子といえども、文明の弊を受けて多少女性的になつてゐるから、よくいらざる手数てすうと労力を費ついやして、これが本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解してゐるものが多いようだが、これ等は開化の業に束縛された畸き形児けいじである。別に論ずるに及ばん。ただ御婦人に在あつてはなるべくただいま申した昔話を御記憶になつ

て、いざと云う場合にはどうか馬鹿竹のような正直な了見で物事を処理していただきたい。あなた方が

馬鹿竹になれば夫婦の間、嫁姑よめしゅうとの間に起る忌いわしき

葛藤かつとうの三分一はたしかに減ぜられるに相違ない。人

間は魂胆こんたんがあればあるほど、その魂胆が崇たつて不幸

の源みなもとをなすので、多くの婦人が平均男子より不幸な

のは、全くこの魂胆があり過ぎるからである。どう

か馬鹿竹になつて下さい、と云う演説なの」

「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる気なの」

「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになりたく

はないわ。金田の富子さんなんぞは失敬だつて大變

おこ
怒つてよ」

「金田の富子さんて、あの向横町むこうよこちやうの？」

「ええ、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの学校へ行くの？」

「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当にハイカラね。どうも驚ろいちまうわ」

「でも大変いい器量だって云うじやありませんか」

「並ですわ。御自慢ほどじやありませんよ。あんなに御化粧をすればたいていの人によく見えるわ」

「それじや雪江さんなんぞはそのかたのように御化

粧をすれば金田さんの倍くらい美しくなるでしょう

」

「あらいやだ。よくつてよ。知らないわ。だけど、

あの方は全く^{かた}つくり過ぎるのね。なんぼ御金があつ

たって――」

「つくり過ぎても御金のある方がいいじゃありません

んか」

「それもそうだけれども——あの方こそ、少し馬鹿
竹になった方がいいでしょう。無暗むやみに威張るんです
もの。この間もなんとか云う詩人が新体詩集を捧げ
たって、みんなに吹聴ふいちやうしているんですもの」

「東風さんでしょう」

「あら、あの方が捧げたの、よっぽど物数奇ものずきね」

「でも東風さんは大変真面目なんですよ。自分じゃ

「あんな事をするのが当前だ^{あたりまえ}とまで思ってるんですもの」

「そんな人があるから、いけないんですよ。——それからまだ面白い事があるの。此間^{こないだ}だれか、あの方^{ところ}へ艶書^{えんしょ}を送ったものがあるんだって」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは

「誰だかわからないんだって」

「名前はないの？」

「名前はちゃんと書いてあるんだけども聞いた事もない人だって、そうしてそれが長い長い一間ばかりもある手紙でね。いろいろな妙な事がかいてあるんですとさ。わたし私おもがあなたを恋っているのは、ちよう

ど宗教家が神にあこがれているようなものだの、あ

なたのためならば祭壇に供える小羊となつて屠^{ほふ}られるのが無上の名誉であるの、心臓の形^{かた}ちが三角で、三角の中心にキューピッドの矢が立って、吹き矢なら大当りであるの……」

「そりや真面目なの？」

「真面目なんですとさ。現にわたしの御友達のうちでその手紙を見たものが三人あるんですもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さんのところへ御嫁に行くつもりなんだから、そんな事が世間へ知れちゃ困るでしょうにね」

「困るどころですか大得意よ。こんだ寒月さんが来たら、知らして上げたらいいでしよう。寒月さんはまるで御存じないんでしよう」

「どうですか、あの方は学校へ行つて球たまばかり磨い

ていらっしやるから、大方知らないでしよう」

「寒月さんは本当にあの方を御貫おもらいになる気なんでしょうかね。御気の毒だわね」

「なぜ？ 御金があつて、いざつて時に力になつて、
いいじやありませんか」

「叔母さんは、じきに金、金つて品ひんがわるいのね。
金より愛の方が大事じやありませんか。愛がなけれ

ば夫婦の關係は成立しやしないわ」

「そう、それじゃ雪江さんは、どんなところへ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何も無いんですもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件について何か弁論

たくま

を遅しくしていると、さつきから、分らないなりに

謹聴していると、ん子が突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云いだした。この無鉄砲な希望には、さすが青春の氣に満ちて、大に同情を寄すベおおいき雪江さんもちよつと毒氣を抜かれた体であつたが、細君の方は比較的平氣に構えて「どこへ行きたいの」と笑ながら聞いて見た。

「わたしねえ、本当はね、しょうこんしゃ招魂社へ御嫁に行きたい

んだけれども、水道橋を渡るのがいやだから、どうしようかと思ってるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事に問い返す勇氣もなく、どっと笑い崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向ってかような相談を持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社がすき？　わたしも大すき。い

っしよに招魂社へ御嫁に行きましよう。ね？ いや

？ いやなら好^いいわ。わたし一人で車へ乗ってさっさと行っちまうわ」

「坊ばも行くの」とついには坊ばさんまでが招魂社へ嫁に行く事になった。かように三人が顔を揃^{そろ}えて招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ樂であらう。

ところへ車の音ががらがらと門前に留ったと思つ

たら、たちまち威勢のいい御帰りと云う声がした。

主人は日本堤分署から戻ったと見える。車夫が差出

す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠ゆう

然ぜんと茶の間へ這入はいつて来る。「やあ、来たね」と雪

江さんに挨拶しながら、例の有名なる長火鉢そばの傍へ

、ぽかりと手に携たずさえた徳利とっくりようのものを抛ほうり出した。

徳利様と云うのは純然たる徳利では無論ない、と云

つて花活はないけとも思われない、ただ一種異様の陶器であるから、やむを得ずしばらくかように申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰っていらしたの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顔を見ながら、「どうだ、いい恰好かっこうだろう」と自慢する。

「いい恰好なの？　それが？　あんまりよかあない

わ？　あぶらつぽ油壺なんか何で持っていらっしったの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから困る」

「じゃ、なあに？」

「花活はないけさ」

「花活にしちや、口が小ちいさ過ぎて、いやに胴が張

ってるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。まるで叔母さんとえら忤ぶところなしだ。困ったものだな」と独ひとりで油壺を取り上げて、障子しょうじの方へ向けて眺ながめている。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰ってくるような真似は出来ないわ。ねえ叔母さん」叔母さん

はそれどころではない、風呂敷包を解いて皿眼とさつまなこにな
って、盗難品を検しらべている。「おや驚ろいた。泥棒
も進歩したのね。みんな、解いて洗い張をしてある
わ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰ってくるものか。待ってる
のが退屈だから、あすこいらを散歩しているうちに
掘り出して来たんだ。御前なんぞには分るまいがそ

れでも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一体叔父さんはどこを散歩したの

」

「どこって日本堤界隈にほんづつみかいわいさ。吉原へも這入はいって見た。

なかなか盛さかんな所だ。あの鉄の門を觀みた事があるかい

。ないだろう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて賤業婦せんぎようふのいる

所へ行く因縁いんねんがありませんわ。叔父さんは教師の身

で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本当に驚ろいてしまおうわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「ええ、そうね。どうも品数しなかずが足りないようだ事。

これでみんな戻ったんでしょうか」

「戻らんのは山の芋ばかりさ。元来九時に出頭しろと云いながら十一時まで待たせる法があるものか、

これだから日本の警察はいかん」

「日本の警察がいけないって、吉原を散歩しちやな
おいけないわ。そんな事が知れると免職になつてよ
ねえ叔母さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私の帯の片側かたかわがな
いんです。何だか足りないと思つたら」

「帯の片側くらいあきらめるさ。こっちは三時間も

待たされて、大切な時間を半日潰つぶしてしまった」と

日本服に着代えて平気に火鉢へもたれて油壺を眺ながめ

ている。細君も仕方がないと諦あきらめて、戻った品をそ

のまま戸棚へしまい込こんで座に帰る。

「叔母さん、この油壺が珍品ですとさ。きたないじ

やありませんか」

「それを吉原で買っ
ていらしたの？

まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくつても、どこにだってあるじやありませんか」

「ところが無いんだよ。滅多めったに有る品ではないんだよ」

「叔父さんは随分石地蔵いしじぞうね」

「また小供の癖に生意気を云う。どうもこの頃の女

学生は口が悪くついていかん。ちと女大学でも読む
がいい」

「叔父さんは保険が嫌きらいでしょう。女学生と保険とど
っちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未来の
考のあるものは、誰でも這はい入る。女学生は無用の長
物だ」

「無用の長物でもいい事よ。保険へ這入ってもいいない癖に」

「来月から這入るつもりだ」

「きつと？」

「きつとだとも」

「およしなさいよ、保険なんか。それよりかその懸かけ金きんで何か買った方がいいわ。ねえ、叔母さん」叔母

さんはにやにや笑っている。主人は真面目になつて
「お前などは百も二百も生きる気だから、そんな呑^の
気^{んき}な事を云うのだが、もう少し理性が発達して見ろ
、保険の必要を感じずるに至るのは当前だ。^{あたりまえ}ぜひ来月
から這入るんだ」

「そう、それじゃ仕方がない。だけどこないだのよ
うに蝙蝠傘^{こうもり}を買つて下さる御金があるなら、保険に

這入る方がましかも知れないわ。ひとがいりません、いりませんと云うのを無理に買つて下さるんですもの」

「そんなにいらなかつたのか？」

「ええ、蝙蝠傘なんか欲しかないわ」

「そんなら還かえすがいい。ち、よ、う、ど、とん子が欲しがつ

てるから、あれをこつちへ廻してやろう。今日持つ

て来たか」

「あら、そりや、あんまりだわ。だって苛ひどいじやありませんか、せっかく買つて下すつておきながら、還せなんて」

「いらないと云うから、還せと云うのさ。ちつとも苛くはない」

「いらぬ事はいらぬんですけれども、苛いわ」

「分らん事を言う奴だな。いらなないと云うから還せと云うのに苛い事があるものか」

「だって」

「だって、どうしたんだ」

「だって苛いわ」

「愚^ぐだな、同じ事ばかり繰り返している」

「叔父さんだって同じ事ばかり繰り返しているじゃ

ありませんか」

「御前が繰り返すから仕方がないさ。現にいらないと云ったじゃないか」

「そりや云いましたわ。いらぬ事はいらぬんですけれども、還すのは厭いやですもの」

「驚ろいたな。没分曉わからずやで強情なんだから仕方がない

。御前の学校じや論理学を教えないのか」

「よくつてよ、どうせ無教育なんですから、何とでもおっしやい。人のものを還せだなんて、他人だつてそんな不人情な事は云やしない。ちつと馬鹿竹ばかたけの真似でもなさい」

「何の真似をしろ？」

「ちと正直に淡泊たんぱくになさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。それだから落第

するんだ」

「落第したって叔父さんに学資は出して貰やしないわ」

雪江さんは言^{げん}ここに至^{いた}って感に堪^たえざるもののご

とく、^{さんぜん}濟然として一掬^{いっきく}の涙^{なみだ}を紫^{はかま}の袴^{はかま}の上に落した。

主人は茫^{ぼう}乎^うとして、その涙がいかなる心理作用に起

因するかを研究するもののごとく、袴の上と、俯^{うつ}つ

向いた雪江さんの顔を見つめていた。ところへ御三おさん

が台所から赤い手を敷居越に揃そろえて「お客さまがい

らっしゃいました」と云う。「誰が来たんだ」と主

人が聞くと「学校の生徒さんでございます」と御三

は雪江さんの泣顔を横目に睨にらめながら答えた。主人

は客間へ出て行く。吾輩も種取り兼人けん間研究のため

、主人に尾びして忍びやかに椽えんへ廻った。人間を研究

するには何か波瀾がある時を^{えら}忖^{いっこう}ばないと一向結果が

出て来ない。平生は大方の人が大方の人であるから

、見ても聞いても張合のないくらい平凡である。し

かしいざとなるとこの平凡が急に靈妙なる神秘的作

用のためにむくむくと持ち上がって奇なもの、変な

もの、妙なもの、^い異なもの、一と口に云えば吾輩猫

共から見てすこぶる後学になるような事件が至ると

おうふう

ころに横風にあらわれてくる。雪江さんの紅涙のご

こうるい

ときはまさしくその現象の一つである。かくのごと

く不可思議、不可測ふかそくの心を有している雪江さんも、

細君と話をしているうちはさほどとも思わなかった

が、主人が帰ってきて油壺ほうを抛り出すやいなや、た

しりゅう

じょうきポンプ

ちまち死竜に蒸汽唧筒を注ぎかけたるごとく、勃然ぼっぜん

しんおう

きち

としてその深奥にして窺知すべからざる、巧妙なる

、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質を、惜氣も

なく発揚し了^{おわ}った。しかしてその麗質は天下の女性^{によしよう}

に共通なる麗質である。ただ惜しい事には容易にあ

らわれて来ない。否^{いや}あらわれる事は二六時中間断な

くあらわれているが、かくのごとく顯著に灼然炳乎^{しゃくぜんへいこ}

として遠慮なくはあらわれて来ない。幸にして主人

のように吾輩の毛をややともすると逆さに撫^なでたが

る旋毛曲りの奇特家つむじまがきどくかがおったから、かかる狂言も拝

見が出来たのであろう。主人のあとさえついてある
けば、どこへ行っても舞台の役者は吾知らず動くに
相違ない。面白い男を旦那様に戴いたいて、短かい猫の
命のうちにも、大分だいぶん多くの経験が出来る。ありがた
い事だ。今度のお客は何者であらう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追おつつ、返かつつ

の書生である。大きな頭を地の隙すいて見えるほど刈

り込んで団子だんごっ鼻ばなを顔の真中にかためて、座敷の隅

の方に控ひかえている。別にこれと云う特徴もないが頭ず

蓋骨がいこつだけはすこぶる大きい。青坊主に刈つてさえ、

ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延ば

したら定めし人目を惹ひく事だろう。こんな顔にかぎ

って学問はあまり出来ない者だとは、かねてより主

人の持説である。事實はそうかも知れないがちよつと見るとナポレオンのようですこぶる偉観である。

着物は通例の書生のごとく、薩摩さつまがすり絣か、久留米くるめがす

りかまた伊予いよ絣か分らないが、ともかくも絣かすりと名づ

けられたるあわせ衿を袖短かに着こなして、下には襯衣シャツも

襦袢じゅばんもないようだ。素衿すあわせや素足すあしは意気なものだそう

だが、この男のはなはだむさ苦しい感じを与える。

ことに畳の上に泥棒のような親指を歴然と三つまで

印いんしているのは全く素足の責任に相違ない。彼は四

つ目の足跡の上へちゃんと坐つて、さも窮屈そうに

畏かしこまっている。一体かしこまるべきものがおと

なしく控ひかえるのは別段気にするにも及ばんが、毬栗いかり

頭あたまのつんつるてんの乱暴者が恐縮しているところは

何となく不調和なものだ。途中で先生に逢つてさえ

礼をしないのを自慢にするくらいの連中が、たとい
三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ない。ところ
を生れ得て恭謙きょうけんの君子、盛徳ちやうしやの長者であるかのごと
く構えるのだから、当人の苦しいにかかわらず傍はたか
ら見ると大分だいぶんおかしいのである。教場もしくは運動
場であんなに騒々しいものが、どうしてかように自
己かんそくを箝束そなする力を具えているかと思うと、憐れにも

あるが滑稽こっけいでもある。こうやって一人ずつ相対あいたいにな

ると、いかに愚駭ぐがいなる主人といえども生徒に対して

幾分かの重みがあるように思われる。主人も定めし

得意であろう。塵積ちりつて山をなすと云うから、微々

たる一生徒も多勢たぜいが聚合しゅうごうすると侮あなどるべからざる団体

となつて、排斥運動はいせきやストライキをしでかすかも知

れない。これはちやうど臆病者が酒を飲んで大胆に

なるような現象であらう。衆を頼んで騒ぎ出すのは

、人の氣に酔つ払つた結果、正氣を取り落したるも

のと認めて差支えあるまい。さしつかそれでなければかよう

に恐れ入ると云わんよりむしろ悄然として、自ら襖しょうぜん
みずか ふうすま

に押し付けられているくらいな薩摩絣が、いかに老

朽だと云つて、かりそ苟めにも先生と名のつく主人を輕蔑けいべつ

しようがない。馬鹿に出来る訳がない。

主人は座布団ざぶとんを押しやりながら、「さあお敷き」

と云ったが毬栗先生はかたくなのまま「へえ」と

云って動かない。鼻の先に剥はげかかった更紗さらさの座布

団が「御乗んなさい」とも何とも云わずに着席して

いる後ろうしに、生きた大頭がつくねんと着席している

のは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰める

ために細君が勧工場から仕入れて来たのではない。

布団にして敷かれずんば、布団はまさしくその名誉

を毀損きそんせられたるもので、これを勧めたる主人もま

た幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を潰つぶして

まで、布団と睨にらめくらをしている毬栗君は決して布

団その物が嫌きらいなのではない。実を云うと、正式に坐

った事は祖父じいさんの法事の時のほかは生れてから滅め

多たにないので、先さつきからすでにしびれが切れかか

つて少々足の先は困難を訴えているのである。それ
にもかかわらず敷かない。布団が手持無沙汰に控え
ているにもかかわらず敷かない。主人がさあお敷き
と云うのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。このくら
い遠慮するなら多人数集まった時もう少し遠慮すれ
ばいいのに、学校でもう少し遠慮すればいいのに、
下宿屋でもう少し遠慮すればいいのに。すまじきと

ころへ気兼きがねをして、すべき時には謙遜けんそんしない、否大おおい

ろうぜき

に狼藉を働らく。たちの悪るい毬栗坊主だ。

うし

ふすま

ところへ後ろの襖をすうと開けて、雪江さんが一

うやうや

碗の茶を恭しく坊主に供した。平生なら、そらサヴ

ひ

エジ・チーが出たと冷やかすのだが、主人一人に対

い

によしょう

してすら痛み入っている上へ、妙齡の女性によしょうが学校で

おがさわらりゆう

おつ

覚え立ての小笠原流で、乙おつに気取った手つきをして

茶碗を突きつけたのだから、坊主は大おおに苦悶くもんの体ていに

見える。雪江さんは襖ふすまをしめる時に後ろからにやに

やと笑った。して見ると女は同年輩でもなかなかえ

らいものだ。坊主に比すれば遙はるかに度胸どきょうが据すわって

いる。ことに先刻さつきの無念にはらはらと流した一滴の

紅涙こうるいのあとだから、このにやにやがさらに目立って

見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、双方無言のまま、しばらくの間は辛防しんぼうしていたが、これでは業ぎょうをするようなものだ。と気がついた主人はようやく口を開いた。

「君は何とか云ったけな」

「古井ふるい……」

「古井？　古井何とかだね。名は」

「古井武右衛門^{ぶえもん}」

「古井武右衛門——なるほど、だいぶ長い名だな。」

「今の名じゃない、昔の名だ。四年生だったね」

「いいえ」

「三年生か？」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだから、決して忘れるどころではない。のみならず、時々夢に見るくらい感銘した頭である。しかし呑気のんきな主人はこの頭とこの古風な姓名とを連結して、その連結したものをまた二年

乙組に連結する事が出来なかつたのである。だからこの夢に見るほど感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそう、かと心の裏で手を拍つたのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、しかも自分の監督する生徒が何のために今頃やって来たのか頓と推諒出来ない。とんすいりよう元来不人望な主人の事だから、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほ

とんど寄りついた事がない。寄りついたのは古井武

右衛門君をもつて嚙矢こうしとするくらいな珍客であるが

、その来訪の主意がわからんには主人も大おおに閉口し

ているらしい。こんな面白くない人の家うちへただ遊び

にくる訳もなからうし、また辞職勧告ならもう少し

昂然こうぜんと構え込みそうだし、と云つて武右衛門君など

が一身上の用事相談があるはずがないし、どっちか

ら、どう考えても主人には分らない。武右衛門君の様子を見るとあるいは本人自身にすら何で、ここま
で参ったのか判然しないかも知れない。仕方がない
から主人からとうとう表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」

「それじゃ用事かね」

「ええ」

「学校の事かい」

「ええ、少し御話ししようと思つて……」

「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云うと

武右衛門君下を向いたぎり何にも言わ^{なん}ない。元来武

右衛門君は中学の二年生にしてはよく弁^{べん}ずる方で、

頭の大きい割に脳力は発達しておらんが、喋^{しゃべ}舌る事

そうそう

においては乙組中鏘々たるものである。現にせんだ

おおい

ってコロンバスの日本訳を教えろと云って大に主人

を困らしたはまさにこの武右衛門君である。その鏘

さいぜん

どもり

々たる先生が、最前から吃の御姫様のようにもじも

じしているのは、何か云いわくのある事でなくてはな

らん。単に遠慮のみとはとうてい受け取られない。

主人も少々不審に思つた。

「話す事があるなら、早く話したらいいじゃないか」

「少し話しにくい事で……」

「話しにくい？」と云いながら主人は武右衛門君の

顔を見たが、先方は依然として俯向うつむきになつてゐるから

、何事とも鑑定が出来ない。やむを得ず、少し語勢

を変えて「いいさ。何でも話すがいい。ほかに誰も

聞いていやしない。わたしも他言たごんはしないから」と

おだ 穏やかにつけ加えた。

「話してもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ迷っている。

「いいだろう」と主人は勝手な判断をする。

「では話しますが」といいかけて、毬栗頭いがぐりあたまをむくり

と持ち上げて主人の方をちよつとまぼしそうに見た

。その眼は三角である。主人は頬をふくらまして朝日の煙を吹き出しながらちよつと横を向いた。

「実はその……困った事になつちまつて……」

「何が？」

「何がって、はなはだ困るもんですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事をする考はなかったんですけれども、浜^は

田^{まだ}が借せ借せと云うもんですから……」

「浜田と云うのは浜田平助^{へいすけ}かい」

「ええ」

「浜田に下宿料でも借したのかい」

「何そんなものを借したんじゃないやありません」

「じゃ何を借したんだい」

「名前を借したんです」

「浜田が君の名前を借りて何をしたんだい」

「えんしよ艶書を送ったんです」

「何を送った？」

「だから、名前は廃よして、投函とうかんやく役になると云ったん

です」

「何だか要領を得んじやないか。一体誰が何をした

んだい」

えんしよ

「艶書を送ったんです」

「艶書を送った？　誰に？」

「だから、話しにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女に艶書を送ったのか」

「いいえ、僕じゃないんです」

「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちつとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だって、何の事だかちつとも分

らんじやないか。もつと条理を立てて話すがいい。

元来その艶書を受けた当人はだれか」

「金田むこうよこちようって向横丁にいる女です」

「あの金田という実業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送つ

たんです。——浜田が名前がなくちゃいけないって云いますから、君の名前をかけって云ったら、僕のじやつまらない。古井武右衛門の方がいいって——それで、とうとう僕の名を借してしまっただんです」

「で、君はあすこの娘を知ってるのか。交際でもあるのか」

「交際も何もありやしません。顔なんか見た事もあるのか」

りません」

「乱暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云う了見で、そんな事をしたんだい」

「ただみんながあいつは生意気で威張ってるて云うから、からかってやったんです」

「ますます乱暴だな。じゃ君の名を公然とかいて送ったんだな」

「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を借して遠藤が夜あすこのうちまで行つて投函して来たんです」

「じゃ三人で共同してやったんだね」

「ええ、ですけれども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思つて、非常に心配して二三日は寝られないんで、何だか茫ぼんやりし

てしまいました」

「そりやまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いいえ、学校の名なんか書きやしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名誉

「関する」

「どうでしょう退校になるでしょうか」

「そうさな」

「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、それにお母さんつかが継母ままははですから、もし退校にでもなろうもんなら、僕あ困っちゃうです。本当に退校になるでしょうか」

「だから滅多めったな真似をしないがいい」

「する気でもなかったんですが、ついやってしまっ
たんです。退校にならないように出来ないでしょう
か」と武右衛門君は泣き出しそうな声をしてしきり
に哀願に及んでいる。襖ふすまの蔭では最前さいぜんから細君と雪
江さんがくすくす笑っている。主人は飽あくまでもも
ったいぶって「そうさな」を繰り返している。なか

なか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのはもつともだ。人

間にせよ、動物にせよ、己おのれを知るのは生涯しょうがいの大事で

ある。己おのれを知る事が出来さえすれば人間も人間とし

て猫より尊敬を受けてよろしい。その時は吾輩もこ
んないたずらを書くのは気の毒だからすぐさまやめ

てしまうつもりである。しかし自分で自分の鼻の高さが分らないと同じように、自己の何物かはなかなか見当がつき悪くいと見えて、平生から輕蔑してゐる猫に向つてさえかような質問をかけるのであらう。

人間は生意気なようでもやはり、どこか抜けてゐる。万物の靈だなどどこへでも万物の靈を担いであるくかと思うと、これしきの事実が理解出来ない

。しかも恬^{てん}として平然たるに至つてはちと一噓^{いっきやく}を催

したくなる。彼は万物の霊を背^せ中^{なか}へ担^{かつ}いで、おれの

鼻はどこにあるか教えてくれ、教えてくれと騒ぎ立
てている。それなら万物の霊を辞職するかと思うと

、どう致して死んでも放しそうにしない。このくら

い公然と矛盾をして平気でいられば愛嬌^{あいぎょう}になる。

愛嬌になる代りには馬鹿をもつて甘^{あま}じなくてはなら

ん。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江

嬢を面白がるのは、単に外部の事件が鉢合せはちあわをして

、その鉢合せが波動を乙おつなところに伝えるからでは

ない。実はその鉢合の反響が人間の心に個々別々の

音色ねいろを起すからである。第一主人はこの事件に対し

てむしろ冷淡である。武右衛門君のおやじさんがい

かにやかましくつて、おつかさんがいかに君を継子ままこ

あつかいにしようとも、あんまり驚ろかない。驚ろ

くはずがない。武右衛門君が退校になるのは、自分

が免職になるのとは大に趣おおいおもむきが違う。千人近くの生徒

がみんな退校になったら、教師も衣食みちの途に窮する

かも知れないが、古井武右衛門君一人いちにんの運命がどう

変化しようとして、主人ちようせきの朝夕にはほとんど関係がない

。関係の薄いところには同情も自から薄い訳である

まゆ

。見ず知らずの人のために眉をひそめたり、鼻をか

んだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではな

なさけぶか

い。人間がそんなに情深い、思いやりのある動物で

あるとははなはだ受け取りにくい。ただ世の中に生

ふぜい

れて来た賦税として、時々交際のために涙を流して

見たり、気の毒な顔を作って見せたりするばかりで

ある。云わばごまかし性^{せい}表情で、実を云うと大分骨^{だいぶん}

が折れる芸術である。このごまかしをうまくやるものを芸術的良心の強い人と云って、これは世間から大変珍重される。だから人から珍重される人間ほど怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。この点において主人はむしろ拙^{せつ}な部類に属すると云ってよろしい。拙だから珍重されない。珍重されないから

、内部の冷淡を存外隠すところもなく発表している。
彼が武右衛門君に対して「そうさな」を繰り返しているのでも這裏しやりの消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云って、けっして主人のような善人を嫌ってはいけない。冷淡は人間の本来の性質であって、その性質をかくそうと力つとめないのは正直な人である。もし諸君がかかる際に冷淡以上を望んだら、それこ

そ人間を買い被かぶつたと云わなければならない。正直

ですら払底ふつていな世にそれ以上を予期するのは、馬琴ばきんの

小説から志し乃のや小文吾こぶんごが抜けだして、向う三軒両隣

へ八犬伝はっけんでんが引き越した時でなくては、あてにならな

い無理な注文である。主人はまずこのくらいにして

、次には茶の間で笑おんなれんつてる女連に取りかかるが、こ

れは主人の冷淡を一步むこう向へ跨またいで、滑稽こっけいの領分おどに躍

り込んで嬉しがっている。この女連には武右衛門君が頭痛に病んでゐる艶書事件が、仏陀ぶつだの福音ふくいんのごとくありがたく思われる。理由はないただありがたい。強いて解剖すれば武右衛門君が困るのがありがたいのである。諸君女に向つて聞いて御覧、「あなたは人が困るのを面白がつて笑いますか」と。聞かれた人はこの問を呈出した者を馬鹿と云うだろう、馬

鹿と云わなければ、わざとこんな問をかけて淑女の品性を侮辱したと云うだろう。侮辱したと思うのは事実かも知れないが、人の困るのを笑うのも事実である。であるとすれば、これから私の品性を侮辱するような事を自分でしてお目にかけますから、何とか云っちゃいやよと断わるのと一般である。僕は泥棒をする。しかしけっして不道德と云ってはならん

もし不道德だなどと云えば僕の顔へ泥を塗ったものである。僕を侮辱したものである。と主張するよ
うなものだ。女はなかなか利口だ、考えに筋道が立
っている。いやしくも人間に生れる以上は踏んだり
蹴^けたり、どやされたりして、しかも人が振りむき
もせぬ時、平気でいる覚悟が必用であるのみならず
唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大

きな声で笑われるのを快よく思わなくてはならない。
それでなくてはかように利口な女と名のつくものと交際は出来ない。武右衛門先生もちよつとしたはずみから、とんだ間違をして大に恐れ入おおいつてはいるようなものの、かように恐れ入つてるものを蔭で笑うのは失敬だとくらいは思ふかも知れないが、それは年が行かない稚ち氣きというもので、人が失礼をした

時に怒るのを気が小さいと先方では名づけるそうだから、そう云われるのがいやならおとなしくするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きをちよつと紹介する。君は心配の権化である。かの偉大なる頭脳はナポレオンのそれが功名心をもつて充満せるがごとく、まさに心配をもつてはちきれんとしている。

時々その団子っ鼻がびくびく動くのは心配が顔面神

経に伝つたつて、反射作用のごとく無意識に活動するの

である。彼は大きな鉄砲丸を飲てみ下くだしたごとく、腹

の中にいかんともすべからざる塊かたまりを抱いだいて、こ

の両三日処置に窮りようしている。その切なさの余り、別

に分別の出所でどころもないから監督と名のつく先生のとこ

ろへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思っ

て、いやな人の家うちへ大きな頭を下くだげにまかり越した

のである。彼は平生学校で主人にからかったり、同

級生を煽動せんどうして、主人を困らしたりした事はまるで

忘れている。いかにからかおうとも困らせようとも

監督と名のつく以上は心配してくれるに相違ないと

信じているらしい。随分単純なものだ。監督は主人

が好んでなつた役ではない。校長の命によってやむ

を得ずいただいている、云わば迷亭の叔父さんの山

高帽子の種類である。ただ名前である。ただ名前だけではどうする事も出来ない。名前がいざと云う場合に役に立つなら雪江さんは名前だけで見合が出来る訳だ。武右衛門君はただに我儘わがままなるのみならず、他人は己おのれに向つて必ず親切でなくてはならんと云う、人間を買い被かぶった仮定から出立している。笑われるなどとは思も寄らなかつたろう。武右衛門君は

監督の家へ来て、きつと人間について、一の真理を

發明したに相違ない。彼はこの真理のために将来ま
すます本当の人間になるだろう。人の心配には冷淡
になるだろう、人の困る時には大きな声で笑うだろ
う。かくのごとくにして天下は未来の武右衛門君を
もって充たみされるであろう。金田君及び金田令夫人
をもつて充たされるであろう。吾輩は切に武右衛門

君のために瞬時も早く自覚して真人間まにんげんになられん事

を希望するのである。しからずんばいかに心配するとも、いかに後悔するとも、いかに善に移るの心が切実なりとも、とうてい金田君のごとき成功は得られんのである。いな社会は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであらう。文明中学の退校どころではない。

かように考えて面白いなと思つていると、格子こうしが
がらがらとあいて、玄関の障子しょうじの蔭から顔が半分ぬ
うと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返してい
たところへ、先生と玄関から呼ばれたので、誰だろ
うとそつちを見ると半分ほど筋違すじかいに障子から食はみ出

している顔はまさしく寒月君である。「おい、御這^{おは}入り」と云ったぎり坐っている。

「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返している。

「なに構わん、まあ御上^{おあ}がり」

「実はちよつと先生を誘いに來たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はも

う御免だ。せんだつては無闇むやみにあるかせられて、足が棒のようになった」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

「上野へ行つて虎の鳴き声を聞こうと思ふんです」

「つまらんじやないか、それよりちよつと御上り」

寒月君はとうてい遠方では談判不調と思つたもの

か、靴を脱いでそのそ上がつて来た。例のごとく

ねずみいろ

鼠色の、尻につぎの中あたつたずぼんを穿はいているが、

これは時代のため、もしくは尻の重いために破れた

のではない、本人の弁解によると近頃自転車の稽古

を始めて局部に比較的多くの摩擦を与えるからであ

る。未来の細君をもつて矚目しよくもくされた本人へ文ふみをつけ

あだ

た恋の仇とは夢にも知らず、「やあ」と云つて武右

衛門君に軽く会釈えしやくをして椽側えんがわへ近い所へ座をしめた。

「虎の鳴き声を聞いたって詰らないじゃないか」

「ええ、今じやいけません、これから方々散歩して夜十一時頃になって、上野へ行くんです」

「へえ」

「すると公園内の老木は森々しんしんとして物凄ものすごいでしょう

「そうさな、昼間より少しは淋さみしいだろう」

「それで何でもなるべく樹きの茂った、昼でも人の通

らない所よを択よつてあるいと、いつの間まにか紅こう

じんばんじょう

塵万丈の都会に住んでる気はなくなつて、山の中へ

迷い込んだような心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになつてどうするんだい」

「そんな心持ちになって、しばらく佇たたずんでいるとたちまち動物園のうちで、虎が鳴くんです」

「そう旨うまく鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも理科大学へ聞えるくらいなんですから、深夜閨寂げきせきとして、四望しぼう人なく、鬼気肌はだえに逼せまって、魑魅鼻ちみを衝つく際さいに……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云うじやありませんか、怖い時に」こわ

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

「それで虎が上野の老杉ろうさんの葉をことごとく振り落す

ような勢で鳴くでしょう。物凄いでさあ」

「そりや物凄いだろう」

「どうです冒険に出掛けませんか。きっと愉快だろうと思ふんです。どうしても虎の鳴き声は夜なかに

聞かなくっちゃ、聞いたとはいわれないうちだろーと思
うんです」

「そうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡であ
るごとく、寒月君の探検にも冷淡である。

この時まで默然^{もくねん}として虎の話を羨^{うらや}ましそうに聞い

ていた武右衛門君は主人の「そうさな」で再び自分
の身の上を思い出したと見えて、「先生、僕は心配

なんですが、どうしたらいいでしょう」とまた聞き返す。寒月君は不審な顔をしてこの大きな頭を見た。吾輩は思う仔細しさいあつてちよつと失敬して茶の間へ廻る。

茶の間では細君がくすくす笑いながら、京焼の安茶碗に番茶を浪々なみなみと注ついで、アンチモニ―の茶托ちやたくの上へ載せて、

「雪江さん、憚りさま、はばかこれを出して来て下さい」

「わたし、いやよ」

「どうして」と細君は少々驚ろいた体でてい笑いをはたと留める。

「どうしても」と雪江さんはやにすました顔を即席にこしらえて、そば傍にあつた読売新聞の上にのしかかるように眼を落した。細君はもう一応きようしよう協商を始め

る。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」
「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞の
上から眼を放さない。こんな時に一字も読めるもの
ではないが、読んでいないなどとあばかれたらまた
泣き出すだろう。

「ちつとも恥かしい事はないじゃないですか」と

今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪るい」と新聞を茶碗の下から、抜こうとする拍子に茶托ちやたくに引きかかつて、番茶は遠慮なく新聞の上から畳の目へ流れ込む。「それ御覧なさい」と細君が云うと、雪江さんは「あら大変だ」と台所へ馳かけ出して行つた。雑ぞう巾きんでも持つてくる了りょう見けんだろう。吾輩にはこの狂言が

ちよつと面白かった。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な話を話している。

「先生障子しょうじを張り易かえましたね。誰が張ったんです

「女が張ったんだ。よく張れているだろう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢

さんが御張りになつたんですか」

「うんあれも手伝つたのさ。このくらい障子が張れば嫁に行く資格はあると云つて威張つてゐるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめてゐる。

「こつちの方は平たいらですが、右の端はじは紙が余つて波が出来ていますね」

「あすこが張りたてのところで、もつとも経験の乏^{とぼ}しい時に出来上ったところさ」

「なるほど、少し御手際^{おてぎわ}が落ちますね。あの表面は

^{ちようぜつてきまよくせん}

超絶的曲線^{ちようぜつてきまよくせん}でとうてい普通のフアンクションではあ

らわせないです」と、理学者だけにむずかしい事を

云うと、主人は

「そうさね」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしていても、とうて

い見込がないと思ひ切つた武右衛門君は突然かの偉

大なる頭蓋骨ずがいこつを畳の上にお圧しつけて、無言の裡うちに暗

に訣別けつべつの意を表した。主人は「歸るかい」と云つた

。武右衛門君は悄然しょうぜんとして薩摩下駄を引きずつて門

を出た。可愛想かわいそうに。打ちやつて置くと巖頭がんとうの吟ぎんでも

書いて華嚴滝けごんのたきから飛び込むかも知れない。元ただを糺せ

ば金田令嬢のハイカラと生意気から起った事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽霊になつて令嬢を取り殺してやるがいい。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。寒月君はもつと令嬢らしいのを貰うがいい。

「先生ありや生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ。
こないだコロンバスを訳して下さいって大に弱つ
た」

「全く頭が大き過ぎますからそんな余計な質問をす
るんでしょう。先生何とおっしゃいました」

「ええ？　なあに好い加減な事を云って訳してやつ

た」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりやえらい」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくって、先生を困らせるようには見えないじゃありませんか」

「今日は少し弱ってるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だかちよつと見たばかりで非常にかわいそうになりました。全体どうしたんです」

「なに愚^ぐな事さ。金田の娘に艶書^{えんしょ}を送ったんだ」

「え？ あの大頭がですか。近頃の書生はなかなかえらいもんですね。どうも驚ろいた」

「君も心配だろうが……」

「何ちつとも心配じゃありません。かえって面白い
です。いくら、艶書が降り込んだって大丈夫です」

「そう君が安心していれば構わないが……」

「構わんですとも私はいっこう構いません。しかし
あの大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきま
すね」

「それがさ。じょうだん冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラ

で生意気だから、からかってやろうって、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやったんですか。ますます奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食うようなものじゃありませんか」

「ところが手分けがあるんだ。一人が文章をかく、一人が投函する、一人が名前を借す。で今来たのが

とうかん

名前を借した奴なんだがね。これが一番愚^ぐだね。しかも金田の娘の顔も見た事がないって云うんだぜ。

どうしてそんな無茶な事が出来たものだろう」

「そりや、近来の大出来ですよ。傑作ですね。どう

もあの大頭が、女に文^{ふみ}をやるなんて面白いじゃあり

ませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになつたつて構やしません、相手が金田ですもの」

「だって君が貰うかも知れない人だぜ」

「貰うかも知れないから構わないんです。なあに、

金田なんか、構やしません」

「君は構わなくつても……」

「なに金田だって構やしません、大丈夫です」

「それならそれでいいとして、当人があとになって、急に良心に責められて、恐ろしくなったものだから、大に恐縮して僕のうちへ相談に来たんだ」

おい

「へえ、それであんなに悄悄しおしおとしているんですか、

気の小さい子と見えますね。先生何とか云っておやんなすったんでしよう」

「本人は退校になるでしようかって、それを一番心

配しているのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪るい、不道德な事をしたから」

「何、不道德と云うほどでもありませんやね。構や

しません。金田じや名誉に思つてきつと吹聴ふいちようしてい

ますよ」

「まさか」

「とにかく可愛想かわいそうですよ。そんな事をするのがわる

いとしても、あんなに心配させちゃ、若い男を一人殺してしまいますよ。ありや頭は大きいが人相はそんなにわるくありません。鼻なんかびくびくさせて可愛いです」

「君も大分迷亭だいぶ見たように呑気のんきな事を云うね」

「何、これが時代思潮です、先生はあまり昔むかし風ふうだ

から、何でもむずかしく解釈なさるんです」

「しかし愚^ぐじやないか、知りもしないところへ、いたずらに艶書^{えんしよ}を送るなんて、まるで常識をかいてるじやないか」

「いたずらは、たいがい常識をかいていまさあ。救つておやんなさい。功德^{くどく}になりますよ。あの容子^{ようす}じや華嚴^{けごん}の滝へ出掛けますよ」

「そうだな」

「そうなさい。もつと大きな、もつと分別のある大おお

僧共ぞうがそれどころじゃない、わるいいたずらをして

知らん面かおをしていますよ。あんな子を退校させるく

らいなら、そんな奴らを片かたつ端はしから放逐でもしなく

つちや不公平でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上野へ虎の鳴き声をききに行くのは」

「虎かい」

「ええ、聞きに行きましょう。実は二三日中にさんちうちにちよ

つと帰国しなければならぬ事が出来ましたから、

当分どこへも御伴おともは出来ませんから、今日は是非い

つしよに散歩をしようと思つて来たんです」

「そうか帰るのかい、用事でもあるのかい」

「ええちよつと用事が出来たんです。——ともかくも出ようじやありませんか」

「そう。それじや出ようか」

「さあ行きましょう。今日は私が晩餐を奢りますか

ばんさん

おご

ら、——それから運動をして上野へ行くとちようど

好い刻限です」としきりに促がすものだから、主人

うな

もその気になって、いつしよに出掛けて行つた。あとでは細君と雪江さんが遠慮のない声でげらげらけらけらからからと笑っていた。

十一

床の間の前に碁盤を中に据^すえて迷亭君と独仙君が

対坐している。

「ただはやらない。負けた方が何か奢るおごんだぜ。いいかい」と迷亭君が念を押すと、独仙君は例のごとく山羊髯やぎひげを引つ張りながら、こう云いった。

「そんな事をすると、せつかくの清戯せいぎを俗了ぞくりようしてし

まう。かけなどで勝負に心を奪われては面白くない

。成敗せいはいを度外どがいにおいて、白雲しゆうの自然しぜんに岫しゆうを出でて冉ぜん

々^{せん}たるごとき心持ちで一局を了してこそ、
個^{こちゆう}中の味^{あじわい}

はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちや少々骨が

折れ過ぎる。宛^{えんぜん}然たる列仙伝中の人物だね」

「無^{むげん}絃^{そきん}の素琴を弾じさ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やろう」

「君が白を持つのかい」

「どっちでも構わない」

「さすがに仙人だけあつて鷹揚だ。おうよう君が白なら自然

の順序として僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。けんそんしからば謙遜して、じょうせき定石にここいらか

ら行こう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくつても構わない。新奇発明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近来になつて始めて拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切つて、目が眩くらむほどごたごたと黒白こくびやくの石をな

らべる。そうして勝ったとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騒いでいる。

高が一尺四方くらいの面積だ。猫の前足で掻き散ら

しても滅茶滅茶になる。引き寄せて結べば草の庵に

て、解くればもとの野原なりけり。入らざるいたず

らだ。ふところではる懐手をして盤を眺めている方が遥かに気楽で

ある。それも最初の三四十目もくは、石の並べ方では別

段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云う間ま

ざわ
のぞ

際に覗いて見ると、いやはや御気の毒な有様だ。白

と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押し合つて、御

互にギューギュー云っている。窮屈だからと云つて

、隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だと申

して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあ

きらめて、じつとして身動きもせず、すくんでいる

よりほかに、どうする事も出来ない。碁を發明した

ものは人間で、人間の嗜好しこうが局面にあらわれるもの

とすれば、窮屈なる碁石の運命はせせこましい人間

の性質を代表していると云つても差支さしつかえない。人間

の性質が碁石の運命で推知すいちする事が出来るものとす

れば、人間とは天空海濶てんくうかいかつの世界を、我からと縮めて

己おのれの立つ両足以外には、どうあつても踏み出せ

ぬように、小刀細工こがたなざいくで自分の領分に縄張りをするのが好きなんだと断言せざるを得ない。人間とはしいて苦痛を求めるものであると一言いちごんに評してもよからう。

呑気のんきなる迷亭君と、禅機ぜんきある独仙君とは、どう云

う了見か、今日に限って戸棚から古碁盤を引きずり出して、この暑苦しいいたずらを始めたのである。

さすがに御兩人御揃いおそろの事だから、最初のうちは各

自任意の行動をとって、盤の上を白石と黒石が自由

自在に飛び交わしていたが、盤の広さには限りがあ

って、横よこ豎たての目盛りは一手ひとてごとに埋うまって行くのだから、

いかに呑気でも、いかに禅機があっても、苦し
くなるのは当り前である。

「迷亭君、君の碁は乱暴だよ。そんな所へ這はい入って

くる法はない」

「禅坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、
本因坊ほんいんぼうの流儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんやていけん屍肩をやと、一つ、
こう行くかな」

「そうおいでになったと、よろしい。薰風みんなみ南より来

つて、殿閣微涼びりようを生ず。こう、ついでおけば大丈夫なものだ」

「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、つぐきづかい氣遣はなからうと思った。ついで、くりやるな八はち幡鐘まんがねをと、こうやったら、どうするかね」

「どうするも、こうするもないさ。一劍天に倚よつて寒し——ええ、面倒だ。思い切つて、切つてしまえ

「やや、大變大變。そこを切られちや死んでしまふ

。おい冗談じょうだんじゃない。ちよつと待った」

「それだから、さつきから云わん事じゃない。こうなつてるところへは這はい入いれるものじゃないんだ」

「這入つかまつつて失敬仕り候。ちよつとこの白をとつてく

れたまえ」

「それも待つのかい」

「ついでにその隣りのも引き揚げて見てくれたまえ」

「ずうずうしいぜ、おい」

「Do you see the boy か。――」

――なに君と僕の間柄じゃないか。そんな水臭い事を言わずに、引き揚げてくれたまえな。死ぬか生きる

かと云う場合だ。しばらく、しばらくつて花道から

馳^かけ出してくるところだよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくつてもいいから、ちよつとどけたまえ」

「君さつきから、六返待^{ぺん}つたをしたじやないか」

「記憶のいい男だな。向後^{こうご}は旧に倍し待つたを仕^{つかまつ}り

候。だからちよつとどけたまえと云うのだあね。君

もよッぽど強情だね。座禪なんかしたら、もう少し

捌さばけそんなものだ」

「しかしこの石でも殺さなければ、僕の方は少し負けになりそうだから……」

「君は最初から負けても構わない流じやないか」

「僕は負けても構わないが、君には勝たしたくない

「飛んだ悟道だ。相変らず春風影裏しゅんぷうえいりに電光でんこうをきつて
るね」

「春風影裏じゃない、電光影裏だよ。君のは逆さかだ」

「ハハハハもうたいてい逆さかになつていい時分だと
思ったら、やはりたしかなところがあるね。それじ
や仕方がないあきらめるかな」

「生死事大しょうじだい、無常迅速むじょうじんそく、あきらめるさ」

「アーメン」と迷亭先生今度はまるで関係のない方面へびしやりと一石いっせきを下したくだ。

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命しゅえいに輸贏を

争っている、座敷の入口には、寒月君と東風君が

相ならんでその傍そばに主人が黄色い顔をして坐ってい

る。寒月君の前に鰹節かつぶしが三本、裸のまま畳の上に行

儀よく排列してあるのは奇観である。

この鰹節の出処しゅっしょは寒月君の懷ふところで、取り出した時は

暖あつたかく、手のひらに感じたくらい、裸ながらぬく

もっていた。主人と東風君は妙な眼をして視線を鰹

節の上に注いでいると、寒月君はやがて口を開いた

。

「実は四日ばかり前に国から帰って来たのですが、

いろいろ用事があつて、方々馳かけあるいていたもの

ですから、つい上がられなかつたのです」

「そう急いでくるには及ばないさ」と主人は例のご
とく無愛嬌ぶあいぎょうな事を云う。

「急いで来んでもいいのですけれども、このおみや
げを早く献上けんじょうしないと心配ですから」

「鰹節じゃないか」

「ええ、国の名産です」

「名産だつて東京にもそんなのは有りそうだぜ」と
主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先へ持
つて行つて臭いにおをかいで見ろ。

「かいだつて、鰹節の善悪よしあしはわかりませんよ」

「少し大きいのが名産たる所以ゆえんかね」

「まあ食べて御覧なさい」

「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が

欠けてるじゃないか」

「それだから早く持って来ないと心配だと云うので
す」

「なぜ？」

「なぜって、そりや鼠ねずみが食ったのです」

「そいつは危険だ。滅多めったに食うとペストになるぜ」

「なに大丈夫、そのくらいかじったって害はありま

せん」

「全体どこで噛かじったんだい」

「船の中ですよ」

「船の中？ どうして」

「入れる所がなかったから、ヴァイオリンといっし
よに袋のなかへ入れて、船へ乗ったら、その晩にや
られました。鰹節かつぶしだけなら、いいのですけれども、

大切なヴァイオリンの胴を鰹節と間違えてやはり少々噛かじりました」

「そそっかしい鼠だね。船の中に住んでると、そう見境みさかいがなくなるものかな」と主人は誰にも分らん事を云って依然として鰹節を眺ながめている。

「なに鼠だから、どこに住んでてもそそっかしいのでしよう。だから下宿へ持って来てもまたやられそ

うでね。劍吞^{けんのおん}だから夜^よるは寢床の中へ入れて寢まし
た」

「少しきたないようだぜ」

「だから食べる時にはちよつとお洗いなさい」

「ちよつとくらいじや奇麗にやなりそうもない」

「それじや灰汁^{あく}でもつけて、ごしごし磨いたらいい

でしょう」

「ヴァイオリンも抱いて寝たのかい」

「ヴァイオリンは大き過ぎるから抱いて寝る訳には行かないんですが……」と云いかけると

「なんだって？　ヴァイオリンを抱いて寝たって？

それは風流だ。行く春や重たき琵琶びわのだき心と云

う句もあるが、それは遠きその上かみの事だ。明治の秀

才はヴァイオリンを抱いて寝なくっちゃ古人を凌しのぐ

訳には行かないよ。かい巻まきに長き夜守よもるやヴァイオリンはどうだい。東風君、新体詩でそんな事が云えるかい」と向うの方から迷亭先生大きな声でこっちの談話にも関係をつける。

東風君は真面目で「新体詩は俳句と違ってそう急には出来ません。しかし出来た暁にはもう少し生靈せいれいの機微きびに触れた妙音が出ます」

「そうかね、生靈しょうりょうはおがらを焚たいて迎え奉るものと
思つてたが、やっぱり新体詩の力でも御来臨になる
かい」と迷亭はまだ碁をそつちのけにして調戲からかつてい
る。

「そんな無駄口を叩たたくとまた負けるぜ」と主人は迷
亭に注意する。迷亭は平気なもので

「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中ふちゆうの章魚たこ

同然手も足も出せないのだから、僕も無聊ぶりようでやむを

得ずヴァイオリンの御仲間を仕つかまつるのさ」と云うと、

相手の独仙君はいささか激した調子で

「今度は君の番だよ。こっちで待ってるんだ」と云い放った。

「え？　もう打ったのかい」

「打ったとも、とうに打ったさ」

「どこへ」

「この白をはすに延ばした」

「なあるほど。この白をはすに延ばして負けにけり

か、そんならこっちはと——こっちは——こっちは

こっちはとて暮れにけりと、どうもいい手が無いね

。君もう一返打たしてやるから勝手なところへ一目_{いちもく}

打ちたまえ」

「そんな碁があるものか」

「そんな碁があるものかなら打ちましょう。――それじゃこのかど地面へちよつと曲がつて置くかな。

――寒月君、君のヴァイオリンはあんまり安いから鼠が馬鹿にして噛かじるんだよ、もう少しいいのを奮発して買うさ、僕が以イ太タ利リ亞アから三百年前の古物こぶつを取り寄せてやろうか」

「どうか願います。ついでにお払いの方も願いたいもので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知らない主人は一喝^{いっかつ}にして迷亭君を極^きめつけた。

「君は人間の古物^{こぶつ}とヴァイオリンの古物^{こぶつ}と同一視しているんだろう。人間の古物でも金田某のごときものは今だに流行しているくらいだから、ヴァイオリ

ンに至つては古いほどがいいのさ。――さあ、独仙君どうか御早く願おう。けいまさのせりふじやないが秋の日は暮れやすいからね」

「君のようなせわしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考える暇も何もありません。仕方がないから、ここへ一目^{いちもく}入れて目^めにしておこう」

「おやおや、とうとう生かしてしまった。惜しい事

をしたね。まさかそこへは打つまいと思つて、いさ
さか駄弁を振ふるつて肝胆かんたんを砕いていたが、やツぱり駄
目か」

「当り前さ。君のは打つのじゃない。ごまかすのだ
」

「それが本因坊流、金田流、当世紳士流さ。——お
い苦沙弥先生、さすがに独仙君は鎌倉へ行つて万年

漬を食っただけあって、物に動じないね。どうも敬々服々だ。碁はまずいが、度胸は据^{すわ}ってる」

「だから君のような度胸のない男は、少し真似をするがいい」と主人が後ろ向^{うしむき}のまままで答えるやいなや

、迷亭君は大きな赤い舌をぺろりと出した。独仙君

は毫^{ぺい}も関せざるもののごとく、「さあ君の番だ」と

また相手を促^{うなが}した。

「君はヴァイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習おうと思うのだが、よっぽどむずかしいものだそうだね」と東風君が寒月君に聞いている。

「うむ、一と通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ芸術だから詩歌しいかの趣味のあるものはやはり音楽の方でも上達が早いだろうと、ひそかに恃たのむところがあるんだが、どうだろう」

「いいだろう。君ならきつと上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」

「高等学校時代さ。――先生わたく私のヴァイオリンを

習い出した顛末をてんまつお話しした事がありましたかね」

「いいえ、まだ聞かない」

「高等学校時代に先生でもあつてやり出したのかい

「なあに先生も何もありやしない。独習さ」

「全く天才だね」

「独習なら天才と限った事もなかろう」と寒月君はつんとする。天才と云われてつんとするのは寒月君だけだろう。

「そりや、どうでもいいが、どう云う風に独習したのかちよつと聞かしたまえ。参考にしたいから」

「話してもいい。先生話しましょうかね」

「ああ話したまえ」

「今では若い人がヴァイオリンの箱をさげて、よく往来などがあるいておりますが、その時分は高等学校生で西洋の音楽などをやったものはほとんどなかつたのです。ことに私のおった学校は田舎いなかの田舎で

あさうらぞうり
麻裏草履さえないと云うくらいな質朴な所でしたか

ら、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾くものはもちろん一人もありません。……」

「何だか面白い話が向うで始まったようだ。独仙君
いい加減に切り上げようじゃないか」

「まだ片づかない所が二三箇所ある」

「あってもいい。大概な所なら、君に進上する」

「そう云ったって、貰う訳にも行かない」

「禅学者にも似合わん几帳面きちようめんな男だ。それじゃ一気いっき

呵成かせいにやつちまおう。——寒月君何だかよっぱど面

白そうだね。——あの高等学校だろう、生徒が裸足はだし

で登校するのは……」

「そんな事はありません」

「でも、皆みんななはだしで兵式体操をして、廻れ右をや

るんで足の皮が大変厚くなつてると云う話だぜ」

「まさか。だれがそんな事を云いました」

「だれでもいいよ。そうして弁当には偉大なる握り

飯を一個、夏蜜柑なつみかんのように腰へぶら下げて来て、そ

れを食うんだって云うじゃないか。食うと云うより

むしろ食いつくんだね。すると中心から梅干が一個

出て来るそうだ。この梅干が出るのを楽しみに塩気

のない周囲を一心不乱に食い欠いて突進するんだと

云うが、なるほど元氣旺盛おうせいなものだね。独仙君、君

の氣に入りそうな話だぜ」

「質朴剛健でたのもしいい氣風だ」

「まだたのもしいい事がある。あすこには灰吹きはいふがな

いそうだ。僕の友人があすこへ奉職をしている頃吐と

月峰げっほうの印いんのある灰吹きを買いに出たところが、吐月

峰どころか、灰吹と名づくべきものが一個もない。

不思議に思つて、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の

藪へ行つて切つて来れば誰にでも出来るから、^{やぶ}売る

必要はないと澄まして答えたそうだ。これも質朴剛

健の気風をあらわす美譚^{びだん}だろう、ねえ独仙君」

「うむ、そりやそれでいいが、ここへ駄目を一つ入れなくちやいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。それで片づいた

——僕はその話を聞いて、実に驚いたね。そんなところで君がヴァイオリンを独習したのは見上げたものだ。惇独けいどくにして不羣ふぐんなりと楚辞そじにあるが寒月君は全く明治の屈原くつげんだよ」

「屈原はいやですよ」

「それじゃ今世紀のウェルテルさ。——なに石を上げて勘定をしろ？ やに物堅ものがたい性質たちだね。勘定しな

くつても僕は負けてるからたしかだ」

「しかし極きまりがつかないから……」

「それじゃ君やってくれたまえ。僕は勘定所じやない。一代の才人ウエルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくっちゃ、先祖へ済まないから失敬する」と席をはずして、寒月君の方へすり出して来た。独仙君は丹念に白石を取っては白の穴を埋う

め、黒石を取っては黒の穴を埋めて、しきりに口の内
で計算をしている。寒月君は話をつづける。

「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがま
た非常に頑固がんこなので、少しでも柔弱なものがおつて
は、他県の生徒に外聞がわるいと云つて、むやみに
制裁を嚴重にしましたから、ずいぶん厄介でした」

「君の国の書生と来たら、本当に話せないね。元来

何だつて、紺こんの無地の袴はかまなんぞ穿はくんだい。第一だいちあ

れからして乙おつだね。そうして塩風に吹かれつけてい

るせいか、どうも、色が黒いね。男だからあれで済

むが女があれじゃさぞかし困るだろう」と迷亭君が

一人這入はいると肝心かんじんの話はどっかへ飛んで行つてしま

う。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貰い手があるね」

「だって一国中いっこくじゅうことごとく黒いのだから仕方があり

ません」

「因果いんがだね。ねえ苦沙弥君」

「黒い方がいいだろう。生なまじ白いと鏡を見るたんび

に己惚おのぼれが出ていけない。女と云うものは始末におえ

ない物件だからなあ」と主人は喟然きぜんとして大息たいそくを洩も

らした。

「だって一國中ことごとく黒ければ、黒い方で己惚うぬぼれはしませんか」と東風君がもつともな質問をかけた。

「ともかくも女は全然不必要な者だ」と主人が云うと、

「そんな事を云うと妻君が後でご機嫌がわるいぜ」

と笑いながら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「いないのかい」

「小供を連れて、さつき出掛けた」

「どうれで静かだと思った。どこへ行つたのだい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「そうして勝手に歸ってくるのかい」

「まあそうだ。君は独身でいいなあ」と云うと東風君は少々不平な顔をする。寒月君はにやにやと笑う。
迷亭君は

「妻さいを持つとみんなそう云う氣になるのさ。ねえ独仙君、君なども妻君難の方だろう」

「ええ？　ちよつと待った。四六二十四、二十五、二十六、二十七と。狭いと思つたら、四十六もく目ある

か。もう少し勝ったつもりだったが、こしらえて見ると、たった十八目の差か。——何だって？」

「君も妻君難だろうと云うのさ」

「アハハハハ別段難でもないさ。僕の妻は元来僕を愛しているのだから」

「そいつは少々失敬した。それでこそ独仙君だ」

「独仙君ばかりじゃありません。そんな例はいくら

でもありますよ」と寒月君が天下の妻君に代ってちよつと弁護の労を取った。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶対の

域いきに入るには、ただ二つの道があるばかりで、その

二つの道とは芸術と恋だ。夫婦の愛はその一つを代

表するものだから、人間は是非結婚をして、この幸

福を完まっうしなければ天意に背そむく訳だと思ふんだ。――

「がどうでしょう先生」と東風君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直った。

「御名論だ。僕などはとうてい絶対の境きょうに這入はいれそうもない」

「妻さいを貰えばなお這入れやしない」と主人はむずかしい顔をして云った。

「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふれて

向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分からな
いですから、まず手始めにヴァイオリンでも習おう
と思つて寒月君にさつきからけいけんたん経験譚をきいているの
です」

「そうそう、ウェルテル君のヴァイオリン物語を拝
聴するはずだったね。さあ話し給え。もう邪魔はし
ないから」と迷亭君がようやくほうぼう鋒鋦を収めると、

「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではな

い。そんな遊戯三昧ゆうぎざんまいで宇宙の真理が知れては大変だ

。這裡しやりの消息を知ろうと思えばやはり懸崖けんがいに手を撒さつ

して、絶後ぜつごに再び蘇よみがえる底ていの気魄きはくがなければ駄目だ

」と独仙君はもったい振って、東風君に訓戒じみた

説教をしたのはよかったが、東風君は禅宗のぜの字

も知らない男だから頓とんと感心したようすもなく

「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間

かつごう

の渴仰の極致を表わしたものだと思いますから、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」

「捨てる訳に行かなければ、お望み通り僕のヴァイオリン談をして聞かせる事にしよう、で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめるま

だいぶ

では大分苦心をしたよ。第一買うのに困りました

よ先生」

「そうだろう麻裏草履あさうらぞうりがない土地にヴァイオリンがあるはずがない」

「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから差支さしつかえないのですが、どうも買えないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買っておればすぐ見つかります。
見つければ、すぐ生意気だと云うので制裁を加え
られます」

「天才は昔から迫害を加えられるものだからね」と
東風君は大に同情おおいを表した。

「また天才か、どうか天才呼ばわりだけは御免蒙りごめんこうむ
たいね。それでね毎日散歩をしてヴァイオリンのあ

る店先を通るたびにあれが買えたら好かろう、あれ

を手に抱え^{かか}た心持ちはどんなだろう、ああ欲しい、

ああ欲しいと思わない日は一日もな^{いちんち}かつたのです」

「もつともだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝^こった

ものだね」と解^げしかねたのが主人で、「やはり君、

天才だよ」と敬服したのは東風君である。ただ独仙

君ばかりは超然^{ひげ}として髯^{ねん}を撚^{ねん}している。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるかが第一
ご不審かも知れないですが、これは考えて見ると当
り前の事です。なぜと云うとこの地方でも女学校が
あつて、女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリ
ンを稽古しなければならぬのですから、あるはず
です。無論いいのではありません。ただヴァイオリン
と云う名が辛^{から}うじてつくくらしいのものであります。

だから店でもあまり重きをおいていないので、二三
挺いっしよに店頭へ吊^つるしておくのです。それがね
時々散歩をして前を通るときに風が吹きつけたり
小僧の手が障^{さわ}ったりして、そら音^ねを出す事があり
ます。その音^ねを聞くと急に心臓が破裂しそうな心持
で、いても立ってもいられなくなるんです」

「危険だね。水癲^{みずてんかん}、人癲^{ひとてんかん}と癲癇にもいろいろ種

類があるが君のはウエルテルだけあって、ヴァイオリン癲癇だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いやそのくらい感覚が鋭敏でなければ真の芸術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君はいよいよ感心する。

「ええ實際癲癇てんかんかも知れませんが、しかしあの音色ねいろだけは奇体ですよ。その後ご今日まで随分ひきました

があのかくらい美しい音ねが出た事があります。そう
さ何と形容していいでしょう。とうてい言いあらわ
せないです」

りんろうきゆうそう

「琳琅瑯鏘として鳴るじゃないか」とむずかしい事
を持ち出したのは独仙君であつたが、誰も取り合わ
なかつたのは気の毒である。

「私が毎日毎日店頭を散歩しているうちにとうとう

この靈異な音^ねを三度ききました。三度目にどうあつてもこれは買わなければならないと決心しました。

^{たとい}仮令国のものから^{けんせき}譴責されても、他県のものから^{けい}輕

^{べつ}蔑されても——よし^{てっけん}鉄拳制裁のために^{ぜっそく}絶息しても——

——まかり間違つて退校の処分を受けても——、こればかりは買わずにいられないと思ひました」

「それが天才だよ。天才でなければ、そんなに思い

込める訳のものじゃない。うらやま羨しい。僕もどうかして

、それほど猛烈な感じを起して見たいと年来心掛けて
いるが、どうもいけないね。音楽会などへ行つて
出来るだけ熱心に聞いているが、どうもそれほどに
感興が乗らない」と東風君はしきりにうら羨やましがっ
ている。

「乗らない方が仕合せだよ。今でこそ平気で話すよ

うなものその時の苦しみはとうてい想像が出来る
ような種類のものではなかった。――それから先生
とうとう奮発して買いました」

「ふむ、どうして」

「ちょうど十一月の天長節の前の晩でした。国のも
のは揃そろって泊りがけに温泉に行きましたから、一人
もいません。私は病気だと云って、その日は学校も

休んで寝ていました。今晚こそ一つ出て行って兼かねて望みのヴァイオリンを手に入れようと、床の中でその事ばかり考えていました」

「偽けびよう病をつかつて学校まで休んだのかい」

「全くそうです」

「なるほど少し天才だね、こりや」と迷亭君も少々恐れ入った様子である。

「夜具の中から首を出していると、日暮れが待遠でまちどお

たまりません。仕方がないから頭からもぐり込んで

、眼を眠ねむって待つて見ましたが、やはり駄目です。

首を出すと烈しい秋の日が、六尺の障子しょうじへ一面にあ

たって、かんかんするには癩癩かんしゃくが起りました。上の

方に細長い影がかたまって、時々秋風にゆすれるの

が眼につきます」

「何だい、その細長い影と云うのは」

「渋柿の皮を剥むいて、軒へ吊つるしておいたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、床とこを出て障子をあけて椽側えんがわへ出

て、渋柿の甘干あまぼしを一つ取って食いました」

「うまかったかい」と主人は小供みたような事を聞

く。

「うまいですよ、あの辺の柿は。とうてい東京などじゃあの味はわかりませんね」

「柿はいいがそれから、どうしたい」と今度は東風君がきく。

「それからまたもぐって眼をふさいで、早く日が暮ればいいかと、ひそかに神仏に念じて見た。約三
四時間も立ったと思う頃、もうよかろうと、首を出

すとあにはからんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかんかんする、上の方に細長い影がかたまつて、ふわふわする」

「そりや、聞いたよ」

「何返なんべんもあるんだよ。それから床を出て、障子をあ

けて、甘干しの柿を一つ食つて、また寢床へ這はい入つて、早く日が暮ればいいと、ひそかに神仏に祈念

をこらした」

「やっぱりもとのところじゃないか」

「まあ先生そう焦^せかずに聞いて下さい。それから約

三四時間夜具の中で辛抱^{しんぼう}して、今度こそもうよかろ

うとぬつと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然

として六尺の障子へ一面にあたって、上の方に細長

い影がかたまつて、ふわふわしている」

「いつまで行っても同じ事じゃないか」

「それから床を出て障子を開けて、えんがわ椽側へ出て甘干

しの柿を一つ食って……」

「また柿を食ったのかい。どうもいつまで行っても柿ばかり食ってて際限がないね」

「私もじれったくてね」

「君より聞いている方がよっぽどじれったいぜ」

「先生はどうも性急せっかちだから、話がしにくくって困ります」

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗あんに不平を洩もらした。

「そう諸君が御困りとある以上は仕方がない。たいていにして切り上げましょう。要するに私は甘干しの柿を食つてはもぐり、もぐつては食い、とうとう

軒端のきばに吊つるした奴をみんな食くつてしまいました」

「みんな食くつたら日も暮れたろう」

「ところがそう行かないので、私が最後の甘干しを食くつて、もうよかろうと首を出して見ると、相変あへらず烈はげしい秋の日が六尺の障子へ一面にあたあつて……

「僕はあ、もう御免だ。いつまで行いつても果はてしがな

い」

「話す私も飽^あき飽きします」

「しかしそのくらい根気があればたいていの事業は成就^{じょうじゆ}するよ。だまっていたら、あしたの朝まで秋の日

がかんかんするんだろう。全体いつ頃にヴァイオリ

ンを買う気なんだい」とさすがの迷亭君も少し辛抱^{しんぼう}

し切れなくなつたと見える。ただ独仙君のみは泰然

として、あしたの朝まででも、あさつての朝まででも、いくら秋の日がかんかんしても動ずる気色はさけしきらにない。寒月君も落ちつき払ったもので

「いつ買う気だとおっしやるが、晩になりさえすれば、すぐ買いに出掛けるつもりなのです。ただ残念な事には、いつ頭を出して見ても秋の日がかんかんしているものですから——いえその時の私わたくしの苦し

みと云ったら、とうてい今あなた方の御じれになる
どころの騒ぎじゃないです。私は最後の甘干を食つ
ても、まだ日が暮れないのを見て、げんぜん泣然として思わ
ず泣きました。東風君、僕は実に情けなくなさつて泣い
たよ」

「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だから、泣い
た事には同情するが、話はもっと早く進行させたい

ものだね」と東風君は人がいいから、どこまでも真面目で滑稽こっけいな挨拶をしている。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」

「そう日が暮れなくちゃ聞く方も困るからやめよう」と主人がとうとう我慢がし切れなくなつたと見え
て云い出した。

「やめちやなお困ります。これからがいよいよ佳境に入^いるところですから」

「それじゃ聞くから、早く日が暮れた事にしたらよ
かろう」

「では、少しご無理なご注文ですが、先生の事ですから、
枉^まげて、ここは日が暮れた事に致しましょう

「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられたので一同は思わずどつと噴き出した。

「いよいよ夜よに入つたので、まず安心とほつと一息

ついて鞍懸村くらかけむらの下宿を出ました。私は性来騷々しょうらいそうぞうしい

所が嫌きらですから、わざと便利な市内を避けて、人迹じんせき

稀まれな寒村の百姓家にしばらく蝸牛かぎゅうの庵いおりを結んでいた

のです……」

「人迹の稀なはんまり大袈裟だね」と主人が抗議

おおげさ

を申し込むと「蝸牛の庵も仰山だよ。床の間なしの

ぎょうさん

四畳半くらいにしておく方が写生的で面白い」と迷

亭君も苦情を持ち出した。東風君だけは「事実はどう

うでも言語が詩的で感じがいい」と褒めた。独仙君

ほ

は真面目な顔で「そんな所に住んでいては学校へ通

うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞

いた。

「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」

「それじゃ学生はその辺にだいぶ宿をとってるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。

「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰くらわせる。

「ええ学校がなかったら、全く人迹は稀ですよ。：

…で当夜の服装と云うと、手織ており木綿もめんの綿入の上へ金きん

釦ボタンの制服外套がいとうを着て、外套の頭巾ずきんをすぼりと被かぶって

なるべく人の目につかないような注意をしました。

折柄柿落葉の時節で宿から南郷街道へ出るまでは木こ

おりから

なんごうかいどう

の葉で路が一杯です。ひとあし 一步運ぶごとにがさがさする

のが氣にかかります。誰かあとをつけて来そうでた

まりません。振り向いて見ると東嶺寺とうれいじの森がこんも

りと黒く、暗い中に暗く写っています。この東嶺寺

と云うのは松平家まつだいらけの菩提所ぼだいしよで、庚申山こうしんやまの麓ふもとにあつて

私の宿とは一丁くらいしか隔へだたっていない、すこぶ

る幽邃ゆうすいな梵刹ぼんせつです。森から上はのべつ幕なしの星月

夜で、例の天の河が長瀬川を筋違すじかいに横切つて末は――

――末は、そうですね、まず布哇ハワイの方へ流れています

……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云つた。

「南郷街道をついに二丁来て、鷹台町たかのだいまちから市内に這

入つて、古城町こじようまちを通つて、仙石町せんごくまちを曲つて、喰代町くいしろちよう

を横に見て、通町とおりちようを一丁目、二丁目、三丁目と順に

通り越して、それから尾張町、名古屋町、鯉鉾町、

かまぼこちょう

蒲鉾町……」

「そんなにいろいろな町を通らなくてもいい。要するにヴァイオリンを買ったのか、買わないのか」と
主人がじれったそうに聞く。

かねぜん

「楽器のある店は金善即ち金子善兵衛方ですから、
まだなかなかです」

「なかなかでもいいから早く買うがいい」

「かしこまりました。それで金善方へ来て見ると、

店にはランプがかんかんともって……」

「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で済

まないんだから難^{なんじゆう}渋するよ」と今度は迷亭が予防線

を張った。

「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のかん

かんですから、別段御心配には及びません。……灯^ほ

かげ

影にすかして見ると例のヴァイオリンが、ほのかに秋の灯^ひを反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光を帯びています。つよく張った琴線^{きんせん}の一部だけがきらと白く眼に映^{うつ}ります。……」

「なかなか叙述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴァイオリンだなと思うと、急に

動悸^{どうき}がして足がふらふらします……」

「ふふん」と独仙君が鼻で笑った。

「思わず馳^かけ込んで、隠袋^{かくし}から蝦蟇口^{がまぐち}を出して、

蟇口の中から五円札を二枚出して……」

「とうとう買ったかい」と主人がきく。

「買おうと思いましたが、まてしばし、ここが肝心^{かんじん}

のところだ。滅多^{めった}な事をしては失敗する。まあそ

うと、きわ際どいところで思い留まりました」

「なんだ、まだ買わないのかい。ヴァイオリン一挺でなかなか人を引っ張るじゃないか」

「引っ張る訳じゃないんですが、どうも、まだ買えないんですから仕方がありません」

「なぜ」

「なぜって、まだ宵よいの口で人が大勢通るんですもの

「構わんじゃないか、人が二百や三百通ったって、君はよっぽど妙な男だ」と主人はぶんぶんしている。

「ただの人なら千が二千でも構いませんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持って徘徊はいかいしているんだから容易に手を出せませんよ。中

ちんでんとう

には沈澱党などと号して、いつまでもクラスの底に溜まつて喜んでるのがありますからね。そんなのに限つて柔道は強いのですよ。滅多めったにヴァイオリンなどに手出しは出来ません。どんな目に逢あうかわかりません。私だつてヴァイオリンは欲しいに相違ないですけれども、命はこれでも惜しいですからね。ヴァイオリンを弾ひいて殺されるよりも、弾かずに生き

てる方が楽ですよ」

「それじゃ、とうとう買わずにやめたんだね」と主人が念を押す。

「いえ、買ったのです」

「じれったい男だな。買うなら早く買うさ。いやならしいやでいいから、早くかたをつけたらよさそうなものだ」

「えへへへへ、世の中の事はそう、こっちの思うように埒らちがあくもんじやありませんよ」と云いながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した。

主人は面倒になつたと見えて、ついと立って書齋へ這入はいつたと思つたら、何だか古ぼけた洋書を一冊持ち出して来て、ごろりと腹這はらばいになつて読み始めた

。独仙君はいつの間にまやら、床の間の前へ退去して

、独りひとで基石を並べて一人相撲ひとりずもうをとっている。せつ

かくの逸話もあまり長くかかるので聴手が一人減り

二人減って、残るは芸術に忠実なる東風君と、長い

事にかつて辟易へきえきした事のない迷亭先生のみとなる。

長い煙をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月

君は、やがて前同様の速度をもつてぜんどうよう談話をつづける

「東風君、僕はその時こう思ったね。とうていこりや宵の口は駄目だ、と云って真夜中に来れば金善は寝てしまうからなお駄目だ。何でも学校の生徒が散歩から帰りつくして、そうして金善がまだ寝ない時を見計らって来なければ、せつかくの計画が水泡に帰する。けれどもその時間をうまく見計うのがむず

かしい」

「なるほどこりやむずかしからう」

「で僕はその時間をまあ十時頃と見積ったね。それで今から十時頃までどこかで暮さなければならぬ。うちへ帰って出直すのは大変だ。友達のうちへ話しに行くのは何だか気が咎める^{とが}ようで面白くなし、仕方がないから相当の時間がくるまで市中を散歩す

る事にした。ところが平生ならば二時間や三時間は
ぶらぶらあるいているうちに、いつの間まにか経つて
しまふのだがその夜よに限つて、時間のたつのが遅い
の何のつて、——千秋せんしゅうの思とはあんな事を云うのだ
ろうと、しみじみ感じました」とさも感じたらしい
風をしてわざと迷亭先生の方を向く。

「古人を待つ身につらき置炬燵おきごたつと云われた事がある

からね、また待たるる身より待つ身はつらいともあつて軒に吊られたヴァイオリンもつらかつたろうが、あてのない探偵のようにうろろう、まごついている君はなおさらつらいだろう。累々^{るるる}として喪家^{そうか}の犬のごとし。いや宿のない犬ほど気の毒なものは実際ないよ」

「犬は残酷です。犬に比較された事はこれでもま

だありませんよ」

「僕は何だか君の話をきくと、昔むかしの芸術家の伝を

読むような気持がして同情の念に堪たえない。犬に比

較したのは先生の冗談じょうだんだから気に掛けずに話を進行

したまえ」と東風君は慰藉いしやした。慰藉されなくても

寒月君は無論話をつづけるつもりである。

「それから徒町おかちまちから百騎町ひやつきまちを通って、両替町りようがえちようから鷹たか

匠町へ出て、県庁の前で枯柳の数を勘定して病院の横で窓の灯^ひを計算して、紺屋橋^{こんやばし}の上で巻煙草^{まきたばこ}を二本ふかして、そうして時計を見た。……」

「十時になったかい」

「惜しい事にならないね。——紺屋橋を渡り切って

川添に東へ上^{のぼ}って行くと、按摩^{あんま}に三人あつた。そう

して犬がしきりに吠^ほえましたよ先生……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちよつと芝

居がかりだね。君は落人おちゆうどと云う格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「これからしようと言うところさ」

かわいそう

「可哀相にヴァイオリンをかうのが悪い事じゃ、音

楽学校の生徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんないい事をしても

罪人さ、だから世の中に罪人ほどあてにならないものはない。耶蘇ヤソもあんな世に生れれば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴァイオリンを買えば罪人さ」

「それじゃ負けて罪人としておきましよう。罪人はいいですが十時にならないのには弱りました」

「もう一返ぺん、町の名を勘定するさ。それで足りなけ

ればまた秋の日をかんかんさせるさ。それでもおつかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ。
いつまでも聞くから十時になるまでやりたまえ」
寒月先生はにやにやと笑った。

「そう先を越せんされては降参するよりほかはありませ
ん。それじゃ一足飛びに十時にしてしましましょう
。さて御約束の十時になって金善かねぜんの前へ来て見ると

夜寒の頃ですから、さすが目貫めぬきの両替町りょうがえちようもほとん

ど人通りが絶えて、向むこからくる下駄の音さえ淋さみしい

心持ちです。金善ではもう大戸をたてて、わずかに

潜くぐり戸とだけを障子しょうじにしています。私は何となく犬に

尾つけられたような心持で、障子をあけて這はい入るのに

少々薄気味がわるかったです……」

この時主人はきたならしい本からちよつと眼をは

ずして、「おいもうヴァイオリンを買ったかい」と聞いた。「これから買うところです」と東風君が答えると「まだ買わないのか、実に永いな」と独り言ひとごとのように云ってまた本を読み出した。独仙君は無言のまま、白と黒で碁盤を大半埋うずめてしまった。

「思い切って飛び込んで、頭巾ずきんを被かぶったままヴァイオリンをくれと云いますと、火鉢の周圍に四五人小

僧や若僧がかたまつて話をしていたのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイオリンをくれと二度目に云うと、一番前にいて、私の顔を覗き込む^{のぞ}ようにしていた小僧がへえとおぼつか
覚束ない返事をして、立ち上がって例の店先に吊^つるしてあつたのを三四挺一度に卸^{おろ}して来ました。いく

らかと聞くと五円二十銭だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おも
ちやじゃないか」

「みんな同価どうねかと聞くと、へえ、どれでも変りはご

ざいません。みんな丈夫に念を入れて拵こしらえてござ

いますと云いますから、蝦蟇がまぐち口のなかから五円札と

銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してヴァイ

オリンを包みました。この間、あいだ店のものは話を中止

してじつと私の顔を見えています。顔は頭巾でかくし

であるから分る気遣きづかいはないのですけれども何だか気

がせいて一刻も早く往来へ出たくて堪たまりません。よ

うやくの事風呂敷包を外套がいとうの下へ入れて、店を出た

ら、番頭が声そろを揃えてありがとうと大きな声を出し

たのにはひやっとなりました。往来へ出てちよつと見

廻して見ると、幸誰さいわいもいないようですが、一丁ばか

むこう

り向から二三人して町内中に響けとばかり詩吟をし
て来ます。こいつは大変だと金善の角を西へ折れて

ほりばた

やくおうじみち

濠端ほりばたを薬王師道へ出て、はんの木村から庚申山こうしんやまの裾すそ

へ出てようやく下宿へ帰りました。下宿へ帰って見

たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君が

気の毒そうに云うと「やっと上がった。やれやれ長

どうちゆうすゝろく

い道中双六だ」と迷亭君はほっと一と息ついた。

「これからが聞きどころですよ。今までは単に序幕です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。たいていのものは君に逢っちや根気負けをするね」

「根気はとにかく、ここでやめちや仏作って魂入れ

ずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論随意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴ

アイオリンは買ってしまいましたよ。ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売るところなんか聞かなくつてもいい」

「まだ売るところどこじやありません」

「そんならなお聞かなくてもいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞いてくれるのは。少し張合が抜けるがまあ仕方がない、ざっと話してしまおう」

「ざつとでなくてもいいから緩ゆっくり話したまえ。大変面白い」

「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、ま

ず第一に困ったのは置き所だね。僕の所へは大分人
が遊びにくるから滅多な所へぶらさげたり、立て懸
けたりするとすぐ露見してしまう。穴を掘って埋め
ちや掘り出すのが面倒だろう」

「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は気
楽な事を云う。

「天井はないさ。百姓家だもの」

ひやくしやうや

「そりや困つたろう。どこへ入れたい」

「どこへ入れたと思う」

「わからないね。戸袋のなかか」

「いいえ」

「夜具にくるんで戸棚へしまったか」

「いいえ」

東風君と寒月君はヴァイオリンの隠れ家かくがについて

かくのごとく問答をしているうちに、主人と迷亭君も何かしきりに話している。

「こりや何と読むのだい」と主人が聞く。

「どれ」

「この二行さ」

「何だつて？」

「Quid aliud est

mulier nisi amicitiae &

i n i m i c a」……こりや君羅匈語じゃないか」
ラテンご

「羅匈語は分ってるが、何と読むのだい」

「だって君は平生羅匈語が読めると云ってるじゃないか」と迷亭君も危険だと見て取って、ちよつと逃げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりや何だ
い」

「読める事は読めるが、こりや何だは手ひどいね」

「何でもいいからちよつと英語に訳して見ろ」

「見ろは烈しいね。まるで従卒のようだね」

「従卒でもいいから何だ」

「まあ羅旬語などはあとにして、ちよつと寒月君の

ご高話を拝聴つかまつ仕ろうじやないか。今大変なところだ

よ。いよいよ露見するか、しないか危機一髪と云う

安宅あたくせきの関せきへかかつてるんだ。――ねえ寒月君それか

らどうしたい」と急に乘氣なきになつて、またヴァイオリンの仲間入りをする。主人は情けなくも取り残された。寒月君はこれに勢を得て隠し所を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る時御祖母おばあさんが餞別せんべつにくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持つて来たものだ

そうです」

「そいつは古物こぶつだね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」

「ええ、ちと調和せんです」

「天井裏だって調和しないじゃないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心して給え。秋あき

淋しつづらにかくすヴァイオリンはどうだい、両君

」

「先生今日は大分俳句が出来ますね」

「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出来てるのさ。僕の俳句における造詣ぞうけいと云ったら、故子こし規子きしも舌を捲まいて驚ろいたくらいのものさ」

「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な

東風君は真率しんそつな質問をかける。

「なにつき合わなくつても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云うので、東風先生あきれて黙ってしまった。寒月君は笑いながらまた進行する。

「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すのに困った。ただ出すだけなら人目を掠かすめて眺ながめるく

らいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にも
ならない。弾^ひかなければ役に立たない。弾けば音が
出る。出ればすぐ露見する。ちようど木槿垣^{むくげがき}を一重
隔てて南隣りは沈澱組^{ちんでんぐみ}の頭領が下宿しているんだか
ら剣呑^{けんのん}だあね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる

「なるほど、こりや困る。論より証拠音が出るんだ

から、小督こくうの局つぼねも全くこれでしくじったんだからね

。これがぬすみ食をするとか、贗札にせざつを造るとか云う

なら、まだ始末がいいが、音曲おんぎよくは人に隠しちや出来

ないものだからね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが……」

「ちよつと待った。音さえ出なけりやと云うが、音

が出なくても隠かくし了おおせないのがあるよ。昔むかし僕等が

小石川の御寺で自炊をしている時分に鈴木とうの藤さん

と云う人がいてね、この藤さんが大変味淋みりんがすきで

、ビールの徳利とっくりへ味淋を買って来ては一人で楽しみ

に飲んでいたのさ。ある日藤さんとうが散歩に出たあと

で、よせばいいのに苦沙弥君がちよつと盗んで飲ん

だところが……」

「おれが鈴木の意味淋などをのむものか、飲んだのは君だぜ」と主人は突然大きな声を出した。

「おや本を讀んでるから大丈夫かと思つたら、やはり聞いてるね。油断の出来ない男だ。耳も八丁、目も八丁とは君の事だ。なるほど云われて見ると僕も飲んだ。僕も飲んだには相違ないが、発覚したのは君の方だよ。——両君まあ聞きたまえ。苦沙弥先生

元来酒は飲めないのだよ。ところを人の味淋だと思
つて一生懸命に飲んだものだから、さあ大変、顔中
真赤まっかにはれ上つてね。いやもう二目ふためとは見られない
ありさまさ……」

「黙っている。羅甸語ラテンゴも読めない癖に」

「ハハハハ、それで藤さんとうが帰つて来てビールの徳
利をふつて見ると、半分以上足りない。何でも誰か

飲んだに相違ないと云うので見廻して見ると、大将
隅の方に朱泥しゅでいを練りかためた人形のようにかたくな
つていらあね……」

三人は思わず哄然こうぜんと笑い出した。主人も本をよみ

ながら、くすくすと笑った。ひとり独仙君ひとに至っては

機外きががいの機きを弄ろうし過ぎて、少々疲労したと見えて、碁

盤の上へのしかかって、いつの間まにやら、ぐうぐう

寝ている。

「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔
し姥子うばこの温泉に行つて、一人のじじいと相宿になつ
た事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだつ
たがね。まあ相宿だから呉服屋だろうが、古着屋だ
ろうが構う事はないが、ただ困つた事が一つ出来て
しまった。と云うのは僕は姥子うばこへ着いてから三日目

に煙草たばこを切らしてしまったのさ。諸君も知ってるだ

ろうが、あの姥子と云うのは山の中の一軒屋でただ

温泉に這はい入って飯を食うよりほかにどうもこうも仕

様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから

御難だね。物はないとなるとなお欲しくなるもの

で、煙草がないなと思うやいなや、いつもそんなで

ないのが急に吞みたくなり出してね。意地のわるい

事に、そのじじいが風呂敷に一杯煙草を用意して登山しているのさ。それを少しずつ出しては、人の前であぐら胡坐をかいて呑みたいだろうと云わないばかりに、すばすばふかすのだね。ただふかすだけなら勘弁のしようもあるが、しまいには煙を輪に吹いて見たり、たて豎に吹いたり、横に吹いたり、乃至はないし邯鄲夢のかんたんゆめ枕と逆まくらぎやくに吹いたり、または鼻から獅子の洞入り、ほらい洞ほら

返りに吹いたり。がえつまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云うのは」

「衣装道具なら見せびらかすのだが、いしょうどうぐ煙草だから呑

みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思いをなさるより貰ったらい
いでしよう」

「ところが貰わないね。僕も男子だ」

「へえ、貰っちゃいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰わないね」

「それでどうしました」

「貰わないで偷ぬすんだ」

「おやおや」

「奴さん手拭てぬぐいをぶらさげて湯に出掛けたから、呑む

ならここだと思つて一心不乱立てつづけに呑んで、

ああ愉快だと思ふ間もなく、障子しょうじがからりとあいた

から、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」

「湯には這入らなかつたのですか」

「這入ろうと思つたら巾着きんちやくを忘れたのに気がついて

廊下から引き返したんだ。人が巾着でもとりやし

まいし第一それからが失敬さ」

「何とも云えませんか。煙草おてぎわの御手際じゃ」

「ハハハハじじいもなかなか眼識があるよ。巾着はとにかくだが、じいさんが障子をあけると二日間の溜め吞みをやった煙草の煙りがむつとするほど室のなかに籠こもつてゐるじゃないか、悪事千里とはよく云つたものだね。たちまち露見してしまった」

「じいさん何とかいいましたか」

「さすが年の功だね、何にも言わずに巻煙草を五六まきたばこ

十本半紙にくるんで、失礼ですが、こんな粗葉そはでよ

ろしければどうぞお呑み下さいましと云つて、また

湯壺ゆつぽへ下りて行つたよ」

「そんなのが江戸趣味と云うのでしうか」

「江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、それ

から僕は爺さんと大に肝胆相照おおい かんたんあいてらして、二週間の間

面白く逗留とうりゆうして歸つて来たよ」

「煙草は二週間中爺さんの御馳走になったんですか

」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はようやく本を伏せて、起き上りながらついに降参を申し込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちよう

どいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの碁盤の上で昼寝をしている先生——何とか云いましたね、え、独仙先生、——独仙先生にも聞いていただきたいな。どうですあんなに寝ちや、からだに毒ですぜ。もう起してもいいでしょう」

「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。起きるんだよ。そう寝ちや毒だとさ。奥さんが心配

だとさ」

「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山羊髯やぎひげを伝

わつて垂涎よだれが一筋長々と流れて、蝸牛かたつむりの這つた迹あとの

ように歴然と光っている。

「ああ、眠かった。山上の白雲わが懶ものうきに似たりか

ああ、いい心持ちに寝ねたよ」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちつと起

きちゃどうだい」

「もう、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを——どうするんだったかな、苦沙弥君」

「どうするのかな、とんと見当けんとうがつかない」

「これからいよいよ弾くところです」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ。
こっちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

「君は無絃むげんの素琴そきんを弾ずる連中だから困らない方な

んだが、寒月君のは、きいきいぴいきんじよがつべき近所合壁へ

聞えるのだから大おおに困つてるところだ」

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイオ

リンを弾く方ほうを知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺いたいもので」

「伺わなくても露地ろじの白牛びやくぎゅうを見ればすぐ分るはずだ

が」と、何だか通じない事を云う。寒月君はねぼけてあんな珍語を弄ろうするのだらうと鑑定したから、わざと相手にならないで話頭を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日は

天長節だから、朝からうちにいて、つづらの蓋ふたをと

って見たり、かぶせて見たりいちんち一日そわそわして暮ら

してしまいましたがいよいよ日が暮れて、つづらの

底で蟬こおろぎが鳴き出した時思い切って例のヴァイオリン

と弓を取り出しました」

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅多めったに弾く

とあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「まず弓を取って、切先きっさきから鰐元つばもとまでしらべて見る

……」

「下手な刀屋じやあるまいし」と迷亭君が冷評ひやかした

。

「實際これが自分の魂だと思つと、侍さむらいが研ぎ澄とした

名刀を、長夜ちようやの灯影ほかげで鞘さや払ばらいをする時のような心持ち

がするものですよ。私は弓を持ったままぶるぶると

ふるえました」

「全く天才だ」と云う東風君について「全く癲癇だ^{てんかん}

」と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよかる」と云う。独仙君は困ったものだ^そと云う顔付をする。

「ありがたい事に弓は無難です。今度はヴァイオリ^ンを同じくランプの傍^{そば}へ引き付けて、裏表共よくし

らべて見る。この間約五分間、つづらの底では始終

こおろぎ

蟬が鳴いていると思つて下さい。……」

「何とでも思つてやるから安心して弾くがいい」

「まだ弾きやしません。——幸いヴァイオリンも疵きずがない。これなら大丈夫とぬつくと立ち上がる……」

「どつかへ行くのかい」

「まあ少し黙って聞いて下さい。そう一句毎に邪魔をされちゃ話が出来ない。……」

「おい諸君、だまるんだとさ。シーシー」

「しゃべるのは君だけだぜ」

「うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

「ヴァイオリンを小脇に抱^かい込んで、草履^{ぞうり}を突^つかけ

たまま二三歩草の戸を出たが、まてしばし……」

「そらおいでなすった。何でも、どっかで停電するに違ないと思った」

「もう帰ったって甘干しの柿はないぜ」

「そう諸先生が御まぜ返しになつてははなはだ遺憾いかん

の至りだが、東風君一人を相手にするより致し方がない。——いいかね東風君、二三步出たがまた引き

返して、国を出るとき三円二十銭で買った赤毛布をあかげつと

頭から被^{かぶ}つてね、ふつとランプを消すと君真暗闇^{まつくらやみ}に

なつて今度は草履^{ぞうり}の所在^{ありか}地が判然しなくなつた」

「一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまい。ようやくの事草履を見つけて

表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布にヴァイオリ

ン。右へ右へと爪先^{つまさき}上^{あが}りに庚申山^{こうしんやま}へ差しかかつてく

ると、東嶺寺^{とうれいじ}の鐘がボーンと毛布^{けつと}を通して、耳を通

して、頭の中へ響き渡った。何時なんじだと思う、君」

「知らないね」

「九時だよ。これから秋の夜長をたった一人、山道

八丁を大平と云う所まで登るのだが、平生なら臆病

おおだいら

な僕の事だから、恐しくってたまらないところだけ

れども、一心不乱となると不思議なもので、怖いこわに

も怖くないにも、毛頭そんな念はてんで心の中に起

らないよ。ただヴァイオリンが弾きたいばかりで胸
が一杯になつてゐるんだから妙なものさ。この大平と
云う所は庚申山の南側で天氣のいい日に登つて見る
と赤松の間から城下が一目に見下せる眺望佳絶の平
地で——そうさ広さはまあ百坪もあるうかね、真中
に八畳敷ほどこな一枚岩があつて、北側は鵜うの沼ぬまと云
う池つづきで、池のまわりは三抱えもあるうと云う

樟くすのきばかりだ。山のなかだから、人の住んでる所は樟しよ

うのうと

脳うのうとを採る小屋が一軒あるばかり、池の近辺は昼でも

あまり心持ちのいい場所じゃない。幸い工兵が演習

のため道を切り開いてくれたから、登るのに骨は折

れない。ようやく一枚岩の上へ来て、毛布けつとを敷いて

、ともかくもその上へ坐った。こんな寒い晩に登っ

たのは始めてなんだから、岩の上へ坐って少し落ち

着くと、あたりの淋しささみが次第次第に腹の底へ沁しみ

渡る。こう云う場合に人の心を乱すものはただ怖こわい

と云う感じばかりだから、この感じさえ引き抜くと

、余るところは皎々こうこう冽々れつれつたる空霊の気だけになる。

二十分ほど茫然ぼうぜんとしているうちに何だか水晶で造つ

た御殿のなかに、たった一人住んでるような気にな

った。しかもその一人住んでる僕のからだが一——い

やからだばかりじゃない、心も魂もことごとく寒天
か何かで製造されたごとく、不思議に透すき徹とおってし
まって、自分が水晶の御殿の中にいるのだから、自分
の腹の中に水晶の御殿があるのだから、わからなくな
って来た……」

「飛んだ事になって来たね」と迷亭君が真面目にか
らかうあとに付いて、独仙君が「面白い境界だきょうがい」と

少しく感心したようすに見えた。

「もしこの状態が長くつづいたら、私はあすの朝まで、せつかくのヴァイオリンも弾かずに、茫ぼんやり一枚岩の上に坐つてたかも知れないです……」

「狐でもいる所かい」と東風君がきいた。

「こう云う具合で、自他の区別もなくなつて、生きているか死んでいるか方角のつかない時に、突然後うし

ろの古沼の奥でギヤーと云う声がした。……」

「いよいよ出たね」

「その声が遠く反響を起して満山の秋の梢を、野分のわき

と共に渡ったと思ったら、はっと我に歸った……」

「やっと安心した」と迷亭君が胸を撫なでおろす真似

をする。

「大死たいしいちばいんこんあらた一番乾坤新なり」と独仙君は目くばせをする

。寒月君にはちつとも通じない。

「それから、我に帰つてあたりを見廻わすと、庚申こうしん

山一面はしんとして、雨垂れほどの音もしない。やまは

てな今の音は何だろうと考えた。人の声にしては鋭

すぎるし、鳥の声にしては大き過ぎるし、猿の声に

しては——この辺によもや猿はおるまい。何だろう

？ 何だろうと云う問題が頭のなかに起ると、これ

を解釈しようと云うので今まで静まり返っていたや

からが、ふんぜんざつぜんしゅうぜん紛然雜然粦然としてあたかもコンノート殿

下歓迎の当時における都人士狂乱の態度を以てもつ脳裏

をかけ廻る。そのうちにそうしん総身の毛穴が急にあって、

しょうちゅう焼酎を吹きかけた毛脛けずねのように、勇氣、胆力、分別

、沈着などと号するお客様がすうすうと蒸発して行

く。心臓が肋骨の下でステテコを踊り出す。両足が

紙鳶たこのうなりのように震動をはじめる。これはたま

らん。いきなり、毛布けつとを頭からかぶって、ヴァイオ

リンを小脇に掻かい込んでひよろひよると一枚岩を飛

び下りて、一目散に山道八丁を麓ふもとの方へかけ下りて

、宿へ帰って布団ふとんへくるまつて寝てしまった。今考

えてもあんな気味のわるかった事はないよ、東風君

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾かないのかい」

「弾きたくつても、弾かれないじゃないか。ギャーだもの。君だってきつと弾かれないよ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君は

一座を見廻わして大得意のようすである。

「ハハハハこれは上出来。そこまで持つて行くには
だいぶ苦心慘憺たるものがあつたのだらう。僕は男
子のサンドラ・ベロニが東方君子の邦くにに出現すると
ころかと思つて、今が今まで真面目に拝聴していた
んだよ」と云つた迷亭君は誰かサンドラ・ベロニの
講釈でも聞くかと思のほか、何にも質問が出ないの

で「サンドラ・ベロニが月下に豎琴たてことうを弾いて、以太イタ

リアふう

利亞風の歌を森の中でうたつてるところは、君の庚こう

しんやま

申山へヴァイオリンをかかえて上のぼるところと同曲に

して異巧なるものだね。惜しい事に向うは月中げつちゅうの嫦じょ

うが

娥うがを驚ろかし、君は古沼ふるぬまの怪狸かいりにおどろかされたの

きわ

で、際きわどいところで滑稽こっけいと崇高の大差を来たした。

いかん

さぞ遺憾いかんだろう」と一人で説明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外平気である。

「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやるから、おどかさるんだ」と今度は主人が酷評を加えると、

「好漢こうかんこの鬼窟きくつ裏うりに向つて生計を営む。惜しい事だ」と独仙君は嘆息した。すべて独仙君の云う事は決

して寒月君にわかつたためしがない。寒月君ばかりではない、おそらく誰にでもわからないだろう。

「そりや、そうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行って珠ばかり磨たまいてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を転じた。

「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんで
すから、暫時中止の姿です。珠ももうあきましたか

ら、実はよそうかと思つてゐるんです」

「だって珠が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人は少しく眉をひそめたが、本人は存外気楽で、

「博士ですか、エヘヘヘヘ。博士ならもうならなくつてもいいんです」

「でも結婚が延びて、双方困るだろう」

「結婚って誰の結婚です」

「君のさ」

「私が誰と結婚するんです」

「金田の令嬢さ」

「へええ」

「へえって、あれほど約束があるじゃないか」

「約束なんかありやしません、そんな事を言い触^ふら

すなあ、向うの勝手です」

「こいつは少し乱暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件は知ってるだろう」

「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知ってるばかりじゃない、公然の秘密として天下一般に知れ渡ってる。現に万朝まんちようなぞでは花聶花嫁と云う表題で両君の写真を紙上に掲ぐるの栄はいつだろう、いつだろうって、うるさく僕のところへ聞き

にくるくらいだ。東風君なぞはすでに鴛鴦歌えんおうかと云う

一大長篇を作つて、三箇月前ぜんから待つてゐるんだが、

寒月君が博士にならないばかりで、せつかくの傑作も宝の持ち腐れになりそうで心配でたまらないそう
だ。ねえ、東風君そうだろう」

「まだ心配するほど持ちあつかつてはいませんが、
とにかく満腹の同情をこめた作を公けにするつもり

です」

「それ見たまえ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。少ししっかりして、珠を磨いてくれたまえ」

「へへへへいろいろ御心配をかけて済みませんが、もう博士にはならないでもいいのです」

「なぜ」

「なぜって、私にはもう歴然^{れっき}とした女房があるんです」

「いや、こりやえらい。いつの間に秘密結婚をやつたのかね。油断のならない世の中だ。苦沙弥さんただ今御聞き及びの通り寒月君はすでに妻子があるんだとさ」

「子供はまだですよ。そう結婚して一と月もたたな

「うちに子供が生れちゃ事でさあ」

「元来いつどこで結婚したんだ」と主人は予審判事見たような質問をかける。

「いつって、国へ帰ったら、ちゃんと、うちで待つてたのです。今日先生の所へ持って来た、この鰹節かつぶしは結婚祝に親類から貰ったんです」

「たった三本祝うのはけちだな」

「なに沢山のうちを三本だけ持って来たのです」

「じゃ御国の女だね、やっぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」

「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりや少し義理がわるかろう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりや同じ事だ。どうせ

夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをするようなものだ。要するに鉢合せをしないでもすむところをわざわざ鉢合わせるんだから余計な事さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なのは鴛鴦歌えんおうかを作った東風君くらいなものさ

「なに鴛鴦歌は都合によって、こちらへ向け易かえて

もよろしゅうございます。金田家の結婚式にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあつて自由自在なものだね」

「金田の方へ断わったかい」と主人はまだ金田を気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれとも、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はありません

んから、黙っていれば沢山です。――なあに黙つても沢山ですよ。今時分は探偵が十人も二十人もかかつて一部始終残らず知れていますよ」

探偵と云う言語ことばを聞いた、主人は、急に苦い顔にがをして

「ふん、そんなら黙っている」と申し渡したが、それでも飽あき足らなかつたと見えて、なお探偵につい

て下の^{しも}のような事をさも大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懷中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ^ま間に雨戸をはずして人の所有品を偷^{ぬす}むのが泥棒で、知らぬ間に口を滑^{すべ}らして人の心を読むのが探偵だ。ダンビラを畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強^しうる

のが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強盗の一族でとうてい人の風上かざかみに置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊伍を整えて襲撃したって怖くこわはありません。珠磨たますりの名人理学士水島寒月でさあ」

「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほどあ

って元気旺盛おうせいなものだね。しかし苦沙弥さん。探偵

がスリ、泥棒、強盗の同類なら、その探偵を使う金

田君のごときものは何の同類だろう」

くまさかちようはん
「熊坂長範くらいなものだろう」

「熊坂はよかったね。一つと見えたる長範が二つに

なつてぞ失せうにけりと云うが、あんな烏金からすがねで身代しんだいを

むこうよこちよう

つくった向横丁の長範なんかは業ごうつく張りの、慾張

り屋だから、いくつになつても失せる氣遣きづかいはないぜ

。あんな奴につかまったら因果だよ。生涯しょうがいたたるよ

、寒月君用心したまえ」

「なあに、いいですよ。ああ物々し盗人ぬすびとよ。手並

はさきにも知りつらん。それにも懲こりず打ち入るか

つて、ひどい目に合せてやりまさあ」と寒月君は自

若として宝生流ほうしょうりゅうに気燄きえんを吐はいて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいてい探偵のよ
うになる傾向があるが、どう云う訳だろう」と独仙
君は独仙君だけに時局問題には関係のない超然たる
質問を呈出した。

「物価が高いせいでしょう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしょう」と東風君が答

える。

「人間に文明の角つのが生えて、金米糖こんぺいとうのようにいらいらするからさ」と迷亭君が答える。

今度は主人の番である。主人はもったい振ぶった口調で、こんな議論を始めた。

「それは僕が大分だいぶん考えた事だ。僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるの

が原因になっている。僕の自覚心と名づけるのは独

仙君の方で云う、けんしやうじやうぶつ見性成仏とか、自己は天地と同一

体だとか云う悟道の類たぐいではない。……」

「おや大分だいぶんむずかしくなつて来たようだ。苦沙弥君

君にしてそんな大議論を舌頭ぜつとうに弄ろうする以上は、か

く申す迷亭も憚はばりながら御あとで現代の文明に対す

る不平を堂々と云うよ」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

「ところがある。おおい大にある。君なぞはせんだつては

刑事巡査を神のごとく敬い、うやままた今日は探偵をスリ

泥棒に比し、まるで矛盾の変怪だが、へんげ僕などは終始

一貫父母未生以前からただ今に至るまで、かつて自

説を変じた事のない男だ」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。せんだつてはせん

だってで今日は今日だ。自説が変らないのは発達しない証拠だ。下愚は移らずと云うのは君の事だ。：

「これはきびしい。探偵もそうまともにくると可愛いところがある」

「おれが探偵」

「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。喧嘩

はおやめおやめ。さあ。その大議論のあとを拝聴しよう」

「今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に截然せつぜんたる利害の鴻溝こうこうがあると云う事を知り過ぎていると云う事だ。そうしてこの自覚心なるものは文明が進むにしたがつて一日一日と鋭敏になつて行くから、しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ないよ

うになる。ヘンレーと云う人がスチーヴンソンを評

して彼は鏡のかかった部屋に入はいつて、鏡の前を通る

毎に自己の影を写して見なければ気が済まぬほど瞬ごと

時も自己を忘るる事の出来ない人だと評したのは、

よく今日こんにちの趨勢すうせいを言いあらわしている。寝てもおれ

、覚さめてもおれ、このおれが至るところにつけまつ

わっているから、人間の行為言動が人工的にコセつ

くばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、ちようど見合をする若い男女の心持ちで朝から晩までくらさなければならぬ。悠々ゆうゆうと

しょうよう

か従容とか云う字は劃かくがあつて意味のない言葉にな

きんだい

つてしまふ。この点において今代の人は探偵的であ

かす

る。泥棒的である。探偵は人の目を掠めて自分だけ

いきおい

うまい事をしようとか云う商売だから、勢いきおい自覚心が強

くならなくては出来ん。泥棒も捕^{つか}まるか、見つかる

かと云う心配が念頭を離れる事がないから、勢自覚

心が強くならざるを得ない。今の人はどうしたら己^{おの}

れの利になるか、損になるかと寝ても醒^さめても考え

つづけだから、勢探偵泥棒と同じく自覚心が強くな

らざるを得ない。二六時中キョトキョト、コソコソ

して墓^いに入るまで一刻の安心も得ないのは今の人の

心だ。文明の咒詛^{じゆそ}だ。馬鹿馬鹿しい」

「なるほど面白い解釈だ」と独仙君が云い出した。

こんな問題になると独仙君はなかなか引込^{ひっこ}んでいな

い男である。「苦沙弥君の説明はよく我意^{わがい}を得てい

る。昔^{むか}しの人^{むか}は己れを忘れろと教えたものだ。今の

人は己れを忘れるなと教えるからまるで違う。二六

時中己れと云う意識をもつて充滿している。それだ

から二六時中太平の時はない。いつでも焦熱地獄だ

。天下に何が薬だと云つて己れを忘れるより薬な事

はない。さんこうげつかむがにいる三更月下入無我とはこの至境を咏えいじたもの

さ。今の人は親切をしても自然をかいている。英吉イギ

利リスのナイスなどと自慢する行為も存外自覚心が張り

切れそうになっている。英国の天子が印度インドへ遊びに

行つて、印度の王族と食卓を共にした時に、その王

族が天子の前とも心づかずに、つい自国の我流を出

じゃがいも

てづか

して馬鈴薯を手攫みで皿へとって、あとから真赤に

まっか

なつて愧^はじ入つたら、天子は知らん顔をしてやはり

二本指で馬鈴薯を皿へとつたそうだ……」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問であつた。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が後^{あと}をつける。

「やはり英国のある兵營で聯隊の士官が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が済んで手を洗う水を硝子鉢ガラスばちへ入れて出したら、この下士官は宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐうと飲んでしまった。すると聯隊長が突然下士官の健康を祝すと云いながら、やはりフヒンガー・ボールの水を一息に飲み干したそうだ。そこで並な

みずさかずき

みいる士官も我劣らじと水盃を挙げて下士官の健康を祝したと云うぜ」

はなし

「こんな噺もあるよ」とだまつてる事の嫌な迷亭君

じょう

が云った。「カーライルが始めて女皇に謁した時、

なら

へんぶつ

宮廷の礼に嫺わぬ変物の事だから、先生突然どうで

すと云いながら、どさりと椅子へ腰をおろした。と

うし

ころが女皇の後ろに立っていた大勢の侍従や官女が

みんなくすくす笑い出した——出したのではない、
出そうとしたのさ、すると女皇が後ろを向いて、ち
よつと何か相図おおぜいをしたら、多勢の侍従官女がいつの
間まにかみんな椅子へ腰をかけて、カーライルは面目
を失わなかったと云うんだが随分御念の入った親切
もあつたもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立ってても平気だ

ったかも知れませんか」と寒月君が短評を試みた。

「親切の方の自覚心はまあいいがね」と独仙君は進行する。「自覚心があるだけ親切をするにも骨が折れる訳になる。気の毒な事さ。文明が進むに従って殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになるなどと普通云うが大間違いさ。こんなに自覚心が強くって、どうしておだやかになれるものか。

なるほどこちよつと見るとごくしずかで無事なようだが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちようど相撲が土俵の真中で四よつに組んで動かないようなものだらう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を打っているじゃないか」

「喧嘩けんかも昔むかしの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえつて罪はなかつたが、近頃じやなかなか巧妙になつ

てるからなおなお自覚心が増してくるんだね」と番
が迷亭先生の頭の上に廻って来る。「ベーコンの言
葉に自然の力に従って始めて自然に勝つとあるが、
今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出来上ってる
から不思議だ。ちようと柔術のようなものさ。敵の
力を利用して敵を斃^{たお}す事を考える……」

「または水力電気のようなものですね。水の力に逆

らわないでかえってこれを電力に変化して立派に役に立たせる……」と寒月君が言いかけると、独仙君がすぐそのあとを引き取った。「だから貧^{ひん}時には貧^{ひん}に縛^{ばく}せられ、富^ふ時には富^ふに縛^{ばく}せられ、憂^{ゆう}時には憂^{ゆう}に縛^{ばく}せられ、喜^き時には喜^きに縛^{ばく}せられるのさ。才人は才に斃^{たお}れ、智者は智に敗れ、苦沙弥君のような癩癩^{かんしゃくも}持ちは癩癩を利用さえすればすぐに飛び出して敵のペ

てんに罹^{かか}る……」

「ひやひや」と迷亭君が手をたたくと、苦沙弥君はにやにや笑いながら「これでなかなかそう甘^{うま}くは行かないのだよ」と答えたら、みんな一度に笑い出した。

「時に金田のようなのは何で斃^{いんごう}れるだろう」

「女房は鼻で斃^{いんごう}れ、主人は因業で斃^{いんごう}れ、子分は探偵

で斃れか」

「娘は？」

「娘は——娘は見た事がないから何とも云えないが——まず着倒れか、食い倒れ、もしくは吞んだくれの類たぐいだろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことにそとばこまちまちのようと卒塔婆小町のように行き倒れになるかも知れない」

「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。

「だからおうむしよじゆうにしやうごしん応無所住而生其心と云うのは大事な言葉だ

、きようがいそう云う境界に至らんと人間は苦しくてならん」

と独仙君しきりにひと独り悟ったような事を云う。

「そう威張るもんじやないよ。君などはことによる

でんこうえいりと電光影裏にさか倒れをやるかも知れないぜ」

「とにかくこの勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいい出した。

「遠慮はいらないから死ぬさ」と迷亭が言下ごんかに道破どうはする。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を張る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませ

んが、死ぬ時には誰も苦にすると見えますね」と寒月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」とこんな時にすぐ返事の出来るのは迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であるごとく、死ぬ事を苦にせんものは幸福さ」と独仙君は

超然として出世間的である。

しゅつせけんでき

「君のように云うとつまりずぶと凶太いのが悟ったのだね

」

「そうさ、禅語に鉄牛面てつぎゅうめんの鉄牛心てつぎゅうしん、牛鉄面の牛鉄心

と云うのがある」

「そうして君はその標本と云う訳かね」

「そうでもない。しかし死ぬのを苦にするようにな

つたのは神経衰弱と云う病気が発明されてから以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神経衰弱以前の民だよ」

迷亭と独仙が妙な掛合かけあいをのべつにやっていると、

主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不平を述べている。

「どうして借りた金を返さずに済みますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちやなりませんよ」

「まあさ。議論だから、だまって聞くんがいい。どうして借りた金を返さずに済みますかが問題であるごとく、どうしたら死なずに済むかが問題である。いな

問題であつた。鍊金術はこれである。すべての鍊金

れんきんじゆつ

術は失敗した。人間はどうしても死ななければなら

ん事が分明ぶんみようになつた」

「鍊金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞いている。いいかい。どうしても死ななければならん事が分明になつた時に第二の問題が起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」

「なるほど」

「死ぬ事は苦しい、しかし死ぬ事が出来なければなお苦しい。神経衰弱の国民には生きている事が死よ

りもはなはだしき苦痛である。したがって死を苦にする。死ぬのが厭いやだから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よかろうと心配するのである。ただたいていのものは智慧ちえが足りないから自然のままに放擲ほうてきしておくうちに、世間がいじめ殺してくれる。しかし一と癖あるものは世間からなし崩しにいじめ殺されて満足するものではない。必ずや死に方かならに

付いて種々考究の結果、ざんしん 嶄新な名案を呈出するに違

ない。だからして世界向後こうごの趨勢すうせいは自殺者が増加し

て、その自殺者が皆独創的な方法をもつてこの世を

去るに違ない」

「大分物騒だいぶぶっそうな事になりますね」

「なるよ。たしかになるよ。アーサー・ジョーンズ

と云う人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張

する哲学者があつて……」

「自殺するんですか」

「ところが惜しい事にしないのだがね。しかし今から千年も立てばみんな実行するに相違ないよ。万年の後は死と云えば自殺よりほかに存在しないもの^{のち}のように考えられるようになる」

「大変な事になりますね」

「なるよきつとなる。そうになると自殺も大分研究が積んで立派な科学になって、落雲館のような中学校で倫理の代りに自殺学を正科として授けるようになる」

「妙ですな、傍聴に出たいくらいのもですね。迷亭先生御聞きになりましたか。苦沙弥先生の御名論を」

「聞いたよ。その時分になると落雲館の倫理の先生はこう云うね。諸君公德などと云う野蛮の遺風を墨^{ぼく}守^{しゅ}してはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しかして己^{おの}れの好むところはこれを人に施^{ほど}こして可なる訳だから、自殺を一步展開して他殺にしてもよろしい。ことに表^{きゆうそだい}の窮措大珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござる

のが大分苦痛のように見受けらるるから、一刻も早く殺して進ぜるのが諸君の義務である。もつとも昔と違って今日は開明の時節であるから槍やり、薙刀なぎなたもしくは飛道具たぐいの類を用いるような卑怯ひきような振舞をしてはなりません。ただあてこすりの高尚なる技術によつて、からかい殺すのが本人のため功德くどくにもなり、また諸君の名誉にもなるのであります。……」

「なるほど面白い講義をしますね」

「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的としている。ところがその時分になると巡査が犬殺しのような棍棒こんぼうをもって天下の公民を撲殺ぼくさつしてあるく。……」

「なぜです」

「なぜって今の人間は生命いのちが大事だから警察で保護

するんだが、その時分の国民は生きてるのが苦痛だから、巡査が慈悲のために打ち殺ぶしてくれるのさ。

もつとも少し気の利きいたものは大概自殺してしまふ

から、巡査に打殺ぶちころされるような奴はよくよく意気地

なしか、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限

るのさ。それで殺されたい人間は門口かどぐちへ張札をして

おくのだね。なにただ、殺されたい男ありとか女あ

りとか、はりつけておけば巡査が都合のいい時に巡まわつてきて、すぐ志望通り取計ってくれるのさ。死骸かね。死骸はやっぱり巡査が車を引いて拾ってあるのさ。まだ面白い事が出来てくる。……」

「どうも先生の冗談じょうだんは際限がありませんね」と東風

君は太おおに感心している。すると独仙君は例の通り山や

羊髯ぎひげを気にしながら、のそのそ弁じ出した。

「冗談と云えば冗談だが、予言と云えば予言かも知れない。真理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて泡沫ほうまつの夢幻むげんを永久の事実と認定したがるものだから、少し飛び離れた事を云うと、すぐ冗談にしてしまう」

「燕雀焉えんじやいずくんぞ大鵬たいほうの志こころざしを知らんやですね」と寒月君が恐れ入ると、独仙君はそうさと云わぬばかりの顔

付で話を進める。

「昔^{むか}しスペインにコルドヴァと云う所があつた……

「今でもありやしないか」

「あるかも知れない。今昔の問題はとにかく、そこ
の風習として日暮れの鐘がお寺で鳴ると、家々の女
がことごとく出て来て河へ這^{はい}入って水泳をやる……

「冬もやるんですか」

「その辺はたしかに知らんが、とにかく貴賤老若の

きせんろうにやく

別なく河へ飛び込む。但し男子は一人も交らない。

ただ

ただ遠くから見ている。遠くから見ていると暮色蒼

ぼしよくそう

然たる波の上に、白い肌が模糊として動いている：

はだえもこ

：

「詩的ですね。新体詩になりますね。なんと云う所ですか」と東風君は裸体らたいが出さえすれば前へ乗り出してくる。

「コルドヴァさ。そこで地方の若いものが、女といつしよに泳ぐ事も出来ず、さればと云って遠くから判然その姿を見る事も許されないのを残念に思つて、ちよつといたずらをした……」

「へえ、どんな趣向だい」といたずらと聞いた迷亭君は^{おおい}大に嬉しがる。

「お寺の鐘つき番に^{わいろ}賄賂を使つて、日没を合図に撞

く鐘を一時間前に鳴らした。すると女などは^{あさはか}浅墓な

ものだから、そら鐘が鳴ったと云うので、めいめい

河岸へあつまつて半襦袢^{はんじゅばん}、半股引^{はんももひき}の服装でざぶりざ

ぶりと水の中へ飛び込んだ。飛び込みはしたものの

、いつもと違って日が暮れない」

「烈^{はげ}しい秋の日がかんかんしやしないか」

「橋の上を見ると男が大勢立って眺^{なが}めている。恥ず

かしいがどうする事も出来ない。大に赤面したそう
だ」

「それで」

「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、

根本の原理を忘れるものだから氣をつけないと駄目だと云う事さ」

「なるほどありがたい御説教だ。眼前の習慣に迷わされの御話しを僕も一つやろうか。この間ある雑誌をよんだら、こう云う詐欺師さぎしの小説があつた。僕が

まあここで書画骨董店こつとうてんを開くとする。で店頭に大家の幅ふくや、名人の道具類を並べておく。無論贗物にせものじや

ない、正直正銘、しょうじきしょうめい

うそいつわりのない上等品ばかり

並べておく。上等品だからみんな高価にきまつてる

。そこへ物数ものずき奇な御客さんが来て、この元信もとのぶの幅は

いくらだねと聞く。六百元なら六百元と僕が云うと

、その客が欲しい事はほしいが、六百元では手元に

持ち合せがないから、残念だがまあ見合せよう」

「そう云うときまつてるかい」と主人は相変らず芝し

居ばい氣ぎのない事を云う。迷亭君はぬからぬ顔で、

「まあさ、小説だよ。云うとしておくんだ。そこで

僕がなに代だいは構いませんから、お氣に入ったら持つ

ていらっしやいと云う。客はそうも行かないからと

躊躇ちゆうちよする。それじゃ月賦げつぷでいただきましょう、月賦

も細く、長く、どうせこれから御ご鼻ひ肩いになるんです

から——いえ、ちつとも御遠慮には及びません。ど

うです月に十円くらいじゃ。何なら月に五円でも構
いませんと僕が極ごくきさくに云うんだ。それから僕と
客の間に二三の問答があつて、とど僕が狩野かのうほうげん法眼元
信の幅を六百円ただし月賦十円払込の事で売渡す」

「タイムスの百科全書見たようですね」

「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる不慥ふたしかだよ

。これからがいよいよ巧妙なる詐偽に取りかかるの

だぜ。よく聞きたまえ月十円ずつで六百円なら何年で皆済かいさいになると思う、寒月君」

「無論五年でしよう」

「無論五年。で五年の歳月は長いと思うか短かいと思うか、独仙君」

「一念いちねん万年、万年ばんねん一念いちねん。短かくもあり、短かくもな

しだ」

「何だそりや道歌^{どうか}か、常識のない道歌だね。そこで

五年の間毎月十円ずつ払うのだから、つまり先方では六十回払えばいいのだ。しかしそこが習慣の恐ろしいところで、六十回も同じ事を毎月繰り返していると、六十一回にもやはり十円払う気になる。六十回にも十円払う気になる。六十二回六十三回、回を重ねるにしたがつてどうしても期日がくれば十円

払わなくては気が済まないようになる。人間は利口
のようだが、習慣に迷って、根本を忘れると云う大
弱点がある。その弱点に乗じて僕が何度でも十円ず
つ毎月得をするのさ」

「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならない
でしょう」と寒月君が笑うと、主人はいささか真面
目で、

「いやそう云う事は全くあるよ。僕は大学の貸費たいひを毎月毎月勘定せずに返して、しまいに向むから断ことわわられた事がある」と自分の恥を人間一般の恥のように公言した。

「そら、そう云う人が現にここにいるからたしかなものだ。だから僕の先刻さつき述べた文明の未来記を聞いて冗談だなどと笑うものは、六十回でいい月賦しよを生

涯うがひ払はらつて正当だと考える連中だ。ことに寒月君や、東風君のような経験の乏とほしい青年諸君は、よく僕らの云う事を聞いてだまされないようにしなくっちゃいけない」

「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事に致します」

「いや冗談のようだが、實際参考になる話ですよ、

寒月君」と独仙君は寒月君に向いだした。「たとえ

ばですね。今苦沙弥君か迷亭君が、君が無断で結婚

したのが穩当おんとうでないから、金田とか云う人に謝罪し

ろと忠告したら君どうです。謝罪する見ですか」

「謝罪は御容赦にあずかりたいですね。向うがあや

まるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」

「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「なおなお御免蒙ごめんこうむります」

「大臣とか華族ならどうです」

「いよいよもって御免蒙ります」

「それ見たまえ。昔と今とは人間がそれだけ変つて
る。昔は御上おかみの御威光なら、何でも出来た時代です。

その次には御上の御威光でも、出来ないものが出来て
くる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも、

ある程度以上に個人の人格の上にのしかかる事が出来ない世の中です。はげしく云えば先方に権力があればあるほど、のしかかれるものの方では不愉快を感じて反抗する世の中です。だから今の世は昔しむかと違って、御上の御威光だから出来ないのだと云う新現象のあらわれる時代です、昔しものから考えると、ほとんど考えられないくらいな事柄が道理で

通る世の中です。世態人情の変遷と云うものは実に不思議なもので、迷亭君の未来記も冗談だと云えば冗談に過ぎないのだが、その辺の消息を説明したものとすれば、なかなか味あじわいがあるじゃないですか」

「そう云う知己ちぎが出てくると是非未来記の続きが述べたくなるね。独仙君の御説のごとく今の世に御上の御威光を笠かさにきたり、竹槍の二三百本を恃たのみにして

無理を押し通そうとするのは、ちようどカゴへ乗つ

て何でも蚊かでも汽車と競争しようとおせる、時代後

れの頑物がんぶつ——まあわからずやの張本ちようほん、烏金からすがねの長範ちようはん先

生んせいくらいのもものだから、黙もくつて御手際おてぎわを拝見してい

ればいいが——僕の未来記はそんな当座間に合せの

小問題じゃない。人間全体の運命に関する社会的現

象だからね。つらつら目下文明の傾向を達観して、

遠き将来の趨勢すうせいを卜ぼくすると結婚が不可能の事になる

。驚ろくなかれ、結婚の不可能。訳はこうさ。前申ぜん

す通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一国を領主が代表した時分には、代表者以外の人間には人格はまるでなかった。あつても認められなかった。それががらりと変ると、あらゆる生存者がことごとく個性を主張

し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だよと云わぬばかりの風をするようになる。ふたりの人が途中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だぞと心の中うちで喧嘩けんかを買いながら行き違ふ。それだけ個人が強くなつた。個人が平等に強くなつたから、個人が平等に弱くなつた訳になる。人がおのれを害する事が出来にくくなつた点において、たしかに自分は強くな

つたのだが、滅多めったに人の身の上に手出しがならなく

なつた点においては、明かに昔より弱くなつたんだ

ろう。強くなるのは嬉しいが、弱くなるのは誰もあ

りがたくないから、人から一毫いちごうも犯おかされまいと、強

い点をあくまで固守すると同時に、せめて半毛はんもうでも

人を侵おかしてやろうと、弱いところは無理にも拈ひろげた

くなる。こうなると人と人の間に空間がなくなつて

生きてるのが窮屈になる。出来るだけ自分を張り
つめて、はち切れるばかりにふくれ返って苦しがつ
て生存している。苦しいから色々な方法で個人と個
人との間に余裕を求める。かくのごとく人間が自業
自得で苦しんで、その苦し紛れまぎに案出した第一の方
案は親子別居の制さ。日本でも山の中へ這入って見
給え。いっけいちもん一家一門ことごとく一軒のうちにごろごろし

ている。主張すべき個性もなく、あつても主張しないから、あれで済むのだが文明の民はたとい親子の間でもお互に我儘わがままを張れるだけ張らなければ損になるから勢いきおい両者の安全を保持するためには別居しなければならぬ。歐洲は文明が進んでいるから日本より早くこの制度が行われている。たまたま親子同居するものがあつても、息子むすこがおやじから利息のつ

く金を借りたり、他人のように下宿料を払ったりする。親が息子の個性を認めてこれに尊敬を払えばこそ、こんな美風が成立するのだ。この風は早晚日本へも是非輸入しなければならん。親類はとくに離れ、親子は今日こんにちに離れて、やっと我慢しているようなものの個性の発展と、発展につれてこれに対する尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくて

は樂が出来ない。しかし親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない訳だから、最後の方案として夫婦が分れる事になる。今の人の考ではいっしよにいるから夫婦だと思つてゐる。それが大きな了見違ひさ。いっしよにいるためにはいっしよにいるに充分なるだけ個性が合わなければならぬだろう。昔しなら文句はないさ、異体同心とか云つて、目には夫

婦二人に見えるが、内実は一人前いちにんまえなんだからね。そ

かいろうどうけつ

れだから偕老同穴とか号して、死んでも一つ穴の狸に化ける。野蛮なものさ。今はそうは行かないやね

。夫はあくまでも夫で妻はどうしたって妻だからね

あんどんばかま

は

ろうこ

。その妻が女学校で行灯袴あんどんばかまを穿はいて牢乎ろうこたる個性を

きた

鍛きたえ上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだから、と

ても夫の思う通りになる訳がない。また夫の思い通

りになるような妻なら妻じゃない人形だからね。賢

夫人になればなるほど個性は凄^{すご}いほど発達する。発

達すればするほど夫と合わなくなる。合わなければ

自然の勢^{いきおい}夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上

は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結構な

事だが、賢妻を迎えれば迎えるほど双方共苦しみの

程度が増してくる。水と油のように夫婦の間には截^{せつ}

然たるしきりがあつて、それも落ちついて、しきりが水平線を保つていればまだしもだが、水と油が双方から働らきかけるのだから家のなかは大地震のようになつたり下がつたりする。ここにおいて夫婦雑居は相互の損だと云う事が次第に人間に分つてくる。……」

「それで夫婦がわかれるんですか。心配だな」と寒

月君が云った。

「わかれる。きつとわかれる。天下の夫婦はみんな分れる。今まではいつしよにいたのが夫婦であつたが、これからは同棲どうせいしているものは夫婦の資格がな

いように世間から目もくされてくる」

「すると私なぞは資格のない組へ編入される訳ですね」と寒月君は際きわどいところでのろけを云った。

「明治の御代みよに生れて幸さ。僕などは未来記を作る

だけあって、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出てい

るからちゃんと今から独身でいるんだよ。人は失恋

の結果だなどと騒ぐが、近眼者の視みるところは実に

憐れなほど浅薄なものだ。それはとにかく、未来記

の続きを話すところさ。その時一人の哲学者が天降あまくだ

つて破天荒はてんこうの真理を唱道する。その説に曰いわくさ。人

間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅す

ると同結果に陥る。おちい いやしくも人間の意義を完まったから

しめんためには、いかなる価あたいを払うとも構わないか

らこの個性を保持すると同時に発達せしめなければ

ならん。かの陋習ろうしゅうに縛せられて、いやいやながら結

婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蛮風であ

って、個性の発達せざる蒙昧もうまいの時代はいざ知らず、

文明の今日こんにちなおこの弊竇へいとうに陥おちいつて恬てんとして顧かえりみない

のははなはだしき謬見びゅうけんである。開化の高潮度に達せ

るきんだい今代において二個の個性が普通以上に親密の程度

をもつて連結され得べき理由のあるべきはずがない

。この觀易みやすき理由はあるにも関らず無教育の青年男

女が一時の劣情に駆られて、漫みだりに合ごう登きんの式を挙ぐる

は悖德はいとく没倫ぼつりんのはなはだしき所為である。吾人は人道

のため、文明のため、彼等青年男女の個性保護のため、全力を挙げこの蛮風に抵抗せざるべからず……

」

「先生私はその説には全然反対です」と東風君はこの時思い切った調子でぴたりと平手ひらてで膝頭ひざがしらを叩いた

。「私の考では世の中に何が尊たつといと云つて愛と美ほ

ど尊いものはないと思います。吾々を慰いしや藉し、吾々

を完全にし、吾々を幸福にするのは全く両者の御蔭
であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔に
し、同情を洗鍊するのは全く両者の御蔭であります
。だから吾人はいつの世いずくに生れてもこの二つ
のものを忘れることが出来ません。この二つの者
が現実世界にあらわれると、愛は夫婦と云う關係に
なります。美は詩歌^{しうか}、音楽の形式に分れます。それ

だからいやしくも人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなかろうと思ひます」

「なければ結構だが、今哲学者が云つた通りちゃん

と滅してしまうから仕方がないと、あきらめるさ。

なに芸術だ？　芸術だって夫婦と同じ運命に歸着するのさ。個性の発展というのは個性の自由と云う意

味だろう。個性の自由と云う意味はおれはおれ、人は人と云う意味だろう。その芸術なんか存在出来る訳がないじゃないか。芸術が繁昌するのは芸術家と

きょうじゆしや

享受者の間に個性の一致があるからだろう。君がい

くら新体詩家だって踏張ふんばつても、君の詩を読んで面

白いと云うものが一人もなくっちゃ、君の新体詩も

御気の毒だが君よりほかに読み手はなくなる訳だろ

う。
鴛鴦えんおうか歌をいく篇作つたつて始まらないやね。幸

いに明治の今日こんにちに生れたから、天下が挙こぞつて愛読するのだろうが……」

「いえそれほどでもありません」

「今でさえそれほどでなければ、人文じんぶんの発達した未

来すなわ即ち例の一大哲学者が出て非結婚論を主張する時

分には誰もよみ手はなくなるぜ。いや君のだから読

まないのじゃない。人々個々おのあの特別の個性を

にんにんここ

もってるから、人の作つた詩文などは一向面白くな

いっこう

いのさ。現に今でも英国などではこの傾向がちゃん

とあらわれている。現今英国の小説家中でもっとも

個性のいちじるしい作品にあらわれた、メレジスを

見給え、ジェームスを見給え。読み手は極めて少な

きわ

いじゃないか。少ない訳さ。わけあんな作品はあんな個

性のある人でなければ読んで面白くないんだから仕方がない。この傾向がだんだん発達して婚姻が不道徳になる時分には芸術も完く滅亡さ。まったそうだろう君のかいたものは僕にわからなくなる、僕のかいたものは君にわからなくなった日にや、君と僕の間には芸術も糞もないじゃないか」

「そりやそうですね私も私はどうも直覺的にそう

思われないます」

「君が直覺的にそう思われなければ、僕は曲覺的きよつかくてきに
そう思うまでさ」

「曲覺的かも知れないが」と今度は独仙君が口を出
す。「とにかく人間に個性の自由を許せば許すほど
御互の間が窮屈かつになるに相違ないよ。ニーチェが超
人なんか担かつぎ出すのも全くこの窮屈のやりどころが

なくなつて仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。ちよつと見るとあれがあゝの男の理想のように見えるが、ありや理想じゃない、不平さ。個性の発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅^め多^{った}に寝返りも打てないから、大将少しやけになつてあんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮快と云うよりむしろ氣の毒になる。あゝの声は勇猛精^{ゆうもうしよ}

進うじんの声じゃない、どうしても怨恨痛憤えんこんつうぶんの音おんだ。それ

もそのはずさ昔は一人えらい人があれば天下翕然きゆうぜんと

してその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。

こんな愉快が事実に出てくれば何もニーチェ見たように筆と紙の力でこれを書物の上にあらわす必要がない。だからホーマーでもチェヴィ・チエーズでも

同じく超人的な性格を写しても感じがまるで違うか

らね。陽気ださ。愉快にかいてある。愉快な事実が
あつて、この愉快な事実を紙に写しかえたのだから
、苦味にがみはないはずだ。ニーチエの時代はそうは行か
ないよ。英雄なんか一人も出やしない。出たつて誰
も英雄と立てやしない。昔は孔子こうしがたった一人だつ
たから、孔子も幅を利きかしたのだが、今は孔子が幾
人もいる。ことによると天下がことごとく孔子かも

知れない。だからおれは孔子だよと威張つても圧が
利かない。利かないから不平だ。不平だから超人な
どを書物の上だけで振り廻すのさ。吾人は自由を欲
して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困
っている。それだから西洋の文明などはちよつとい
いようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋
じや昔しから心の修行をした。その方が正しいのさ

。見給え個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、

始末がつかなくなつた時、王者の民おうしや たみとうとう蕩々たりと云う

句の価値を始めて発見するから。無為むいにして化かすと

云う語の馬鹿に出来ない事を悟るから。しかし悟つ

たつてその時はもうしようがない。アルコール中毒

にかか罹かつて、ああ酒を飲まなければよかつたと考える

ようなものさ」

「先生方は大分厭世的な御説のようだが、私は妙です
ね。いろいろ伺っても何とも感じません。どう云
うものでしょう」と寒月君が云う。

「そりや妻君を持ち立てだからさ」と迷亭君がすぐ
解釈した。すると主人が突然こんな事を云い出した
。

「妻さいを持って、女はいいものだなどと思うと飛んだ

間違になる。参考のためだから、おれが面白い物を
読んで聞かせる。よく聴くがいい」と最前書齋から
さいぜん
持つて来た古い本を取り上げて「この本は古い本だ
が、この時代から女のわるい事は歴然と分ってる」
と云うと、寒月君が

「少し驚きましたな。元来いつ頃の本ですか」と聞
く。「タマス・ナツシと云つて十六世紀の著書だ」

「いよいよ驚ろいた。その時分すでに私の妻の悪口さいを云ったものがあるんですか」

「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君の妻も這入る訳だから聞くがいい」

「ええ聞きますよ。ありがたい事になりましたね」

「まず古来の賢哲が女性観を紹介すべしと書いてある。いいかね。聞いてるかね」

「みんな聞いてるよ。独身の僕まで聞いてるよ」

「アリストートルいわ曰く女はどうせ碌ろくでなしなれば、

嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。

大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災わざわい少な

し……」

「寒月君の妻君は大きいかい、小さいかい」

「大きな碌でなしの部ですよ」

「ハハハハ、こりや面白い本だ。さああとを読んだ

」

「或る人間う、いかなるかこれ最大奇蹟。さいだいきせき賢者答え

て曰く、貞婦……」

「賢者ってだれですか」

「名前は書いてない」

「どうせ振られた賢者に相違ないね」

「次にはダイオジニスが出ている。或る人問う、妻を娶るめといずれの時においてすべきか。ダイオジニス答えて曰く青年は未だいまし、老年はすでに遅し。とある」

「先生樽たるの中で考えたね」

「ピサゴラス曰くいわ天下に三の恐るべきものあり曰く火、曰く水、曰く女」

ギリシャ

うかつ

「希臘の哲學者などは存外迂濶な事を云うものだね。僕に云わせると天下に恐るべきものなし。火に入いって焼けず、水に入いって溺れず……」だけで独仙君ちよつと行き詰る。

「女に逢つてとろけずだろう」と迷亭先生が援兵に出る。主人はさつさとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を御するは人間の最大難事と

云えり。デモスセニス曰く人もしその敵を苦しめんとせば、わが女を敵に与うるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日となく夜となく彼を困憊こんばい起つあたわざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦女と無学をもつて世界における二大厄とし、マーカス・オーレリアスは女子は制御し難き点において船舶に似たりと云い、プロータスは女子が綺羅きらを飾る

の性癖をもつてその天稟てんぴんの醜おこを蔽おほうの陋策ろうさくにもとづ

くものとせり。ヴァレリアスかつて書をその友某に

おくつて告げて曰く天下に何事も女子の忍んでなし

得ざるものあらず。願わくは皇天憐あわれみを垂れて、君を

して彼等の術中に陥おちいらしむるなかれと。彼また曰く

女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや。避くべからざ

る苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の

誘惑にあらずや、蜜みつに似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざるは一層の呵責かしくやくと云わざるべからず。……」

「もう沢山です、先生。そのくらい愚妻のわる口を拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらどうだ」

「もうたいていにするがいい。もう奥方の御帰りの
刻限だろう」と迷亭先生がからかい掛けると、茶の
間の方で

「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。

「こいつは大変だ。奥方はちゃんというぜ、君」

「ウフフフ」と主人は笑いながら「構うものか」

と云った。

「奥さん、奥さん。いつの間に御^ま歸りですか」

茶の間ではしんとして答がない。

「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」

答はまだない。

「今のはね、御主人の御考ではないですよ。十六世紀のナツシ君の説ですから御安心なさい」

「存じません」と妻君は遠くで簡単な返事をした。

寒月君はくすくすと笑った。

「私も存じませんで失礼しましたアハハハハ」と迷
亭君は遠慮なく笑つてると、かどぐち門口をあらあらしくあ

けて、頼むとも、御免とも云わず、大きな足音がし
たと思つたら、座敷の唐紙が乱暴にあいて、たたらさ多々良

んぺい三平君の顔がその間からあらわれた。

三平君今日はいつに似ず、真白なシャツにおろした卸立て

のフロックを着て、すでに幾分か相場そうばを狂わせてる

上へ、右の手へ重そうに下げた四本の麦酒ビールを縄ぐる

み、鰹節かつぶしの傍そばへ置くと同時に挨拶もせず、どつかと

腰を下ろして、かつ膝を崩したのは目覚めざましい武者振むしやぶり

である。

「先生胃病は近来いいですか。こうやって、うちにばかりいなさるから、いかんたい」

「まだ悪いとも何ともいやしない」

「いわんばってんが、顔色はよかなかごたる。先生

顔色が黄きいですばい。近頃は釣がいいです。品川から

舟を一艘雇うて——私はこの前の日曜に行きました

」

「何か釣れたかい」

「何も釣れません」

「釣れなくつても面白いのかい」

こうぜん

「浩然の気を養うたい、あなた。どうですあなたが
た。釣に行つた事がありますか。面白いですよ釣は
。大きな海の上を小舟で乗り廻わしてあるくのです
からね」と誰彼の容赦なく話しかける。

「僕は小さな海の上を大船で乗り廻してあるきたい
んだ」と迷亭君が相手になる。

「どうせ釣るなら、鯨くじらか人魚でも釣らなくっちゃ、詰らないです」と寒月君が答えた。

「そんなものが釣れますか。文学者は常識がないです
すね。……」

「僕は文学者じゃありません」

「そうですか、何ですかあなたは。私のようなビジネス・マンになると常識が一番大切ですからね。先

生私は近来よっぽど常識に富んで来ました。どうしてもあんな所にいと、傍はたが傍だから、おのずから、そうなってしまうです」

「どうなってしまうのだ」

「煙草たばこでもですね、朝日や、敷島しきしまをふかしては

幅きが利きかんです」と云いながら、吸口に金箔きんぱくのつい

た埃エジプト及煙草を出して、すぱすぱ吸い出した、

「そんな贅沢ぜいたくをする金があるのかい」

「金はなかばってんが、今にどうかなるたい。この煙草を吸つてると、大變信用が違ひます」

「寒月君が珠を磨くよりも樂な信用でいい、手数てすうがかからない。輕便信用だね」と迷亭が寒月にいうと

、寒月が何とも答えない間に、三平君は

「あなたが寒月さんですか。博士にや、とうとうな

らんですか。あなたが博士にならんものだから、私が貰う事にしました」

「博士をですか」

「いいえ、金田家の令嬢をです。実は御気の毒と思うたですたい。しかし先方で是非貰うてくれ貰うてくれと云うから、とうとう貰う事に極きめました、先生。しかし寒月さんに義理がわるいと思つて心配し

ています」

「どうか御遠慮なく」と寒月君が云うと、主人は
「貰いたければ貰ったら、いいだろう」と曖昧あいまいな返
事をする。

「そいつはおめでたい話だ。だからどんな娘を持っ
ても心配するがものはないんだよ。だれか貰うと、
さつき僕が云った通り、ちゃんとこんな立派な紳士

の御^{むこ}賀さんが出来たじゃないか。東風君新体詩の種が出来た。早速とりかかりたまえ」と迷亭君が例のごとく調子づくると三平君は

「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作ってくれませんか。すぐ活版にして方々へくばります。太陽へも出してもらいます」

「ええ何か作りましょう、いつ頃^{ごろ}御^に入^{ゆう}用^{よう}ですか」

「いつでもいいです。今まで作ったうちでもいいで

す。その代りです。披露ひろうのとき呼んで御馳走ごちそうするで

す。シャンパンを飲ませるです。君シャンパンを飲

んだ事がありますか。シャンパンは旨うまいです。――

先生披露会ひろうかいのときに楽隊を呼ぶつもりですが、東風

君の作を譜にして奏したらどうでしょう」

「勝手にするがいい」

「先生、譜にして下さらんか」

「馬鹿云え」

「だれか、このうちに音楽の出来るものはおらんで
すか」

「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だよ。

しつかり頼んで見たまえ。しかしシャンパンくらい
じゃ承知しそうもない男だ」

「シャンパンもですね。一瓶ひとびん四円や五円のじやよく

ないです。私の御馳走するのはそんな安いのじやないですが、君一つ譜を作ってくれませんか」

「ええ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンでも作ります。なんならただでも作ります」

「ただは頼みません、御礼はするです。シャンパンがいやなら、こう云う御礼はどうです」と云いなが

ら上着の隠袋かくしのなかから七八枚の写真を出してばらばらと畳の上へ落す。半身がある。全身がある。立ってるのがある。坐ってるのがある。袴はかまを穿はいてるのがある。振袖ふりそでがある。高島田がある。ことごとく妙齡の女子ばかりである。

「先生候補者がこれだけあるです。寒月君と東風君にこのうちどれか御礼に周旋してもいいです。こり

やどうぞです」と一枚寒月君につき付ける。

「いいですね。是非周旋を願ひましょう」

「これでもいいですか」とまた一枚つきつける。

「それもいいですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいいです」

「君なかなか多情ですね。先生、これは博士の姪めいで

す」

「そうか」

「この方は性質が極ごくいいです。年も若いです。これで十七です。——これなら持参金が千円あります。

——こっちは知事の娘です」と一人で弁じ立てる

。

「それをみんな貰う訳にやいかないでしょうか」

「みんなですか、それはあまり慾張りたい。君一夫いっぶ

たさいしゅぎ

多妻主義ですか」

「多妻主義じゃないですが、肉食論者にくしよくろんしやです」

「何でもいいから、そんなものは早くしまったら、
よかろう」と主人は叱りつけるように言い放ったの
で、三平君は

「それじゃ、どれも貰わんですね」と念を押しながら

ら、写真を一枚一枚にポケットへ収めた。

「何だいそのビールは」

「お見やげでござります。前祝まえいわいに角かどの酒屋で買うて

来ました。一つ飲んで下さい」

主人は手を拍うって下女を呼んで栓せんを抜かせる。主

人、迷亭、独仙、寒月、東風の五君は恭うやうやしくコップ

を捧えんぷくげて、三平君の艶福えんぷくを祝した。三平君は大おおに愉

快な様子で

「ここにいる諸君を披露会に招待しますが、みんな出てくれますか、出てくれるでしょうね」と云う。

「おれはいやだ」と主人はすぐ答える。

「なぜですか。私の一生に一度の大礼たいれいですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」

「不人情じゃないが、おれは出ないよ」

「着物がないですか。羽織と袴はかまくらいどうでもしま

すたい。ちと人中ひとなかへも出るがよかたい先生。有名な

人に紹介して上げます」

「真平まっぴらご免めんだ」

「胃病なごが癒なおりますばい」

「癒さらんでも差支さしつかえない」

「そげん頑固がんこ張りなさるならやむを得ません。あな

たはどうです来てくれますか」

「僕かね、是非行くよ。出来るならばいしやくにん媒酌人たるの栄

を得たいくらいのものだ。シャンパンの三々九度や

春の宵。——なに仲人なこうどは鈴木とうの藤さんだって？ な

るほどそこいらだろうと思つた。これは残念だが仕

方がない。仲人が二人出来ても多過ぎるだろう、た

だの人間としてまさに出席するよ」

「あなたはどうぞです」

「僕ですか、いっかんのふうげつかんせいけい一竿風月閑生計、ひとはつはすひんこうりようのかん人釣白蘋紅蓼間」

「何ですかそれは、唐詩選ですか」

「何だかわからんです」

「わからんですか、困りますな。寒月君は出てくれるでしょうね。今までの関係もあるから」

「きつと出る事にします、僕の作った曲を楽隊が奏

するのを、きき落すのは残念ですからね」

「そうですとも。君はどうです東風君」

「そうですね。出て御両人ごりょうにんの前で新体詩を朗読したいです」

「そりや愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビールを飲みます」と自分で買って来たビールを一人でぐいぐい飲ん

で真赤まっかになつた。

短かい秋の日はようやく暮れて、巻煙草の死骸しがいが

算を乱す火鉢のなかを見れば火はとくの昔に消えて

いる。さすが呑氣のんきの連中も少しく興が尽きたと見え

て、「大分遅だいぶんくなつた。もう帰ろうか」とまず独仙

君が立ち上がる。つづいて「僕も帰る」と口々に玄

関に出る。寄席よせがはねたあとのように座敷は淋しく

なつた。

主人は夕飯ゆうはんをすまして書斎に入る。妻君は肌寒はださむの

襦袢じゆばんの襟えりをかき合せて、洗あらい晒ざらしの不断着を縫う。

小供は枕を並べて寝る。下女は湯に行つた。

呑氣のんきと見える人々も、心の底を叩いて見ると、ど

こか悲しい音がする。悟つたようでも独仙君の足は

やはり地面のほかは踏まぬ。気楽かも知れないが迷

亭君の世の中は絵にかいた世の中ではない。寒月君

たます

は珠磨りをやめてとうとうお国から奥さんを連れて

来た。これが順当だ。しかし順当が永く続くと定め

し退屈だろう。東風君も今年したら、無暗に新体

詩を捧げる事の非を悟るだろう。三平君に至っては

水に住む人か、山に住む人かちと鑑定がむずかしい

しょうがいシャンパン

。生涯三鞭酒を御馳走して得意と思う事が出来れば

結構だ。鈴木の藤さん^{とう}はどこまでも転^{ころ}がって行く。

転がれば泥がつく。泥がついても転がれぬものより

も幅^きが利く。猫と生れて人の世に住む事もはや二年

越しになる。自分ではこれほどの見識家はまたとあ

るまいと思うていたが、先達^{せんだつ}てカーテル・ムルと云

う見ず知らずの同族が突然^{だいきえん}大気燄^あを揚げたので、ち

よっと吃驚^{びっくり}した。よくよく聞いて見たら、実は百年

前に死んだのだが、ふとした好奇心からわざと幽霊

になつて吾輩を驚かせるために、遠い冥土めいどから出張

したのだそうだ。この猫は母と対面をするとき、挨

拶のしるしとして、一匹の肴さかなを啣くわえて出掛けたとこ

ろ、途中でとうとう我慢がし切れなくなつて、自分

で食つてしまつたと云うほどの不孝ものだけあつて

、才気もなかなか人間に負けぬほどで、ある時など

は詩を作つて主人を驚かした事もあるそうだ。こんな豪傑がすでに一世紀も前に出現しているなら、吾輩のような碌ろくでなしはとうに御暇おいとまを頂戴して無何有むかうのき郷ように歸臥きがしてもいいはずであつた。

主人は早晚胃病で死ぬ。金田のじいさんは慾でもう死んでいる。秋の木の葉こは大概落ち尽した。死ぬのが万物の定業じやうごふで、生きていてもあんまり役に立た

ないなら、早く死ぬだけが賢いかも知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやろう。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる

間から吹き込んだと見えてランプはいつの間にか消

えているが、月夜と思われて窓から影がさす。コッ

プが盆の上に三つ並んで、その二つに茶色の水が半

分ほどたまっている。硝子ガラスの中のもは湯でも冷た

い気がする。まして夜寒の月影に照らされて、静か

に火消壺ひけしつぼとならんでいるこの液体の事だから、唇を

つけぬ先からすでに寒くて飲みたくもない。しかし

ものは試した。三平などはあれを飲んでから、真赤まっか

になつて、あつくる熱苦しい息遣いいきづかをした。猫だつて飲めば

陽気にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。何でも命のあるうちにしておく事だ。死ん

でからああ残念だと墓場の影から悔くやんでもおつつかない。思い切つて飲んで見ろと、勢よく舌を入れ

てぴちやぴちややつて見ると驚いた。何だか舌の先

を針でさされたようにぴりりとした。人間は何の酔すい

きよう

興でこんな腐ったものを飲むのかわからないが、猫

にはとても飲み切れない。どうしても猫とビールは

しょう

性が合わない。これは大変だと一度は出した舌を引ひ

っこ

込めて見たが、また考え直した。人間は口癖のよう

にが

に良薬口に苦しと言って風邪かぜなどをひくと、顔をし

かめて変なものを飲む。飲むから癒なおるのか、癒るの

に飲むのか、今まで疑問であつたがちようどいい幸さいわい

だ。この問題をビールで解決してやろう。飲んで腹の中までにがくなつたらそれまでの事、もし三平のように前後を忘れるほど愉快になれば空前の儲け者もうもので、近所の猫へ教えてやってもいい。まあどうなるか、運を天に任せて、やつつけると決心して再び舌を出した。眼をあいていると飲みにくいから、しつ

かり眠って、またぴちやぴちや始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起った。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従ってようやく楽らくになつて、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなつた。もう大丈夫と二杯目は難なくやつつけた。ついで

に盆の上にこぼれたのも拭^{ぬぐ}うがごとく腹内^{ふくない}に収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺う

ため、じつとすくんでいた。次第にからだが暖かになる。眼のふちがぼうつとする。耳がほてる。歌が

うたいたくなる。猫じや猫じやが踊りたくなる。主

人も迷亭も独仙も糞を食^{くら}えと云う気になる。金田の

じいさんを引搔ひっかいてやりたくなる。妻君の鼻を食い

欠きたくなる。いろいろになる。最後にふらふらと

立ちたくなる。起たつたらよたよたあるきたくなる。

こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月様
今晚はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだろうと思ひながら、

あてもなく、そこかしこと散歩するような、しない

ような心持でしまりのない足をいい加減に運ばせて
ゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだか、あ
るいてるのだか判然しない。眼はあけるつもりだが
重い事夥おびただしい。こうなればそれまでだ。海だろうが
、山だろうが驚ろかないんだと、前足をぐにやりと
前へ出したと思う途端ぼちやんと音がして、はっと
云ううち、――やられた。どうやられたのか考える

間がない。^まただやられたなと気がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になってしまった。

我に帰ったときは水の上に浮いている。苦しいか

ら爪でもって矢鱈^{やたら}に搔^かいたが、搔けるものは水ばかりで、

搔くとすぐもぐってしまふ。仕方がないから

^{あとあし}

後足で飛び上っておいて、前足で搔いたら、がりり

と音がしてわずかに手応^{てごたえ}があつた。ようやく頭だけ

浮くからどこだろうと見廻わすと、吾輩は大きな甕かめ

の中に落ちてゐる。この甕かめは夏まで水葵みずあおいと称する水みず

草くさが茂さかっていたがその後烏の勘公が来て葵を食い尽

した上に行水ぎょうずいを使う。行水を使えば水が減る。減れ

ば来なくなる。近来は大分減だいぶんつて烏が見えないなと

先刻さつき思ったが、吾輩自身みづかみが烏の代りにこんな所で行

水を使おうなどとは思ひも寄らなかつた。

水から縁ふちまでは四寸余よもある。足をのばしても届

かない。飛び上つても出られない。呑のん氣きにしていれ

ば沈むばかりだ。もがけばがりがりと甕に爪があた

るのみで、あたった時は、少し浮く氣味だが、すべ

ればたちまちぐつともぐる。もぐれば苦しいから、

すぐがりがりをやる。そのうちからだが疲れてくる

。氣は焦あせるが、足はさほど利きかなくなる。ついには

もぐるために甕を搔くのか、搔くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

その時苦しいながら、こう考えた。こんな呵責にかしやく

逢うのはつまり甕から上へあがりた**い**ばかりの願である。あがりた**い**のは山々であるが上がれないのは知れ切っている。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水

の面おもてにからだ**が**浮いて、浮いた所から思う存分前足

をのばしたって五寸にあまる甕の縁に爪のかかりよ
うがない。甕のふちに爪のかかりようがなければい
くらかも搔かいても、あせつても、百年の間身を粉こにし
ても出られっこない。出られないと分り切っている
ものを出ようとするのは無理だ。無理を通そうとす
るから苦しいのだ。つまらない。自みづから求めて苦しん
で、自ごうもんら好んで拷問かかに罹かかっているのは馬鹿氣かている

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎりご免蒙るよめんこうむ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になってくる。苦しいのだかありがたいのだか見当がつかない。水の中にいるのだか、座敷の上にいるのだか、判然しない。どこにどうしてい

ても差支えさしつかはない。ただ樂である。否いな樂そのものす

らも感じ得ない。日月じつげつを切り落し、天地を粉壺ふんせいして

不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んでこの太

平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥なむあみ

陀仏だぶつ南無阿弥陀仏。ありがたいありがたい。

底本：「夏目漱石全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年9月29日第1刷発

行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩

書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭

和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二、五）、

田尻幹二（三）、高橋真也（四、七、八、十、十一

）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）

1999年9月17日公開

2013年10月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。